

# 白井遺跡群 —集落編Ⅱ— (白井南中道遺跡)

一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

## 本文編

1996

建 設 省  
群 馬 県 教 育 委 員 会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



# 白井遺跡群 —集落編 II— (白井南中道遺跡)

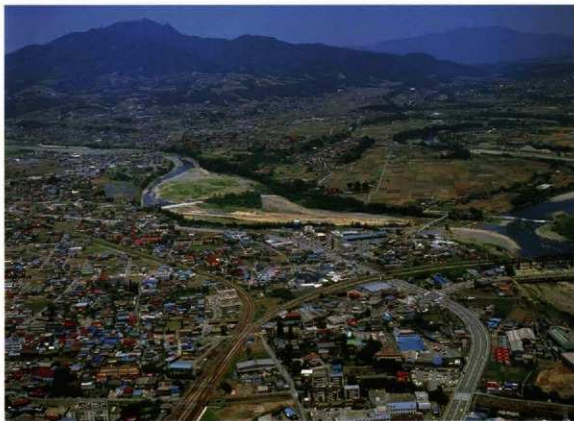
一般国道17号（鯉沢バイパス）改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書第3集

## 本文編

1996

建設省  
群馬県教育委員会  
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団





遺跡遠景（南から）



白井城、白井宿と調査前の遺跡地



34号住居（鉄生産に関連する遺構）



33号住居出土の銅製の鈴

## 序

鯉沢バイパスは、渋川市内と子持村内の交通混雑の改善を図るために計画された5.5kmのバイパスです。

昭和62年度に起点の渋川バイパスから一般国道353号バイパスとの交差までの区間2.3kmが事業化し、用地取得が進んだ子持村白井地区から平成2年度より埋蔵文化財の発掘調査を始めました。

ご承知のように、子持村白井地区は西暦6世紀に大爆発した軽石に埋もれた遺跡として、全国的に著名となった史跡黒井峯遺跡に近接しています。白井地区も黒井峯遺跡同様に軽石層があることから貴重な遺構・遺物等が発見されることが予測されましたが、予測どおり白井北中道遺跡をはじめとする各遺跡からは、西暦6世紀の我が国初めての馬の放牧場と畠跡が発見・調査され、我が国の農業史を解明する上で貴重な遺跡として、県内外から注目されています。

今回調査した遺跡の白井二位屋・白井南中道の2遺跡の報告書については平成4年度に中世関係の遺構・遺物の調査報告書を刊行し、続いて平成5年度には集落編Ⅰの調査報告書を刊行しています。

今回白井遺跡群の第3集として、集落編Ⅱの調査報告がまとまりましたので、ここに報告書を刊行することにしました。本報告書には、奈良・平安時代の竪穴住居跡62軒、刀子・鋤先・紡錘車等の多数の鉄製品の遺構・遺物が報告されています。

発掘調査から報告書作成に至るまで、建設省関東地方建設局、同高崎工事事務所、群馬県教育委員会、子持村教育委員会、地元関係者の方々から種々ご指導、ご協力を賜りました。今回、報告書を上梓するに際し、これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明する上で、広く活用されることを願い序とします。

平成8年3月

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 小寺弘之





## 例 言

1. 本書は一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に先行して行われた白井南中道遺跡発掘調査の報告である。この遺跡は事業名称を「下宿遺跡」と呼称していたが、その後遺跡命名法として遺跡所在地の大字・小字名を採用することになった。本遺跡は小字の二位屋、南中道、玉櫛にまたがっており、そのうち遺跡の最も多い部分を占める南中道をとって、「白井南中道遺跡」という名称とした。また、白井地区の鯉沢バイパス関係の各遺跡は、一連の遺跡という認識に立ち、全ての遺跡をとりまとめて「白井遺跡群」の名称を使用することとする。
2. 白井南中道遺跡は、群馬県北群馬郡子持村大字白井に所在する。2区までの主な地番は次の通りである。  
字二位屋 2149-1、2150、2151-1、2153、2167、2168-1、2169-1、2170、2171  
字南中道 2225-1、2226-1、2227、2228、2238、2239、2240-1、2241-1
3. 鯉沢バイパス改築工事は建設者関東地方建設局が事業主体であり、これに伴う発掘調査及び整理作業を(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 調査、整理体制及び期間は次の通りである。

### 〈発掘調査〉

平成2年4月1日～平成3年3月31日

調査担当 石北直樹、麻生敏隆、南雲芳昭

事務局 邊見良雄、松本浩一、田口紀雄、神保佑史、能登 健、岩丸大作、国定 均  
小林昌嗣、須田朋子、吉田有光、柳阿良宏  
野島のふ江、並木綾子、今井もと子、松井美智代、角田みづほ

### 〈整理作業〉

平成5年10月1日～平成6年3月31日

整理担当 南雲芳昭

整理補助 岩淵節子、大友美代子、岸トキ子、木原幸子、田中富子  
藤井輝子、吉田文子、佐藤久美子

機械実測 伊藤淳子、尾田正子、佐子昭子、筑井弘子、千代谷和子、戸神晴美

事務局 中村英一、近藤 功、佐藤 勉、神保佑史、能登 健、斎藤俊一、国定 均、笠原秀樹  
須田朋子、柳阿良宏、船津 茂、高橋定義、松下 登  
並木綾子、今井もと子、吉田恵子、塩浦ひろみ、松井美智代、角田みづほ

平成6年4月1日～平成6年9月30日

整理担当 南雲芳昭

整理補助 大友美代子、岸トキ子、木原幸子、藤井輝子、吉田文字  
佐藤久美子、田中佐恵子

機械実測 伊藤淳子、岩淵節子、立川千栄子、千代谷和子、長沼久美子、萩原光枝

事務局 中村英一、近藤 功、蜂巣 実、神保南史、能登 健、斉藤俊一、国定 均、笠原秀樹  
須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、高橋定義、大沢友治  
並木綾子、今井もと子、吉田恵子、塩浦ひろみ、松井美智代  
内山佳子、星野美智子、羽鳥京子

- 発掘作業に当たっては、地元の方々を初めとして、遠方からも多数の作業員の方にお世話になった。夏の炎天下、冬の寒さにも負けず毎日作業を続けていただいた作業員の方々にここで感謝の意を述べたい。
- 遺構写真撮影は各調査担当者、遺物写真撮影は当事業団技師佐藤元彦が行った。口絵カラー写真の33号住居出土鈴のみ奈良国立文化財研究所牛嶋 茂氏の撮影によるものである。
- 出土遺物の保存処理は、当事業団技師関 邦一と、小村浩一、土橋まり子、小沼恵子、樋口一之が行った。
- 出土遺物の分析については、以下の方々、団体に依頼した。

石材同定	飯島静男氏
獣骨鑑定	宮崎重雄氏
炭化種子鑑定	北海道大学 吉崎昌一氏
炭化材・電灰分析	株式会社 バレオ・ラボ
胎土・電灰分析	群馬県工業試験場 小沢達樹氏
鉄器・鉄滓分析	岩手県立博物館 赤沼英男氏

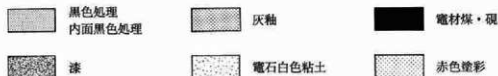
高、化学分析については、特別の場合を除き、依頼した報告者の原文をそのまま掲載している。分析データと写真資料は(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団で保管している。
- この報告書を作成するに関しては数多くの方々にご指導、助言を受けている。また、発掘調査に際しては、子持村教育委員会及び地元関係者の多大なるご支援をいただいた。改めて感謝の意を表したい。
- 遺構の名称は、原則として発掘調査時のものを踏襲している。
- 報告書の編集は、南雲芳昭が担当した。執筆は南雲芳昭が主体となり、各項目の執筆者については、目次に記した。
- 土器の観察表は、当事業団専門員神谷佳明の手をわずらわせた。
- 本遺跡の記録保存資料、出土遺物は、現在群馬県埋蔵文化調査センター及び(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団に保管されている。白井南中道遺跡の略号であるR17K-3が記入してある。

## 凡 例

1. 本書は白井南中道遺跡の奈良・平安時代の集落を中心とした報告書である。
2. 本遺跡におけるグリッドは国家座標をもとに設定している。
3. 挿図中の方位記号は全て国家座標上の北を基準としている。
4. 本書では、テフラの呼称として、浅間A軽石→As-A、浅間B軽石→As-B、浅間C軽石→As-C、榛名山二ツ岳噴出火山灰→Hr-FA(Hr-S)・Hr-FP(Hr-I)を用いる。
5. 遺構図の縮尺は次の通りである。しかし、一部縮尺の異なるものがあるので各挿図中のスケールを参照されたい。  
住居 1/60 電 1/30 掘立柱建物 1/60 土坑 1/40 ピット 1/40
6. 遺構図中のスクリーントーンは下記の通りである。



7. 遺物図は基本的に1：3の縮尺で掲載したが、鉄製品については1：2、銭については1：1とした。その他小型製品は1：1あるいは1：2の縮尺を採用した。各挿図中のスケールを参照されたい。
8. 遺物図中のスクリーントーンは下記の通りである。

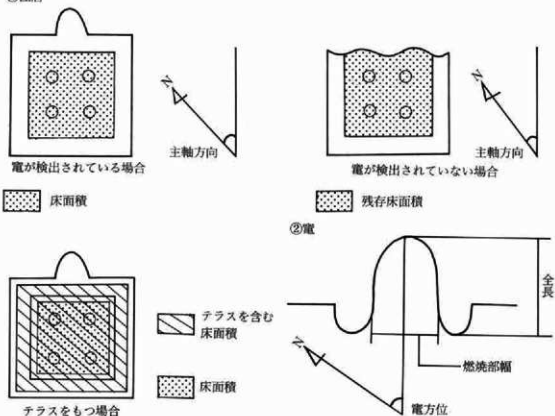


9. 遺物写真のスケールは遺物実測図のスケールと基本的に一致している。
10. 本書で使用した地形図は下記の通りである。  
国土地理院 1：25,000 「鯉沢」「淡川」  
1：200,000 「長野」「宇都宮」  
子持村都市計画図 1：2,500 「No.23」「No.25」
11. 住居の規模は基本的に住居の上端の4辺を計測した。軽石層の崩壊で上場が歪んでいる場合には、旧状を保っている部分あるいは旧状に近いと思われる部分を選んでいる。中段テラスを有する場合はさらに床へ掘り込まれる壁の上端(中段テラス内側ライン)を4辺計測した。
12. 住居、竈及び掘立柱建物の主軸方位については、以下の基準で計測し、表記した。
  - ①住居の主軸方位については竈が付設されている辺に直行する辺の角度を、北を基準に東回りに計測し、N-角度-Eと表記した。ただしその際に180°を超える場合には西回りに計測しN-角度-Wと表記した。
  - ②竈の主軸方位については、竈の中心軸を北を基準にして東回りに計測し、N-角度-Eと表記した。西方向に竈がある場合には、特に北を基準に西回りに計測し、N-角度-Wと表記した。
  - ③掘立柱建物は、両端の短辺(梁行)を二等分する点を結んだ線を主軸とし、北を基準にして東回りに

計測し、N-角度-Eと表記した。

13. 住居の面積については、1/30縮尺遺構図の壁際の下場をデジタルプランメーターで3回計測し、平均値を求め、その値を採用した。住居全体を調査できなかった場合には残存面積を測定し、全体が復元可能な住居については復元された住居の面積を算出した。中段テラスを有する場合は中段テラスへ掘り込まれた壁の下場(中段テラス外側ライン)と床へ掘り込まれる壁の下場(従来の床面積)を測定した。
14. ビット番号は柱穴と思われるものが4箇所検出された場合、東壁に向かって左側から1号とし、時計回りに2号、3号と呼ぶことにする。調査範囲の関係で東壁が検出されず、柱穴(ビット)の検出が4箇所未満の場合も東壁があるものとして時計回りに番号を付ける。その後その他のビットに時計回りで番号を付けていく。
15. 遺物観察表(土器)の量目は①口径、②底径、③器高、④高台径の単位は全てcmである。
16. 遺物観察表(土器)の色調は、農林省農林水産技術会議監修、財団法人 日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帳」に拠った。
17. 遺物観察表(鉄器、石器、骨角器)の最大長、最大幅、厚みの単位は全てcmである。また重量の単位は全てgである。
18. 遺物観察表の「出土位置」の数値は原則的に遺物の床からの垂直距離である。
19. 遺物観察表(骨)の"\*"は多数骨片のうち、最大片の計測値である。「図版番号」中の( )は遺物番号である。「特徴」の「分析Na」は電灰分析の試料Naと一致し、( )内の番号は遺物番号である。

### ①住居



## 報告書抄録

フリガナ	シロイセキグン シュウラクヘンII(シロイミナミナカミチイセキ)
書名	白井遺跡群—集落編II—(白井南中道遺跡)
副書名	一般国道17号(鯉沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第3集
シリーズ名	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告
シリーズ番号	第202集
編著者名	南雲芳昭
編集機関	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
編集機関所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村下箱田784-2
発行年	1996年3月25日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯 '''	東経 '''	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
白井南中道	北群馬郡子持村 大字白井	10341		36°30'10"	139°1'4"	19900401～ 19910331 19910401～ 19920331 19920401～ 19921031 19930401～ 19930531	13,000㎡  6,312㎡  2,012㎡  501㎡	道路建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
白井南中道	住居	奈良・平安	竪穴住居	62軒	土師器、須恵器	7～10世紀代の集落遺跡 畿内産土師器片出土 鉄製品多数出土(刀装具、銅製鈴を含む)
			掘立柱建物	13基	灰釉椀、皿	
			土坑	15基	石製品(砥石、紡錘車 その他)	
			ピット	1,147基	鉄製品(刀子、紡錘 車、篋、鋤その他) 銅製鈴	



# 目次

## 序

例言
凡例
目次
挿図目次

## 第1章 調査の経過と方法

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	2
第3節 調査の方法	3
第4節 調査区の設定	5
第5節 基本層序	7

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

第1節 遺跡周辺の地形	9
第2節 周辺の遺跡	12

## 第3章 検出された遺構と遺物

第1節 竪穴住居	19
第2節 掘立柱建物	341
第3節 土坑	364
第4節 ビット	374
第5節 遺構外出土遺物	384

## 第4章 調査のまとめと理科学分析

第1節 白井南中道遺跡出土炭化材の樹種同定 株式会社パレオ・ラボ 藤根 久	392
--	-----

第2節 白井南中道遺跡の獣骨 大間々高校教諭 宮崎重雄	411
第3節 白井南中道遺跡から検出された 炭化植物種子 吉崎昌一	418
第4節 胎土分析 小沢達樹・南雲芳昭	420
第5節 遺物の自然科学的調査結果からみた白 井南中道遺跡における鉄器の製作と流 通 赤沼英男	427
第6節 住居遺跡から検出される灰質の成分分 析 小沢達樹・藤根 久	459
第7節 成果と課題	464
○本文・挿図・表・観察表・写真図版対照 表	470

別冊 観察表編 写真図版編
------------------

## 附図

1. 白井南中道遺跡1・2図全体図 (白井遺跡群—集落編Ⅱ—)
2. 白井南中道遺跡1図全体図 (白井遺跡群—集落編Ⅱ—)
3. 白井南中道遺跡2図全体図 (白井遺跡群—集落編Ⅱ—)

# 挿図目次

第1図 国道17号熊沢バイパス路線図	1
第2図 白井南中道遺跡調査範囲	4
第3図 調査区設定図	6
第4図 白井南中道遺跡土層柱状図	8

第5図 遺跡位置図	10
第6図 遺跡周辺における段丘面の分布	11
第7図 周辺遺跡図	13
第8図 白井南中道遺跡遺構位置図	18

第9図	1区、2区遺構位置図	19	第71図	13号住居出土遺物(2)	83
第10図	1号住居及び出土遺物	20	第72図	14号住居	85
第11図	1号住居電	21	第73図	14号住居掘り方	86
第12図	2号住居	22	第74図	14号住居1号電	87
第13図	2号住居電及び出土遺物	23	第75図	14号住居2号電	88
第14図	61号住居	25	第76図	14号住居出土遺物(1)	89
第15図	61号住居電及び2・61号住居掘り方	26	第77図	14号住居出土遺物(2)	90
第16図	61号住居出土遺物	27	第78図	15号住居	92
第17図	3号住居	28	第79図	15号住居掘り方及び出土遺物(1)	93
第18図	3号住居出土遺物	29	第80図	15号住居出土遺物(2)	94
第19図	4・5・40号住居	30	第81図	16・17号住居	96
第20図	4・5・40号住居掘り方	31	第82図	16号住居出土遺物	97
第21図	4号住居	32	第83図	18・32号住居	98
第22図	4号住居電及び出土遺物(1)	33	第84図	18号住居及び出土遺物	99
第23図	4号住居出土遺物(2)	34	第85図	32号住居	100
第24図	4号住居出土遺物(3)	35	第86図	32号住居電	101
第25図	4号住居出土遺物(4)	36	第87図	32号住居出土遺物	102
第26図	4号住居出土遺物(5)	37	第88図	19号住居	103
第27図	4号住居遺物出土位置	38	第89図	19号住居掘り方及び出土遺物(1)	104
第28図	40号住居及び出土遺物	39	第90図	19号住居出土遺物(2)	105
第29図	5号住居	40	第91図	50号土坑掘り方	106
第30図	5号住居電及び出土遺物(1)	41	第92図	20号住居	108
第31図	5号住居出土遺物(2)	42	第93図	20号住居電	109
第32図	5号住居出土遺物(3)	43	第94図	20号住居掘り方及び出土遺物(1)	110
第33図	5号住居遺物出土位置	44	第95図	20号住居出土遺物(2)	111
第34図	6号住居	46	第96図	21号住居	112
第35図	6号住居電	47	第97図	21号住居電	113
第36図	6号住居出土遺物	48	第98図	21号住居出土遺物(1)	114
第37図	7号住居	49	第99図	21号住居出土遺物(2)	115
第38図	7号住居電及び掘り方	50	第100図	21号住居出土遺物(3)	116
第39図	7号住居出土遺物(1)	51	第101図	21号住居出土遺物(4)	117
第40図	7号住居出土遺物(2)	52	第102図	21号住居出土遺物(5)	118
第41図	7号住居出土遺物(3)	53	第103図	21号住居遺物出土位置	119
第42図	7号住居出土遺物(4)	54	第104図	22・60号住居	120
第43図	7号住居遺物出土位置	55	第105図	23号住居	121
第44図	8・9・10・11・31号住居	56	第106図	22号住居電	122
第45図	8・9号住居	57	第107図	22号住居電掘り方	123
第46図	8号住居出土遺物	58	第108図	22号住居出土遺物(1)	124
第47図	9号住居電及び出土遺物(1)	59	第109図	22号住居出土遺物(2)	125
第48図	9号住居出土遺物(2)	60	第110図	22号住居出土遺物(3)	126
第49図	9号住居出土遺物(3)	61	第111図	22号住居出土遺物(4)	127
第50図	9号住居小竈治	61	第112図	60号住居	129
第51図	9号住居小竈治出土遺物(1)	62	第113図	60号住居電	130
第52図	9号住居小竈治出土遺物(2)	63	第114図	60号住居電掘り方	131
第53図	9号住居遺物出土位置	64	第115図	60号住居出土遺物	132
第54図	10号住居及び電	65	第116図	22・60号住居掘り方及び出土遺物	133
第55図	10号住居出土遺物	66	第117図	23号住居	134
第56図	11号住居	68	第118図	23号住居柱穴	135
第57図	11号住居電	69	第119図	23号住居掘り方	136
第58図	11号住居出土遺物(1)	70	第120図	23号住居電	137
第59図	11号住居出土遺物(2)	71	第121図	23号住居電掘り方及び炭化材出土状況	138
第60図	11号住居遺物出土位置	72	第122図	23号住居出土遺物(1)	139
第61図	31号住居及び電	73	第123図	23号住居出土遺物(2)	140
第62図	31号住居出土遺物(1)	74	第124図	23号住居出土遺物(3)	141
第63図	31号住居出土遺物(2)及び11・31号住居出土遺物	75	第125図	23号住居遺物出土位置	142
第64図	8・9・10・11・31号住居掘り方	76	第126図	24号住居	145
第65図	12号住居	77	第127図	24号住居出土遺物	146
第66図	12号住居電及び出土遺物	78	第128図	25号住居	147
第67図	13号住居	79	第129図	25号住居電及び出土遺物(1)	148
第68図	13号住居柱穴及びピット	80	第130図	25号住居掘り方及び出土遺物(2)	149
第69図	13号住居掘り方	81	第131図	25号住居出土遺物(3)	150
第70図	13号住居掘り方及び出土遺物(1)	82	第132図	25号住居出土遺物(4)	151



第133区	26号住居	151	第195区	35号住居出土遺物	219
第134区	26号住居掘り方及び出土遺物	152	第196区	62号住居	221
第135区	27号住居	154	第197区	62号住居出土遺物	222
第136区	27号住居掘り方	155	第198区	36号住居	223
第137区	27号住居電	156	第199区	36号住居掘り方	224
第138区	27号住居出土遺物	157	第200区	36号住居電	225
第139区	28号住居	158	第201区	36号住居出土遺物(1)	226
第140区	28号住居電	159	第202区	36号住居出土遺物(2)	227
第141区	28号住居出土遺物(1)	160	第203区	36号住居出土遺物(3)	228
第142区	28号住居出土遺物(2)	161	第204区	37号住居	229
第143区	29号住居	163	第205区	37号住居電及び出土遺物(1)	230
第144区	29号住居	164	第206区	37号住居出土遺物(2)	231
第145区	29号住居掘り方及び出土遺物(1)	165	第207区	37号住居出土遺物(3)	232
第146区	29号住居出土遺物(2)	166	第208区	38号住居	232
第147区	29号住居出土遺物(3)	167	第209区	38号住居掘り方	233
第148区	29号住居出土遺物(4)	168	第210区	38号住居電	234
第149区	29号住居出土遺物(5)	169	第211区	38号住居電	235
第150区	30号住居	171	第212区	38号住居出土遺物(1)	236
第151区	30号住居掘り方	172	第213区	38号住居出土遺物(2)	237
第152区	30号住居電	173	第214区	38号住居出土遺物(3)	238
第153区	30号住居電掘り方及び出土遺物(1)	174	第215区	38号住居出土遺物(4)	239
第154区	30号住居出土遺物(2)	175	第216区	39号住居及び出土遺物	241
第155区	30号住居出土遺物(3)	176	第217区	42号住居	243
第156区	30号住居出土遺物(4)	177	第218区	42号住居掘り方	244
第157区	33号住居	178	第219区	42号住居電	245
第158区	33号住居出土遺物(1)	179	第220区	42号住居電石組	246
第159区	33号住居出土遺物(2)	180	第221区	42号住居電掘り方及び出土遺物(1)	247
第160区	33号住居出土遺物(3)	181	第222区	42号住居出土遺物(2)	248
第161区	33号住居出土遺物(4)	182	第223区	43号住居	250
第162区	41号住居	183	第224区	43号住居出土遺物	251
第163区	33・41号住居掘り方	185	第225区	44・45号住居	253
第164区	33・41号住居掘り方	186	第226区	44号住居	254
第165区	41号住居電	187	第227区	44号住居電	255
第166区	41号住居電及び電掘り方	188	第228区	44号住居電掘り方及び出土遺物	256
第167区	41号住居出土遺物(1)	189	第229区	45号住居	257
第168区	41号住居出土遺物(2)	190	第230区	45号住居出土遺物(1)	258
第169区	34号住居	191	第231区	45号住居出土遺物(2)	259
第170区	34号住居	192	第232区	44・45号住居掘り方	260
第171区	34号住居及び貯	193	第233区	46号住居	262
第172区	34号住居配石状態	194	第234区	46号住居掘り方	263
第173区	34号住居掘り方	195	第235区	46号住居電	264
第174区	34号住居電	196	第236区	46号住居出土遺物(1)	265
第175区	34号住居電及び電掘り方	197	第237区	46号住居出土遺物(2)	266
第176区	34号住居出土遺物(1)	198	第238区	46号住居出土遺物(3)	267
第177区	34号住居出土遺物(2)	199	第239区	46号住居出土遺物(4)	268
第178区	34号住居出土遺物(3)	200	第240区	46号住居遺物出土位置	269
第179区	34号住居出土遺物(4)	201	第241区	47号住居	271
第180区	34号住居出土遺物(5)	202	第242区	47号住居出土遺物	272
第181区	34号住居出土遺物(6)	203	第243区	48号住居	273
第182区	34号住居出土遺物(7)	204	第244区	48号住居掘り方及び出土遺物	274
第183区	34号住居出土遺物(8)	205	第245区	49号住居	276
第184区	34号住居出土遺物(9)	206	第246区	49号住居掘り方	277
第185区	34号住居出土遺物(10)	207	第247区	49号住居電	278
第186区	34号住居出土遺物(11)	208	第248区	49号住居電掘り方及び出土遺物	279
第187区	34号住居出土遺物(12)	209	第249区	50・51号住居	281
第188区	34号住居出土遺物(13)	210	第250区	50・51号住居掘り方	282
第189区	34号住居出土遺物(14)	211	第251区	50号住居	283
第190区	34号住居出土遺物(15)	212	第252区	50号住居電	284
第191区	34号住居出土遺物(16)	213	第253区	50号住居出土遺物(1)	285
第192区	35号住居	216	第254区	50号住居出土遺物(2)	286
第193区	35号住居電	217	第255区	50号住居出土遺物(3)	287
第194区	35号住居掘り方	218	第256区	50号住居出土遺物(4)	288

第257図	50号住居出土遺物(5)	289	第312図	7号孤立柱建物及び出土遺物	352
第258図	50号住居遺物出土位置	290	第313図	8号孤立柱建物	354
第259図	51号住居	291	第314図	9号孤立柱建物	355
第260図	51号住居	292	第315図	10号孤立柱建物	356
第261図	51号住居出土遺物	293	第316図	11号孤立柱建物	358
第262図	52号住居	295	第317図	12号孤立柱建物	359
第263図	52号住居掘り方	296	第318図	12号孤立柱建物及び出土遺物	360
第264図	52号住居	297	第319図	13号孤立柱建物	361
第265図	52号住居	298	第320図	13号孤立柱建物	362
第266図	52号住居電石組・掘り方及び出土遺物(1)	299	第321図	23号土坑及び出土遺物	364
第267図	52号住居出土遺物(2)	300	第322図	24号土坑及び出土遺物	365
第268図	52号住居出土遺物(3)	301	第323図	68号土坑	366
第269図	53号住居	303	第324図	76号土坑及び出土遺物	367
第270図	53号住居掘り方	304	第325図	86号土坑	368
第271図	53号住居	305	第326図	90号土坑	368
第272図	53号住居	306	第327図	91号土坑及び出土遺物	369
第273図	53号住居出土遺物(1)	307	第328図	93号土坑及び出土遺物	369
第274図	53号住居出土遺物(2)	308	第329図	98号土坑	370
第275図	54号住居	309	第330図	108号土坑	371
第276図	54号住居掘り方及び電	310	第331図	117号土坑	371
第277図	54号住居出土遺物(1)	311	第332図	119号土坑	372
第278図	54号住居出土遺物(2)	312	第333図	120号土坑	372
第279図	55号住居	315	第334図	123号土坑	373
第280図	55号住居掘り方	316	第335図	143号土坑及び出土遺物	373
第281図	55号住居	317	第336図	110号ピット及び出土遺物	374
第282図	55号住居出土遺物(1)	318	第337図	245号ピット及び出土遺物	375
第283図	55号住居出土遺物(2)	319	第338図	256号ピット及び出土遺物	375
第284図	55号住居出土遺物(3)	320	第339図	313号ピット及び出土遺物	376
第285図	55号住居出土遺物(4)	321	第340図	329号ピット及び出土遺物	376
第286図	56号住居	322	第341図	406号ピット及び出土遺物	377
第287図	56号住居掘り方	323	第342図	441号ピット	377
第288図	56号住居	324	第343図	470号ピット	378
第289図	56号住居掘り方	325	第344図	478号ピット及び出土遺物	378
第290図	56号住居出土遺物(1)	326	第345図	482号ピット及び出土遺物	379
第291図	56号住居出土遺物(2)	327	第346図	509号ピット	379
第292図	56号住居出土遺物(3)	328	第347図	512号ピット及び出土遺物	380
第293図	56号住居出土遺物(4)	329	第348図	543号ピット及び出土遺物	380
第294図	57号住居	331	第349図	756号ピット及び出土遺物	381
第295図	57号住居掘り方	332	第350図	764号ピット及び出土遺物	382
第296図	57号住居電及び掘り方	333	第351図	808号ピット	382
第297図	57号住居出土遺物	334	第352図	832号ピット及び出土遺物	383
第298図	58号住居	335	第353図	847号ピット及び出土遺物	383
第299図	58号住居出土遺物	336	第354図	923号ピット及び出土遺物	384
第300図	59号住居	337	第355図	1区遺構外出土遺物(1)	385
第301図	59号住居	338	第356図	1区遺構外出土遺物(2)	386
第302図	59号住居出土遺物	339	第357図	2区遺構外出土遺物(1)	387
第303図	1号孤立柱建物	341	第358図	2区遺構外出土遺物(2)	388
第304図	1号孤立柱建物	342	第359図	3区遺構外出土遺物	389
第305図	1号孤立柱建物	343	第360図	南中道遺跡遺構外出土遺物	389
第306図	2号孤立柱建物	344	第361図	材組織とその名称	392
第307図	2号孤立柱建物及び出土遺物	345	第362図	23号住居跡出土炭化材とその樹種	393
第308図	3号孤立柱建物	347	第363図	23号住居分析資料採取地点	419
第309図	4号孤立柱建物	348	第364図	胎土分析試料実測図	422
第310図	5号孤立柱建物	349	第365図	Sr/Rb・Ca/K 相関図	424
第311図	6号孤立柱建物	351			

## 第1章 調査の経過と方法

### 第1節 調査に至る経緯

一般国道17号線は東京、高崎から沼田、新潟方面へと群馬県を縦断する主要幹線道路であるが、渋川市阿久津や子持村豊沢の交差点で慢性的な交通渋滞が起きていた。豊沢バイパスはこの状況を解消するために計画された。渋川市東町で分岐して吾妻川を新橋によって渡河し、子持村の白井の宿東側を通過して同村上白井で17号線と合流する4車線、約5.5kmのバイパスである。

その中で、渋川市東町から国道353号線バイパスと交差する子持村白井字北中道までの約2.3kmが第1期工事区間である。第2期工事区間は字北中道から子持村上白井の合流点までの約3.2kmである。

この計画を受けて群馬県教育委員会文化財保護課では、計画路線対象地域の埋蔵文化財分布調査を実施した。その結果、第1期工事区間内では渋川市東町遺跡、子持村では白井二位屋遺跡(事業名称仁位屋遺跡)、白井南中道遺跡(下宿遺跡)、白井丸岩遺跡(中宿遺跡)、白井北中道遺跡(白井1遺跡)の5遺跡が確認された。第2期工事区間では事業名称で白井2遺跡、吹屋原遺跡、長坂1遺跡、長坂2遺跡、長坂3遺跡の5遺跡が確認され、発掘調査による記録保存の処置を行う必要性が指摘された。

発掘調査は財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団によって平成2(1990)年度より実施されることになった。着手は第1期工事区間で、白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井北中道遺跡の調査がなされ、平成3(1991)年度は白井二位屋遺跡南端部、白井南中道遺跡、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡、平成4(1992)年度には白井南中道遺跡北端の一部、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡、平成5(1993)年度には白井南中道遺跡北端部、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡、平成6(1994)年度には白井北中道遺跡の調査を行っている。



第1図 国道17号豊沢バイパス路線図 (S=1/10,000)

## 第2節 調査の経過

白井南中道遺跡の発掘調査は初年度として平成2(1990)年4月1日から平成3(1991)年3月31日までの1年間を13,000㎡を対象に実施した。次いで平成3(1991)年4月1日から平成4(1992)年3月31日まで6,312㎡を実施し、平成4(1992)年4月1日から10月31日までの7ヶ月間で、買取が遅れていた墓地部分を含む2,012㎡を、白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡とともに調査されている。5区の調査も継続して実施されているが同区北西部の501㎡は未買取地として残された。翌平成5(1993)年4月1日から5月31日までの2ヶ月で白井丸岩遺跡、白井北中道遺跡とともに5区北西部の501㎡の調査を行い、本遺跡の調査は全て終了した。

発掘調査は基本土層Ⅲ層であるHr-FP層の上面で竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピット、堀等を検出し、Hr-FP層下の暗褐色土層で無数の馬蹄痕、畦状遺構を確認した。さらに暗褐色土～Hr-FA層上面までに馬蹄痕や耕作に関連する痕跡等を検出、調査している。さらにHr-FA層下黒色土上面、淡色黒ボク土～ローム層上面、ローム層中を遺構確認面として調査を実施している。本報告書はこのうちHr-FP層上で確認された7世紀前半～10世紀後半の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、ピットを対象にするものである。Hr-FP層上での他の遺構は「白井遺跡群—中世堀—」において報告している。なお白井二位屋遺跡における奈良・平安時代の竪穴住居を中心とした遺構は「白井遺跡群—集落堀Ⅰ—」に報告されている。

調査着手は1区から始められ、平成2年4月から重機によりHr-FP層上面までの掘削を行った。1区道東部分から遺構確認のち住居の調査に入った。1区中央から北側では軽石上面での住居の形状が当初不定形としてしか確認できず、軽石に沿って住居埋没土を削り込む場合が認められた。また、1区南端で大規模な溝が検出されたが、これは奈良・平安時代の遺構ではなく、二位屋城に伴う堀であるとの判断に至っている。5月17日から8号住居の調査に着手した。中段テラスを有する住居の出現に当初は戸惑いを隠せなかったが、埋没土の様子や15号住居などの同様の形態から、他遺構との重複等ではないことが確認された。

13号住居では軽石上面が緩斜面となって住居内側へ落ち込んでいく状態がみられ、15号住居でも同様の緩斜面が認められた。13号住居ではあわせて住居周囲にピットが検出された。

5月21日から1区道西部分の調査を開始し、19号住居において壁面に石が積まれている状況を検出した。23・24号土坑において住居埋没土と同様の埋没土中から残存状態の良い土器の出土をみた。5月～6月にかけて焼失住居である23号住居の調査を実施し、多くの炭化材の出土をみた。6月11日から2区道東部分にも調査着手し、6月25日にはあわせて2区道西部分の遺構調査を開始している。7月10日には33号住居から銅製鈴が出土している。6月下旬には1区1・2・3号掘立柱建物の調査とピット群の写真撮影を実施した。1区中央～2区全域にかけてはピットが多量に検出され、多くのピットから遺物の出土があった。それらは土層確認後、遺物取り上げを行っている。

なお、2区中央部では水路が調査区を横断しており、耕地への馬入れ確保の都合上、49～52号住居の調査は当初住居の1/2ほどを調査し、時期をみて水路、馬入れを切断して残存部分の調査を行う2段階の手順を踏まざるを得なかった。1区、2区とも竪穴住居をはじめとする遺構の底面および床面掘り上がりの状態において区ごとに上空からのアドバルーンによる航空撮影を行った。

9月19日から3区、10月5日から4区の遺構確認、調査を行ったが、奈良・平安時代の遺構は確認できず、5区も同様の状態であった。3～5区とも遺構が掘り上がった段階で上空からのアドバルーンによる航空撮影を実施した。

調査初年度の夏は、当時としては記録的な猛暑であり、すぐに白く乾いてしまう土層断面への水まきや住

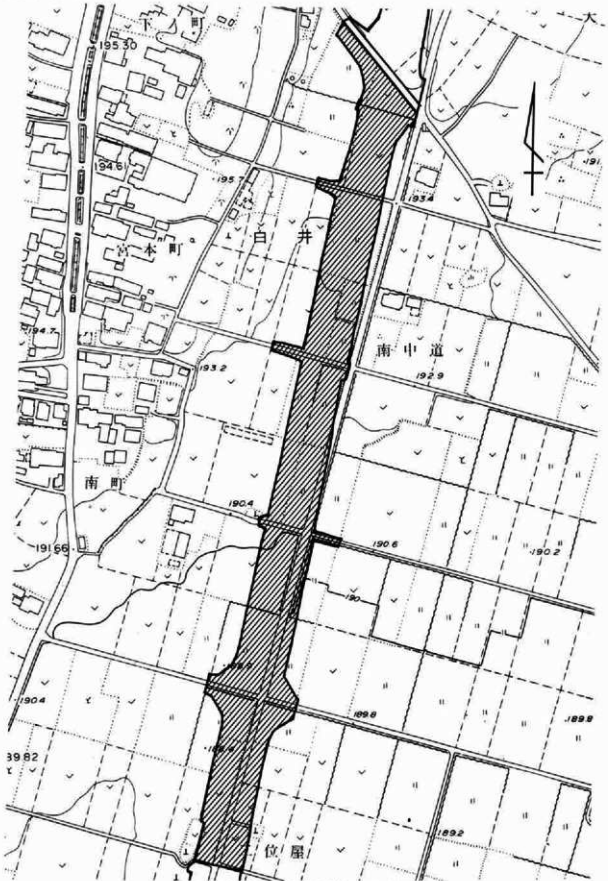
居の写真撮影時の水まきなどに苦心した。8月10日には台風11号、9月19日夜半には台風19号の襲来を受けた。前日には被害予防の作業に追われ、特に19号が去った後日には発掘現場の復旧作業に時間を割いている。

10月13日、14日の両日には白井二位屋遺跡、白井南中道遺跡、白井北中道遺跡の合同で現地説明会を催し、1000人の見学者が現場に訪れた。この時、白井二位屋遺跡では主に二位屋城関係の遺構、白井南中道遺跡では、奈良・平安時代の石組電や中段テラスを持つ住居、白井北中道遺跡では Hr-FP 層下の馬蹄跡と畦状遺構を来場者に説明し、白井南中道遺跡のプレハブにおいて遺物、パネル展示を行った。

### 第3節 調査の方法

調査範囲では昭和20年代にすでに圃場整備が実施されていたため約100mごとに東西方向の農道が走っていた。次節で述べるグリッドの他に便宜的にこの道で調査区を設定し、南北に走る道路で東西に分かれる場合には「道東」「道西」と呼称した。そして各々の区単位で南の1区から調査を進行していった。排土については路線内の調査が及ばない区あるいは調査が終了した区を置き場にした。また、各区の調査は基本的に以下の調査方法で行われた。

1. 掘削機(バックホー)による表土および黒褐色土の掘削を行う。
2. Hr-FP 層上面を精査し、遺構確認作業を行う。住居、土坑、溝、堀等を検出する。
3. 住居、土坑、溝、堀等を検出後、平板による1/100あるいは1/200縮尺の平面測量図を作成し、概念図として調査に活用した。
4. 遺構調査にあたっては、埋没土観察用ベルトを設定した。住居は「十」字に設定し、必要に応じて設定数を増加させている。土坑については長軸に直交するように1本設定し、大型のものについては「十」字に設定している。溝についても土坑と同様に長軸に直交する方向に1本確定した。堀でも長軸に直交する設定法である。土坑、溝、堀についても必要に応じて設定数を増加している。
5. 遺構調査では移植ごてによる手掘りを行ったが、堀等大型の遺構については掘削機で中位～下位に掘り下げた後、スコップによる手掘りを併用した。
6. 遺構を底面あるいは床面まで掘り下げた後、観察用ベルト部分で土層断面図を1/20で作成した。その他の土層断面も同様であるが、必要に応じて1/10縮尺で実測した。土層の色調については農林省農林水産技術会議監修、財団法人 日本色彩研究所監修「新版標準土色帳」を参考にした。
7. 住居の電部分については、住居に残されたベルトの他に、「十」字を基本とする2本のベルトを設定し、さらに細かい調査を行った。ベルトの数は必要に応じて増加させた。作成図の縮尺は1/10とし、平面図の場合は基準線を設けて測量している。石組電の場合は残存状態に応じて正面図および壁石の側面図を作成した。
8. 遺構平面図の作成は、平板測量で行った。測量は1/20を基本とし、場合により1/40も使用した。住居掘り方の平面図は、基本的に測量会社(株式会社 測研)に委託し、1/20で行った。
9. 記録写真の撮影には、基本的に6×7、35mmの白黒と、35mmのリバーサルで行い、遺構全景の撮影にはモニタリングカメラ、ローリングタワーを場合によって併用し、全体写真の撮影には高所作業車、気球を用いて行った。



第2図 白井南中道遺跡調査範囲 (S=1/2,500)

## 第4節 調査区の設定

白井南中道遺跡の調査区の設定は白井二位屋遺跡に位置する基準点を採用し、詳細は下記の通りである。

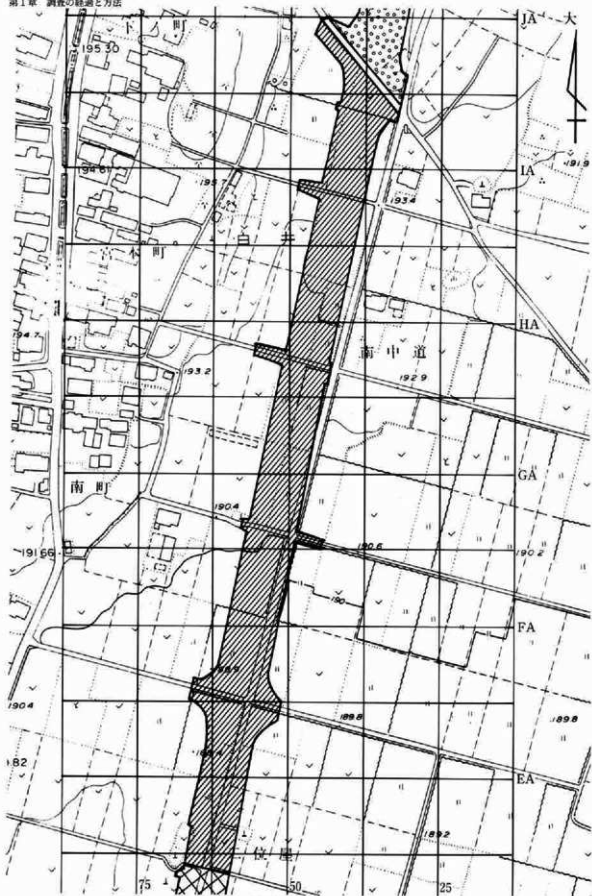
1. 国家座標第IV系を利用して行い、グリッドが国家座標と置き換えられるように設定した。
2. 調査区の最小単位は4m四方とし、その設定は国家座標第IV系と同様に座標軸の第2象限にあてはめ、両方向をX軸(国家座標Y軸)、北方向をY軸(国家座標X軸)とする。
3. グリッドの呼称は、白井二位屋遺跡の基準となる点をAA-00とし、アルファベットはY軸方向に4m進むごとにAB、AC、AD、AEと呼称する。96m進むとAYとなるが、その後100m地点ではAZとせずBAと称することとした。以後、100m単位で前の位のアルファベットを変化させ、200mでCA、300mでDAとする。

また、X軸方向に4m進むごとに01、02、03と数字を無限大に変化させていき、アルファベットと数字の組合せにより各グリッドを呼称する。必然的に4mグリッドの南東面の地点がグリッドを代表させる呼称となる。

4. 白井二位屋遺跡に位置する基準点(AA-00)は国家座標第IV系(第IV系原点は北緯36°、東経139°50′)、X=55.650、Y=-72.800である。それぞれのグリッド杭の国家座標は以下ようになる。

AA	X=55.650	00	Y=-72.800	EA	X=56.050	25	Y=-72.900
FA	X=56.150	50	Y=-73.000	GA	X=56.250	75	Y=-73.100
HA	X=56.350	100	Y=-73.200	IA	X=56.450	125	Y=-73.300
JA	X=56.550	150	Y=-73.400				

5. 方眼杭の設定及びベンチマークは、株式会社 測研に委託した。
6. 前述のグリッドの他、便宜的に東西に伸びる農道で遺跡を5分割し、南より1区～5区と呼称した。また、南北に走る農道で、調査区が東西に分かれる場合には必要に応じて「道東」「道西」と呼んで箇所を示した。



第3図 調査区設定図 (S=1/2,500)



## 第5節 基本層序

白井南中道遺跡における奈良・平安時代の遺構分布範囲の基本層序は第4図の通りである。I層は表土で、Hr-FP粒、小石を含む。II層は黒色あるいは黒褐色の色調を呈し、浅間B(As-B)軽石を含有する。浅間B軽石は天仁元(1106)年の浅間山の噴火によって噴出したテフラである。子持村内ではB軽石の純層は認められない。

III層は榛名山を給源とする軽石層で、Hr-FP(Hr-I)と略称される。火山活動の状況によって軽石粒の粗密が生じ、ユニットに分けることができる。Hr-FPの降下はごく短い時間と推定され、黒井峯遺跡の調査成果からは1日のうちに軽石が降り積もったと考えられている。降下時期は6世紀前半～中頃であり、軽石直下の遺構からはTK10型式の須恵器が出土する。IV層は暗褐色土層である。榛名山給源の火山灰(Hr-FA・Hr-S)降下後、Hr-FPが噴出するまでの30年～50年といわれる間に堆積した土層で、Hr-FA、炭化物、焼土などを含む場合がある。古墳時代の旧表土であり、黒井峯遺跡をはじめとするHr-FP下の一連の遺跡と同一面である。Hr-FPにバックされた6世紀代の情報を豊富に保持しており、鮎沢バイパスでは無数の馬跡等が検出されている。

V層はHr-FA層である。降下時期は須恵器ではMT15型式にあたり、6世紀初頭とされる。Hr-FPと同じように火山活動の状況によってユニットに分層でき、発掘調査によって災害の過程が明らかにされている。白井南中道遺跡ではHr-FA層のなかで桃褐色・灰色のシルト層と火砕流の堆積が顕著に認められている。

VI層は黒色あるいは黒褐色を呈する土層で浅間C(As-C)軽石を含有している。粘性を帯びる場合があり、特に谷地部分で著しい。4世紀初頭～前半段階の古墳時代の旧表土である。

VII層はいわゆる淡色黒ボク土と呼ばれる土層で暗褐色あるいは褐色を呈し、縄文時代の遺物包含層である。白井二位屋遺跡や本遺跡でもVIII層と分層できない箇所がみられる。

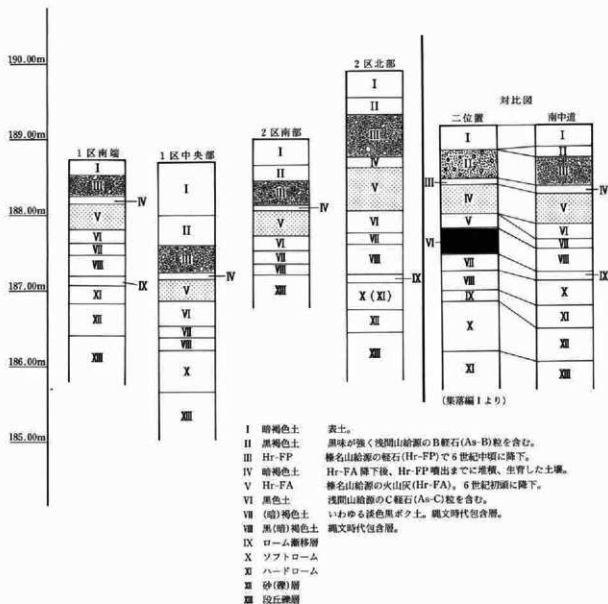
VIII層は暗褐色土あるいは黒褐色土を呈する土層で谷地部分では黒味を増している。縄文時代の遺物包含層である。

IX層はローム漸移層でX層はソフトロームである。XI層はハードロームでYPを含んでいる。X層は砂層で褐色～黄褐色をなしている部分が多い。砂粒は比較的均一であるが疎密によって分層できる箇所もある。

XII層は段丘礫層である。

遺跡地は現地表では全体的に北から南への緩やかな傾斜を持ち、段丘礫層上にローム層等の火山噴出物層によって形成されている。各層を比較すると微妙な地形であることが看取できる。1区の最南端ではII層が消失しており、本来は現地表より高かった可能性がある。1区の中央部では各土層とも全体的に1m近く低くなっているが、2区南部では1区最南端よりやや低い程度となり、2区北部ではさらに1m近く高い標高となっている。2区ではHr-FAのシルトと火砕流のユニットの厚い堆積がみられた。Hr-FP層は1区では上位が削られている可能性があるが、全体的には北上するにつれて堆積が厚くなっていく傾向となっている。後述するが3区では1層下はX層面が露出する部分が北東～南西方向に走っている。同部分に存在した馬の背状の高まりが削平された痕跡であり、その東西は緩傾斜ながら谷地状に落ち込んでいく状態であった。4区、5区とさらに標高が高くなっていく。

X層とXI層については二位屋遺跡から2区まではその境が明確でなく、3区のX層露出部分で非常に厚く認められた。



第4図 白井南中道遺跡土層柱状図

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

### 第1節 遺跡周辺の地形

群馬県の北部は北毛と呼ばれ、山岳と美しい自然に恵まれた地域である。北毛は利根・沼田地域と吾妻・渋川地域とに分かれるが、遺跡の立地する子持村は後者に属している。子持村は関東平野の北西外縁部を占め、群馬県中央部よりやや北に位置している。北に標高1296mの子持山や小野子山が迫り、東に利根川を挟んで赤城山、西に吾妻川を介して榛名山が位置し、南には関東平野が開けている。子持村はちょうど平野と山地の分かれ目にあっているのである。行政区分では北は沼田市、東は勢多郡赤城村、南は渋川市、西は小野上村に接している。また、村の北部は子持山に連なる山地、中央部は子持火山の爆発による泥流で生じた火山麓扇状地であり、東部および西部は河岸段丘となっている。河岸段丘は村境を南流する利根川と吾妻川的作用によるものである。村内の平野部は扇端から河岸段丘に分かれて広がっており、本遺跡は利根川と吾妻川の合流点近くの河岸段丘に位置している。河岸段丘は5段に分けられ、『子持村誌 上巻』（子持村誌編纂室 1987）によって雙林寺段丘、長坂段丘、西伊熊段丘、白井段丘、浅田段丘と名付けられ、記名順に時代が新しくなるとされている。この序列とは別に立和田段丘と命名された段丘がある。また、段丘面を呼ぶ場合は同様の地名を付けて呼称している。

#### 1. 子持火山噴出物

成層火山・複式火山である子持火山が噴火していた頃は溶岩に含まれる磁鉄鉱の磁気性質から今から70万年以上は遡らず、今日みられる激しい浸食の様子では50～60万年前ではないかと推定される。噴出物による火山麓扇状地は畠に利用されている部分が多い。

#### 2. 雙林寺面

子持村内で最も高い所にあり、利根川から約60m、吾妻川からは約65mの比高がある。不動川の浸食によって段丘は川の方へ緩やかに傾いている。標高250～300mほどで長板面の段丘崖の差は約10～10数mである。ローム層が粘土層化しているため形成された時代は不明であるが次の長板面との関係で、沼田市街地の乗る沼田面とはほぼ同時期と推定されている。

#### 3. 長板面

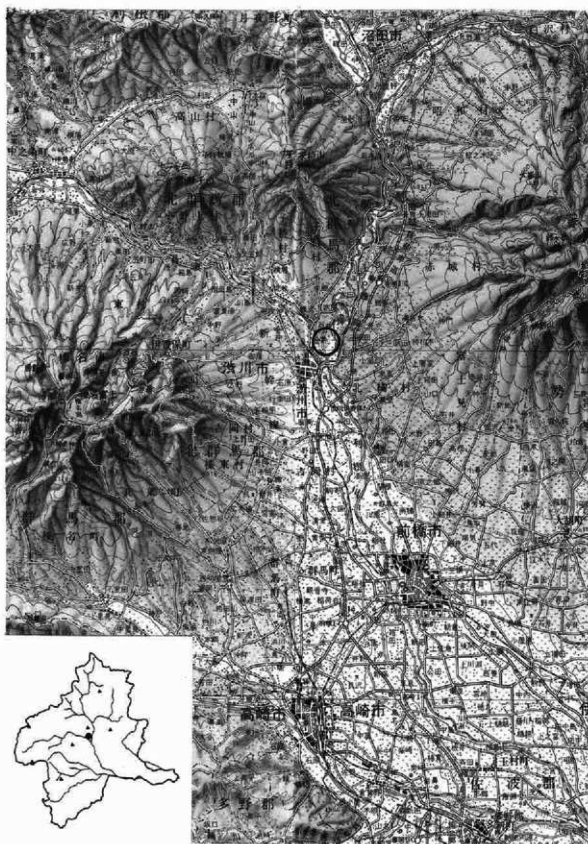
村内で最も広い平地で、利根川との比高は段丘北端で約80m、長坂付近で45m、南端付近の吹屋で37mを測る。標高は200～290mほどで、形成された時期はおよそ6～7万年前であると推定されている。この頃利根川は長板面を流路を変えながら流れていた。また、南部では上部ロームと中部ロームの間に前橋泥流の存在が確認されている。国道353号線バイパスの吹屋犬子塚遺跡、吹屋中原遺跡はこの段丘上に位置する。

#### 4. 西伊熊面

西伊熊付近に形成され、段丘面の最大幅150m、長さ1.5kmほど続いている。標高220～240mに広がり、利根川からの比高は北端で約40m、南端で15mほどである。浅田面、白井面との段丘崖も北部では直立した崖であるが、南端付近では3～4mの緩傾斜となっている。上部ローム層が確認されており、約22000年前に形成されていたと推定できる。

#### 5. 白井面

利根川からの比高は約15mで白井付近を中心に広がる段丘面である。国道17号線鯉沢バイパス白井遺跡群の白井二位屋、白井南中道、白井丸岩、白井北中道の各遺跡と白井大宮遺跡、国道353号線バイパスの白井北



第5図 遺跡位置図

昭和60年国土地理院発行1/200,000  
地勢図「長野」「宇都宮」より作成

中道Ⅱ遺跡がこの段丘上に位置している。標高は190～210mほどであり、面はほぼ平坦で全体的に北から南への緩やかな傾斜をなし、一部に利根川方向の南東へのごく緩やかな傾斜がみられる。白井面では段丘礫層上に上部ローム層の一部が堆積していることから、約1万年前に形成されたと考えられている。

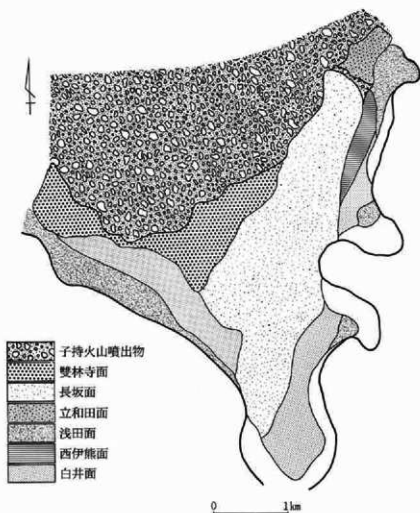
この白井段丘と同じ時代の段丘は吾妻川沿いにも存在し、長尾小学校や八幡、稲荷、宮地～鯉沢1・3・4番の集落が位置している。吾妻川的作用によるといわれている。

#### 6. 浅田面

標高180mほどで利根川から僅か数mの比高で白井面より低い段丘である。浅田の東側に位置するが、同じ時代に形成された段丘が白井地区と利根川に挟まれた地域や吾妻川沿いの河原1・2区にも分布がみられる。段丘礫層上にローム層は全く認められず、数千年前にできたと考えられる。

#### 7. 立和田面

立和田付近に位置し東西100m、南北500mほどの小規模段丘である。標高292m前後～316mほどで南方向に緩く傾斜している。長坂面と西伊能面のほぼ中間の高さで、どちらかの段丘の延長の可能性があるが不詳である。



第6図 遺跡周辺における段丘面の分布

## 第2節 周辺の遺跡

周辺の遺跡については既に「白井遺跡群 一中世編-」、「白井遺跡群 一集落編1-」において詳述されている。ここでは重複を避けて概略を記しておく。

### ○旧石器時代

子持村では、押出遺跡(16)で細石核が検出されているのみである。他には行幸田山遺跡(87)、分郷八崎遺跡(130)、見立溜井遺跡(121)、諏訪西遺跡(122)、中畦遺跡(123)などがあげられる。

### ○縄文時代

白井北中道遺跡(4)、見立溜井遺跡、房谷戸遺跡(126)で草創期の遺物が検出されている。早期は村内3ヶ所まで遺物のみ確認され、前期は上白井と横堀地区の他、黒井峯遺跡(15)、押出遺跡がある。中期では横堀から土器の出土をみ、後期、晩期も押出遺跡で確認されたのみである。空沢遺跡(80)、行幸田山遺跡、分郷八崎遺跡、三原田遺跡(125)、諏訪西遺跡、見立溜井遺跡などが早期～中期の遺跡としてあげられるが、後期、晩期の遺跡としては、空沢遺跡、三原田遺跡、半田中原・南原遺跡(116)のみである。

### ○弥生時代

中期の遺跡としては押出遺跡や南大塚遺跡(47)で再葬墓が検出され、逆川遺跡(57)では土器が出土している。中村遺跡(94)は中期後葉の環壕集落であり、隣接する有馬条里遺跡(89)でも中期後半の住居跡が検出された。後期の遺跡としては黒井峯遺跡、押出遺跡、白井大宮姫神社前遺跡などがあげられる。渋川市では中村遺跡、有馬条里遺跡、有馬遺跡(98)、空沢遺跡などがあり、障床墓が特筆される。赤城村では樽式土器の標識遺跡である樽遺跡(119)がある。

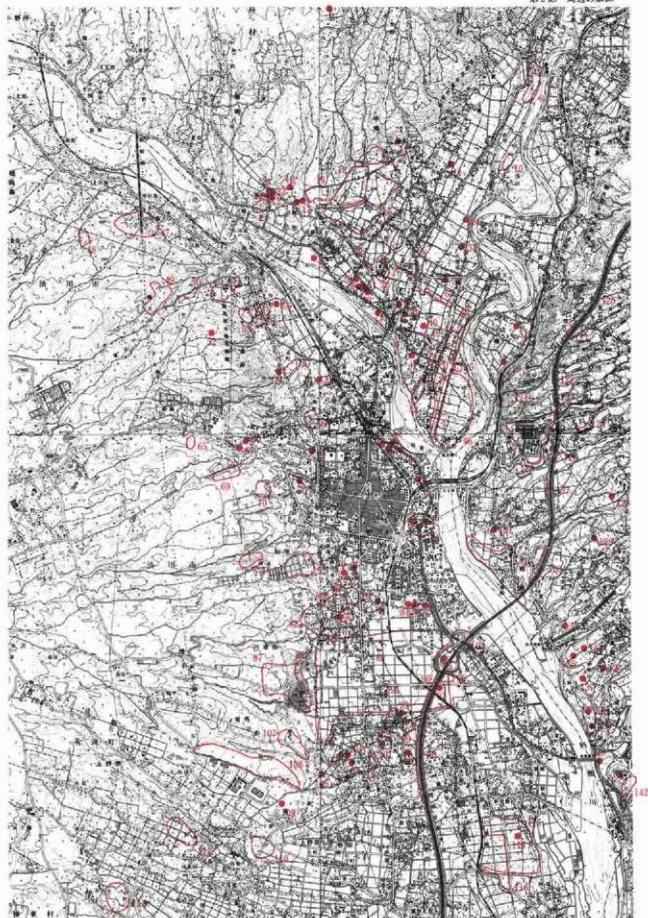
### ○古墳時代

黒井峯遺跡では4世紀末～5世紀にかかると推定される古墳が調査され、有馬遺跡では4世紀の住居が確認されている。行幸田山遺跡では4世紀末にA区1号墳、D区1号墳が築造され、有馬条里遺跡での居館の可能性のある遺構との関係が注目されている。その後村内では造墓は確認できていないが、行幸田山遺跡では5世紀末にはA区2・3号墳が造られ、空沢遺跡でも造墓が開始されている。他に東町古墳(64)、坂下古墳群(62)、大崎古墳群(73)、半田南原遺跡などでHr-FAに埋没した古墳が検出されている。中筋遺跡(82)からはHr-FAに埋没した集落、畠が確認され、中村遺跡、有馬条里遺跡、有馬遺跡などで同テフラ下の水田が見つかる。Hr-FP下の調査例としては、黒井峯遺跡や西組遺跡(13)の集落・水田・畠、白井遺跡群の馬跡跡、中ノ峯古墳(19)、田尻遺跡1・2号古墳(26)、伊熊・有瀬古墳群(9)などがあげられる。中村遺跡、有馬条里遺跡でも水田が検出されている。Hr-FPや土石流が堆積した後、白井古墳群(46)、吹屋Ⅰ～Ⅲ号墳(29～31)などが築造され、7世紀末には鏡石切組儀石室の虚空蔵塚古墳(68)が造られる。

### ○奈良・平安時代

集落は、白井二位屋遺跡(2)、南中道遺跡(1)、白井城南郭遺跡(43)で住居が構築されている。渋川市南部では条里区割りが残され、その南には推定有馬条寺(101)がある。半田中原・南原遺跡では奈良時代の大集落とともに牧と推定される遺構が検出されている。

生産遺跡では、金井製鉄遺跡において炭窯と製鉄遺構が検出されている。平安時代の遺跡として、空沢遺跡や有馬条里遺跡、西浦遺跡(54)などがあげられるが、これらは住居跡の他に製鉄遺構、畠を伴い、大規模集落である可能性が指摘されている。



第7図 周辺遺跡図 (S = 1/50,000)

## 第2章 地理的環境・歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代・種別	文献	備考
1	白井南中道遺跡	奈良・平安時代集落、中近世土坑		縄沢ハイパス関係、今回報告分
2	白井二石屋遺跡	奈良・平安時代集落、中世城跡	1	縄沢ハイパス関係
3	白井丸岩遺跡	Hr-PP直下畠・馬蹄圧痕	2	縄沢ハイパス関係
4	白井北中道遺跡	Hr-PP直下畠・馬蹄圧痕	3	縄沢ハイパス関係
5	白井北中道且遺跡	Hr-PP直下畠・馬蹄圧痕		国道353号線関係
6	吹屋大子塚遺跡	Hr-PP直下畠・馬蹄圧痕		国道353号線関係
7	吹屋中原遺跡	Hr-PP直下馬蹄圧痕		国道353号線関係
8	將軍塚古墳	古墳時代墳墓	5、60	「総覧」白鳥井村9号墳。円墳、載石切組横石室
9	伊熊・有瀬古墳群(仮称)	古墳時代後期古墳群	60~63	「総覧」記載7基、3基調査されている。 伊熊古墳(Hr-PP下、円墳、横穴式石室) 有瀬1号墳(Hr-PP下、円墳、横穴式石室) 有瀬2号墳(Hr-PP下、円墳、横穴式石室)
10	浅田遺跡	散布地、古墳時代墳墓	5	遺跡台帳№2585、Hr-PP下の古墳
11	行人塚古墳	古墳時代墳墓	60、66	「総覧」白鳥井村8号墳。円墳
12	雙林寺	寺院	5	
13	西組遺跡	Hr-PP直下古墳時代集落	12	
14	惣野遺跡	古墳時代後期墳墓	43	祭祀遺跡と推定される遺構、畠、水田
15	馬井峯遺跡	Hr-PP直下古墳時代集落	11	Hr-PP直下集落、古墳
16	押出遺跡	縄文時代配石、弥生時代再葬墓	4	
17	丸平山古墳	古墳時代墳墓	14、60	「総覧」長尾村4号墳。横穴式石室
18	丸子山塚	古墳時代墳墓	5	平成5年調査
19	中ノ塚古墳	古墳時代墳墓	10	
20	大日塚古墳	古墳時代墳墓	60	「総覧」長尾村1号墳。前方後円墳?
21	長尾村2号墳	古墳時代墳墓	60	横穴式石室
22	長尾村3号墳	古墳時代墳墓	14、60	円墳
23	ゲン塚古墳	古墳時代墳墓	54	横穴式石室、「総覧」記載編
24	「総覧」記載編	古墳時代墳墓	66	Hr-PP下に2基確認。
25	長尾小学校南遺跡	古墳時代墳墓	66	円墳? Hr-PP下に古墳状の高まりを確認。
26	田尻遺跡	古墳時代後期墳墓	44	築塔、畠、横石塚
27	東田尻遺跡	古墳時代集落	5	Hr-PP下
28	八幡神社遺跡	古墳時代後期墳墓	6	
29	吹屋田号墳	古墳時代墳墓	5、65	「総覧」長尾村8号墳、Hr-PP上の円墳で横穴式石室、7世紀後半
30	吹屋11号墳	古墳時代墳墓	65	「総覧」長尾村7号墳、Hr-PP上の円墳
31	吹屋1号墳	古墳時代墳墓	5、65	「総覧」長尾村6号墳、Hr-PP上の円墳で横穴式石室、7世紀後半
32	三夜塚古墳	古墳時代墳墓	60	「総覧」長尾村5号墳。前方後円墳?
33	長尾村9号墳	古墳時代墳墓	60	円墳
34	長尾村10号墳	古墳時代墳墓	60	円墳
35	庚申塚古墳	古墳時代墳墓	60	「総覧」長尾村11号墳。円墳
36	芥塚古墳	古墳時代墳墓	60、67	「総覧」長尾村15号墳。円墳、付近に小古墳が2基あったが消滅したとされる。
37	那智塚(大塚)古墳	古墳時代墳墓	5	Hr-PP上の古墳、「総覧」長尾村14号墳
38	八講塚古墳	古墳時代墳墓	60	「総覧」長尾村13号墳
39	「総覧」記載編	古墳時代墳墓	66	円墳
40	「総覧」記載編	古墳時代墳墓	66	
41	不動塚古墳	古墳時代墳墓	5	遺跡台帳№2575、「総覧」記載編
42	白井城跡	中世城跡	5、9	遺跡台帳№2572
43	白井城南郭遺跡	平安時代集落	5	
44	白井宮	中世城下町	5	実態は市場町
45	白井大宮遺跡	Hr-PP直下馬蹄圧痕	68	
46	白井古墳群	古墳時代墳墓	5	「総覧」長尾村第17~38号墳。記載編古墳
47	南大塚遺跡	弥生時代再葬墓	6	
48	川島中祖遺跡	中世馬場跡	7	遺跡台帳№1160
49	二本塚遺跡	縄文包蔵地	7	遺跡台帳№1138
50	西原遺跡	縄文包蔵地	38	
51	金島中学校敷地内遺跡	縄文~歴史包蔵地	38	遺物は金島中学校所蔵
52	金井古墳	古墳時代墳墓	43	横穴式石室
53	吾妻山遺跡	縄文~歴史包蔵地	7	



番号	遺跡名	時代・種別	文献	備考
54	西義遺跡	古墳時代集落	38	遺物は金島中学校所蔵
55	金井城跡	中世館跡	6	原氏
56	金井丸山古墳	古墳時代墳墓	6	箱式棺状石室
57	逆川遺跡	弥生時代集落	6	中期集落
58	金井前原古墳	古墳時代墳墓	6	円墳
59	金井製鉄遺跡	平安時代製鉄遺構	8	
60	金井原古墳群	古墳時代墳墓	38	円墳4基
61	坂之下遺跡	古墳時代集落	45	Hr-Fa 下小区画水田、平安期以降の遺構面
62	坂下古墳群	古墳時代墳墓	43	初期群集墳、懸穴系石室
63	石坂家古墳	古墳時代墳墓	58	円墳
64	東町古墳	古墳時代墳墓	45, 48, 53, 55	方墳、懸穴系石室
65	中砂居沢遺跡	平安時代製鉄遺跡	7	遺跡台帳№1163
66	かほ塚古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳№1156
67	入沢2号墳	古墳時代墳墓	6	
68	虚空蔵塚古墳	古墳時代墳墓	43	円墳、横穴式石室
69	洪川古城址	縄文包蔵地・中世城跡	7	遺跡台帳№1140
70	上の原遺跡	縄文～奈良・平安時代	7	遺跡台帳№1141
71	延暦塚古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳№1162
72	中之町遺跡	弥生包蔵地	7	遺跡台帳№1145
73	大崎古墳群	弥生包蔵地、古墳時代墳墓	6	遺跡台帳№1154
74	塚山古墳群	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳№1165
75	石原西浦遺跡	古墳時代～近世集落	24	
76	石原久保貝道A遺跡	平安時代遺構	27	
77	石原久保貝道B遺跡	平安時代遺構	27	
78	粟訪ノ木遺跡	縄文・弥生・古墳時代遺構	48	
79	石原東古墳群	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳№1149
80	空沢遺跡	縄文～奈良・平安時代集落	25～30	古墳時代墳墓、初期群集墳
81	行幸田寺後遺跡	縄文時代遺構	27	
82	中筋遺跡	Hr-Fa 直下古墳時代集落	26	史跡公園となっている。
83	石原東遺跡	古墳時代水田、平安時代遺構	31～35, 49	
84	十二山古墳	古墳時代墳墓	7	遺跡台帳№1166
85	中村日施田遺跡	江戸時代	49	畑、水田、道
86	中村久保田遺跡	江戸時代	55	畑、水田、道
87	行幸田山遺跡	旧石器～古墳時代・中世前期	36	縄文時代集落、数基の古墳
88	行幸田古墳群	古墳時代墳墓	38	円墳10数基
89	有馬条里遺跡	奈良時代条里遺構	42	遺跡台帳№1173
90	有馬条里遺跡(開越分)	弥生～平安時代	69～71	弥生～平安時代集落、弥生時代礎床基 古墳時代前・後期高跡、後期水田跡
91	中井遺跡	弥生・古墳時代包蔵地	38	
92	後田遺跡	古墳時代包蔵地	7	遺跡台帳№1169
93	後田東遺跡	弥生時代集落	37	
94	中村遺跡	弥生時代～近世	38	弥生～平安時代集落、古墳・江戸時代水田、畠
95	真下塚古墳	古墳時代墳墓	38	Hr-FP 上の円墳、横穴式石室
96	八木原沖田Ⅰ～Ⅲ遺跡	古墳～奈良・平安時代遺構	52	奈良・平安時代条里遺構の一部、古墳時代水田
97	八木原沖田Ⅴ遺跡	古墳～奈良・平安時代遺構	53	古墳時代水田
98	有馬遺跡	弥生～奈良・平安時代	39, 40	
99	愛宕塚遺跡	縄文・弥生時代集落	38	昭和55年調査
100	有馬小貝戸遺跡	古墳時代墳墓	38	市立第四保育所北側
101	有馬西寺遺跡	弥生～奈良・平安時代	41	
102	有馬赤貝戸遺跡	古墳時代包蔵地	38	
103	有馬神戸遺跡	縄文～奈良・平安時代	38	
104	神戸2号墳	古墳時代墳墓	38	
105	神戸1号墳	古墳時代墳墓	38	
106	外貝戸古墳	古墳時代墳墓	38	
107	城の上遺跡	中世城址・縄文包蔵地	7	遺跡台帳№1172
108	有馬堂山古墳群	古墳時代墳墓	6	遺跡台帳№1168
109	三津屋古墳	古墳時代後期群集墳	55	八角形墳
110	平石遺跡	縄文、古墳、平安時代	54	土坑、畑

番号	遺跡名	時代・種別	文献	備考
111	茅野遺跡	縄文時代遺構	56	墓地
112	申府神田遺跡	不明	57	土坑・溝
113	縄沢古墳	古墳時代墳墓	59	円墳・横穴式石室、7世紀中葉
114	平田薬師遺跡	奈良・平安時代遺構	27	水田跡
115	平田南原古墳群	古墳時代墳墓	6	
116	平田中原・南原遺跡	縄文、古墳、奈良・平安時代	35	縄文時代集落 奈良・平安時代集落、道、棚列、溝、井戸 谷、地置跡、牧 古墳時代墳墓、横穴式石室(7世紀末群集墳) 竪穴式石室、土壇墓(5世紀末群集墳)、道
117	弁天塚古墳	古墳時代墳墓	14	遺跡台帳No2107
118	福荷塚古墳	古墳時代墳墓	14	遺跡台帳No2108
119	樽遺跡	弥生時代集落	13	遺跡台帳No2104
120	見立大久保遺跡	縄文時代集落	15	
121	見立棚井遺跡	旧石器・縄文・古墳時代	15	
122	諏訪西遺跡	旧石器・縄文時代	16	
123	中畦遺跡	旧石器・縄文時代	16	
124	三原田遺跡	縄文前期集落・中世城跡	17	
125	三原田遺跡	縄文時代集落	18~20	
126	原谷戸遺跡	縄文時代集落	21、22	
127	羽場遺跡	奈良時代鍛冶工人集落	23	
128	前中矢遺跡	縄文時代後期遺構	46	
129	群馬用水分郷八崎遺跡	縄文前・中期、弥生時代遺構	74	縄文時代前期・弥生時代集落
130	分郷八崎遺跡	旧石器時代〜中・近世	23	
131	谷津遺跡	平安時代遺構	47	時期不明の竪穴式遺構あり。
132	八崎城址	中世城跡	23	
133	下遠原遺跡	縄文前期、弥生時代遺構	46	縄文時代前期・弥生時代後期集落
134	水泉寺地区遺跡群	古墳〜平安時代	50、51	古墳。古墳〜平安時代集落
135	塚原城	戦国期城跡	46、51	城址跡、櫓郭式構造
136	真壁向山遺跡V	縄文、古墳〜奈良・平安時代	50	平安時代集落の一部、古墳部・周溝の一部
137	真壁向山遺跡II	平安時代遺構	50	羽釜を伴う
138	真壁城	戦国期末期城跡	46、51	半郭構造
139	真壁城山遺跡	縄文時代前期遺構	46	
140	下箱田向山遺跡	縄文時代前期遺構	72	
141	箱田城	戦国期城跡	46、51	半郭構造、今井・高梨・小野沢諸氏の居居
142	城山遺跡	縄文時代早・前期、奈良・平安時代以降の遺構	51	奈良・平安時代以降の史跡
143		古墳時代墳墓	73	人物輪輸出土、坂下古墳群の一部

## 文献

- (1) 『白井遺跡群-中世編-』一般国道17号(鮎沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財調査報告書 第1集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1983
- (2) 『年報11』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (3) 『年報10』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1991
- (4) 『黒井家遺跡I』子持村教育委員会 1985
- (5) 『子持村誌 上巻』子持村誌編さん室 1987
- (6) 『渋川市誌 第二巻』通史編・上 原始〜近世 1193
- (7) 『群馬県遺跡台帳II 西毛編』群馬県教育委員会 1972
- (8) 『金井製鉄遺跡発掘調査報告書』渋川市教育委員会 1975
- (9) 『群馬県古墳集址の研究』山崎 一 1972
- (10) 『中ノ家古墳発掘調査報告書』子持村教育委員会 1980
- (11) 『押手遺跡発掘調査概報』子持村文化財調査報告 第5集 子持村教育委員会 1987
- (12) 『西組遺跡発掘調査報告書』子持村文化財調査報告 第2集 子持村教育委員会 1985
- (13) 杉原在介『上野樽遺跡発掘調査概報』『考古学』第10巻10号 1939
- (14) 『群馬県遺跡台帳 I 東毛編』群馬県教育委員会 1971
- (15) 『見立棚井遺跡・見立大久保遺跡』関越自動車道(新高線)地域埋蔵文化財調査報告書 K.C.V. 赤城村教育委員会 1985
- (16) 『中畦遺跡・諏訪西遺跡』関越自動車道(新高線)地域埋蔵文化財調査報告書 第9集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986
- (17) 『三原田城遺跡』関越自動車道(新高線)地域埋蔵文化財調査報告書 第13集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1987
- (18) 『三原田遺跡』住居編 群馬県企業局 1980
- (19) 『三原田遺跡 I』群馬県企業局 1989
- (20) 『三原田遺跡 II』群馬県企業局 1992

- (21) 『厨谷戸遺跡 I』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第27集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (22) 『厨谷戸遺跡 II』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第40集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1992
- (23) 『分郷八崎遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 北橋村教育委員会 1986
- (24) 『西浦遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第9集 渋川市教育委員会 1986
- (25) 『空沢遺跡』 渋川市文化財発掘調査報告書Ⅲ 渋川市教育委員会 1979
- (26) 『市内遺跡 V』 渋川市発掘調査報告書 第31集 渋川市教育委員会 1992
- (27) 『市内遺跡 VI』 渋川市発掘調査報告書 第33集 渋川市教育委員会 1993
- (28) 『空沢遺跡 第8次』 渋川市発掘調査報告書 第22集 渋川市教育委員会 1989
- (29) 『空沢遺跡 第9次』 渋川市発掘調査報告書 第24集 渋川市教育委員会 1990
- (30) 『空沢遺跡 第10次』 渋川市発掘調査報告書 第27集 渋川市教育委員会 1991
- (31) 『中村遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第13集 渋川市教育委員会 1987
- (32) 『市内遺跡 II』 渋川市発掘調査報告書 第23集 渋川市教育委員会 1989
- (33) 『市内遺跡 III』 渋川市発掘調査報告書 第25集 渋川市教育委員会 1990
- (34) 『中筋遺跡-第5次調査概報』 渋川市発掘調査報告書 第30集 渋川市教育委員会 1991
- (35) 『中筋遺跡 第7次発掘調査報告書』 渋川市発掘調査報告書 第34集 渋川市教育委員会 1993
- (36) 『行幸田山遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第12集 渋川市教育委員会 1987
- (37) 『市内遺跡発掘調査報告書』 渋川市発掘調査報告書 第19集 渋川市教育委員会 1988
- (38) 『中村遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 kc.III 渋川市教育委員会 1985
- (39) 『有馬1遺跡・大久保3遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第26集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (40) 『有馬1遺跡』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第32集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (41) 『有馬東寺跡発掘調査報告書』 渋川市発掘調査報告書 第16集 渋川市教育委員会 1988
- (42) 『有馬系風遺跡 I』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第29集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (43) 『北群馬・渋川の歴史』 北群馬・渋川の歴史編纂委員会 1972
- (44) 石井克己『子持村(火山区)に埋もれている』の遺跡について』『考古学ジャーナル』No.382 1994
- (45) 『坂之下遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第20集 渋川市教育委員会 1988
- (46) 『芝山遺跡』 北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書 第11集 北橋村教育委員会 1993
- (47) 『台津遺跡』 北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書 第14集 北橋村教育委員会 1994
- (48) 『諏訪ノ木遺跡』 渋川市発掘調査報告書V 渋川市教育委員会 1981
- (49) 『石原東・中村日徳田遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第26集 渋川市教育委員会 1991
- (50) 『真壁向山遺跡 V』 北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書 第15集 北橋村教育委員会 1995
- (51) 『福山遺跡』 北橋村埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集 北橋村教育委員会 1989
- (52) 『八木原沖田田遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第32集 渋川市教育委員会 1993
- (53) 『八木原沖田VI遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第49集 渋川市教育委員会 1995
- (54) 『平石遺跡群発掘調査報告書』 吉岡村文化財調査報告書 第1集 吉岡村教育委員会 1988
- (55) 『平田中原・南原遺跡』 渋川市発掘調査報告書 第41集 渋川市教育委員会 群馬県企業局 1994
- (56) 『金竹西遺跡』 吉岡町文化財調査報告書 第5集 吉岡町教育委員会 1994
- (57) 『別分八幡下遺跡・中府神田遺跡』 榑東村埋蔵文化財発掘調査報告書 第5集 榑東村教育委員会 1987
- (58) 『上毛及上毛人』 第134号 上毛新聞社 1973
- (59) 『七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡』 吉岡村教育委員会 1986
- (60) 『上毛古墳総覧』『群馬県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第5輯 群馬県 1998
- (61) 尾崎喜左雄『伊模古墳』『群馬県史』資料編3 1981
- (62) 松本浩一『有藤1号古墳』『群馬県史』資料編3 1981
- (63) 石川正之助『有藤2号古墳』『群馬県史』資料編3 1981
- (64) 『群馬県の遺跡』群馬県遺跡台帳作成委員会 1963
- (65) 『群馬用水土地改良地域埋蔵文化財発掘調査報告書』群馬県教育委員会 昭和44年度 1970
- (66) 子持村教育委員会石井克己氏から御指示を受けた。
- (67) 『調査台帳』『上毛古墳総覧』調査原本 群馬県教育委員会保管
- (68) 『白井大宮遺跡』群馬県企業局野水池関係発掘調査報告書 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1993
- (69) 『有馬系風遺跡 I』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第29集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (70) 『有馬系風遺跡 II』 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵文化財調査報告書 第35集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989
- (71) 『有馬系風遺跡(神田地区)』 渋川市発掘調査報告書 第7集 渋川市教育委員会 1983
- (72) 『下箱田向山遺跡』一般国道17号(真壁交差点改良)工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1990
- (73) 大塚昌彦『坂下古墳群出土の巫女人物輪(双耳杯を掲げ持つ女)について』『群馬文化』 第217号 1989
- (74) 相沢貞順、中村富夫『群馬県北橋村分郷八崎弥生住居跡』『考古学雑誌』 第59巻第1号 1973

### 第3章 検出された遺構と遺物

白井南中道遺跡での1～5区までのHr-FP層上の調査において検出された遺構のなかで、今回報告の遺構は、竪穴式住居、掘立柱建物、土坑、ピットである。

なお、3～4区にかけて、1層を重機によって除去するとⅢ層のHr-FP層ではなくルーム層が露出する部分帯が認められた。これは同箇所が自然地形的に馬の背状に高まっており、いつの頃か削平されたものと思われる。実際に3、4区のルーム露出部分の北西側は地形が西に傾斜しており、3区の露出部分の南東側も南東方向への傾斜が認められている。バイパス路線の西側ではルーム露出部分がどのように走行していくか不明確だが、白井宿までの間に谷地が入る。東側では圃場整備で若干の変形はあるにしろ、ルーム露出部分は3～4区の東側にみられる土地の段差に続いていくと考えられる。ルーム探掘坑（「白井遺跡群—中世編—」で報告済）は同箇所における良質なルーム層の高まりを狙って掘削したものであろう。また、1区道東にはHr-FA下黒色土がHr-FP層と同レベルで露出する箇所があり、同所も地形の若干の高まりがあったと思われる。

遺構は、竪穴住居62軒、掘立柱建物13棟、土坑15基、ピット1147基が検出された。奈良・平安時代を中心とする遺構は1～2区だけに分布し、3～5区では認められない。3～5区の土坑は住居埋没土と明確な違いをみせている。ピットと思われたものも埋没土の観察や半壊調査の結果、木の根の擾乱であったり、今回報告分にあたらないと判断されている。これは3～5区における近・現代と思われる土坑の混入土器や遺構外出土器の少なさからも頷けることである。3～5区では陶磁器の比率が多くなりそれらを含めた遺物量はバンケース1/2弱で土坑に混入した土器量も同様である。



第8図 白井南中道遺跡遺構位置図 (S=1/3,000)

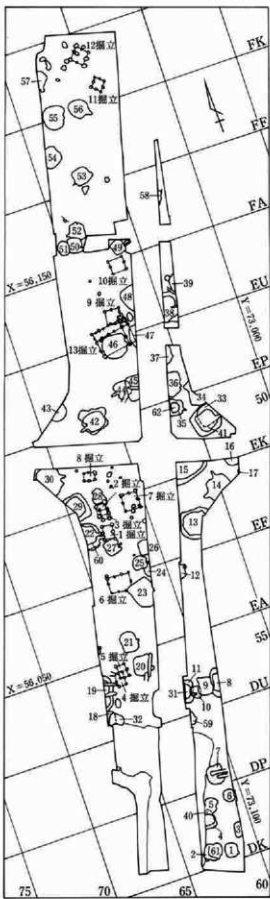
## 第1節 竪穴住居

本遺跡における竪穴住居は62軒検出された。1区では36軒、2区では26軒の分布が見られる。さらに3号住居と二位屋遺跡との境で、鯉沢バイパスに関わる側溝工事の際の断面に竪穴住居の断面が認められている。遺跡の境の農道下と安全確保のための犬走り幅に位置していたものである。また、大多数の住居はHr-FA下黒色土中までは掘り方が及んでおり、8～11号住居と12号住居間にみられるHr-FA下黒色土露出部分には掘り方掘削の痕跡がないことから、同箇所には住居が作られなかったことが分かる。本遺跡では二位屋遺跡2区にみられるような著しい重複関係はないが、1区道東8～11・31号住居が複数の重複関係を持っている。比較的大型の住居は1区北側～2区南側に分布していることが窺える。

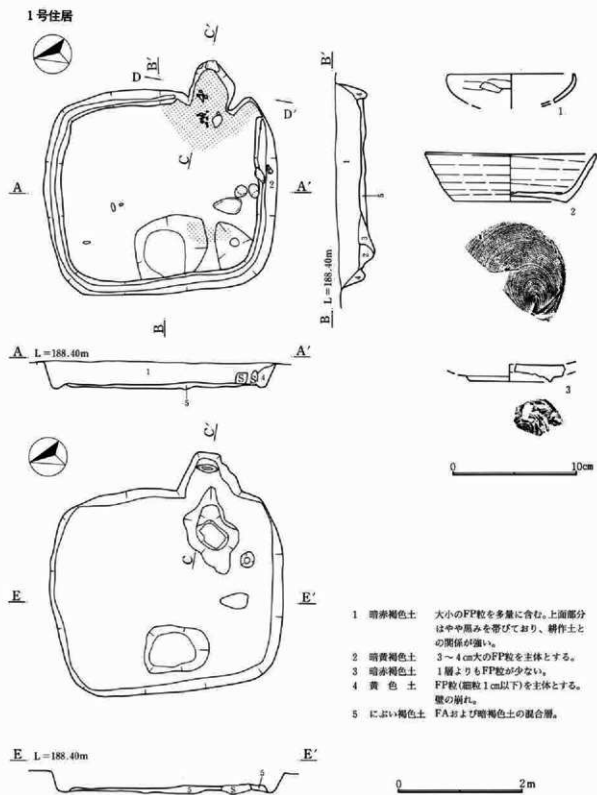
形態については、壁に中段テラス状の施設を有する住居が8、15、19、22、29、38、41、42号住居の8軒を数える。特に19号住居は壁に石を積み上げた状態が認められている。また、壁際に石列を有するものや石組竈を持つ住居が検出されている。

さらに9号住居と34号住居は鉄生産関連遺構と判断され、34号住居からは炉等も認められている。23号住居は焼失住居であり、建築用材のデータが得られている。また、複数の住居で未固結凝灰岩あるいは土塊の可能性のあるものを切り出して整形し、竈の構築材に用いている例が認められた。

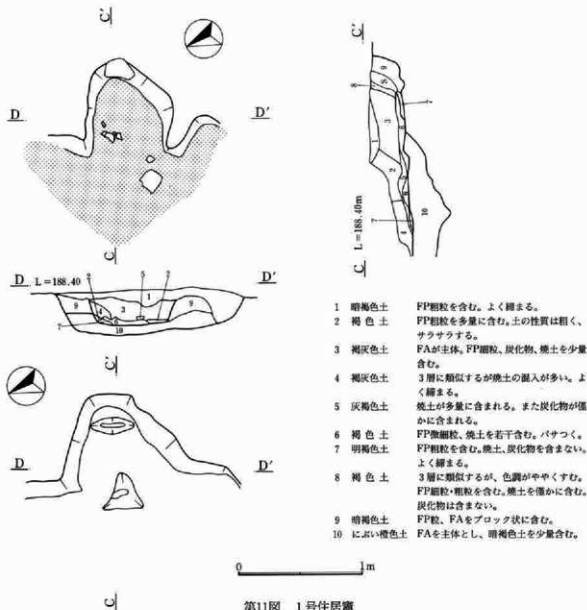
遺物では、23号住居埋没土中から出土した畿内産土器片、33号住居出土の八棱を有する銅製鈴が特筆される。鉄製品の出土も顕著であったが、刀子が屈曲された姿で出土する事例が複数認められた。14号住居から出土した鞘尻金具や51号住居出土の足金物、15号住居出土の飾金具なども他遺跡での出土例の少ない遺物であろう。34号住居では埋没土中に須惠器を中心とした多量の土器の廃棄が認められている。その中には円面甕の破片がある。破損後再利用したと思われ、内面に朱の痕跡が見られる。



第9図 1区、2区遺構位置図 (S=1/1,000)



第10図 1号住居及び出土遺物



第11図 1号住居壙

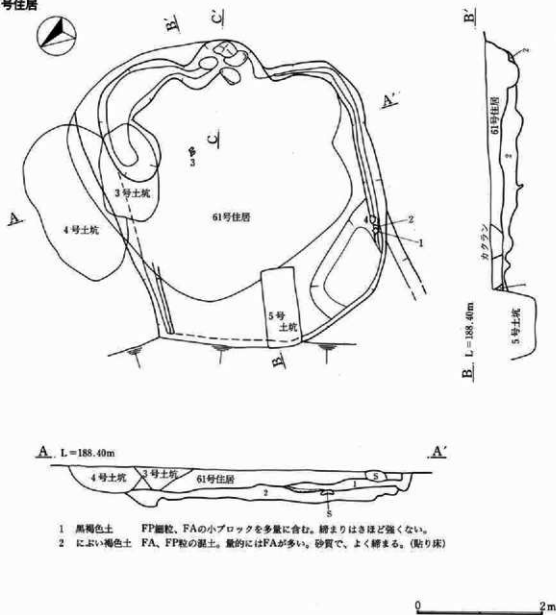
## 1号住居

位置 DK-61・62、DL-61・62 平面形状 隅丸方形 残存深度 壁の高さは床面まで25~29cmで、周溝底面まで30~43.5cmを測る。重複住居 単独で検出された。規模 東辺は3.50m、西辺は3.40m、南辺は3.00m、北辺は3.00mを測る。主軸方位 N-108°-E 埋没土 Hr-FP粒を多量に含む土であり、壁際は汚れないHr-FP粒が流れこんでいる。壁の状況 床面から、東壁から北壁は108°~109°、西壁は115°、南壁は119°の角度で立ち上がる。壁体を構築した痕跡は検出できなかった。床面 面積は9.414m<sup>2</sup>を測る。Hr-FAと暗褐色土の混合土を貼り床としている。南壁近くに縦45cm、横27cm大の偏平な河原石が設置されており、何らかの工作台等に使用したと考えられる。西壁際床面には浅い落ち込みが見られる。周溝 壙を除いて全周する。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 Hr-FA層上面まで掘削している。住居の南東壁近くと、西辺壁近くに掘り込みがみられる。壙位置 東辺南隅 壙方位 N-117°-E 壙規模 全長は、1.50m(屋外長0.70m、屋内長0.80m)、袖部幅0.70m、燃燒部幅0.55mを測る。壙形状その他 煙道外

端で斜め方向に扁平な河原石が据えられ、袖近くに構築用と思われる河原石が見られる。遺物 須惠器杯がほぼ床面密着で出土しており、埋没土中から土師器杯が出土している。底部回転糸切りの須惠器杯は形状が古相を示している。

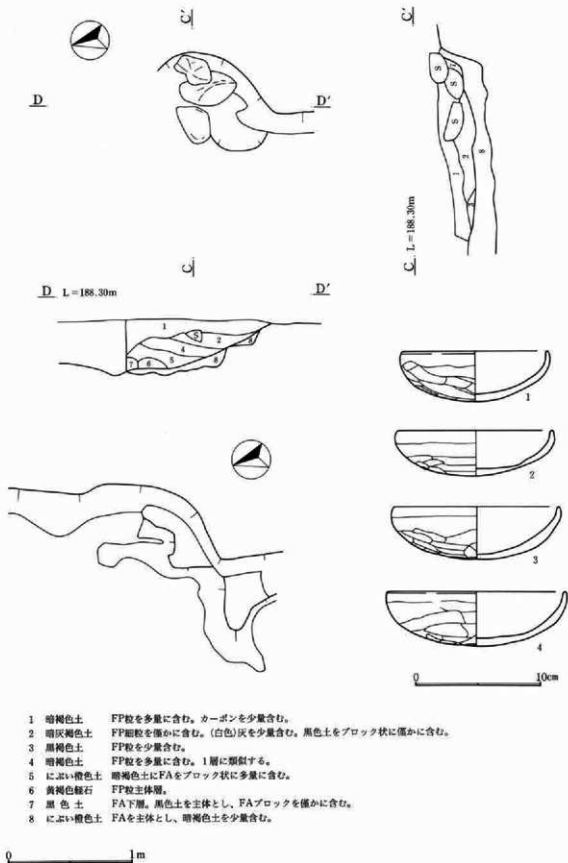
所 見 出土した土器の特徴から、本住居の時期は9世紀前半としておきたい。

2号住居



第12図 2号住居





第13図 2号住居竪穴及び出土遺物

## 2号住居

**位置** DK-62・63、DL-62・63

**平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで9～15.5cmで、周溝底面まで15～22cmを測る。

**重複住居** 61号住居と重複関係にあり、2号住居の埋没土は61号住居に掘り込まれている。さらに西側は二位屋城1号堀に破壊されている。

**規模** 東辺は4.30m、西辺は3.90m、南辺は4.00m、北辺は4.30mを測る。

**主軸方位** N-109°-E

**埋没土** 61号住居の掘り込みによって大部分失われているが、黒褐色系の色調を呈する土壌で埋没している。

**壁の状況** 床面から、東壁は115°、南壁は141°、北壁は120°の角度で立ち上がる。壁体の構築等の痕跡はみられない。南壁は西側周溝が途切れる部分で一部北上する部分もあるがより西へ伸びる。

**床面** 面積は16.650m<sup>2</sup>を測る。貼り床はHr-FAを主体として作られる。床面に炭化物の分布がみられる。

**周溝** 検出部分の北辺の一部～東辺でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 南壁際に等間隔に並ぶピットがあるが、他ではピットは検出されていない。深さは、掘り方より1号ピットが22cm、2号ピットが29cm、3号ピットが37cmを測る。

**掘り方** Hr-FA層中まで掘削している。細かな凹凸がみられ、南壁際にピットが3基ほぼ等間隔で検出された。

**竈位置** 東辺中央やや南寄り

**竈方位** N-125°-E

**竈規模** 全長は、推定0.80m、袖幅は推定1.30mを測る。

**竈形状その他** 構築に使用したと思われる河原石が認められるが、旧状をとどめていない。

**遺物** 南壁周溝付近に土師器杯が4個体集中して出土した。その一部は61号住居範囲出土のものと同接関係にある。

**所見** 土師器杯の4個体はすべて同じ様相を示しており、8世紀前半の年代が与えられる。

## 61号住居

**位置** DK-62・63、DL-62・63 **平面形状** 隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで29.6～32cmで、周溝底面まで46.5～50.6cmを測る。 **重複住居** 2号住居と重複関係にあり、2号住居の埋没土を掘り込んで作られている。北側は3号、4号土坑に破壊されている。

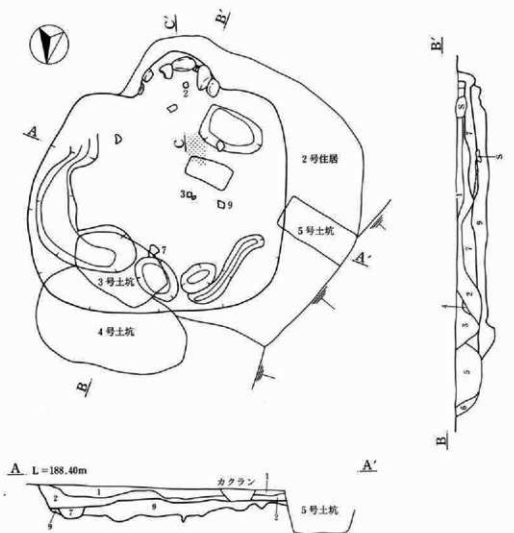
**規模** 東辺は3.20m、西辺は3.30m、南辺は3.40m、北辺は3.80mを測る。 **主軸方位** N-179°-E **埋没土** 暗褐色系の色調の土壌で埋没している。

**壁の状況** 壁の残存部では東壁から115°の角度で立ち上がる。

**床面** 面積は13.401m<sup>2</sup>を測る。一部2号住居の床面を共有している。床面の一部に炭化物の分布が認められる。

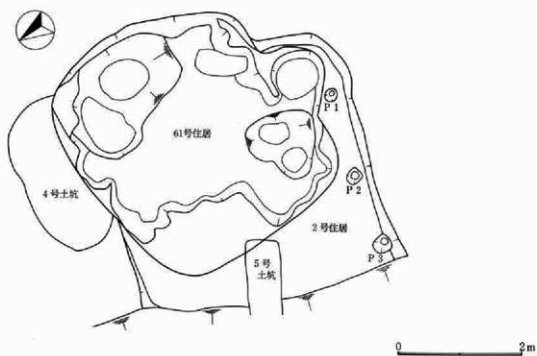
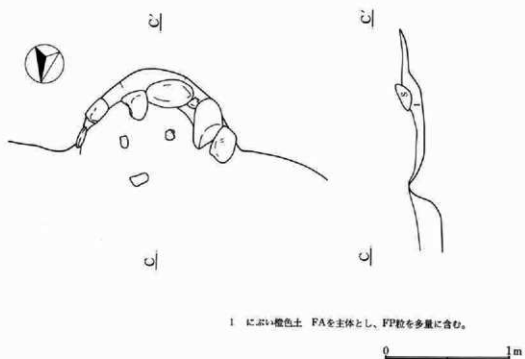
**周溝** 住居東辺と北西のコーナー部分にみられる。東辺から北辺の周溝については一部2号住居との共有あるいは調査時の混同の可能性がある。2号住居の周溝との分離判断は困難である。

## 61号住居

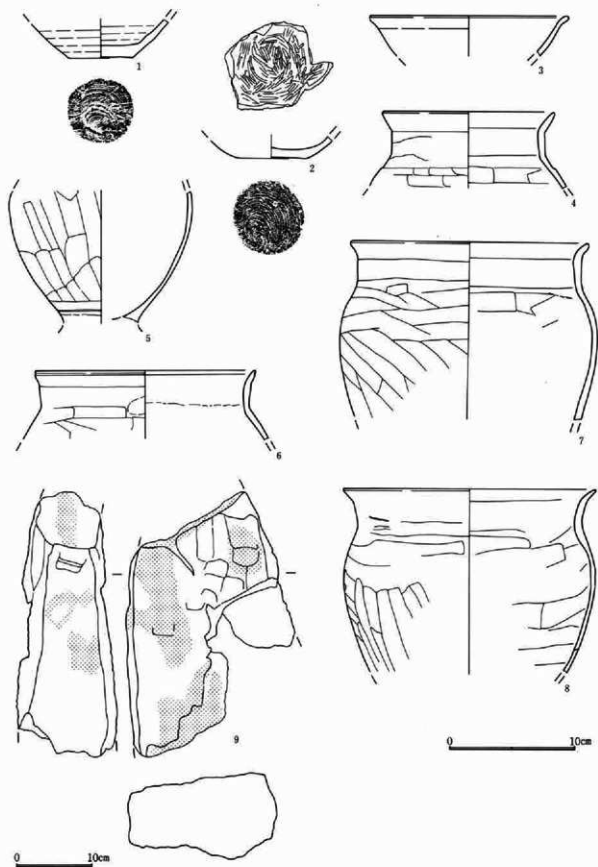


- 1 暗褐色土 FP粗粒～4cm大のFP粒を多量に含む。粒子が粗くサラつく。よく締まる。
- 2 暗褐色土 1層と同様であるがFAの混入があるためやや粒子が細かくサラサラする。締まりはよい。
- 3 暗褐色土 細かいFP粒を多量に含む。締まりは弱い。(3号土坑埋土)
- 4 黄褐色土 細かいFP粒を主体とする。(3号土坑埋土)
- 5 暗褐色土 3～4cm大のFP粒を主として充填する。(4号土坑埋土)
- 6 褐色土 やや細かいFP粒を主とする。壁の一部であるFP層の崩壊による流入である。(4号土坑埋土)
- 7 黒褐色土 FP粗粒、FAの小ブロックを多量に含む。締まりはさほど強くない。
- 8 におい褐色土 FAを主体とし、FP粒を多量に含む。

第14図 61号住居



第15図 61号住居竈及び2・61号住居掘り方



第16図 61号住居出土遺物

**貯蔵穴** 竈右袖近辺に掘り込みがみられたが遺物の出土はなかった。規模は、99×66cm、深さは23～33cmを測る。 **柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土中まで掘削しており、特に北、南壁際に大きな掘り込みがみられる。

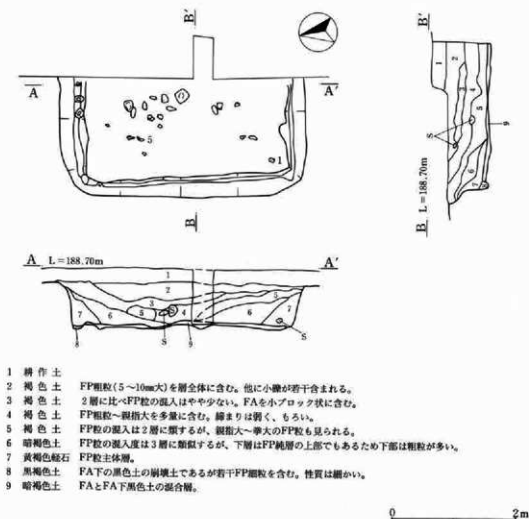
**竈位置** 南辺中央 **竈方位** N-176°-E

**竈規模** 全長は、0.80m、袖幅推定1.40mを測る。 **竈形状その他** 石の使用は、左右袖～煙道に認められる。袖の痕跡は不明であるが、壁際に河原石を設置している。特に左側では扁平な河原石を2個直立した状態で据えている。

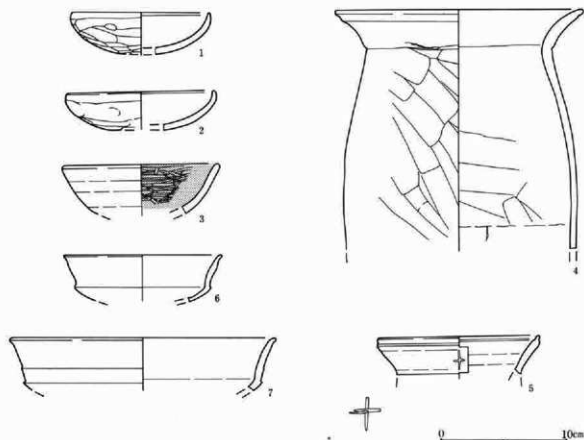
**遺物** 須恵器杯及び碗、土師器甕が出土している。土師器甕はすべて口縁部が「コ」字状を呈している。また、未固結凝灰岩の竈構築材が出土しており一部は4号住居出土の竈構築材と接合関係にある。

**所見** 出土した土器の特徴から、本住居の時期は9世紀後半と考えられる。

### 3号住居



第17図 3号住居

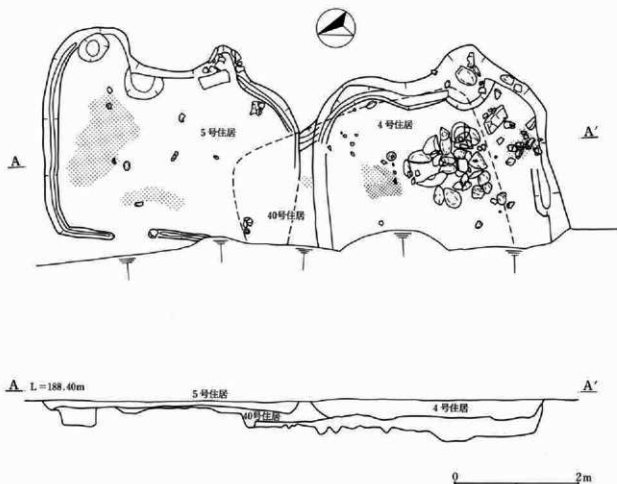


第18図 3号住居出土遺物

## 3号住居

**位置** DL-60-61, DM-60-61 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで53~57cmで、周溝底面まで59~64cmを測る。 **重複住居** 単独で検出された。 **規模** 西辺は3.80m、南辺は残存部分で1.80m、北辺は残存部分で1.80mを測る。北辺周溝中に小ピットがみられる。 **主軸方位** N-98°-E **埋没土** 褐色系の色調でHr-FP粒を多量に含む土壌である。壁隙にはビュアなHr-FP粒による流れ込みがみられる。 **壁の状況** 床面から、西壁は90°、南壁は105°、北壁は95°の角度で立ち上がる。西壁は変換点からは155°を測る。 **床面** 面積は5.790㎡を測る。薄くHr-FA主体土により床を作る。 **周溝** 検出部分の全体でみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 図示できなかったが、細かい凹凸がみられる他はほぼ平坦である。Hr-FA層下の黒色土中まで掘削している。 **竈位置** 検出されなかった。調査時には安全を確保するためバイパス用地幅杭から若干内側に調査区を設定したが、バイパス建設工事に伴う側溝工事の際3号住居断面に河原石と焼土層がみられたことから東壁に付設されたと判断できる。 **遺物** 埋没土中から内面黒色処理の土師器杯を出土している。床面から14.5cm間隔において口縁部外面に焼成前の「+」の刻書を有する須恵器壺が出土している。刻書の横線は引き直しをしている。図示した土師器壺は前述の竈と思われる焼土層中からの出土である。また、模倣杯破片が埋没土中に混入している。 **所見** 土師器杯が隅りだしの稜線を持たないこと、壺の形態から本住居の時期は8世紀前半と考えられる。

4・5・40号住居



第19図 4・5・40号住居

4号住居

位置 DM-62・63、DN-62 平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで58cmを測る。

重複住居 40号住居と重複関係にあり、40号住居の埋没土を一部掘り込んで作られている。西側は二層屋城1号畑により破壊されている。5号住居と隣接している。

規模 東辺は3.30m、南辺は残存部分で2.80m、北辺は残存部分で2.50mを測る。

主軸方位 N-108°-E

埋没土 黒色系色調で土質の粗い土壌である。

壁の状況 床面から、東壁は130°、南壁は121°、北壁は155°の角度で立ち上がる。南東コーナーで偏平な河原石2個体を壁に貼っている状態が認められる。

床面 面積は8.412m<sup>2</sup>を測る。一部に焼土と炭化物の分布が見られる。



**周溝** 住居北辺と南東のコーナー部分でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土まで掘削している。中央～南側に大きな掘り込みが2ヶ所みられる。

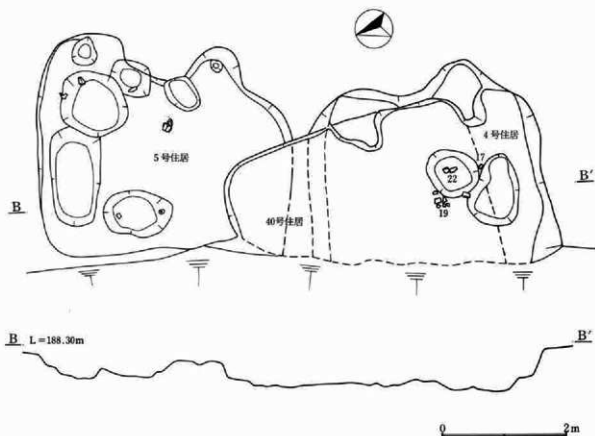
**竪位置** 東辺南隅 **竪方位** N-109°-E

**竪規模** 全長は1.05m、袖部幅1.20m、燃焼部幅0.70mを測る。

**竪形状その他** 煙道外端部に扁平な河原石を斜め方向に置いている。

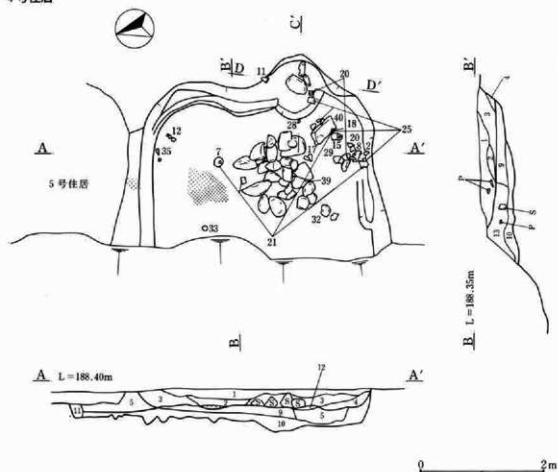
**遺物** 中央部分に河原石が多数集中して出土した。土器では灰軸皿の模倣須恵器皿、耳皿破片、黒色処理の須恵器碗、灰軸碗が出土している。鉄器では紡錘車、刀子などがあり、未固結凝灰岩の竪構築材がみられる。土師器甕は「コ」字状の口縁部を呈し、須恵器碗の底部は回転糸切りである。

**所見** 出土した土器の様相から、本住居は9世紀後半には構築されていたと考えられる。なお、土器の床面からの数値において、認定した床面より上での出土にもかかわらず、マイナスの数値になる資料が存在した。3、8、15、18、20、21、25である。また、床面密着とされながら他の土器とは時期が異なる27、28、29等の一群が認められた。



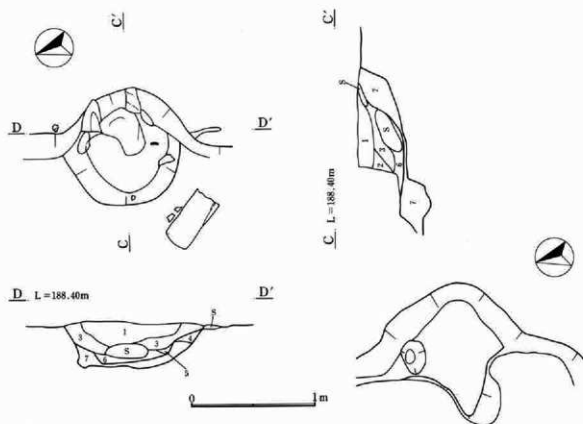
第20図 4・5・40号住居掘り方

4号住居

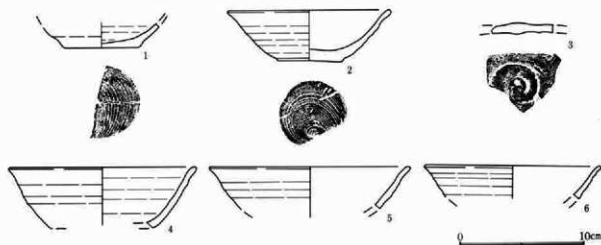


- 1 暗褐色土 FP粒が全体的に含まれるが、5号住居1層に比べ量的にはやや少ない。土の性質は粗い。
- 2 黒褐色土 炭化物が全体的に含まれる。FP粗粒も含み、やや粘性がある。
- 3 暗褐色土 粗粒および4cm大までFP粒を多く含む。土の性質は粗く、ザラつく。締まりはさほど強くない。
- 4 暗褐色土 顆粒大～特大のFP粒を含むが、量的に多くなる。
- 5 暗褐色土 全体的には細かいFP粒が多量に含まれる。また僅かに焼土、炭化物が見られる。締まりはさほど強くない。
- 6 褐色土 FP粒及びFAが含まれる。
- 7 黒色土 FP粒を少量含む。
- 8 褐色土 FP粒を主体とする。締まりは弱くもろい。
- 9 褐色土 FP粒(5mm大)を主に全体的に含む。若干焼土も含まれる。
- 10 暗褐色土 FP粒及びFAを多量に含み、若干炭化物を含む。
- 11 明黄褐色土 FP粒主体。
- 12 褐色土 FA主体でFP粒を少量含む。貼り床。
- 13 暗褐色土 FP粒を全体的に多く含み、土質は粗い。2層より色調はやや明るい。

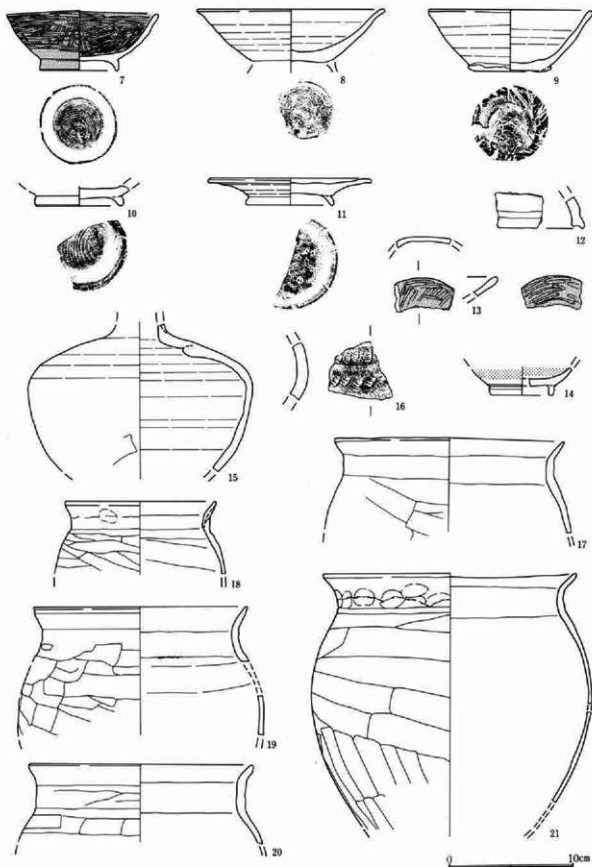
第21図 4号住居



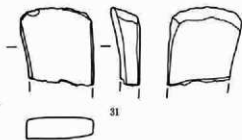
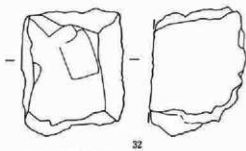
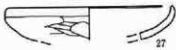
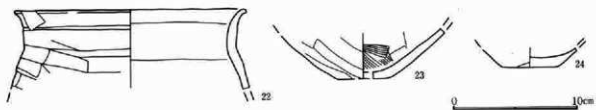
- 1 黒褐色土 FP粒、小石等を含む。
- 2 黒褐色土 FAが小ブロック状に含まれる。やや湿土、炭化物が見られる。
- 3 黒褐色土 FPの粗粒を少量含むが、土はやや細かい。
- 4 暗褐色土 土の粒子は細かく、FAを少量含む。締まりはよい。
- 5 黒褐色土 炭化物を含む。土質は細かい。
- 6 赤褐色土 炭土を多量に含む。また少量ではあるが、FAがブロック状に認められる。
- 7 暗褐色土 FP粒を主体とする。もろく弱い。



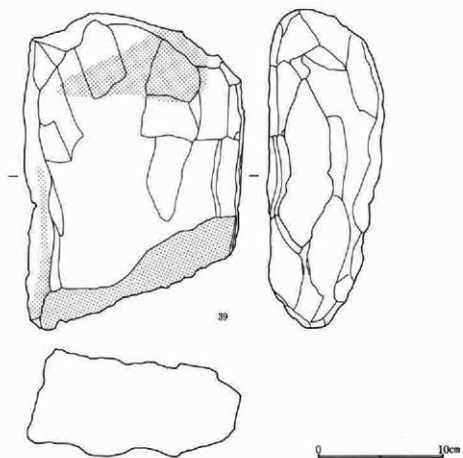
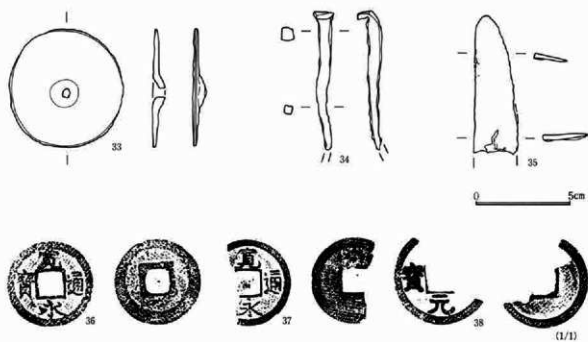
第22図 4号住居竪穴及び出土遺物(1)



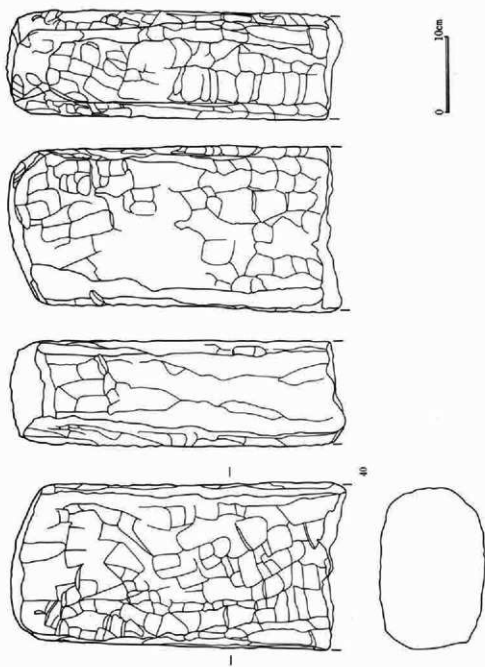
第23図 4号住居出土遺物(2)



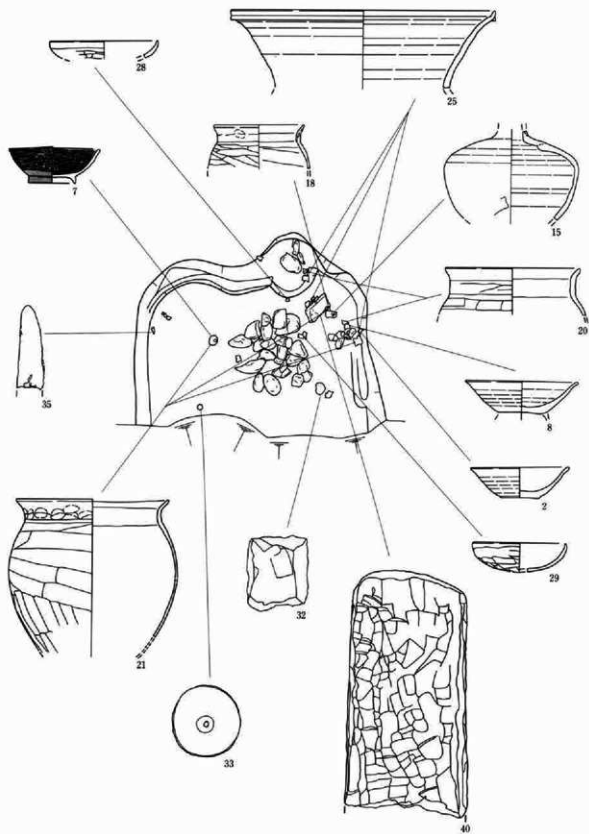
第24图 4号住居出土遺物(3)



第25図 4号住居出土遺物(4)



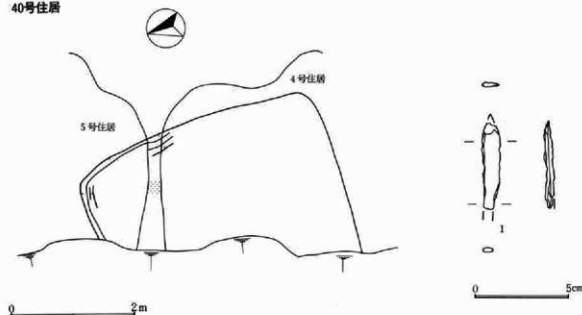
第26図 4号住居出土遺物(5)



第27図 4号住居遺物出土位置



## 40号住居



第28図 40号住居及び出土遺物

## 40号住居

位置 DM-62、DN-62

平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで20~29cmを測る。重複住居 4号住居、5号住居と重複関係にあり、40号住居の埋没土は4号住居、5号住居に掘り込まれている。西側は二位屋城1号堀により破壊されている。

規模 東辺は4.00m、南辺は残存部分で2.65m、北辺は残存部分で1.50mを測る。

主軸方位 N-90°-E 埋没土 4・5号住居により掘り込まれて僅かしか残存しないが、黒色系の色調を呈する土壌により埋没している。周溝はビュアなHr-FP粒による流れ込みによって埋没している。

壁の状況 床面から北壁は115°の角度で立ち上がる。

床面 面積は8.334㎡を測る。一部4号住居と床面を共有する可能性がある。

周溝 住居北東のコーナー部分および北辺に溝が巡っていると推測される。

貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

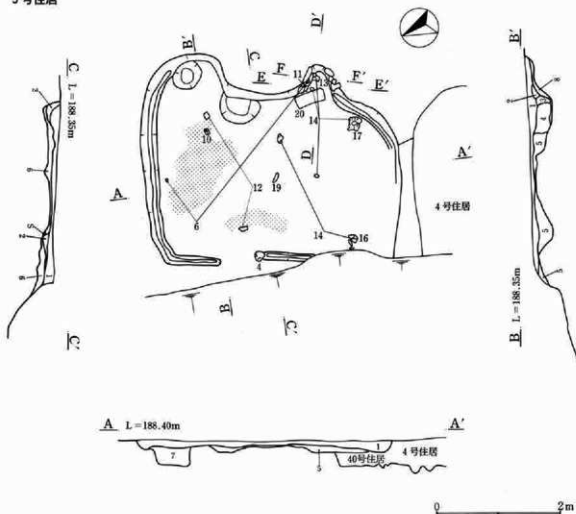
掘り方 Hr-FA層下黒色土まで掘削している。住居南部分に大きな掘り込みがみられる。

竈 検出できなかった。

遺物 鉄器が1点出土しているのみである。

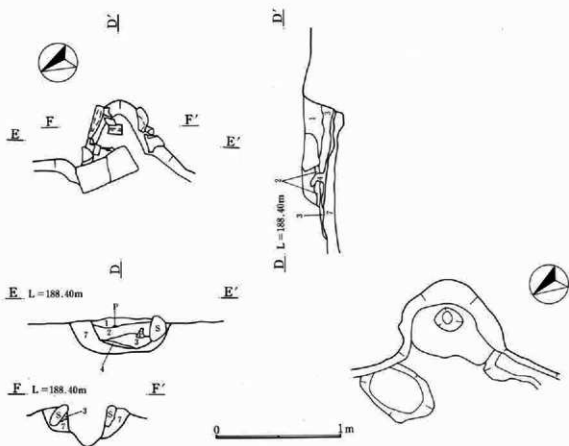
所見 土器の出土を見ず、詳細は不明であるが、4号住居の時期が9世紀後半であり、それ以前とするのみである。ただし、4号住居の時期の異なる土器の一群が40号住居の土器の可能性があるとすれば、8世紀前半代の時期が考えられる。

5号住居

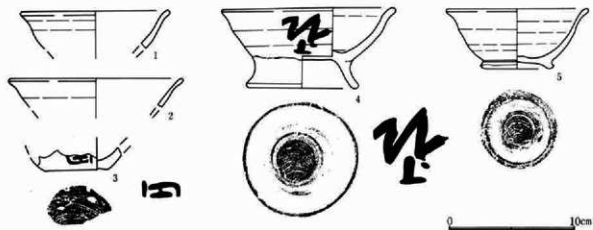


- |         |  |
|---------|--|
| 1 暗褐色土  | 粗粒～縦指大のFP粒を多量に含む。土の性質は粗く、締まりはよい。またFAの小ブロックが若干含まれる。 |
| 2 褐色土   | FP粒及びFAが含まれる。                                      |
| 3 黒色土   | FP粒を少量含む。  |
| 4 褐色土   | FP粒を主体とする。締まりは弱くもろい。                               |
| 5 褐色土   | FP粒(5mm大)を主に全体的に含む。若干焼土も含まれる。                      |
| 6 暗褐色土  | FP粒及びFAを多量に含む。若干炭化物を含む。                            |
| 7 暗褐色土  | FAを多量に含む。FP粒も含む。硬く締まる。                             |
| 8 濃い褐色土 | FAを主体とし、FP粒を少量含む。                                  |

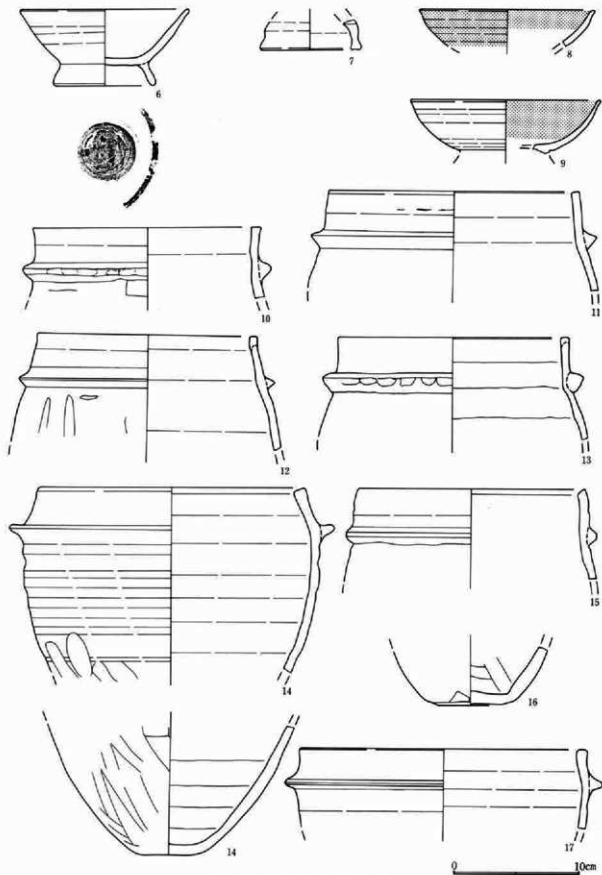
第29図 5号住居



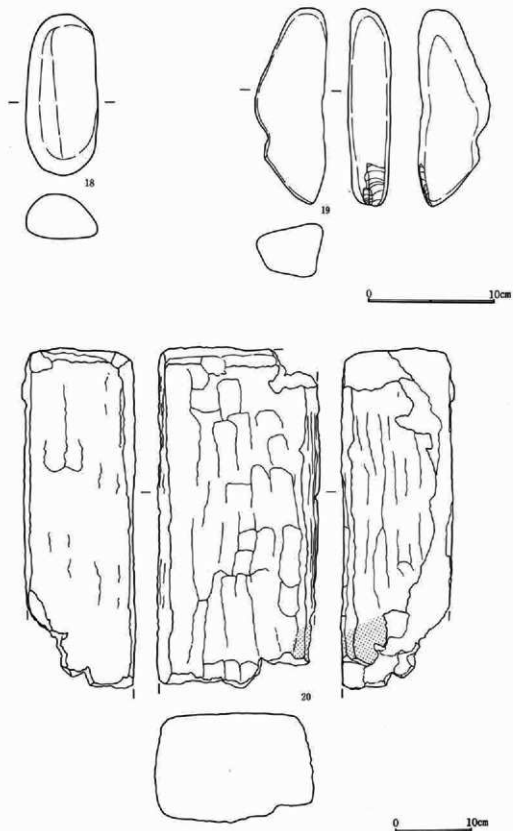
- 1 暗褐色土 FP細粒・粗粒を含む。
- 2 明褐色土 FP粒主体で焼土、炭化物を少量含む。FP細粒を僅かに含む。
- 3 黒褐色土 炭化物を多量に含む。微細粒からなる。
- 4 明褐色土 FA主体で炭化物粒を僅かに含む。
- 5 白黄色土 FP粒。
- 6 明褐色土 2層に似るが焼土、炭化物をほとんど含まない。FA主体。
- 7 暗褐色土 土質は粗く、よく締まる。FP粒を含む。



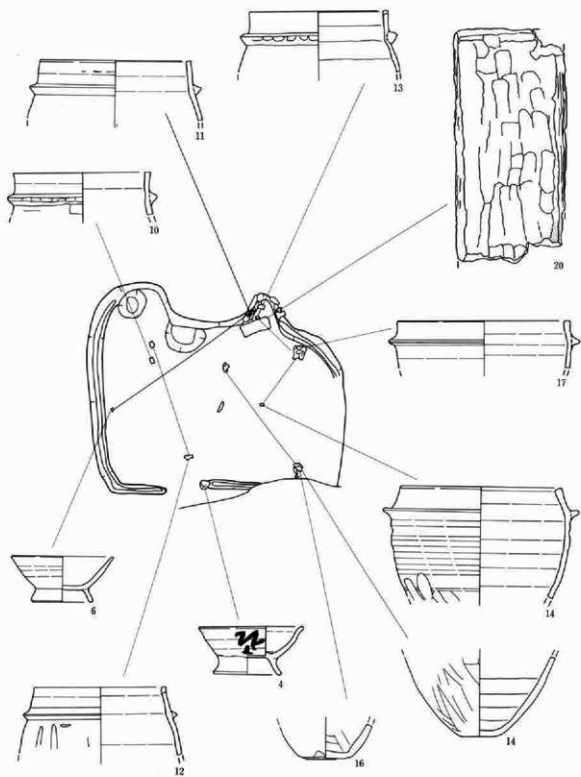
第30図 5号住居竈及び出土遺物(1)



第31図 5号住居出土遺物(2)



第32図 5号住居出土遺物(3)



第33図 5号住居遺物出土位置

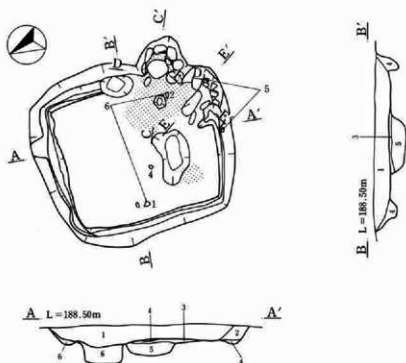
## 5号住居

**位置** DN-61-62, DO-61-62 **平面形状** 北東隅が張り出している隅丸方形 **残存深度** 壁の高さは床面まで10~15cmで、周溝底面まで15~18cmを測る。西辺は残存せず周溝によって住居プランを知るのみである。 **重複住居** 40号住居と重複関係にあり、40号住居の埋没土を一部掘り込んで作られている。南西コーナー付近を二位屋棟1号堀に破壊されている。4号住居と隣接している。 **規模** 東辺は4.05m、西辺は残存部分で3.80m、南辺は残存部分で2.40m、北辺は3.30mを測る。 **主軸方位** N-113°-E **埋没土** 黒色系色調を呈する土壌である。 **壁の状況** 床面から、東壁は126°、南壁は123°、北壁は121°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材等の痕跡は見られなかった。 **床面** 面積は10.161㎡を測る。Hr-FP粒を含む褐色土を貼って床面としている。一部にカーボン、炭化物の分布が見られる。 **周溝** 住居北辺の一部と北東のコーナー部分でみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** Hr-FA層上位まで掘り込んでいる。西壁から北壁・東壁の近辺に大きな掘り込みがみられる。 **電位位置** 東辺南隅 **電方位** N-116°-E **電規模** 全長は、推定0.90m(屋外長推定0.80m)、袖部幅推定0.95m、燃焼部幅0.35mを測る。 **電形状その他** 袖は明確ではないが、煙道壁には河原石及びその割れ石を直立させて使用している。天井を構築していたと推定される未固結凝灰岩(残存値で縦44.8cm、横21.3cm、厚さ14.5cm)が残る。 **遺物** 墨書土器が2点出土している。3は外面逆位に書かれ、文字は一部欠損している。4は酸化焰焼成の足高台付椀で外面正位で「得上」と書かれている。他に羽釜、灰釉椀、須恵器椀、甕構築材が出土している。 **所見** 出土した土器の様相から、本住居の時期は10世紀後半と考えられる。

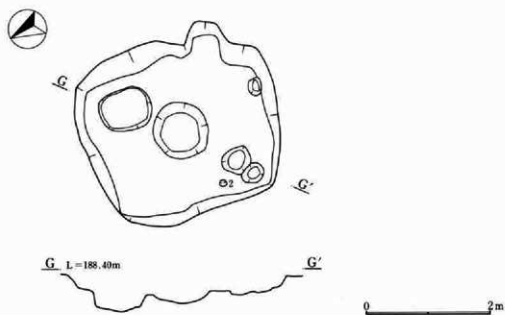
## 6号住居

**位置** DN-60-61, DO-60-61 **平面形状** 隅丸方形 **残存深度** 壁の高さは床面まで15~26.8cmで、周溝底面まで20~27.5cmを測る。 **重複住居** 単独で検出された。 **規模** 東辺は3.00m、西辺は2.65m、南辺は2.30m、北辺は2.60mを測る。 **主軸方位** N-120°-E **埋没土** 黒色系色調の土壌が主体で周溝はビュアなHr-FP粒によって埋没している。 **壁の状況** 床面から、東壁は90°、西壁は110°、南壁は130°、北壁は137°の角度で立ち上がる。東壁は変換点からは135°を測る。壁体の構築材等の痕跡は見られなかった。 **床面** 面積は5.994㎡を測る。シルト質のHr-FA主体土を貼って床としている。円形掘り込みはHr-FPおよびHr-FA、炭化物を含む土壌で埋められている。 **周溝** 電を除く全体にみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 北東コーナーの掘り込みはHr-FA下黒色土を掘り抜いている。 **電位位置** 2基検出され、1号電は東辺中央や南寄りに、2号電は東辺南隅に位置する。 **電方位** 1号電 N-126°-E 2号電 N-160°-E **電規模** 1号電 全長は、1.50m(屋外長0.55m、屋内長0.95m)、袖部幅推定0.85m、燃焼部幅推定0.40mを測る。 2号電 全長は、推定0.45mを測る。 **電形状その他** 1号電は、袖から壁体すべてに偏平な河原石を直立して用いている。一部に角閃石安山岩がみられる。中央に偏平で円形を呈する河原石が落ち込んでいる。2号電も同様の措置がなされている。長楕円形の河原石が落ち込んでいる。 **遺物** 羽釜、須恵器椀が出土しており、外面横位に「㊦」の一部と推定される墨書破片がみられる。掘り方からも須恵器椀が出土しており、底部は回転糸切りである。 **所見** 出土した土器の特徴から、10世紀後半の時期が考えられる。

6号住居

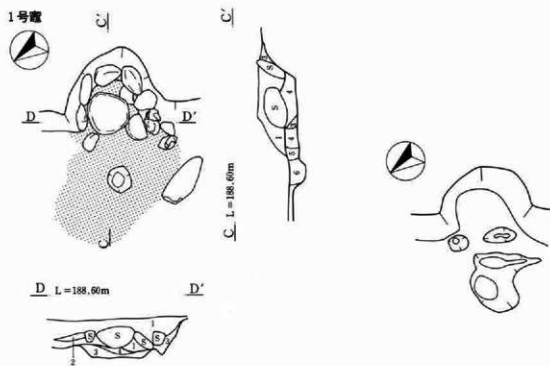


- 1 褐色土 FP粒を多量に含む。締まりは弱くもろい。
- 2 暗褐色土 1層に比べ黒色土の混入が多く、FP粒の量も少なくなる。下部に炭化物が薄く入る。
- 3 灰褐色土 シルト質を呈したFA主体層。貼り床。
- 4 黄褐色軽石 やや褐色に濁っているが、純層に近いFPの崩落である。締まりはもろい。
- 5 褐色土 FP粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土 黒褐色土にFP粒、FA及び炭化物を含む。

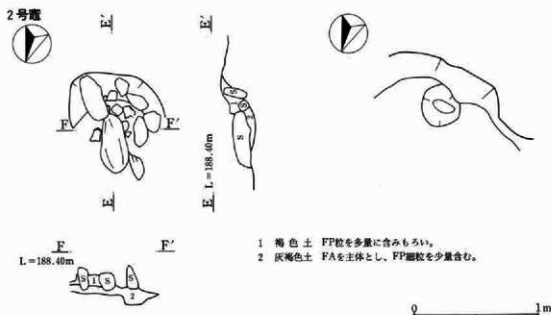


第34図 6号住居





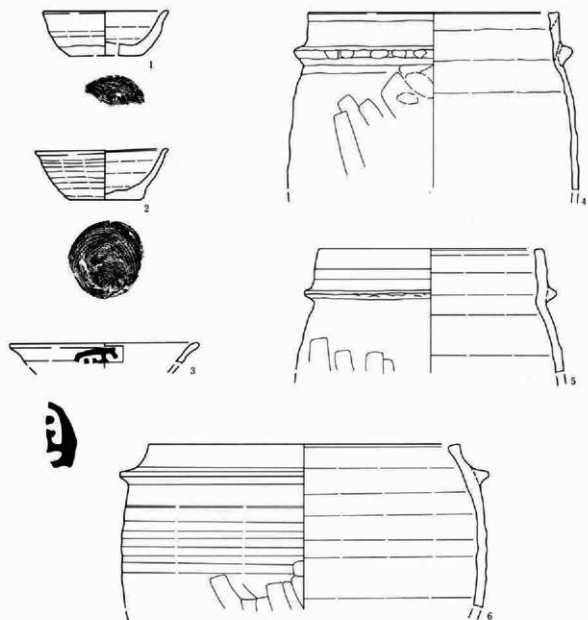
- 1 黒褐色土 炭化物を含むため黒色味が強い。10mmほどのFP粒を多量に含む。締まりは弱い。
- 2 黒褐色土 FA及び炭化物を多量に含む。土質は細かい。
- 3 灰褐色土 FAのブロック、炭化物を若干含む。
- 4 黒褐色土 2層に類するが、FAの混入が若干多い。
- 5 灰褐色土 FAを主体とし、FP細粒を少量含む。
- 6 暗褐色土 土質は細かくFP粒を多量に含む。



- 1 褐色土 FP粒を多量に含みもろい。
- 2 灰褐色土 FAを主体とし、FP細粒を少量含む。

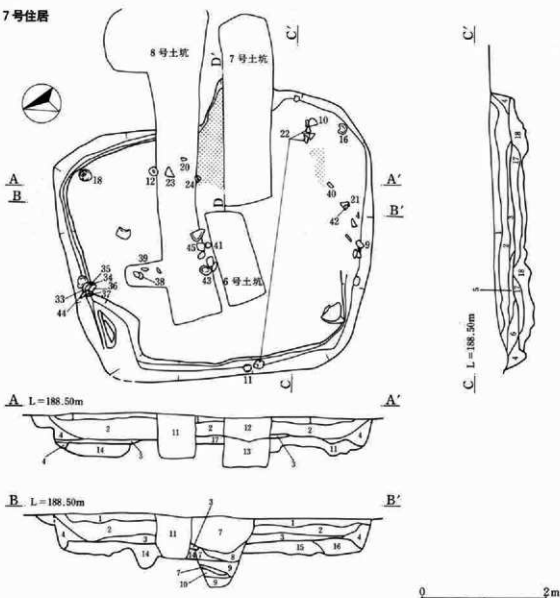
0 1m

第35図 6号住居竈



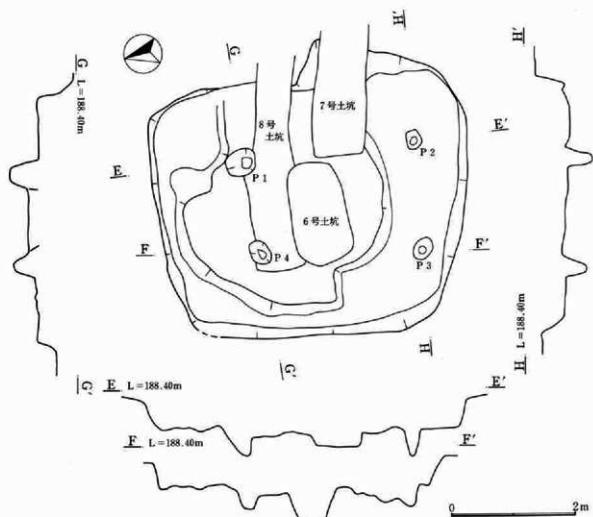
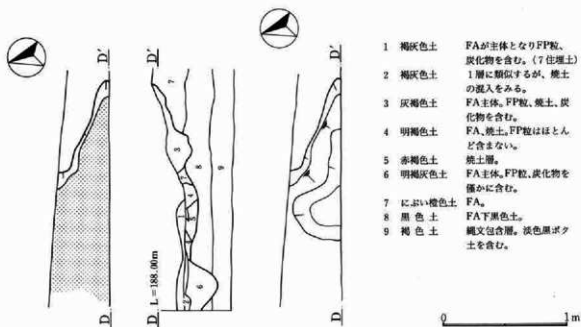
第36図 6号住居出土遺物

## 7号住居

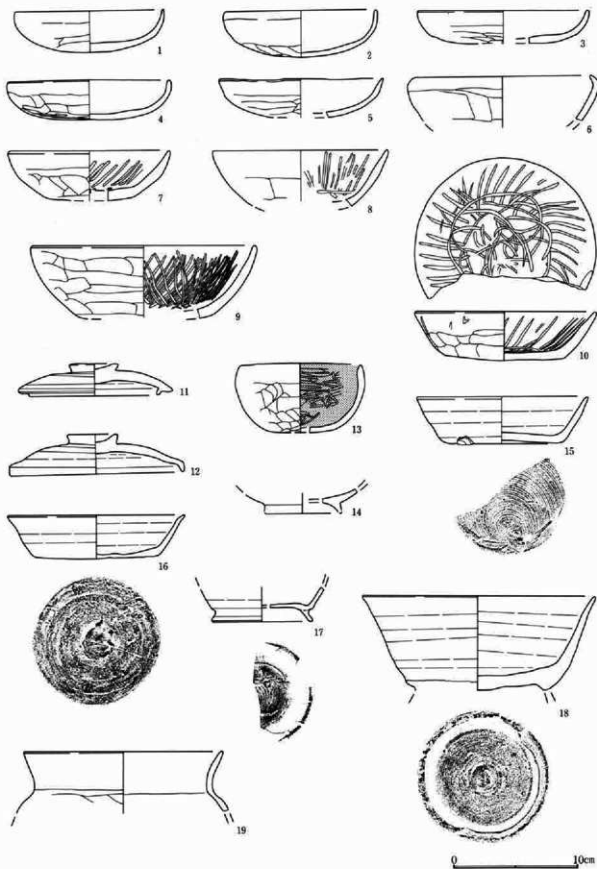


- |           |   |
|-----------|---|
| 1 暗褐色土    | FF粒を多量に含みよく締まる。                             |
| 2 暗褐色土    | 1層に類似するがFAが少量含まれるため、土質はやや細かくなり砂質を呈し、サクサクする。 |
| 3 暗褐色土    | FF粒の量は1、2層に比較し少なくなる。炭化物が床面近くに堆積する。          |
| 4 褐色土     | FF粒が主体となり締まりは弱くもろい。やや砂質。                    |
| 5 灰黒色土    | FF細粒を若干含む。他に焼土、炭化物が少量含まれる。土質は細かい、よく締まる。     |
| 6 暗褐色土    | 5~10mm大のFF粒を多量に含む。やや砂質。                     |
| 7 褐色土     | FF粒を多量に含みやや砂質を呈する。締まりはよい。                   |
| 8 黒褐色土    | 炭化物を多量に含む。FF粒は少量となり、締まりは弱い。                 |
| 9 暗褐色土    | 8層に類似する。炭化物の量がより多い。もろい。                     |
| 10 褐色土    | 若干の焼土、炭化物を含むのみ。FFの細粒を若干含む。土質は細かくもろい。        |
| 11 黒褐色土   | 多量のFF粒を含み、他に全体的にFAの小ブロックを少量含む。締まりはさほど強くない。  |
| 12 黒褐色土   | 11層に類似する。層上部に少量の焼土を含む。                      |
| 13 暗褐色土   | FF粒の量はやや少なくなり小石を少量含む。締まりはさほど強くない。           |
| 14 暗褐色土   | 黒色土にFAを小ブロック状に含み、FF粒も含む。                    |
| 15 暗褐色土   | 焼土、炭化物を含む。                                  |
| 16 暗褐色土   | FF粒主体。                                      |
| 17 におい褐色土 | FA主体でFF粒を含む。                                |
| 18 褐色土    | FF粒主体でFAを少量含む。                              |

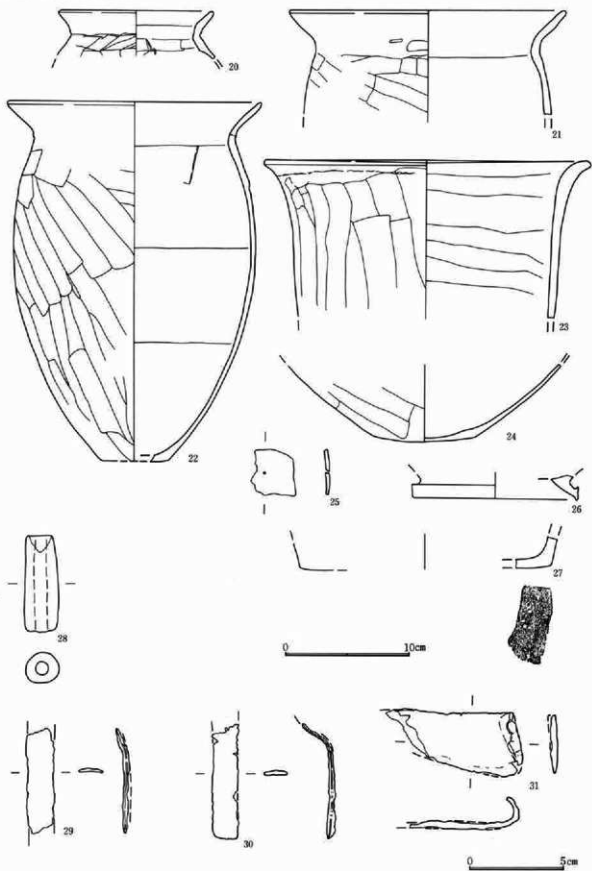
第37図 7号住居



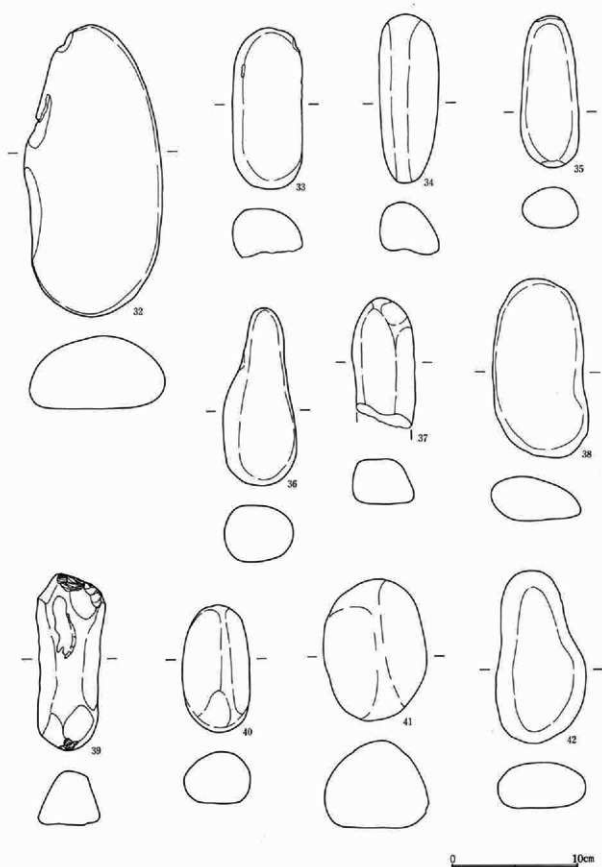
第38図 7号住居遺及び掘り方



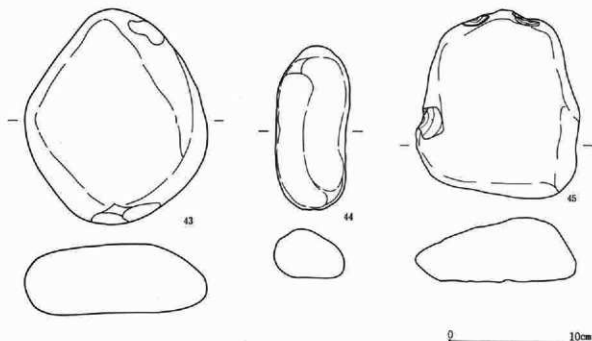
第39圖 7号住居出土遺物(1)



第40図 7号住居出土遺物(2)



第41図 7号住居出土遺物(3)

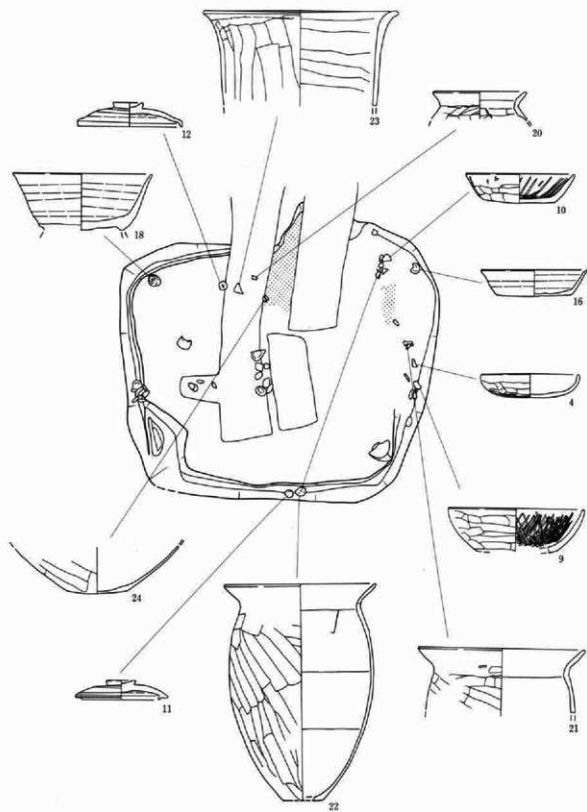


第42図 7号住居出土遺物(4)

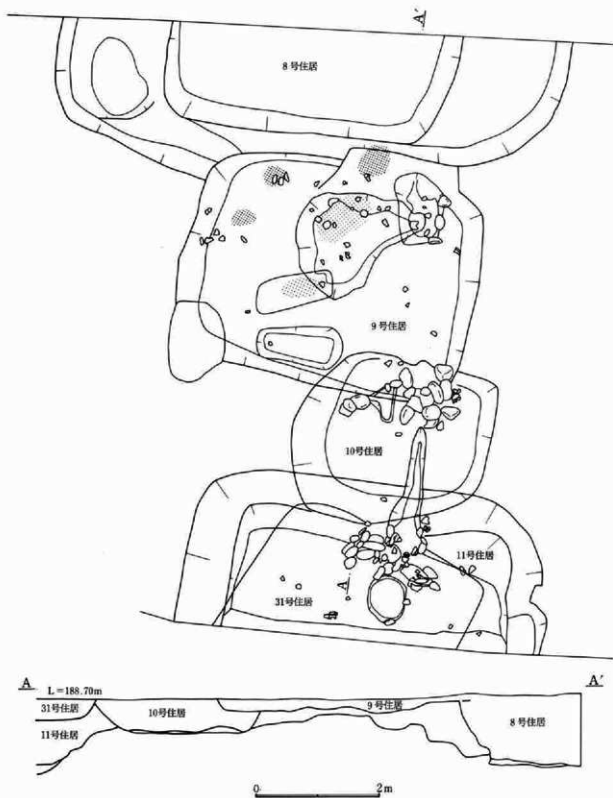
### 7号住居

**位置** DP-60-61、DQ-60-61 **平面形状** 南辺がやや膨らんだ隅丸方形 **残存深度** 壁の高さは、床面までは北東部分で40~65.5cm、北西~南西部分で20~32.5cm、周溝底面までは北東部分で50~61.4cm、西部分で25~35.4cm、南部分で40.5~46.2cmを測る。 **重複住居** 住居とは重複していないが、6、7、8号土坑の掘り込みによって掘り方で破壊されている。 **規模** 東辺は5.00m、西辺は残存部分で4.10m、南辺は残存部分で4.30m、北辺は3.70mを測る。 **主軸方位** N-90°-E **埋没土** 黒色系の色調の土壌が主体で壁際ではHr-FP粒を主体とした流れ込みが見られる。 **壁の状況** 床面から、東壁は100°、西壁は119°、南壁、北壁は105~106°の角度で立ち上がる。 **床面** 面積は16.968m<sup>2</sup>を測る。掘り方からHr-FA下黒色土にHr-FAの小ブロックやHr-FP粒を含んだ土を貼って床としている。 **周溝** 住居西辺と北東のコーナー部分にみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 東西間隔は、北が1.47m、南が1.74m、南北間隔は、東が2.66m、西が2.52mを測る。深さは、掘り方より1、2号ピットが45~48cm、3、4号ピットが37~42cm、床面からは1、2、4号ピットが53~59cm、3号ピットが40cmを測る。 **掘り方** 全体にHr-FA下黒色土層まで掘り込んでいるが、中央部をやや高めに掘り残している。掘り方の調査において柱穴が検出された。 **電位置** 東辺中央やや南寄り **電方位** N-105°-E **電規模** 全長は、推定0.90m(屋外長推定0.75m)、袖部幅推定0.40mを測る。 **電形状その他** 7号土坑により破壊されて不詳である。石の使用は見られなかった。 **遺物** 床面及び床面からあまり間隔をおかずに出土した土器として内面に暗文のある土師器杯、土師器甕が出土している。埋没土中からは須恵器杯、碗、長頸壺の脚台部、土鍾、鎌等の鉄器が出土している。北壁北西コーナー付近では細長い河原石が流れ込みの状態に出土した。また、小さく穿孔された土器破片もみられる。 **所見** 土師器甕及び杯の形状から、本住居は7世紀末の時期と考えられる。

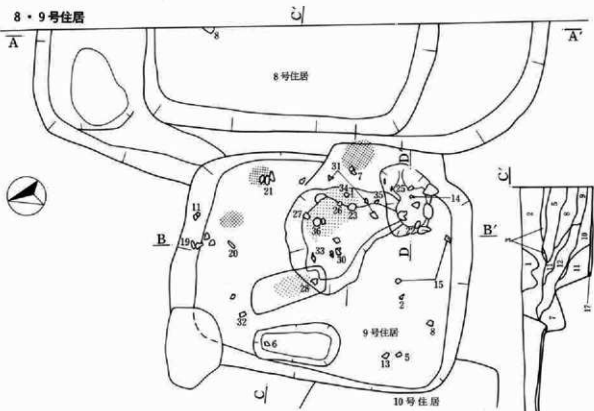




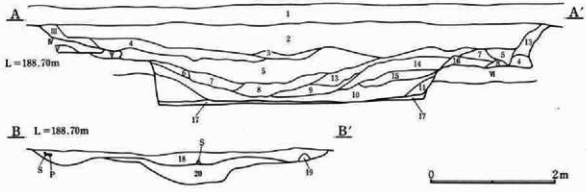
第43図 7号住居遺物出土位置



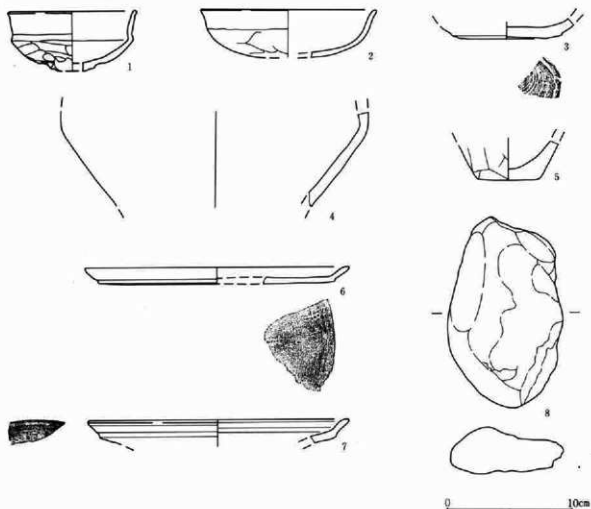
第44図 8・9・10・11・31号住居



- |          |                                 |           |                                   |
|----------|---------------------------------|-----------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土   | 耕作土。                            | 14 暗褐色土   | FP粒とFAを含み、やや黒味を帯びる。FAはFP粒より割合が多い。 |
| 2 暗褐色土   | 上位はやや黒味を帯びる。FP粒を含む。             | 15 褐色土    | FP粒主体で暗褐色土を少量含む。                  |
| 3 黒褐色土   | FAを多量に含む。FP粒を僅かに含む。             | 16 暗褐色土   | FAとFA下黒色土の混合層。                    |
| 4 黄褐色軽石  | FPの二次堆積層。                       | 17 黒褐色土   | FA層とFA下黒色土の混合層。黄褐色土を少量含む。         |
| 5 暗褐色土   | 褐色土主体でFP粒とFAを含む。FP粒がFAよりも割合が多い。 | 18 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。                        |
| 6 におい藍色土 | FA主体。                           | 19 黄褐色軽石  | FP粒を主体とする。壁の崩れ。                   |
| 7 におい藍色土 | FA主体で暗褐色土を含む。                   | 20 におい藍色土 | FAを主体とし、暗褐色土とFP粒を少量含む。            |
| 8 暗褐色土   | FP粒がFAよりも割合が多い。                 |           |                                   |
| 9 暗褐色土   | FAがFP粒よりも割合が多い。                 |           |                                   |
| 10 暗褐色土  | FA。                             |           |                                   |
| 11 暗褐色土  | FP粒を多量に含む。                      |           |                                   |
| 12 暗褐色土  | FAを多量に含む。FP粒を少量含む。              |           |                                   |
| 13 黄褐色軽石 | FP粒の二次堆積層で上位に褐色土を少量含む。          |           |                                   |



第45図 8・9号住居



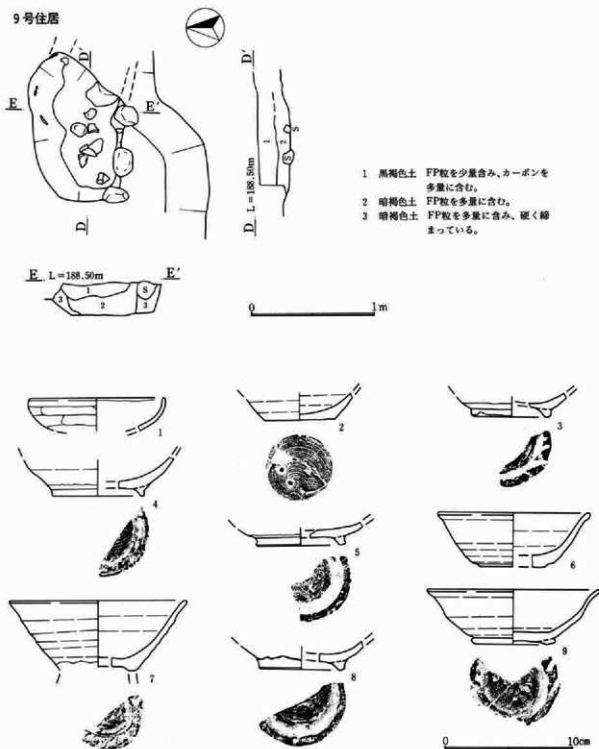
第46図 8号住居出土遺物

### 8号住居

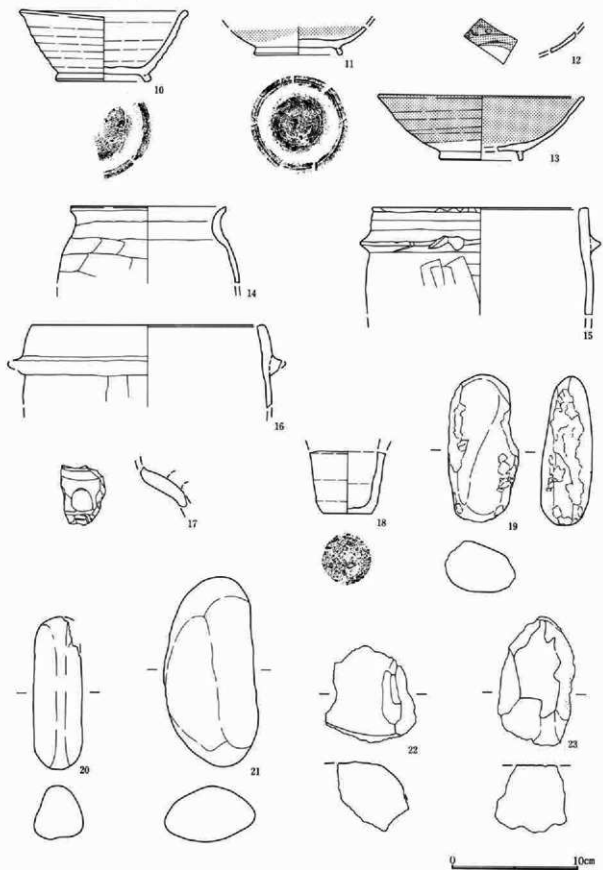
**位置** DU-59, DV-58・59, DW-58・59 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **特徴** 中段テラスを有する住居である。 **残存深度** 壁の高さは、床面までは北部分で117~123.5cm、南部分で94~103.5cmで、確認面から中段まで53~56.5cm、中段~床面まで50~63.5cmを測る。北の確認面は南より少し高く、床面は少し低い。 **重複住居** 9号住居と重複関係にあり、8号住居の埋没土の一部は9号住居に掘り込まれている。 **規模** 西辺は7.30m、南辺は残存部分で1.80m、北辺は残存部分で1.80m、中段テラスでは、西辺は4.40m、南辺は残存部分で1.35m、北辺は残存部分で1.50mを測る。中段テラスの幅は北辺で幅1.50m、南辺で1.48m、西辺ではやや狭く0.60mを測る。 **主軸方位** N-103°-E **埋没土** 褐色系を呈する土壌が主体である。その中にビュアな Hr-FP 粒の層や Hr-FA 層、及び両者の混合層が主に中段から下で堆積している。南壁中段でも同様の堆積がみられ、Hr-FA と黒色土の混合層も存在する。 **壁の状況** 床面から、西壁から南壁は90°、北壁は125°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は150°、南壁は147°、北壁は103°を測る。壁には壁構築材等の痕跡は見られない。 **床面** 面積は、床面で5,259m<sup>2</sup>、中段テラス外側ラインでは13,131m<sup>2</sup>を測る。床面は掘り方とほとんど変わらず、ごく薄い黒褐色土の存在が部分的にあるのみである。 **周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 南北間隔は、2.44mを測る。深さは、掘り方より1号ビットが5cm、2号ビット

トが11cmを測る。掘り方 掘削は淡色黒ボク土層中に達している。柱穴が検出された他はほぼ平坦である。竈 検出されなかった。遺物 埋没土中から土師器杯、須恵器高杯、鉢が出土している。図示できなかったが須恵器長脚1段透かしの高杯脚部小破片が見られる。所見 土師器模倣杯と長脚1段透かし高杯から、本住居は7世紀末の時期が考えられる。他の須恵器は8世紀代である。

## 9号住居



第47図 9号住居竈及び出土遺物(1)



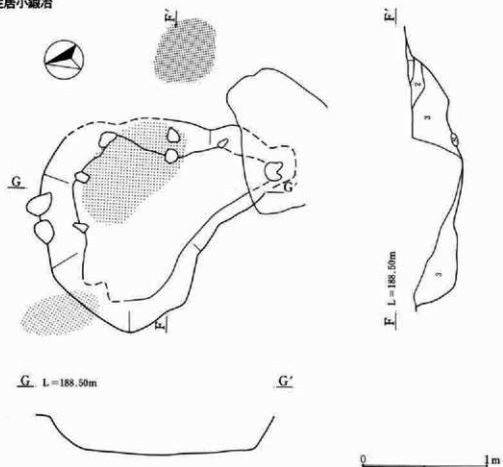
第48図 9号住居出土遺物(2)



第49図 9号住居出土遺物(3)

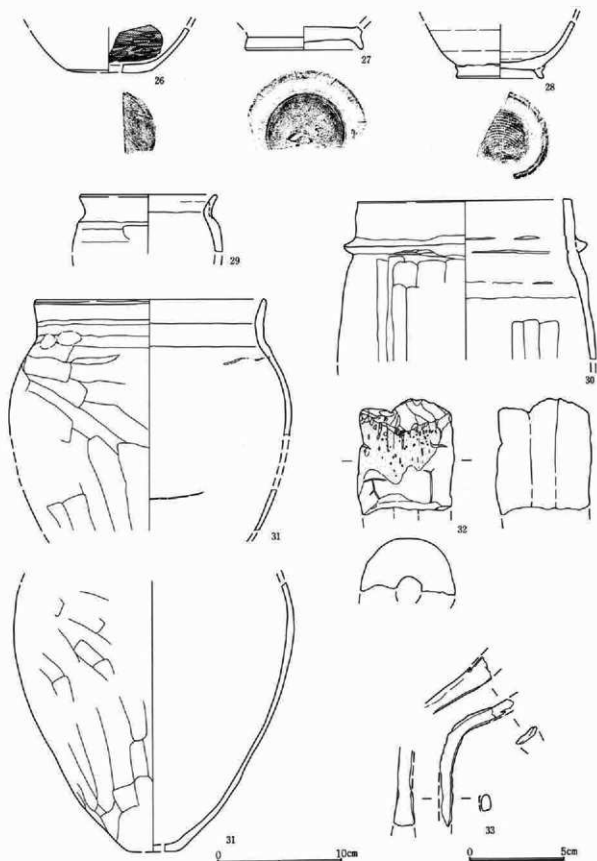
0 5cm

9号住居小竪冶



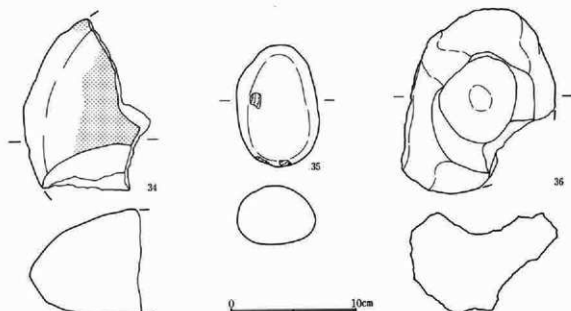
- 1 暗褐色土 FAを主体とし、焼土をブロック状に少量含む。FP粒を僅かに含む。
- 2 暗赤褐色土 FAをブロック状に少量、FP粒を僅かに含む。焼土を僅かに含む。
- 3 暗褐色土 FP粒を少量含む。2層との間に焼土層が位置する。

第50図 9号住居小竪冶



第51図 9号住居小殿出土遺物(1)

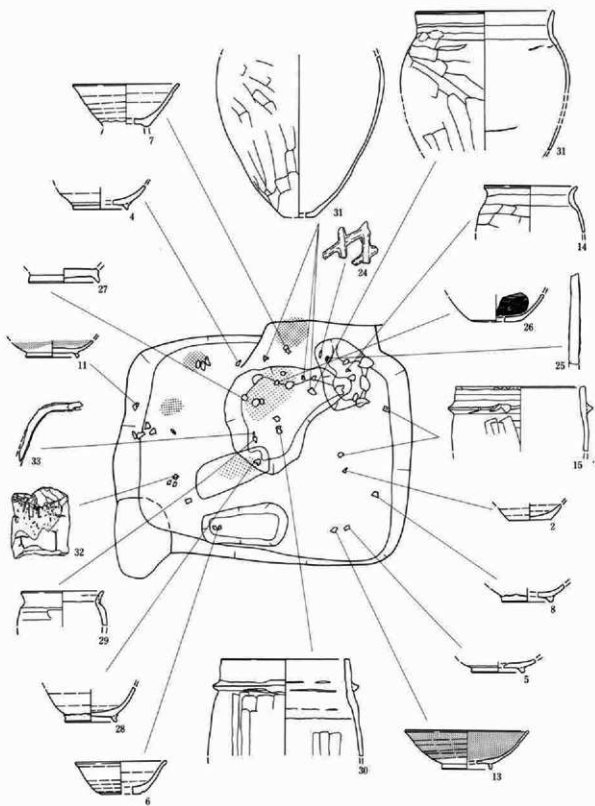




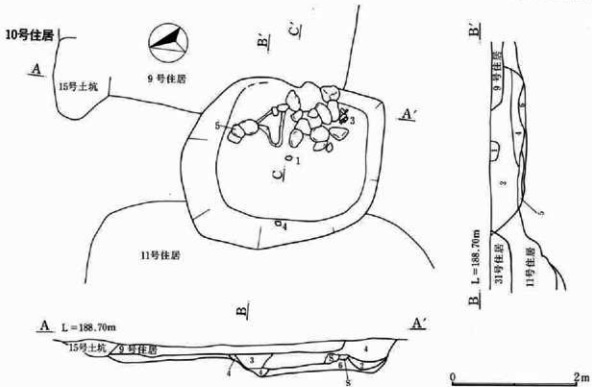
第52図 9号住居小鍛冶出土遺物(2)

## 9号住居

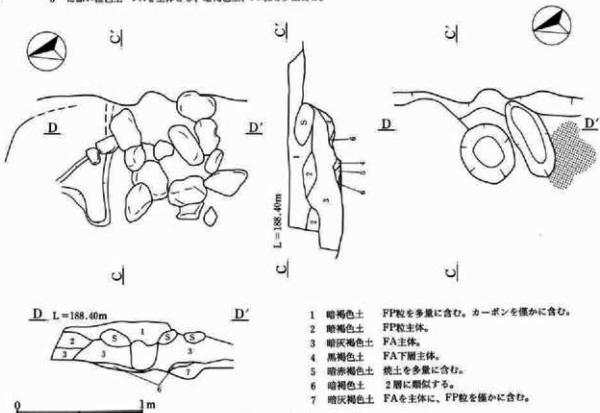
**位置** DU-59・60, DV-59・60, DW-59・60 **平面形状** 隅丸方形 **残存深度** 壁の高さは床面まで43~50cmで確認面から中段までは22~25.5cm, 中段から底面までは20~28cmを測る。 **重複住居** 8, 10号住居と重複関係にあり, 8, 10号住居の埋没土を一部掘り込んで作られている。 **規模** 東辺は4.50m, 西辺は4.50m, 南辺は3.40m, 北辺は3.10mを測る。 **主軸方位** N-107°-E **埋没土** 黒色系色調の土壌で埋没している。 **壁の状況** 床面から, 東壁は90°, 西壁は136°の角度で立ち上がる。壁体の構築材の痕跡は認められなかった。 **床面** 面積は12.300㎡を測る。掘り方から10cmほどの厚さで土を盛り床としている。床面の一部にカーボン, 炭化物, 焼土の分布が見られる。西壁際に落ち込みが見られる。 **周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 掘削はHr-FA層中に及んでいる。住居北~西の壁際, 南の壁際に多数の掘り込みがみられる。 **電位置** 東辺南隅 **電方位** N-100°-E **電規模** 全長は, 1.10mを測る。 **竈形状その他** 人頭大及び拳大の石が散在するが旧状推定は困難である。なお, 小鍛冶跡の一部が竈と重複している。 **住居の特徴** 小鍛冶跡が検出された。住居の中央から東部にかけて規模200×170cmで焼土部分を含めると200×240cmになる。深さは51cmで底面にはカーボンを主体に灰, 焼土の分布が認められた。羽口, 羽釜, 土師器壺, 須恵器碗, 内面黒色処理でミガキを施すロクロ土師器, 凹石, 鉄器が出土した。鉄滓も930gみられたが, スチール等は検出できなかった。東側に焼土分布が認められるが, 小鍛冶関連のものか確認できなかった。一部南側で竈と重複関係にあり, 竈の作り替えあるいは小鍛冶の修築が考えられる。 **遺物** 小鍛冶遺構からの出土は前述の通りである。住居からも羽釜, 須恵器碗・杯, 灰釉陶器碗, 土師器壺, 未固結凝灰岩の電構築材が出土している。灰釉陶器碗の施釉方法は漬け掛けである。羽釜は胴部に縦方向のヘラ削りを施している。小鍛冶遺構出土の鉄器はL字状を呈す角釘であり, 電遺物は帯状品と近代の可能性もある斜格子状品がある。土師器杯は埋没土中に流れ込んだものである。灰釉陶器碗は大原2号竈式期とみられる。 **所見** 出土土器の様相から本住居は9世紀末の時期が考えられる。



第53図 9号住居遺物出土位置



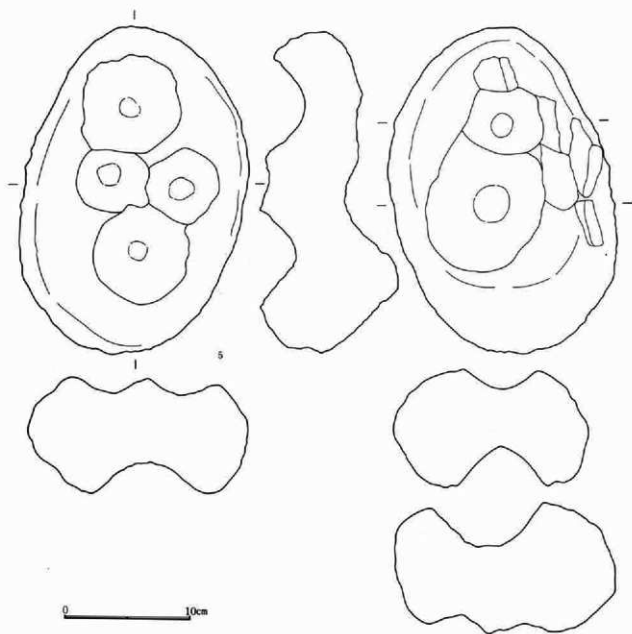
- 1 暗褐色土 締まりのない2層土。
- 2 暗褐色土 FP粒を多量に含む。FAをブロック状に僅かに含む。
- 3 明黄褐色土 FP粒を主体とする。
- 4 暗褐色土 FP粒を少量含む。FAをブロック状に少量含む。
- 5 暗褐色土 FP粒をほとんど含まない。
- 6 ぶい褐色土 FAを主体とし、暗褐色土、FP粒を少量含む。



- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含む。カーボンを僅かに含む。
- 2 暗褐色土 FP粒主体。
- 3 暗灰褐色土 FA主体。
- 4 黒褐色土 FA下面主体。
- 5 暗赤褐色土 焼土を多量に含む。
- 6 暗褐色土 2層に類似する。
- 7 暗灰褐色土 FAを主体に、FP粒を僅かに含む。

第54図 10号住居及び竪

第3章 検出された遺構と遺物



第55図 10号住居出土遺物

## 10号住居

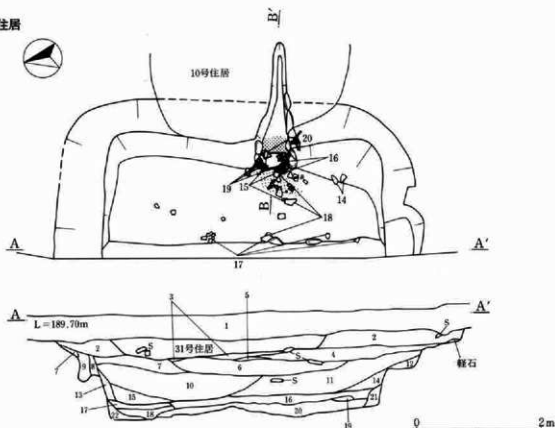
**位置** DU-60、DV-60-61 **平面形状** 北辺がやや膨らんだ隅丸方形と推定される。南西コーナーが著しく住居内側へ入り込むが、元来の歪みに加え11号住居との重複により当部分の確認レベルが他の部分より低くなっていることも一因している。 **残存深度** 壁の高さは床面まで32~45cmを測る。 **重複住居** 9号住居、11号住居、31号住居と重複関係にあり、11号住居の埋没土の一部を掘り込んで作られている。その後10号住居の埋没土の一部は9号住居に掘り込まれ、31号住居も構築される。 **規模** 東辺は2.90m、西辺は2.90m、南辺は2.20m、北辺は2.50mを測る。 **主軸方位** N-105°-E **埋没土** 黒色系の色調の土壌である。部分的に Hr-FP 主体層がみられる。 **壁の状況** 床面から、東壁は90°、西壁は132°の角度で立ち上がる。壁体を構成する材及び痕跡は認められなかった。 **床面** 面積は4.287m<sup>2</sup>を測る。掘り方から Hr-FP と Hr-FA を含む暗褐色土と Hr-FP を含まない暗褐色土を貼って床としている。 **周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** Hr-FA 層中まで掘り込んでいる。住居中央、南部分、北東コーナー部分に1つずつ円形の掘り込みがあり、東壁にも隅丸長方形の掘り込みがみられる。 **竪位置** 東辺中央 **竪方位** N-107°-E **竪規模** 破壊が著しく用材である河原石が集中して検出されたのみである。僅かに左袖縁の高まりが残るが、内側に入り込みすぎているので袖として不適当であろう。 **竪形状その他** 構築材と思われる河原石が出土しているが旧状復元は困難である。僅かに左右の袖に石を使用した可能性が推定できるのみである。 **遺物** 土師器杯は削り出しの稜線を持たない。須惠器杯は底部回転系切りである。他に土師器甕、須惠器長頸壺の口縁部片、角閃石安山岩の凹石がみられる。 **所見** 土師器杯の椀から8世紀前半の時期が考えられる。

## 11号住居

**位置** DU-60・61、DV-60・61、DW-60・61 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで90~104.5cmで確認面から中段までは40~51.5cm、中段から底面までは58~60cmを測る。 **重複住居** 10、31号住居と重複関係にある。11号住居の埋没土は10号住居と31号住居に掘り込まれている。 **規模** 東辺は5.50m、南辺は残存部分で2.20m、北辺は2.30mを測る。 **主軸方位** N-102°-E **埋没土** 褐色系を呈し Hr-FP を多量に含む土壌で埋没している。中央部分に多量のカーボン、炭化物を含む土壌の存在が認められる。壁際では Hr-FA を主体とした層が認められる。Hr-FA 各ユニットが立位になっている層がある。 **壁の状況** 床面から、東壁は111°、南壁は90°、北壁は99°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は107°、北壁は138°を測る。壁際に Hr-FA 層があり、壁を二次的な Hr-FA が被っている状態がみられた。これは、人為的な要素他に自然作用も考えなければならない。 **床面** 面積は5.373m<sup>2</sup>を測る。掘り方から15~34cmの厚さでローム主体土、Hr-FA 主体土、及び両者と Hr-FA 下黒色土ブロックを含む土層により床を作っている。間層に焼土層が認められる。 **周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 南北間隔は、1.75mを測る。深さは、掘り方より1号ピットが440cm、2号ピットが32cm、床面からは1号ピットが52cm、2号ピットが43cmを測る。 **掘り方** 淡色黒ボク土及びロームに達するまで掘削している。中央部分をやや高く掘り残している。掘り方調査において柱穴が検出された。また77×68cm、深さ44cmの土坑が検出され、その上位から小骨片が出土した。 **竪位置** 東辺中央 **竪方位** N-106°-E **竪規模** 全長は、2.40m(屋外長1.50m、屋

内長0.90m、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.30mを測る。 電形状その他 煙道が住居外へ長く伸びる形状である。左壁に2石、右壁に5石の扁平な河原石を平の面を内側へ向けて使用している。右壁において掘り方と河原石との間隙には壘の口縁部を中心とした破片を詰めている。また、焚口に横架し、補強材としていた壘(19)が落下して出土している。これは壘1個体と口縁部へ胴部中位の壘(16)を合わせ口にしていたもの

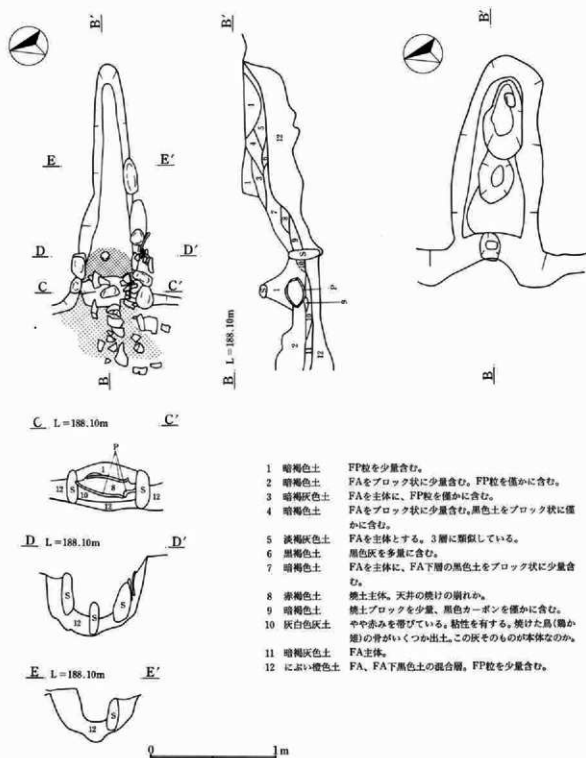
11号住居



- 1 黒褐色土 FP粒を多量に含み、よく締まっている。
- 2 暗褐色土 やや質の粗い土でFP粒を多量に含む。1層に類似するがやや色調が明るく、締まてはいない。
- 3 暗褐色土 土質は細かく粘性が強い。良く締まりロームをごく少量含む。φ1~3mmほどの大きさを中心にFP粒を少量含む。
- 4 明褐色土 土質は細かい土(FA?)主体で、φ1cmまでの大きさを中心にFP粒を多量に含む。
- 5 黒色土 6層土に4層土が混入する。
- 6 黒色土 多量のカーボンからなる層。炭化物を含む。φ1cm前後の大きさを中心にFP粒を多量に含む。φ4~5cmのFP粒を少量含む。
- 7 明褐色土 土質は細かくφ2~10mmの大きさを中心にFP粒を含む。
- 8 明褐色土 φ2~5mm大のFP粒を含む。7層に類似するが色調は明るい。
- 9 暗褐色土 土質は細かくφ2~3mmほどのFP粒を含む。黒色土を少量混入する。
- 10 明褐色土 φ2~5mm大を中心にFP粒を多量に含む。φ1cm、φ3~5cm大のFP粒を含む。主体土は土質が細かく7層に類似するがロームを混入する。
- 11 明褐色土 土質は細かくφ2~5mmほどの大きさを中心にFP粒を含む。炭化物を少量含む。
- 12 明褐色火山灰 FA(砂質)主体で炭化物をごく少量含む。φ2~3mmのFP粒を含む。
- 13 淡褐色火山灰 FA。下位は黒色土が混じりがFA各ユニット層が立位になっている。上位に顕著にみられる。
- 14 淡褐色火山灰 FA各ユニットの副合層。φ2~5mm大のFP粒を少量含む。
- 15 明褐色土 14層に類似するがFAが少なく10層土が混入する。
- 16 淡褐色土 FA主体で各ユニットが混雑する。黒色土が混入する。炭化物、焼土粒を少量含む。φ5mm前後のFP粒を少量含む。
- 17 暗黄褐色土 ローム主体でFAブロック、黒色土粒、焼土粒を少量含む。
- 18 暗黄褐色土 17層に類似するがFAブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
- 19 橙褐色土 焼土層。炭化物、カーボンを含む。
- 20 黄褐色土 ローム主体で18層より色調は明るい。FAブロック、黒色土ブロックを含む。
- 21 明褐色土 FA粒を混入し、炭化物を少量含む。土質は細かい土が主体。FP粒はほとんど含まない。
- 22 暗黄褐色土 ローム主体で、黒色土が混入する。

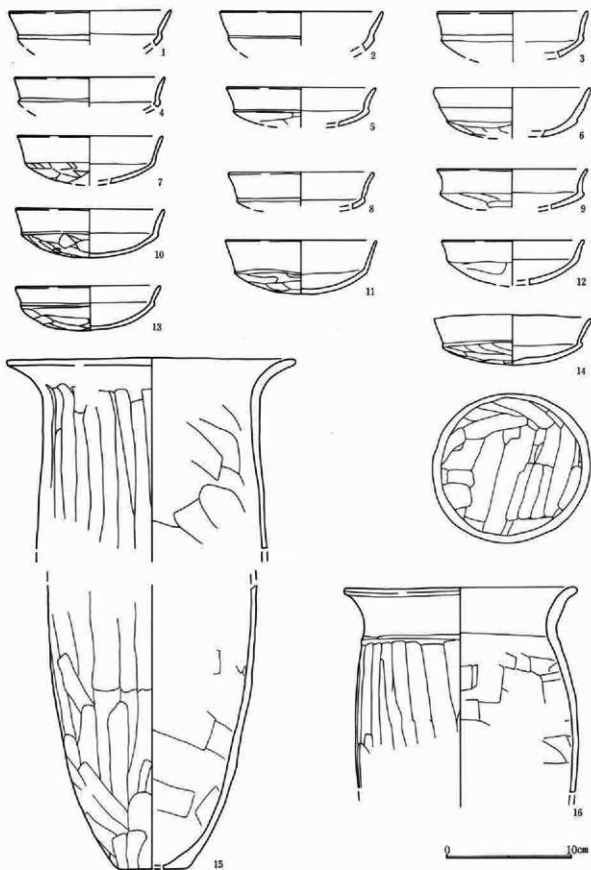
第56図 11号住居

である。遺物埋没土中から土師器模倣椀が多く出土し、土師器甕は竈を中心に出土している。3は掘り方から出土し、2、8は掘り方出土破片と接合関係にある。14は床下の掘り込みと竈出土破片との接合関係がみられる。なお、竈の白灰層中からキジの焼骨が出土している。所見出土した土器からみて、7世紀前半の時期が考えられる。



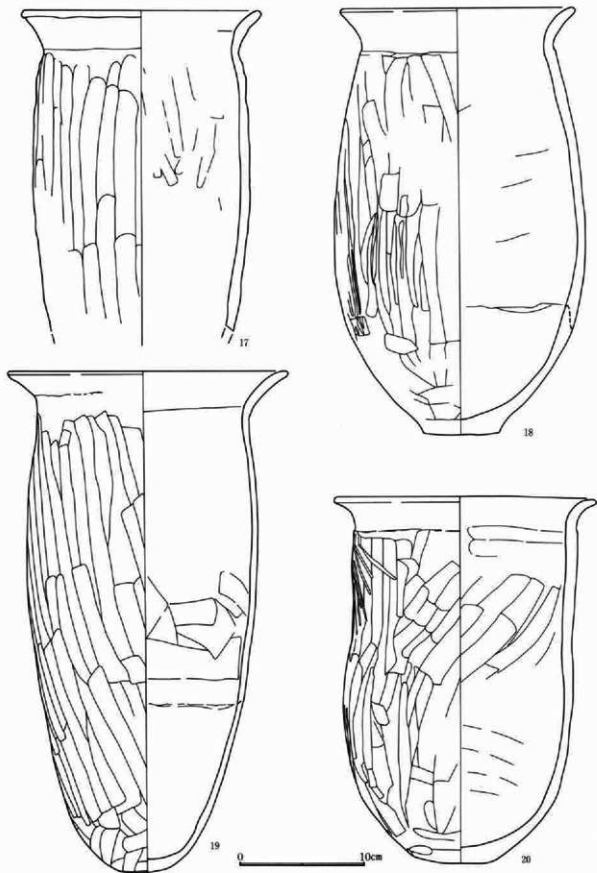
- |          |   |
|----------|---|
| 1 暗褐色土   | FP粒を少量含む。   |
| 2 暗褐色土   | FAをブロック状に少量含む。FP粒を僅かに含む。                            |
| 3 暗褐色土   | FAを主体に、FP粒を僅かに含む。                                   |
| 4 暗褐色土   | FAをブロック状に少量含む。黒色土をブロック状に僅かに含む。                      |
| 5 淡褐色土   | FAを主体とする。3層に類似している。                                 |
| 6 黒褐色土   | 黒色灰を多量に含む。  |
| 7 暗褐色土   | FAを主体に、FA下層の黒色土をブロック状に少量含む。                         |
| 8 赤褐色土   | 焼土主体。天井の焼けの崩れか。                                     |
| 9 暗褐色土   | 焼土ブロックを少量、黒色カーボンを僅かに含む。                             |
| 10 灰白色灰土 | やや赤みを帯びている。粘性を有する。焼けた鳥(鶏か鳩)の骨がいくつか出土。この灰そのものが本体なのか。 |
| 11 暗褐色土  | FA主体。   |
| 12 ぶい橙色土 | FA、FA下黒色土の混合層。FP粒を少量含む。                             |

第57図 11号住居竈

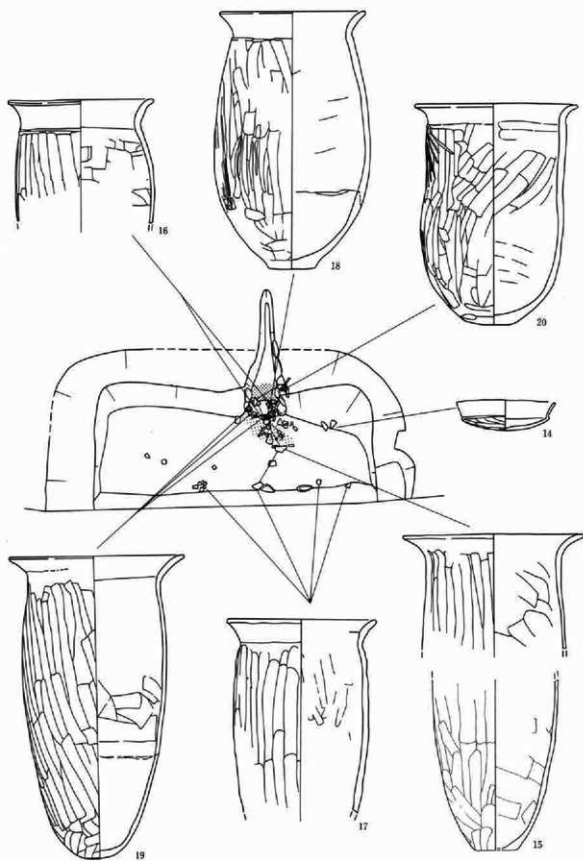


第58図 11号住居出土遺物(1)



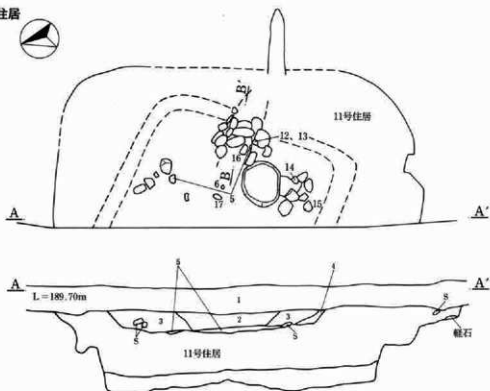


第59図 11号住居出土遺物(2)



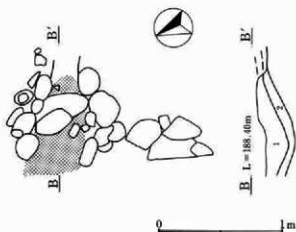
第60図 11号住居出土位置

31号住居



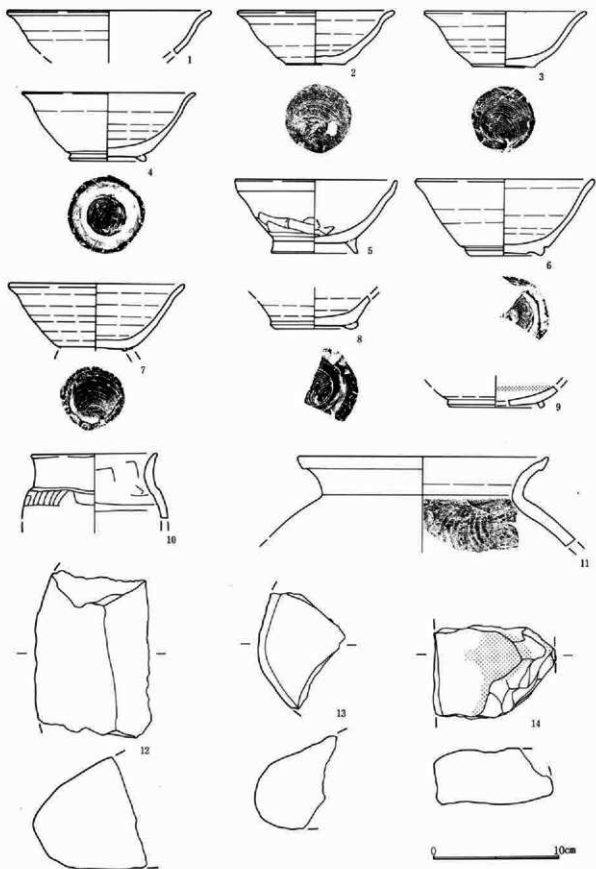
- 1 黒褐色土 FP粒を多量に含み、よく締まっている。
- 2 褐色土 やや質の粗い土に炭化物を少量含む。FP粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 2層に類似するが色調が暗い。
- 4 褐色土 2層に類似するが色調がやや明るい。
- 5 暗褐色土 土質は細かく、粘性が強い。よく締まっている。ロームをごく少量含む。  
φ1~3mmほどの大きさを中心にFP粒を少量含む。

0 2m

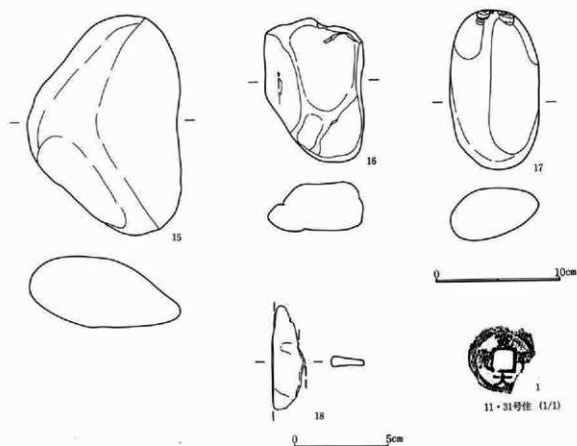


- 1 明褐色土 焼土ブロック、FAブロックを多量に含む。FP細粒を少量含む。
- 2 黒褐色土 FP粒を多量に含む。(掘り方)

第61図 31号住居及び竪



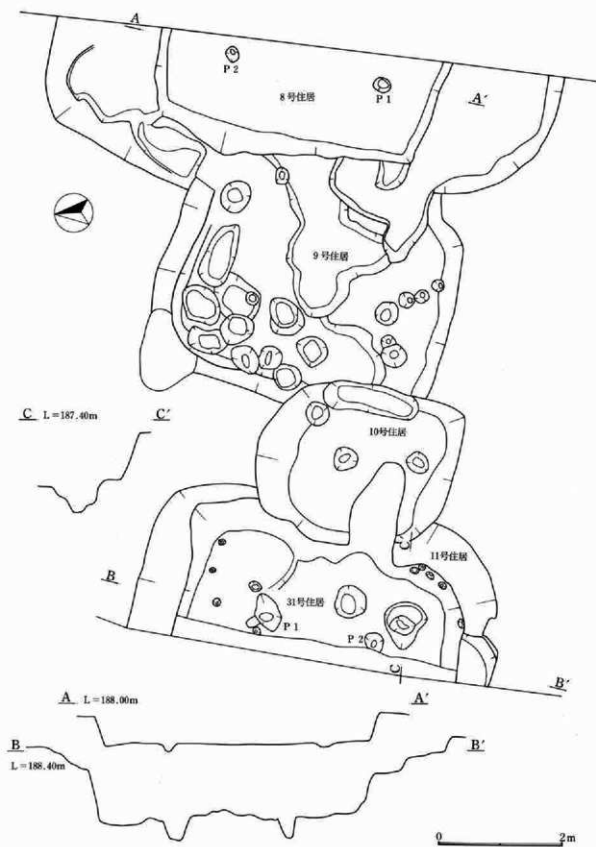
第62図 31号住居出土遺物(1)



第63図 31号住居出土遺物(2)及び11・31号住居出土遺物

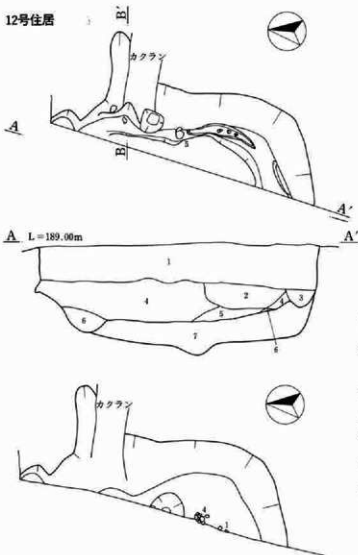
## 31号住居

**位置** DV-61 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで20~37cmを測る。 **重複住居** 10、11号住居と重複関係にある。31号住居は11号住居の埋没土を掘り込み、10号住居に一部掘り込まれている。 **規模** 推定であるが東辺は3.40m、南辺は残存部分で15.0m、北辺は残存部分で2.05mを測る。 **主軸方位** N-125°-E **埋没土** 黒色系の色調を呈すがやや褐色味を帯びている。 **壁の状況** 床面から、南壁は130°、北壁は134°の角度で立ち上がる。 **床面** 面積は4.536㎡を測る。掘り方からロームとHr-FP粒を少量含む粘性強い暗褐色土を貼り床としている。 **周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 図示できず不明確であるが、中央が少し窪む以外は平坦である。 **竈位置** 東辺中央 **竈方位** N-127°-E **竈規模** 全長は、推定0.90mを測る。 **竈形状** その他左右壁に扁平な河原石を立位で用いている。その間に大ぶりの同様な河原石が検出され、天井に架けられていたものと思われる。この石を除去した後、焼土が認められた。 **遺物** 須恵器杯、椀、灰釉陶器椀、土師器甕、須恵器甕、刀子の可能性がある帯状鉄製品が出土している。使用痕跡のある石がみられる。竈右側付近に大ぶりの河原石が集中して出土した。5は外面底部に砂粒が付着している。なお、接合しない小破片のなかには11号住居の時期と思われる内面黒色処理の杯片がみられる。灰釉陶器椀9は光が丘14号竈段階か。 **所見** 土器の様相からみて9世紀後半の年代が与えられる。



第64図 8・9・10・11・31号住居掘り方

## 12号住居

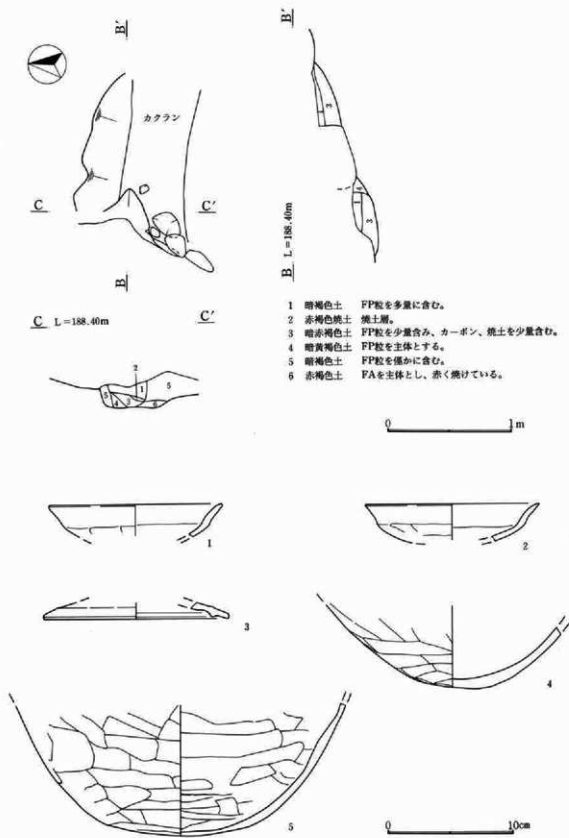


- |           |                                |
|-----------|--------------------------------|
| 1 暗褐色土    | 耕作土。FP粒をやや多量に含む。黒っぽい。          |
| 2 黒褐色土    | 調理土。黒色土ブロックを多量に含む。FP粒をやや多量に含む。 |
| 3 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。ピット埋土(住居に伴う?)。       |
| 4 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。                     |
| 5 におい赤褐色土 | FP粒を強かに含む。FAをブロック状に少量含む。       |
| 6 黄褐色土    | FP粒を主体とする。壁の崩れ。                |
| 7 におい褐色土  | FA、FA下褐色土の混合層。黄褐色土を少量含む。       |

第65図 12号住居

## 12号住居

**位置** EE-58・59, ED-58・59 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで47.5~48cmで、周溝底面まで65.5cmを測る。 **重複住居** 単独で検出された。 **規模** 南辺は残存部分で1.20m、北辺は残存部分で1.00mを測る。 **主軸方位** N-82°-E **埋没土** 褐色系の色調を呈す土壌が主体で南壁ではHr-FPの流れ込みがみられる。 **壁の状況** 床面から、南壁は95°、北壁は134°の角度で立ち上がる。南壁の変換点からは135°を測る。壁体を構築する材及び痕跡は認められなかった。 **床面** 面積は1.872㎡を測る。 **周溝** 検出部分のほぼ全体でみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 淡色黒ボク土及びルーム層に達するまで掘削されている。全体に平坦であるが、中央部分に掘り込みがみられる。 **竈位置** 東辺北隅 **竈方位** N-82°-E **竈規模** 全長は、1.20m(屋外長0.90m)を測る。 **竈形状その他** 攪乱により半壊状態で、不明確な点が多い。右袖にあたる部分に河原石が位置するが旧状は推定し難い。 **遺物** 掘り方から土師器甕、埋没土中から土師器杯、須恵器蓋が出土している。甕は胴部の張りが大きいタイプである。 **所見** 土器の様相から、8世紀前半の年代が与えられる。

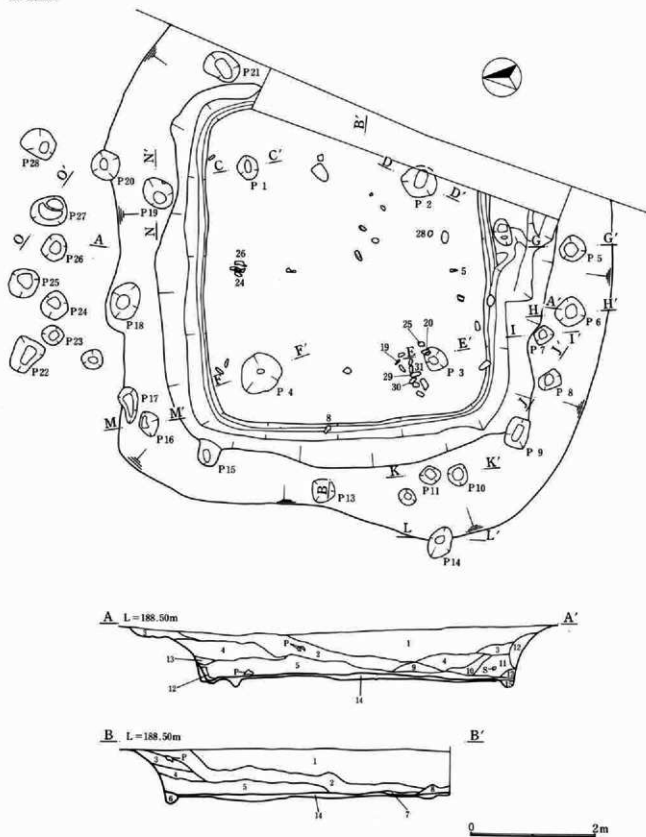


- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含む。
- 2 赤褐色焼土 焼土層。
- 3 暗赤褐色土 FP粒を少量含む、カーボン、焼土を少量含む。
- 4 暗黄褐色土 FP粒を主体とする。
- 5 暗褐色土 FP粒を僅かに含む。
- 6 赤褐色土 FAを主体とし、赤く焼けている。

第66図 12号住居竈及び出土遺物



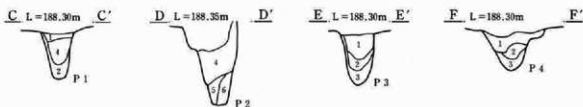
## 13号住居



第67图 13号住居

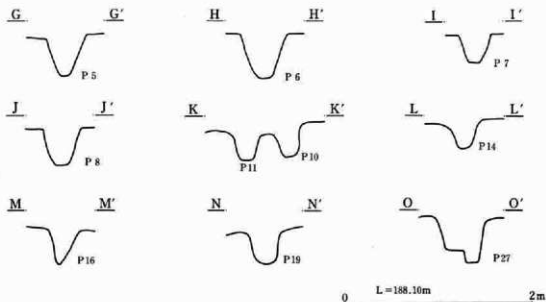
13号住居

- |           |   |
|-----------|---|
| 1 褐色土     | FP粗粒・細粒を含む。                                   |
| 2 黒褐色土    | FP粗粒・細粒を含む。炭化物を僅かに含む。                         |
| 3 明褐色土    | FA(茶褐色の粘性を僅かに帯びた土)にFP粒を多量に含む。サクサクしている。        |
| 4 暗黄褐色土   | FP粒を多量に含む。層の主体となっている。サクサクしている。3層にFP粒が増えた層である。 |
| 5 明褐色土    | 粘性を僅かに帯びた土にFP細粒を多量に含む。                        |
| 6 明褐色土    | FAにFP細粒を含む。                                   |
| 7 暗黄褐色土   | 粒子の細かい土で粘性を帯びる。炭化物、FP粗粒、FP細粒を含む。              |
| 8 暗黄褐色土   | 焼土を少量、炭化物、FP細粒を含む。                            |
| 9 暗褐色土    | 2層に類似するが色調は明るくFP細粒を多量に含む。                     |
| 10 暗黄褐色土  | 4層に類似するが色調は暗い。                                |
| 11 明褐色土   | 5層に類似するがFP細粒が5層に比べ少量。                         |
| 12 黄褐色土   | FP粒が詰まる。やや満ったFP粒。                             |
| 13 暗黄褐色土  | 4層に類似するがFP粗粒が詰まる。                             |
| 14 にぶい褐色土 | FAを主体とし、暗褐色土を少量含む。                            |
| 15 褐色土    | 12層に似るが、褐色土をより多く含む。                           |

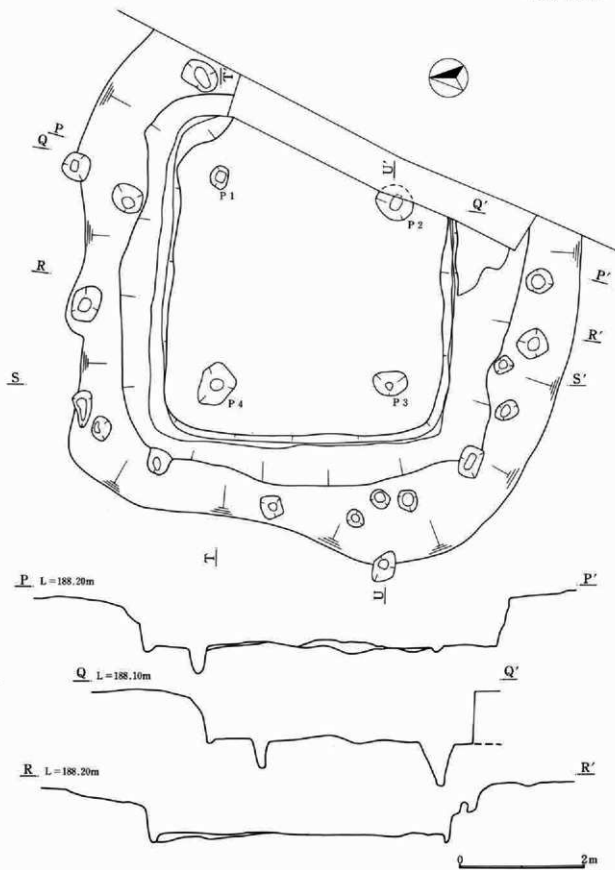


13号住居柱穴

- |         |  |
|---------|--|
| 1 黄褐灰色土 | 粘性の少ないFA主体でFP細粒を多量に含む。FA下黒色土を少量ブロック状に含む。 |
| 2 黄褐灰色土 | 粘性の少ないFA主体でFP細粒を少量含む。FA下黒色土を多量に含む。       |
| 3 黒色土   | FA下黒色土主体で黄褐灰色のFAをブロック状に含む。               |
| 4 黄褐灰色土 | 2層に類似するがFP細粒、FA下黒色土がより少ない。               |
| 5 黄褐色土  | ローム主体でFA粒、φ5mmほどのFP粒を含む。                 |
| 6 黄褐色土  | ローム層。                                    |

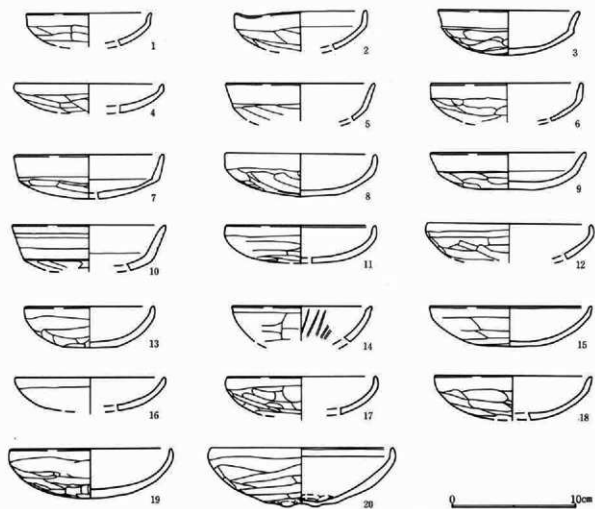
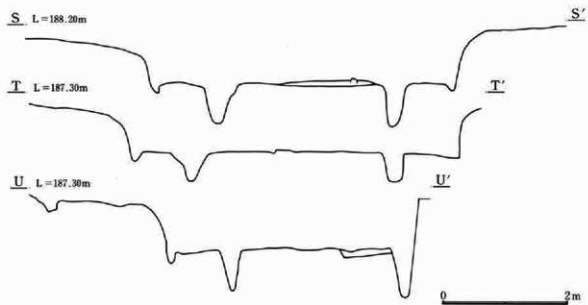


第68図 13号住居柱穴及びピット

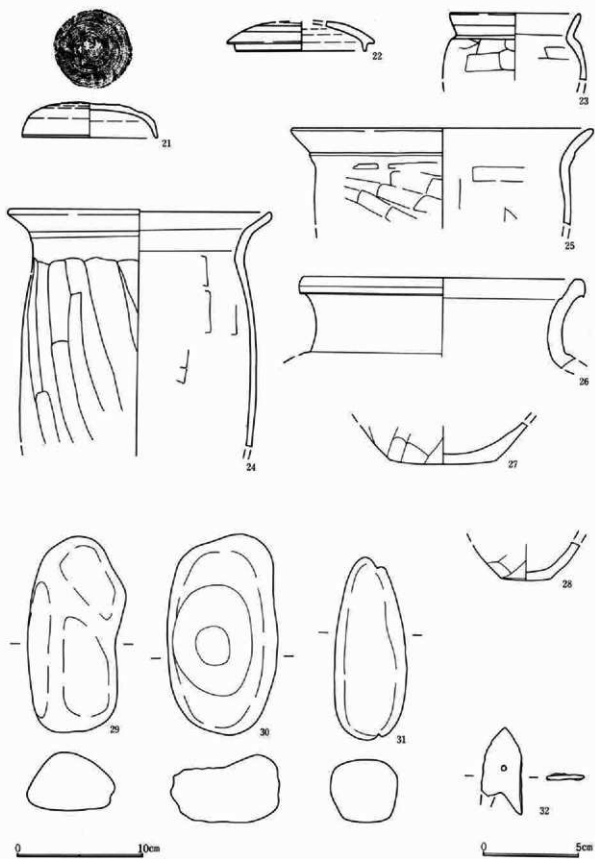


第69圖 13号住居掘り方

第3章 検出された遺構と遺物



第70図 13号住居掘り方及び出土遺物(1)



第71圖 13号住居出土遺物(2)

### 13号住居

位置 EG-56・57、EH-56・57

平面形状 隅丸方形

特徴 本住居は明確な掘り込み部の外側に緩やかな住居側への傾斜部分を持つ。傾斜部分とその近辺には住居埋没土と同様の埋没土を持つ多くのピットが認められる。

残存深度 壁の高さは緩やかに傾斜しはじめる第1落ち込みでは床面まで73～88.1cmで、周溝底面まで90～102.5cm、明確な掘り込み箇所である第2落ち込みでは床面まで北～西は54.8～67cm、南は77.1～85.6cm、周溝底面まで北～北西は67～74.5cm、南西～南は84～96cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は残存部分で1.70m、推定長は6.10m、西辺は5.80m、南辺は残存部分で4.20m、推定長は6.00m、北辺は5.80mを測る。

主軸方位 N-90°-E

埋没土 下位1/3ほどは褐色系色調を呈し、上位2/3ほどは下位土壌より沈んだ褐色系の色調を有する土壌である。この褐色系土壌は西側が多く北側にもみられるが、南と東側には堆積が少ない。北壁際周溝ではHr-FPのやや濁った層がみられる。

壁の状況 床面から、西壁から南壁は102°-103°、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は128°、南壁は119°、北壁は148°を測る。壁体を構築した材及び痕跡はみられなかった。

床面 面積は第1落ち込みで60.174㎡、中段テラス外縁で35.928㎡、床面で23.931㎡を測る。掘り方から約10cmほどの厚さのHr-FA主体土により床としている。

周溝 検出部分の全体でみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔は、北が3.25m、南が2.85m、南北間隔は、2.80mを測る。深さは、床面より1号ピットが46cm、2、3号ピットが68～71cm、4号ピットが62cm、掘り方からは1号ピットが32cm、2、3号ピットが66～67cm、4号ピットが46cmを測る。傾斜部分とその付近のピットの中には住居の上層構造に係わりと思われるピットも認められる。ピット7、10、11、14、16、24、27は住居埋没土下位層と類似した埋没土を持ち、その他は上位層と類似した埋没土を持つ。特にピット9、15等は住居コーナーに位置し、ピット21もコーナー付近に位置する。ピット20からは土器細片が3片出土している。なお、南壁が乱れているのは住居埋没後遠くない時期に攪乱を受けたためである。

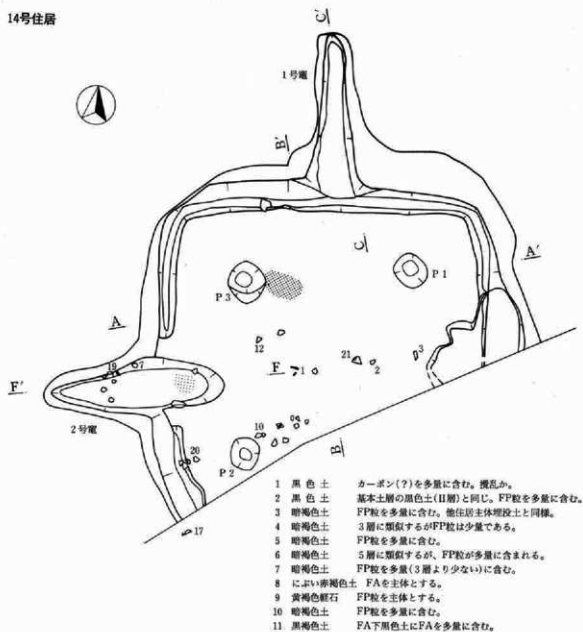
掘り方 掘り込みはHr-F層中まで及んでいる。細かな凹凸はあるものの全体的にほぼ平坦である。

電位置 検出されなかったが、東壁の方にカーボン分布が認められ、東壁に付設されたと思われる。

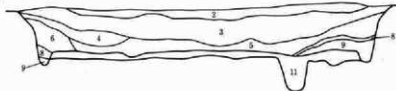
遺物 土師器杯、甕、須恵器蓋、甕が出土している。杯のうち5を除く模倣杯はすべて埋没土中からのものである。同じく埋没土中から鉄鏝が出土した。また、西壁3号ピット付近で床面から細長い河原石が集中して出土した。杯は模倣杯の他へら削りによる稜を持つ例がみられる。

所見 土器の様相から、7世紀後半でも古相の時期と判断できよう。

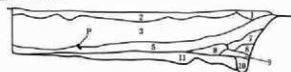
## 14号住居



A L=188.10m

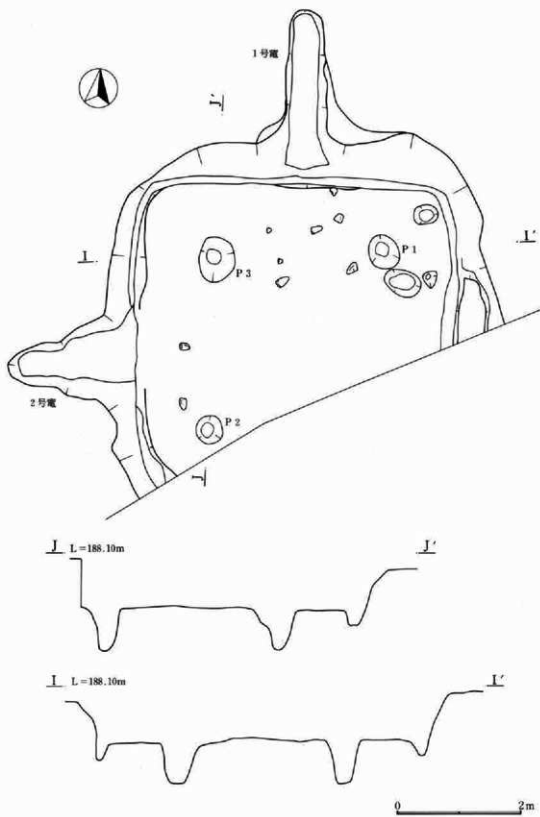


B L=188.10m



0 2m

第72図 14号住居

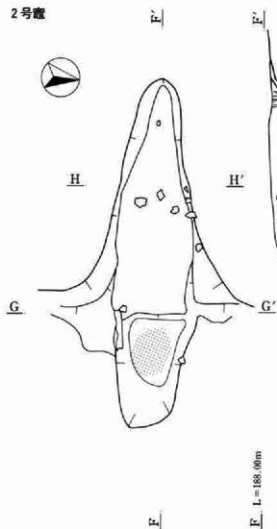


第73図 14号住居掘り方

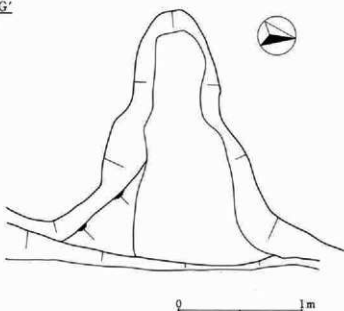
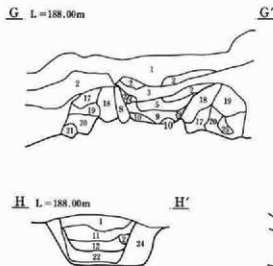




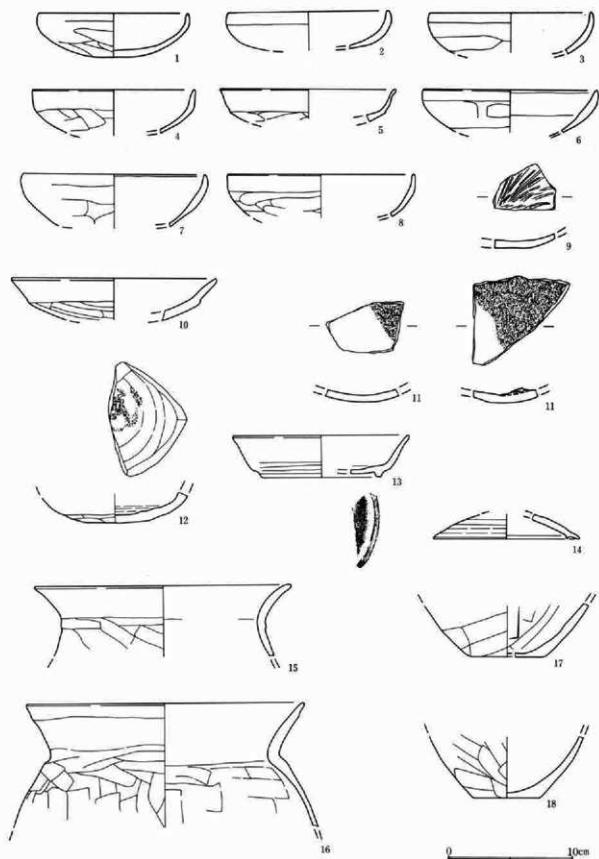
2号竈



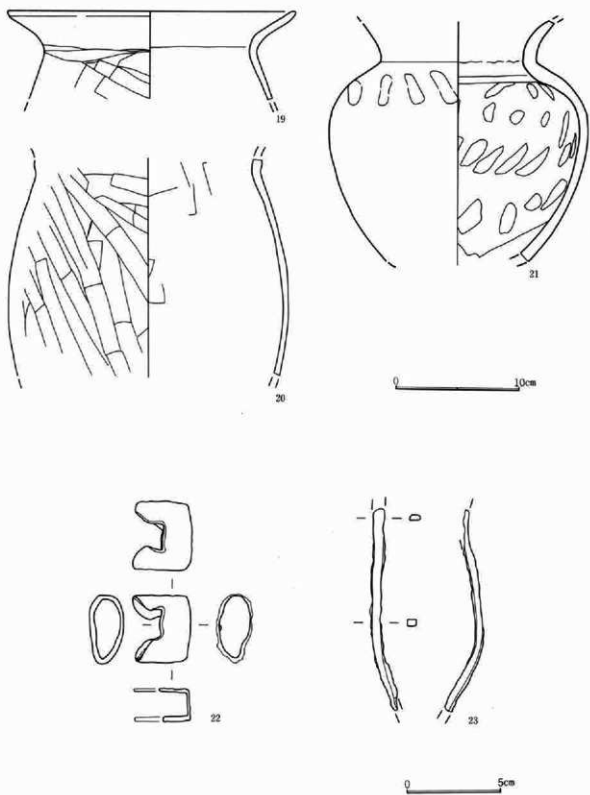
- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 FP粒を主体とする。崩れ込みか。
- 3 暗褐色土 FP粒は僅かに含むが、FAをブロック状に多量に含む。
- 4 黄褐色土 砂質が強く、竈軸の材として用いられた下層のロームと考えられる。一部が赤く焼けている。
- 5 黄褐色土 砂質が強く、下層のロームで、天井の崩壊。
- 6 暗褐色土 FP粒、焼土ブロックを少量含む。
- 7 赤褐色土 赤土ブロックを多量に含む。
- 8 白色 灰 やや粘性を帯びる。
- 9 暗褐色土 FAブロック。
- 10 黒色土 FA下黒色土層(基本土層VI層)。
- 11 暗褐色土 FP粒、暗黄褐色土(ローム?)ブロックを少量含む。
- 12 暗褐色土 FP粒、カーボンを僅かに含む。
- 13 黒色土 攪乱か?
- 14 暗褐色土 4層に類似する。
- 15 赤褐色土 焼土層。
- 16 におい褐色土 FA主体で僅かに黒色土を含む。
- 17 明褐色土 FA、黒色土。
- 18 におい褐色土 FA主体、焼土を少量含む。やや粘質。
- 19 におい褐色土 やや砂質でFA主体、FP粒を含む。
- 20 暗褐色土 FA、黒色土、FP粒を含む。締まりは弱い。
- 21 黄褐色土 FP粒が多量に含まれる。
- 22 淡赤褐色土 FAを多量に含む。FP粒を僅かに含む。
- 23 暗黄褐色土 FP粒を多量に含む。
- 24 黒褐色土 FP粒を僅かに含む。
- 25 黄褐色土 ローム層砂層土ブロック。



第75図 14号住居 2号竈



第76図 14号住居出土遺物(1)



第77図 14号住居出土遺物(2)

## 14号住居

位置 EH-55、EI-54・55・56、EJ-54・55

平面形状 隅丸方形

特徴 竈の痕跡が2箇所で検出できた。

残存深度 壁の高さは床面まで68～75cmで、周溝底面まで90～107.5cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は残存部分で2.80m、西辺は残存部分で5.15m、北辺は5.65mを測る。

主軸方位 N-82°-E

埋没土 黒色系色調の土壌が主体で埋没している。床面及び周溝部分にHr-FP主体層があり、その上位層としてHr-FA主体層が位置する。

壁の状況 床面から、東壁は110°、西壁は100°、北壁は105°の角度で立ち上がる。西壁の変換点からは136°を測る。壁体の構築材や痕跡は認められなかった。東壁においてHr-FA層を掘り込んで最大幅63cm、残存長113cmを測る平坦面を造り出している。この部分を造り出すことによって東壁は該当部分がやや張り出している。

床面 面積は18.483m<sup>2</sup>を測る。掘り方からHr-FA下黒色土にHr-FAを含む土を用いて床としている。

周溝 2号竈を除いた全体でみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 東西間隔は、2.65m、南北間隔は、2.75mを測る。深さは、床面より64～68cm、掘り方からは1、2号ピットが41～43cm、3号ピットが50cmを測る。

掘り方 Hr-FA下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土まで掘削している。北東コーナー部分に小円形の掘り込みがある。なお、北西コーナー付近には古墳時代以前の倒木痕がある。同所の掘り方及び北壁の一部に障が認められるのはそのためである。

竈位置 2基検出され、1号竈は北辺中央、2号竈は西辺中央である。

竈方位 1号竈 N-15°-W 2号竈 N-98°-W

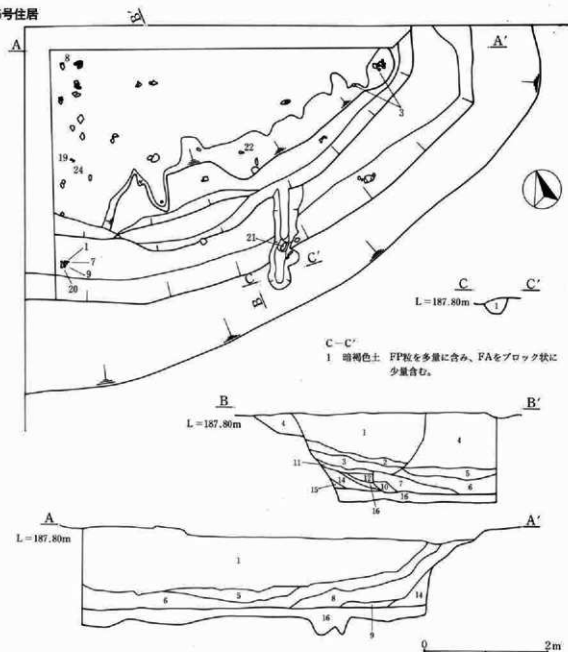
竈規模 1号竈 全長は、2.60m、燃焼部幅0.45mを測る。 2号竈 全長は、2.75m(屋外長1.85m、屋内長0.90m)、袖部幅1.00m、燃焼部幅0.60mを測る。

竈形状その他 1号竈は燃焼部に周溝が走り住居売却時には機能していないことが判断される。2号竈は燃焼部左壁に1石残存している。燃焼部床はよく焼土化している。焼骨細片多数が出土している。

遺物 1号竈煙道外端近くから土師器壺が、竈埋没土から土師器杯、2号竈煙道から土師器壺、杯、須恵器蓋が出土している。6が掘り方埋没土中からの出土で、内面に漆付着が認められる杯底部と須恵器長頸壺底部は埋没土中出土である。他に接合しない小破片に内面漆付着の土師器丸底壺底部破片がみられる。同じく埋没土中から方頭大刀に装着されたと思われる鞘尻金具と棒状の鉄器が認められた。

所見 出土土器から、8世紀前半の時期に比定できる。

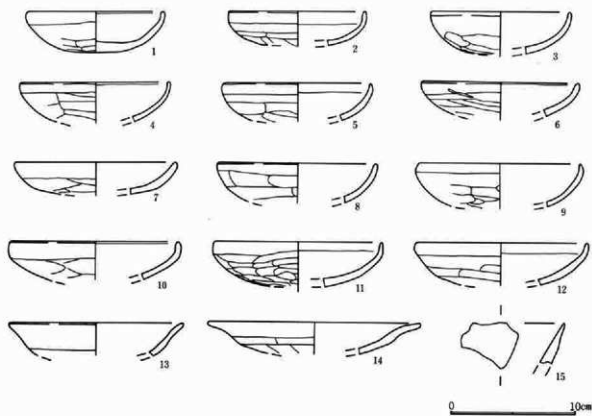
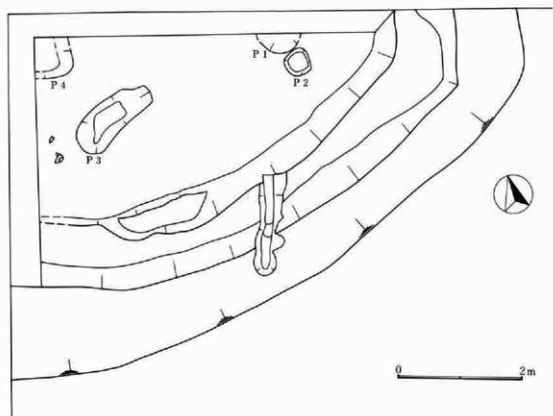
15号住居



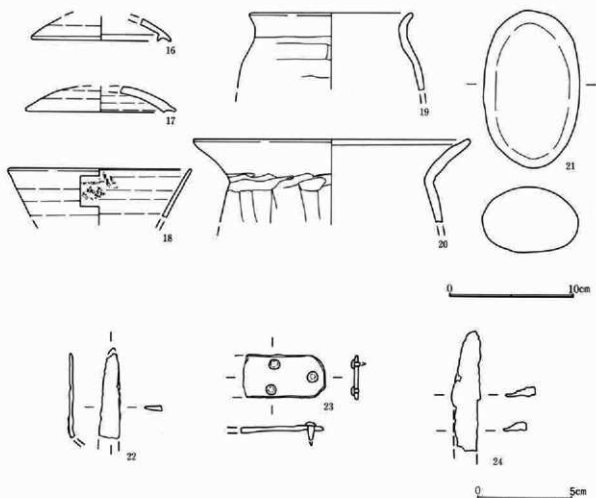
C-C'  
1 暗褐色土 FP粒を多量に含み、FAをブロック状に少量含む。

- |         |  |           |                              |
|---------|--|-----------|------------------------------|
| 1 暗褐色土  | 黒味を帯びる。FP細粒をやや多く含む。(17号土坑)                   | 8 暗褐色土    | FP細粒を多量に含む。                  |
| 2 黒灰色土  | カーボン、FP細粒を少量含む。(17号土坑)                       | 9 黄褐色土    | FP細～粗粒を主体とする。壁の崩れの流れ込み。      |
| 3 暗褐色土  | カーボンが少量含む。FP細粒を多量に含む。骨片が認められる。(17号土坑)        | 10 黒褐色土   | FAをブロック状に少量含む。壁の貼り土の崩壊土か？    |
| 4 暗褐色土  | 黒褐色っぽい。FP粒をやや多量に含む。                          | 11 によい橙色土 | FA。                          |
| 5 暗黄褐色土 | FP細粒を多量に含む。多量の砂がしま状に硬く堆積している。                | 12 灰黄色土   | FP粒を主体とし、暗褐色土を少量含む。          |
| 6 暗赤褐色土 | FP細粒を多量に含む。FAをブロック状に少量含む。                    | 13 黒褐色土   | FA下黒色土にFP粒を少量含む。FAブロックを含む。   |
| 7 暗灰褐色土 | FAを主体とし、FP細粒を僅かに含む。貼り土とすれば、入り口部分に相当すると考えられる。 | 14 によい橙色土 | FA主体で黒褐色土を少量含む。              |
|         |  | 15 黒色土    | FA下黒色土にFAをブロック状に含む。          |
|         |  | 16 黒色土    | FA下黒色土主体でFAを含む。FAをブロック状にも含む。 |

第78図 15号住居



第79図 15号住居掘り方及び出土遺物(1)



第80図 15号住居出土遺物(2)

#### 15号住居

**位置** EJ-56・57、EK-55・56・57、EL-56・57

**平面形状** 南辺がやや膨らんだ隅丸方形と推定される。

**特徴** 13号住居と同様に明確な掘り込み部の外側に住居に向かって緩やかに落ち込んでいく箇所がみられる。これを仮に第1落ち込みと呼び、明確に掘り込む箇所を第2落ち込みと呼ぶこととする。壁には中段テラスを有する。

**残存深度** 壁の高さは、緩やかに住居へ傾斜し始める第1落ち込みが床面まで126～134cm、明確な掘り込み箇所である第2落ち込みが床面まで110～121.5cmで、中段テラスからの落ち込みである第3落ち込みが床面まで78～86.5cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。一部中・近世の土壌墓には埋没土を掘り込まれている。

**規模** 第2落ち込みの東辺は残存部分で2.10m、南辺は残存部分で8.25m、中段テラス(第3落ち込み)の東辺は残存部分で1.70m、南辺は残存部分で2.70mを測る。

**主軸方位** N-106°-E

**埋没土** 下位土層は褐色系で上位はやや黒味を帯びる土壤である。壁際ではHr-FPの流れ込みがみられる。

**壁の状況** 床面から、東壁から南壁は110°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は136°、南壁は142°を測る。



壁隙では南側から Hr-FA 主体で Hr-FP 粒と Hr-FA 下黒色土を含む土の存在が看取される。これは自然土層を掘り込んだ断面を被い、床面を一部被覆するように端部が広がっている。

**床面** 面積は中段テラス外縁（第2落ち込み下場）が21.567㎡、床面（第3落ち込み壁下場）が11.991㎡を測る。掘り方に Hr-FA を含む黒色土を貼って床としている。

**周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面で確認できず、掘り方においてビットが検出されたが、住居の一部のみの調査であるために柱穴と断定できない。その計測値としては掘り方からの深さが、1、2、4号ビットが13～19cm、3号ビットが39cmを測る。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土を掘り抜いている。ビットが検出された他はほぼ平坦である。中段テラスは Hr-FA 層上面を掘り残して構築されている。

**竈位置** 検出されなかった。

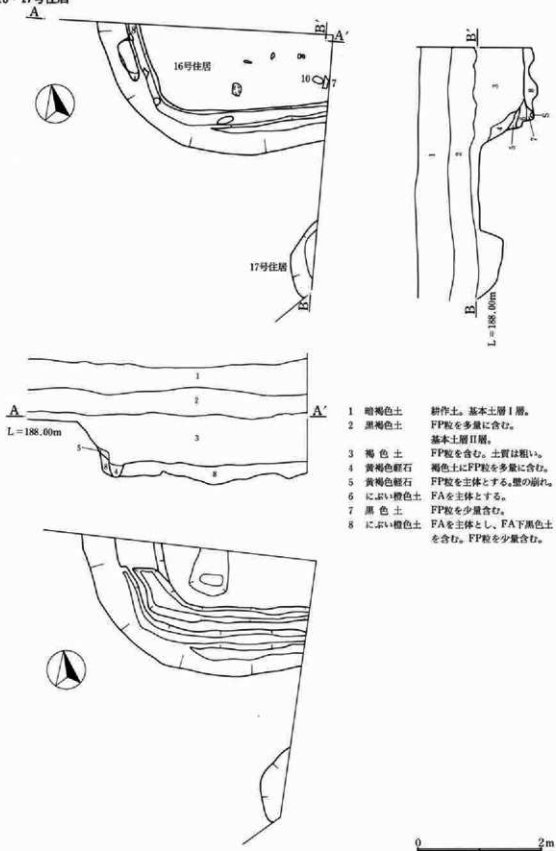
**遺物** 床面西部では19の甕、24の刀子及び小破片の土師器甕、河原石が出土した。この他同部分では床面から15cmの間隔のなかで土師器甕破片、河原石が出土している。土師器杯は削りだしによる稜線が消失しており、須恵器蓋は内面のカエリが甘くなっていることが看取できる。南壁際では土師器杯、甕、刀子が出土している。中段テラスでは、西部において土師器杯が4個体集中して出土した。掘り方においても西部で土師器甕の破片が出土している。南壁際では、歯片の可能性のある骨片が出土している。重複している土壌墓の骨が混入した可能性も考えられるが、これは床面に近く土壌墓の掘り込みを受けていない部分からの出土である。埋没土からは土師器杯、須恵器蓋、内面漆付着の杯、刀子、飾り金具（鉈尾？）の出土があった。

**所見** 土器の特徴から、8世紀前半に比定できる。

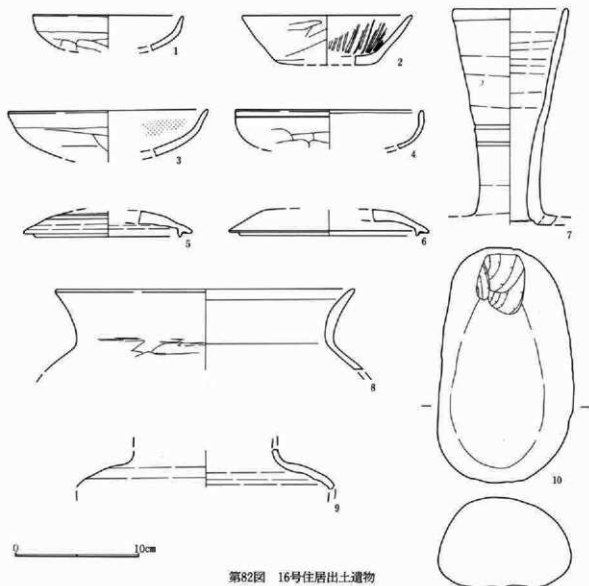
## 16号住居

**位置** EJ-53、EK-53-54 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで75cmで、周溝底面まで87cmを測る。 **重複住居** 単独で検出された。 **規模** 西辺は残存部分で1.70m、南辺は残存部分で3.00mを測る。 **主軸方位** N-77°-W **埋没土** 褐色系色調を呈し、南壁際では黒色土によって周溝が埋没、その上に Hr-FA 主体層、さらに Hr-FP 主体層が位置する。Hr-FP 主体層が西壁でもみられた。 **壁の状況** 床面から、西壁から南壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は120°、南壁は125°を測る。壁体を構築した材及びその痕跡は検出できなかった。西壁の一部では周溝より外側で Hr-FA 層を中位まで掘り込んで最大値68×22cmを測る平坦面を造り出している。該当部分の西壁はやや張り出す形となっている。 **床面** 面積は4.434㎡を測る。掘り方から黒色土と Hr-FP 粒を含む Hr-FA 主体層によって床を造っている。 **周溝** 検出部分の全体でみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** Hr-FA 下黒色土まで掘削が達している。床面での周溝のさらに内側にもう1条周溝状の溝が検出された。他に落ち込みが1箇所みられ、全体的に細かな凹凸がある。 **竈位置** 検出されなかった。 **遺物** 床面から上に4cmまでの間で使用痕跡のある河原石、須恵器長頸壺の頸部が出土している。他に埋没土中から土師器杯、甕、須恵器広口壺、蓋が出土している。8の甕は胴が張り出す形状と推定される。 **所見** 土器の様相から、本住居は8世紀前半と比定しておきたい。

16・17号住居



第81図 16・17号住居

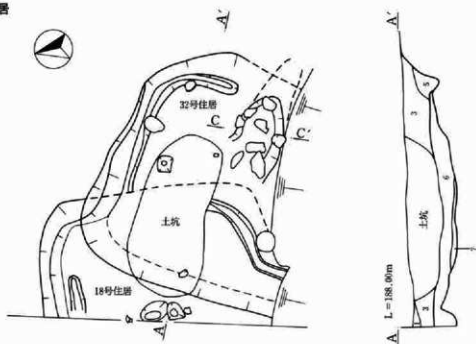


第82図 16号住居出土遺物

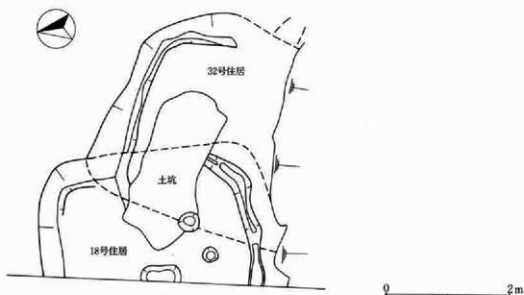
## 17号住居

位置 EJ-53 平面形状 隅丸方形? 残存深度 壁の高さは44cmを測る。重複住居 単独で検出された。規模 西辺は残存部分で0.65m、北辺は残存部分で0.70mを測る。主軸方位 N-51°-E (推定) 埋没土 隣接する16号住居と類似した褐色系色調を呈する土壌である。ただし16号住居よりやや色調が沈む。壁の状況 床面から西壁は115°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及び痕跡は検出されなかった。床面 残存面積は、0.117m<sup>2</sup>を測る。周溝 検出されなかった。貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。掘り方 Hr-FA層まで掘り込んでいる。電位置 検出されなかった。遺物 出土はみられなかった。所見 調査できた部分がごく狭かったが、埋没土が周囲の住居跡のものと類似していること、掘り込みの外側に13号住居や15号住居でみられた緩やかな落ち込みが認められたことから、住居跡と判断した。検出した部分は床面か中段テラスかも明確ではないが、床面とすれば貼り床を持たないことになり、中段テラスとすれば Hr-FA層を掘り残して造り出していることになる。構築時期は不明である。

18・32号住居

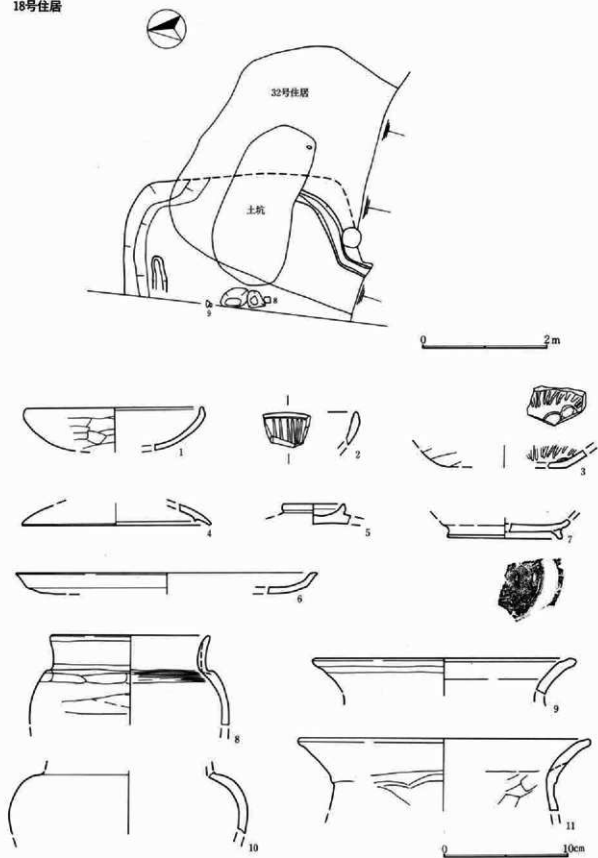


- 1 黒色土 FP粒を少量含む。土質は粗くボサボサしている。(II層)
- 2 暗褐色土 FP粒を多量に含む。カーボンを含み。
- 3 暗褐色土 FP粒を多量に含む。(2層よりも多い)
- 4 暗褐色土 FA主体、カーボンを少量含む。硬く締まる。
- 5 黄褐色土 FP粒主体、壁の崩れ。
- 6 暗褐色土 FP粒を多量に含む。
- 7 暗褐色土 FA主体。



第83図 18・32号住居

18号住居

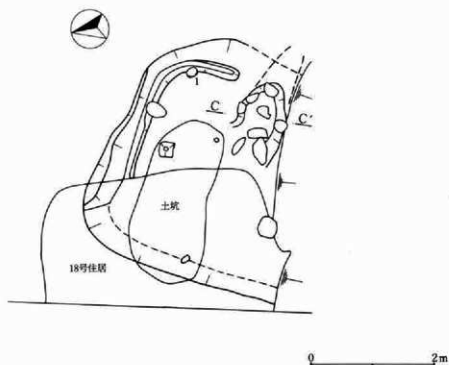


第84図 18号住居及び出土遺物

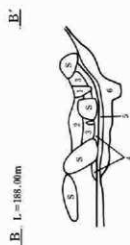
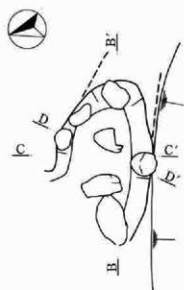
18号住居

**位置** DV-66、DU-66 **平面形状** 隅丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは41~47cmを測る。 **重複住居** 32号住居と重複関係にあり、18号住居の埋没土の一部は32号住居に掘り込まれている。また、18号住居と32号住居の重複部分に中〜近世、近代の土坑が位置している。 **規模** 東辺は3.60m、南辺は残存部分で2.30m、北辺は残存部分で1.80mを測る。 **主軸方位** N-90°-E **埋没土** 褐色系色調の土壌である。 **壁の状況** 床面から、北壁は140°の角度で立ち上がる。壁体を構築した材及び痕跡は確認できなかった。 **床面** 面積は5.382㎡を測る。Hr-FP粒を多量に含む暗褐色土を貼り床としている。 **周溝** 床面では、住居北辺の一部と南東のコーナー部分でみられる。掘り方調査において南壁に付随すると思われる周溝が検出された。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** 西側に小円形を呈する掘り込みがみられる。また、前述の通り南壁の周溝が検出された。 **竪位置** 検出されなかった。あるいは東壁から住居中央に達する土坑により破壊されている可能性も考えられる。 **遺物** 調査区西壁で床面から垂直間隔において土師器甕破片が出土している。他に埋没土中から土師器杯、須恵器蓋、椀、盤、短頸壺が出土している。土師器杯は削り出しによる稜を持つ。また、内面に放射状及び螺旋状暗文が施された杯もみられる。 **所見** 土器の様相から本住居の時期は7世紀後半と考えられる。

32号住居



第85図 32号住居



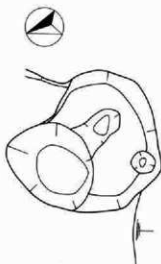
C. L=188.00m C'



D. L=188.00m D'

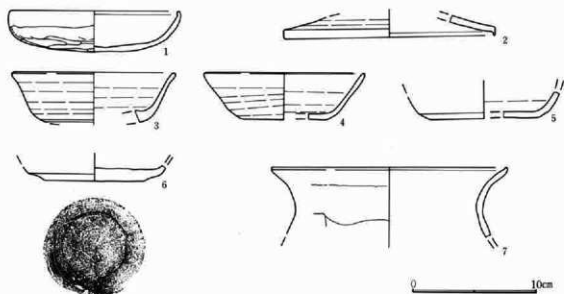


- |          |                       |
|----------|-----------------------|
| 1 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。攪乱。         |
| 2 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。            |
| 3 暗赤褐色土  | FP粒を僅かに含む。焼土化している。    |
| 4 黒灰色土   | カーボンが多量に含む。           |
| 5 暗黄褐色土  | 上面は強く焼けている。FA主体。      |
| 6 にぶい褐色土 | FAを主体とし、FP粒、黒色土を少量含む。 |



0 1m

第86図 32号住居竪



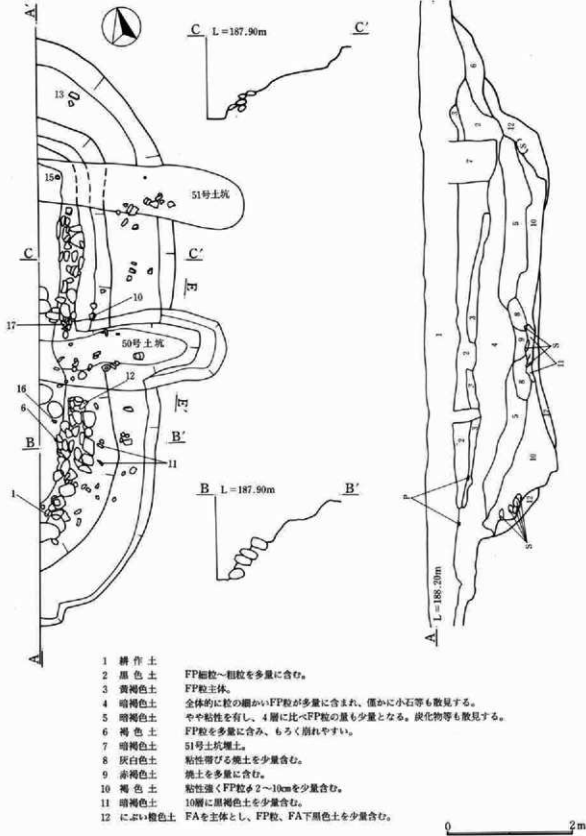
第87図 32号住居出土遺物

## 32号住居

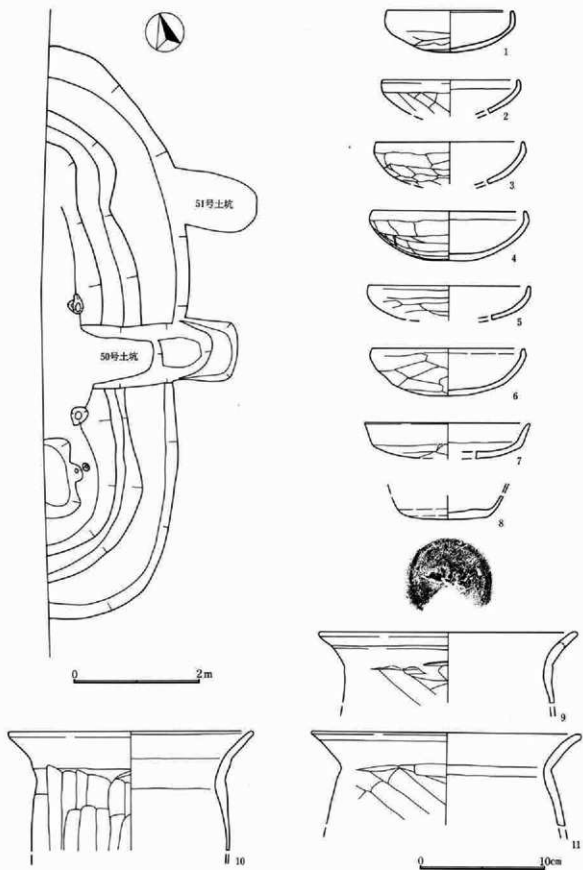
**位置** DU-65・66, DV-65・66 **平面形状** 圓丸方形と推定される。 **残存深度** 壁の高さは床面まで50～54cmで、周溝底面まで50～61cmを測る。 **重複住居** 18号住居と重複関係にあり、18号住居の埋没土を掘り込んで作られている。さらに、土坑にその埋没土を掘り込まれている。また、南側は二位屋城1号堀の掘削時に破壊されている。 **規模** 東辺は残存部分で2.20m、西辺は残存部分で3.40m、北辺は2.90mを測る。 **主軸方位** N-129°-E **埋没土** 18号住居埋没土に似て、Hr-FP粒を多量に含む土壌であるが、色調は黒味を帯びる。西壁際及び周溝はHr-FP粒主体層の流れ込みによって埋没している。 **壁の状況** 床面から、東壁は100°、西壁は130°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は126°を測る。壁体を構築する材あるいはその痕跡は検出できなかった。 **床面** 面積は7.461㎡を測る。掘り方からHr-FA主体土及びHr-FP粒を多量に含む暗褐色土を貼って床面を構築している。床面の一部は18号住居床面と同一面である。 **周溝** 北東コーナーから北壁に検出され、西壁に付随すると思われる南北方向の周溝も一部認められた。 **貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱穴** 検出されなかった。 **掘り方** ほぼ平坦である。 **竈位置** 東辺南隅 **竈方位** N-133°-E **竈規模** 全長は、推定1.00m、燃焼部幅0.50mを測る。 **竈形状その他** 二位屋城1号堀により一部破壊されており、本来はさらに南東へ伸びていたと考えられる。残存部には左側から煙道へ3石、右側に1石扁平な河原石を立位に据えており、壁に石を使用していたことが推定できる。燃焼部にも同様の河原石が落ちこんで出土した。この河原石を除去後、焼土を検出している。 **遺物** 北東コーナーで床面から16cmの垂直間隔において1の土師器杯が出土し、埋没土中から他にも土師器甕、須恵器蓋、杯が出土している。南側の床面には扁平な河原石が据えられていた。1の土師器杯はヘラ削りによる稜を持たず、底部にのみヘラ削りを施している。須恵器では蓋はカエリが消失しており、杯はすべて底部回転ヘラ削りである。 **所見** 床面密着の土器はみられないが、出土土器の様相は8世紀後半代とすることができる。



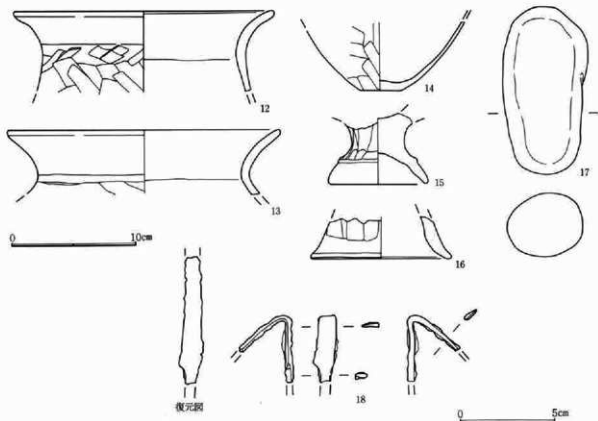
## 19号住居



第88図 19号住居



第39図 19号住居掘り方及び出土遺物(1)



第90図 19号住居出土遺物(2)

## 19号住居

**位置** DW-65・66、DX-65・66、DY-65・66 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**特徴** 壁に中段テラスを有している。中段テラスから床面に続く壁には石積みが認められる。

**残存深度** 壁の高さは床面まで東部分が $93\sim 108\text{cm}$ 、南部分が $118\sim 125\text{cm}$ で、確認面から中段までは $30\sim 49\text{cm}$ 、中段から底面までは東部分が $50\sim 63\text{cm}$ 、南部分が $86\sim 96\text{cm}$ を測る。 **重複住居** 単独で検出された。東壁の一部を50号土坑、51号土坑に掘り込まれている。

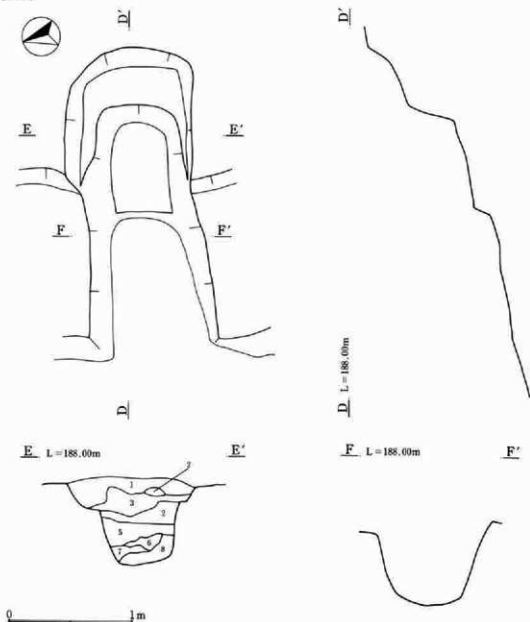
**規模** 東辺は $9.00\text{m}$ 、南辺は残存部分で $1.40\text{m}$ 、北辺は残存部分で $1.60\text{m}$ 、中段から床面に続く壁の下場の東辺は残存部分で $5.20\text{m}$ 、南辺は残存部分で $0.30\text{m}$ 、北辺は残存部分で $0.40\text{m}$ を測る。 **主軸方位** N- $101^{\circ}$ -E **埋没土** 土質は褐色系色調土と類似するが色調が黒味を帯びている。その上位層の3層はHr-FP粒主体層であり、下位層の5層は粘性を帯びて炭化物も含有している。

**壁の状況** 床面から、南壁は $90^{\circ}$ 、北壁は $135^{\circ}$ の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は $135^{\circ}$ 、北壁は $160^{\circ}$ を測る。中段テラスから床面への壁には河原石を小口積みにした状態が認められた。東壁から南壁にかけて残存しており、北壁には1石残るのみで石積みの状態はみられなかった。石積みは最も状態の良かった東壁南端では約 $81\text{cm}$ の高さがあるが、これはほぼ中段に達する高さである。

**床面** 残存面積は、中段テラス外側ラインまでが $13.293\text{m}^2$ 、床面で $1.647\text{m}^2$ を測る。床面は調査区範囲にかかったのはわずかで充分な確認が行えなかったが、貼り床をしていると思われる。また、中央部分が外縁よりやや高くなっているが、床面がわずかであったため、掘り足らなかった可能性がある。

**周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

50号土坑



- 1 褐色土 FP細粒～拳大のものを含むが3～5mm大が主となる。崩れやすく、もろい。
- 2 黄褐色土 FP細粒が主体である。
- 3 暗褐色土 FP細粒を含むが少量である。土質は砂質でサラサラする。
- 4 褐色土 やや大粒のFP粒を含む。また集土が僅かに含まれる。
- 5 褐色土 拳大のFP粒が含まれ、4層に比べ土質は細かい。
- 6 褐色土 5層にFAを少量含む。
- 7 褐色土 FAの混入をみる。FP粒の含有量は少なく締まりはよい。
- 8 暗褐色土 FP細粒、小石等が含まれ、僅かに炭化物、灰が認められる。砂質である。

第91図 50号土坑掘り方

柱 穴 住居のごく一部のみの調査であり、確認できなかった。

掘り方 Hr-FA 下黒色土を掘り抜いている。ほぼ平坦であるが、南側に浅い落ち込みがみられる。

竈位置 検出されなかった。現在50号土坑と呼称している掘り込みを、当初竈として調査したが内部に焼土等がみられないことから土坑に変更した。他に竈と思われる箇所は確認できなかった。

遺物 床面及び中段テラスから間隔をおいて土師器杯、甕、須恵器杯が出土している。埋没土中からも同様の器種と刀子、使用痕跡のある河原石が出土している。刀子は刃部で「V」字形に屈曲していた。土師器杯は口縁部と体部を画す稜線をもつものから、削り出しの稜線をもつもの、削りが口縁部に至らないもの等がみられる。須恵器杯の底部は不定方向のヘラ削りである。土師器甕は胴部から弯曲して口縁部に至るものと膨らみを持つ胴部から強く屈曲して口縁部となるものがみられる。

所見 土器の様相は7世紀後半と考えられる。なお、竈については土層断面に唯一焼土がみえる位置と50号土坑の位置が重なることや掘り方で土坑位置左右に袖石を据えたとと思われる小ピットが存在すること、土坑の深さにおいて他例に比べ一段と深いことなどから、50号土坑とした掘り込みが竈か、あるいは同位置に存在した竈を50号土坑が破壊している可能性も考えられる。

## 20号住居

位置 DX-62・63・64, DY-62・63・64 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは25~40cmを測る。

重複住居 単独で検出された。20、21号土坑に破壊されている。

規模 東辺は5.30m、西辺は4.60m、南辺は4.00m、北辺は3.90mを測る。

主軸方位 N-102°-E 埋没土 土質は褐色系色調土壌に類似するが色調が沈み、黒味を帯びる。壁際にはHr-FP主体層の流入が認められる。

壁の状況 床面から、東壁は80°、西壁は135°、南壁は110°、北壁は120°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及びその痕跡は検出できなかった。

床面 面積は17.739m<sup>2</sup>を測る。

周溝 検出されなかった。掘り方でもみられない。

貯蔵穴 検出されなかった。柱穴 検出されなかった。

掘り方 細かい凹凸の他、住居東部が大きく掘り込まれ、北西コーナーと南壁に小さな掘り込みがみられる。

竈位置 東辺中央やや南寄り 竈方位 N-109°-E

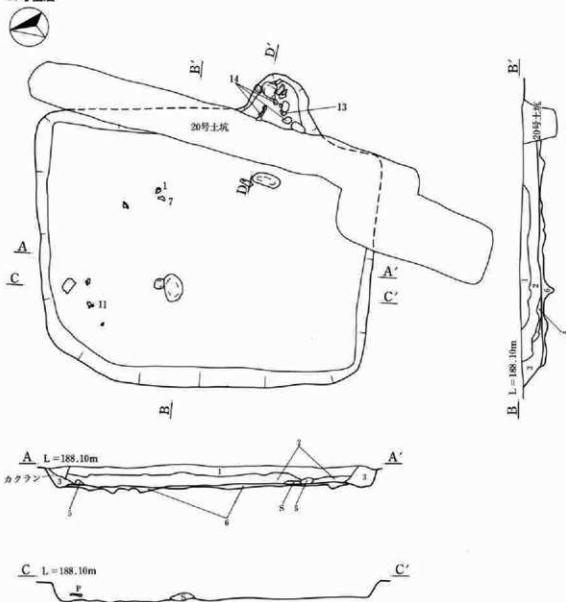
竈規模 全長は、推定0.80m（屋外長推定0.80m）、袖部幅推定1.35m、燃焼部幅0.80mを測る。

竈形状その他 土坑に掘り込まれているので内側端部の状況は不明である。外端部に大ぶりの河原石が認められるが、さらにその下位から土器や石が出土しているので、落ち込んだものと思われる。本来石を用いて構築していたか明らかではない。

遺物 竈からは14の須恵器甕が、その掘り方からは釘が出土している。床面では中央やや西寄りに偏平な河原石が据えられていた。床面から間隔をおいて内面に漆が付着した須恵器杯や羽釜が認められた。埋没土中からは須恵器杯、盤、灰釉陶器碗、瓶、未固結凝灰岩の竈構築材破片が出土している。灰釉陶器碗の施軸方法は漬け掛けで、虎溪山1号窯式期の資料である。17は住居構築以前の土器の流入であろう。

所見 出土遺物から当住居は10世紀後半の年代が与えられる。

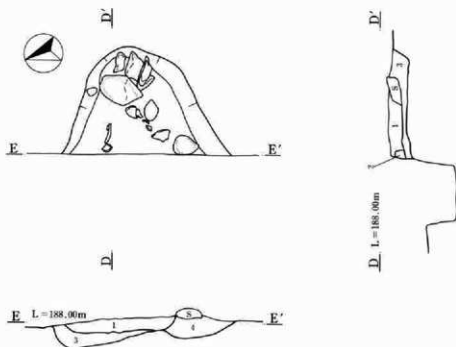
20号住居



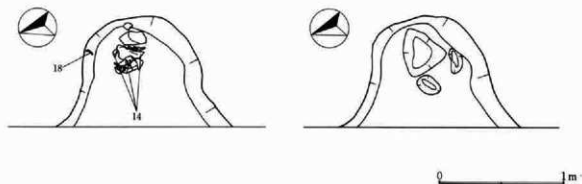
- |   |       |   |
|---|-------|---|
| 1 | 黒褐色土  | FP粒、小石を多量に含む。締まりは弱くもろい。                 |
| 2 | 黒褐色土  | 1層に比べFP粒の混入度は少なく、粒子も細くなる。FAの小ブロックを若干含む。 |
| 3 | 褐色土   | FP粒が主体を占め、もろく崩れやすい。                     |
| 4 | 灰黒色土  | 灰、炭化物、FP細粒を含む。きめは細かい。                   |
| 5 | よい褐色土 | FAの二次堆積層。                               |
| 6 | 暗褐色土  | FA主体で黒色土を含む。                            |

0 2m

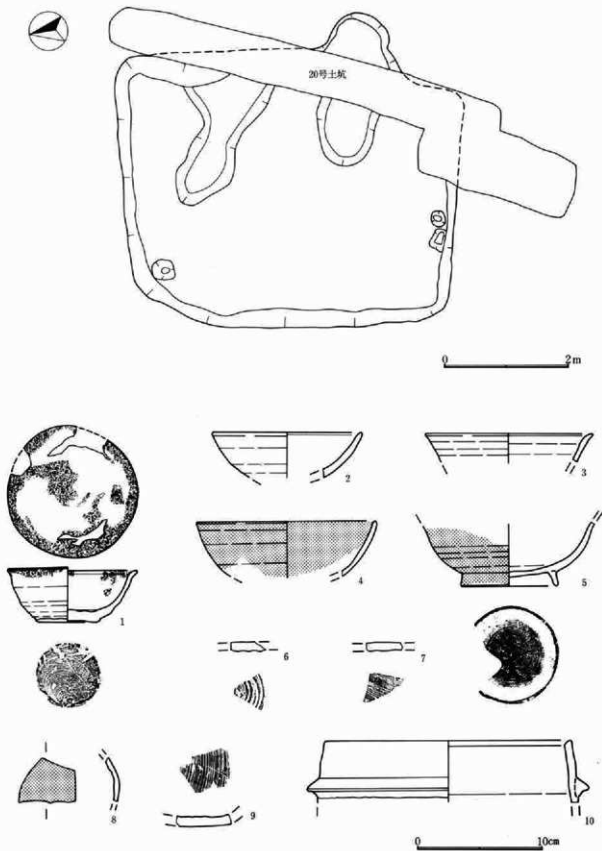
第92図 20号住居



- 1 暗褐色土 FP粒、小石を含み、若干炭化物が散見できる。締まりは弱く、バサつく。
- 2 におい棕色土 FAの二次堆積層。
- 3 褐色土 FP粒、FAを含む。FAは小ブロックとなり、土質は砂質を呈す。締まりは弱い。
- 4 暗褐色土 FP粒を多量に含む。FAは見られない。

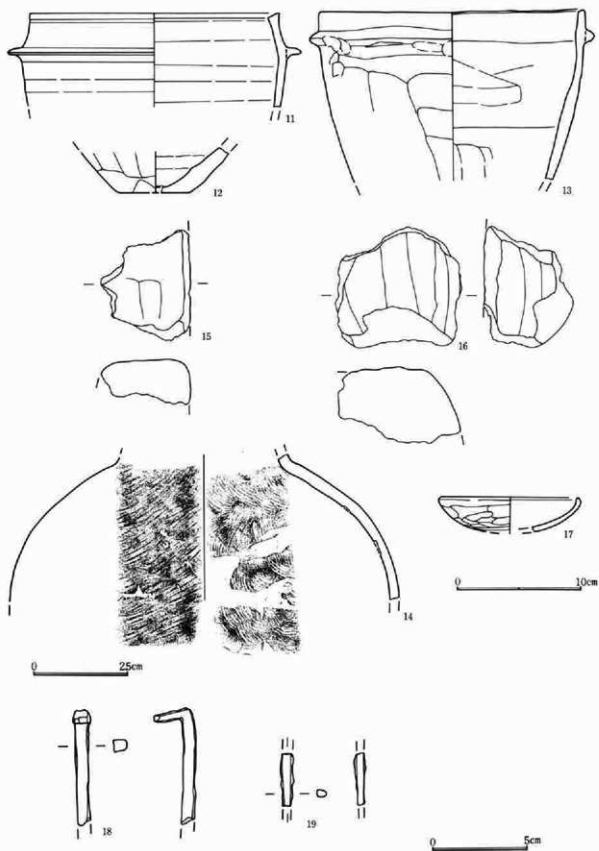


第93図 20号住居竈



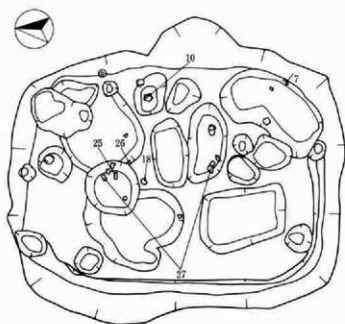
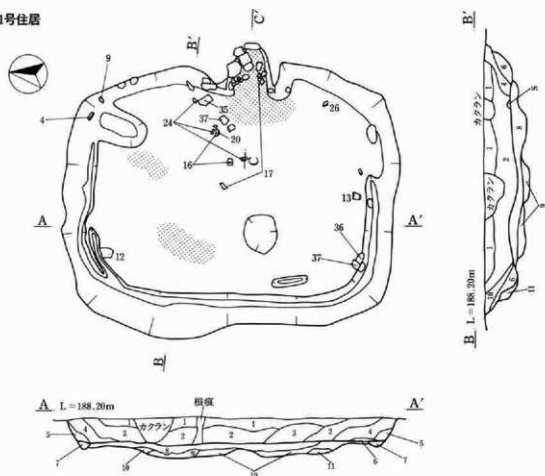
第94図 20号住居掘り方及び出土遺物(1)





第95图 20号住居出土遺物(2)

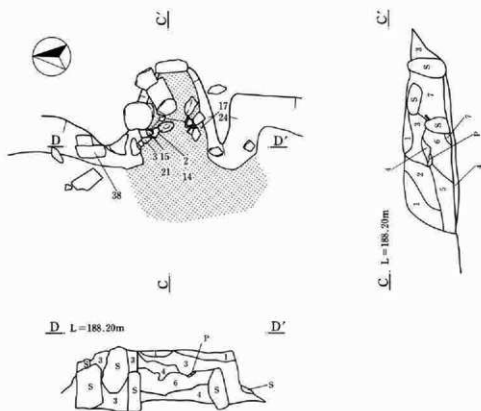
21号住居



- |    |        |                                       |
|----|--------|---------------------------------------|
| 1  | 暗褐色土   | FP粗粒～3cm大を多量に含む。締まりは弱い。               |
| 2  | 褐色土    | FP粒が主体となる。5mm大前後が主成分を占める。締まりは弱い。      |
| 3  | 黄褐色硬石  | FP粒がほぼ純層で流入する。                        |
| 4  | 暗褐色土   | FP粒は2層に比べ量的に少なくなり、小石が混入する。若干炭化物が含まれる。 |
| 5  | 褐色土    | FP粒が主体を占める。壁の崩壊と思われる。                 |
| 6  | 褐灰色土   | FAが主体となり、少量FP粒を含む。土質は細かい。             |
| 7  | 褐色土    | FP粒主体で、上位に薄い褐色土層が位置する。                |
| 8  | 暗褐色土   | 炭化物が多量に混入し、よく締まる。                     |
| 9  | 暗褐色土   | FA、炭化物を含む。炭化物の量は8層より多い。               |
| 10 | 褐色土    | FAブロックを含む。砂質で締まりはさほど強くない。             |
| 11 | におい棕色土 | FA主体で、褐色土を少量含む。                       |

0 2m

第96図 21号住居

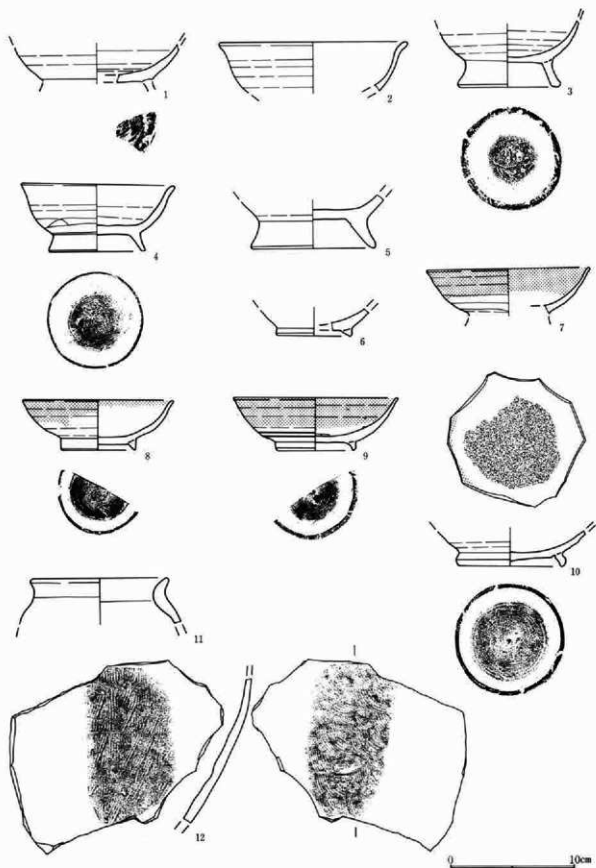


- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含みろい。
- 2 褐色土 5～6mm大のFP粒を多量に含む。
- 3 明褐色土 FP粒を若干含むが粘性が強きめが細かい。FAが主体となる。
- 4 明褐色土 3層に類似するがFP粒、焼土が僅かに含まれる。
- 5 暗褐色土 FP粒を主体とする。
- 6 暗褐色土 S層に比べFP粒の量は少くなり炭化物を少量含む。
- 7 褐色土 FP粒、FAを含み、やや粘性を有する。

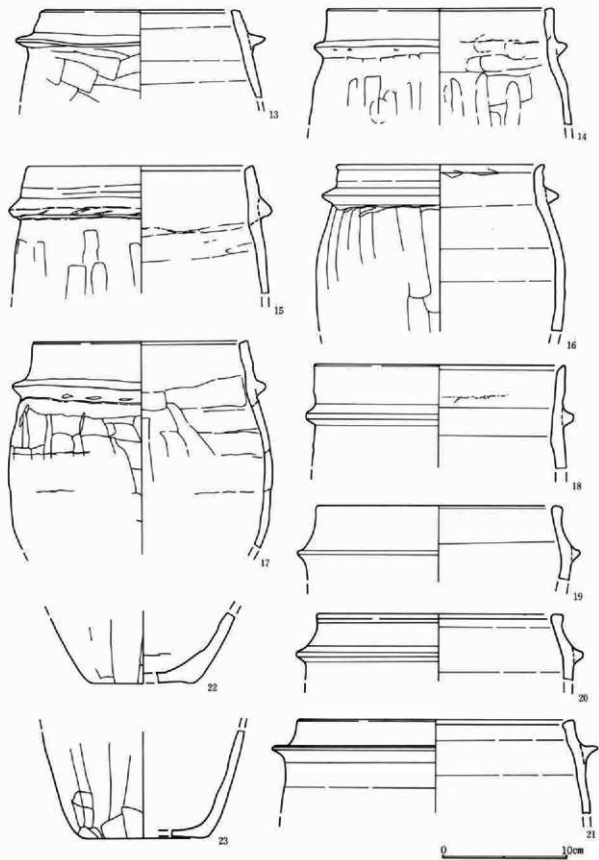


0 1m

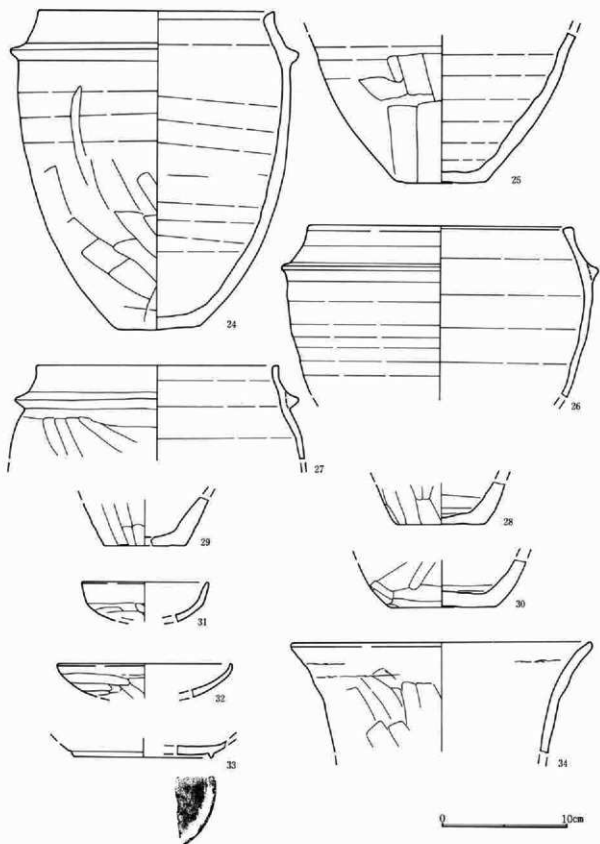
第97図 21号住居電



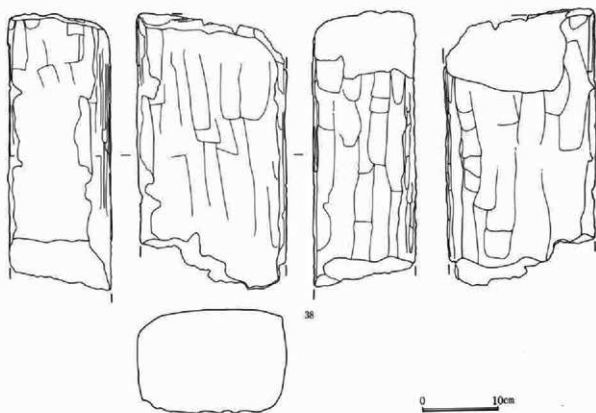
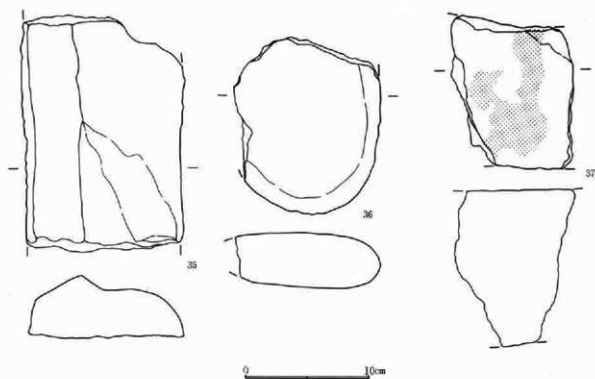
第98図 21号住居出土遺物(1)



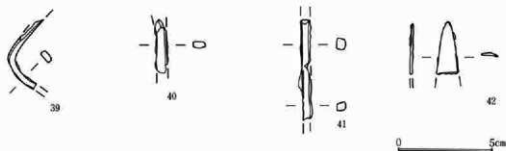
第99图 21号住居出土遺物(2)



第100図 21号住居出土遺物（3）



第101図 21号住居出土遺物(4)



第102図 21号住居出土遺物(5)

### 21号住居

位置 EA-63・64, EB-63・64 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで35~49cmで、周溝底面まで45~52cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は5.00m、西辺は5.00m、南辺は3.80m、北辺は3.70mを測る。

主軸方位 N-90°-E

埋没土 土質は褐色系土壌と類似するが色調が沈み黒味を帯びる。上位層は黒色系土壌である。Hr-FAを主体とした土層が壁際に位置し、その上位にHr-FPを少量含む土層が流入し、さらにHr-FPを多量に含む土層及びHr-FP粒の2次堆積層が認められる。

壁の状況 床面から、東壁、北壁、南壁は120°、西壁は110°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は152°を測る。壁際では前述のとおりHr-FAを主体とした土壌が認められる。

床面 面積は15.324㎡を測る。掘り方から炭化物を含む暗褐色土を盛って床としている。住居北側及び西側で炭化物、カーボンの分布箇所が認められる。

周溝 住居北辺、西辺、南辺でみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 掘り方ではピット状の掘り込みがいくつか認められたが、柱穴とは断定できなかった。

掘り方 凹凸が激しく大小の円形、方形、不定形の掘り込みが一面に認められる。中央やや北寄りの円形掘り込みでは底面から灰白色灰、炭化物、カーボンが互層となって認められ、その上をHr-FA主体土が被っていた。また、住居各コーナーには土坑状あるいはピット状の掘り込みがみられ、深さは14~27cmを測る。南辺での各距離は2.1m、北辺では2.3m、東辺では3.9m、西辺では4.2mを測る。

電位置 東辺中央 電方位 N-90°-E

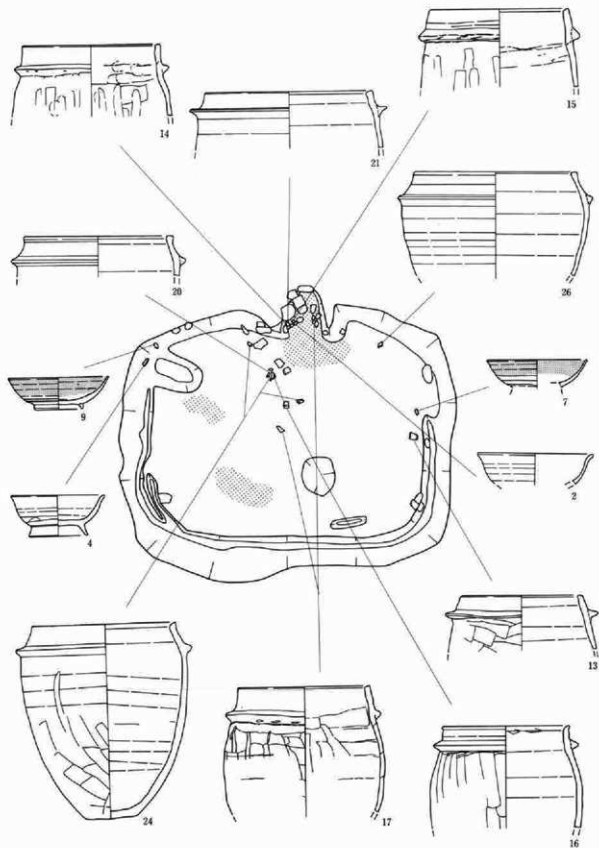
電規模 全長は、1.30m(屋外長0.90m、屋内長0.40m)、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.65mを測る。

電形状その他 左袖に土塊の可能性のある面取りした立方体の電構築材を立位に据え、電壁や煙道外端にも河原石を用いている。燃焼部には棒状鏝を用いた支脚が認められる。

遺物 竈から羽釜が4個体出土しているが、削りが鈍まで達しているものがみられる。北壁際からは床面から8cmの間隔において須恵器椀が、竈前面からは羽釜が、隣接するように灰袖陶器椀が出土している。灰袖陶器椀は大原2号窯式期と虎浜山1号窯式期である。他に須恵器椀、鉄製品、石類がみられる。なお、土師器杯や甕、須恵器椀は住居構築以前の時期の土器が流入しているものと思われる。

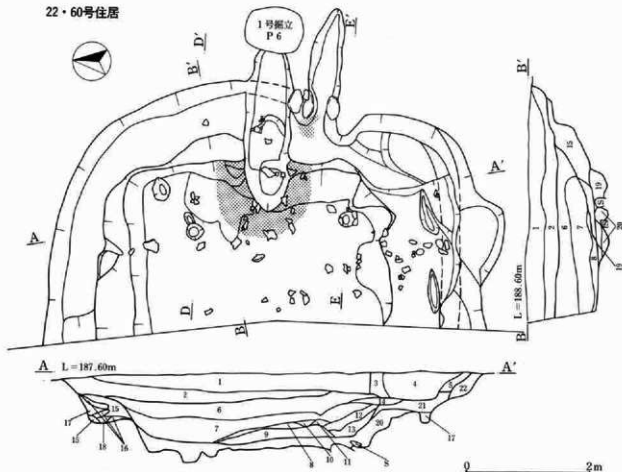
所見 灰袖陶器等の様相から、本住居は10世紀前半の年代を与えられる。





第103图 21号住居遺物出土位置

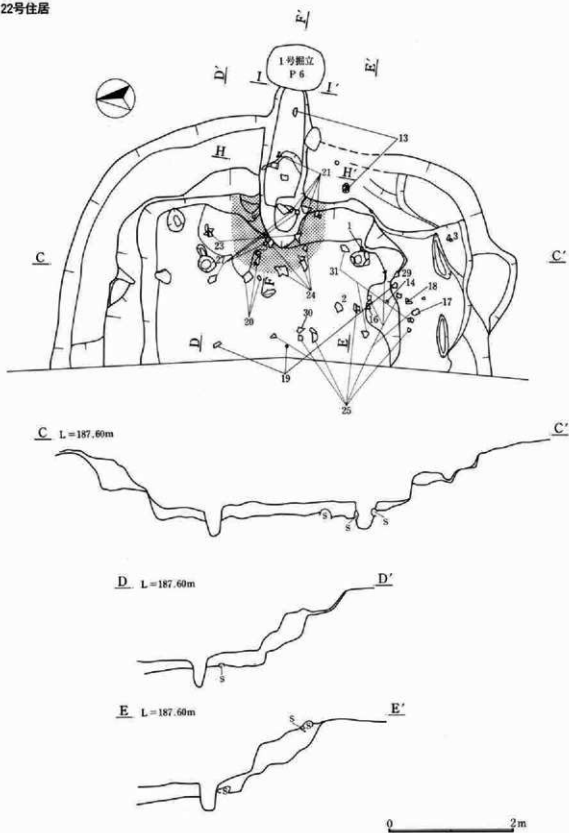
## 22・60号住居



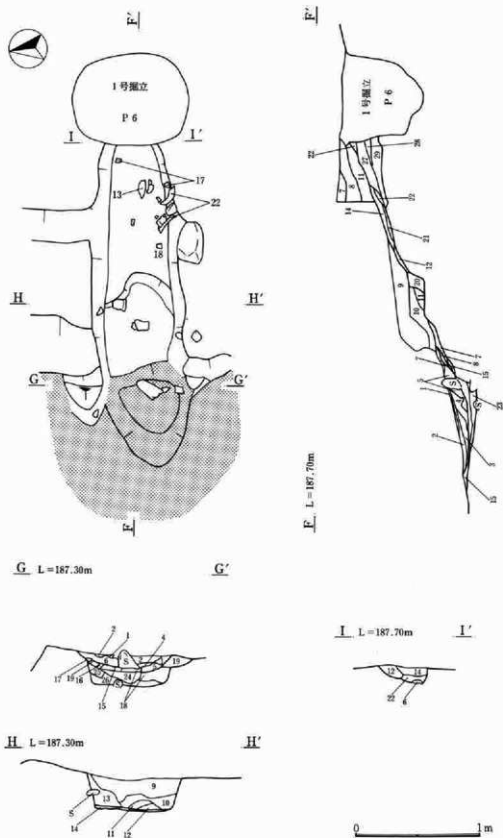
- 1 暗褐色土  $\phi$ 約5mmのFP粒を中心に含む。 $\phi$ 2~3cm大、約5cm大のFP粒を含む。締まりはよいがボロボロ崩壊する。(29号住の1層がFP粒の大小により2層に分かれたもの)
- 2 暗褐色土  $\phi$ 約5mmのFP粒と $\phi$ 5mm以下のFP粒を1層より多量に含む。炭化物を僅かに含む。1層より僅かに黄色味を得びる。1~3cm大のFP粒を含む。(29号住の1層がFP粒の大小により2層に分かれたもの)
- 3 暗褐色土 擾乱層。 $\phi$ 約1cmほどの小石を多量に含む。
- 4 暗褐色土 擾乱層。 $\phi$ 約5mm大を中心にFP粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 締まりがよく $\phi$ 3cmほどのFP粒を少量含む。粘性を若干帯びる。
- 6 暗褐色土  $\phi$ 5mm~それ以下のFP粒を含む。約1cm以上のFP粒を少量含む。やや砂質であるが因にいくにつれて締まりがよくなり僅かに粘性を得びる。(29号住の2層)
- 7 暗褐色土  $\phi$ 5mm大と5mm以下のFP粒を多量に含む。 $\phi$ 1cm大のFP粒を含むが、1cm大以上のFP粒は少ない。炭化物をまれに含む。(29号住の3層)
- 8 暗褐色土 7層土に明褐色のFAが混入する。
- 9 黒褐色土 FA下黒色土に薄い小豆色のFAがブロック状に入っている。
- 10 暗褐色土 7層土に3~5cm大のFP粒、薄い小豆色のFAが入る。
- 11 暗黄褐色砂石  $\phi$ 3cm大前後のFP粒が詰まる。
- 12 暗黄褐色土  $\phi$ 1cm大前後のFP粒を中心に、 $\phi$ 5mm大、5mm以下のFP粒が詰まる。明褐色、薄い小豆色のFAをブロック状に含む。
- 13 暗褐色土  $\phi$ 5mm大以下のFP粒を多量に含む。FA主体の土。
- 14 暗褐色土 6層土に焼土粒、炭化物を僅かに含む。
- 15 ぶい褐色土 FA主体。ブロック状に混入。
- 16 灰褐色土 FAの各ユニットが混じり合う。
- 17 褐色土 FP粒主体で、褐色土を含む。
- 18 灰褐色土 16層にFP粒を含んだ層。
- 19 暗褐色土 FAの小ブロックが主体。炭化物も含む。板条状になる。
- 20 黒褐色土 FAと黒色土からなる。FAはブロック状に入る。
- 21 黒褐色土 9層土に類似するが、FAと黒色土が同じ割合で混じり合う。 $\phi$ 5mm大のFP粒を含む。
- 22 黄褐色砂石 FP純層。

第104図 22・60号住居

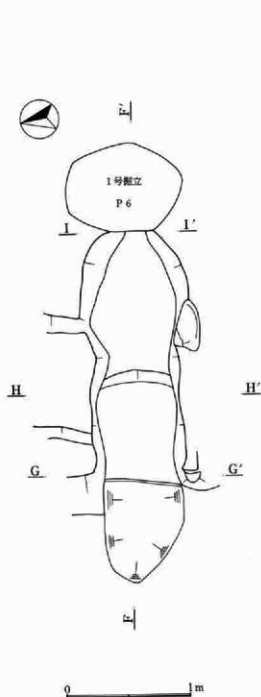
22号住居



第105图 22号住居

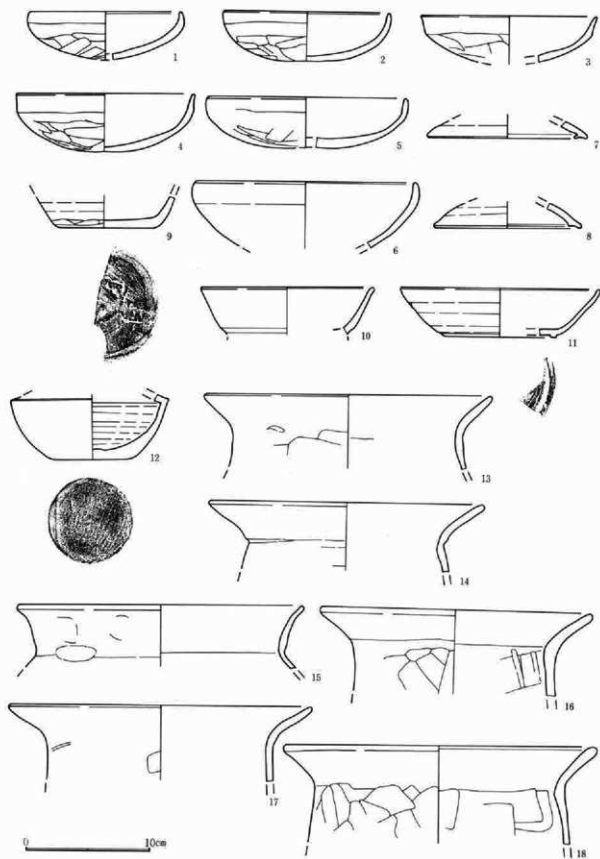


第106図 22号住居竈

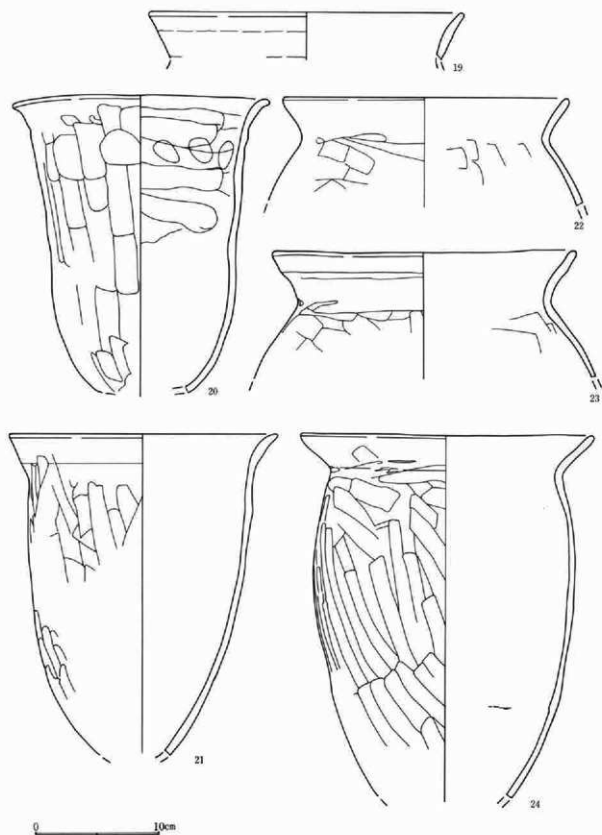


- 1 橙褐色土 焼土を含み、粘性を帯びる。FP粒を含まない。
- 2 褐色土 粘性を帯び、非常に締まりがよい。焼土を少量含む。FP粒は含まない。
- 3 暗灰色土 粘性を帯びる。白色灰を含む。
- 4 白色土 粘性を帯びる。土質は細かい。焼土を少量含む部分もある。
- 5 橙褐色土 1層に類似するが焼土を多量に含む。
- 6 明褐色土 FA下黒色土ブロック(φ1cm大)、灰白色ブロック(φ1cm大)、焼土ブロック(φ5mm大)を含む。
- 7 におい橙黄色土 FAユニット(?)粘性が強い。
- 8 灰白色土 FAユニット(?)粘性が強い。
- 9 褐色土 φ3mmほどのFP粒を含む。焼土粒を僅かに含む。黄褐色ブロックを含む。
- 10 暗褐色土 9層より締まりがあり、粘性を帯びる。黄褐色ブロックを含む。焼土粒を少量含む。カーボン粒を含む。
- 11 灰褐色土 黄褐色ブロックを含む。17層土ブロックを含む。10層より色調が明るい。
- 12 灰色土 FAユニット(?)土質は細かくサラサラする。
- 13 明褐色土 φ5~10mm大ほどのFP粒、黄褐色粒を含む。焼土粒を僅かに含む。
- 14 淡橙黄色土 FA主体でFA下黒色土を含む。φ5mmほどのFP粒を含む。
- 15 黒色土 FA下黒色土主体。6層土を少量混入する。焼土を少量含む。
- 16 明褐色土 6層に類似するが色調が暗い。
- 17 灰褐色火山灰 粘性を帯びるFA。FP粒は含まない。
- 18 褐色土 焼土を少量含む。土質は細かい。FP粒は含まない。
- 19 暗褐色土 黄褐色ブロック、φ5mm大前後のFP粒を含む。
- 20 褐色土 12層土を上位に含む。焼土粒を僅かに含む。8層土を含む。φ5~10mmほどのFP粒を含む。
- 21 明黄褐色土 FAユニット。
- 22 橙黄色土 φ5mmほどのFP粒を含む。粘性を帯びる。
- 23 におい橙黄色土 FA主体で、FA下黒色土を含む。
- 24 褐色土 φ5mm以下のFP粒、カーボンを含む。焼土を多量に含む。
- 25 黒色土 黒色土に少量のロームが混じる。FAをブロック状に含む。
- 26 黄褐色土 ローム層。
- 27 褐色土 FP粗粒、焼土粒を含む。やや砂質。
- 28 褐色土 FP粗粒が主体となる。
- 29 暗褐色土 FP粒はほとんど含まず、土質は細かくよく締まる。

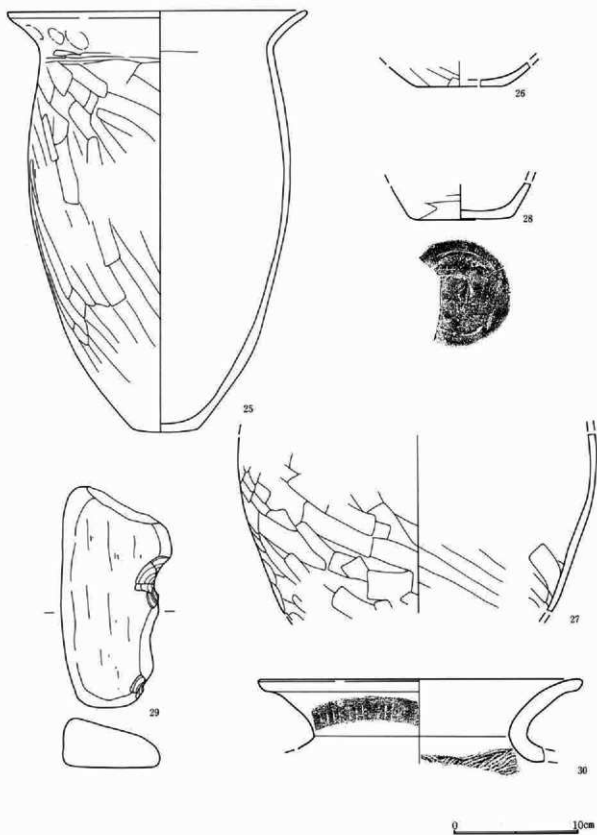
第107図 22号住居掘り方



第108図 22号住居出土遺物(1)

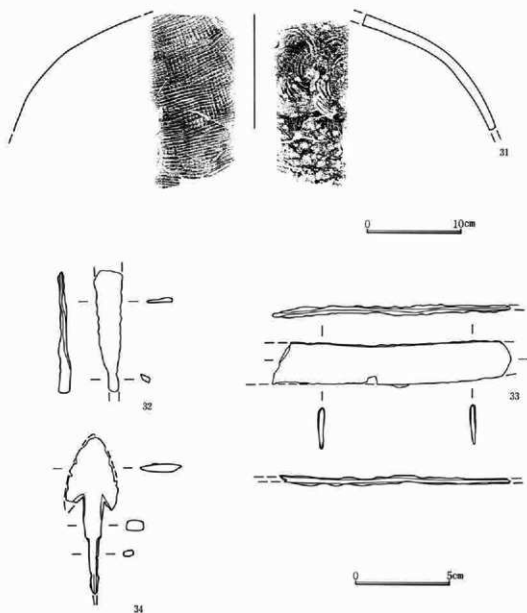


第109图 22号住居出土遺物(2)



第110図 22号住居出土遺物（3）





第111図 22号住居出土遺物(4)

## 22号住居

位置 EH-63・64、EI-63・64、EJ-63・64 平面形状 隅丸方形と推定される。

特徴 中段テラスを有する住居である。

残存深度 壁の高さは床面まで95~101cm、確認面から中段までは29~34.4cm、中段から底面までは34~36cmを測る。

重複住居 60号住居と重複関係にあり、22号住居の埋没土は60号住居に掘り込まれている。外形プランはほぼ60号住居のプランと同一である。また、1号掘立柱建物の柱穴に煙道外端を掘り込まれている。

規模 東辺は6.50m、南辺は残存部分で3.20m、北辺は残存部分で3.40m、中段テラスから床へ落ち込む

部分の東辺は4.20m、南辺は残存部分で2.40m、北辺は残存部分で2.55mを測る。

**主軸方位** N-95°-E

**埋没土** 褐色系の色調を呈す土壌が主体でやや色調が沈む。床面を被うのはHr-FA下黒色土主体土とHr-FA主体層及び褐色系土壌である。南壁際ではHr-FA主体層が流入したのちHr-FP主体層が入る。

**壁の状況** 床面から、西壁から北壁は130°、南壁は135°の角度で立ち上がる。中段テラスは東壁は周溝状に窪む部分では下からHr-FP粒含有黒色土、淡色黒ボク土、Hr-FA粒含有黒色土、Hr-FA含有淡色黒ボク土、Hr-FA二次堆積の順で水平堆積をしている。窪まない部分でも上位3層が認められる。北壁ではEPAラインの斬り割りの観察では、周溝状に落ち込む部分ではHr-FA各ユニット混合層にHr-FP粒を含む層が埋没土であり、その上にHr-FA各ユニット混合層、Hr-FAシルトユニット、砂質ユニット、Hr-FA含有黒色土が水平堆積している。本住居の中段テラスは地山削り出しで造形した後、手を加えて改築した可能性がある。地山削り出しの中段テラスはHr-FA層を約13cm掘り残して作られており、一部周溝状の溝は黒色土まで掘り込んでいる。

**床面** 面積は7.389㎡を測り、中段テラス外側ライン内は19.869㎡である。掘り方から4～31cmほど黒褐色土、暗褐色土を塗って床としている。確認した床面は地山削り出しの中段テラスより低いレベルであり、黒色土層下位に相当するレベルである。

**周溝** 住居南辺の一部で溝状の落ち込みがみられる。掘り方では、住居北東のコーナー部分でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 南北間隔は、2.42mを測る。深さは、掘り方より25～30cm、床面からは43～44cmを測る。

**掘り方** Hr-FA下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土上面まで掘削している。中段テラスでは地山削り出しの中段テラスが検出できた。なお、掘り方調査前に調査区壁の保全のため土留めを施したので調査範囲が狭くなっている。

**電位置** 東辺中央 **電方位** N-101°-E

**電規模** 全長は、推定2.50m(屋外長推定1.00m、屋内長推定1.50m)、袖幅1.15m、燃焼部幅0.50mを測る。

**電形状その他** 盛土中段テラスを掘り込んで作られる。左袖部は明確ではない。燃焼部には支脚の可能性のある河原石が認められる。燃焼部からは粘性を帯びた白色土の堆積がみられた。

**遺物** 電煙道からは煙道底面から間隔をおいて複数の土師器壺の口縁部が出土している。また、電周辺からも複数の土師器壺が出土した。25は南壁中段方向から床面へ破片として流れ込む形で出土した。他に土師器杯、須恵器杯・碗、蓋、平瓶の出土をみた。また、使用痕跡が認められる鏝や鉄鏝等の鉄製品も認められる。土師器壺は口縁部の屈曲が弱く胴部の膨らみが弱いものと、口縁部が屈曲し胴部の膨らみのあるものがみられ、土師器杯も削りによる稜を持つものと持たないものがある。

**所見** 土器の様相から本住居は7世紀末葉に比定できよう。

#### 60号住居

**位置** EH-63・64、EI-63・64、EJ-63・64 **平面形状** 北東がやや膨らんだ隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで21.5～23cmを測る。

**重複住居** 22号住居と重複関係にあり22号住居の埋没土を掘り込んで作られている。

規模 東辺は6.00m、南辺は残存部分で3.30m、北辺は残存部分で3.50mを測る。

主軸方位 N-106°-E

埋没土 褐色系色調を呈する土壌である。やや色調が沈む。

壁の状況 床面から、西壁から北壁は130°、南壁は125°の角度で立ち上がる。竈右袖部で石積みがみられた。

床面 面積は18.852㎡を測る。22号住居の埋没土である暗褐色土を床面としており、外縁部は中段テラスを利用している。暗褐色土は西部で締まりが良い部分がある。土層断面では貼り床は確認できなかった。

周溝 検出されなかった。掘り方でもみられない。

貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

掘り方 貼り床が確認できず明確ではない。

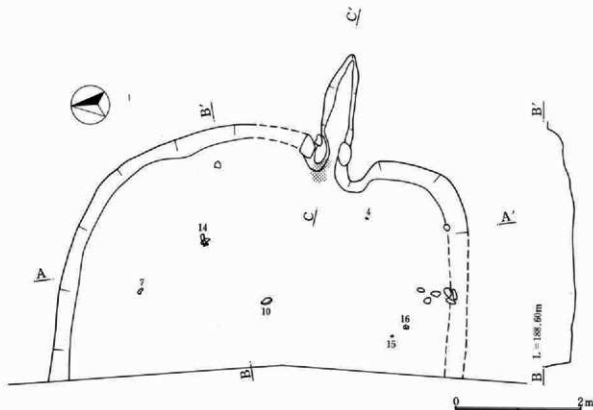
竈位置 東辺中央やや南寄り 竈方位 N-104°-E

竈規模 全長は、推定2.00m、袖部幅0.60m、燃焼部幅0.25mを測る。

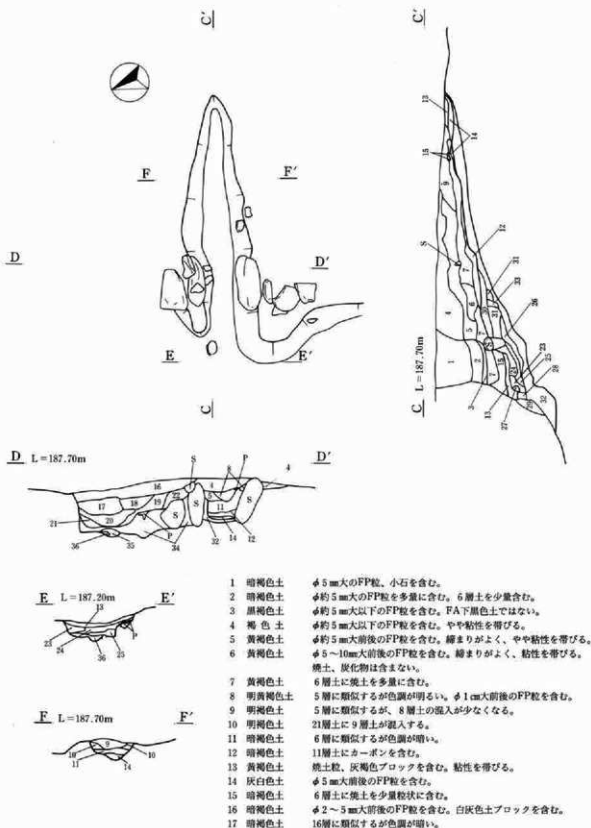
竈形状その他 煙道が長く伸びる。左右袖近辺に偏平な河原石を用いており、その下位には角閃石安山岩の小礫もみられた。燃焼部には棒状の河原石を立位に据えて支脚としている。右袖内部では壁に河原石を縦1列に4段積み上げている状態がみられた。竈燃焼部は22号住居の中段テラスを利用している。

遺物 土師器杯、鉢、盤、甕、須恵器蓋、杯が出土している。須恵器杯の底部は不定方向のヘラ削りである。竈掘り方から出土した土師器杯は削り出しによる稜を有しているが、他の土師器杯は削り出しの稜を失っている。竈口縁部は屈曲し胴部は膨らむと思われる。若干60号住居との接合関係が認められる。

所見 出土した土器の様相から8世紀初頭の年代が考えられる。なお、調査時に床面の軟弱部分は掘り抜いてしまっている。そのため、竈燃焼部レベルや土層断面から考えて床を復元した。

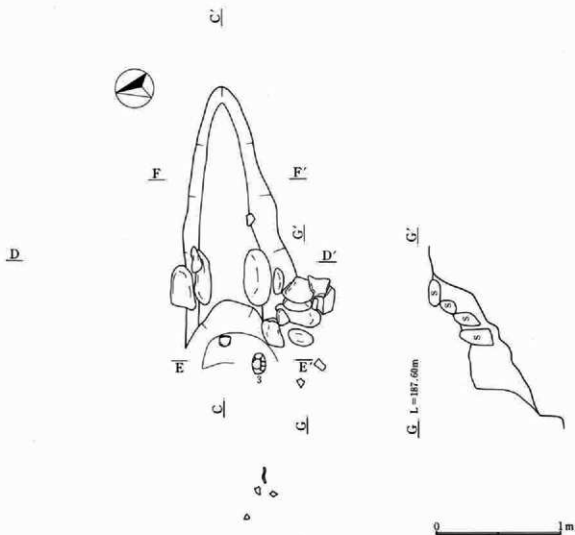


第112図 60号住居

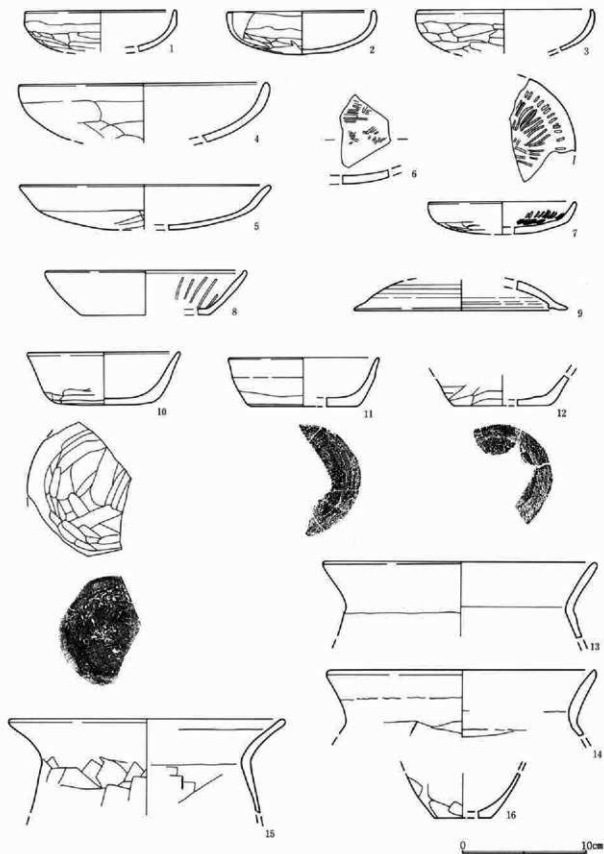


第113図 60号住居遺

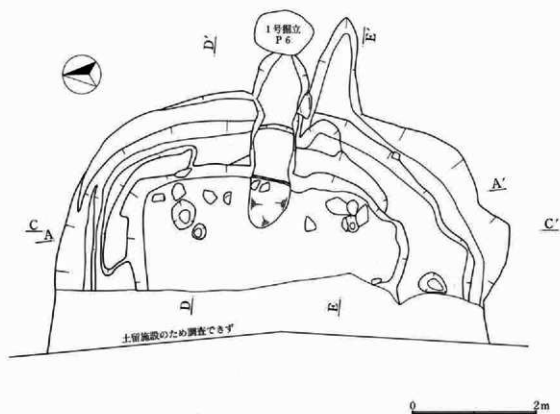
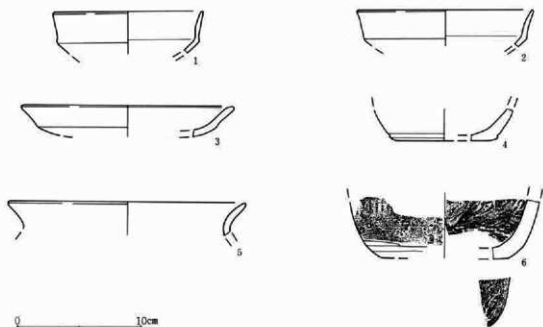
- |           |   |
|-----------|---|
| 18 黒褐色土   | 8、14層土ブロック(φ5mm大)を含む。φ3mm大のFP粒を含む。        |
| 19 暗褐色土   | 20層土よりFA(灰白色・明褐色)が多量に混入する。                |
| 20 暗褐色土   | 17層土にFA(灰白色)が混入する。                        |
| 21 明黄褐色土  | φ2mm大前後のFP粒を含む。土質は細かい。FA主体。               |
| 22 褐色土    | 5層に類似するがやや色調が暗い。                          |
| 23 赤褐色土   | 13層土に焼土が多量に混入する。                          |
| 24 褐色土    | 粘性が強く25層土に焼土が混入する。                        |
| 25 灰白色土   | 粘性を帯び、φ5mm大ほどのFP粒が混じる。                    |
| 26 赤褐色土   | FP粒(φ5mm大ほど)を含む。焼土に灰を含み、バサバサした感じ。         |
| 27 褐色土    | φ3～5mm大のFP粒がざっしり混まる。                      |
| 28 暗褐色土   | 29層土に焼土を僅かに含む。                            |
| 29 暗褐色土   | φ5mm以下のFP粒を多量に含む。1cm大ほどのFP粒を僅かに含む。粘性を帯びる。 |
| 30 褐色土    | FP細粒、焼土を含む。締まりは弱い。                        |
| 31 赤褐色土   | 焼土を多量に含む。また焼土がブロック状に混入する。                 |
| 32 灰褐色土   | 焼土が僅かに混入する。FP粒(5mm大)が含まれる。                |
| 33 におい褐色土 | FAにFP粒を少量含む。                              |
| 34 暗褐色土   | 粘性を帯び土質は細かく締まりはよい。FP粒を少量含む。               |
| 35 暗褐色土   | FP粒、FAを少量含む。                              |
| 36 におい褐色土 | FA主体で暗褐色土を少量含む。                           |



第114図 60号住居電掘り方

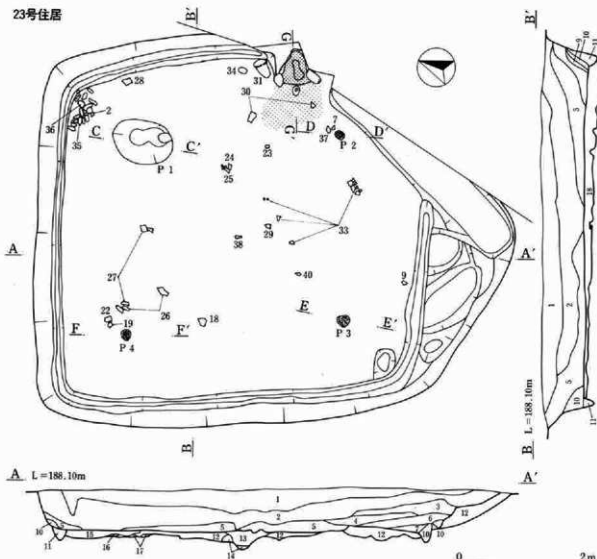


第115図 60号住居出土遺物



第116図 22・60号住居掘り方及び出土遺物

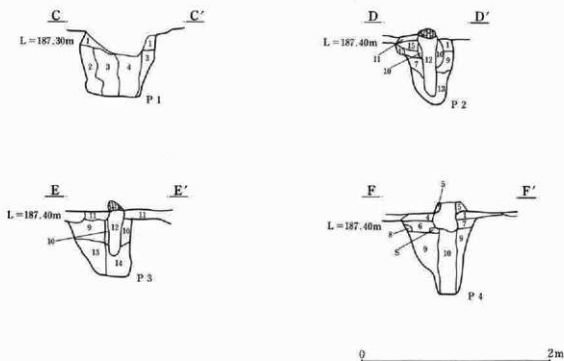
23号住居



- |           |  |
|-----------|--|
| 1 黒色土     | FP粒を多量に含む。                                   |
| 2 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。                                   |
| 3 暗灰褐色土   | FAをブロック状に多量に含む。FP粒、カーボンを少量含む。                |
| 4 暗黄褐色土   | FP粒を主体とする。                                   |
| 5 暗灰褐色土   | FAを主体とし、FP粒を僅かに含む。カーボンを多量に含む。                |
| 6 暗灰褐色土   | FAを主体とし、カーボンを少量含む。                           |
| 7 黒褐色土    | FAを主体とし、カーボンを僅かに含む。5層にやや類似する。                |
| 8 暗褐色土    | FP粒を少量、FAをブロック状に少量含む。                        |
| 9 黒色土     | 炭化材を主体とする。                                   |
| 10 暗黄褐色土  | FP粒主体、壁の崩れ。                                  |
| 11 暗黄褐色軽石 | FP粒主体で10層に類似するが、上位に薄い暗褐色土層が位置する。             |
| 12 灰褐色土   | FAを主体とし、FA下黒色土をブロック状に少量含む。                   |
| 13 暗灰褐色土  | FAを主体とし、FA下黒色土が12層より多量に混入する。                 |
| 14 黒色土    | FA下黒色土を主体とし、FA粒を少量含む。                        |
| 15 灰褐色土   | FAサージ等の砂質FAを混ざれた土の中に、粘性FA(S-1・2)が少量ブロック状に入る。 |
| 16 黄褐色土   | φ2~3mmのFP粒がざっしり詰まる。                          |
| 17 灰褐色土   | FA最下層ユニットの中にFA下黒色土がごく少量混じる。                  |
| 18 暗灰褐色土  | FAを主体とし、13層に類似するが、FA下黒色土をブロック状に多量に含む。        |

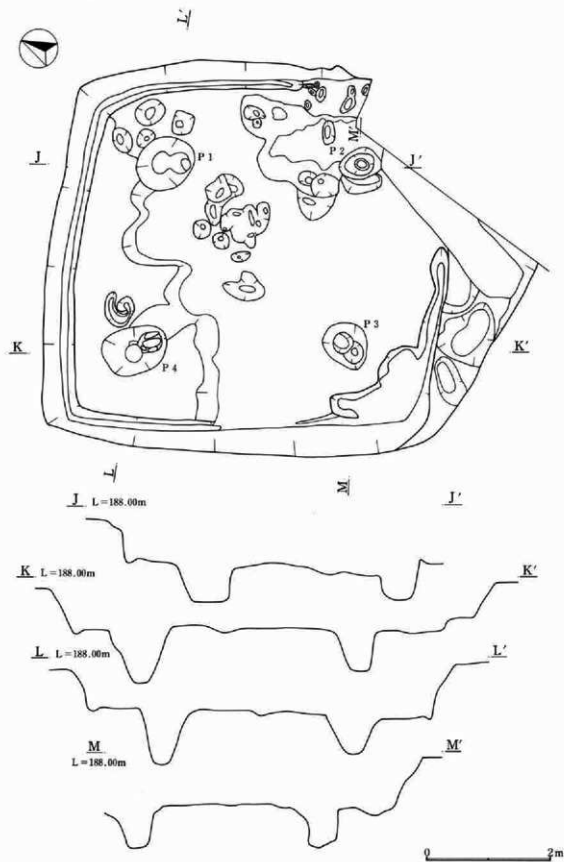
第117図 23号住居



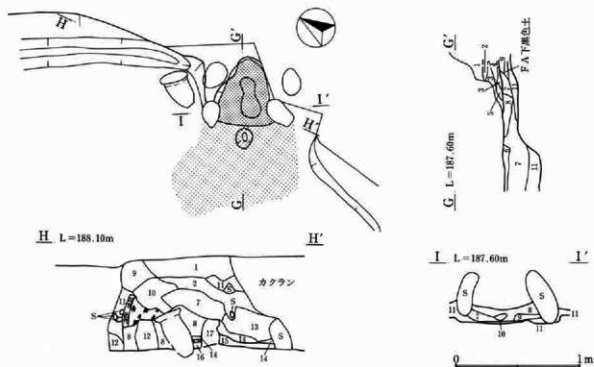


- 1 灰白色土 FA主体でFA下黒色土、ロームが若干混じる。φ 5 mmほどのFP粒を含む。
- 2 灰白色土 FAにFA下黒色土をブロック状に含む。ローム土を若干含む。φ 5 mmほどのFP粒を少量含む。
- 3 浅黄褐色土 FAにFA下黒色土、ロームをブロック状に多量に含む。φ 5 mmほどのFP粒を少量含む。
- 4 灰褐色土 FAにロームを若干含む。φ 5 mmほどのFP粒を少量含む。炭化材を含む。ボンボンして締まりなし。
- 5 褐色土 住居床下層埋設土。φ 2~3 mmから1 cm大のFP粒を多量に含む。
- 6 灰褐色土 FAとFA下黒色土が混じる。φ 5~10 mm大のFP粒を含む。
- 7 灰褐色土 FAの下層ユニットである。あまりその他の夾雑物を含まない。
- 8 黒色土 FA下黒色土。
- 9 暗褐色土 6層土にさらにFA(7層土)をブロック状に含む。
- 10 灰褐色土 φ 5~10 mm大のFP粒を含む。ボンボンして締まりなし。
- 11 褐色土 FAブロックを含む。ローム土も少し混じる。FA下黒色土主体だが厚味が薄い。
- 12 灰褐色土 10層に似るがφ 5~10 mmのFP粒を多量に含む。ボンボンして締まりなし。
- 13 暗黄褐色土 FAをブロック状に少量含む。FA下黒色土をブロック状にごく少量含む。FP粒は含まない。ローム土主体だが色調が暗い。黄色粒を含む。
- 14 暗黄褐色土 ローム土主体だが色調が暗い。黄色粒を含む。FAブロックをごく稀れに含む。ボンボンして締まりなし。
- 15 褐色土 ローム土を含む。FAを少量含む。φ 2~5 mmほどのFP粒を含む。土質は細かい。

第118図 23号住居柱穴



第119図 23号住居掘り方



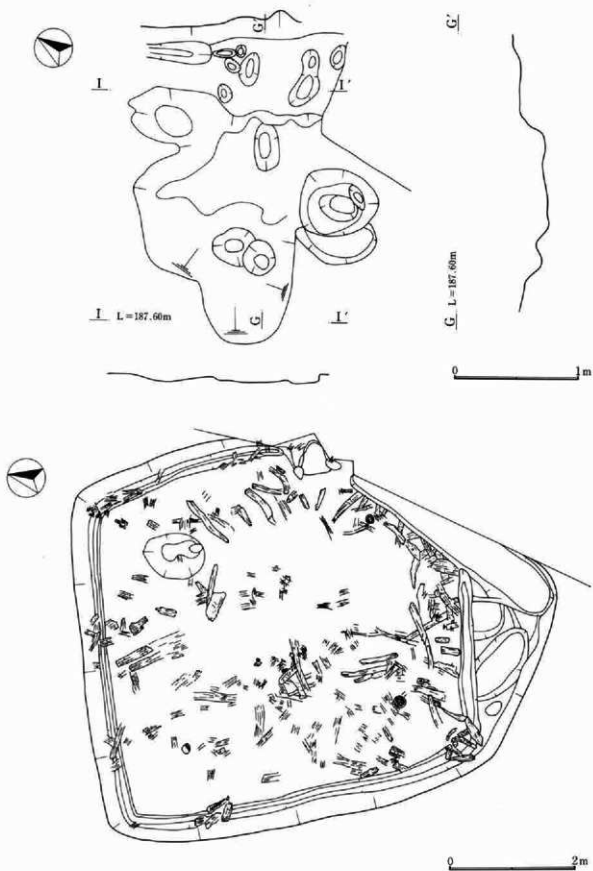
## H-H'

- 1 におい黄褐色土  $\phi$  2~3mm大、5mm大、10mm大ほどのFP粒を多量に含む。粘性は無くゴロゴロする。
- 2 暗褐色土 粘性が強く締まりがある。 $\phi$  5mm大ほどのFP粒を含む。炭化物、焼土を少量含む。FA(熱で変色?)、明褐色ブロック(FA)を含む。
- 3 褐色土 1層土と同様のFP粒を含む。炭化物を含む。
- 4 褐色土 炭化物、焼土を含む。1層と同様のFP粒を含む。
- 5 褐色土 粘性を帯び、締まりがある。 $\phi$  2~3mm大のFP粒を少量含む。FA主体。
- 6 黄褐色土  $\phi$  2mm大前後の小さいFP粒を多量に含む。 $\phi$  5mm大前後、10mm大前後のFP粒を含む。
- 7 におい黄褐色土  $\phi$  1~5mm大のFP粒がざっしり詰まる。炭化物を少量含む。
- 8 褐色土 炭化物を含む。土質は細かく粘性を帯びた土に $\phi$  5mm大前後のFP粒を中心に含む。
- 9 黄褐色土 1層に黄褐色土(FA)が少量混入している。
- 10 明褐色土 1層土と黄褐色土FAとの混入層。
- 11 褐色土 2層に類似するが明褐色ブロックを含まない。明黄褐色土が入り込み色調が明るい。
- 12 黄色土 FP。
- 13 におい黄褐色土 7層に類似するがFP粒 $\phi$  1cm前後が多い。2層土が混入する。
- 14 明赤褐色土 炭化物を含む。 $\phi$  5mm大ほどのFP粒を少量含む。焼土を多量に含む。粘性を帯びる。
- 15 明褐色土  $\phi$  5mm大前後のFP粒を含む。炭化物を多量に含む。焼土を少量含む。
- 16 褐色土 15層に類似する。FP粒を含まず、カーボンを含む。粘性を帯びる。
- 17 褐色土(電壁体) 粘性が強く、FP粒を含まない。2層に類似するが明褐色ブロックを含まない。要所(電外側)は火災のためか焼土化している。

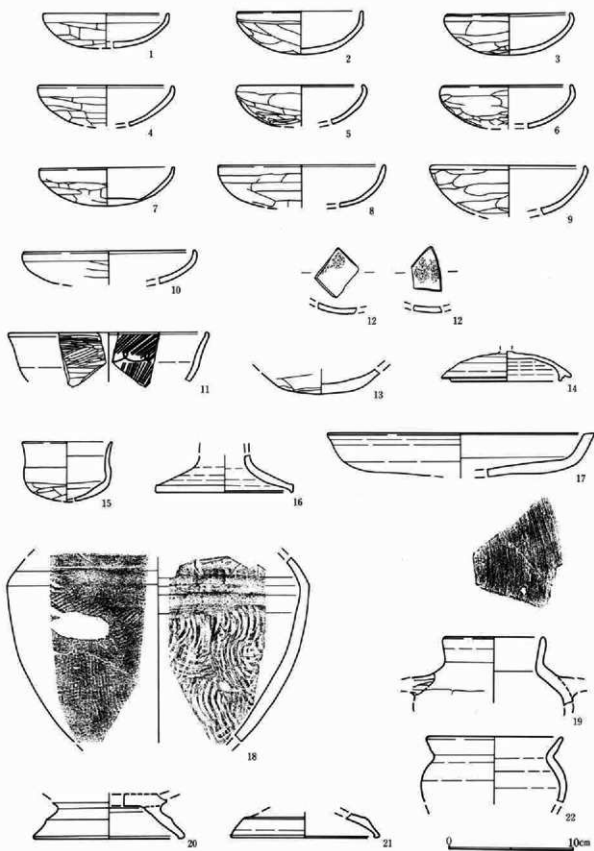
## G-G'・I-I'

- 1 褐色土 粘性が強い。FP粒を含まない。
- 2 褐色土 1層土に若干焼土を含む。
- 3 暗灰褐色土 焼土層。FP粒を含む。
- 4 褐色土  $\phi$  2~3mm大のFP粒がざっしり詰まる。
- 5 灰色土 粘性が強い。FP粒を含まない。
- 6 灰褐色土 FA(粘性が強い)を貼っている。
- 7 黒褐色土 FA下黒色土にFAが混じる。FAをブロック状にも含む。
- 8 暗褐色土 3層と同じく焼土層で、 $\phi$  2~3mm大のFP粒を含む。
- 9 黒色土 FA下黒色土に10層土が主に上位に混入する。
- 10 灰色土 土質は細かく粘性を帯びる。FP粒は含まない。
- 11 黒色土 FA下黒色土を主体とする。

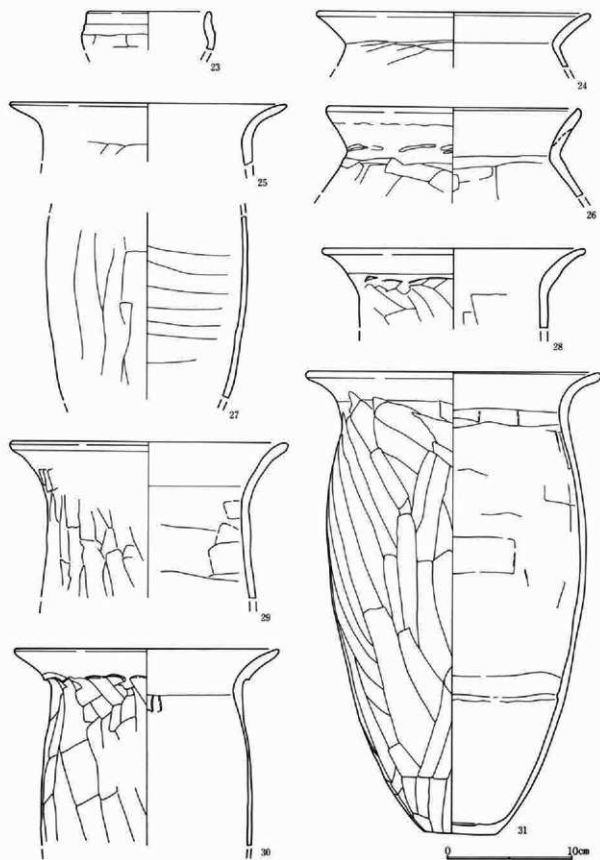
第120図 23号住居断



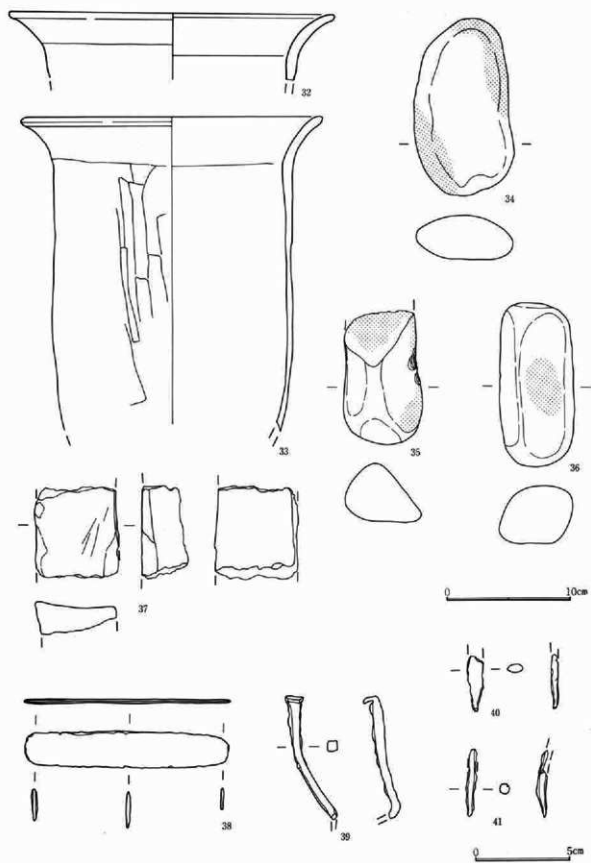
第121図 23号住居電掘り方及び炭化材出土状況



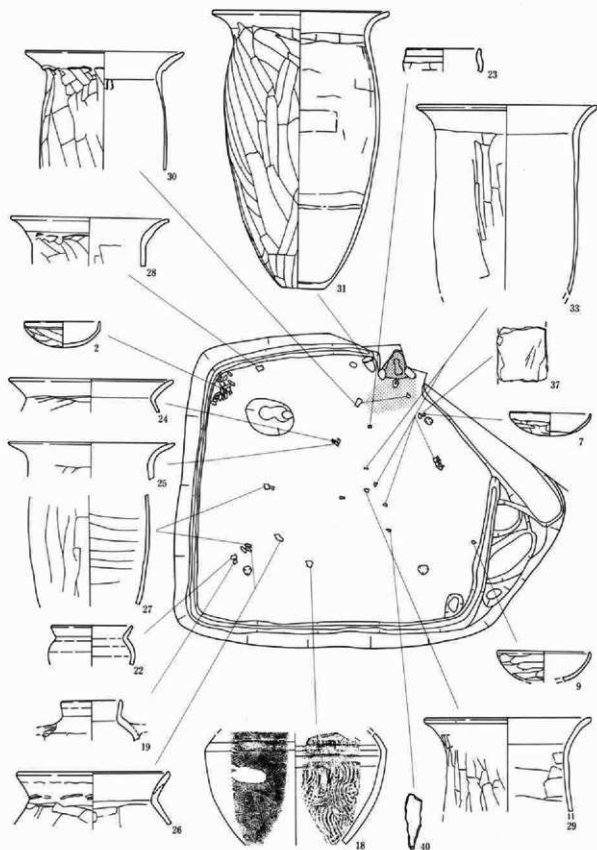
第122图 23号住居出土遺物(1)



第123図 23号住居出土遺物(2)



第124図 23号住居出土遺物(3)



第125図 23号住居遺物出土位置



## 23号住居

**位置** EC-61・62、ED-1・62、EE-61・62      **平面形状** 隅丸方形

**特徴** 本住居は火を受けて焼失した住居である。

**残存深度** 壁の高さは床面まで58～68cmで、周満底面まで73～88cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。但し、南壁は長方形の土坑に破壊されている。南壁では土層断面の状態から、住居廃棄後時をおかずに行われたと推定される掘り込みによって変形している。

**規模** 東辺は残存部分で3.10m、推定6.20m、西辺は6.20m、南辺は残存部分で3.00m、推定5.50m、北辺は5.50mを測る。

**主軸方位** N-63°-E

**埋没土** 土層断面中位～下位は褐色系土壌である。上位層の土質は褐色系土壌と同様であるが黒色味の強い色調を呈している。壁際ではHr-FA主体層が認められる。床面を被り土壌はHr-FAを主体とした層である。

**壁の状況** 床面から、東壁は100°、西壁から北壁は105°、南壁は108°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は118°、西壁は145°、南壁は125°を測る。壁際の各所においてHr-FP二次堆積層を検出した。その除去作業中に同層断面に縦方向に伸びる炭化物が認められた。炭化物と壁には10cm以内の間隔がある。南西コーナーにおいてはHr-FP二次堆積層中に「L」字形を呈する炭化したカヤ状の植物痕を検出した。検出した限りでは編み込む状況はみられない。高さも確認できなかったが「L」字状植物痕の壁側にはあまり汚れていない軽石が詰まっており、植物痕の内側は住居埋没土が多いという状態であった。

**床面** 面積は床面で28.839㎡、中段テラス外側ラインで31.668㎡を測る。Hr-FA主体層および黒色土主体層によって床が構築される。

**周溝** 検出部分のほぼ全体でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 東西間隔は3.0m、南北間隔は、東が3.1m、西が3.5mを測る。深さは、掘り方より1、2、3号ピットが62～64cm、4号ピットが84cm、床面からは1、2、3号ピットが72～77.5cm、4号ピットが92.5cmを測る。検出された平面、土層断面での柱穴の径は1号ピットが21～23cm、2号ピットでは炭化柱材が径14cm、柱穴で径19cmを測る。3号ピットでは炭化柱材で径16cm、柱穴で径16～18cmである。4号ピットでは炭化柱材は一部のみが残存であったが、焼け残った木質が腐蝕して形成されたと思われる空洞が認められた。同所へ流入した石膏の径は15.3～17cm、柱穴径は17～19cmである。

**掘り方** 住居中央から北側はHr-FA層中まで掘り込まれ、南側はHr-FA下黒色土まで掘削している。中央付近に細かい凹凸があり、竈部分が一段低く掘り込まれている他はほぼ平坦である。

**竈位置** 東辺中央

**竈方位** N-70°-E

**竈規模** 全長は、推定0.55mを測る。袖部幅0.57m、燃焼部幅0.48mを測る。

**竈形状その他** 両袖に偏平な河原石を立位に据えており、そこから粘性土が天井部近くまで続いていた。袖石よりやや住居内側でごく浅い小ピットが認められたが支脚の痕跡としては位置が適当ではないと判断できる。竈は現有道路下へ伸びており、煙道外端までは調査できなかったが、袖石から煙道方向へ伸びる粘性土は天井は落ちているもののアーチ状を呈していた。残存状況は良好であったと思われる。竈内より焼骨細片が出土している。

**炭化材の出土状況** 炭化材としての残存状況は良いものではなく材として形を保つものはない。炭化物、炭化材は床面近くで出土しており、東壁、北壁、西壁の一部と南面コーナーにおいて壁にかかる材がみられるが壁体構築に係わるものかどうか不詳である。柱底4箇所を結ぶライン外縁には放射状に材が出土しており、中心から西寄りと南壁寄りに密集して材が出土している。これらの材はコナラ属クヌギ節がほとんどで柱材も同様である。他にクリやタケ亜科の用材が認められる。

**遺物** 竈左袖付近に31の土師器甕が倒れかかった状態で出土した。北東コーナーでは棒状の河原石が集中して出土している。他に床面近くの出土では7、9の土師器杯、29、30の土師器甕がみられる。これらの杯は削り出しの椀を持ち、甕は口縁部の屈曲が弱く胴部が膨らまないものと口縁部が強く屈曲し胴部の膨らみを有するものである。他に須恵器蓋、杯、高杯、盤、長頸甕、鉄製品等が出土している。小破片ではあるが畿内産土師器杯の出土をみたことは特筆される。

**所見** 土器の様相から、本住居の年代は7世紀後半でも末葉に近い時期と推定される。

#### 24号住居

**位置** EE-60・61、EF-60・61 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで55～68cmで、周溝底面まで60～71cmを測る。

**重複住居** 25号住居と重複関係にあり、埋没土の一部を25号住居構築時に掘り込まれている。

**規模** 西辺は5.40m、南辺は残存部分で2.45m、北辺は残存部分で2.25mを測る。

**主軸方位** N-106°-E

**埋没土** 褐色系土壌であるが、やや色調が沈む。南側に Hr-FA を含む層の流入がみられる。

**壁の状況** 床面から、西壁は95°、南壁は103°、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は142°、北壁は110°を測る。壁体を構築する材およびその痕跡は確認できなかった。

**床面** 面積は10.794㎡を測る。一部に炭化物、カーボンの分布がみられる。掘り方から12～20cm盛って床としている。

**周溝** 検出部分のほぼ全体でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

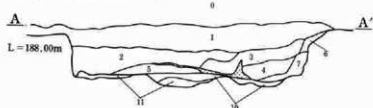
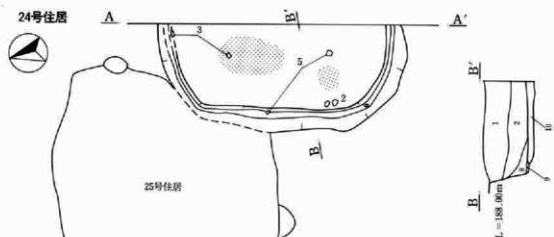
**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA 層上面まで掘削している。検出部分の中央～南壁付近に黒色土まで掘り込んだ部分がみられる。

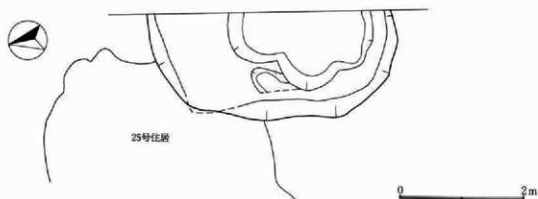
**竈位置** 検出されなかった。

**遺物** 5の羽釜は床面からの出土資料であるが、他は床面から間隔をおいて出土した土器が多い。須恵器杯、椀が出土しており、椀の底部は回転糸切り未調整である。1のみ底部不定方向のヘラ削りである。

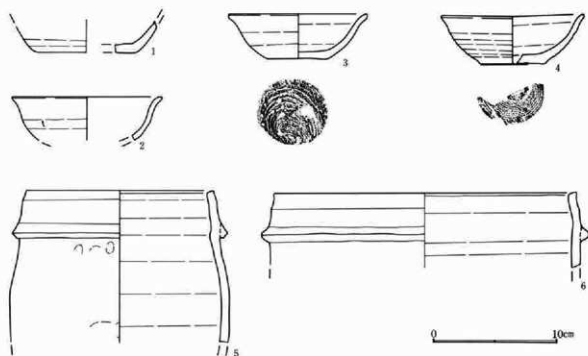
**所見** 出土土器の様相から、10世紀後半には構築された住居と考えられる。1のみ8世紀前半の土器で混入品と推定される。



- 0 耕作土  
 1 暗褐色土  $\phi$  5mm大前後のFP粒を多量に含む。2~3cm大のFP粒が散在する。  
 2 暗褐色土  $\phi$  5mm大~それ以下のFP粒を1層より多量に含む。2~5cm大のFP粒も含む。  
 3 褐色土 砂質で、1、2層に比べFP粒の混入は少量となり、FAを混入する。  
 4 褐色土 3層よりさらにFP粒の混入は少なく、炭化物を含む。  
 5 褐色土 FAが小ブロックで混入し、量的にも多い。FP粒は全体的に小粒である。床面上には炭化物がみられる。  
 6 暗褐色土 土質は細かくFP粒を少量含む。  
 7 暗褐色土 4層に類似するが、色調が沈む。  
 8 褐色土 FP粒主体で、褐色土を多量に含む。  
 9 褐色土 8層に類似するがFP粒含有量が少ない。  
 10 によい褐色土 FAを主体とし、FP粒、FA下黒色土を少量含む。  
 11 によい褐色土 FAを主体とし、FP粒を少量含む。



第126図 24号住居



第127図 24号住居出土遺物

### 25号住居

位置 EF-60・61、EG-61 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで54～59cmで、周溝底面まで56～62cmを測る。

重複住居 24号住居と重複関係にあり、24号住居の北西コーナーを掘り込んでいる。

規模 東辺は5.00m、西辺は4.80m、南辺は4.90m、北辺は4.50mを測る。

主軸方位 N-94°-E

埋没土 褐色系色調を呈す土壌主体である。壁際に Hr-FA を含有する層が認められる。

壁の状況 床面から、東壁は128°、西壁は134°、南壁、北壁は109～110°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材およびその痕跡は検出できなかった。

床面 面積は18.378㎡を測る。掘り方から Hr-FA、Hr-FP、Hr-FP 下黒色土等の混合土によって床を構築している。

周溝 住居南辺と竈を除いた部分でみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

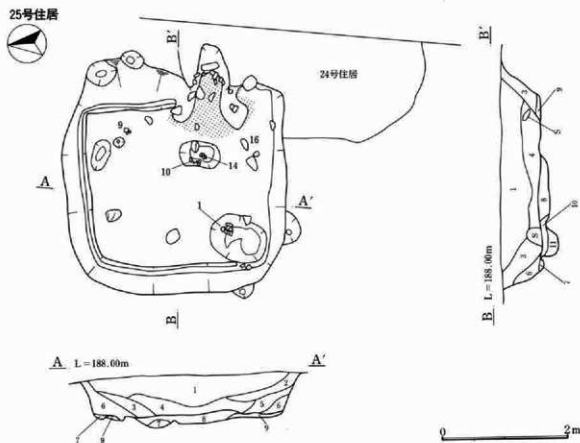
掘り方 全体的に大きい掘り込みがみられ、凹凸が激しい。北壁際に小さな凹凸がある。

竈位置 東辺中央やや南寄り

竈方位 N-93°-E

竈規模 全長は、1.30m（屋外長0.85m、屋内長0.45m）、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.40mを測る。

竈形状その他 天井の一部が残存していた。河原石を構築しており、石の住居側では羽釜破片が粘性土に混じって検出され、羽釜を横架あるいは補強・充填材にしていたと推定される。右袖上位からは天井石と思



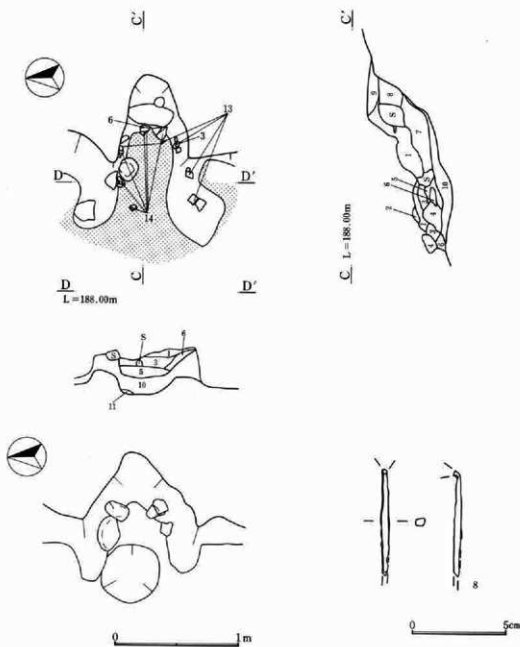
- |         |   |
|---------|---|
| 1 暗褐色土  | 3~5cm大のFP粒が僅かに散見できるが、細かいFP粒を主体に含む。締まりはなくもろい。      |
| 2 黒褐色土  | FP粒の性質は1層に類似するが量的には少なくなる。                         |
| 3 暗褐色土  | 床面近くにFP粒が多量に認められるが、全体的には1層に比べ少ない。締まりは弱い。          |
| 4 暗褐色土  | 2~5cm大のFP粒が多量に認められる。                              |
| 5 黒褐色土  | 2層に類似するが炭化物が認められるためやや黒色味を持つ。                      |
| 6 黒褐色土  | 壁の崩壊によるFP粒を壁際に多量に含むが、FAの小ブロック、褐色土が多い。締まりはさほど強くない。 |
| 7 黄褐色軽石 | FP二次堆積層。  |
| 8 暗褐色土  | φ5~10mm大のFP粒を含む。土質は細かい。                           |
| 9 黒色土   | FP下黒色土。   |
| 10 灰褐色土 | FP粒(φ5mm大ほど)を含む。11層より多い。                          |
| 11 灰褐色土 | FP粒(φ5mm大ほど)を少量含む。                                |

第128図 25号住居

れる扁平な河原石がもう1石出土している。横架された天井石の外側が煙の出口であろう。これらの粘性土および天井石を除去した後、左右両壁に扁平な河原石を立位に2石ずつ据えた状態が検出された。竪前には粘性土とともに複数の河原石が散在して検出され、天井および壁、袖に使用されていたと考えられる。

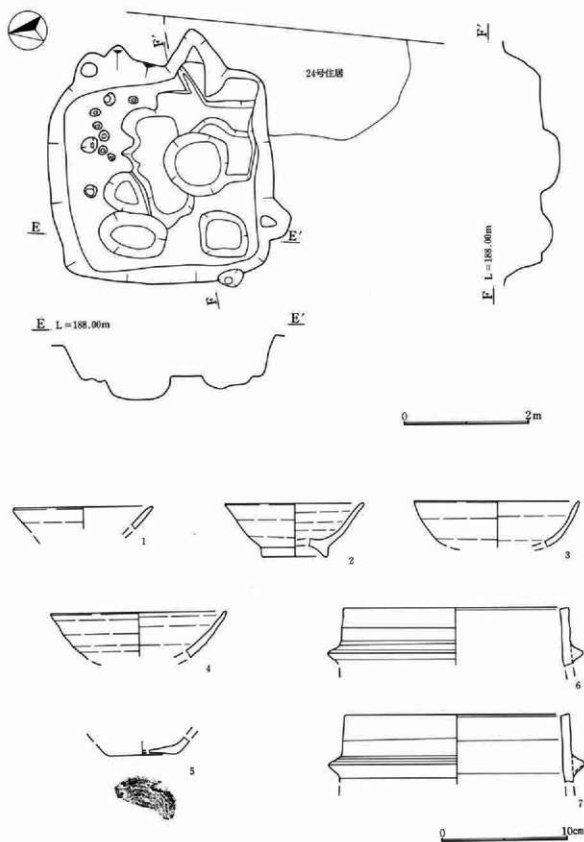
**遺物** 竪からは羽釜が2~3個体、須恵器碗が出土している。特に粘性土中に位置した14は内傾する口縁部とシャープで上向きの断面三角形の鐙を有している。床面ではいくつかの河原石が認められ、使用痕跡のある棒状河原石が含まれる。他は床面から間隔を置いての出土である。掘り方において須恵器高台付碗が出土している。埋没土中から鉄釘が出土した。

**所見** 出土した羽釜、碗の様相から、本住居には10世紀前半の年代が与えられる。

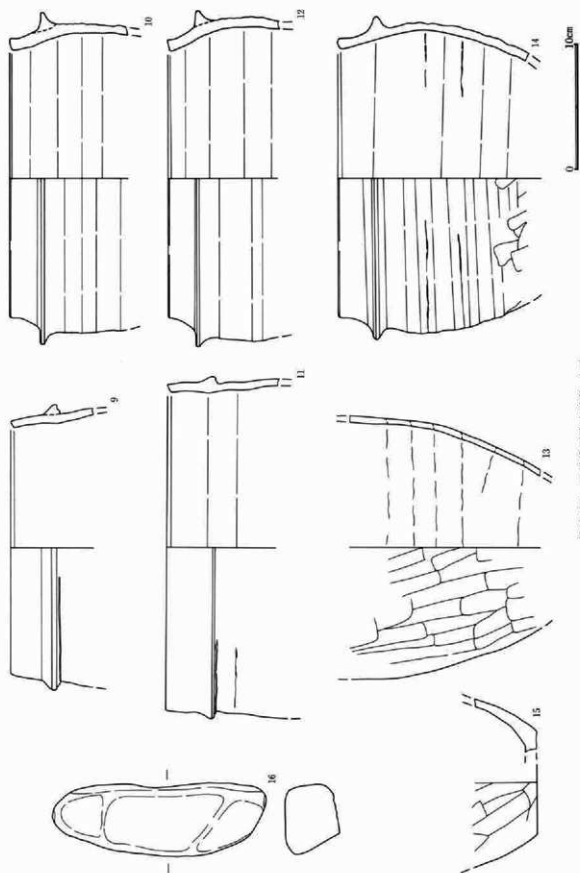


- |    |        |   |
|----|--------|---|
| 1  | 灰白色土   | 粘性を帯びて締まりがある。FP粒を僅かに含む。                     |
| 2  | 灰白色土   | 1層よりやや色調が暗い。1層に類似するが焼土を僅かに含む。粘性を帯び締まりがある。   |
| 3  | 暗褐色土   | 1層土をブロック状に含む。φ約2～3mm大のFP粒を少量含む。粘性を帯び締まりがある。 |
| 4  | 明褐色土   | φ2～3mm大のFP粒を少量含む。粘性を帯び締まりがある。               |
| 5  | 暗褐色土   | 3層土に焼土が少量混入する。粘性を帯び締まりがある。                  |
| 6  | 明褐色土   | 4層土にφ5～10mm大のFP粒が詰まる。                       |
| 7  | 明褐色土   | 6層土に類似するが焼土を少量含む。                           |
| 8  | 褐色土    | 焼土を含む。φ2～3mm大のFP粒を含む。                       |
| 9  | 黒褐色土   | φ5mm大前後、10mm大前後のFP粒を多量に含む。                  |
| 10 | いぶい褐色土 | FAを主体とし、FP粒、黒褐色土を少量含む。                      |
| 11 | いぶい褐色土 | FAを主体とし、FP粒を少量含む。                           |

第129図 25号住居竈及び出土遺物(1)

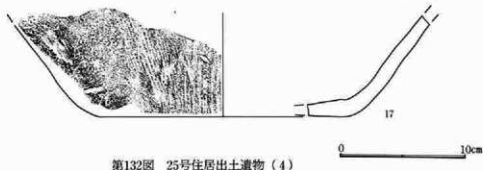


第130図 25号住居掘り方及び出土遺物(2)



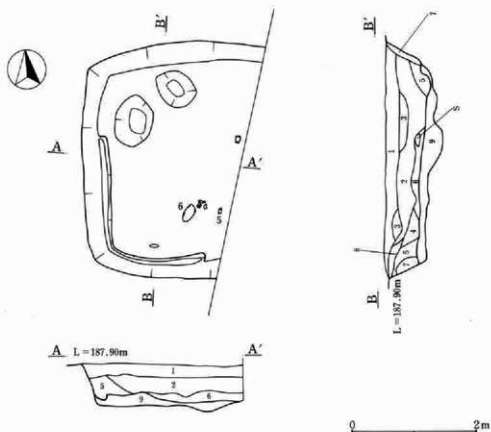
第131図 25号住居出土遺物(3)





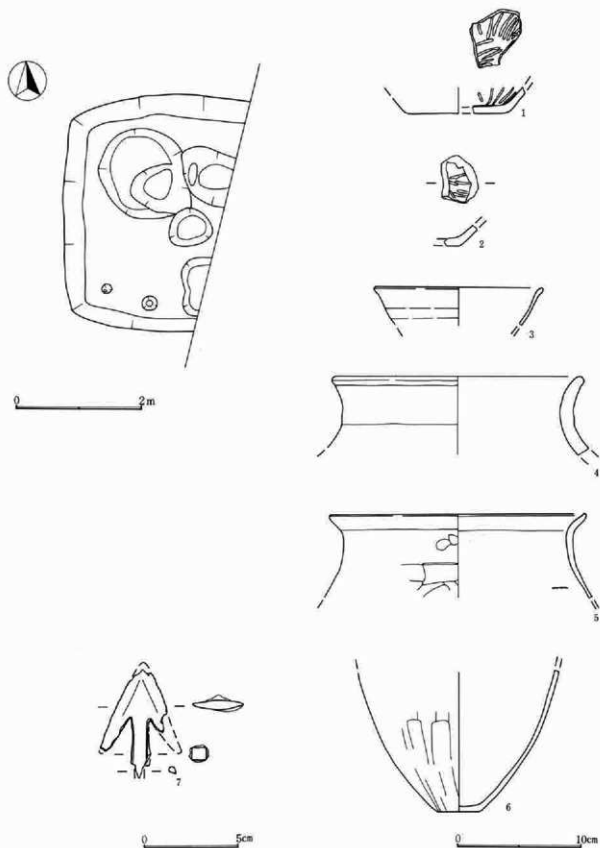
第132図 25号住居出土遺物(4)

## 26号住居



- 1 暗褐色土 FP粒(5mm大)を多量に含む。また僅かではあるが3cm大のFP粒も散見できる。
- 2 暗褐色土 1層に比べFP粒の量がさらに多くなる。
- 3 暗褐色土 FP粒の量は1層に比べやや少量であるがFAの混入がある。
- 4 褐色土 FP粒が全体的に大きくなり(5~10mm大)FAを少量混入する。
- 5 暗褐色土 FP粒の量は少ないが、粒が大きく4~6cm大を含む。
- 6 暗褐色土 床面上にFAを多量に含む。土質はやや砂質を呈する。
- 7 黄褐色板石 壁の崩壊によるFP主体層。
- 8 褐色土 3層にFAを多量に混入する。
- 9 褐色土 FA主体層。

第133図 26号住居



第134図 26号住居掘り方及び出土遺物

## 26号住居

位置 EG-60・61 平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで46～51.9cmで、周溝底面まで49～50.7cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 西辺は3.40m、南辺は残存部分で2.15m、北辺は残存部分で2.70mを測る。

主軸方位 N-96°-E

埋没土 褐色系土壌である。壁際では Hr-FP 粒の流入層がみられ、さらにその上位を黒色味を帯びる暗褐色土が被う。Hr-FA の流入も認められ、南壁で顕著であった。南壁では壁からやや間隔をおいて Hr-FA の流入層が東側の調査区壁まで続いていた。

壁の状況 床面から、西壁は110°、南壁は116°、北壁は114°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及び痕跡は認められなかった。

床面 面積は残存部で6.834㎡を測る。掘り方から2～32cmの土を盛って床としている。

周溝 住居西壁中ほどから南壁中ほどまで認められる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

掘り方 Hr-FA 層中の上位まで掘削している。住居北半分に大きな掘り込み、南～南東に中小の凹凸がみられる。

電位置 検出されなかった。

遺物 床面から土師器壺の胴部から底部が出土し、河原石も認められた。床面から間隔を置いて口縁部が「コ」字状を呈する土師器壺がみられ、埋没土中からは他に暗文をもつ土師器杯、須恵器椀、鉄鏝が出土している。

所見 出土土器から、当住居の年代は9世紀後半と考えられる。

## 27号住居

位置 EG-62・63、EH-62・63 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで63～77cmで、周溝底面まで73～80cmを測る。

重複住居 住居とは重複していないが北東コーナーに1号掘立柱建物4号ピットが位置している。

規模 東辺は3.95m、西辺は4.00m、南辺は3.50m、北辺は3.30mを測る。

主軸方位 N-76°-E

埋没土 褐色系色調を呈す土壌だがやや色調が沈み、Hr-FP 粒は目立たない。最上位層はより黒味を帯びる。壁際では Hr-FP の流入がみられる。床面を被う土には Hr-FA が含有される。

壁の状況 床面から、東壁、西壁は90°、南壁は100°、北壁は106°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材や痕跡は確認できなかった。

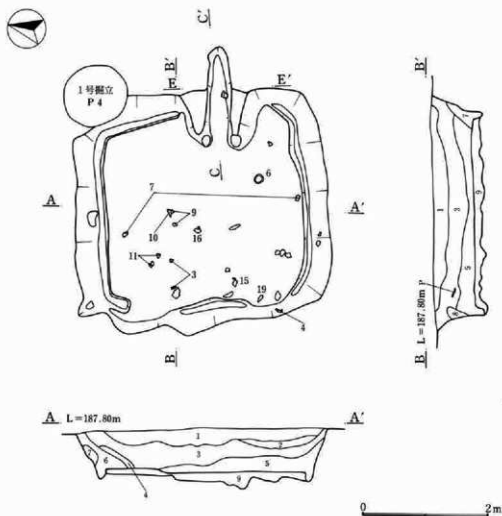
床面 面積は10.350㎡を測る。Hr-FA 主体層によって床面が構築される。

周溝 竈を挟んで東辺、北辺、南辺にあり、西辺の一部にも認められる。

貯蔵穴 検出されなかった。

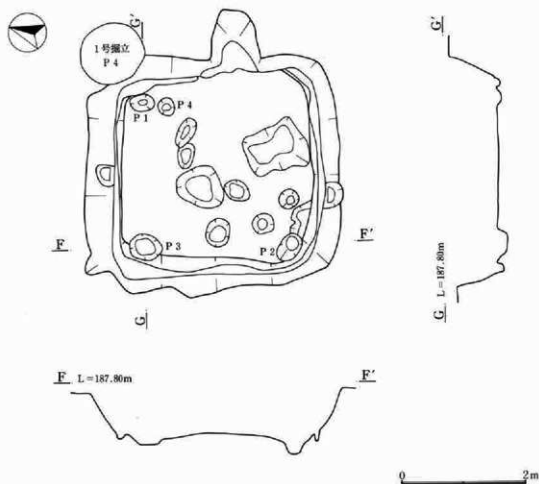
柱穴 床面では確認できなかった。

27号住居



- |   |       |   |
|---|-------|---|
| 1 | 黒褐色土  | FP粒、小石を多量に含む。土質は粗くもろい。                      |
| 2 | 褐色土   | FP粗粒を多量に含む。また炭化物が少量ではあるが散見できる。              |
| 3 | 褐色土   | FPの粗粒～1cm大を主体に含む。炭化物は2層より多く散見できる。           |
| 4 | 灰褐色土  | 炭化物が多量に含まれる。またFP粒は細かく、FAの小ブロックもみられる。砂質でもろい。 |
| 5 | 明褐色土  | FP粒を多量に含むがFAの混入率も多い。砂質でサクサクする。              |
| 6 | 明褐色土  | FP粒を主体に含む。                                  |
| 7 | 黄褐色軽石 | FP粒の純層がブロック状に崩落する。                          |
| 8 | 黄褐色軽石 | FP二次堆積層。                                    |
| 9 | よい褐色土 | FA主体であるがFP粒(5mm大)を少量含む。硬く締まる。               |

第135図 27号住居



第136図 27号住居掘り方

**掘り方** Hr-FA層中の上位まで掘り込んでいる。大小の落ち込みがみられ、その中で北東コーナー、南西コーナー、北西コーナーにピット状の落ち込みがみられた。深さは、掘り方より1、3、4号ピットが8～12cm、2号ピットが20cmを測る。東西間隔は2.3m、南北間隔は2.35mを測る。

**竈位置** 東辺中央

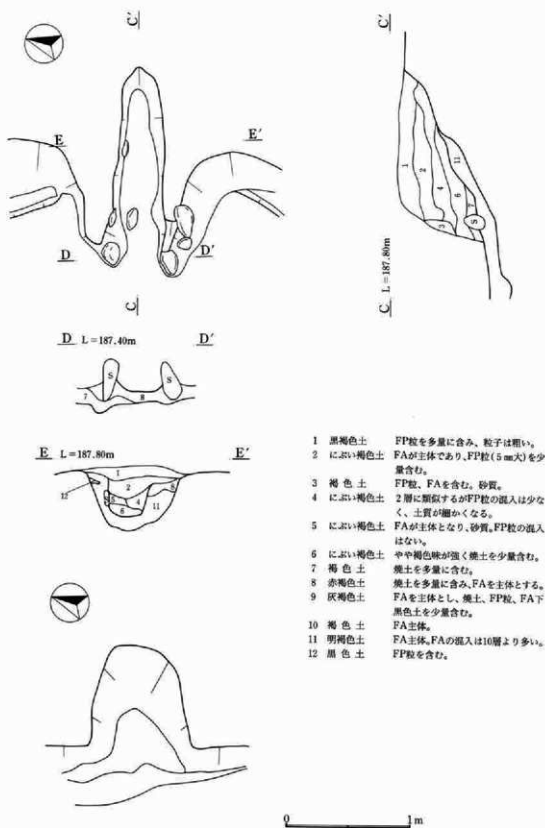
**竈方位** N-78°-E

**竈規模** 全長は、1.55m（屋外長1.05m、屋内長0.50m）、袖部幅0.60m、燃焼部幅0.30mを測る。

**竈形状その他** 左右袖に河原石を立位に据え、右袖では外側にも認められる。左壁では他に2ヶ所河原石がみられる。燃焼部中央には棒状の河原石の支脚がある。

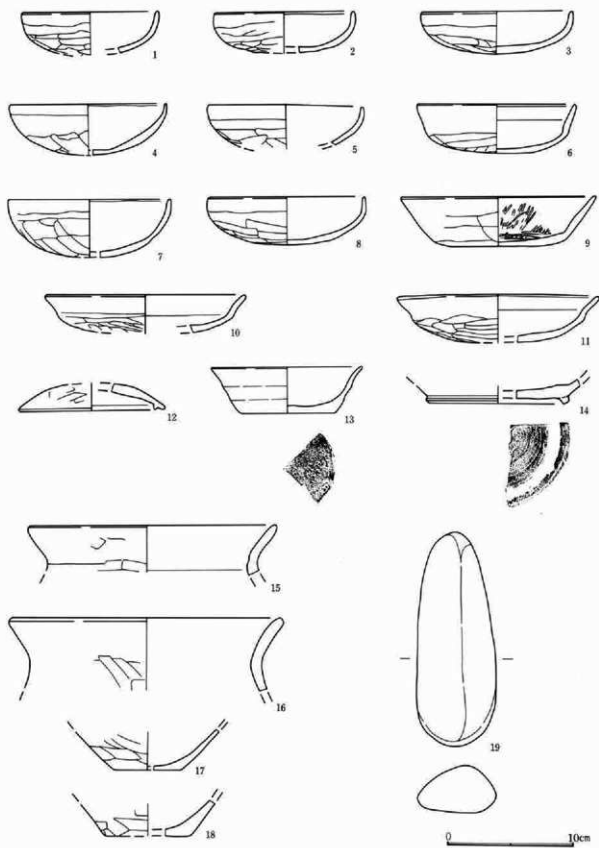
**遺物** 南西コーナー付近では床面に棒状の河原石が散在していた。床から2.5cmの間隔を置いて6の土師器杯が出土している。他は床面から、より間隔をあけて土師器杯、甕がみられた。埋没土中より須恵器蓋、杯、碗が出土した。土師器杯では内面に暗文を施すものや稜を有す例がみられる。土師器甕は口縁部が屈曲し胴部に膨らみを持っている。

**所見** 出土した土器の様相から、本住居は8世紀前半には構築されていたと考えられる。



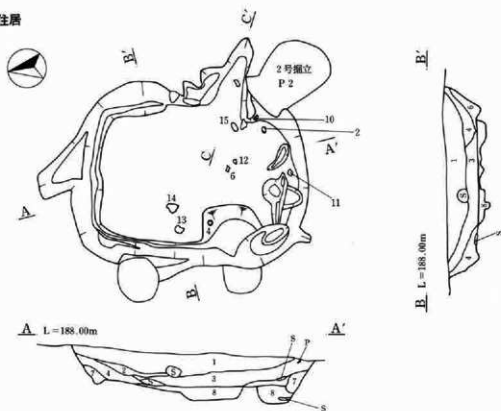
- |          |                             |
|----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土   | FP粒を多量に含み、粒子は粗い。            |
| 2 にぶい褐色土 | FAが主体であり、FP粒(5mm大)を少量含む。    |
| 3 褐色土    | FP粒、FAを含む。砂質。               |
| 4 にぶい褐色土 | 2層に類似するがFP粒の混入は少なく、土質が細くなる。 |
| 5 にぶい褐色土 | FAが主体となり、砂質。FP粒の混入はない。      |
| 6 にぶい褐色土 | やや褐色味が強く焼土を少量含む。            |
| 7 褐色土    | 焼土を多量に含む。                   |
| 8 赤褐色土   | 焼土を多量に含む、FAを主体とする。          |
| 9 灰褐色土   | FAを主体とし、焼土、FP粒、FA下黒色土を少量含む。 |
| 10 褐色土   | FA主体。                       |
| 11 明褐色土  | FA主体。FAの混入は10層より多い。         |
| 12 黒色土   | FP粒を含む。                     |

第137図 27号住居電



第136图 27号住居出土遺物

28号住居

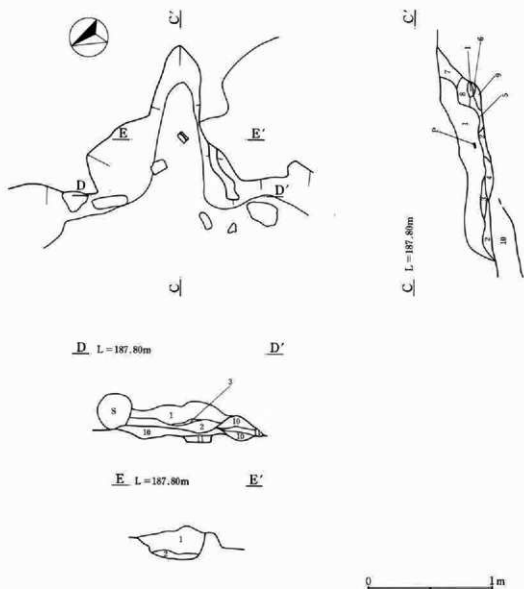


- |          |   |
|----------|---|
| 1 暗褐色土   | FP粒(3~5mm大)を少量に含む。3~4cm大のFP粒も僅かに含む。締まりはさほど強くない。 |
| 2 黄褐色軽石  | FP粒主体。もろく崩れやすい。                                 |
| 3 暗褐色土   | 1層に類似するがFP粒は細かく、FAの小ブロックを少量含む。                  |
| 4 暗褐色土   | やや灰色味を有し、炭化物を少量含む。FP粒は細かい。                      |
| 5 褐色土    | 粒子は細かい。やや粘質を有する。                                |
| 6 褐色土    | FP粒主体。粒は細かく、もろい。                                |
| 7 黄褐色軽石  | 2層に類似する。FP粒主体。                                  |
| 8 ぶい黄褐色土 | FAを主体とし、FA下照土、FP粒を少量含む。                         |



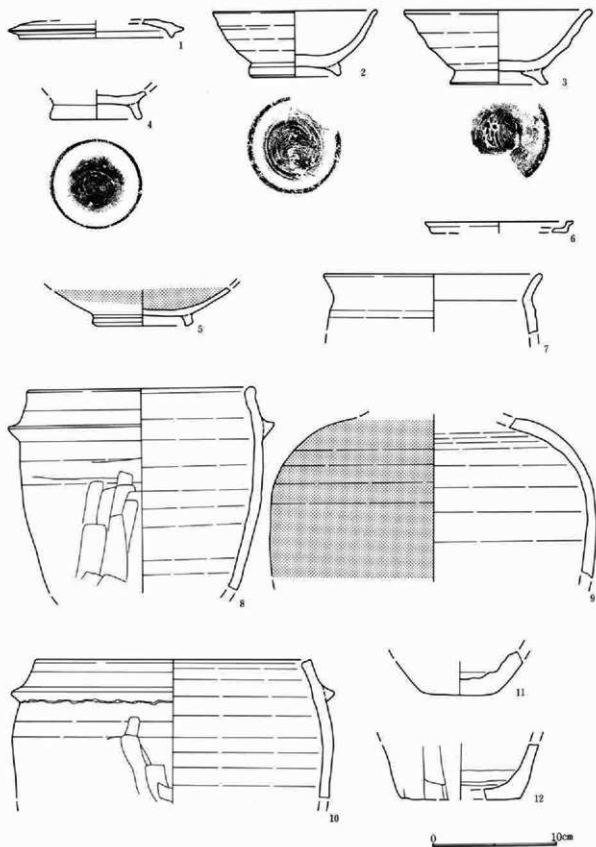
第139図 28号住居



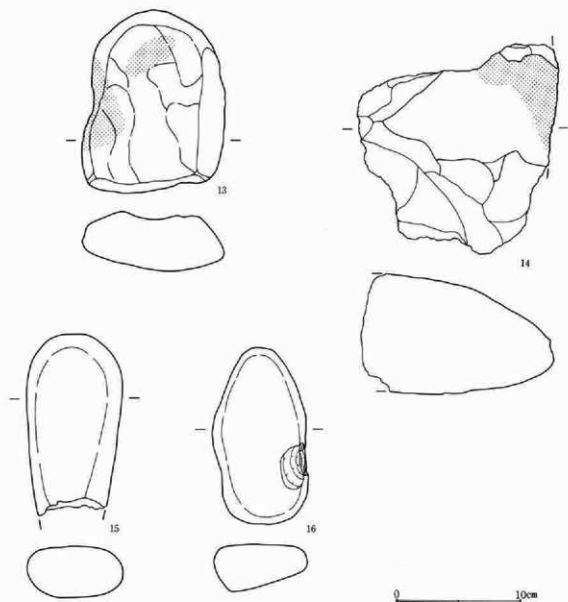


- |          |                              |
|----------|------------------------------|
| 1 暗褐色土   | FP細粒を含む、やや粘性を帯びる。FA主体。       |
| 2 黒褐色土   | 1層に炭化物を多量に含む。                |
| 3 黒褐色土   | FP粒を含み、下に炭化物を多量に含む。黒色土がみられる。 |
| 4 暗褐色土   | 2層に類似するがカーボンが少ない。            |
| 5 暗褐色土   | 1層土にFP粒を多量に含む。               |
| 6 黄褐色土   | FP細粒からなる層。                   |
| 7 黒褐色土   | FP粒を含む。焼土、炭化物を含まない。          |
| 8 暗褐色土   | 7層に類似するが1層土が多量に混入する。         |
| 9 明褐色火山灰 | FA純層。                        |
| 10 明褐色土  | FP粒を混入。締まりはさほど強くない。          |
| 11 黒褐色土  | 炭化物が多量に混入する。FAとの混土。          |

第140図 28号住居壑



第141図 28号住居出土遺物(1)



第142図 28号住居出土遺物(2)

## 28号住居

位置 EJ-62, EK-62・63, EL-62 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで51～53.7cmで、周溝底面まで59～60cmを測る。

重複住居 単独で検出されたが、壁の所々を土坑に掘り込まれている。

規模 東辺は3.20m、西辺は3.50m、南辺は2.50m、北辺は2.70mを測る。

主軸方位 N-101°-E

埋没土 やや暗い色調の褐色系土壌である。壁際に Hr-FP の流入がみられる。南壁以外の周溝は Hr-FA の二次堆積層及び土壌を客体的に含む Hr-FP 主体層によって被われている。

壁の状況 床面から、東壁～北壁は120°、西壁は145°、南壁は128°の角度で立ち上がる。竈左袖から東壁にか

けて、偏平な河原石2石を立位に壁に据えていた。壁と河原石との間隙には Hr-FA 主体で Hr-FP 粒を含む褐色土が充填されていた。

**床 面** 面積は6.633㎡を測る。Hr-FA 主体層によって床面を構築している。

**周 溝** 竈左側の東辺から北辺、西辺に続き、南辺の一部にも認められる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱 穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA 層上位まで掘り込まれている。住居の北西部は平坦であるが、住居東へ南にかけていくつかの掘り込みがみられる。

**竈位置** 東辺中央やや南寄り **竈方位** N-117-E

**竈規模** 全長は、1.20m (屋外長0.30m、屋内長0.90m)、袖部幅0.75m、燃焼部幅0.40mを測る。

**竈形状その他** 左袖部分に偏平な河原石を立位に据えている。竈内にも河原石が1石認められるが本来的な位置とは思われない。

**遺 物** 床面では南東コーナー付近に偏平な河原石を据えている。その石から若干間隔を置いて2の須恵器碗が出土している。6が床面から5cmの間隔をおいてみられ、竈右袖外側から羽釜が出土した。他に須恵器蓋、灰釉陶器碗、壺(?)、土師器杯、甕、使用痕跡のある河原石が出土している。羽釜は口縁部が内傾して鈎が上向きを呈している。土師器杯は住居構築以前の土器が流入したと思われる。

**所 見** 出土土器の特徴から本住居には10世紀前半の年代が与えられる。

#### 29号住居

**位 置** EJ-63-64、EK-63-64、EL-63-64 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**特 徴** 壁に中段テラスを有する住居である。

**残存深度** 壁の高さは床面まで70~83cmで、確認面から中段までは北部分で25~33cm、南部分で42~60cm、中段から床面までは北部分で63~69cm、南部分で、平均して15~22cmであるが、最大値は45cmを測る部分がある。 **重複住居** 単独で検出された。

**規 模** 住居上場の東辺は7.00m、南辺は3.60m、北辺は残存部分で4.80m、中段テラス内側ラインの東辺は残存部分で5.60m、南辺は残存部分で2.80m、北辺は残存部分で3.70mを測る。

**主軸方位** N-106-W **埋没土** 褐色系の色調を呈す土壌が主体である。

**壁の状況** 床面から、東壁は100°、西壁は122°、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁が115°、西壁は145°、北壁は108°を測る。壁に中段テラスを持つが、同部分は土層断面によれば地山削りだではなく盛り土によって形成されている。南壁から東壁中央部では中段テラスは残存状態は良くない。

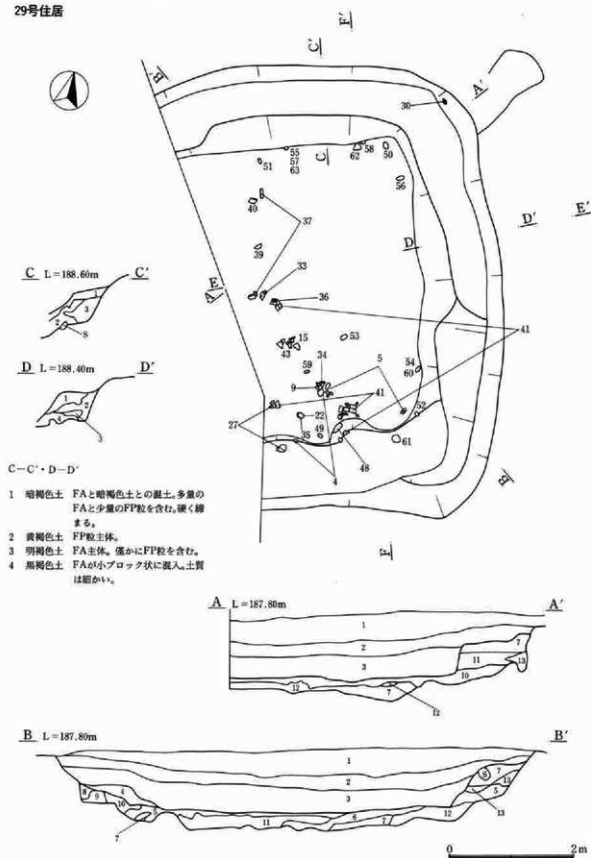
**床 面** 面積は上段が25.839㎡、下段が13.863㎡を測る。掘り方から3~50cmの厚さの Hr-FA と Hr-FA 下黒色土の層によって床面が構築される。

**周 溝** 検出されなかった。掘り方では北辺の一部と東辺の一部のみみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。 **柱 穴** 床面では検出できなかった。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土層まで掘削している。壁から2段及び4段ほど小さく段階的に落ち込んでいる。中央部分はほぼ平坦である。周溝状の溝が検出されている。ピット状の掘り込みも検出されたが柱穴とは断定できなかった。1号、2号ともに掘り方からの深さは29cmである。1号ピットと2号ピットの間隔は3.1mを測る。中段テラスの断ち割りでは東壁で Hr-FP 主体層が埋没土となる周溝状の落ち込みがみられた。Aラインでは周溝状の落ち込みに Hr-FP の二次堆積がみられ、さらに暗褐色土と黒色土の水平堆積が認められる。

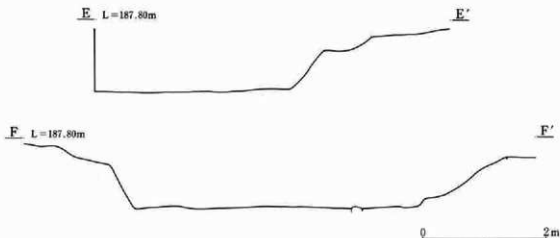
## 29号住居



第143図 29号住居

A-A'・B-B'

- |          |   |
|----------|---|
| 1 暗褐色土   | FP粒(5mm大)を主体に多量に含む。締まりはよいがもろい。やや褐色味を持つ。                     |
| 2 暗褐色土   | 1層に比べて細かいFP粒の含有量が多い。1~3cm大のFP粒が散見できる。やや砂質。FAの小ブロックが少量認められる。 |
| 3 暗褐色土   | 土質は1層に類似し、2層に比べてFP粒がやや大きくなる。                                |
| 4 黒褐色土   | FP細粒が遙かに含まれるが、土質は細かい。若干炭化物が含まれ弱粘性を有する。                      |
| 5 黒褐色土   | 4層に類似する。床面であり、硬く締まる。  |
| 6 黒褐色土   | FA下黒色土を主体とし、黄褐色土およびFAを含む。                                   |
| 7 暗褐色土   | 締まりがよく、FP粒、FAブロックを含む。土質は細かい。                                |
| 8 黄褐色砂石  | FP二次堆積層。  |
| 9 褐灰色土   | FA下黒色土とFAの混合土。FP粒を含む。                                       |
| 10 ぶい褐色土 | FA主体でFP粒、FA下黒色土を少量含む。                                       |
| 11 黒色土   | FA下黒色土を主体とし、FAを含み、ブロック状にも含む。                                |
| 12 暗褐色土  | FA下黒色土を主体とし、FAを少量含む。  |
| 13 黄褐色砂石 | FP二次堆積層。暗褐色土を少量含む。  |



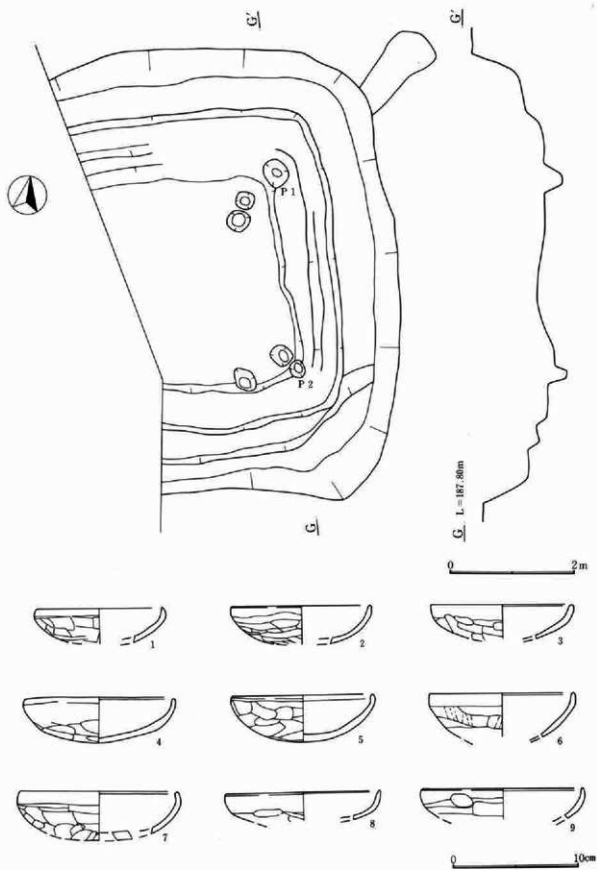
第144図 29号住居

Bライン東壁ではHr-FPの二次堆積層があり、その上に弱い粘性を有する黒褐色土が位置している。Bライン北壁では床面貼り床の土と同様の弱粘性を有する黒褐色土類似層があり、さらにHr-FP二次堆積層、最上位に暗褐色土層が位置している。DラインではHr-FAをブロック状に含有する黒褐色土の上に一部Hr-FA主体層があり、その上にHr-FP二次堆積層、最上位に硬く締まったHr-FAと暗褐色土との混合層が位置する。CラインではHr-FA主体層の存在が大きくなり、黒褐色土がみえないが、他は同様の状態である。

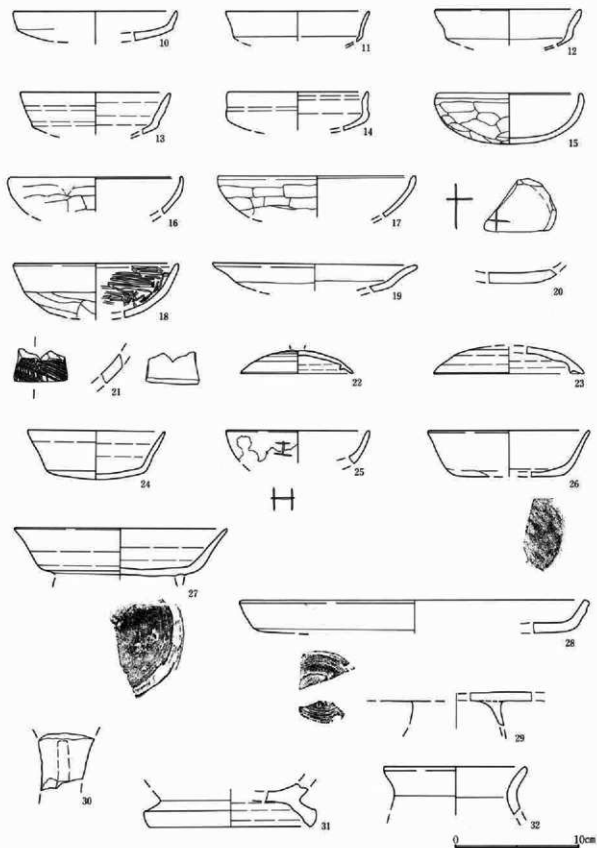
**電位置** 検出されなかった。

**遺物** 床面及び床面近くからは4、5、9の土師器杯、33、34、37の土師器甕が出土している。また、使用痕跡のある石類も散在していた。他の出土遺物としては内面黒色処理でミガキを施す土師器杯、須恵器蓋、杯、壺、高杯などがある。模倣杯もみられる。29は高台盤で杯部に沈線を入れて脚部との接合を図っている。20の土師器杯の底部内面には「十」と思われる焼成前の刻書があり、25の須恵器杯口縁部外面に焼成前に記した「日」の刻書が見られる。

**所見** 本住居の年代は出土土器の様相から7世紀後半でも古い段階とすることができよう。また、中段テラスの構築から住居の改築の可能性も考えられる。

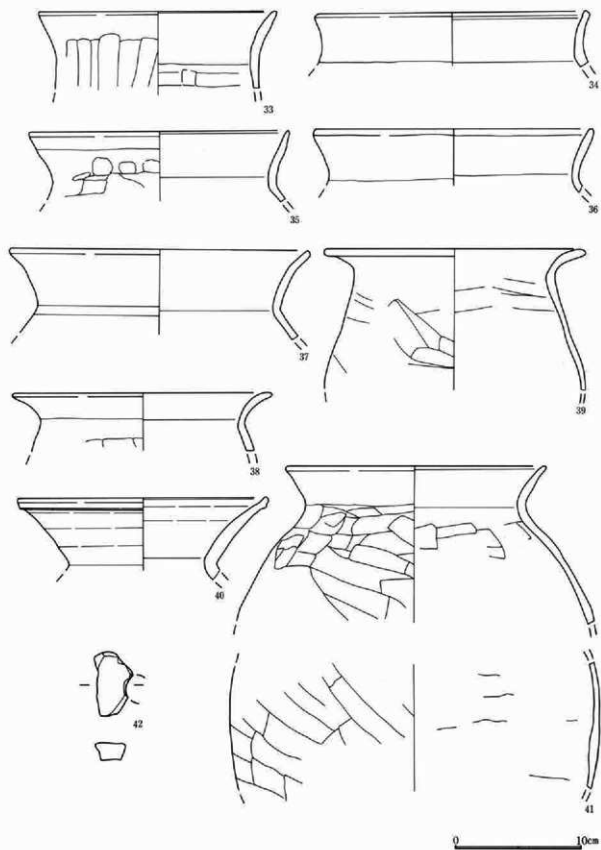


第145図 29号住居掘り方及び出土遺物(1)

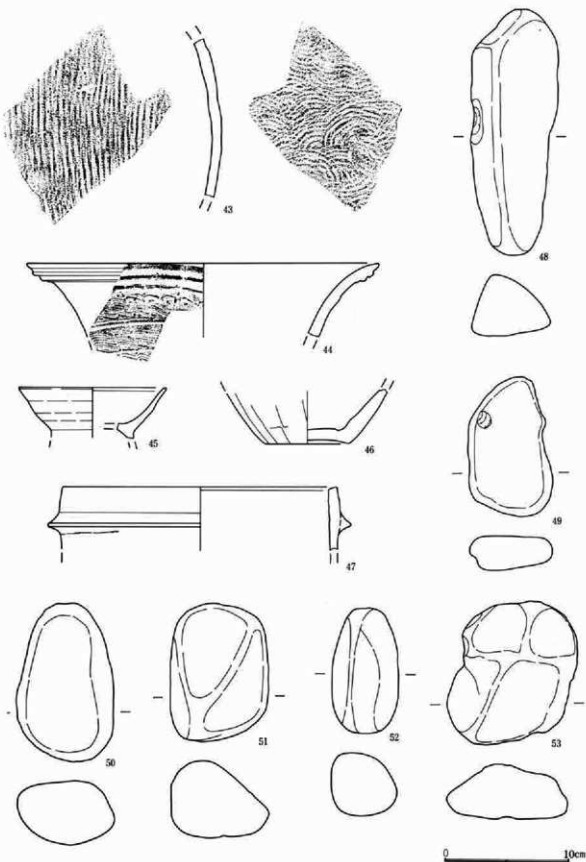


第146図 29号住居出土遺物(2)

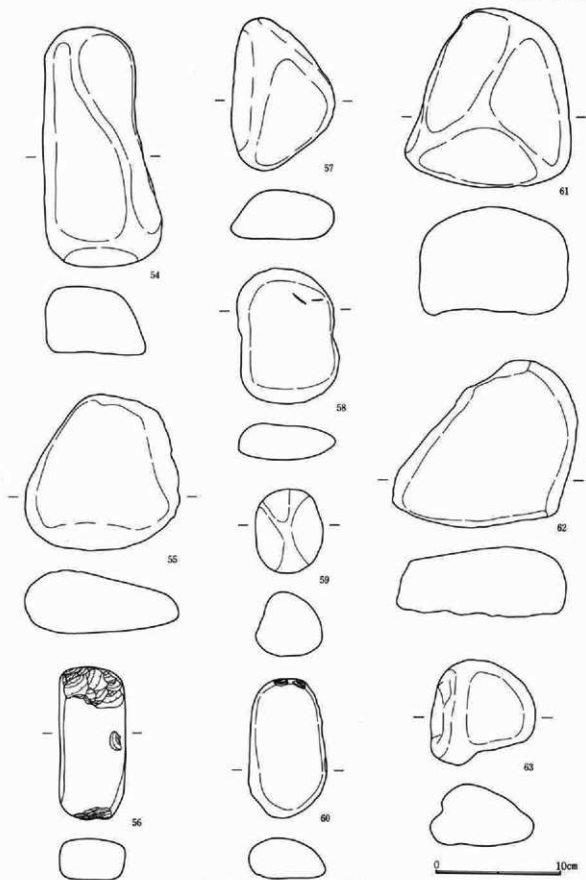




第147图 29号住居出土遺物(3)



第148図 29号住居出土遺物(4)



第149图 29号住居出土遺物(5)

### 30号住居

**位置** EL-64・65、EM-64・65・66、EN-64・65・66

**平面形状** 隅丸方形と推定される。やや南側へ北辺、南辺の西側が流れ、菱形に近くなっている。

**残存深度** 壁の高さは床面までが北東部分で53～60cm、南部分で40～54cm、北西部分で73～78cmで、周溝底面までが北東部分～南部分で62～69cm、北西部分で84～89cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は残存部分で5.80m、南辺は残存部分で4.00m、北辺は残存部分で4.00mを測る。

**主軸方位** N-82°-E

**埋没土** 褐色系土壌主体だがやや色調が沈む。壁際では Hr-FP 二次堆積層と Hr-FP を多量に含む層がみられる。

**壁の状況** 床面から、東壁は105°、南壁は120°、北壁は130°の角度で立ち上がる。変換点からは北壁は140°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は27.41m<sup>2</sup>を測る。Hr-FA と Hr-FA 下黒色土及び両者の混合土により床面を作っている。床面には中央～西部にかけて炭化物、カーボンの分布が認められた。東壁近くに複数の河原石が検出され、その内側に焼土がみられた。

**周溝** 竈を除く東辺と南辺及び北辺中位から北西コーナーにかけて認められる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では確認できなかったが掘り方で検出した。東西間隔は2.8m、南北間隔は4.2mを測る。深さは、掘り方より1号ピットが9cm、2号ピットが52cm、3号ピットが23cmを測る。床面からは推定の深さで1号ピットが27cm、2号ピットが62cm、3号ピットが44cmを測る。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土中まで掘り込んでいる。地山の礫がみられたが全体として平坦である。

**竈位置** 東辺中央

**竈方位** N-88°-E

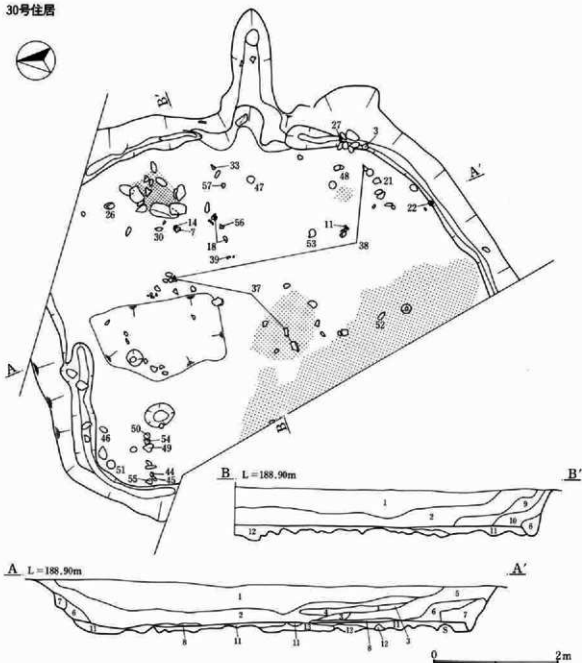
**竈規模** 全長は、2.00m（屋外長1.50m、屋内長0.50m）、袖部幅1.15m、燃焼部幅0.40mを測る。

**竈形状その他** 僅かに両袖が残る。煙道部外端に偏平な河原石を斜位に据えている。

**遺物** 床面では北西コーナーに使用痕跡のある河原石が8個体直線的に認められた。床面近くでは11、21、22の土師器杯、38の土師器甕が出土した。南東コーナーでは6個体の河原石の流入がみられた。他に須恵器蓋、杯(?)、短頸壺、高台盤等がある。また、鉄鏃、釘等の鉄製品が埋没土から出土した。土師器杯は削り出しの椀を持つものや、内面黒色処理シミガキを施すものなどがある。甕は口縁部の屈曲が弱い例で、須恵器蓋は宝珠柄を有するものがある。

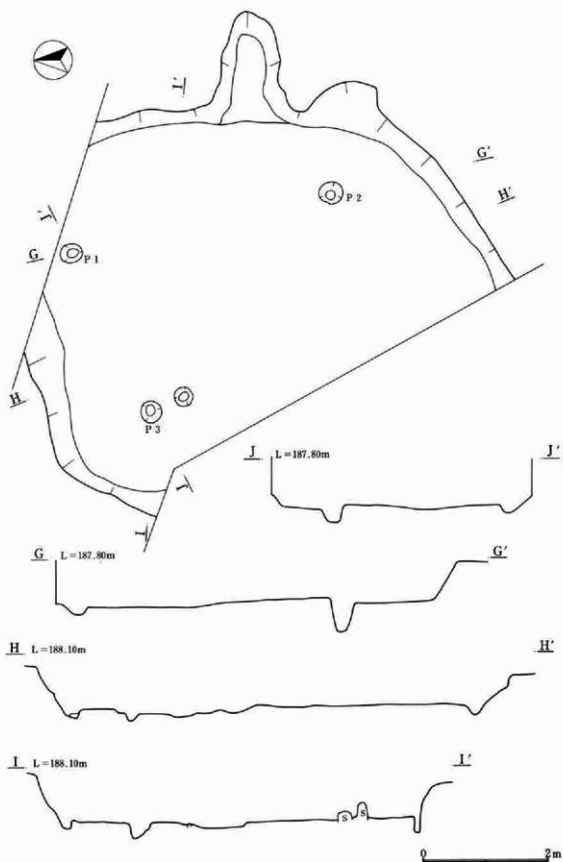
**所見** 出土土器の様相から、本住居は7世紀後半には構築されていたと推定される。

## 30号住居

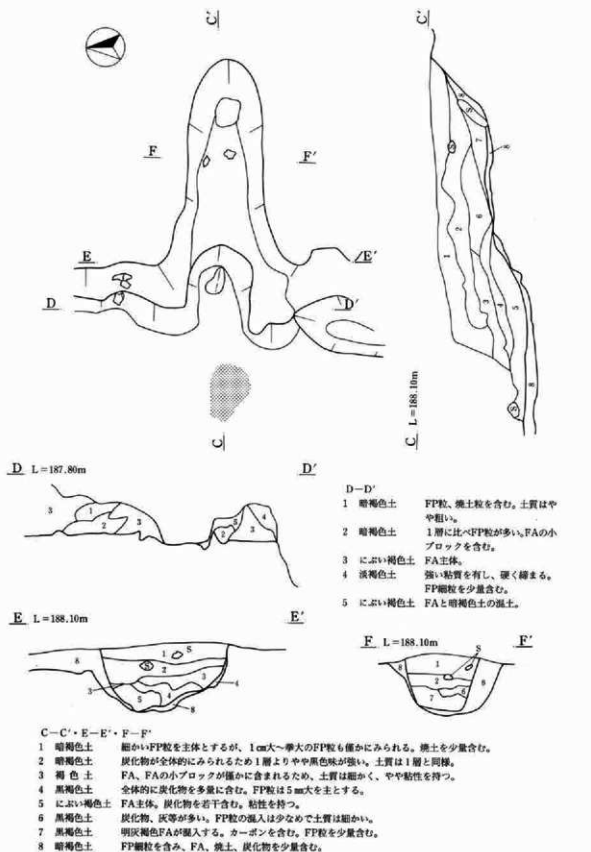


- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含むが特に層上部には3cm大ほどのFP粒が多量に認められる。
- 2 暗褐色土 細かいFP粒を全体的に多量に含む。締まりは弱くもろい。
- 3 褐色土 FP粒主体。
- 4 黒褐色土 炭化物が少量ではあるが全体的に認められる。
- 5 黒褐色土 FP粒、小石を含み、炭化物が若干認められる。土質は4層に比べ重い。
- 6 暗褐色土 細かいFP粒を多量に含む。締まりはさほど強くない。
- 7 黄褐色軽石 壁の崩壊によると思われるFP粒の流れ込み。
- 8 黒褐色土 炭化物、灰を主体とする。
- 9 褐色土 細かいFP粒を多量に含み、小ブロック状のFA、焼土等が僅かに認められる。
- 10 褐色土 9層に類似するが焼土、炭化物等が多い。やや粘性を有する。
- 11 明褐色土 FA主体。黒色土、FP粒を含む。
- 12 褐色土 FAと黒色土の混土。混入率はほぼ同様。FP粒(5~10mm大)を僅かに含む。
- 13 濃い褐色土 FA主体。黒色土は少量。よく締まる。

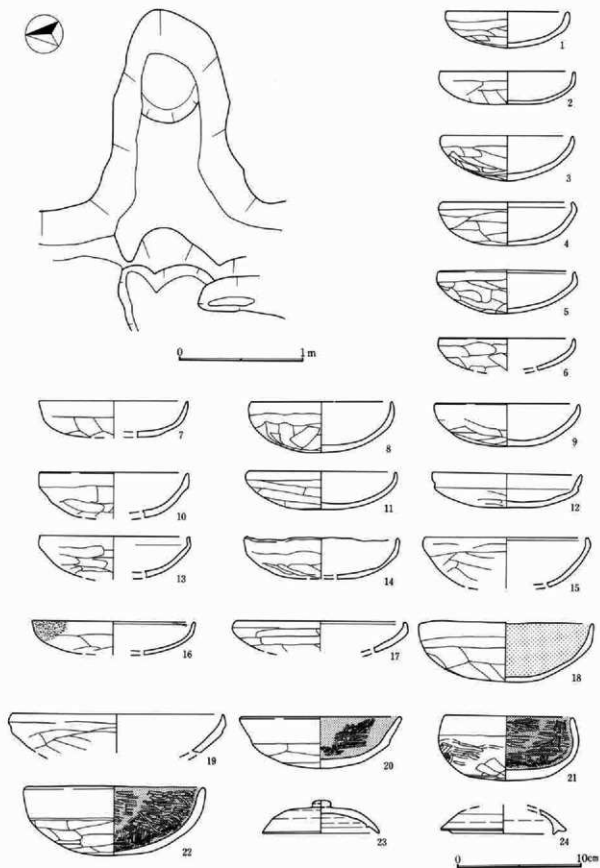
第150図 30号住居



第151図 30号住居掘り方

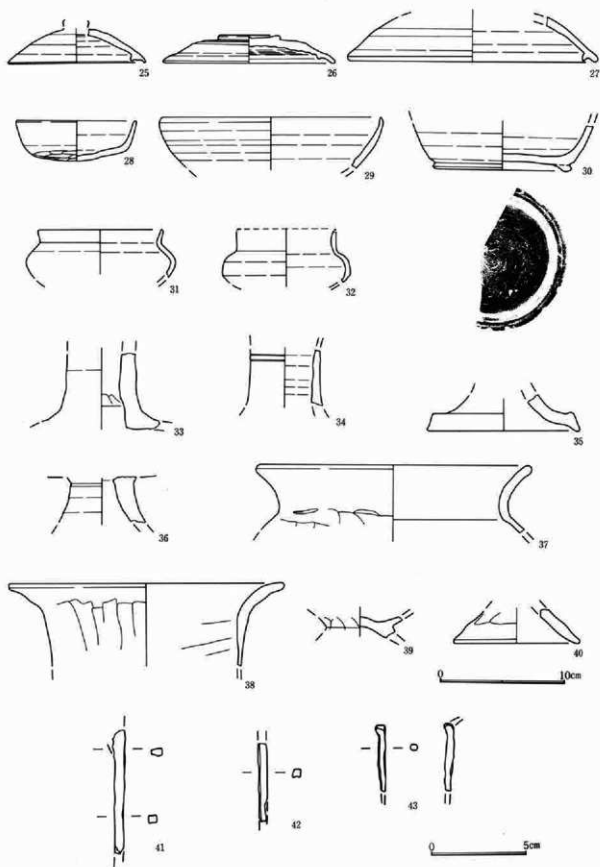


第152図 30号住居電

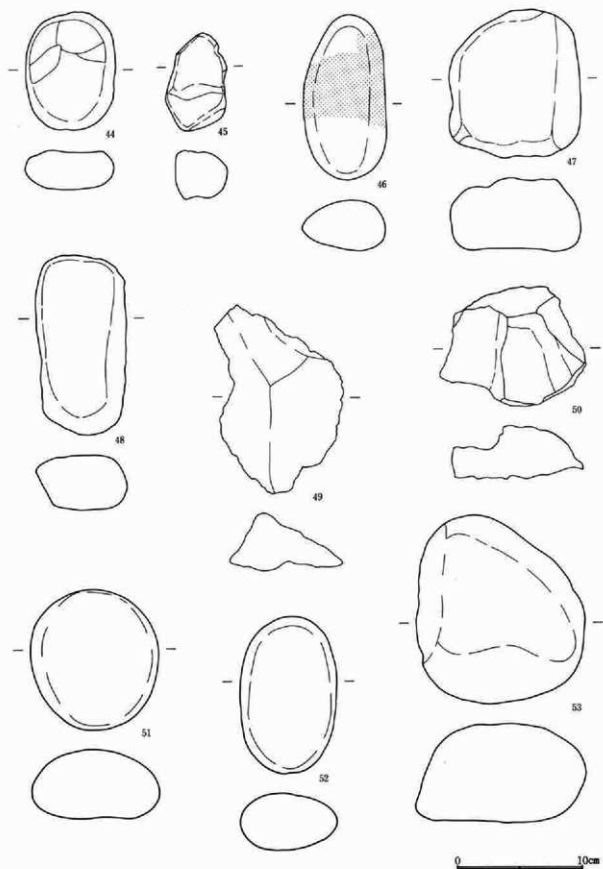


第153図 30号住居電掘り方及び出土遺物(1)

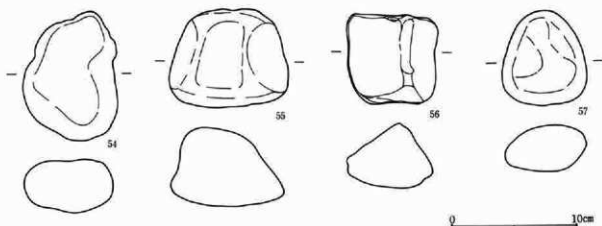




第154図 30号住居出土遺物(2)



第155図 30号住居出土遺物(3)



第156図 30号住居出土遺物(4)

## 33号住居

位置 EM-53・54、EN-53・54、EO-54 平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで30~36.5cmを測る。

重複住居 41号住居と重複関係にあり、41号住居の埋没土を掘り込んで作られている。

規模 東辺は4.50m、西辺は4.30m、南辺は5.50m、北辺は5.00mを測る。

主軸方位 N-80°-E

埋没土 褐色系色調を呈する土壌であるが、やや色調が沈む。上位は特に黒味が強い。

壁の状況 床面から、西壁は98°、南壁は95°、北壁は120°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

床面 面積は23.616㎡を測る。掘り方からHr-FAを主体とした層によって床面を形成している。

周溝 検出されなかった。掘り方でもみられない。

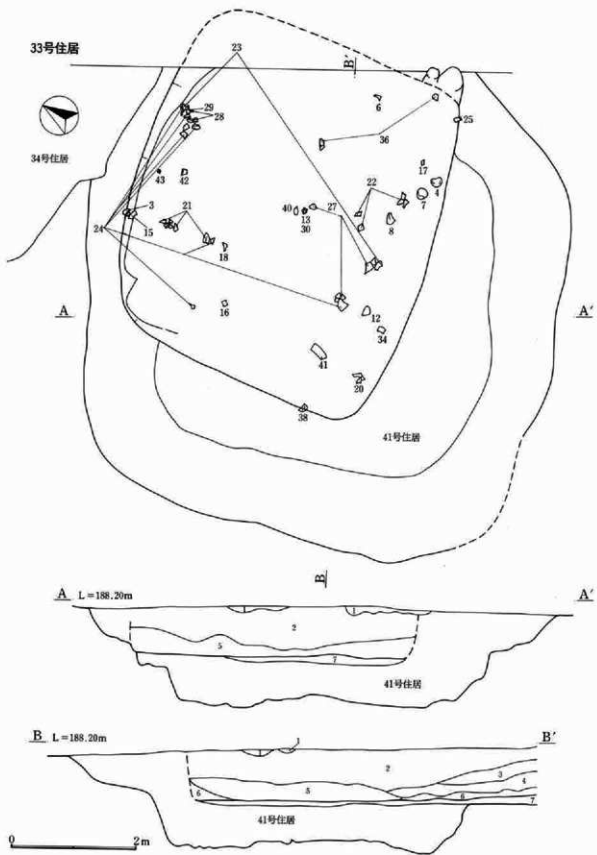
貯蔵穴 検出されなかった。 柱穴 検出されなかった。

掘り方 図示できなかったが、地山が残存している部分をみると住居外縁をHr-FA下黒色土まで掘削し、中央近辺はHr-FA層下位で掘削を留めていることが看取される。

竈位置 検出されなかった。

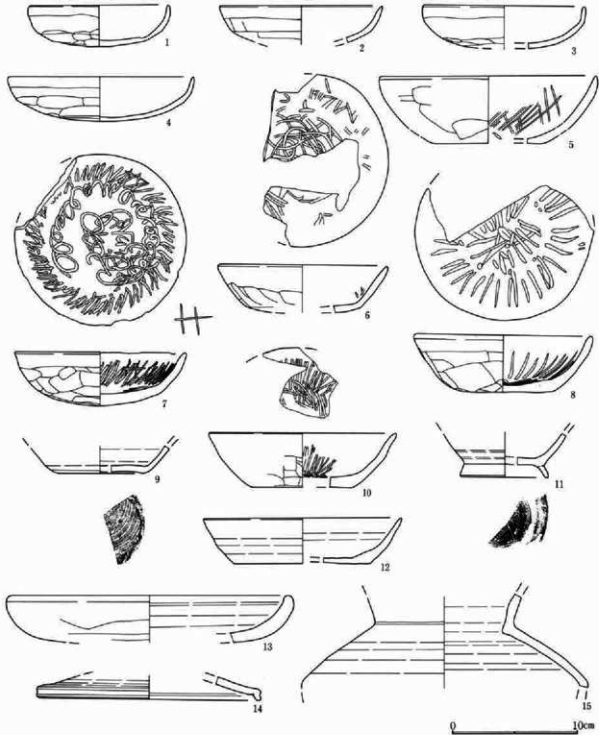
遺物 住居北壁付近で床面から若干の間隔をおいて出土した銅製鈴が特筆される。8稜を有し胴部に2条の隆起帯が巡る。鈕と一体造りで蠟型鋳造の可能性が考えられ、型もちのための釘穴が2ヶ所に認められる。土器では23が古い様相を呈し41号住居資料が混入したのもかと思われる。他の土器器壁は口縁部が屈曲し胴部が膨らみを持つ。土器器杯は底部にのみへら削りが入り、削り出しの稜を持たないものと内面に暗文が施されるものがみられる。他に須恵器杯、盤、蓋、長頸壺、甕、鉄製品、砥石類が認められる。7の口縁部内面には焼成後の刻書「+」がみられる。埋没土中から他にバンケース1箱分(15.3kg)の鉄滓とウマ、ウシの四肢骨片多数、シカの焼骨片多数の出土があった。41号住居出土羽口は本住居床面遺物の可能性もある。

所見 土器の特徴から本住居は8世紀後半には構築されていたと推定される。埋没土中からの多量の鉄滓は34号住居からの投棄の可能性も考えられる。しかし、41号住居との重複部分の床面は捉え難く、調査時には多くを掘り抜いている。そのため床面の詳細な情報は不明確であり、鉄生産関連遺物の可能性もある。

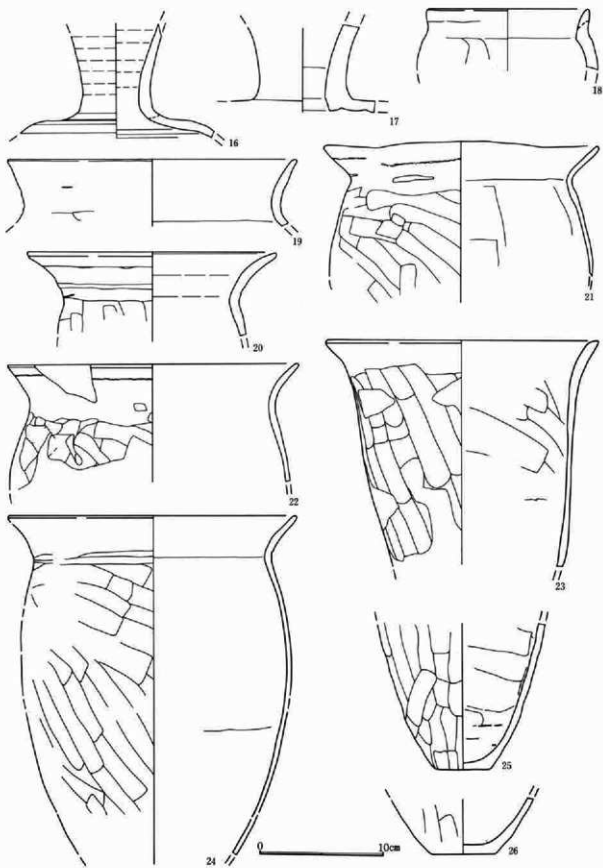


第157図 33号住居

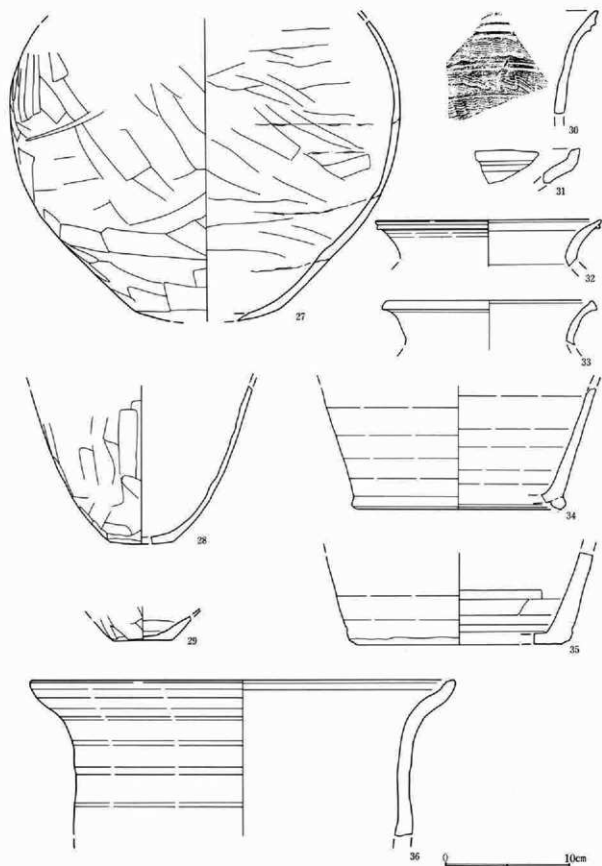
- 1 黒色土 FP粒を僅かに含む。乾くと灰色になる。硬く締まっている。(II層)
- 2 暗褐色土 FP粒を多量に含む。
- 3 暗褐色土 FP粒を多量に含むが2層より少ない。FAが僅かにブロック状に含まれる。
- 4 暗褐色土 FP粒を少量含む。FAを多量に含む。硬く締まっている。
- 5 暗褐色土 FP粒を多量に含む(2層より少ない)。カーボンを含む。
- 6 暗褐色土 4層よりもFAが多くなり、FP粒、カーボンを僅かに含む。
- 7 暗灰褐色土 FAを主体に、FP粒を少量含む。硬く締まっており、粘り床である。



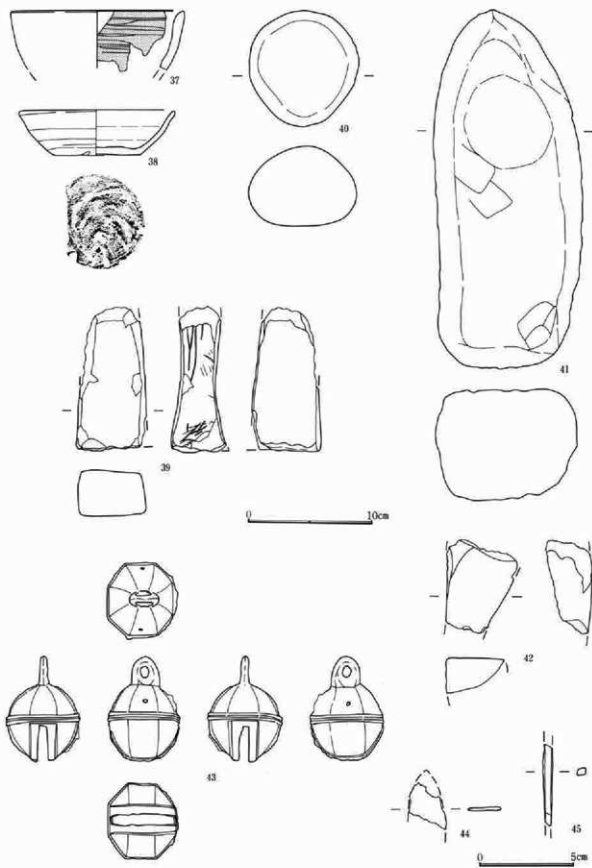
第158図 33号住居出土遺物(1)



第159図 33号住居出土遺物(2)



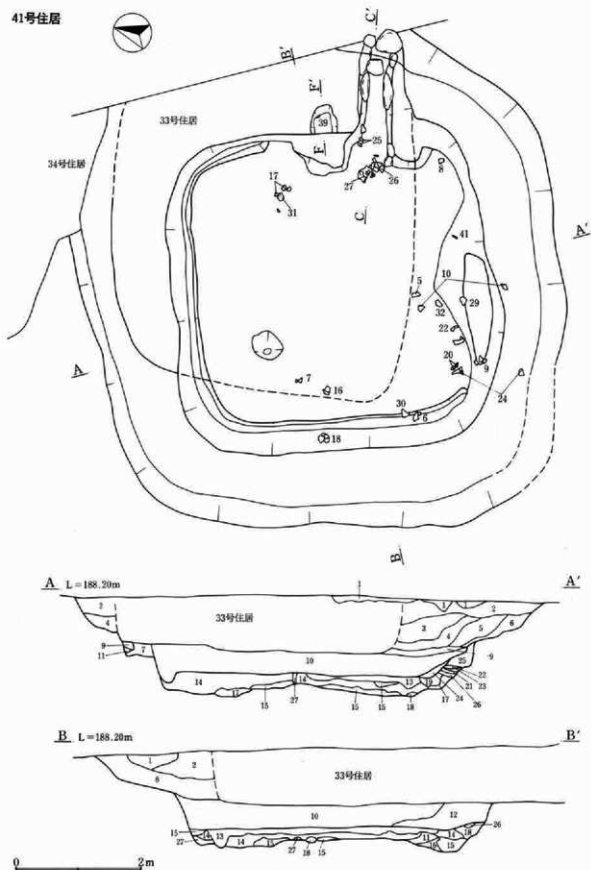
第160图 33号住居出土遺物(3)



第161図 33号住居出土遺物(4)



41号住居



第162图 41号住居

1 黒色土	FP粒、As-Bを僅かに含む。硬くと灰色になる。硬く締まっている。(H層)	13 暗褐色土	FAを混入し、粒状、ブロック状に含む。φ2~5mmほどのFP粒、黒色土ブロックを僅かに含む。よく締まっている。
2 暗褐色土	FP粒を多量に含む。	14 暗褐色土	FAと黒色土の混合土主体でFAブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
3 暗褐色土	FP粒を多量に含む。	15 暗黄褐色土	ローム主体で黒色土、FAを混入し、ブロック状に含む。
4 暗褐色土	FP粒を多量に含む(2層より少ない)。カーボンを僅かに含む。	16 暗黄褐色土	15層に類似するがFAブロック、黒色土ブロックを多量に含む。
5 暗褐色土	3層に類似するが、FP粒がやや少なめである。	17 暗黄褐色土	ロームと黒色土の混合層、FAを粒状に含む。
6 暗褐色土	FP粒を僅かに含む。硬く締まっている。	18 黄褐色土	ロームに黒色土ブロックを僅かに含む。
7 暗褐色土	3層に類似するが、再れたFP粒が主体である。	19 暗黄褐色土	17層に類似するがFAの粒が大き。
8 暗褐色土	FAを多量に含む。FP粒、カーボンを僅かに含む。	20 灰褐色土	FAの各ユニットの混合層、黒色土ブロックを僅かに含む。
9 暗灰褐色土	FAを主体に、FP粒を少量含む。硬く締まっており、貼り床と考えられる。	21 黒色土	FAブロックを含む。
10 暗黄褐色土	潤ったFP粒を主体とし、掘り方堀土である。	22 浅黄褐色土	FAのS-1ユニット主体で他ユニットを含む。
11 暗黄褐色土	FP粒主体。	23 明褐色土	26層に類似するが色調が暗い。
12 暗褐色土	FAを含んでやや粘性を帯びる。FP粒を僅かに含む。	24 赤褐色土	焼土層。
		25 濃い橙色火山灰	FAの各ユニットが立位になっている。
		26 濃い橙色火山灰	FAの二次堆積層。
		27 黄褐色土	ローム層。

## 41号住居

位置 EM-53・54・55、EN-53・54・55 平面形状 隅丸方形

特徴 壁に中段テラスを有する住居である。住居廃棄時の竈の他に旧竈の痕跡がみられた。

残存深度 壁の高さは床面まで120~131.5cmで、周溝底面まで130.5~139.5cmを測る。確認面から中段まで43~48cm、中段から床面まで48~68cmを測る。

重複住居 33号住居、34号住居と重複関係にあり、41号住居の埋没土は33号住居、34号住居に掘り込まれている。

規模 東辺は7.60m、西辺は6.50m、南辺は6.80m、北辺は7.10m、中段テラスの東辺は4.80m、西辺は4.90m、南辺は5.00m、北辺は4.90mを測る。 主軸方位 N-63°-E

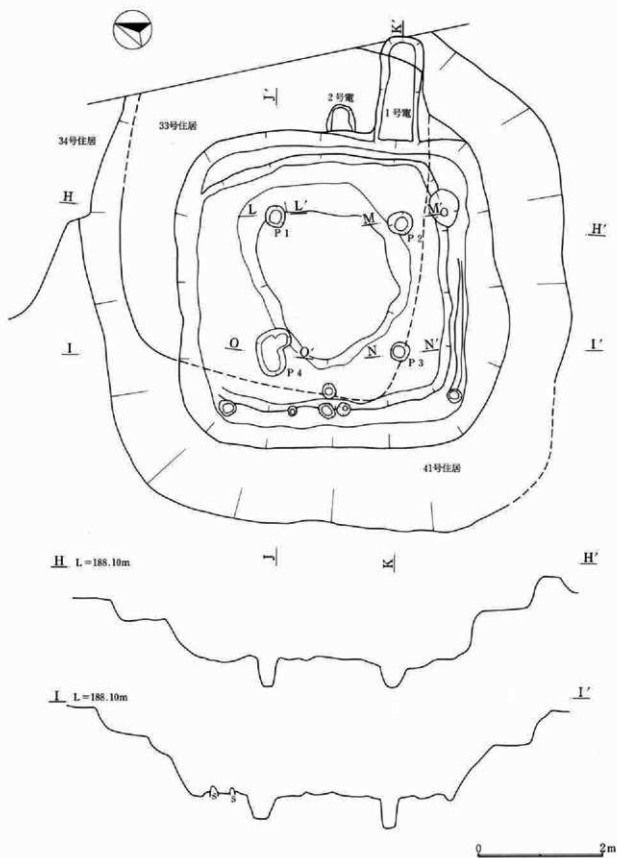
埋没土 褐色系の色調を呈す土壌である。上位はやや色調が沈む。

壁の状況 床面から、西壁は129°、南壁は143°、北壁は125°の角度で立ち上がる。床から中段テラスまでの南壁では、壁の下場が内側に大きく張り出し、中段テラスの幅が減じて中段と床との間にさらに平坦面がみられる部分があった。同所を断ち割ったところ、平坦面と中段テラスとの境にはクラックが入り、埋没土と同層土が認められた。平坦面をなしているのはHr-FA層であるが各ユニットが立位の状態であることが看取された。立位のHr-FA層の下にはクラックに流入していた埋没土と同様の土層がみられ、その下に地山であるHr-FA下黒色土があり、壁をなしていた。

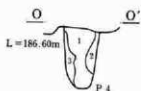
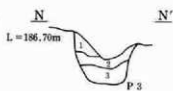
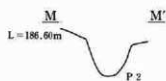
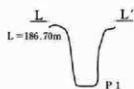
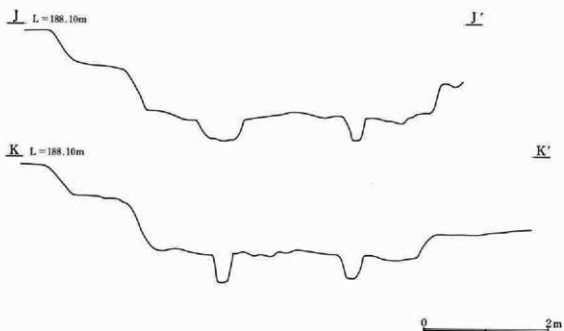
床面 面積は中段テラス外縁ラインが44.235㎡、床面が19.431㎡を測る。掘り方からHr-FA、Hr-FA下黒色土、ロームを主体とした層及びそれらの混合層によって床面を形成している。

周溝 住居南辺と竈を除いた部分にみられる。 貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 床面では確認できなかったが、掘り方では検出できた。東西間隔は2.0m、南北間隔は2.0mを測る。深さは、掘り方より1、3号ピットが49~50cm、2、4号ピットが40~42cm、床面からは1、2号ピットが65~66cm、3号ピットが75cm、4号ピットが57cmを測る。



第163図 33・41号住居掘り方



41号住3号ピット

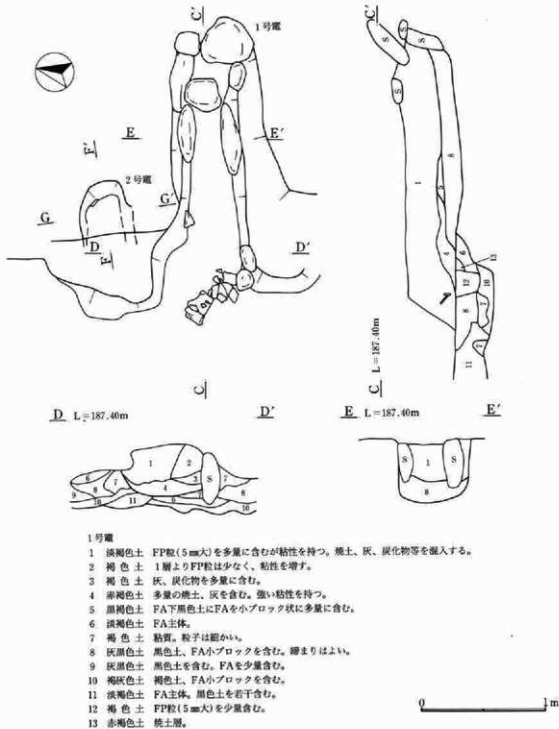
- 1 黒褐色土 4号ピット1層に類似するがFA粒がφ1~2cmと大きい。
- 2 黒褐色土 4号ピット1層に類似するが黒色土粒が少ない。
- 3 黒褐色土 黒色土主体でロームを混入する。ロームはブロック状にも含む。

41号住4号ピット

- 1 暗褐色土 FA下黒色土とFAの混合層。FA下黒色土、FAを粒状に含む。φ5mmまでのFP粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 1層土にロームを混入する。
- 3 暗褐色土 2層に類似するがローム混入がより少ない。



第164図 33・41号住居掘り方



## 1号竈

- 1 淡褐色土 FP粒(5mm大)を多量に含むが粘性を持つ。黒土、灰、炭化物等を混入する。
- 2 褐色土 1層よりFP粒は少なく、粘性を増す。
- 3 褐色土 灰、炭化物を多量に含む。
- 4 赤褐色土 多量の焼土、灰を含む。強い粘性を持つ。
- 5 黒褐色土 FA下黒色土にFAを小ブロック状に多量に含む。
- 6 淡褐色土 FA主体。
- 7 褐色土 粘質。粒子は細かい。
- 8 灰褐色土 黒色土、FA小ブロックを含む。締まりはよい。
- 9 灰褐色土 黒色土を含む。FAを少量含む。
- 10 褐色土 褐色土、FA小ブロックを含む。
- 11 淡褐色土 FA主体。黒色土を若干含む。
- 12 褐色土 FP粒(5mm大)を少量含む。
- 13 赤褐色土 焼土層。

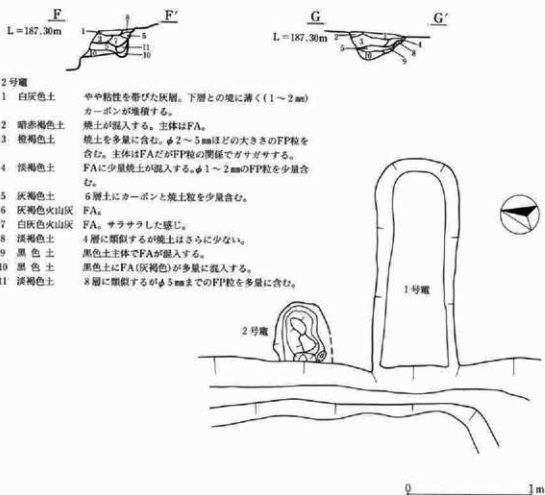
第165図 41号住居竈

**掘り方** Hr-FA 下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土及びローム層まで掘削している。中段はHr-FA層を掘り残して形成している。床部分の外縁部をやや深く掘り込んでいる。

**竈位置** 2基検出され、1号竈は東辺中央やや南寄り、2号竈は東辺中央である。

**竈方位** 1号竈 N-78°-E 2号竈 N-70°-E

**竈規模** 1号竈 全長は、2.25m(屋外長1.45m、屋内長0.80m)、袖部幅1.20m、燃焼部幅0.30mを測る。



2号竈

- |          |  |
|----------|--|
| 1 白灰色土   | やや粘性を帯びた灰層。下層との境に薄く(1~2mm)カーボンが堆積する。               |
| 2 暗赤褐色土  | 焼土が混入する。主体はFA。                                     |
| 3 橙褐色土   | 焼土を多量に含む。φ2~5mmほどの大きさのFP粒を含む。主体はFAだがFP粒の間隔でガサガサする。 |
| 4 淡褐色土   | FAに少量焼土が混入する。φ1~2mmのFP粒を少量含む。                      |
| 5 灰褐色土   | 6層土にカーボンと焼土粒を少量含む。                                 |
| 6 灰褐色火山灰 | FA。  |
| 7 白灰色火山灰 | FA。サラサラした感じ。                                       |
| 8 淡褐色土   | 4層に類似するが焼土はさらに少ない。                                 |
| 9 黒色土    | 黒色土主体でFAが混入する。                                     |
| 10 黒色土   | 黒色土にFA(灰褐色)が多量に混入する。                               |
| 11 淡褐色土  | 8層に類似するがφ5mmまでのFP粒を多量に含む。                          |

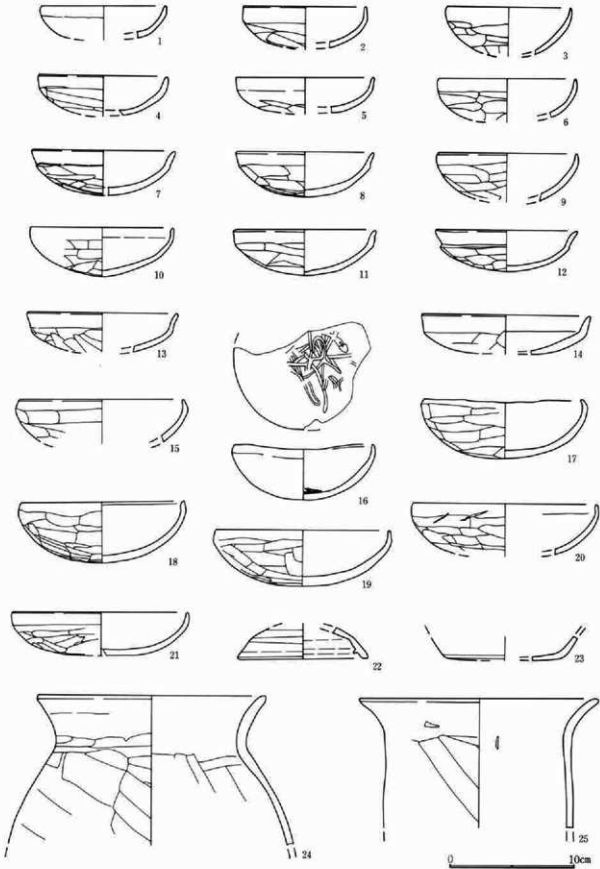
第166図 41号住居竈及び竈掘り方

2号竈 残存長は、推定0.40m、袖部幅0.40mを測る。

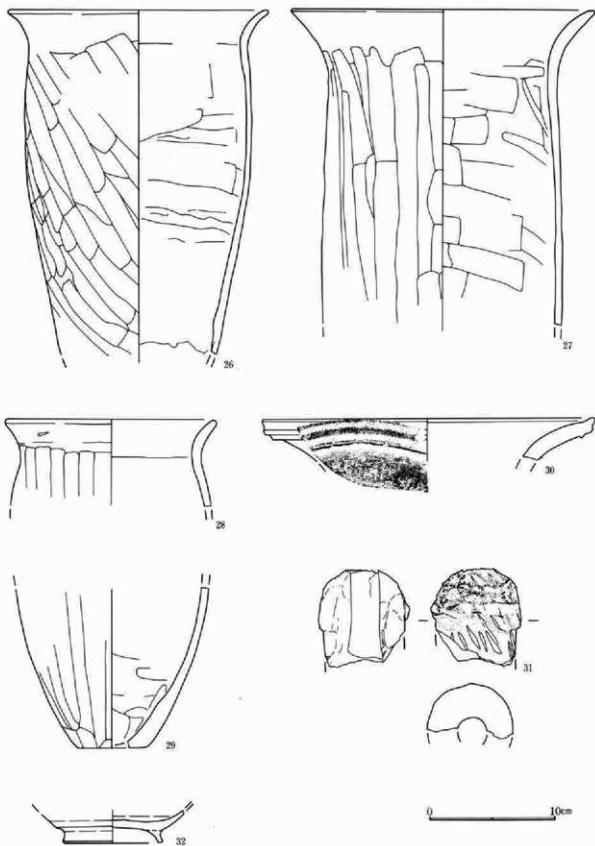
**竈形状その他** 1号竈は右袖に偏平な河原石2石を立位に据え、煙道左右にも平の面を内側へ向けて横位に河原石を据えている。外端部では平の面を住居側へ向けて立位に据えている。その上に斜位に石がみられ、煙出し部分の雨よけとも考えられるが本来的な位置ではない可能性もある。2号竈は1号竈北側に位置する。残存状態は悪く、粘性を帯びた灰層と焼土層及び掘り方が認められたのみであった。

**遺物** 1号竈焚き口に土師器甕が2個体出土している。残存状態が悪く、焚き口に横架していたか不明である。ともに口縁部の屈曲は弱く胴部の膨らみがないものである。土師器杯は口縁部と体部を面す稜を有するものと削り出しの稜をもつものがみられる。須恵器は杯、蓋、甕があり、蓋のカエリはシャープさを残す。羽口の出土レベルは33号住居との境付近に当たり、33号住居のものとの可能性もある。1号竈、2号竈から動物の焼骨片が多数出土している。

**所見** 出土土器の様相から、本住居は7世紀後半には構築されていたと考えられる。また、前述の南壁の状態は何らかの要因でHr-FA下黒色土が挟り込まれた状態となり、Hr-FA層がクラックを生じて折れるように落ち込んだものと考えられる。同部分の住居外形も中段テラスが幅を減じるのと相似形に外側へやや張り出しているのが注目される。

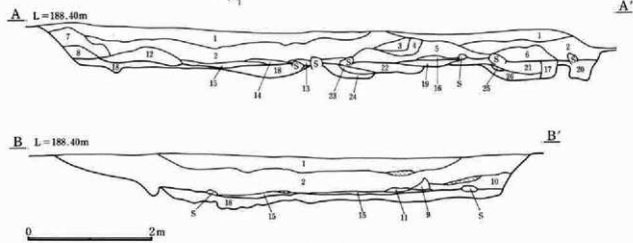
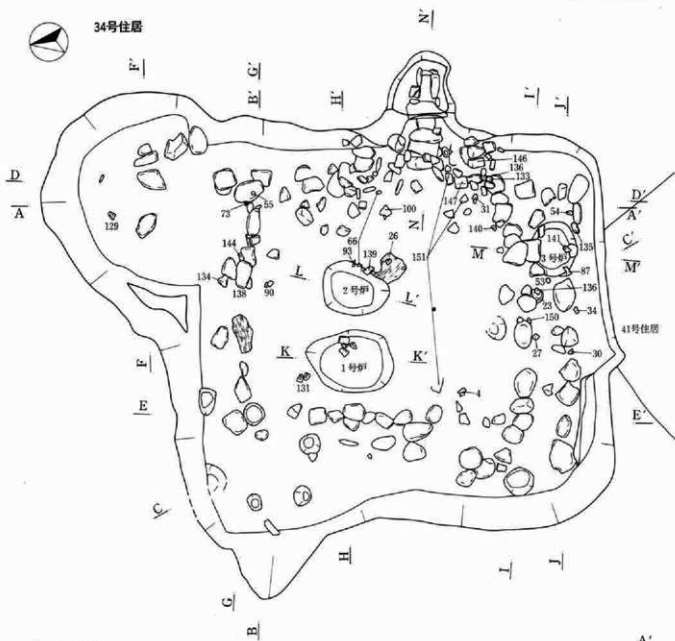


第167圖 41号住居出土遺物(1)



第168図 41号住居出土遺物(2)

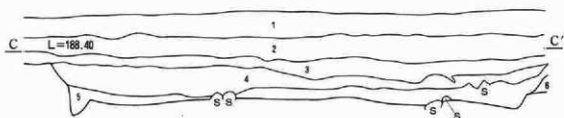




第169図 34号住居

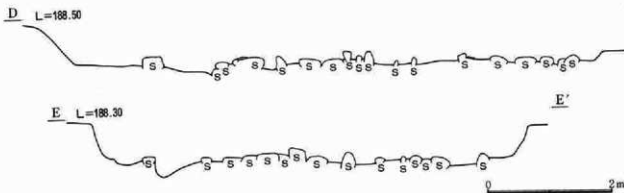
A-A'・B-B'

- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含む。バサバサしている。
- 2 暗褐色土 汚れたFP粒を多量に含む。FAを少量含む。1層よりもやや明るい。
- 3 暗褐色土 FA、汚れたFP粒を多量に含む。2層よりも明るい。
- 4 黒褐色土 FP粒を少量含む。カーボンを多量に含む。
- 5 暗褐色土 FP粒、FAを多量に含む。2層に類似する。
- 6 暗褐色土 大粒のFP粒を多量に含む(2層などに比べて汚れていない)。サクサクしている。
- 7 暗黄褐色土 FP粒を多量に含む。壁の崩れ(FP壁)。
- 8 暗黄褐色土 FP粒を多量に含む。7層よりも暗い色調。
- 9 暗褐色土 汚れたFP粒を多量に含む。暗い色調。
- 10 暗褐色土 FP粒を多量に含む(2層より少なめ)。FAを多量に含む。硬く締まっている。
- 11 黒褐色土 FP粒を少量含む。黒色灰を多量に含む。
- 12 暗褐色土 FAを多量に含む。FP粒を少量含む。硬く締まっている。
- 13 暗褐色土 2層よりもややカーボンが多い。
- 14 暗褐色土 15層よりも焼土が少ない。
- 15 暗赤褐色土 焼土を少量含む。FP粒、カーボンを僅かに含む。
- 16 赤褐色土 焼土を多量に含む。黒色灰を少量含む。
- 17 暗赤褐色土 焼土を僅かに含む。灰を少量含む。しっとりとした粘性を帯びる。(3号貯埋土)
- 18 暗褐色土 FP粒を少量含む。焼土を多量に含む。
- 19 赤褐色土 黒色灰層、焼土層の互層。
- 20 暗褐色土 FP粒を少量含む。
- 21 暗赤褐色土 焼土を多量に含む。カーボンを少量含む。FP粒を僅かに含む。
- 22 暗赤褐色土 FP粒、焼土を少量含む。
- 23 暗褐色土 FP粒を少量含む。
- 24 暗赤褐色土 焼土を多量に含む。カーボンを少量含む。
- 25 赤褐色土 FP粒(5mm大が主)を多量に含む。締まりはさほど強くない。
- 26 暗赤褐色土 焼土を少量含む。

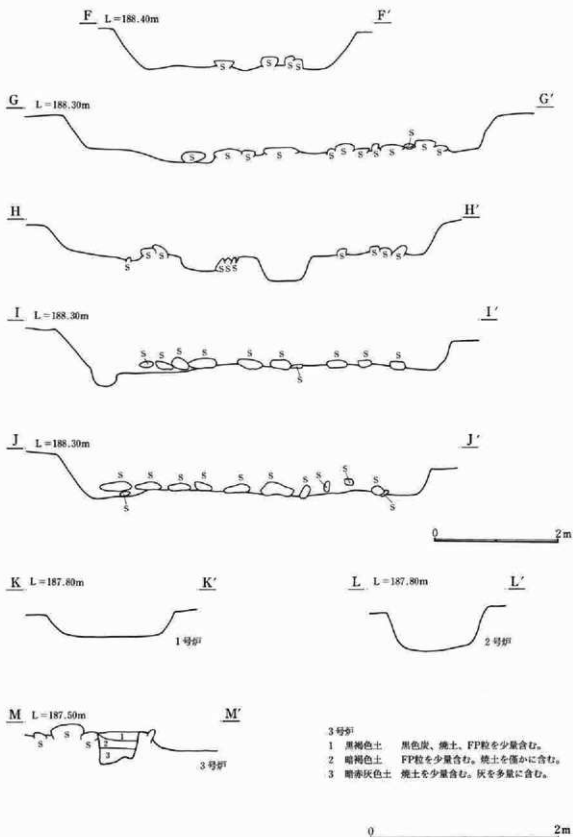


C-C'

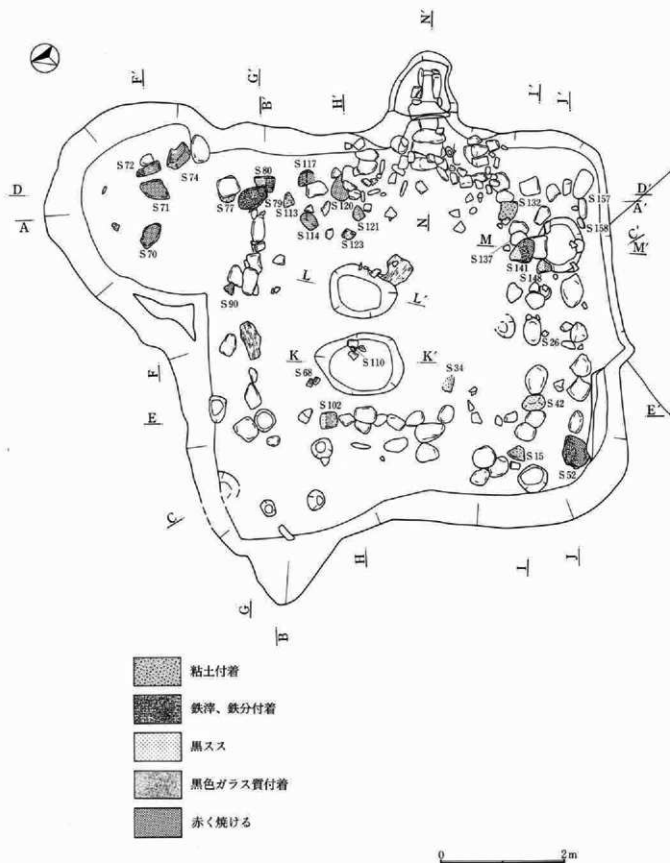
- 1 耕作土
- 2 黒色土 サラサラとした細かい軽石(Aa-B)を多量に含む。
- 3 暗褐色土 FP粒を多量に含む。なかには4cm〜拳大のものもみられる。
- 4 暗褐色土 3層に比べFP粒が細くなり、炭化物が散見する。
- 5 暗褐色土 FP粒は少量となり粒もさらに細くなる。やや粘性を持つ。
- 6 褐色土 FP粒(5mm大が主)を多量に含む。締まりはさほど強くない。



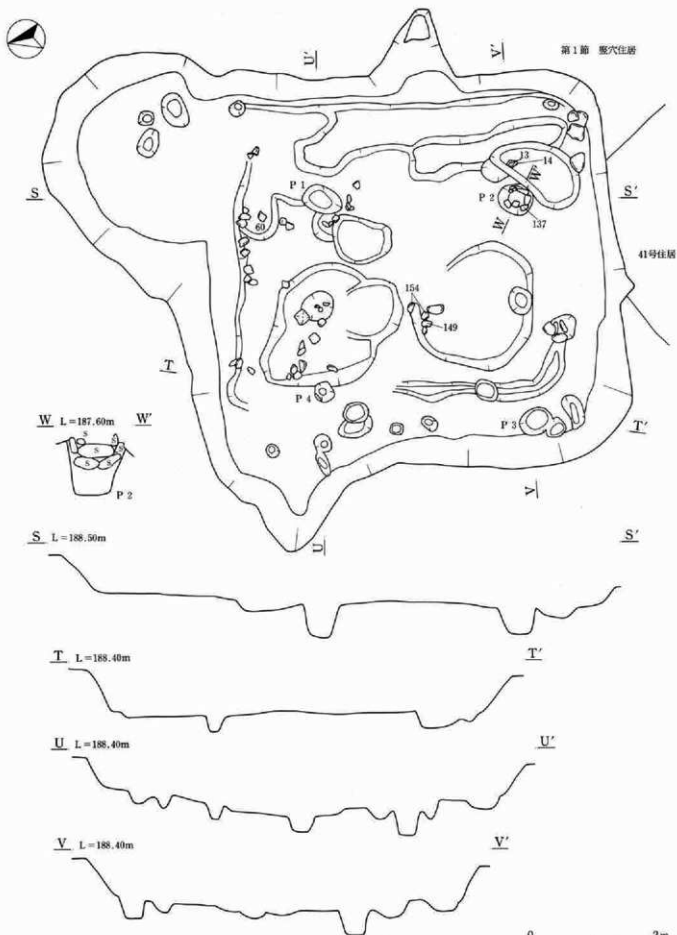
第170図 34号住居



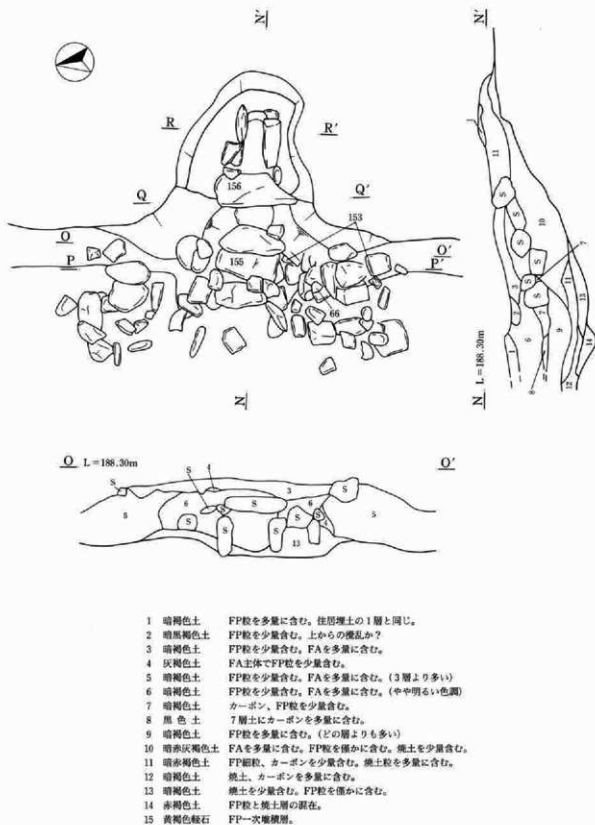
第171図 34号住居及び竪穴



第172図 34号住居配石状態



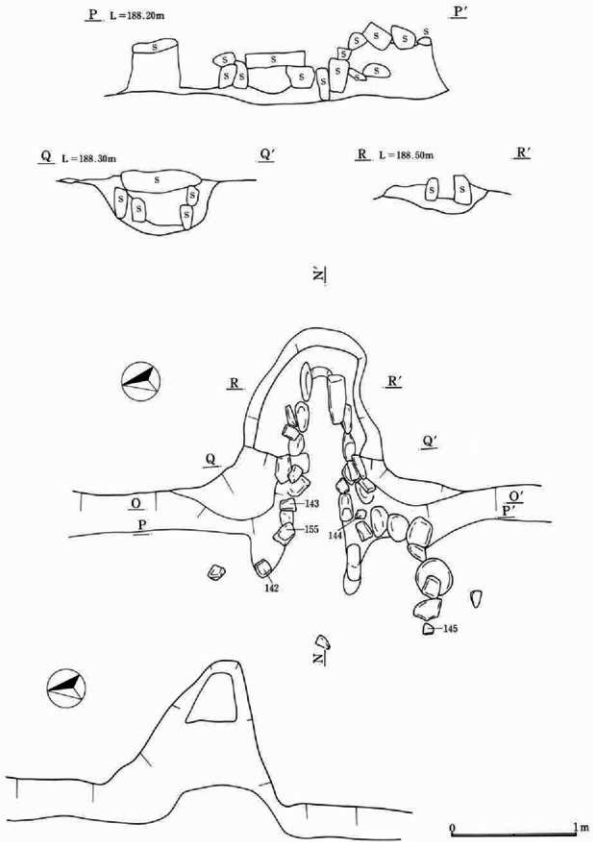
第173図 34号住居掘り方



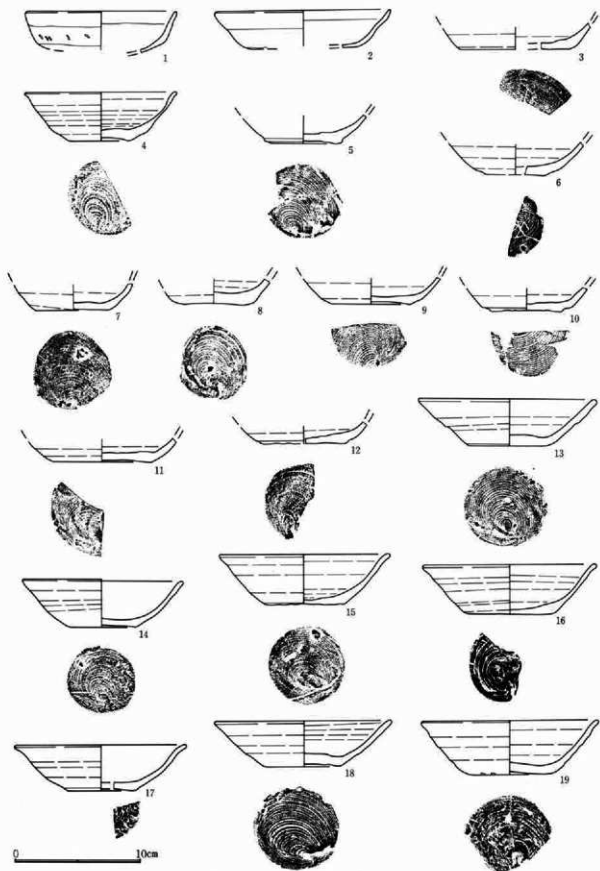
- |           |                             |
|-----------|-----------------------------|
| 1 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。住居埋土の1層と同じ。       |
| 2 暗黒褐色土   | FP粒を少量含む。上からの擾乱か？           |
| 3 暗褐色土    | FP粒を少量含む。FAを多量に含む。          |
| 4 灰褐色土    | FA主体でFP粒を少量含む。              |
| 5 暗褐色土    | FP粒を少量含む。FAを多量に含む。(3層より多い)  |
| 6 暗褐色土    | FP粒を少量含む。FAを多量に含む。(やや明るい色調) |
| 7 暗褐色土    | カーボン、FP粒を少量含む。              |
| 8 黒色土     | 7層土にカーボンを多量に含む。             |
| 9 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。(どの層よりも多い)        |
| 10 暗赤灰褐色土 | FAを多量に含む。FP粒を僅かに含む。焼土を少量含む。 |
| 11 暗赤褐色土  | FP細粒、カーボンを少量含む。焼土粒を多量に含む。   |
| 12 暗褐色土   | 焼土、カーボンを多量に含む。              |
| 13 暗褐色土   | 焼土を少量含む。FP粒を僅かに含む。          |
| 14 赤褐色土   | FP粒と焼土層の混在。                 |
| 15 黄褐色砂石  | FP一次堆積層。                    |

0 1m

第174図 34号住居竈

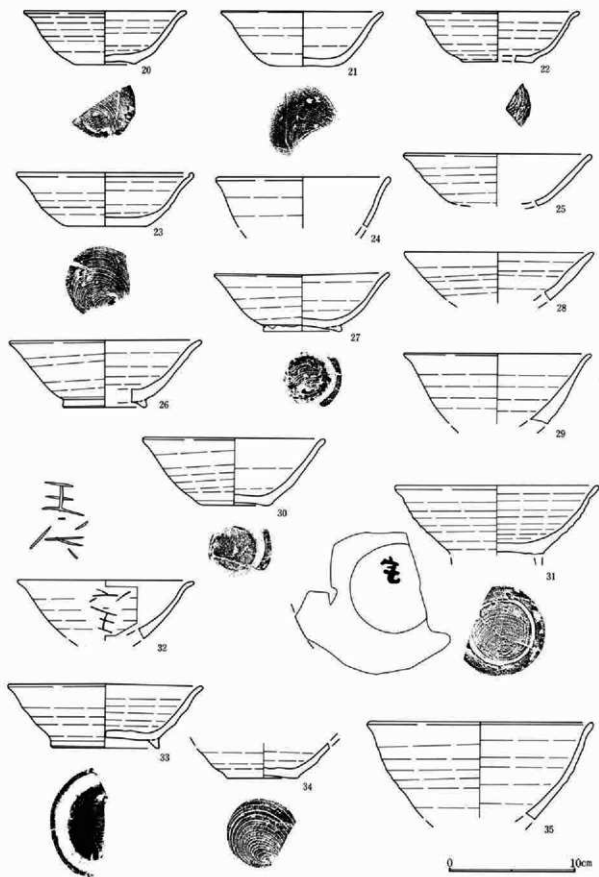


第175図 34号住居電及び電掘り方

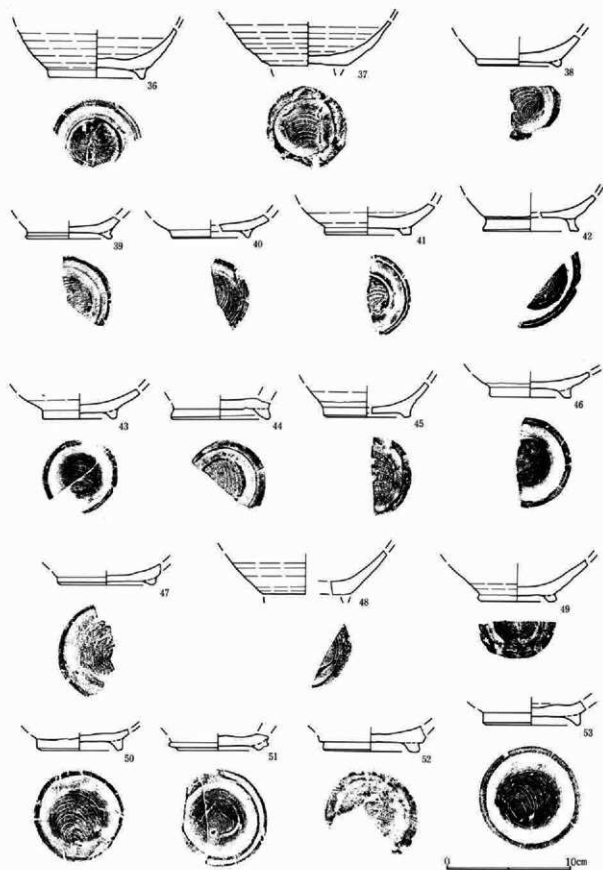


第176図 34号住居出土遺物（1）

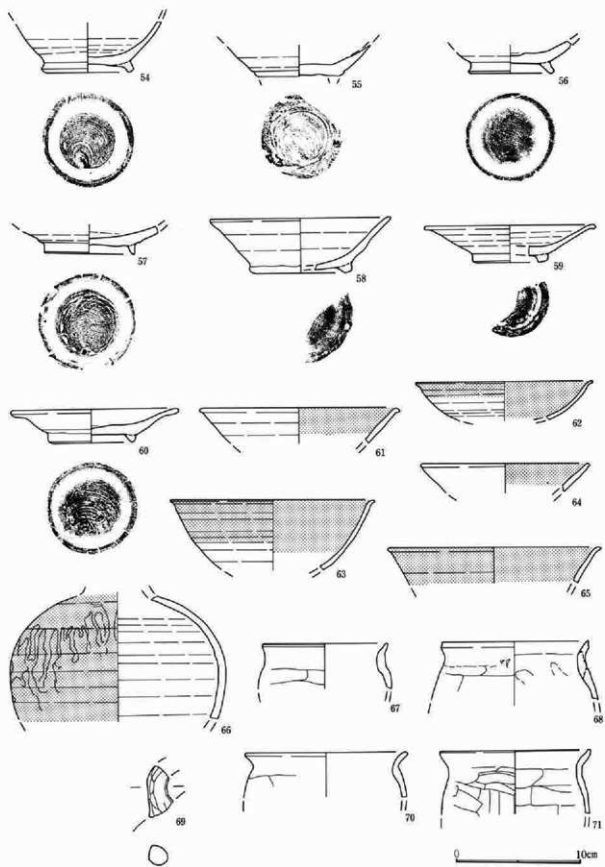




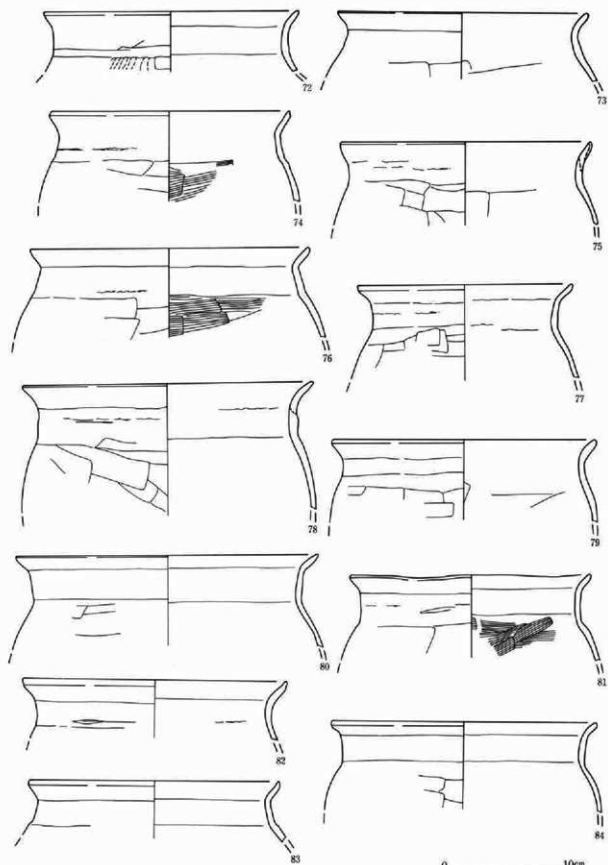
第177图 34号住居出土遺物(2)



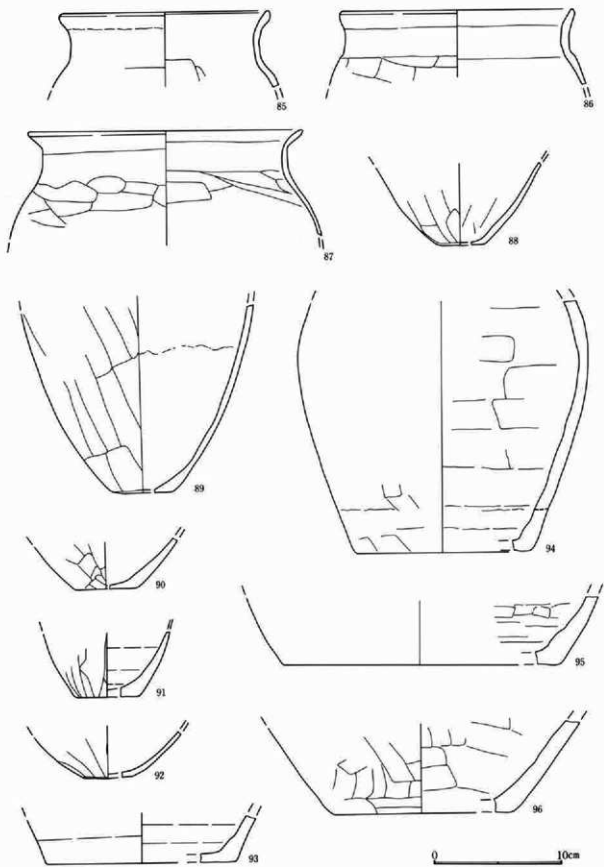
第178図 34号住居出土遺物(3)



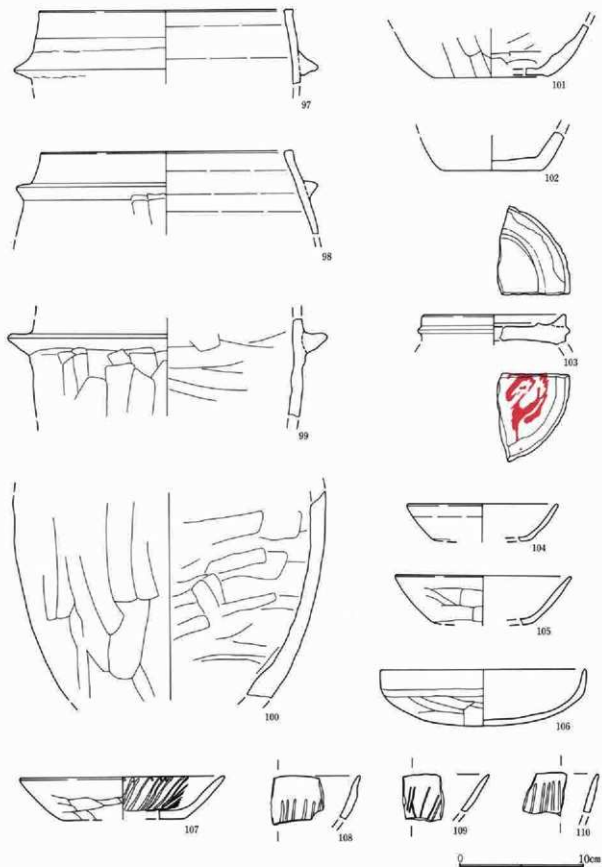
第179图 34号住居出土物(4)



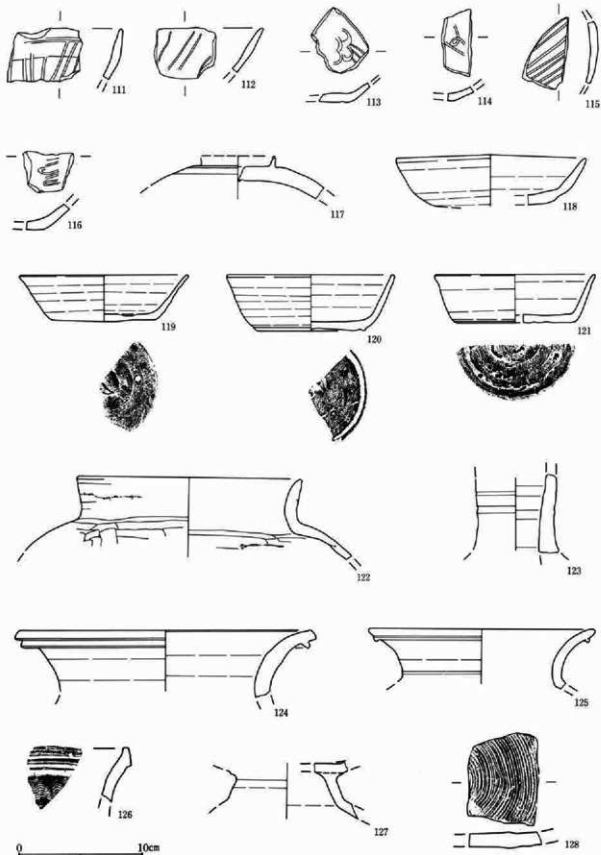
第180図 34号住居出土遺物(5)



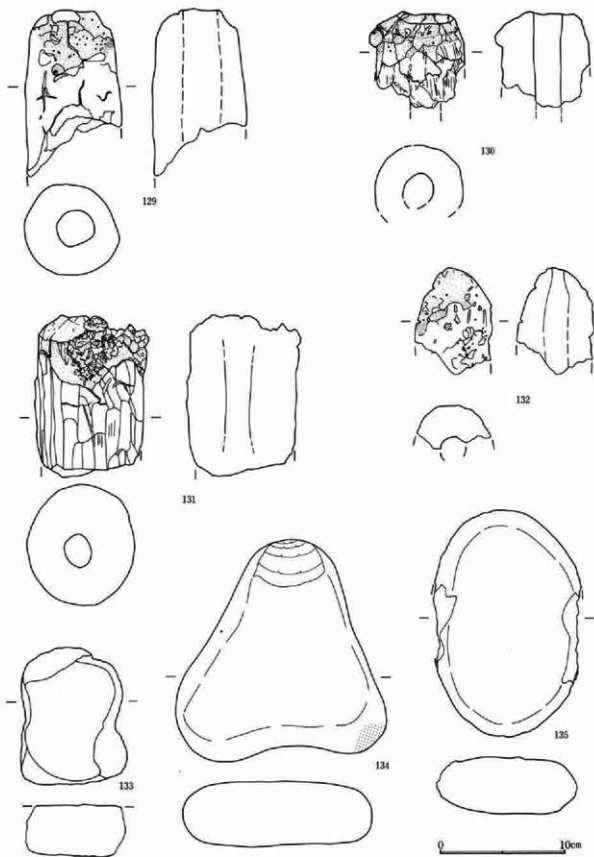
第181图 34号住居出土遺物(6)



第182図 34号住居出土遺物（7）

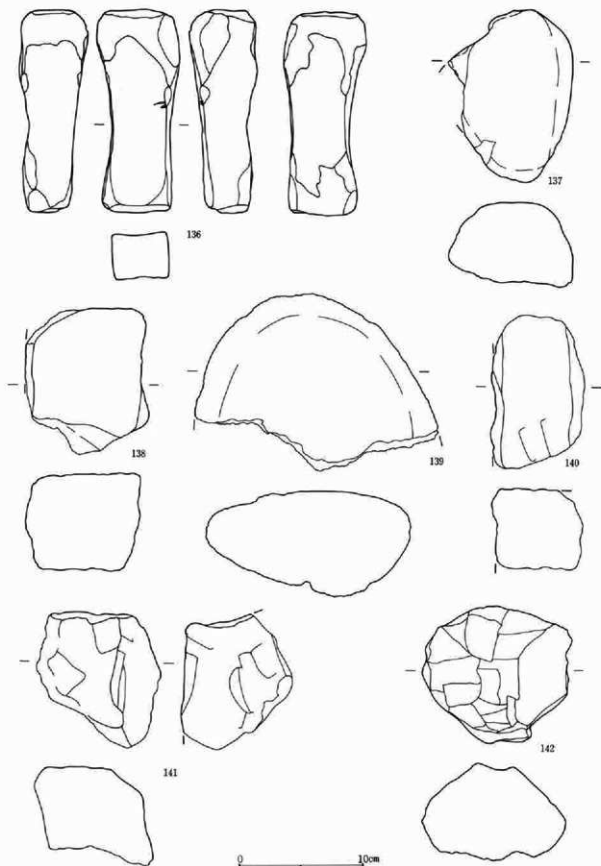


第183图 34号住居出土遺物(8)

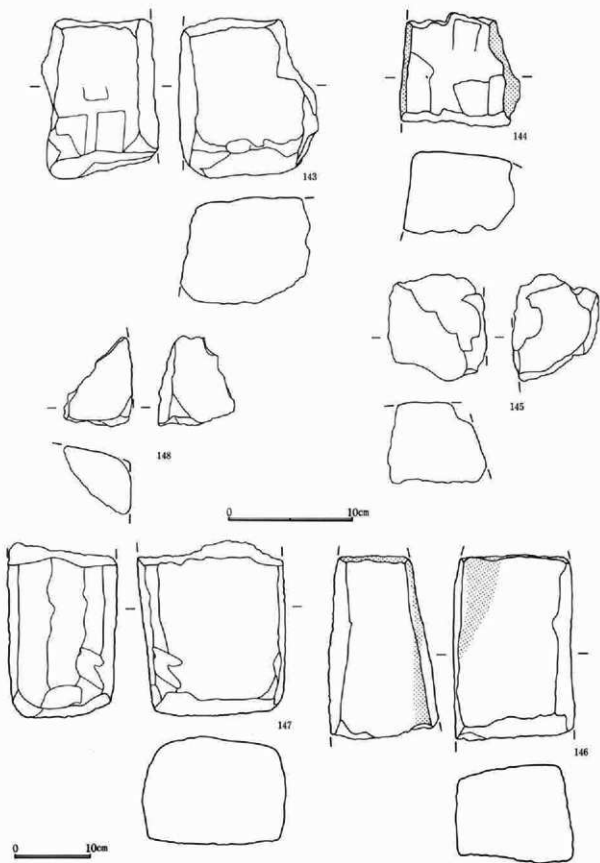


第184図 34号住居出土遺物(9)

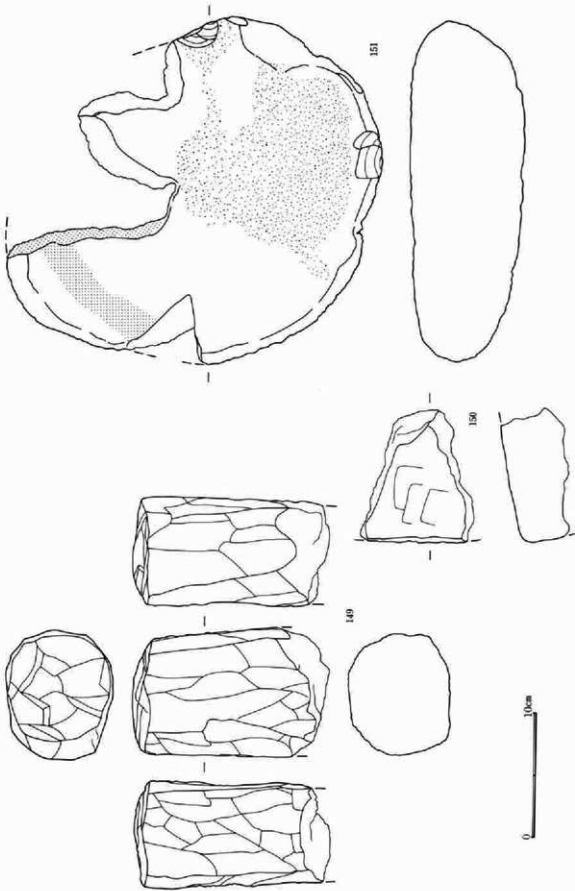




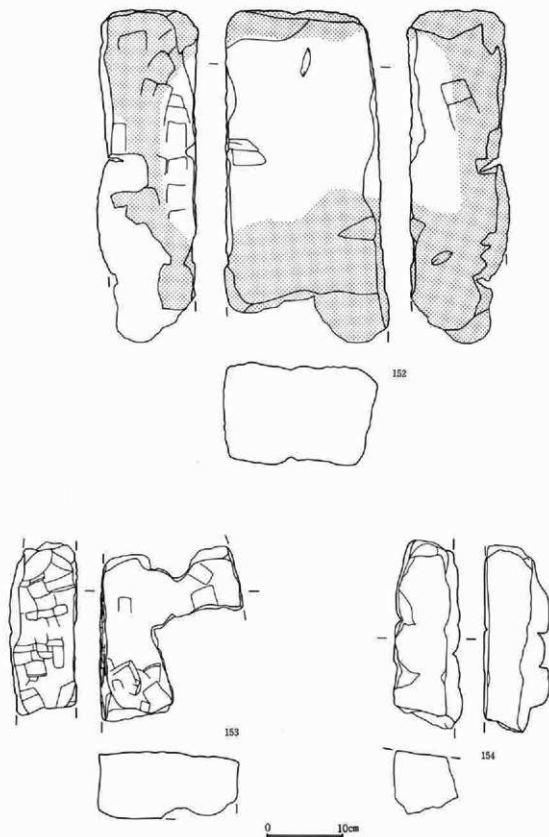
第185图 34号住居出土遗物(10)



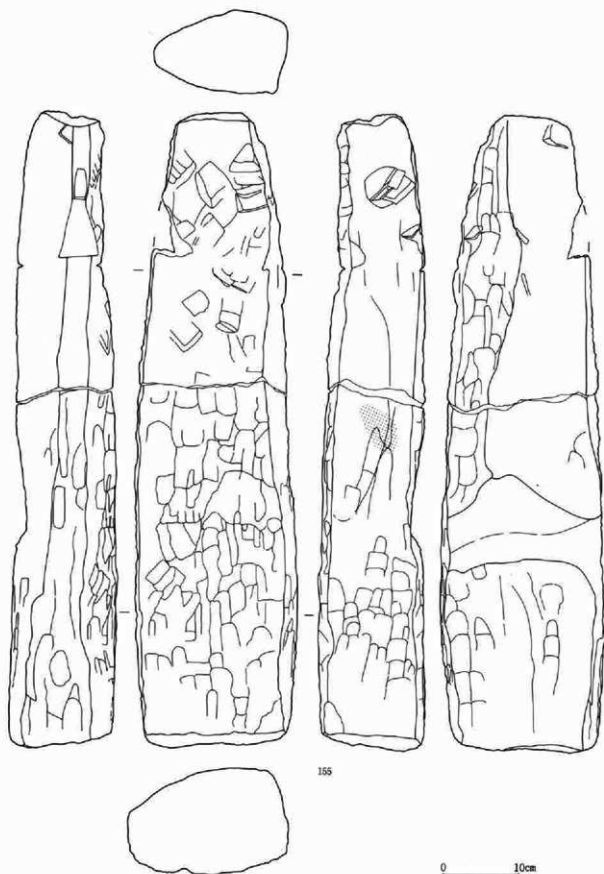
第186図 34号住居出土遺物(11)



第187圖 34号住居出土遺物 (12)

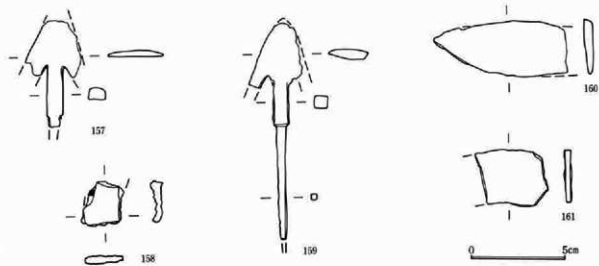
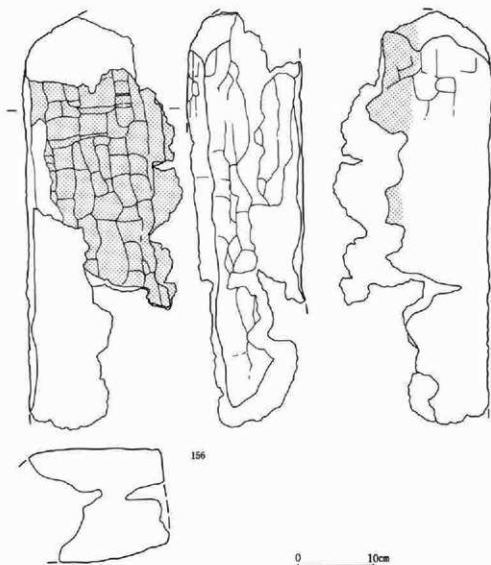


第188図 34号住居出土遺物 (13)

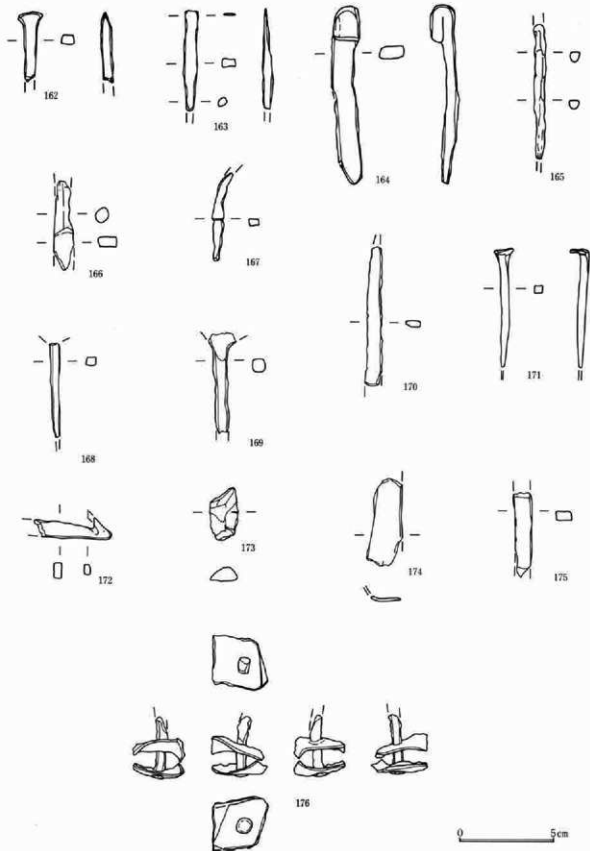


155

第189圖 34号住居出土遺物 (14)



第190図 34号住居出土遺物 (15)



第191图 34号住居出土遺物 (16)

### 34号住居

位置 EO-53・54・55、EP-53・54・55、EQ-53

平面形状 北東コーナーに円形張り出しを有する隅丸方形

特徴 3基の炉を持つ鉄生産関連遺構である。壁際に石列を有している。

残存深度 壁の高さは45～63.8cmを測る。

重複住居 41号住居と重複関係にあり、41号住居の埋没土の一部を掘り込んで作られている。

規模 東辺は8.90m、西辺は6.80m、南辺は6.20m、北辺は6.90mを測る。円形張り出しは径3.08mを測る。

主軸方位 N-103°-E

埋没土 褐色系土壌を呈する土壌が主体である。上位はやや色調が沈む。土層断面によると床面の石列上位付近では炭化物が認められる。

壁の状況 床面から、東壁は117°、西壁は120°、北壁は135°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

床面 面積は39.642㎡を測る。掘り方から Hr-FA を主体とする層によって床面を形成している。床面では石列が巡っていた。北辺は北壁下場から50～63cm離れて4.16m続き、西辺は壁から72～174cm離れて5.46m続いている。南辺は2列認められ、壁から21～59cm離れて4.56m伸び、もう1列は壁から75～120cm離れて4.18mほど続いている。この2列は西辺の石列を越えて西壁まで伸びる。東辺は竪前面でとぎれるが壁から20～80cm離れて竪北側では2.86m、竪南側で1.02m続く。

周溝 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 床面では確認できなかったが、掘り方で検出された。東西間隔は、北が3.0m、南が2.1m、南北間隔は、東が3.2m、西が4.0mを測る。深さは、掘り方より1、2号ピットは39～43cm、3号ピットは31cm、4号ピットは24cm、床面からは1、2号ピットが61～62cm、3号ピットが48cm、4号ピットが30cmを測る。2号ピットはピット上位に偏平な河原石を横位に2枚設置し、その周囲は小さめの石を巡らしていた。そのうちの1個体は未固結凝灰岩であった。

掘り方 Hr-FA 層下位及び一部は黒色土上面まで掘り込んでいた。住居中央を一段深めに掘削しており、不定形の落ち込みがみられる。南西コーナーでは周溝状の溝があった。

竪位置 東辺中央やや南寄り

竪方位 N-102°-E

竪規模 全長は、2.50m（屋外長1.50m、屋内長1.00m）、袖部幅1.65m、燃焼部幅0.20mを測る。

竪形状その他 焚き口から煙道途中まで天井石が良く残っていた。5石残る天井石の中には土塊の可能性のあるものと火山岩質凝灰岩のものが使用されていた。155は1個体を打ち欠いて左右の壁に1個ずつ天井石の3ヶ所に使用している。壁には155の他に河原石が隙間なく据えられていた。住居内部では一部で二重に据えられている箇所も認められる。

炉の状況 1号炉は98×104cmで石が流入した状態で出土している。北側に隣接して羽口が認められた。2号炉は93×105cmで埋没土中から鍛造薄片（スチール）が出土した。南に接して床面密着で炭化材が認められ、その端部は2号炉の壁に貼り付くように伸びていた。炭化材の北側には偏平な河原石がみられる。3号炉は88×72cmで石列と重複がみられるが北側へ伸びる部分は掘り方で確認した部分である。埋没土中からごく僅



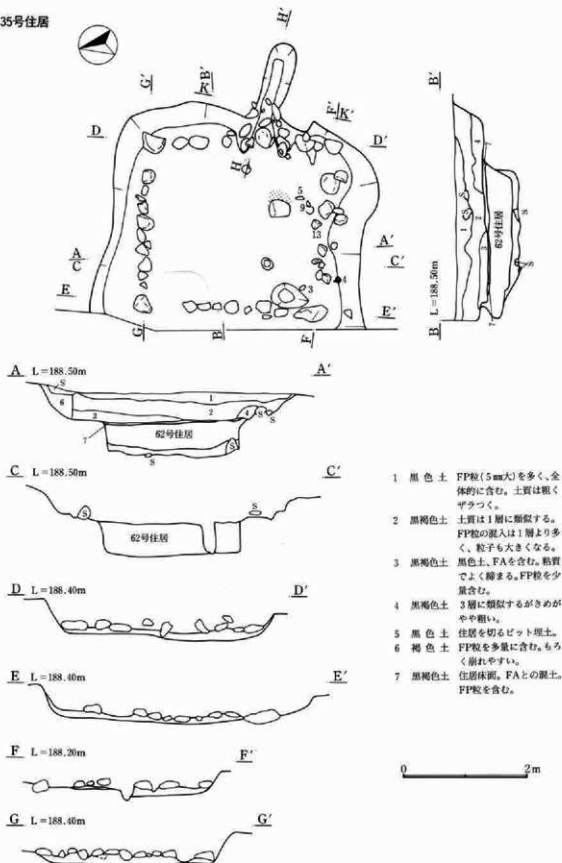
かに鍛造薄片様のものが出土した。

**配石の状況** 図化した石類の他に被熱した石などがみられた。北西部における円形張り出し部ではS70、71の表平坦面が著しく赤く焼けていた。S72、74も被熱しており、ともに黒色ガラス質の付着がみられた。S72には鉄分の錆も付着していた。その他の部分では、S80、102、121も黒色ガラス質がみられた。S80は鉄分の錆、S102は黒く焦げた部分と粘土の付着があり、S121は赤色に変化した部分がみられた。S123は被熱により赤く変色しかつ黒くなっている部分があり、大きめの鉄滓が付着していた。S141も赤色の変化部分かつ黒く焦げている部分がみられ、鉄分の錆がわずかに付着していた。S52、117も赤色変化部分と鉄分の錆がみられた。被熱して赤色に変化した部分がみられるものは他にS114、120がある。S26、42、148は黒く焦げた部分がみられる。S15、77、110、113、132には粘土付着が認められる。S79には鉄分の錆があり、炭化材がみられた。S137も被熱の可能性がある。

**遺物** 埋没土出土も含めておびただしい数の遺物量である。48、52、53、57、137などが床面及び若干の間隔をおいての出土である。須恵器杯は底部回転糸切り未調整である。他に須恵器碗も同様のものが大勢である。底部に「宅」の墨書のあるものや体部に「王代」の焼成後における刻書のみられる碗がある。埋没土中から円面碗の出土をみた。碗面はよく刷り磨かれている。内面には朱が付着しており、二次利用の可能性が考えられる。他に須恵器皿、羽釜や土師器甕があり、甕は「コ」字口縁をなすものがある。羽釜は口縁部が内傾し鉤が上向きになるものがみられる。鉄製品は鉄、釘、刀子(?)、筒り金具の可能性のあるものなどがある。他に羽口、砥石、未固結凝灰岩の竈構築材がみられる。竈構築材は最大54.6cmを測り、切り出し時の形状を窺える。面が荒れる資料が多いが基本的にはみな面取りしていると思われる。すべて被熱して赤みを呈しており、部分的に黒色に吸炭している箇所がある。また、竈から焼骨片が出土し、竈掘り方からも骨片が認められた。床面で竈西側からはウマの下顎臼歯が4片出土した。掘り方からは焼骨片がみられた。出土土器の中には、投棄されたと思われる一群がある。内面に暗文を有する土師器杯や底部回転ヘラ削りや削り出し高台をもつ須恵器碗、高杯、甕などがあり、その様相は8世紀中葉頃のものである。その他に鉄滓がパンケース1箱(約27kg)出土しているが、床面出土のものは少ない。

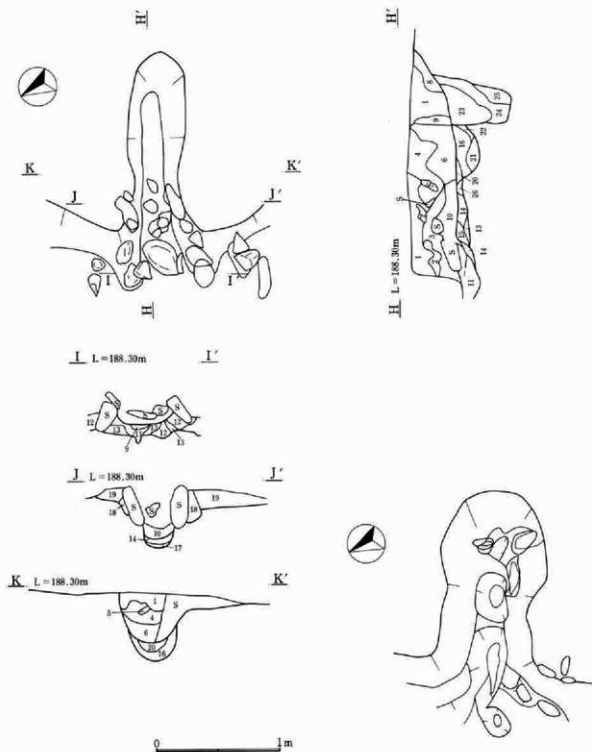
**所見** 出土した土器の特徴から本住居は9世紀後半～末葉には構築されていたと考えられる。投棄されたと思われる一群の土器は近隣に8世紀中葉頃の住居があり、重複して住居を作る際のものの可能性がある。本住居には石列が巡り、その機能は何か注目される。

35号住居



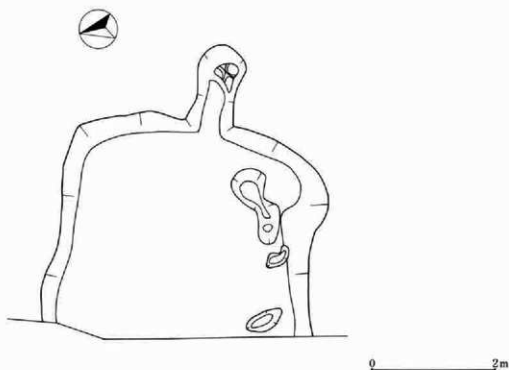
- 1 黒色土 FP粒(5mm大)を多く、全体的に含む。土質は粗くザラつく。
- 2 黒褐色土 土質は1層に類似する。FP粒の混入は1層より多く、粒子も大きくなる。
- 3 黒褐色土 黒色土、FAを含む。粘質でよく締まる。FP粒を少量含む。
- 4 黒褐色土 3層に類似するがきめがやや粗い。
- 5 黒色土 住居を切るピット埋土。
- 6 褐色土 FP粒を多量に含む。もちろく崩れやすい。
- 7 黒褐色土 住居床面、FAとの混土。FP粒を含む。

第192図 35号住居

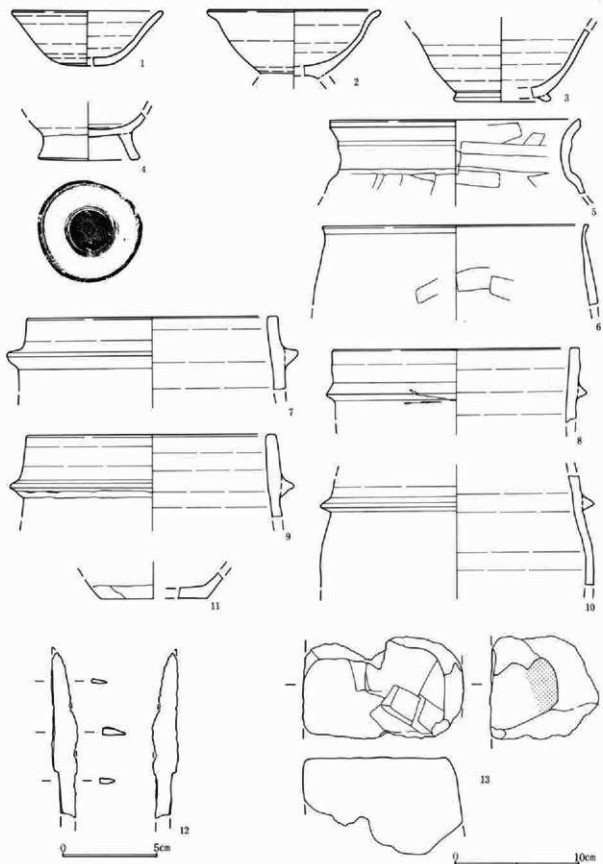


第193图 35号住居断

層	
1	黒褐色土 全体的に土質は細かい。FP粒は根柢大のものが数個みられるが粒は小さい。
2	明褐色火山灰 FAを主体とする。土質は細かい。
3	暗褐色土 全体的に土質は細かく、よく締まる。僅かに炭化物が散見する。
4	褐色土 土質は細かく若干FP細粒を含む。締まりはよい。
5	暗褐色土 僅かに炭化物を含む。
6	暗褐色土 小石を含む。土質は粗く、もろい。
7	暗褐色土 FP細粒主体。
8	暗褐色土 FP粒を多量に含む。締まりは弱く、もろい。
9	暗褐色土 11層に類似するが焼土を混入する。黒色土ブロックを含まない。
10	暗褐色土 暗褐色土に礫を多量に含む。
11	褐色土 ロームを混入し、黒色土ブロックを含む。
12	褐色土 11層に類似するが黒色土ブロックは含まない。
13	淡黄褐色土 ローム主体で12層土を少量混入する。
14	暗褐色土 FP粒を多量に含む。締まりは弱くもろい。
15	暗黄褐色土 13層に類似するが色調が暗い。
16	暗褐色土 土質は粗く $\phi$ 5mmまでのFP粒がざっしり詰まる。
17	暗褐色土 黒色土からローム変質安山岩の層移層。
18	明褐色土 FA主体で $\phi$ 1~5mmほどのFP粒を含む。
19	黒褐色土 土質のやや粗い土で $\phi$ 5mmほどの大きさを中心にFP粒を多量に含む。
20	暗褐色土 16層に類似するが $\phi$ 1mmほどのFP粒を含むのみ。
21	暗黄褐色土 FA主体で $\phi$ 1~5mmほどのFP粒を多量に含む。
22	明褐色土 土質の粗い土主体で $\phi$ 2~3mmのFP粒がざっしり詰まる。
23	黒褐色土 土質がやや粗く $\phi$ 5mmほどのFP粒を多量に含む。炭化物を僅かに含む。
24	褐色土 $\phi$ 2~3mm、 $\phi$ 5mmほどのFP粒を多量に含む。土質はやや粗い。炭化物を僅かに含む。
25	よい褐色火山灰 FA。
26	黄褐色軽石 FP二次堆積層。



第194図 35号住居掘り方



第195図 35号住居出土遺物

### 35号住居

**位置** EN-55・56、EO-55・56、EP-55・56

**平面形状** 隅丸方形と推定される。

**特徴** 壁際に石列が巡る住居である。

**残存深度** 壁の高さは37～52cmを測る。

**重複住居** 62号住居と重複関係にあり、62号住居を掘り込んで構築している。

**規模** 東辺は4.20m、南辺は残存部分で3.00m、北辺は残存部分で3.45m、方形掘り方の東辺は2.25m、西辺は2.30m、南辺は1.50m、北辺は2.10mを測る。

**主軸方位** N-108°-E

**埋没土** 褐色系色調を呈する土壌と土質は他の住居に類似する。色調はやや暗い。上位は黒褐色系色調を呈する土壌である。

**壁の状況** 床面から、東壁から南壁は119°-120°、北壁は152°の角度で立ち上がる。西壁は調査区壁と大差ない位置にあると思われる。

**床面** 面積は10.806㎡を測る。床を形成する土はHr-FAを含有する黒褐色土である。石列は北辺で北壁から21～55cm離れて2.84m伸びる。南辺は残存状態は悪いが壁から6～25cmほど離れて2.91m伸び、西辺は西壁は検出できなかったが調査区壁から10～29cm離れて3.03m続く。東辺は竈左側で0.72m伸び、右側で1.41m続き、計2.13mである。東壁から0～27cm離れている。これらの石は床面に据えられるような状態のものもあるが、多くは床面から若干の間隔をおき、黒褐色土を間層として検出されている。

**周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA層上面まで掘り込んでいる。南側に大小の浅い掘り込みがある。

**竈位置** 東辺中央

**竈方位** N-114°-E

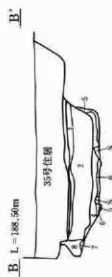
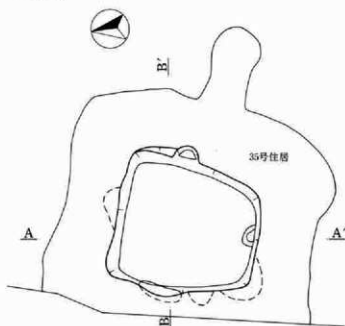
**竈規模** 全長は、1.80m（屋外長1.00m、屋内長0.80m）、袖部幅0.70m、燃焼部幅0.15mを測る。

**竈形状その他** 左右の壁に偏平な河原石を3～4石据えている。なお、外端部は住居廃棄後に掘り込まれている可能性がある。

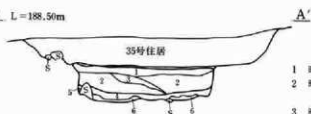
**遺物** 3の須恵器碗が床面密着である。他には土師器甕や須恵器羽釜、刀子、未固結凝灰岩の竈構築材が出土した。鉄滓が少量(570g)出土している。

**所見** 出土した土器の特徴から、本住居は10世紀中葉には構築されていたと考えられる。34号住居と同様石列の存在に注目したい。

## 62号住居



A. L = 188.50m

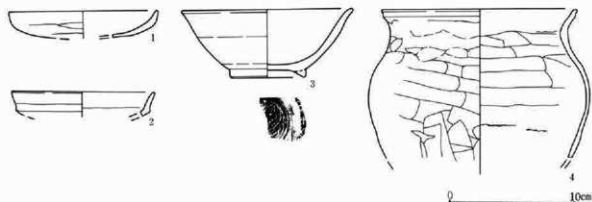


- 1 暗褐色土 FP粒を多量に含む。細まりはよい。1層と類似するがPPの粒がやや細かく、量的にも多い。
- 2 暗褐色土 2~5cm大の大粒のFP粒を多量に含む。小石も少量みられる。
- 3 暗褐色土 土質は細かく、FAをブロック状に少量含む。ロームを少量混入する。小石、 $\phi$ 2~3mmのFP粒を含む。黒色土ブロックを僅かに含む。
- 4 黒褐色土 FA下黒色土。
- 5 黒色土 ローム層。
- 6 暗黄褐色土 FA下黒色土にFAブロックを含む。
- 7 黒色土  $\phi$ 2~30mmほどのFP粒を多量に含む。土質はやや粗くFAブロックを含む。黒色土ブロック、炭化物を僅かに含む。
- 8 褐色土



0 2m

第196図 62号住居



第197図 62号住居出土遺物

### 62号住居

**位置** EO-55・56 **平面形状** 南辺が短小な隅丸方形

**残存深度** 軽石層上面から床面まで76~90cm、壁の高さは、床面まで34~48cmを測る。

**重複住居** 35号住居と重複関係にあり、35号住居に掘り込まれている。

**規模** 東辺は7.90m、西辺は7.70m、南辺は6.90m、北辺は7.10mを測る。

**主軸方位** N-116°-E

**埋没土** 褐色系色調を呈す土壌と土質は同様であるが色調が暗い。

**壁の状況** 床面から、東壁は120°、南壁は90°、北壁は100°の角度で立ち上がる。西壁において壁体の挟り込みがみられた。Hr-FAと同層下黒色土との境を中心に黒色土及びHr-FAが奥行き約7cm、幅約23cmにわたって消失し、挟り込まれているものである。

**床面** 面積は3.591㎡を測る。Hr-FA、ローム、黒色土、Hr-FPを含む黒褐色土によって床面を形成している。

**周溝** 検出されなかった。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA下黒色土を掘り抜いている。地山の礫が現れるが他の部分は平坦である。

**竈位置** 明確ではないが東壁北側に可能性がある。

**竈方位** N-108°-E

**竈規模** 推定で幅39cm、長さ23cmを測る。

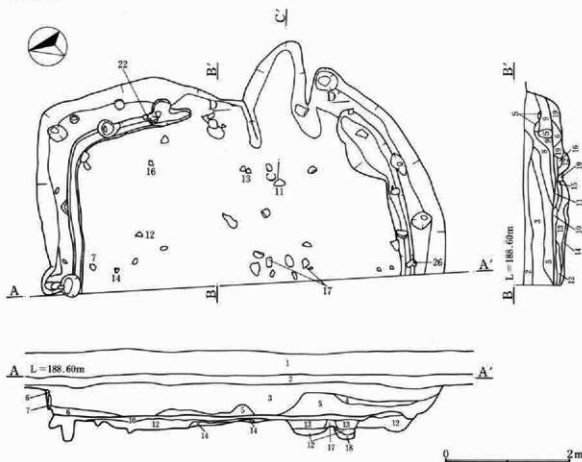
**竈形状その他** 推定される掘り込みは半円形を呈している。

**遺物** 埋没土中から土師器杯、甕、須恵器椀が出土している。このうち土師器杯はともに別の時期であり、須恵器椀と土師器甕が伴うと思われる。

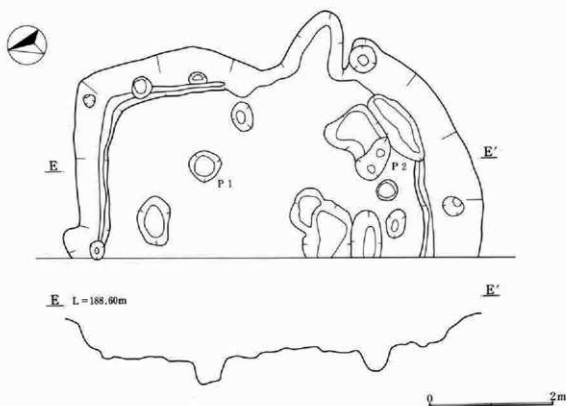
**所見** 出土土器の様相から、本住居は9世紀後半には構築されていたと考えられる。なお、本住居は35号住居の掘り方調査において確認したものである。焼土も明確ではなく、竈位置も定かではない。当初35号住居の一部であり、35号住居が段を持つ住居かあるいは矩形の掘り方かと考えていた。しかし西壁の挟り込みは41号住居との類似例と考えられ、壁として機能していたことが窺える。そして35号住居に貼り床状の土層が認められたこと、本住居出土の土器が35号住居の土器と時期差をもつことから別住居と判断した。



## 36号住居



- |    |          |   |
|----|----------|---|
| 1  | 耕作土      |   |
| 2  | 黒色土      | サラサラした顆粒状の軽石を含む。締まりは弱い。                                     |
| 3  | 暗褐色土     | FP粒を多量に含む。締まりは固く崩れやすい。FAを含む。                                |
| 4  | 暗褐色土     | 3層よりFP粒(3mm大)を多量に含む。また炭化物が少量みられる。                           |
| 5  | 褐色土      | やや粒子の細かい土で弱粘性を有する。床面上付近には炭化物がみられる。                          |
| 6  | 暗褐色土     | FP粒を多量に含む。  |
| 7  | 黄褐色軽石    | FPの二次堆積層。   |
| 8  | 褐色土      | 3層に類似する。  |
| 9  | 褐色土      | FAが多量に含まれるため、土質が細かくよく締まる。                                   |
| 10 | 明褐色土     | FAを混入する。FAをブロック状にも含む。焼土粒を少量含む。φ5~10mmのFP粒を含む。主体土は細かく締まりがある。 |
| 11 | 明褐色土     | 10層に類似するが焼土を多量に含む。  |
| 12 | 灰褐色土     | FA(砂質)主体としたφ5mmほどのFP粒を多量に含む。バサバサした感じ。灰白色FAをブロック状に含む。        |
| 13 | 明褐色土     | φ5mmほどのFP粒を多量に含む。12層に類似するが灰白色FAを含まず、色調が暗い。                  |
| 14 | 灰褐色土     | FAに黒色土をブロック状に含む。  |
| 15 | 明褐色土     | 11層に類似するが焼土がやや少なく、色調が暗い。                                    |
| 16 | 明褐色土     | 13層に類似するがFP粒が少量である。   |
| 17 | 明褐色土     | 13層に類似するが焼土粒、黒色土ブロックを含む。                                    |
| 18 | 明褐色土     | FAのS-1ユニットにFAのS-3ユニット、S-4ユニットが混入する。φ2~5mmのFP粒を含む。           |
| 19 | にぶい橙色火山灰 | FA主体層。  |



第199図 36号住居掘り方

### 36号住居

**位置** EP-55・56、EQ-55・56

**平面形状** 隅丸方形と推定される。南東コーナーは明確に角をなさない。

**残存深度** 壁の高さは床面まで48～49cmで、周溝底面まで55～68cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は5.80m、南辺は残存部分で2.70m、北辺は残存部分で3.10mを測る。

**主軸方位** N-102°-E

**埋没土** 褐色系の色調を呈す土壌が主体である。やや色調が沈む。北壁際ではHr-FP二次堆積層がみられる。床面を被う土壌はHr-FAを含有している。

**壁の状況** 床面から、東壁は97°、南壁は125°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は138°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

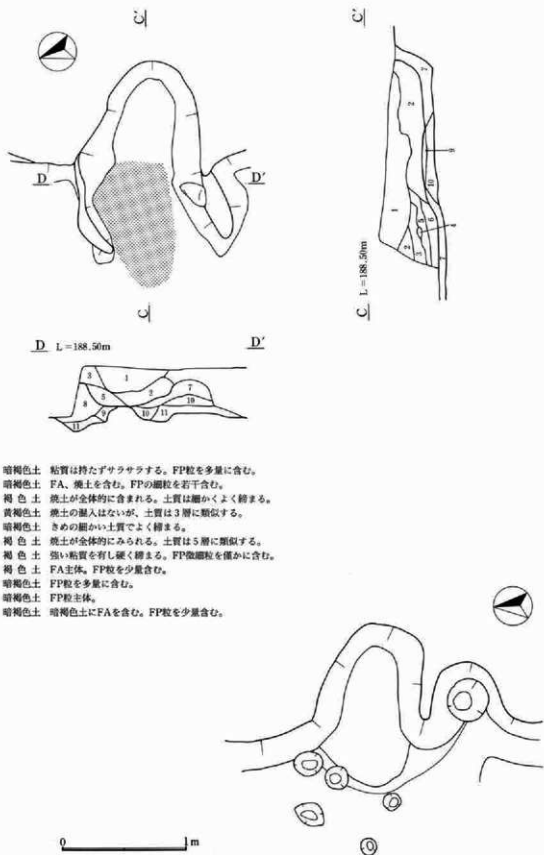
**床面** 面積は15.309㎡を測る。Hr-FAとその下位黒色土を主体とする層及び両者の混合層を主に床面を構築している。周溝及び周溝と壁の間に小ピットが散在している。

**周溝** 電を除く東辺、北辺、南辺に認められる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では確認できなかった。

**掘り方** 大小の落ち込みがみられた。ピット状の掘り込みも認められ、1、3号ピットが36～38cm、2号ピットが43cmの深さを測る。



第200図 36号住居竈

竈位置 東辺やや南寄り

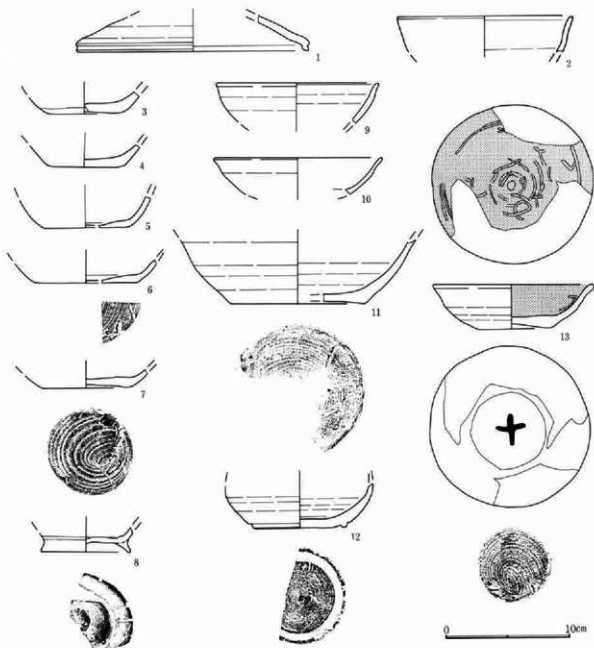
竈方位 N-113°-E

竈規模 全長は、1.60m（屋外長0.80m、屋内長0.80m）、袖幅1.00m、燃烧部幅0.45mを測る。

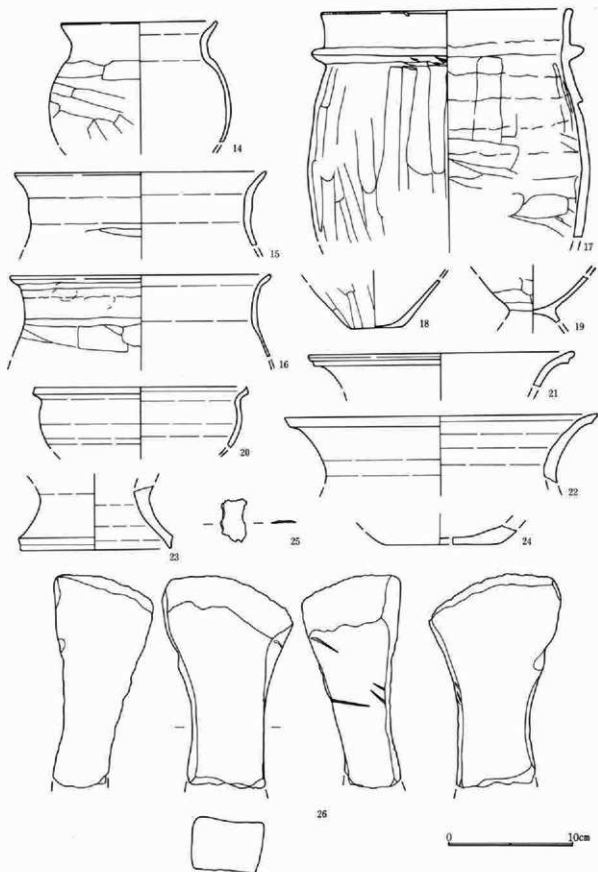
竈形状その他 両袖が僅かに残る。右袖には河原石が認められるが本来の位置ではないと思われる。

遺物 13の須恵器杯は床面から3.0cmの間隔をおき、11の須恵器碗は7.0cmの間隔で出土している。両者は底部回転糸切り未調整である。13の底面には「十」の墨書が認められる。16は床から16.5cmおいて出土し、口縁部は「コ」字状を呈している。南壁際では粗粒安山岩の砥石が流入している。他に土師器杯、甕、須恵器蓋、甕、羽釜等が出土している。土師器杯は住居構築以前の時期の土器が混入してきている。

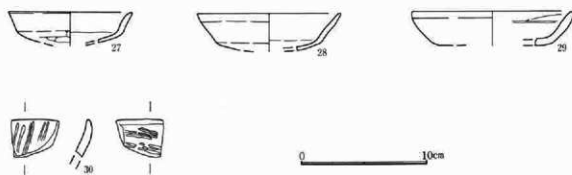
所見 出土土器の様相から、本住居には9世紀後半の年代が与えられる。



第201図 36号住居出土遺物（1）



第202図 36号住居出土遺物(2)



第203図 36号住居出土遺物(3)

### 37号住居

**位置** ER-55、ES-55 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは40~45.5cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は4.65m、南辺は残存部分で1.20m、北辺は残存部分で1.10mを測る。

**主軸方位** N-104°-E

**埋没土** 褐色系土壌が主体だがやや色調が沈む。壁際では Hr-FA を含有する褐色土がみられる。

**壁の状況** 床面から、東壁は129°、南壁、北壁は139~140°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は140°を測る。壁体を構築する材及び痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は3.537m<sup>2</sup>を測る。Hr-FA 及びその下位黒色土、両者の混合層を主体として床面を形成している。

**周溝** 検出されなかった。掘り方でもみられない。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA 層中及び一部その下層の黒色土まで掘削している。中央が大きく掘り込まれ、壁際にかくか凹凸がみられる。

**竈位置** 東辺やや南寄り

**竈方位** N-105°-E

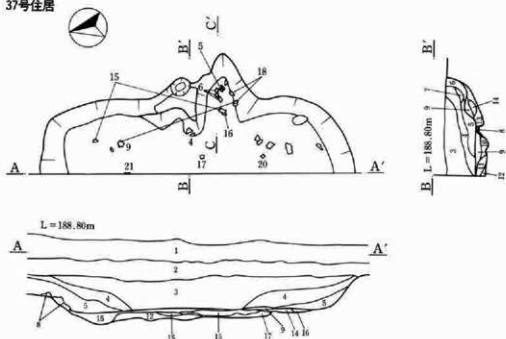
**竈規模** 全長は、推定1.20m(屋外長0.90m、屋内長0.30m)、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.40mを測る。

**竈形状その他** 左袖は痕跡を留めるが右袖は明確ではない。河原石の使用は認められなかった。

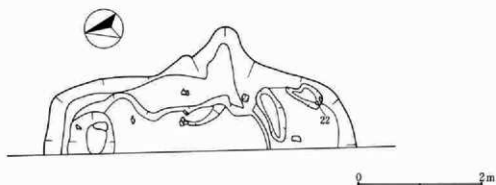
**遺物** 竈からは火床面から2か17.5cmの間隔をおき、6は20.5cm、12は18.0~20.5cm、15は26.0~36.5cm、16は23.5cm、18は4.0~56.0cmの間隔をおいて出土した。20の砥石が床面から出土した。須恵器杯類の底部は回転糸切り無調整である。羽釜は胴部のヘラ削りが髑まで達している。他に須恵器蓋、灰軸陶器椀?、鉄器が出土している。

**所見** 出土土器から、本住居は9世紀末には構築されていたと考えられる。

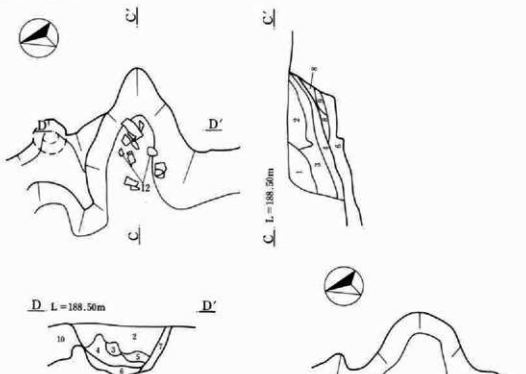
37号住居



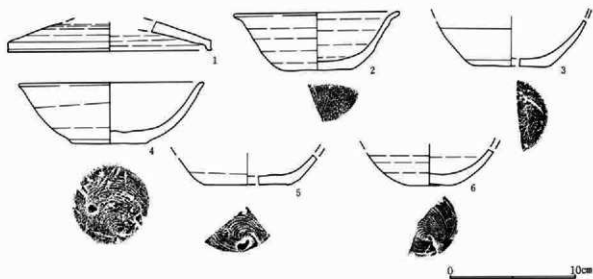
- 1 耕作土
- 2 黒色土 全体的に土質が粗くサラサラする。FP粒を少量含む。
- 3 黒褐色土 全体的にFP粒を多量に含む。締まりはよい。
- 4 暗褐色土 3層に比べFP粒の混入はやや少なく焼土、炭化物が若干含まれる。
- 5 褐色土 FAの混入あり。土質はやや細かい。
- 6 暗褐色土 FP粒(3~5mm大)を含む。締まりは弱く、崩れやすい。
- 7 黄褐色軽石 FPの二次堆積層。
- 8 によい棕色土 FA主体で暗褐色土を少量含む。
- 9 暗褐色土 FAを多量に混入し、ブロック状にも含む。φ5mmほどのFP粒を少量含む。締まりがある。
- 10 暗褐色土 9層に類似するが焼土を含む。
- 11 灰褐色土 FAの各ユニットが混じり合う。FAのS-1ユニットが入っている。
- 12 黒色土 FAと黒色土の混合層。
- 13 暗褐色土 9層に類似するがFP粒をほとんど含まず色調も明るい。
- 14 灰褐色火山灰 砂質で、FAの各ユニットが混じり合う。
- 15 暗褐色土 φ5mmまでのFP粒を多量に含む。FAを多量に含む質の粗い土が主体。締まりはない。
- 16 灰褐色土 14層に焼土、炭化物を含む。
- 17 灰褐色土 14層に類似するがφ2~5mmほどのFP粒を多量に含む。



第204図 37号住居

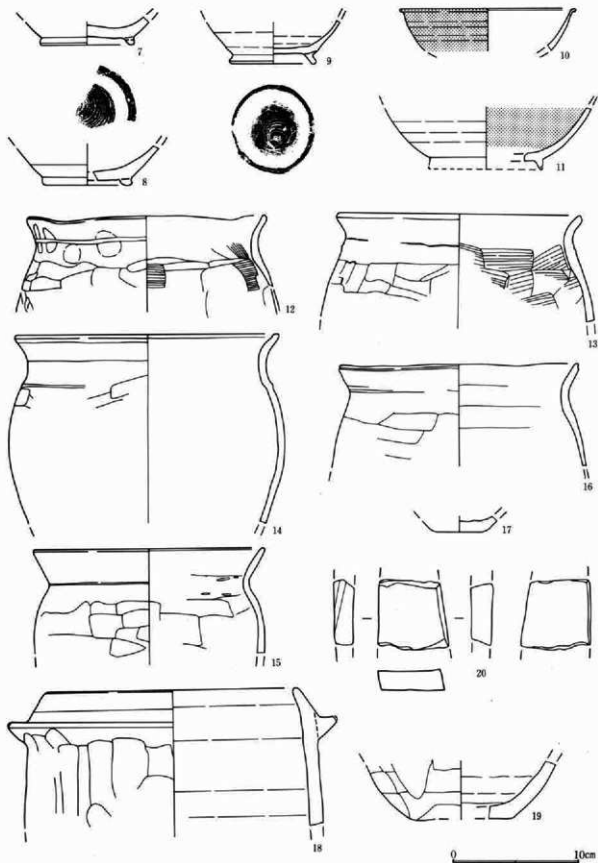


- 1 黒色土 やや砂質を呈し、FP粒、小石等を含む。
- 2 黒褐色土 土質は1層に類似する。
- 3 暗褐色土 FP細粒、小石が若干含まれる。土質は全体的に細かく、炭化物、焼土が少量散見する。
- 4 褐色土 灰、燻土が主体。バサつく。遺物の出土をみる。
- 5 暗褐色土 FP微細粒を若干含む。土質は細かくやや粘質。
- 6 淡褐色土 FA、暗褐色土、FP粒を含む。砂質である。
- 7 暗褐色土 暗褐色土、FA、FP粒を含む。よく締まる。
- 8 黒褐色土 FAの小ブロックを含む。FP粒を少量含む。
- 9 黄褐色軽石 FP粒主体。
- 10 黄褐色軽石 FPの一次堆積層。

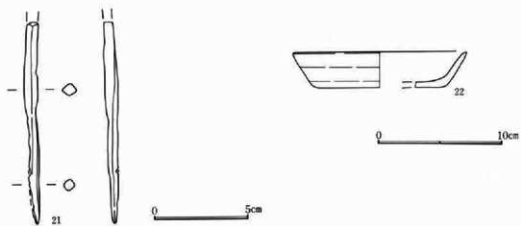


第205図 37号住居竈及び出土遺物(1)



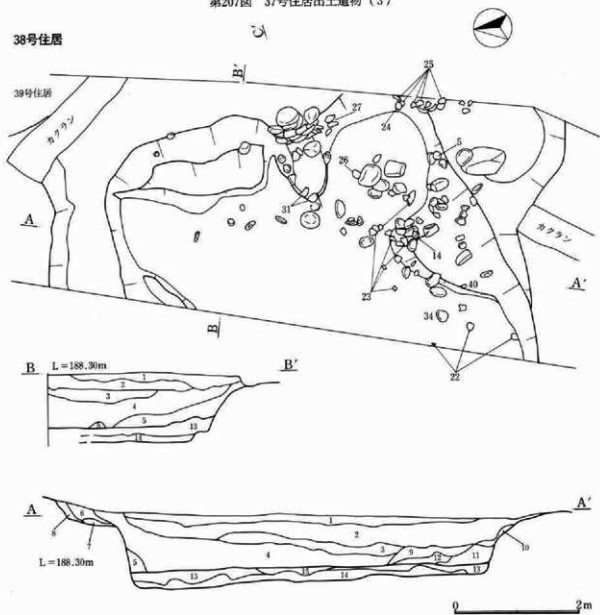


第206图 37号住居出土遗物(2)



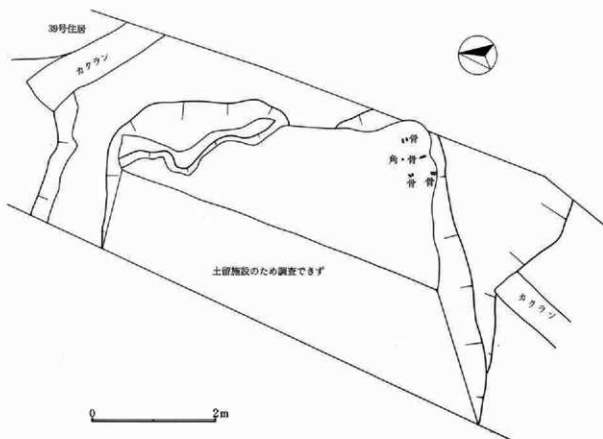
第207図 37号住居出土遺物(3)

38号住居

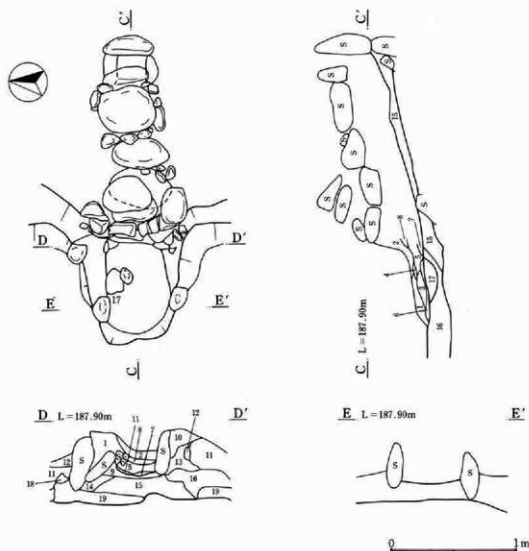


第208図 38号住居

- 1 暗褐色土  $\phi$  5 mm大ほどのFP粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 1層に類似するが色調は明るい。
- 3 黒褐色土  $\phi$  1～5 cm大のFP粒を多量に含む。炭化物を含む。
- 4 褐色土 土質は砂質味があり、 $\phi$  5～10mm大のFP粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土  $\phi$  2～5 mm大のFP粒を含む。やや粘性を帯びる。
- 6 褐色土 7層土に $\phi$  5 mm以下のFP粒が多量に混入する。
- 7 褐色土 やや粘性を帯びる。 $\phi$  5 mm大以下のFP粒を少量含む。土質は細かい。
- 8 黄褐色軽石 FP。
- 9 暗褐色土  $\phi$  2～3 mm、5 mm、1 cmを中心としたFP粒を含む。灰白色ブロックを含む。
- 10 褐色土 粘性を帯びる。 $\phi$  1 cmほどのFP粒を含み、ロームを混入する。
- 11 明褐色土 土質は細かく、粘性を帯びる。灰白色・浅黄褐色FAブロックを多量に含む。13層上面(床)との間に薄くカーボン層が広がっている。
- 12 褐色土 11層に類似するが、色調がやや沈む。
- 13 暗褐色土 FAのS-1ユニット、黒色土をブロック状に含む。ロームを少量混入する。
- 14 暗褐色土 13層に類似するがFAのS-1ユニット、黒色土をほとんど含まない。ロームの混入が多い。
- 15 暗褐色土 13層に類似するがFAのS-1ユニット、黒色土ブロックを密に多量に含む。

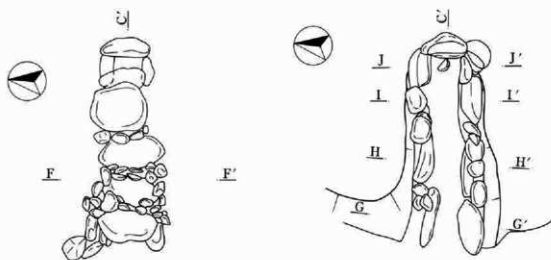


第209図 38号住居掘り方

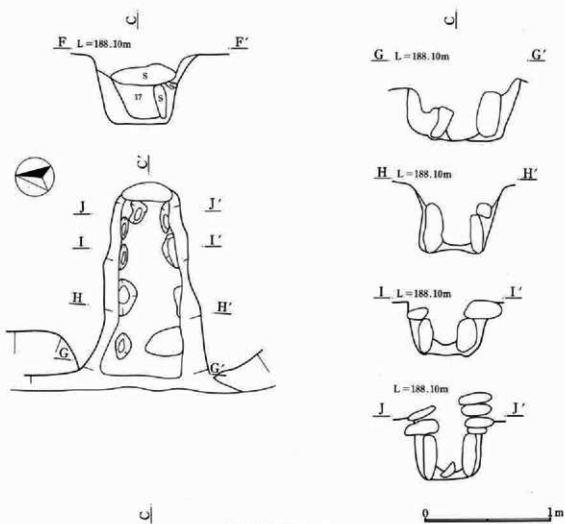


- 1 赤褐色土 2層土に焼土が混入する。
- 2 褐色土 粘性が強く締まりがよい。FP粒をごく僅かに含む。
- 3 白灰色土 粘性が強く土質はごく細かい。FP粒を含まない。
- 4 白灰色土 3層土に焼土、カーボンを含む。
- 5 褐色土 2層土に類似するがφ2~3mm大のFP粒を含む。焼土、カーボンを含む。
- 6 橙褐色土 焼土層。1層より色調が明るい。
- 7 黒色土 カーボン層。
- 8 褐色土 2層土に類似するがφ5mm大ほどのFP粒を2層より含む。
- 9 褐色土 1層土に類似するが焼土が少なくブロック状にも入る。
- 10 暗褐色土 粘質。黒色土ブロックを含む。
- 11 褐色土 粘質。焼土を少量含む。
- 12 灰褐色土 粘質。
- 13 黄褐色土 粘質。硬く締まる。
- 14 淡褐色土 FA主体。
- 15 黒褐色土 黒色土、FAの小ブロックを含む。
- 16 灰褐色土 15層に比べFAの混入が多い。
- 17 橙土 焼土層。
- 18 黒色土 FA下黒色土にFAを少量含む。
- 19 黒色土 FA下黒色土にFAを均一に含む。

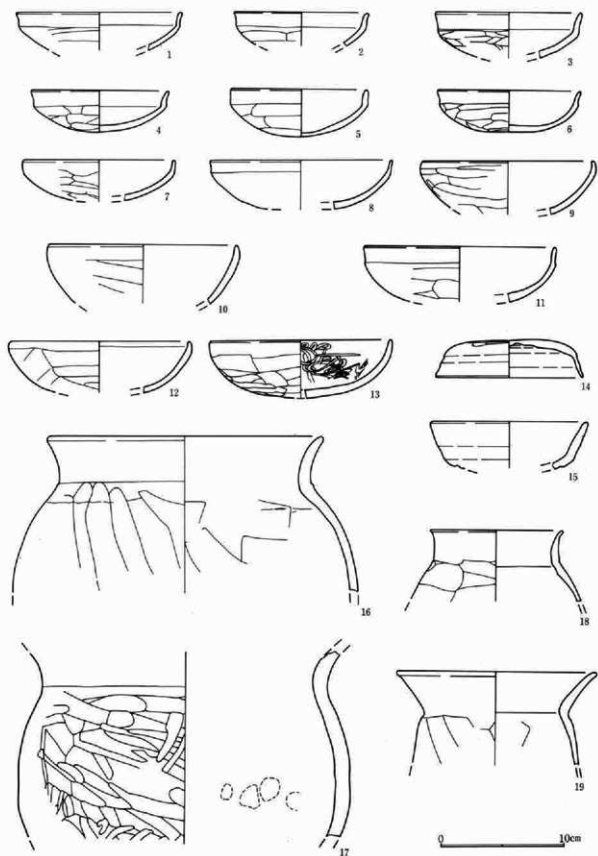
第210図 38号住居竈



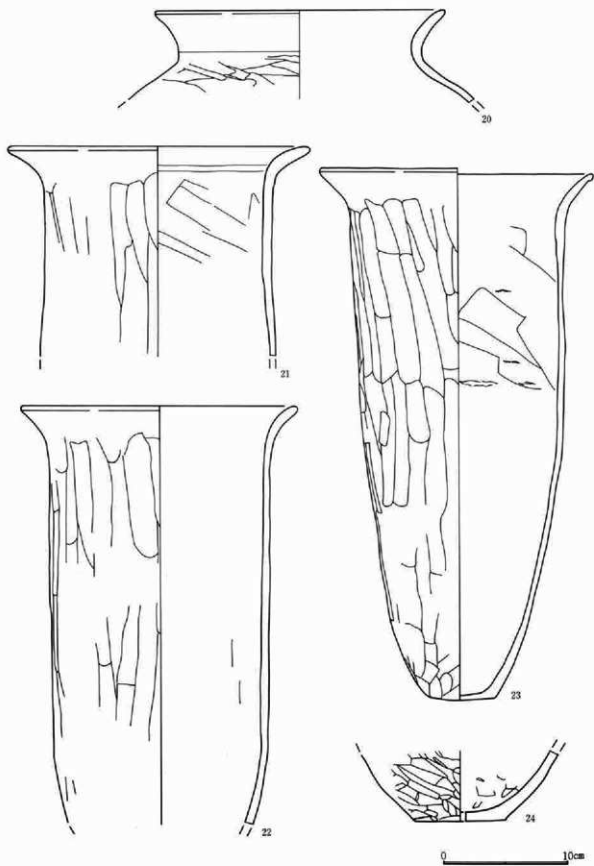
横道天井石平面



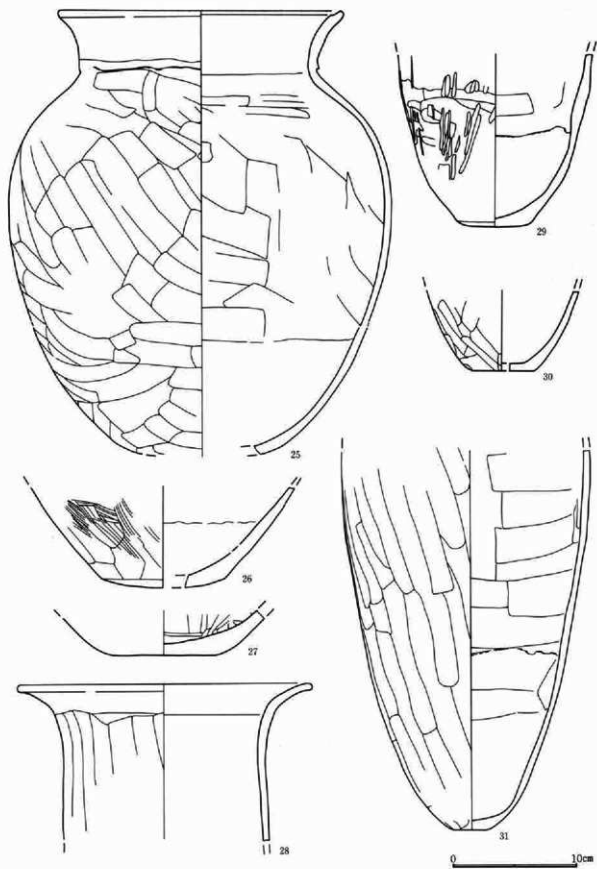
第211图 38号住居電



第212図 38号住居出土遺物(1)

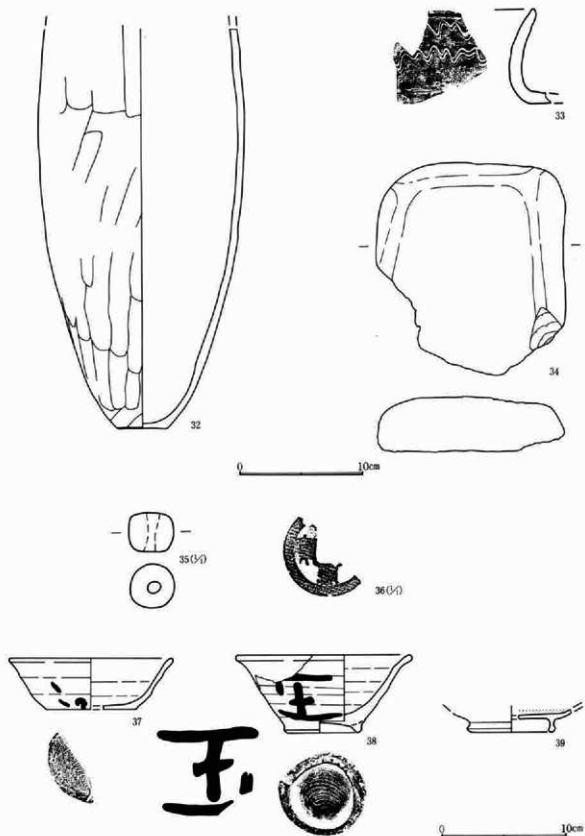


第213図 38号住居出土遺物(2)



第214図 38号住居出土遺物(3)





第215图 38号住居出土遺物(4)

### 38号住居

**位置** EU-53・54、EV-53・54 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**特徴** 壁に中段テラスを持つ住居である。但し、南側はHr-FP層が除去されているため、中段からの立ち上がりと外形が明確ではない。

**残存深度** 壁の高さは床面まで115～118.5cmで、確認面から中段まで50～54.5cm、中段から床面まで63～72.5cmを測る。

**重複住居** 本住居の北に位置する39号住居とは両住居間にある土坑状の掘り込みのために重複関係が不明確である。39号住居の項で述べる事から、重複していない可能性が考えられる。

**規模** 中段テラスの落ち込み部で東辺は5.30m、南辺は残存部分で4.50m、北辺は残存部分で2.75mを測る。中段テラスの幅は残存部分で7.0～15.5cm、住居上場外形線まで47.5～52.5cmを測る。この幅で住居外形線が巡っていたと思われる。

**主軸方位** N-82°-E

**埋没土** 土質は褐色系色調を呈する土壌と同様であるが色調がやや暗い。南壁の方から粘性を帯びた土壌が流入している。北壁から東壁直北側にかけて粘性を帯びた土壌の流入がみられた。

**壁の状況** 床面から、東壁は126°、南壁は107°、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は165°、北壁は118°を測る。中段テラスはHr-FA層上面を掘り残して形成している。

**床面** 面積は15.939㎡を測る。Hr-FAと同層下黒色土及び両者の混合土によって床面を構築している。

**周溝** 検出できなかった。掘り方でもみられない。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** Hr-FA下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土を掘削しており、一部礫層の礫が見えている。

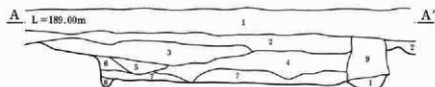
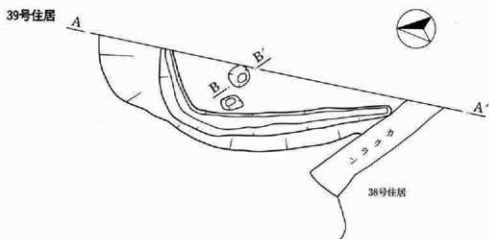
**竈位置** 東辺中央 **竈方位** N-82°-E

**竈規模** 全長は、推定2.20m、袖部幅推定1.15m、燃焼部幅推定0.40mを測る。

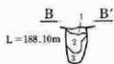
**竈形状その他** 両袖に河原石を立位に据えている。燃焼部には棒状の河原石による支脚がみられる。煙道両壁にも河原石を使用している。焚き口に天井石を横架したのち幅約44cmにわたり、3～4段に石を平積みし、中段テラスの高さに至る。天井石は偏平な河原石を5石使用し、拳大ほどの河原石と粘性土によって隙間詰めした後、粘性土で被覆している。天井石の上場レベルはHr-FA上面よりやや低くなっている。煙道外端部は立位に石を2段に据えている。5石目の天井石は平の面を外端部の石と向き合うように据えて煙出しの空間を作り出している。天井石は外側にいくほどレベルを高くしており、4～5石目の天井石部分では天井石が高くなるように壁に据えた左右の石の上に右側に3石、左側に2石を小口積みしていた。

**遺物** 23、25の破片の一部が床面から出土している。23は口縁部の屈曲が弱く長胴で膨らみがない。25は胴部が強く張っている。埋没土中からは土師器杯、甕、須恵器杯、蓋、土玉がある。甕類の特徴は前述したものと同様である。また、埋没土出土の住居より新しい時期の須恵器椀・杯には体部外面逆位に「玉」の墨書が認められるものや体部下位に墨痕のみ見えるものがある。また、竈から四肢骨片、焼骨片、焼けたシカカイノシシの肋骨片が出土した。埋没土中からシカの角片と骨片が、掘り方からは焼骨等の微細骨片が認められた。

**所見** 出土した土器の様相から、本住居には7世紀中葉～後半の時期が与えられる。



- 1 暗褐色土 耕作土。FP粒を含む。
- 2 黒褐色土 FP粒(φ5~10mm大)を含む。
- 3 褐色土 φ2~10mm大のFP粒を多量に含む。土質は細かい。
- 4 褐色土 φ5mm大ほどのFP粒を多量に含む。土質は細かくやや粘性を帯びる。
- 5 褐色土 4層に類似するが土質は砂質である。
- 6 褐色土 φ2~3mm大のFP粒を僅かに含む。粘性が強いFAである。
- 7 褐色土 6層上にφ5mm大のFP粒を多量に含む。
- 8 褐色土 φ2~3mm大のFP粒がざっしり詰まる。
- 9 暗褐色土 φ2~3mm大のFP粒を含む。土質は細かいが砂質である。



(B-B')

- 1 灰褐色土 FAにφ5mm大ほどのFP粒を少量含む。
- 2 灰褐色土 1層上にFA下黒色土ブロックを含む。
- 3 黒色土 FA下黒色土に灰褐色FAをブロック状(φ1cm大ほど)に含む。

0 2m



0 10cm

第216図 39号住居及び出土遺物

39号住居

位置 EV-53、EW-53

平面形状 丸みの強い隅丸方形と推定される。北壁は住居廃棄後早い段階で崩落している可能性も考えられる。

残存深度 壁の高さは床面まで55~60cmで、周溝底面まで65~70cmを測る。

重複住居 位置的に38号住居の北辺と重複する可能性があるが両者の間に土坑状の掘り込みがあるため平面からの重複関係は不明確である。土層断面南端では Hr-FP 一次堆積層があることから、本住居の壁は土坑状の掘り込み中に位置した事が分かり、38号住居の北辺も本住居まで及んでいないと判断できる。重複しているとしても38号住居の北西コーナーが本住居にごく一部かかるぐらいであろう。出土土器の年代観からは本住居の方が時期的に新しいといえる。

規模 西辺は4.60m、北辺は残存部分で1.20mを測る。

主軸方位

埋没土 褐色系色調を呈する土壌が主体である。粘性のある Hr-FA を主体として Hr-FP 粒を含有する土層によって床面が被覆されている。周溝は Hr-FP 二次堆積層によって埋没している。

壁の状況 北壁は床面から90°の角度で立ち上がり、変換点からは155°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は確認できなかった。

床面 面積は2.556㎡を測る。Hr-FA層を床面としている。

周溝 検出部分の全体にみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

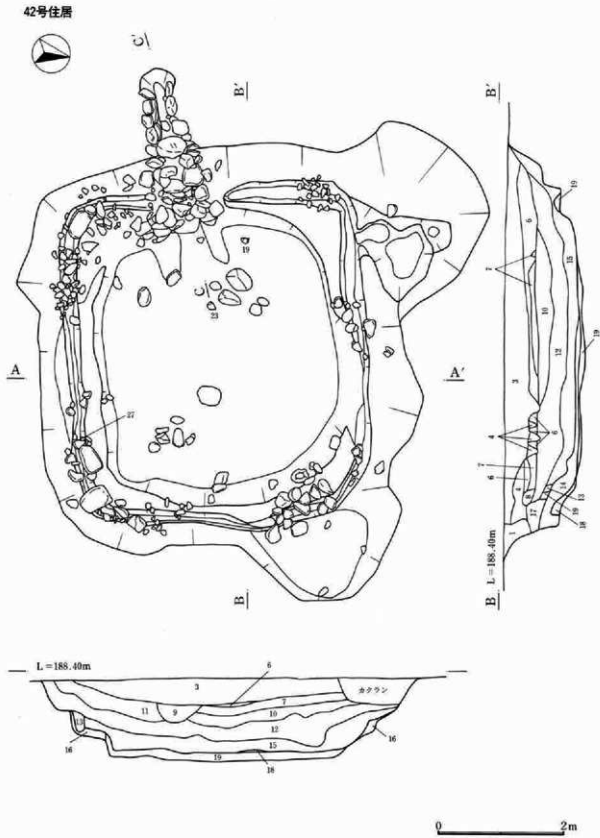
柱穴 1基のみ検出した。深さは、床面からは55cmを測る。

掘り方 貼り床等は見られない。Hr-FA層中位まで掘削している。

竈位置 検出されなかった。

遺物 埋没土中から土師器杯と須恵器杯が出土している。土師器杯は口縁部上位は横方向のヘラ削りで口唇部は横ナデしている。須恵器杯は還元焙焼成でロクロ整形、回転方向は不明である。

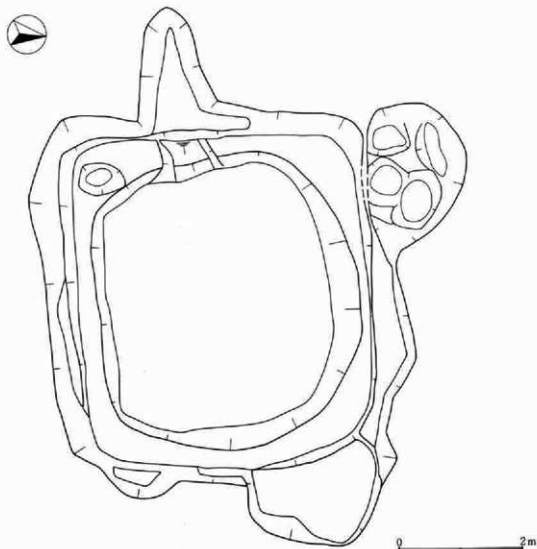
所見 土器は8世紀代と9世紀代の時期が考えられ、住居の年代は決定しがたい。



第217図 42号住居

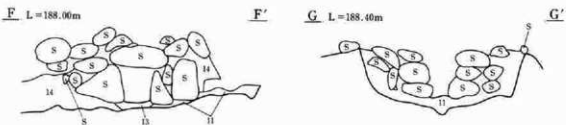
第3章 検出された遺構と遺物

- |    |        |                                       |
|----|--------|---------------------------------------|
| 1  | 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。FA粒を少量含む。攪乱。                |
| 2  | 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。                            |
| 3  | 黒色土    | FP粒を多量に含む。(11層)                       |
| 4  | 暗褐色土   | FAを少量含む。                              |
| 5  | 暗黄褐色土  | FP粒を多量に含む。(大粒が多い)                     |
| 6  | 暗灰色土   | FA主体。                                 |
| 7  | 暗黄褐色土  | FP粒主体。                                |
| 8  | 暗褐色土   | FP粒を少量含む。FAを多量に含む。                    |
| 9  | 暗褐色土   | FP粒を少量含む。4層に類似する。                     |
| 10 | 暗褐色土   | FP粒を少量含む。FAを多量に含む。                    |
| 11 | 暗褐色土   | 上半部は7層に類似する。FP粒、FAを少量含む。下半部は10層に類似する。 |
| 12 | 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。(10、11層より多い)                |
| 13 | 黄褐色土   | FP粒主体。壁の別れ。                           |
| 14 | 黒色土    | 黒色土(基本土層VI層)主体。                       |
| 15 | 黒色土    | FP粒を種かに含む。                            |
| 16 | 黒褐色土   | 19層に類似するがFAブロックの量が多い。                 |
| 17 | にぶい棕色土 | FAの二次堆積層。                             |
| 18 | 黒色土    | 15層にFP粒を多量に含む。                        |
| 19 | 黒褐色土   | 黒色土主体でFAを小ブロック状に含む。ロームをごく少量含む。        |

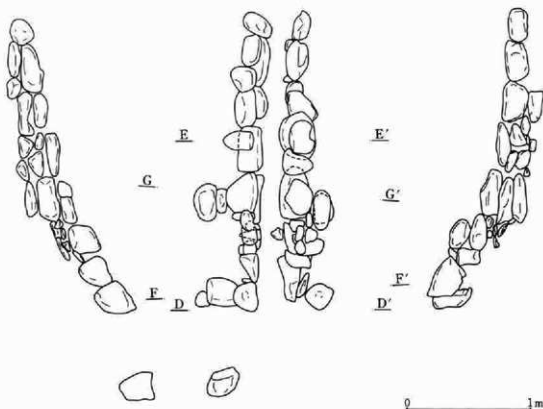


第218図 42号住居掘り方



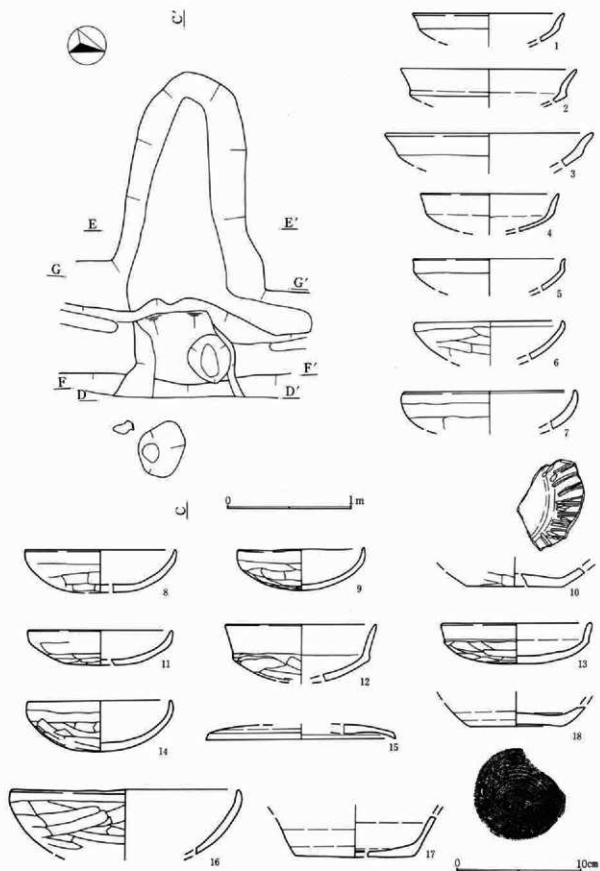


- 1 黄褐色土 粘性を帯びる。焼土粒を少量含む。φ5~10mm大のFP粒を少量含む。
- 2 黄褐色土 1層土に類似するが焼土を多量に含む。
- 3 黒色土 FA下黒色土にFAを粒状に含む。
- 4 黒色土 FA下黒色土。
- 5 黒褐色土 φ3~30mm大までのFP粒を多量に含む。
- 6 暗褐色土 やや粒の粗い土主体。φ2~20mm大までのFP粒を多量に含む。10~15cm大のFP粒も少量含む。
- 7 黄褐色土 φ2~10mm大を中心のFP粒がざっしり詰まる。3~5cm大のFP粒も少量含む。下位は8層土も混じる。
- 8 灰褐色土 土質は細かく、粘性を帯びる。FP粒はほとんど含まない。
- 9 明褐色土 FAを混入する。φ2~3mmのFP粒を少量含む。土質は細かい。
- 10 明褐色土 9層に類似するがFA混入量がより多い。FP粒含有量はより少ない。
- 11 暗褐色土 FP粒を僅かに含む。FAを少量含む。
- 12 黒褐色土 細かなFP粒、褐色土ブロックを少量含む。カーボン、焼土粒を僅かに含む。
- 13 黒褐色土 黒色土を主体とし、カーボン、焼土を多量に含む。
- 14 暗褐色土 褐色土を主体とし、FP粒とFA粒を少量含む。

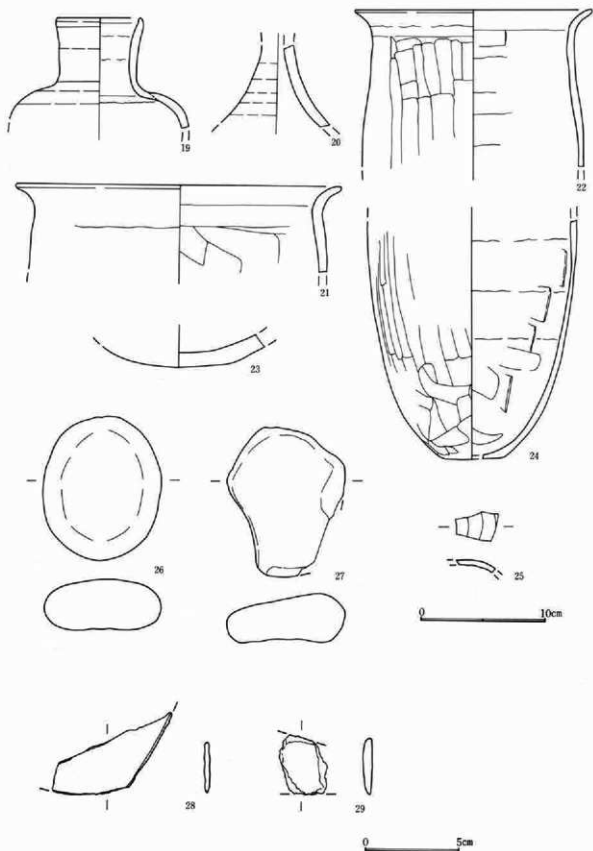


第220図 42号住居竈石組





第221図 42号住居電掘り方及び出土遺物(1)



第222図 42号住居出土遺物(2)

## 42号住居

位置 EO-60・61・62、EP-60・61・62、EQ-60・61 平面形状 隅丸方形

特徴 壁に中段テラスを有する住居である。石組の竈を付設している。

残存深度 壁の高さは床面まで最大値が122cmで大部分が95～109cmを測る。周溝底面までは最大値が106cmで大部分は65～80cmを測る。確認面から中段まで48～60cm、中段から床面まで54～68cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は5.50m、西辺は5.50m、南辺は6.00m、北辺は5.90m、中段の東辺は3.60m、西辺は3.60m、南辺は3.80m、北辺は3.95mを測る。

主軸方位 N-113°-W

埋没土 褐色系色調を呈する土壌が主体である。上位は黒色系色調を呈する土壌がみられる。

壁の状況 床面から、東壁は110°、西壁は95°、南壁は92°、北壁は113°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は170°、西壁は130°、南壁は110°、北壁は119°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡はみられなかった。

床面 面積は12.795m<sup>2</sup>を測り、中段テラス外側ラインで23.046m<sup>2</sup>を測る。Hr-FA 下黒色土を主体とする土によって床面を形成している。中段テラスは基本形を地山削り出しによっているが上面には床面と同じ土を貼っていることが看取される。

周溝 中段テラスにおいて北辺の一部と竈部分を除いてみられる。中段テラスに貼られた黒色土を掘り込んで作られるが地山までは及んでいない。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

掘り方 床面は平坦で、中段テラスは地山の掘り残しである。Hr-FA 下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土、ローム層にまで達しており、礫層上面がみられる。中段テラスは黒色土層下位まで削り込んでいる。

竈位置 西辺中央やや南寄り

竈方位 N-111°-W

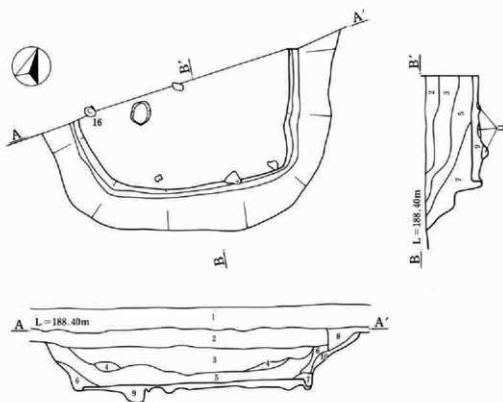
竈規模 全長は、2.65m（屋外長1.40m、屋内長1.25m）、袖部幅1.25m、燃焼部幅0.20mを測る。

竈形状その他 左袖に円柱状の石を用いている。煙道左右の壁には河原石を据えている。床から中段までは平の最大面を竈内側に向けて据え、中段から軽石上面までは3段に平積みしている。さらに外側に1石分を3段に平積みし、次の石からは再び平の最大面を内側に向けて据え、その上に1段平積みしている。天井石は中段から軽石上面にかけては3段平積みしていた。

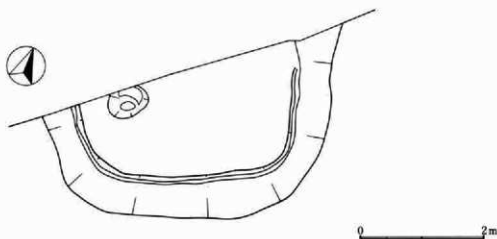
遺物 埋没土中に多量の河原石が流入していた。22の土師器壺が竈掘り方から出土している。口縁部が弱く屈曲し胴部の膨らみがないものである。24は同一個体の可能性もある壺胴部下半である。床面近くの出土では須恵器長頸壺がみられる。埋没土中からは土師器杯、壺、須恵器杯、蓋、高杯、鉄器、使用痕跡のある石が認められる。土師器杯の中には模倣杯とその系統をひくものが認められる。口縁部上位までへら削りが至るものと下位でへら削りが留まって無調整帯がみられるものがある。須恵器杯の底部は回転糸切り後周辺部を回転へら削りしている。

所見 出土土器の特徴から、本住居には7世紀後半の年代が与えられる。

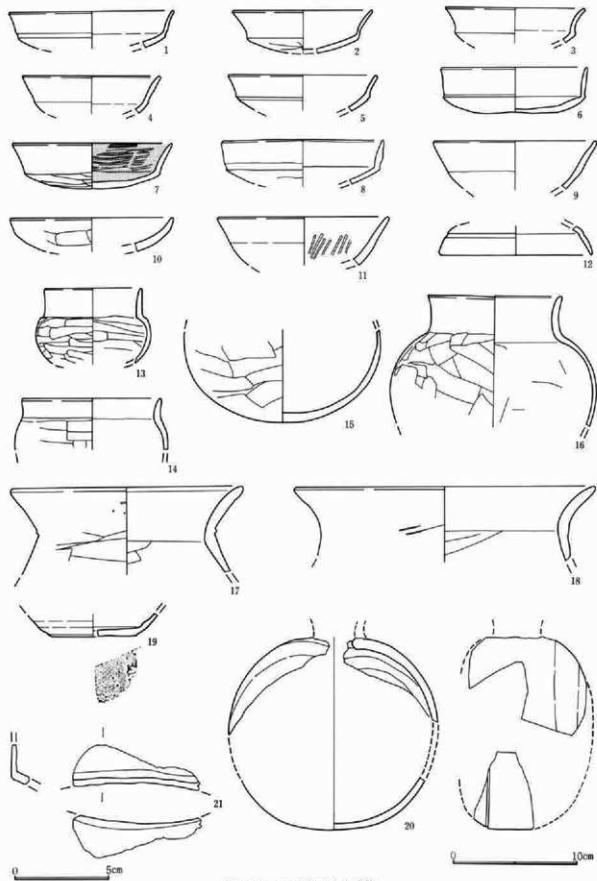
43号住居



- 1 雑作土
- 2 黒色土 FP粒を多量に含む。サラサラとした土質である。
- 3 暗褐色土 3cm大のFP粒を僅かではあるが全体的に散見する。FP粒も全体的に混入する。締まりはさほど強くない。
- 4 褐色土 FP粒主体。
- 5 暗褐色土 3層に比べFP粒の混入が多く、FAの粒子もみられる。
- 6 暗褐色土 5mm大のFP粒を多量に含む。
- 7 黄褐色土 FP粒主体。
- 8 黒色土 2層に類似するがFP粒の量は少なく全体的に砂質である。住居の埋土ではない。
- 9 黒褐色土 FA、FA下黒色土の混合土。
- 10 黒褐色土 FAを少量含む。
- 11 濃い褐色土 FAを主体とし、FA下黒色土を少量含む。



第223図 43号住居



第224図 43号住居出土遺物

#### 43号住居

**位置** EQ-62・63、ER-62・63 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで75～80cmで、周溝底面まで80～89cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は残存部分で2.40m、西辺は残存部分で2.10m、南辺は4.30mを測る。

**主軸方位** N-73°-E

**埋没土** 土質は褐色系土壌と同様であるが色調が黒みを帯びている。南壁際は汚れた Hr-FP 粒の流入がみられる。東壁でも同様の層が周溝の埋没土となっている。床面を被う土層には Hr-FA が粒状に含まれている。

**壁の状況** 床面から、東壁は97°、南壁は105°、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は120°、南壁は126°、北壁は142°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は5.949㎡を測る。Hr-FA 及び同層下黒色土によって床面を形成している。

**周溝** 検出部分の全体にみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 柱穴とは断定できないがピットが1基検出された。深さは床面から36cmを測る。

**掘り方** Hr-FA 下黒色土まで掘り込んでいる。細かな凹凸があるが全体の高さは一定している。

**電位位置** 検出されなかった。

**遺物** 床から5cmの間隔をおいて16の土師器壺が出土している。25cmの間隔をおいて13の土師器短頸壺がみられ、埋没土中からは土師器杯、甕、須恵器杯、長頸壺、鉄器が出土している。土師器杯は模倣杯が主であり、黒色処理を施しているものがある。鉄器は全体に弯曲がみられ、折り返しによって、断面「L」字状を呈している。

**所見** 出土土器の特徴から本住居は7世紀前半には構築されていたと考えられる。

#### 44号住居

**位置** EQ-58・59、ER-58・59 **平面形状** 隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで45～53cmで、周溝底面まで57～60cmを測る。

**重複住居** 45号住居と重複関係にあり、45号住居に東側埋没土を掘り込まれている。

**規模** 東辺は3.70m、西辺は4.10m、南辺は4.00m、北辺は3.95mを測る。

**主軸方位** N-102°-W

**埋没土** 下位は褐色系色調の土壌を呈しているが、上位は黒色系色調を呈する土壌に近い。壁際には細粒の Hr-FP の流入がみられる。

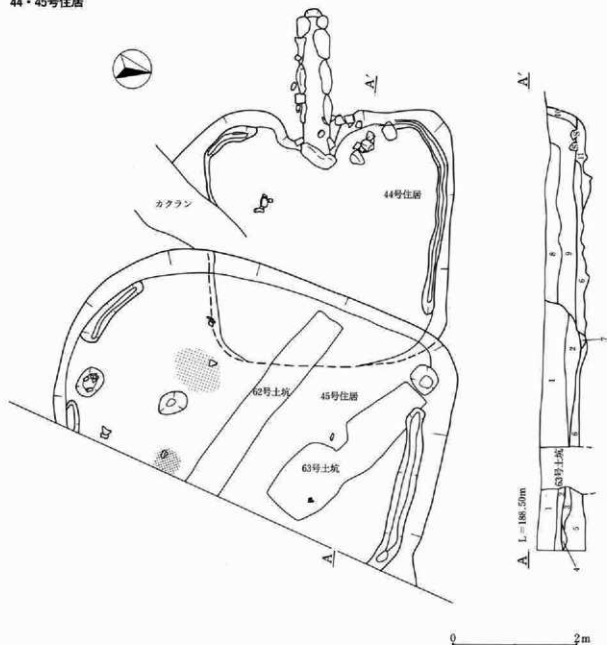
**壁の状況** 床面から、東壁は135°、西壁は108°、北壁は121°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及びその痕跡は確認できなかった。

**床面** 面積は12.468㎡を測る。黒色土ブロックを含む Hr-FA 主体層によって床面が形成されている。

**周溝** 住居北辺と南西のコーナー部分でみられる。 **貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では確認できなかったが、掘り方で確認した。東西間隔は、北が2.6m、南が2.35m、南北間隔は2.43mを測る。深さは、掘り方より1、2、4号ピットが36cm、3号ピットが44cmを測る。床面からの深さは49～52cmと推定できる。

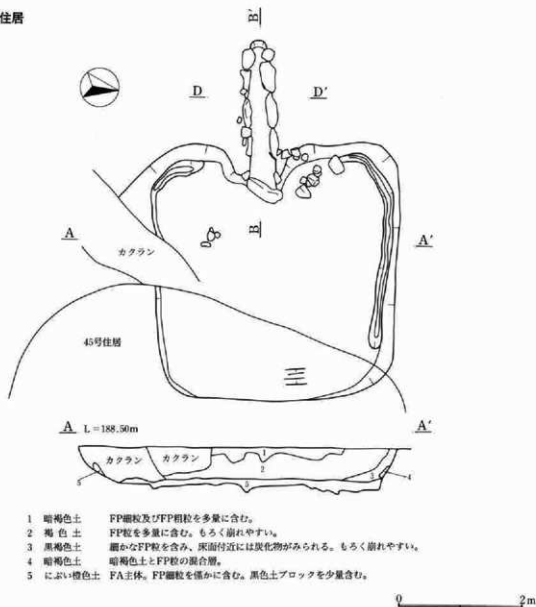
## 44・45号住居



- |          |                                    |
|----------|------------------------------------|
| 1 黒褐色土   | 土質は粗くザラつく。FP粒を多量に含む。               |
| 2 褐色土    | 炭化物、焼土粒を含み、やや粘性を有する。               |
| 3 暗褐色土   | FP粒を少量含む。硬く締まっている。                 |
| 4 暗黄褐色土  | カーボンを僅かに含む。FP細粒を少量含む。              |
| 5 暗黄褐色土  | FAブロックと黄色土ブロックが混在する。カーボンを少量含む。     |
| 6 におい煙色土 | FA主体、FP細粒を僅かに含む。黒色土ブロックを少量含む。      |
| 7 暗褐色土   | FP粒を主体とし、暗褐色土を含む。                  |
| 8 暗褐色土   | FP細粒及びFP粗粒を多量に含む。                  |
| 9 褐色土    | FP粒を多量に含む。もろく崩れやすい。                |
| 10 黒褐色土  | 細かなFP粒を含み、床面付近には炭化物がみられる。もろく崩れやすい。 |
| 11 黒褐色土  | FAブロック、黒色土ブロックが混在する。FP細粒を僅かに含む。    |

第225図 44・45号住居

44号住居



- 1 暗褐色土 FP細粒及びFP粗粒を多量に含む。
- 2 褐色土 FP粒を多量に含む。もろく崩れやすい。
- 3 黒褐色土 細かいFP粒を含み、床面付近には炭化物がみられる。もろく崩れやすい。
- 4 暗褐色土 暗褐色土とFP粒の混合層。
- 5 ぶい褐色土 FA主体。FP細粒を僅かに含む。黒色土ブロックを少量含む。

第226図 44号住居

**掘り方** Hr-FA下黒色土まで掘り込んでいる。外縁部を掘り窪め、中央部をやや高くしている。

**竈位置** 西辺中央やや南寄り **竈方位** N-99°-W

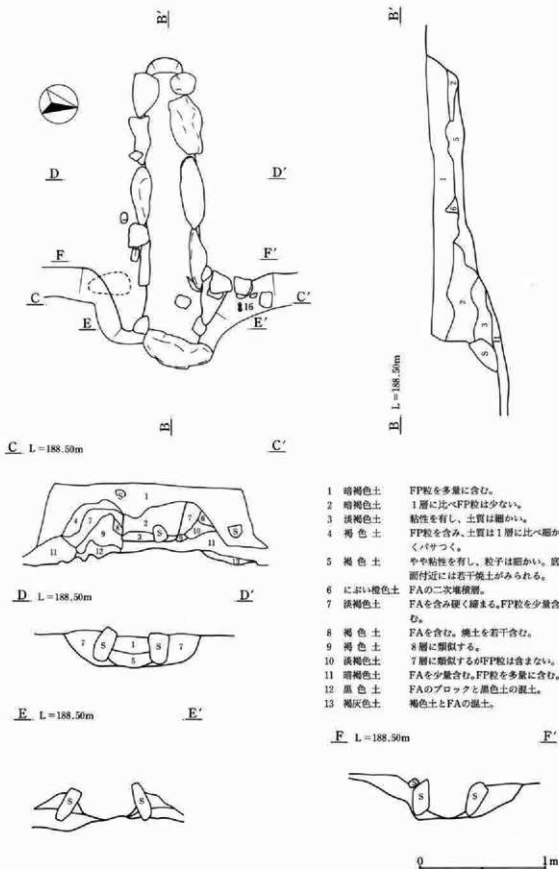
**竈規模** 全長は、2.50m、袖部幅1.05m、燃焼部幅0.30mを測る。

**竈形状その他** 左右の袖に河原石を使用しており、燃焼部には支脚の可能性のある石がみられる。煙道両壁には外端部まで扁平な河原石を平の最大面を内側に向けて据えている。竈前の55×25cmほどの石は横架していた石が落ち込んだものと思われる。

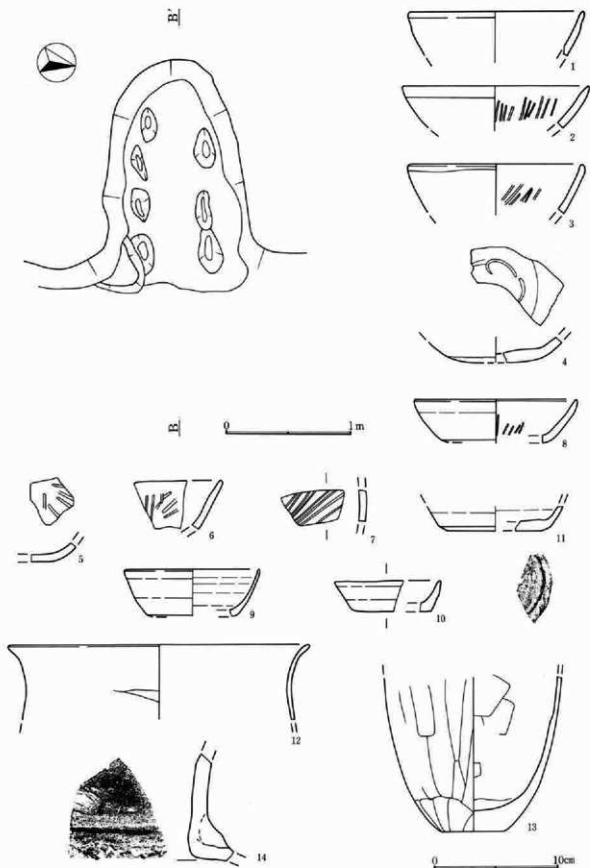
**遺物** すべて埋没土中の出土である。土師器杯は内面に放射状あるいは螺旋状暗文がみられる。須恵器杯の底部は回転ヘラ削りである。須恵器では他に盤と甕があり、甕の頸部には補強帯が認められる。竈内部からシカの四肢及び左下顎第1、2、3後臼歯が出土し、竈右袖外面からは右下顎第3後臼歯が認められた。

**所見** 出土した土器は7世紀代～8世紀代の資料があり、年代の限定は困難である。



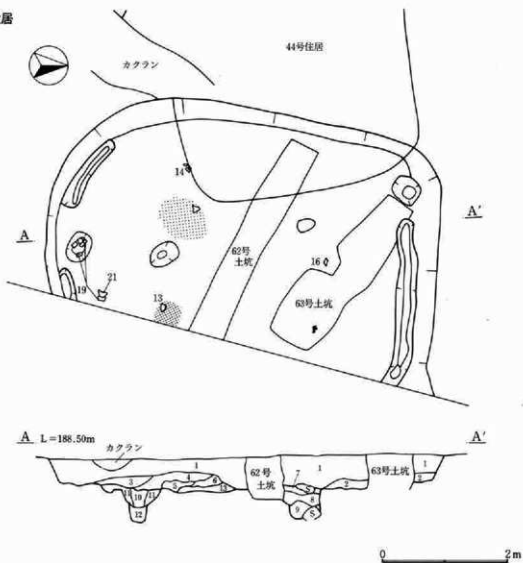


第227図 44号住居竪



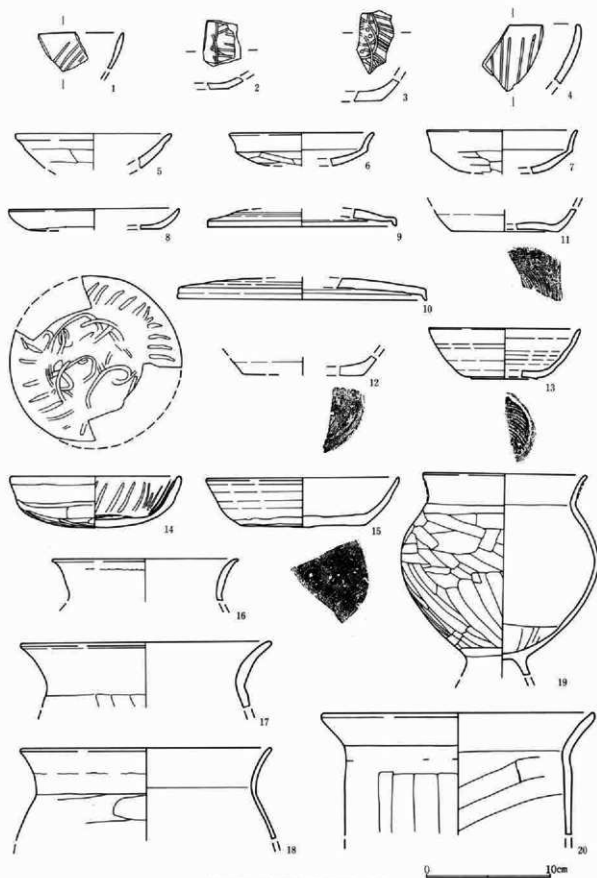
第228図 44号住居電掘り方及び出土遺物

45号住居

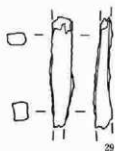
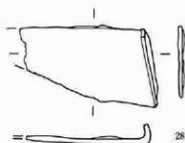
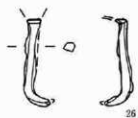
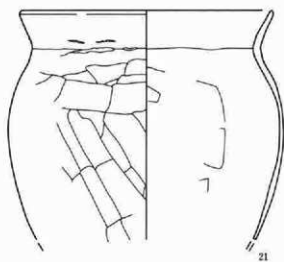


- 1 黒褐色土 土質は粗くザラつく。FP粒を多量に含む。
- 2 褐色土 炭化物、炭土粒を含み、やや粘性を有する。
- 3 暗褐色土 FP粒(大粒)を多量に含む。
- 4 暗褐色土 FP粒を少量含む。硬く締まっている。
- 5 暗褐色土 FP粒(大粒)を少量含む。
- 6 暗褐色土 FP細粒を少量含む。細かい砂質で硬く締まっている。
- 7 暗褐色土 FP粒(大粒)を少量含む。5層に類似する。
- 8 暗褐色土 FP細粒を少量含む。細かい砂質で硬く締まっている。6層に類似する。
- 9 暗褐色土 FP細粒を少量含む。10層に類似する。
- 10 黒褐色土 FP粒(大粒)を少量含む。
- 11 黒褐色土 FP細粒を少量含む。(12層より多い)
- 12 黒褐色土 FP細粒を少量含む。
- 13 黒褐色土 黒色土ブロックを少量含む。FP粒を僅かに含む。

第229図 45号住居



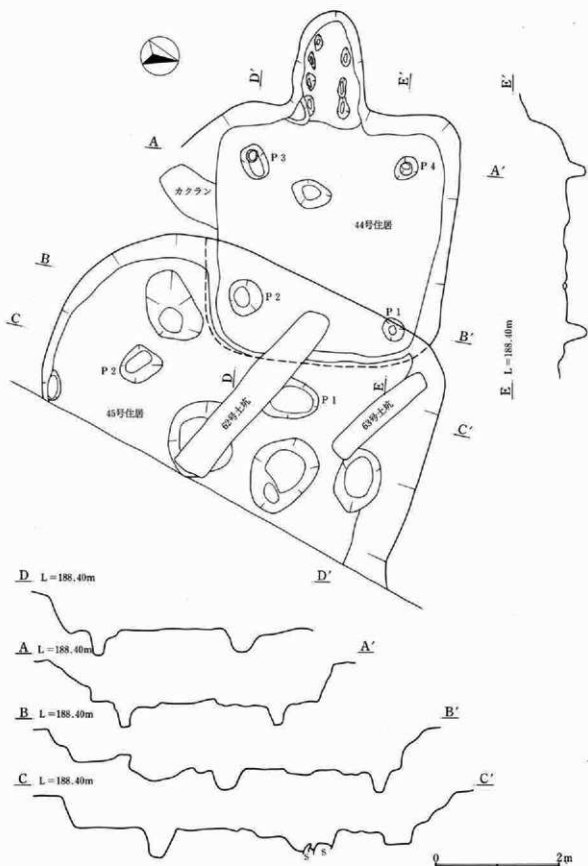
第230図 45号住居出土遺物(1)



0 5cm

0 10cm

第231圖 45号住居出土遺物(2)



第232図 44・45号住居掘り方

## 45号住居

**位置** EP-57・58、EQ-57・58、ER-57・58

**平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで40~49cmで、周溝底面まで46~54cmを測る。

**重複住居** 44号住居と重複関係にあり、44号住居の埋没土を掘り込んで作られている。

**規模** 西辺は5.50m、南辺は残存部分で3.20m、北辺は残存部分で3.85mを測る。

**主軸方位** N-99°-E

**埋没土** 下位に薄く認められる土層は褐色系色調を呈する土壌である。黒色系色調を呈すが土質は褐色系の土壌に類似する土層が主体をなしている。

**壁の状況** 床面から、西壁は130°、南壁は120°、北壁は108°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は17.640㎡を測る。Hr-FAと黄色土ブロックを含む土層を主体層とし床面を形成している。

**周溝** 住居北辺と南西のコーナー部分と南辺にみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

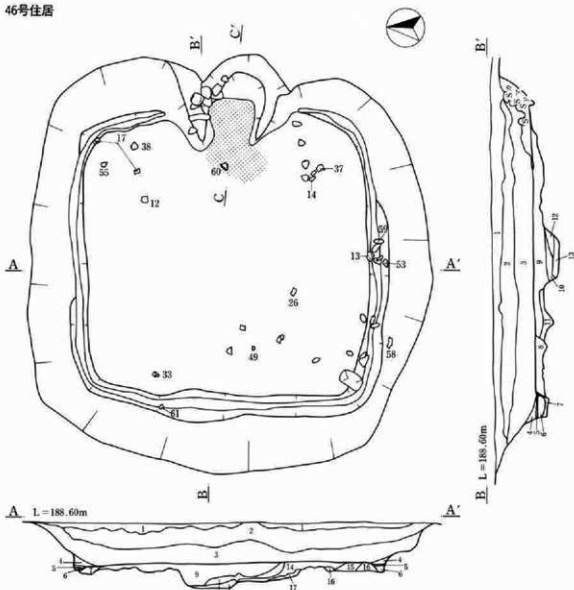
**柱穴** 床面では確認できなかったが掘り方でいくつかのピットが確認された。2号ピットは床面と同じレベルに河原石を横位に据え基礎としている。1号ピットと2号ピットの南北間隔は2.60mを測る。深さは、掘り方より1号ピットが24cm、2号ピットが47cm、床面からは1号ピットが31cm、2号ピットが54cmを測る。  
**掘り方** Hr-FA層を掘り抜いて同層下黒色土上面まで達している。南西コーナーなどに落ち込みがみられ、細かい凹凸はあるものの全体的に同じ高さに掘削している。

**竈位置** 検出されなかった。

**遺物** 南壁近くに約50×36cm、深さ16cmのピットが検出され、その中から台付甕が出土した。床面から若干の間隔をおいて16の土師器甕がみられた。やはり床から間隔をおいて内面に暗文を施した土師器杯や甕が出土している。他に埋没土中からは横做杯、須恵器蓋、杯がみられる。須恵器杯は底部に回転ヘラ削りのみられるものと回転糸切りが認められるものがある。鉄器では鎌、釘等が出土した。

**所見** 出土した土器の様相から本住居には9世紀前半の年代が与えられる。

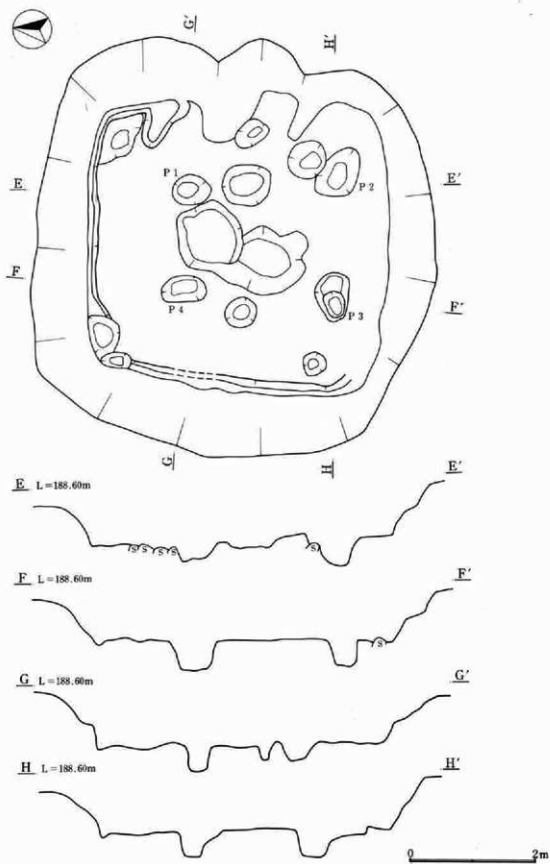
46号住居



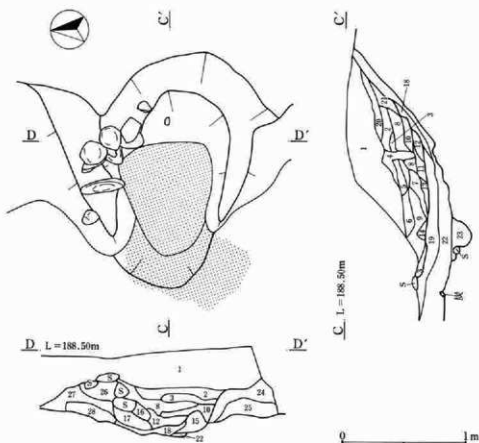
- |           |                             |
|-----------|-----------------------------|
| 1 黒褐色土    | FP粒を少量含む。                   |
| 2 暗褐色土    | FP粒を多量に含む。                  |
| 3 暗褐色土    | 2層よりもFP粒を多量に含む。カーボンを僅かに含む。  |
| 4 黄褐色土    | FP粒主体。壁の崩れ。                 |
| 5 淡赤褐色土   | FA主体。                       |
| 6 黄褐色土    | FP粒主体。                      |
| 7 暗褐色土    | FP粒、FAブロックを少量含む。            |
| 8 暗褐色土    | FP粒を少量含む。硬く締まっている。          |
| 9 暗褐色土    | FP粒(大粒)を多量に含む。硬く締まっている。     |
| 10 におい橙色土 | FA主体。                       |
| 11 におい橙色土 | FA主体。FP粒を僅かに含む。             |
| 12 黒褐色土   | 黒色土主体。FP粒を僅かに含む。            |
| 13 暗灰色灰   | 白色灰と黒色灰の混在。                 |
| 14 暗褐色土   | 8層に類似する。                    |
| 15 暗褐色土   | FP粒(大粒)を多量に含む。FAブロックを僅かに含む。 |
| 16 暗褐色土   | FP粒、FAブロックを少量含む。7層に類似する。    |
| 17 黒褐色土   | FP粒を僅かに含む。                  |

第233図 46号住居



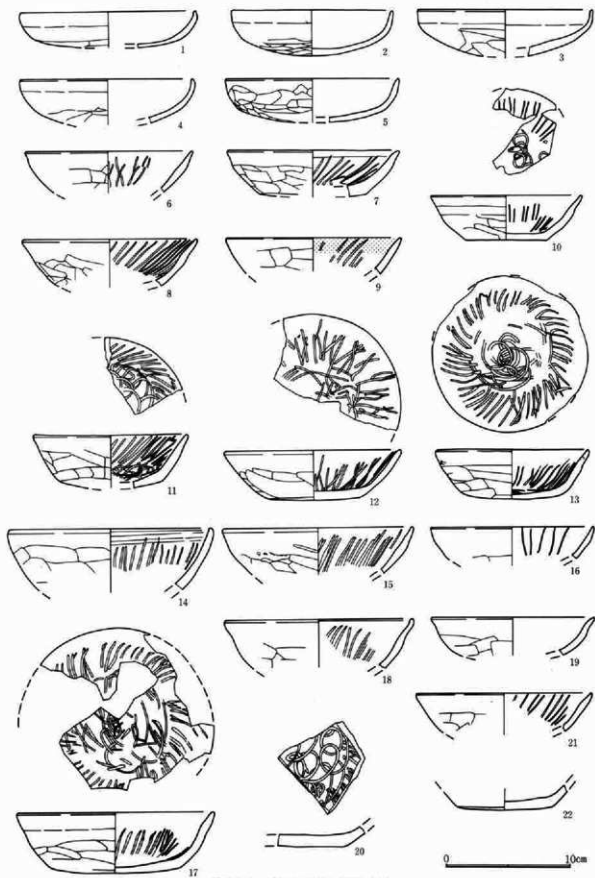


第234図 46号住居掘り方

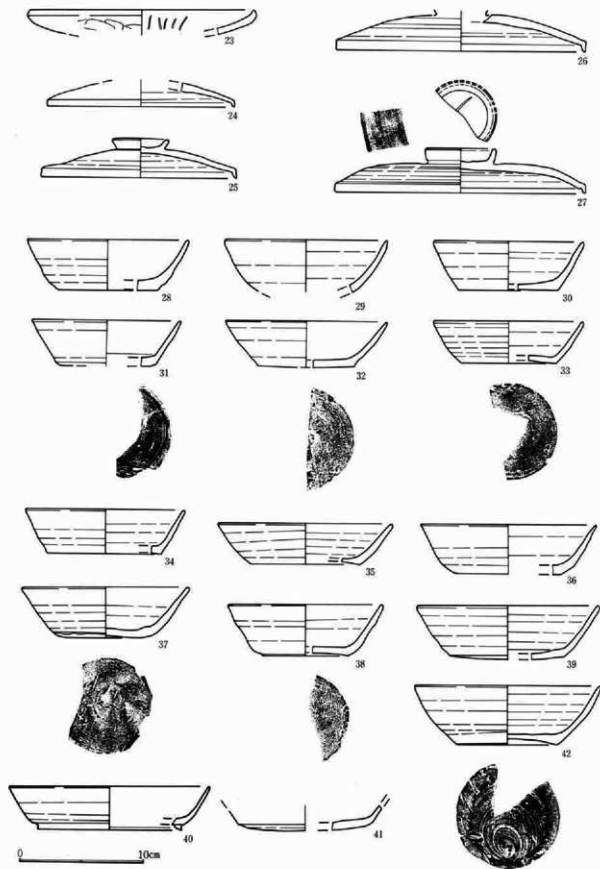


- |          |   |
|----------|---|
| 1 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。住居埋土と同様。                              |
| 2 灰褐色土   | やや砂質を呈するがよく締まる。                                 |
| 3 淡褐色土   | 2層に類似するが焼土を多量に含む。                               |
| 4 褐色土    | 焼土を少量含む。φ2～5mmのFP粒を少量含む。                        |
| 5 黄褐色土   | 砂質味を呈する黄褐色土を含む。焼土を含む。                           |
| 6 赤褐色土   | 5層に類似するがより焼土を多く含む。                              |
| 7 赤褐色土   | 焼土を多量に含む。炭化物を少量含む。黄褐色土が混じる。φ5mm大までのFP粒をごく稀れに含む。 |
| 8 赤褐色土   | 焼土を多量に含む。焼土はよく焼けている。                            |
| 9 赤褐色土   | 7層に類似するが、炭化物、黄褐色土の量がより多く、色調は明るい。                |
| 10 灰褐色土  | 焼土を含む。よく締まる。φ5mmほどのFP粒を稀れに含む。                   |
| 11 赤褐色土  | 焼土を多量に含む。粘性が強い。                                 |
| 12 褐色土   | 焼土を含む。灰白色土をブロック状に少量含む。                          |
| 13 赤褐色土  | 焼土を多量に含む。灰褐色土が混じる。φ2～3mmのFP粒がごく少量混じる。           |
| 14 赤褐色土  | 13層に類似するが灰褐色土の混入が少ない。                           |
| 15 淡褐色土  | 土質は細かくφ2～3mmほどのFP粒を少量含む。                        |
| 16 褐色土   | 12層に類似するがやや色調が暗い。焼土を少量含む。                       |
| 17 黒褐色土  | φ5～10mm大のFP粒を多量に含む。16層土にカーボンを多量に含む。             |
| 18 暗褐色土  | φ5mmまでのFP粒を多量に含む。土質は細かい。                        |
| 19 赤褐色土  | 焼土を多量に含む。φ5mmほどのFP粒を含む。                         |
| 20 灰褐色土  | 2層土よりやや黄色味を帯びる。φ5mmほどのFP粒を少量含む。                 |
| 21 赤褐色土  | 8層に類似するが焼土が少なくなりφ3～5mmほどのFP粒を含む。                |
| 22 暗褐色土  | φ2～3mmのFP粒を含む。                                  |
| 23 褐色土   | φ2～3cmのFP粒を含む。赤褐色土ブロックを少量含む。                    |
| 24 暗褐色土  | FP粒を僅かに含む。FAを主体とする。                             |
| 25 黒褐色土  | φ2～3cmのFP粒を少量含む。FAを多量に含む。                       |
| 26 暗褐色土  | 5mm大のFP粒を多量に含む。FAを少量含む。                         |
| 27 黄褐色軽石 | FP層～軽石で充填される。                                   |
| 28 暗褐色土  | FP粒(2～5mm大)を少量含む。                               |

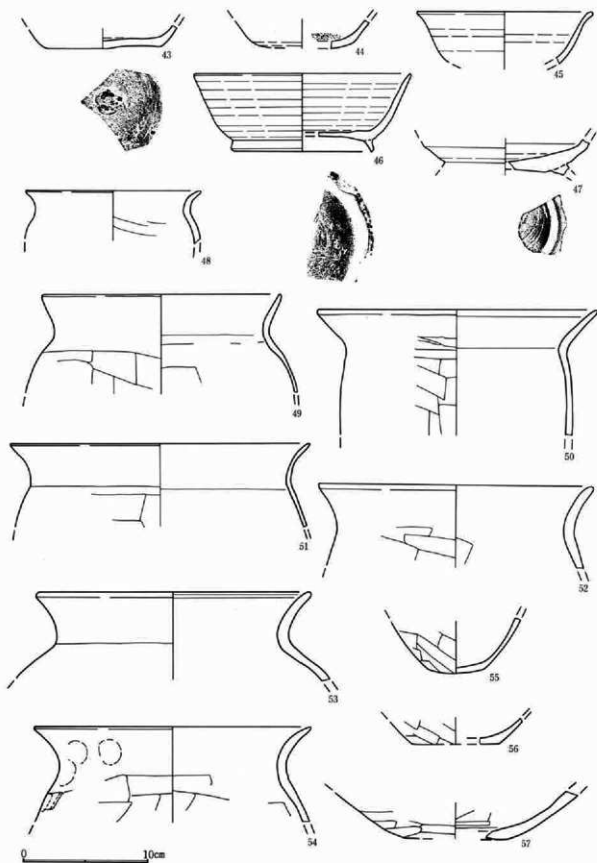
第235図 46号住居層



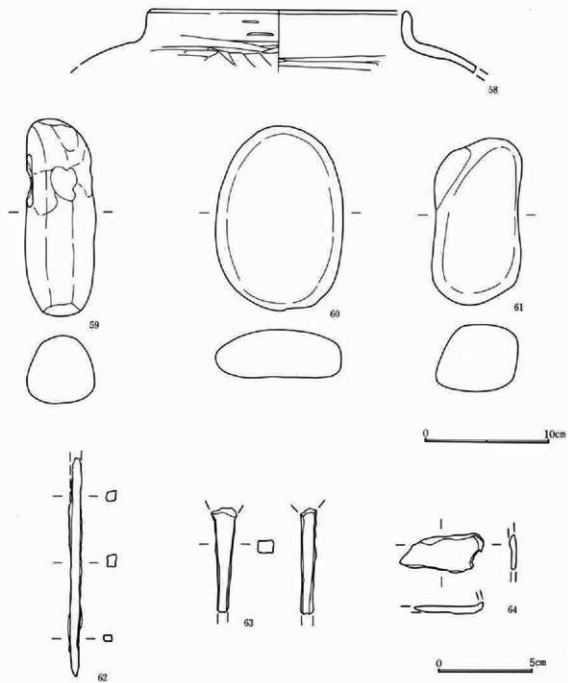
第236图 46号住居出土遗物(1)



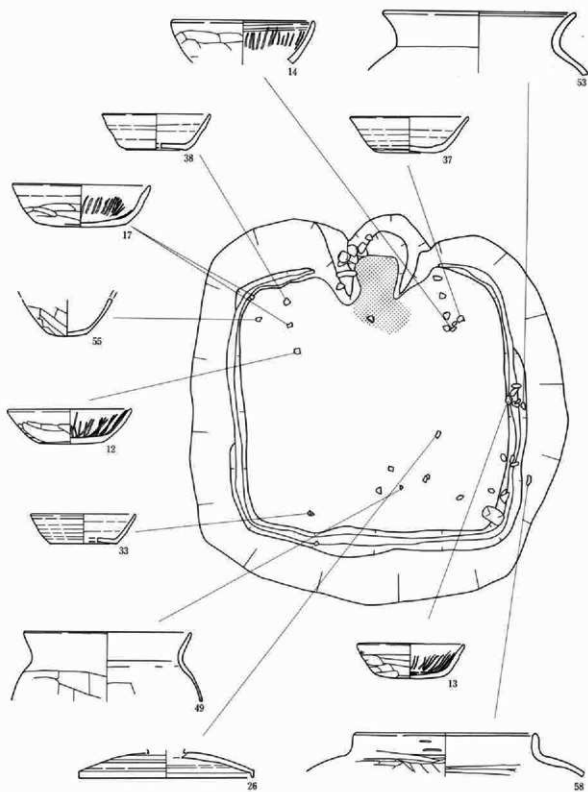
第237図 46号住居出土遺物(2)



第238图 46号住居出土遺物(3)



第239図 46号住居出土遺物（4）



第240图 46号住居遺物出土位置

#### 46号住居

位置 ES-57・58・59、ET-57・58・59、EU-57・58・59

平面形状 南辺がやや影らんだ隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで70～78cmで、周溝底面まで80～88.5cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は5.70m、西辺は5.80m、南辺は6.00m、北辺は5.80mを測る。

主軸方位 N-82°-E

埋没土 下位は色調が暗い褐色系土壌であるが上位は黒色系色調を呈する土壌に類似する。壁際では Hr-FP の二次堆積がみられる。

壁の状況 床面から、東壁は136°、西壁は110°、南壁は115°、北壁は100°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は135°、南壁は103°、北壁は113°を測る。

床面 面積は22.029㎡を測る。Hr-FP 粒を含む暗褐色土によって床面を形成している。

周溝 竈を除く全体でみられる。周溝には Hr-FP の二次堆積がみられるが、その上位層は Hr-FA 主体層が位置する。調査時には貼り床とみていたため、周溝の存在を容易には確認できなかった。たまたま床面を下げすぎた所で Hr-FP 二次堆積層が認められ、周溝の検出に至ったものである。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 床面では確認できなかったが、掘り方でいくつかのピットが検出され、4基対になる位置になるものが認められた。東西間隔は、北が1.55m、南が2.03m、南北間隔は2.4mを測る。深さは、掘り方より1号ピットが30cm、2、3、4号ピットが40～44cm、床面からは推定で1号ピットが51cm、2号ピットが60cm、3、4号ピットが56～57cmを測る。

掘り方 Hr-FA 下黒色土上面まで掘削している。地山の露が多くみられた。細かい凹凸はあるが中央部がやや落ち込む他は全体的に高さは平坦である。

竈位置 東辺中央

竈方位 N-93°-E

竈規模 全長は、1.85m（屋外長0.70m、屋内長1.15m）、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.75mを測る。

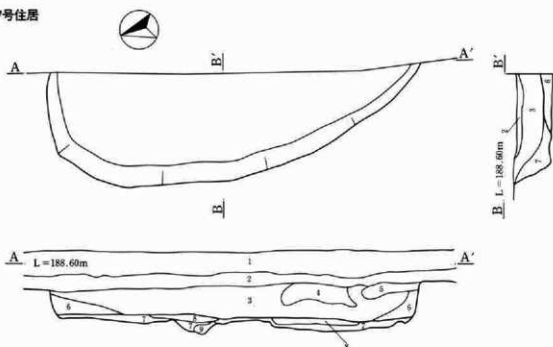
竈形状その他 あまり屋外へ煙道が伸びない形状である。左袖の一部に河原石が認められる。左壁にかけて河原石を2、3段に小口積みしている。掘り方では袖部分は地山を若干掘り残していることが看取される。

遺物 床面からは12、14の土師器杯が出土した。内面に放射状及び螺旋状の暗文が施される。竈埋没土からは42の杯、48の甕がみられる。掘り方では3、5、7、45の杯が出土した。埋没土中からは土師器杯、甕、須恵器蓋、杯、碗、使用痕跡のある石、鉄器が出土している。土師器杯は内面に放射状、螺旋状暗文が施されるものが多い。須恵器杯の底部は一部には不定方向のヘラ削り、回転糸切りがみられるが、多くは回転ヘラ削りである。鉄器では64は掘り方から出土し、一部にカエリが残り、鎌の可能性もある。さらに埋没土中から微細焼骨片が多数みられた。床から28.5cmの間隔を置いてウシの骨片も認められた。

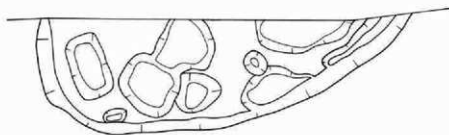
所見 出土した土器の特徴から、本住居は8世紀後半に比定できる。土器の中で暗文を施す土師器杯の量が傑出している。



## 47号住居



- 1 暗褐色土 表土(耕作土)、汚れたFP粒を含む。
- 2 黒色土 全体的に粒子の細かい軽石、及びFP粒を含む。(II層)
- 3 暗褐色土 FP粒(φ5mm大)が主体であり、φ3~4cm大のもの僅かに散見する。もろく崩れやすい。
- 4 暗褐色土 3層よりFP粒が多く、僅かに褐色土が混入する。
- 5 暗褐色土 3層と4層との中間層。
- 6 暗褐色土 全体的に3層に類似するがFP粒は細かい。
- 7 明褐色土 FAを主体とし、FP粒を少量混入する凝土。
- 8 明褐色土 7層に似るが、褐色土の混入が多い。
- 9 暗褐色土 FP粒を少量含む。FAを多量に含む。黒色土ブロックを僅かに含む。



0 2m

第241図 47号住居

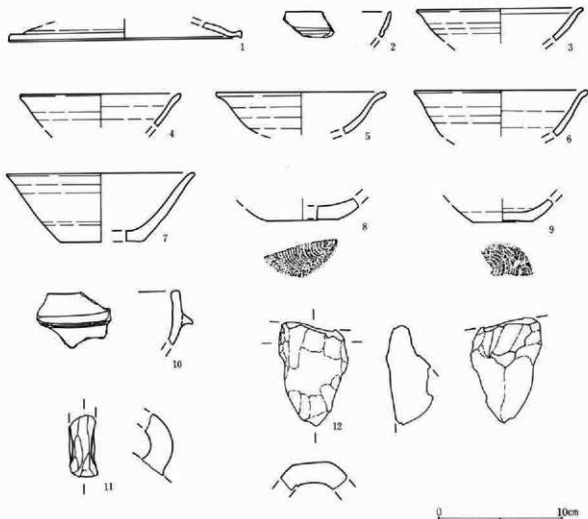
## 47号住居

位置 ET-56・57、EU-56・57 平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで57~61cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 西辺は残存部分で6.00m、北辺は残存部分で1.90mを測る。



第242図 47号住居出土遺物

主軸方位 N-101°-E

埋没土 褐色系色調を呈する土壌を主体とする。

壁の状況 床面から、西壁は125°、南壁は110°、北壁は112°の角度で立ち上がる。壁体を構築する材及び痕跡は認められない。

床面 面積は6.519㎡を測る。Hr-FAを主体としHr-FP粒を少量含む土層により床面を構築している。

周溝 検出されなかった。掘り方では住居西辺に周溝状の溝が僅かにみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

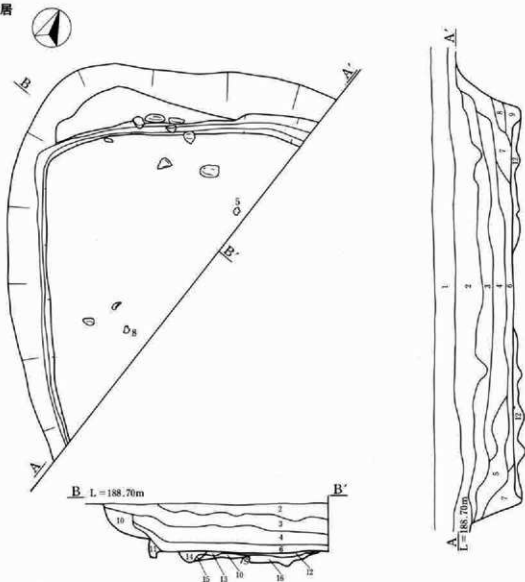
掘り方 Hr-FA層中まで掘り込みが及んでいる。中央、壁際に大小の落ち込みがみられる。

竈位置 検出されなかった。

遺物 すべて埋没土中の出土である。須恵器蓋、杯、椀、壺類、羽釜等が認められる。杯の底部は7に不定方向のヘラ削りがみられ、8、9は回転糸切りである。

所見 出土した土器の特徴から、本住居は10世紀前半には構築されていたと考えられる。

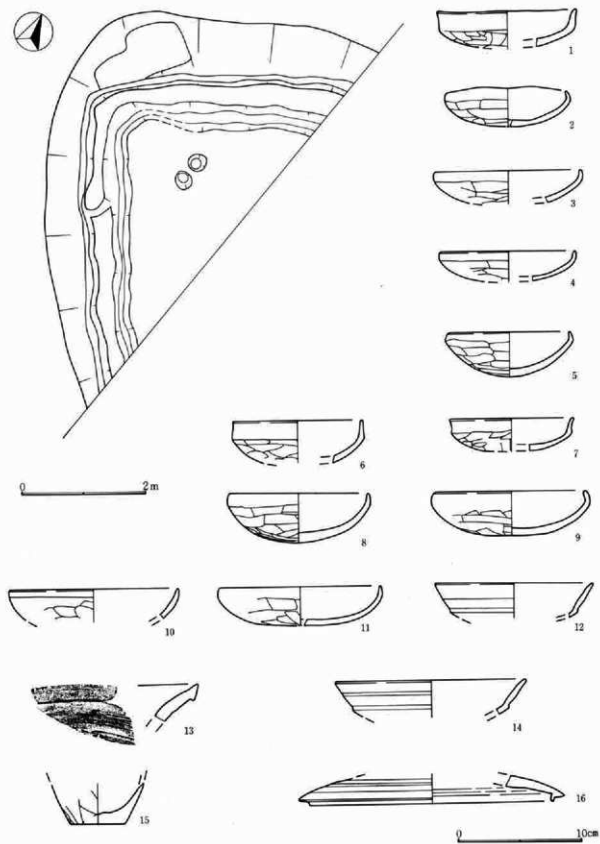
48号住居



- |    |       |  |
|----|-------|--|
| 1  | 耕作土   |  |
| 2  | 黒色土   | 全体的にサラサラとした土質でFP粒を多量に含む。               |
| 3  | 褐色土   | FP粒(約3~10mm大)を多量に含む。小石等を少量含む。崩れやすくもろい。 |
| 4  | 褐色土   | 3層に比べFP粒が小さく、量的に多い。                    |
| 5  | 暗褐色土  | 成分的には4層に類似する。                          |
| 6  | 暗褐色土  | 床面近くには炭化物等がみられFP粒も細かい。                 |
| 7  | 褐色土   | FP粒が多量に含まれ、壁の崩壊と思われる。炭化物が若干認められる。      |
| 8  | 黄褐色硬石 | FP粒主体。                                 |
| 9  | 暗褐色土  | FAの小ブロック、黒色土を含む。FP粒の混入は少ない。            |
| 10 | 褐色土   | FP粒の混入が多い。締まりは弱く、もろい。                  |
| 11 | 濃い褐色土 | FAが多く認められる。                            |
| 12 | 黒褐色土  | FAブロックが多く混入する。FP粒もごく細かいはあるが散見できる。      |
| 13 | 淡褐色土  | FA主体。若干FP粒を含む。                         |
| 14 | 暗褐色土  | FP粒を層上部に多く含む。                          |
| 15 | 淡褐色土  | FAのブロック主体。                             |
| 16 | 暗褐色土  | FP粒とFAの小ブロックを多量に含む。締まりはよい。             |

0 2m

第243図 48号住居



第244図 48号住居掘り方及び出土遺物

## 48号住居

**位置** EV-56・57、EW-56・57、EX-56 **平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで77～81.5cmで、周溝底面まで83～90cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 西辺は残存部分で5.50m、北辺は残存部分で4.50mを測る。

**主軸方位** N-26°-W

**埋没土** 褐色系色調を呈する土壌が主体である。上位には基本土層のII層である黒褐色土が位置する。

**壁の状況** 床面から、西壁は90°、南壁は110°、北壁は108°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は126°、北壁は124°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は11.151㎡を測る。Hr-FA下黒色土とHr-FA及び両者の混合土によって床面を構築している。これらの土層にはHr-FP粒を含んでいる。南壁際で炭化物を含むHr-FPの二次堆積層がみられ、周溝の埋没土層となっている。周溝は北壁ではHr-FAを含有する土層によって埋没している。

**周溝** 検出部分の全体でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では確認できなかった。掘り方では2基のピットが検出されたが柱穴とは断定できなかった。2基の深さは掘り方からともに20cm前後を測る。

**掘り方** Hr-FA下黒色土中まで掘り込んでいる。外縁部をやや深く掘り込んでいるため中央部が高くなっている。前述の2基のピットの他、床面で確認した周溝の内側に周溝と平行して伸びるもう1条の溝が検出された。

**竈位置** 検出されなかった。

**遺物** 8の杯が床面から5cmの間隔をおいて出土している。埋没土からの出土では土師器杯、甕、須恵器蓋、甕がみられる。杯の中には模倣杯の系統がみられ、他の杯もヘラ削りが口縁部下半に及び口縁部が短く内傾することが看取できる。須恵器蓋はカエリが明瞭な状態である。

**所見** 出土した土器の様相から本住居は7世紀後半には構築されていたと考えられる。

## 49号住居

**位置** FA-55.56、FB-55.56 **平面形状** 隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで54～67.5cmで、周溝底面までが北部分は61～73.5cm、その他の部分は52～60.5cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

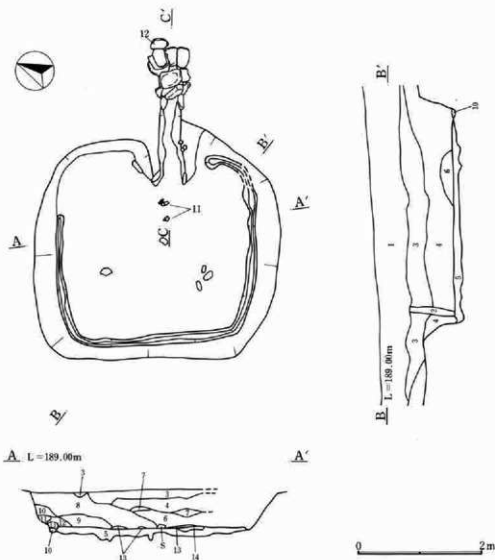
**規模** 東辺は3.40m、西辺は3.50m、南辺は3.40m、北辺は3.35mを測る。

**主軸方位** N-65°-W

**埋没土** 褐色系色調を呈する土壌であるがやや色調が沈む。北壁では周溝にHr-FP二次堆積がみられ、その上にHr-FA二次堆積層がある。さらにHr-FPとHr-FAの流入がみられる。東南コーナー部では周溝にHr-FP二次堆積層がある。

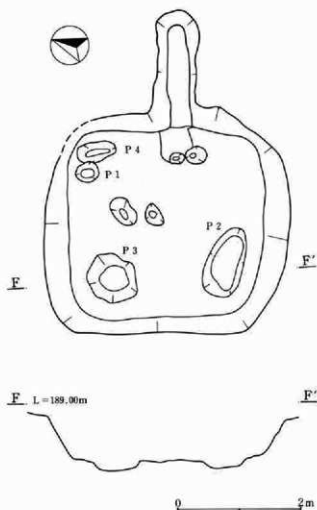
**壁の状況** 床面から、東壁は109°、西壁は93°、南壁は115°、北壁は102°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は150°、北壁は105°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められない。

49号住居



- |    |        |  |
|----|--------|--|
| 1  | 黒褐色土   | FP粒を少量含む。耕作土。                                    |
| 2  | 黄褐色土   | FP粒主体。   |
| 3  | 暗褐色土   | 大粒のFP粒を多量に含む。黒色味を帯びる。                            |
| 4  | 暗褐色土   | FP細粒を中心に3層より多量に含む。褐色がかっている。                      |
| 5  | にぶい橙色土 | FAと黒色土ブロックの混在。硬く締まっている。                          |
| 6  | 暗褐色土   | 4層に類似するがFAを多量に混入する。最下層に焼土が薄く存在する。                |
| 7  | 暗黄褐色軽石 | FP細粒がざっしり詰まる。                                    |
| 8  | 暗褐色土   | 4層に類似するがFAと黒褐色土を少量混入する。                          |
| 9  | 暗褐色土   | 8層に類似する。FAをごく少量混入するが黒褐色土はなく、やや色調が明るい。            |
| 10 | 暗褐色土   | FA、FP細粒を多量に含む。                                   |
| 11 | 明褐色火山灰 | FA。  |
| 12 | 白黄褐色軽石 | FP細粒がざっしり詰まる。                                    |
| 13 | 褐色土    | 粘性が強い。FP粒を少量含む。土質は細かい。                           |
| 14 | 淡褐色土   | FA。締まりがよく粘性を帯びる。φ2～3mmのFP粒をごく少量含む。上位には焼土が薄く分布する。 |

第245図 49号住居



第246図 49号住居掘り方

**床面** 面積は8.742㎡を測る。Hr-FA及び同層下黒色土の混合層により床面を構築している。床面を被うのは、住居北側ではHr-FAを含有し一部に黒褐色土を混入する土層である。床面上ではHr-FP二次堆積や粘性の強い褐色土がみられた。

**周溝** 住居北東のコーナー部分と竈を除く部分でみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では検出できなかった。掘り方において南東コーナー以外の各コーナー近辺において落ち込みが認められた。ただし、柱穴とは断定できていない。これらの東西間隔は2.05m、南北間隔は1.9mを測る。深さは、掘り方より1、4号ビットが8～10cm、2、3号ビットが16～18cmを測る。

**掘り方** Hr-FAを掘り抜いて黒色土上面まで掘削が及んでいる。前述の落ち込みの他、細かな凹凸がみられる。

**竈位置** 東辺中央

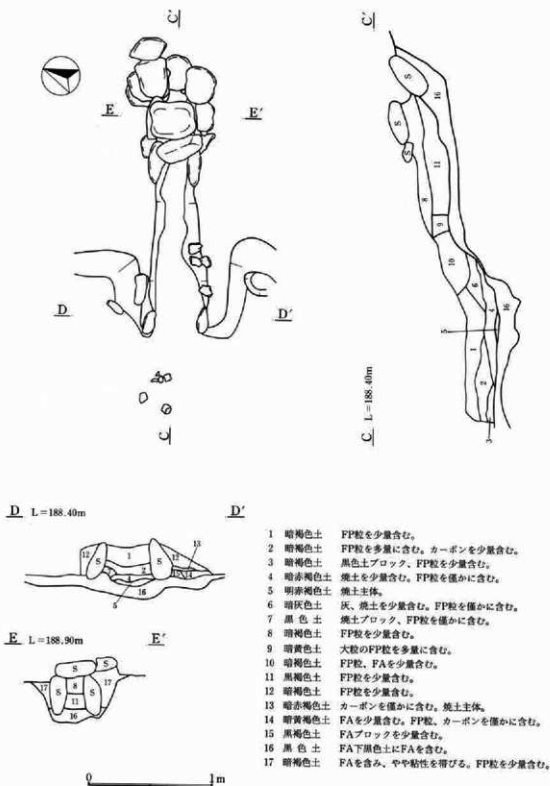
**竈方位** N-71°-E

**竈規模** 全長は、2.30m、袖部幅0.6m、燃焼部幅0.3mを測る。

**竈形状その他** 左右袖に河原石を立位に据えている。煙道では外端部側に河原石が残存していた。両壁に3石ずつ用い、外端部に斜位に据えている。天井石は2石残存しており、外端部の左壁では壁石の上に3段に小口積みしていることが看取される。右壁では1段のみ残存するが本来は左壁と同様のレベルを持っていたと考えられる。

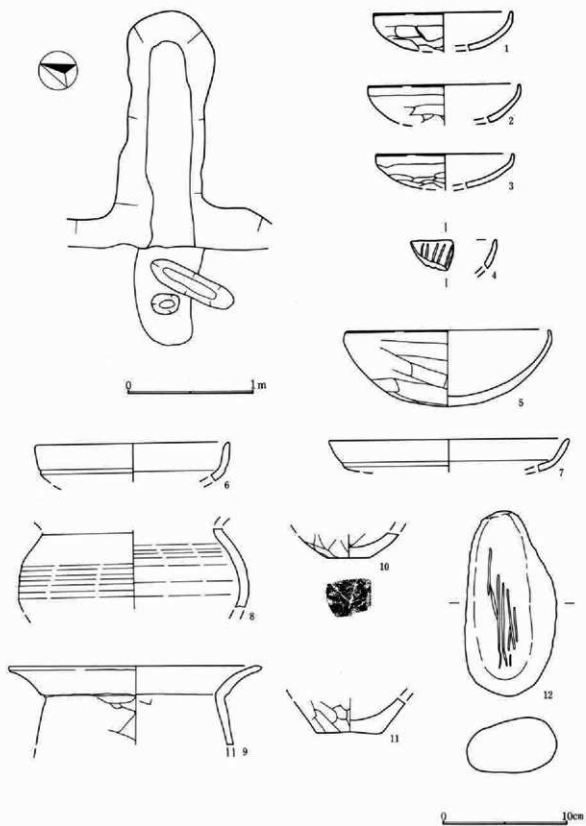
**遺物** 床面では中央に1個体、南壁寄りに3個体の河原石がみられた。床面から2.5cmの間隔において11の土師器壺底部が出土している。4が掘り方から、5、6が竈埋没土から出土している。10の壺底部には木葉痕がみられる。12は表面に何条もの条線がみられる使用痕跡をもつ石英閃緑岩であり、竈外端からの出土である。竈からは他にトリと思われる焼骨片が出土している。

**所見** 出土した土器の様相から、本住居は7世紀後半には構築されていたと考えられる。



第247図 49号住居竈





第248図 49号住居電掘り方及び出土遺物

### 50号住居

**位置** FB-58・59、FC-58・59

**平面形状** 隅丸方形であるが北東から南西方向にやや潰れて菱形を呈している。

**残存深度** 壁の高さは床面まで47～57cmで、周溝底面まで60～70.5cmを測る。

**重複住居** 51号住居、52号住居と重複関係にある。本住居は52号住居の埋設土の一部を掘り込んで作られている。その後51号住居構築時に一部を破壊されている。

**規模** 東辺は4.20m、西辺は4.00m、南辺は3.40m、北辺は3.40mを測る。

**主軸方位** N-102°-E

**埋設土** 褐色系色調を呈する土壌と土質は同様であるが色調が沈む。

**壁の状況** 床面から、東壁は147°、西壁は118°、南壁は120°、北壁は140°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁は160°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は9.189㎡を測る。Hr-FPを含むHr-FAと明褐色土の混合土によって床面を形成している。

**周溝** 住居の南辺、西辺と北辺の一部のみられる。

**貯蔵穴** 規模は、76×53cm、深さは床面より24cmを測る。土師器杯2個体、須恵器椀6個体、使用痕跡のある石1個体を実測し得た。

**柱穴** 床面では確認できなかった。掘り方において何基かのピット状の掘り込みが各コーナー近辺に認められたが、柱穴とは断定できなかった。北東コーナー付近の掘り込みが、掘り方からの深さ37cm、その他のものは10～12cmの深さである。

**掘り方** Hr-FA層中まで掘り込みが及んでいる。前述の掘り込みの他は平坦である。

**電位置** 東辺中央

**電方位** N-98°-E

**電規模** 全長は、1.20m（屋外長0.60m、屋内長0.60m）、袖部幅1.30m、燃焼部幅0.60mを測る。

**電形状その他** 右袖の粘性土が細く残る。左壁粘性土中に小ぶりの石がみられた。火山礫質凝灰岩の構築材も左壁に立位で認められた。

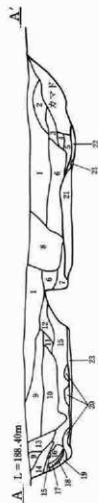
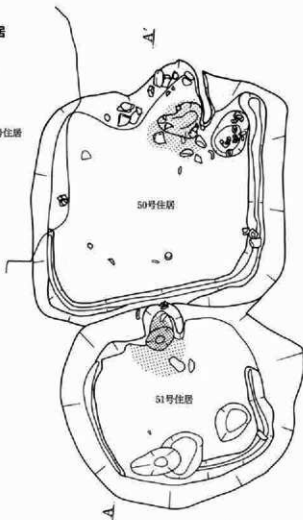
**遺物** 竈からは3の土師器杯、28、29、32の土師器甕、18の須恵器椀が出土している。床面からは17の須恵器椀が認められた。貯蔵穴では2、4の土師器杯、8、9、21の須恵器杯が出土した。2～4の杯には口縁部下半は無調整で底部に不定方向のヘラ削りがみられる。須恵器杯の底部は回転糸切りである。墨書が3点みられ、10は口縁部外面正位に「㊦」、23は口縁部外面3ヶ所に逆位で「得」、24は内面に「+」が認められる。土師器甕は口縁部が「コ」字状を呈す資料が多い。鉄器では鋤先が住居西側において床面から出土した。刀子は茎が「V」字状に屈曲した状態で出土をみている。他に使用痕跡のある石頭と火山礫質凝灰岩の電構築材があり、電構築材は削りがよく残っている。

**所見** 出土した土器の特徴から本住居は9世紀後半に比定できる。

## 50・51号住居

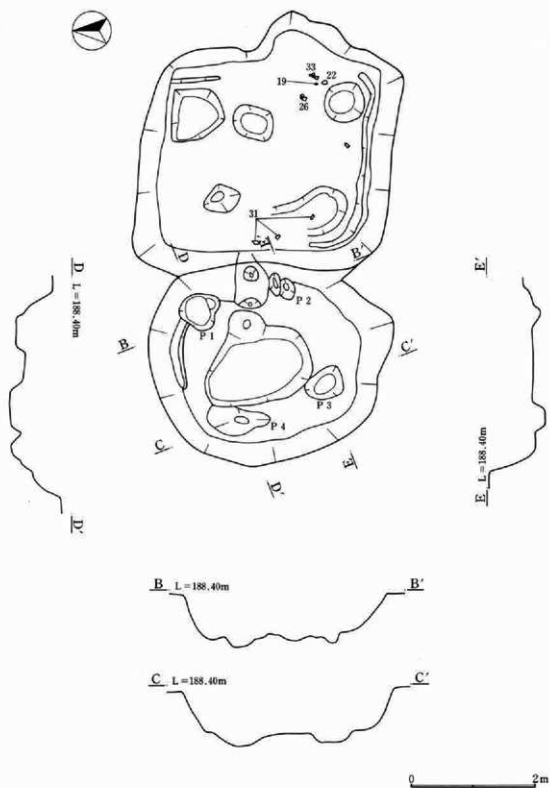


52号住居



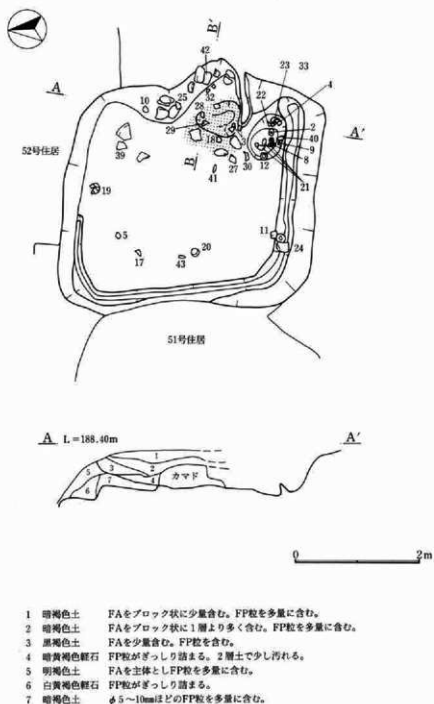
- 1 暗褐色土  $\phi$  5mmほどまでの大きさを中心としたFP粒を多く含む。土質は粗い。
- 2 暗褐色土 1層土にFAを少量含む。
- 3 明褐色土 FA主体で少量1層土を混入する。
- 4 明褐色土 FA。
- 5 暗褐色土 FAに $\phi$  2~3mmのFP粒を含む。
- 6 暗黄褐色土 土質は粗く $\phi$  5mmほどまでの大きさを中心としたFP粒を1層より多量に含む。炭化物を少量含む。
- 7 暗黄褐色土 6層に類似するが色調はやや暗い。FAを少量混入する。
- 8 黒褐色土 土質は粗くFP粒を含む。攪乱層。
- 9 暗黄褐色土 6層に類似するが炭化物を含まない。
- 10 暗黄褐色土 9層に $\phi$  2~5cmほどのFP粒を多量に含む。炭化物を稀れに含む。
- 11 暗黄褐色土 9層に $\phi$  2~5cmほどのFP粒を少量含む。
- 12 明褐色土 1層土にFAをブロック状に多く含む。
- 13 黒褐色土 9層に類似するが黒褐色土を多量に含む。
- 14 黒褐色土 13層より黒褐色土を多く含む。
- 15 明褐色土 FA主体で、 $\phi$  5~20mmのFP粒を含む。視土を含む。
- 16 暗黄褐色土  $\phi$  5~20mmほどのFP粒がざっしり詰まる。暗褐色土(土質が粗い)で汚れている。
- 17 黄褐色土  $\phi$  5mmほどまでのFP粒がざっしり詰まる。
- 18 明褐色土 17層土にFAが多量に混入する。
- 19 黄褐色土  $\phi$  5mmほどまでを中心としたFP粒を含む。
- 20 黒褐色土 黒く汚れた $\phi$  2~3mmほどの大きさを中心としたFP粒がざっしり詰まる。
- 21 明褐色土 FAと明褐色土の混入層。 $\phi$  5mm前後、1~3cmほどのFP粒を含む。
- 22 暗褐色土 土質がやや粗い暗褐色土とFA粒の混入層。炭化物を少量含む。 $\phi$  5~10mmのFP粒を含む。
- 23 淡褐色土 FA主体で、暗褐色土を少量含む。

第249図 50・51号住居

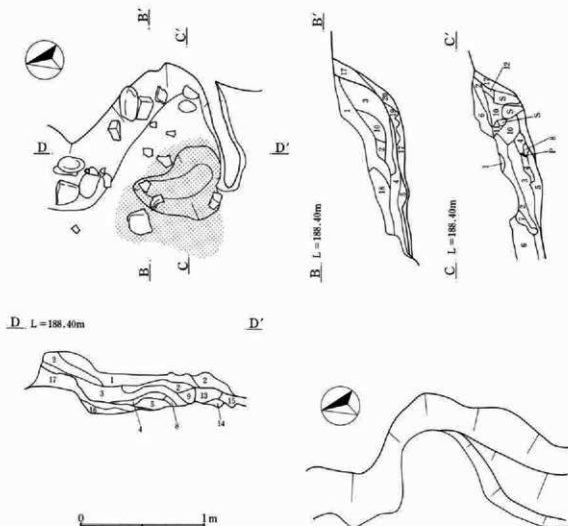


第250図 50・51号住居掘り方

## 50号住居

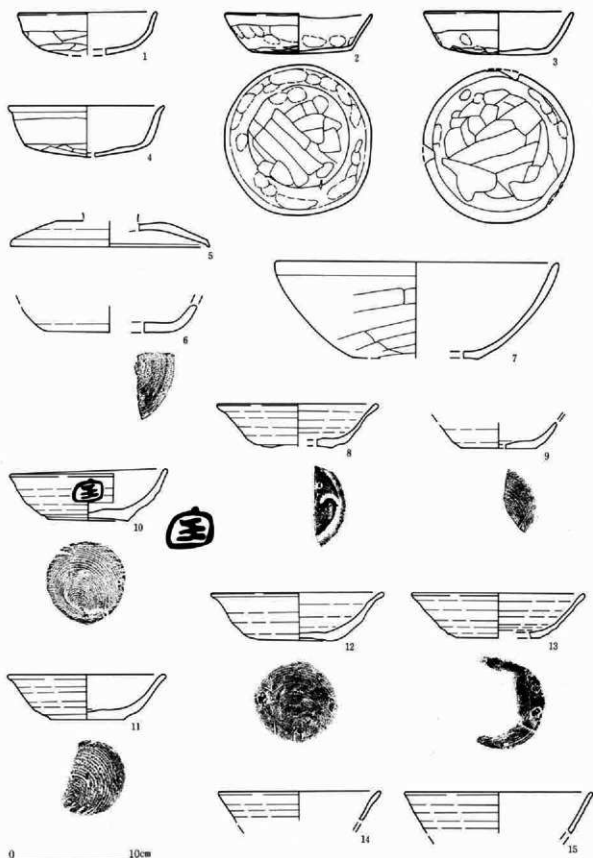


第251図 50号住居

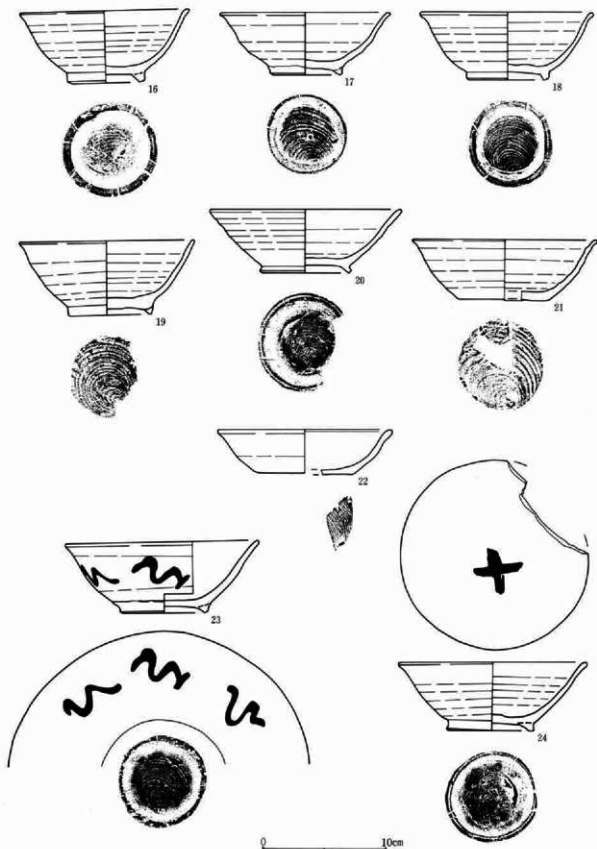


- 1 灰褐色土 FAに $\phi$ 1~5mmほどのFP粒をごく少量含む。締まりがよい。
- 2 灰褐色土 1層に類似するが $\phi$ 5mmほどのFP粒が多く入りボソボソしている。
- 3 灰褐色土 1層に類似する。2層ほどではないがFP粒が1層より多い。焼土粒、カーボンをごく少量含む。
- 4 灰褐色土 1~3層より赤味を帯びる。焼土を他層より多く含むが量はさほど多くない。カーボンを少量含む。
- 5 黒褐色土 3層に類似するがカーボンを多量に含む。
- 6 黒褐色土  $\phi$ 3~5mm大のFP粒を多量に含む。2層と同様ボソボソしている。
- 7 灰褐色土 3層に類似するが焼土粒、カーボンを含まない。
- 8 灰褐色土 1~4、7、9層より色調が明るい。土質は細かくFP粒を含まない。
- 9 灰褐色土 2層よりFP粒が多くボソボソしている。焼土、カーボンを含まない。炭化物をごく稀れに含む。
- 10 灰褐色土 3層に類似するが焼土粒、カーボンを含まない。色調がより暗い。
- 11 灰褐色土 3層に類似するが色調が明るく焼土粒、カーボンを含まない。
- 12 灰褐色土 1層に類似するが締まりはよくない。
- 13 暗褐色土 FP粒を多量に含む。FAを若干含む。
- 14 淡褐色土 FA、暗褐色土を含む。
- 15 暗褐色土 FAブロックを含む。また、炭化物を少量含む。
- 16 淡褐色土 FA主体。
- 17 淡褐色土 FA主体。FP粒(2mm大)を若干含む。やや粘性を有する。
- 18 暗褐色土 FP細粒を多量に含む。FAを僅かに含む。
- 19 橙褐色土 カーボン、焼土を多量に含む。
- 20 淡褐色土 17層に類似するがやや黄色味が強い。

第252図 50号住居断

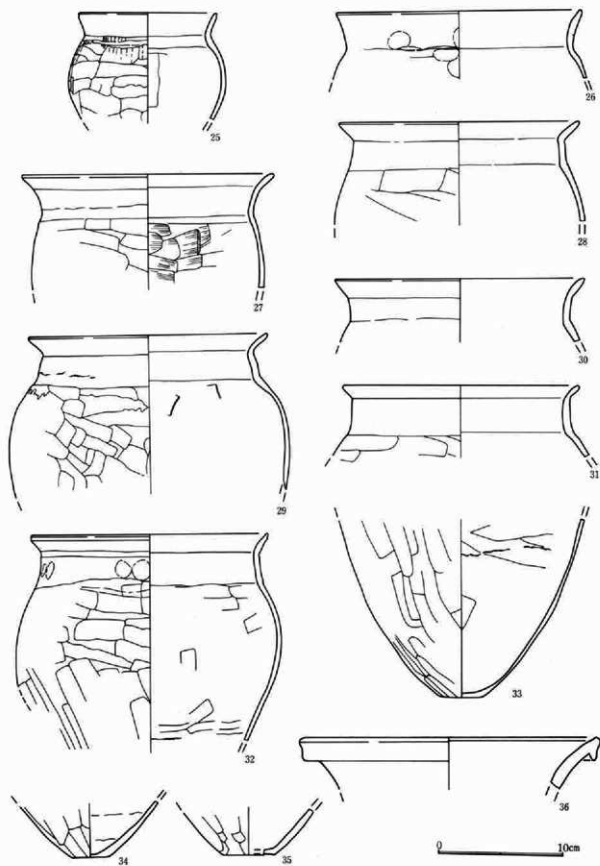


第253图 50号住居出土遺物(1)

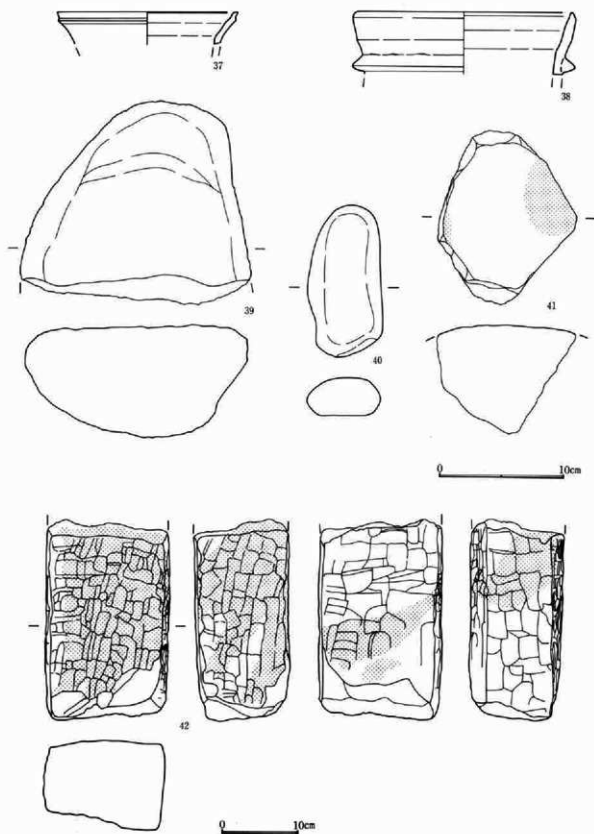


第254図 50号住居出土遺物(2)

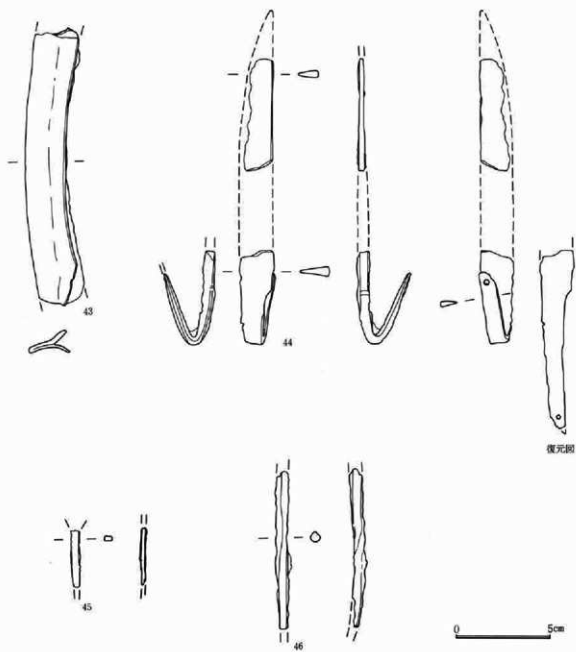




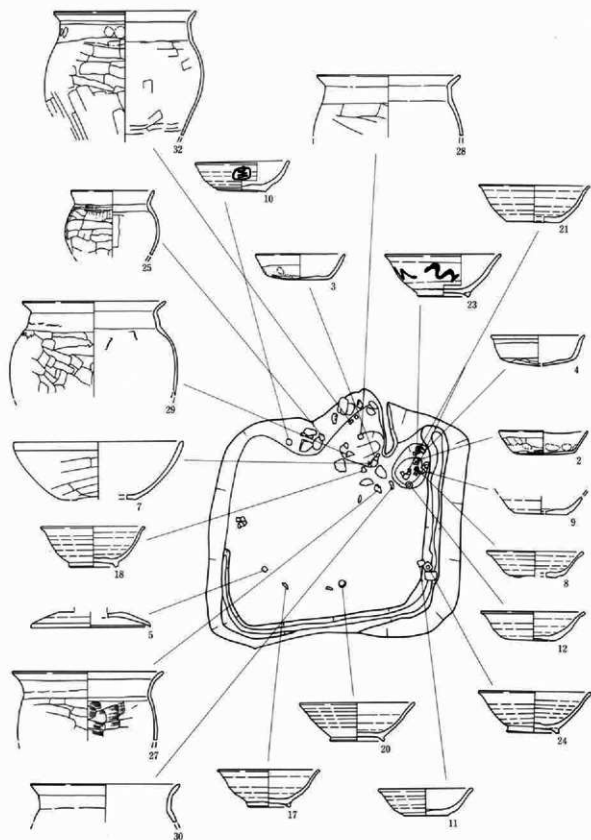
第255图 50号住居出土遺物(3)



第256図 50号住居出土遺物(4)

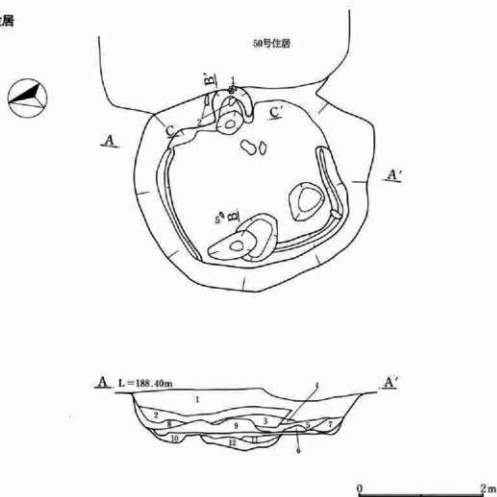


第257図 50号住居出土遺物(5)



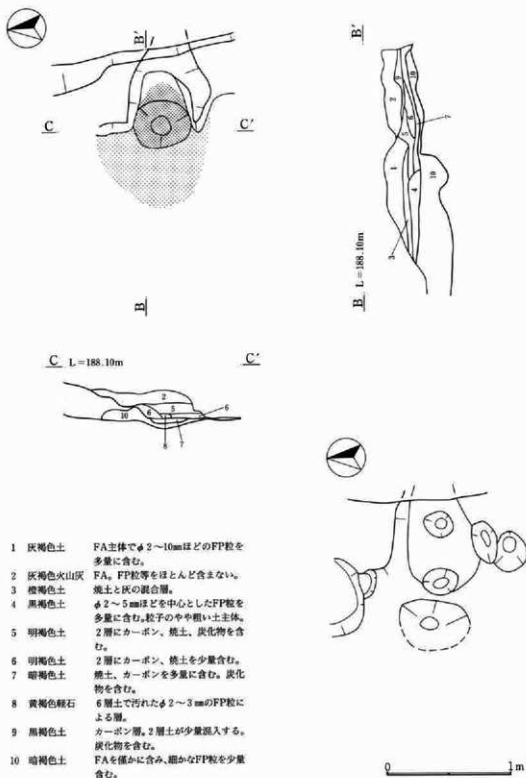
第258図 50号住居遺物出土位置

51号住居

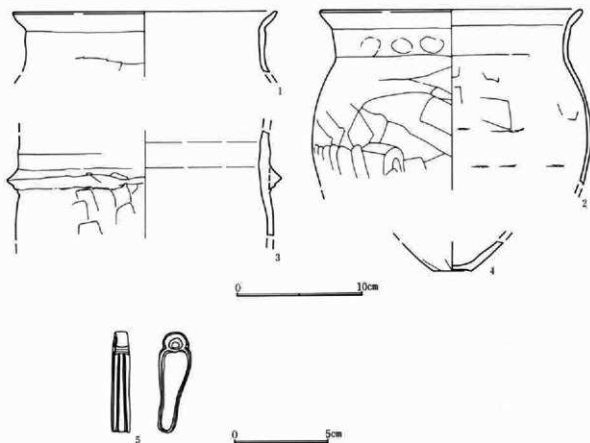


- |         |                                    |
|---------|------------------------------------|
| 1 暗褐色土  | FP粒を多量に含む。                         |
| 2 褐色土   | FAの小ブロックを含み、FP粒はやや粒が大きい。           |
| 3 明褐色土  | FA主体。締まりはない。                       |
| 4 黒褐色土  | FAの粒子、黒色土を含む。もろく崩れやすい。             |
| 5 黒色土   | 微細なFP粒を多量に含む。もろい。下部に炭化物がみられる。      |
| 6 黄褐色土  | FP粒主体。                             |
| 7 黒褐色土  | 5層に類似する。                           |
| 8 黄褐色軽石 | FPの二次堆積層。                          |
| 9 褐色土   | 粘性を帯びた礫構築土の流入。                     |
| 10 淡褐色土 | FA。明褐色土を少量含む。                      |
| 11 暗褐色土 | 土質が細かくやや粘性を帯びる。φ2～5mmほどのFP粒を多量に含む。 |
| 12 暗褐色土 | 10層に11層をブロック状に含む。φ5mm前後のFP粒を少量含む。  |

第259図 51号住居



第260図 51号住居竈



第261図 51号住居出土遺物

## 51号住居

**位置** FB-59・60、FC-59・60 **平面形状** 丸みを帯びた隅丸方形。特に北辺に丸みが強い。

**残存深度** 壁の高さは床面まで60~67cmで、周溝底面まで67~70cmを測る。

**重複住居** 50号住居と重複関係にある。両住居の間に土坑状の掘り込みがあり、土層からは重複関係は明確に捉えられない箇所が多かった。住居の年代を考えれば、50号住居の埋没土を掘り込んで作られているといえる。

**規模** 東辺は2.60m、西辺は2.80m、南辺は2.30m、北辺は1.90mを測る。

**主軸方位** N-93°-E

**埋没土** 褐色系の色調を呈する土壌と同質層が主体であるが色調はやや暗い。西壁際では黒く汚れた Hr-FP 流入層が周溝を埋めている。その上位層も Hr-FP を多量に含む層であるが Hr-FA を多量に含有する層が間層として位置する。床面を被う土層は黒汚した Hr-FP 粒の層が部分的に見え、Hr-FA 主体で Hr-FP を含む土層が全体的に被っている。

**壁の状況** 床面から、東壁は117°、西壁は125°、南壁、北壁は135°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は113°を測る。壁体を構築する材及び痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は5.499㎡を測る。Hr-FA と明褐色土及び暗褐色土混合層により床面を形成している。

**周溝** 住居北辺と北西コーナー中心に西辺中位、南辺中位までみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱 穴** 床面では確認できなかった。掘り方でいくつかのピットが検出され、住居主軸とはややずれるが4基各々対になる位置に検出された。東西間隔は、北が1.9m、南が1.65m、南北間隔は、東が1.5m、西が1.5mを測る。深さは、掘り方より1、3、4号ピットが14～19.8cm、2号ピットが8.8cm、床面からは推定復元で、1、3、4号ピットが17.5～23.1cm、2号ピットが12.0cmを測る。柱穴としてはやや浅い感がある。

**掘り方** Hr-FA層上面まで掘削している。住居中央が大きく掘り込まれているが黒色土層までは達していない。他に前述のピットが検出されている。

**竈位置** 東辺中央

**竈方位** N-91°-E

**竈規模** 全長は、1.20m（屋外長0.40m、屋内長0.80m）、袖部幅0.90m、燃焼部幅0.40mを測る。

**竈形状その他** 煙道外端部は明確に捉えられなかった。50号住居に掘り込まれていると考えられる。竈右側は本来壁になるはずのHr-FP層が失われて粘性土のみ残っているため浮き上がったようになっている。

**遺 物** 竈内及び周辺から1、2の土師器類の出土があった。口縁部の形状は「コ」字状を呈している。斐底部と羽釜が埋没土から出土している。金属器では、刀装具の単脚足金物が床から21.5cm離れて認められた。銅製品で吊手の環状金具と貴金具状金具は一体の鋳造で盤によって環状に挟り込みがなされる。佩表～佩裏に2状の条線が掘り込まれている。

**所 見** 出土した土器の特徴から、本住居は9世紀後半でも末葉に近い年代が与えられる。足金物は7世紀後半以降の方頭大刀につく可能性が考えられる。

## 52号住居

**位 置** FB-58、FC-58・59、FD-58 **平面形状** 隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで80～87cmで、周溝底面まで90～98cmを測る。

**重複住居** 50号住居と重複関係にあり、52号住居の埋没土の一部は50号住居に掘り込まれている。

**規 横** 東辺は4.00m、西辺は3.85m、南辺は4.05m、北辺は3.95mを測る。

**主軸方位** N-91°-E

**埋没土** 褐色系色調を呈する土壌が主体である。上位は浅間B軽石を含む黒色土が位置する。壁際はHr-FP粒主体層がみられ、周溝の埋没土となっている。西辺周溝ではHr-FP二次堆積層上に薄いHr-FA二次堆積層が位置している。東壁際中位にHr-FA二次堆積層が塊状にみられた。

**壁の状況** 床面から、東壁は116°、西壁は90°、南壁は95°、北壁は100°の角度で立ち上がる。変換点からは西壁は137°、北壁は106°を測る。のちに土坑状に浅く掘り込まれているためもあるが北壁においてHr-FP層部分の崩落が激しい。

**床 面** 面積は10.611㎡を測る。床面を形成している土層は、Hr-FA主体でHr-FP粒を僅かに含む層である。

**周 溝** 竈部分を除く全体にみられる。

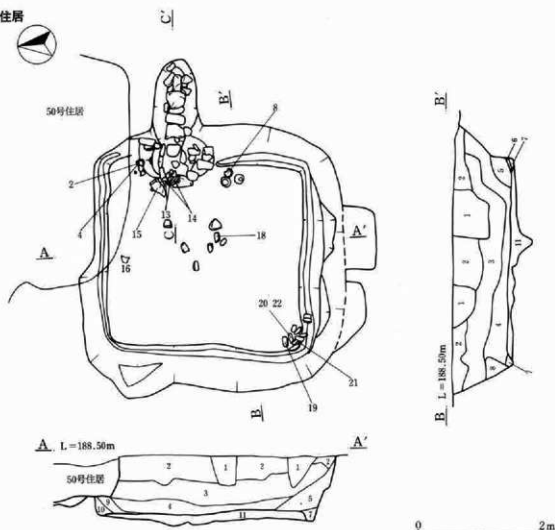
**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱 穴** 検出されなかった。

**掘り方** 住居北側はHr-FA層中で掘削が留まっているが南側では黒色土上面まで掘り込みが及んでいる。西部分にいくつかの掘り込みがあり、周溝の残存がみられる。



52号住居



- |          |                                   |
|----------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土   | 攪乱。やや黒くボソボソしている。FP粒を少量含む。         |
| 2 黒色土    | FP粒を少量含む。As-Bを少量含む。ボソボソしている。(II期) |
| 3 暗褐色土   | FP粒を多量に含む。                        |
| 4 暗褐色土   | 3層よりもFP粒を多量に含む。                   |
| 5 暗黄色土   | 3、4層よりFP粒を多量に含む。ほぼFP粒主体といえる。      |
| 6 暗灰白色土  | FAを主体とし、周囲に貼り付けている。               |
| 7 淡黄色土   | FP粒主体。                            |
| 8 によい褐色土 | FAの二次堆積層。                         |
| 9 明褐色土   | FAを主体とし、FP粒を多量に含む。                |
| 10 白黄褐色土 | FP粒主体。                            |
| 11 淡赤褐色土 | FA主体。FP細粒を備かに含む。                  |

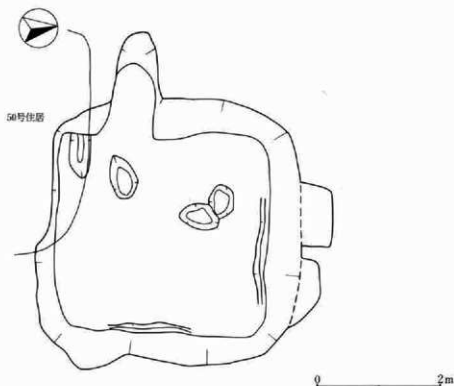
第262図 52号住居

竪穴位置 西辺中央や北寄り

竪穴方位 N-93°-E

竪穴規模 全長は、2.05m、袖部幅0.95m、燃焼部幅0.70mを測る。

竪穴形状その他 検出時には煙道天井石は暗褐色土及び粘性土に被われていた。焚き口付近には土師器臺が3

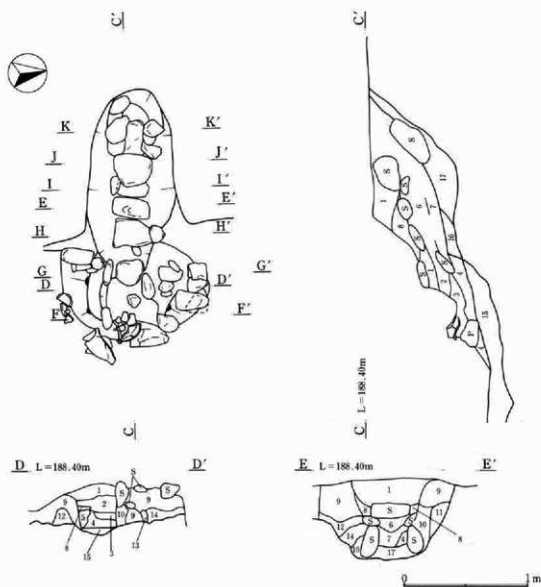


第263図 52号住居掘り方

個体みられ、焚き口に横架及び竈にかけられていたと思われる。右袖外面に複数の石がみられたが本来的なものか明確ではない。左右袖には河原石を立位に据え、燃焼部中央には棒状の石による支脚が認められる。煙道には左右の壁に石を用いている。住居から煙道中程までは偏平な河原石を平の面を内側へ向けて据え付け、その上に河原石を平積みして天井石を乗せている。中程から外端部までは底面に1石斜位にねかせており、壁石も小ぶりの石を小口積みのような状態でランダムに並べている。住居内側からみて煙道壁石の始まりは住居の壁の位置である。同部分では煙道壁石の左右各々に3段の石を平積みしている状態が看取された。天井石は5石残存していた。

**遺物** 竈焚き口周辺から土師器壺が3個体認められた。左外側器には土師器杯2個体の出土があった。土師器壺は長胴のものがあり、口縁部の屈曲は弱く胴部の膨らみはない。2の土師器杯は模倣杯の系統が残る。4はヘラ削りが口縁部に及んでおり、埋没土出土の土師器杯も同様の特徴を持つ。1個体のみ住居構築以前の時期のヘラ磨きを有する杯が流入していた。他に須恵器杯、壺、鉄器がみられる。23は丸く屈曲して再び広がる形態である。北東コーナーでは棒状の使用痕跡のある河原石が集中して床面及び床面近くから出土した。図化できなかったが、埋没土中から弥生時代の樽式土器の小破片の出土がみられた。

**所見** 竈焚き口付近の3個体の壺の出土状態は口縁部を欠損する14が横位になっており、13が口縁部を上に向けて斜位になっていた。15は底部が13の下位に横位の状態でみられ、胴部から口縁部までの1/2ほどは左袖外側に横位に出土した。この状態から、14と15が連結されて焚き口に横架されていたと思われ、13は竈に架けられていた可能性が考えられる。本住居の年代は、出土した土器の特徴から、7世紀後半といえよう。



- |           |                                   |
|-----------|-----------------------------------|
| 1 暗褐色土    | FP粒、FAを少量含む、FAをブロック状にも含む。         |
| 2 暗褐色土    | FP粒、FAを少量含む。                      |
| 3 暗黄褐色土   | FP粒を僅かに含む、FA、黄褐色土粒を多量に含む。(甕の天井か?) |
| 4 赤褐色土    | 焼土主体。カーボンを少量含む。やや粘性を帯びる。          |
| 5 黒灰色土    | FP粒、黄褐色土粒を僅かに含む。                  |
| 6 明褐色土    | バラついた感触でFA、FP粒を含む。                |
| 7 明褐色土    | 6層に比べFP粒はやや少量となり、FAの混入が多くなる。      |
| 8 明褐色土    | やや粘性を有し、FP細粒を少量含む。                |
| 9 褐色土     | やや粘性を有し、FP細粒を少量含む。                |
| 10 褐色土    | 粘性を有し、炭化物、焼土を若干含む。                |
| 11 灰褐色土   | 粘土質。硬く締まる。                        |
| 12 褐灰色土   | FAを含み、やや粘質。                       |
| 13 淡褐色土   | FAブロック。                           |
| 14 明褐色土   | 褐色土とFAとの混土。土質は細かい。                |
| 15 褐灰色火山灰 | FA主体。焼土を少量含む。                     |
| 16 明褐色土   | FA主体。                             |
| 17 褐灰色土   | FAの砂質ユニットが主体。                     |

第264図 52号住居竈

**F** L=188.00m

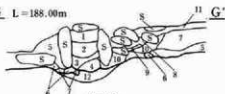


**F'**

F-F'

- 1 淡褐色土 FAを多量に含みFPも少量散見する。締まりはよい。

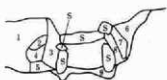
**G** L=188.00m



G-G'

- 1 暗褐色土 FP粒、FAを少量含み、FAをブロック状にも含む。  
 2 暗褐色土 FP粒、FAを少量含む。  
 3 褐色土 粘性を帯びてφ2~5mmのFP粒を含む。上位はやや焼土化している。カーボンを含む。  
 4 灰褐色土 6層土に7層土が混入する。  
 5 褐色土 FAを混入し、φ2~3mmのFP粒を少量含む。  
 6 灰褐色火山灰 FA。  
 7 暗褐色土 白灰色FA、φ2~5mmのFP粒を含む。  
 8 淡灰褐色土 6層土に11層土が混入する。  
 9 白灰色土 粒子の細かい砂質のFA。  
 10 褐色土 φ5mmまでのFP粒をざっしり含む。8層土で汚れている。  
 11 褐色土 5層土に類似するがφ5mmほどのFP粒を多量に含み、締まりがない。  
 12 褐色火山灰 FA主体。焼土を少量含む。

**H** L=188.40m



**H'**

H-H'

- 1 褐色土 FAを混入する。締まりはよい。  
 2 褐色土 FP粒の混入はなくなる。  
 3 褐色土 1、2層よりやや褐色味が強い。  
 4 淡褐色土 FA主体。  
 5 黄褐色土 FA主体。  
 6 褐色土 1層に類似するがFP粒の混入が多い。  
 7 明褐色土 FA、FP粒を含む。  
 8 明褐色土 FA主体で、FP粒を少量含む。  
 9 明褐色土 FA主体。

**I** L=188.40m



**I'**

I-I'

- 1 褐色土 FAを多量に含むため、やや粘質を有す。  
 2 褐色土 FA、FP粒(5mm大)を少量含む。  
 3 褐色土 FAの砂質ユニットが主体。  
 4 褐色土 2層に類似するがFP細粒を含む。

**J** L=188.40m



**J'**

J-J'

- 1 褐色土 FAを多量に含むため、やや粘質を有す。  
 2 褐色土 FA、FP粒(5mm大)を少量含む。  
 3 褐色土 2層に類似するがFP細粒を含む。  
 4 褐色土 FAの砂質ユニットが主体。

**K** L=188.40m



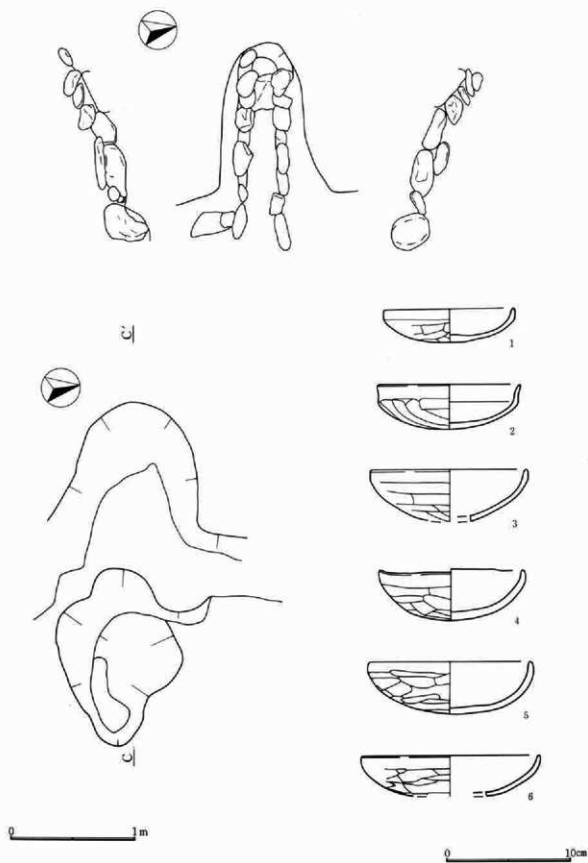
**K'**

K-K'

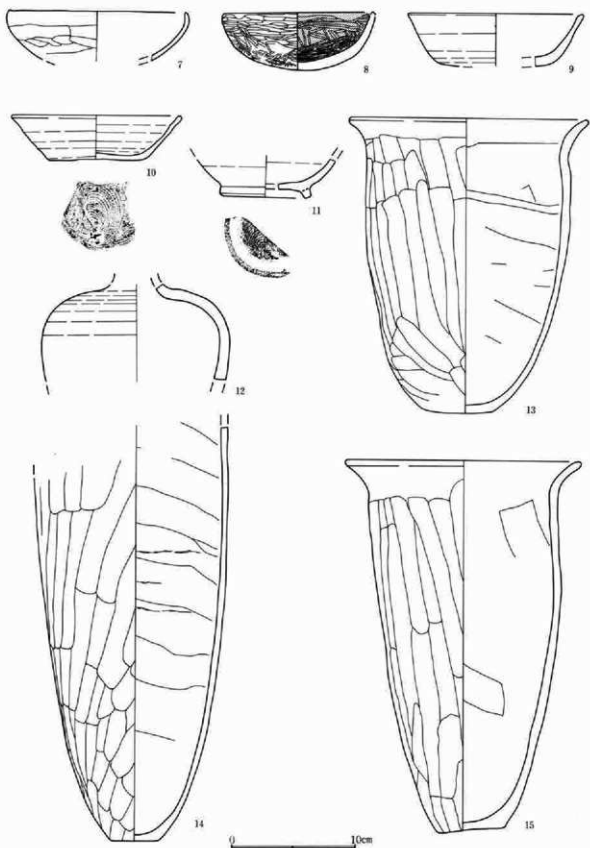
- 1 黒褐色土 土質はやや粗くFP粒を多量に含む。  
 2 明褐色土 1層に類似するがFAが多量に混入する。  
 3 褐色土 1層に類似するがFAが少量混入する。  
 4 淡黄褐色土 FP粒の層。

0 1m

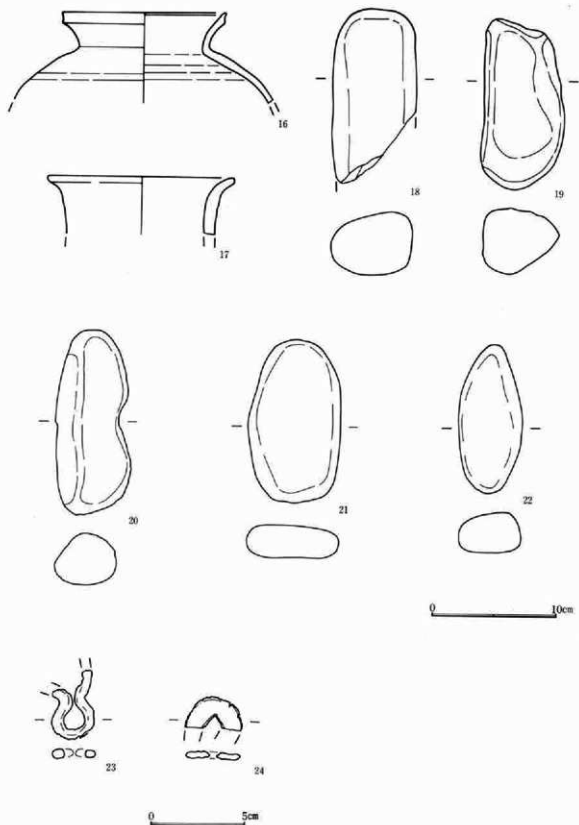
第265図 52号住居竈



第266図 52号住居壑石組・掘り方及び出土遺物(1)



第267図 52号住居出土遺物(2)



第268図 52号住居出土遺物(3)

### 53号住居

位置 FF-56・57、FG-56・57 平面形状 隅丸方形

残存深度 壁の高さは床面まで80～86cmで、周溝底面まで91～95cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は4.00m、西辺は4.10m、南辺は4.30m、北辺は4.20mを測る。

主軸方位 N-112°-W

埋没土 褐色系色調を呈す土壌が主体である。壁際ではHr-FP二次堆積層が認められ、周溝を埋没させている。上位には土質の細かい黒褐色土がある。住居南側では埋没土が中断されて異なる土層が認められる。

壁の状況 床面から、東壁、西壁は90°、南壁は114°、北壁は97°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は123°、西壁は105°、南壁は135°、北壁は149°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められない。

床面 面積は10.005m<sup>2</sup>を測る。Hr-FA主体でHr-FP粒や黒色土を含んだ層によって床面を形成している。

周溝 竈部分と竈左側を除く全体にみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

掘り方 中央から南部分でいくつかの掘り込みがみられる。Hr-FA層中で掘削が留まっている。南側で長方形の落ち込みがみられるが前述の土層断面との関連が注目される。細かな凹凸があり、周溝が残存し浅い落ち込みがみられる他は大きい掘り込みはない。

竈位置 西辺中央やや南寄り

竈方位 N-106°-W

竈規模 全長は、2.10m（屋外長1.30m、屋内長0.80m）、袖部幅1.00m、燃焼部幅0.30mを測る。

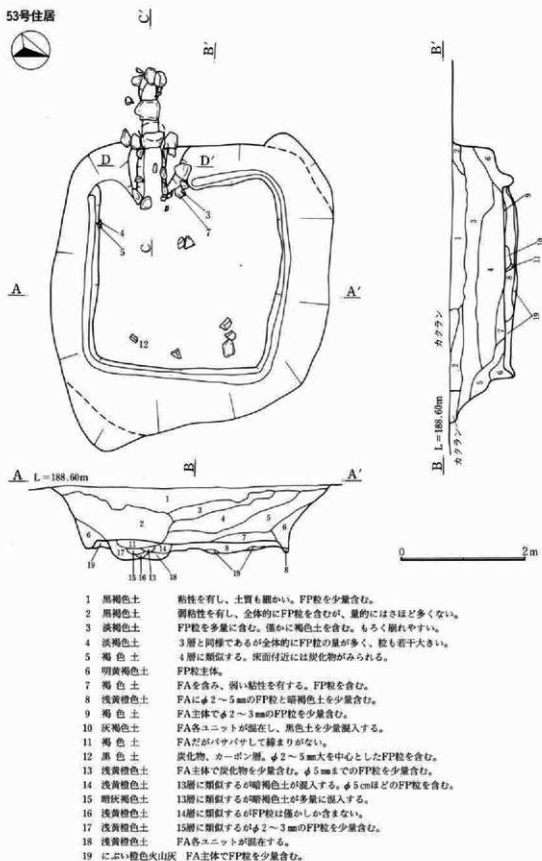
竈形状その他 両袖に河原石を立位に据えている。やや離れてもう1対認められる。煙道では両壁に平の面が内側に向くように用い、その上に石を1段ほど積んでいる。外端部には斜位に石を据えている。天井石は3石残存していた。住居の壁部分が壁石の連なりの始まり部分である。同所の右壁石と掘り方との間には石を3段に積んでいることが看取される。同所左壁でも2～3段の石積みが認められる。右袖と住居壁が接する箇所には偏平な河原石が立位の状態で検出された。

遺物 竈石袖外側から7の中に3が伏せた状態で出土した。12は床面から若干の間隔をおいている。南壁際では4と5が床面から間隔をおいて認められた。床面では北側で河原石の出土があった。3の土師器杯はヘラ削りが口縁部横ナデまで僅かに達していない。内面に「十」の焼成後の刻書がある。7の杯は口縁端部が僅かに内傾しヘラ削りは口縁部まで施され削り出しの稜を持つ。11は掘り方出土の破片がある。埋没土中の杯も無調整帯があり、模倣杯の系統も見受けられる。須恵器長頸壺の出土も埋没土中である。また、「×」の条線を持つ磁石が出土した。鉄器では刀子を含めて「J」字状に屈曲した状態で出土したものが2例認められ、16も欠損端部の状態から同様の可能性がある。他に鑿の出土をみている。

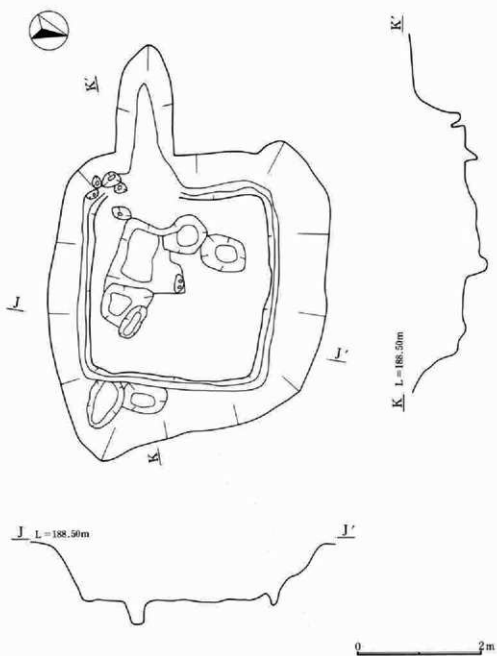
所見 掘り方で認められた長方形の落ち込みは埋没土を掘り込んだ土層断面と若干ずれはあるものの密接な関係があると思われる。長方形の落ち込みは住居埋没後に掘り込まれた可能性が高い。本住居は出土した土器の様相から、7世紀後半～8世紀には構築されていたと考えられる。



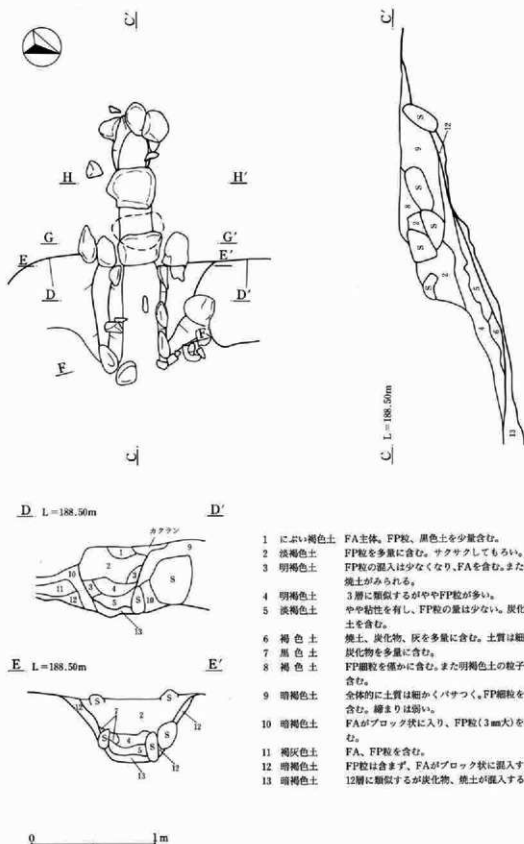
53号住居



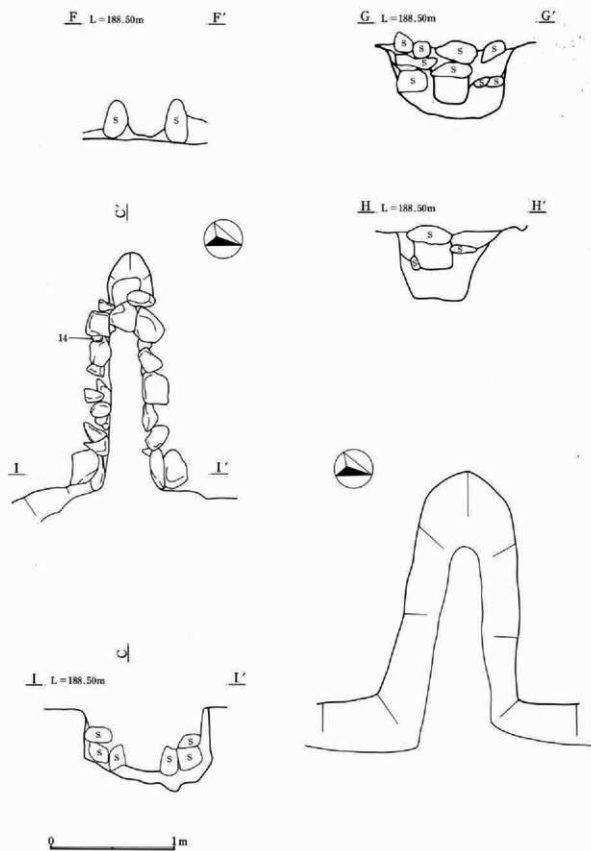
第269図 53号住居



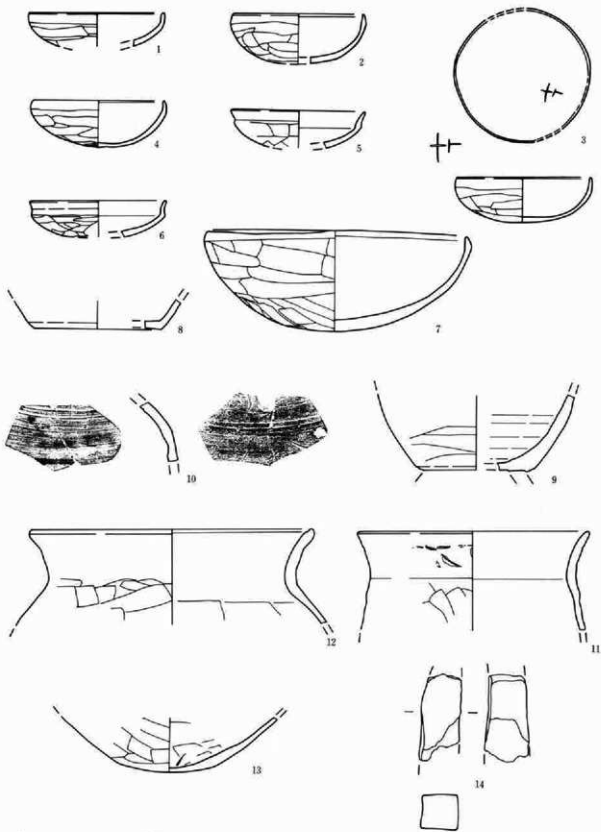
第270図 53号住居掘り方



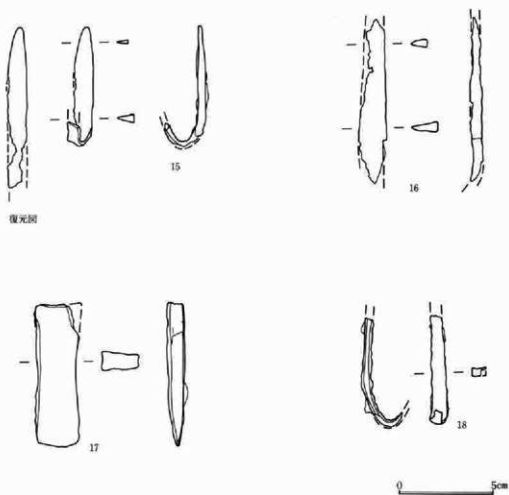
第271図 53号住居電



第272図 53号住居竈

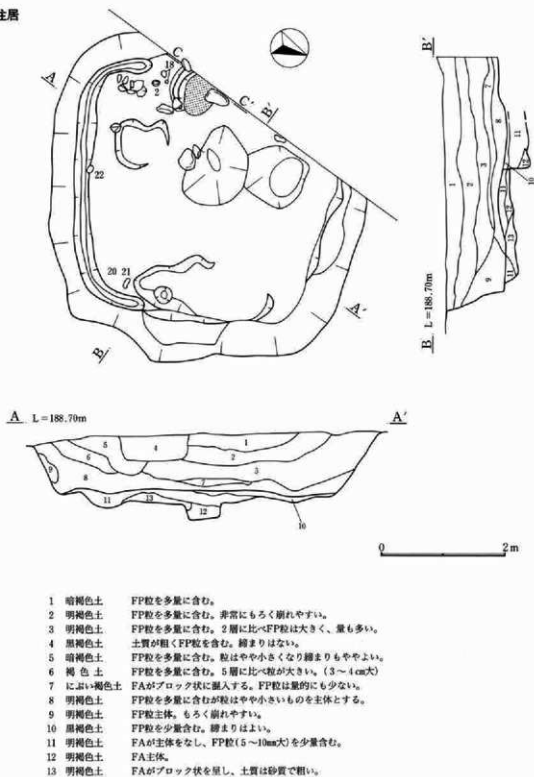


第273图 53号住居出土遺物(1)

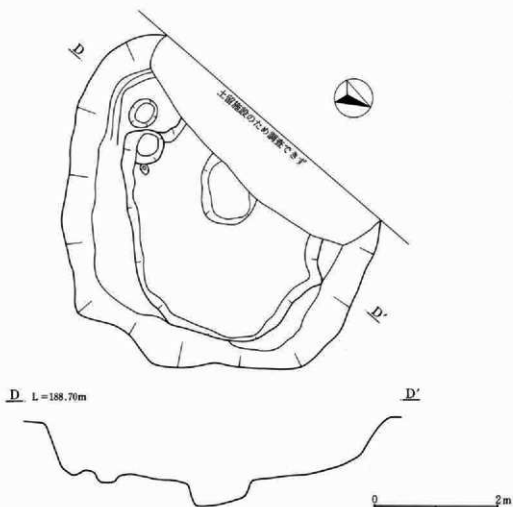
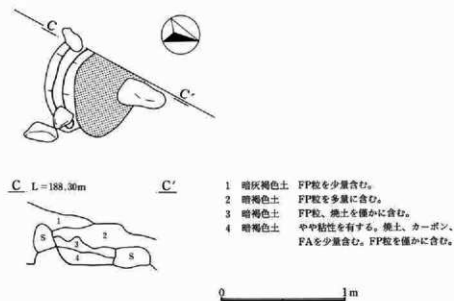


第274図 53号住居出土遺物（2）

## 54号住居

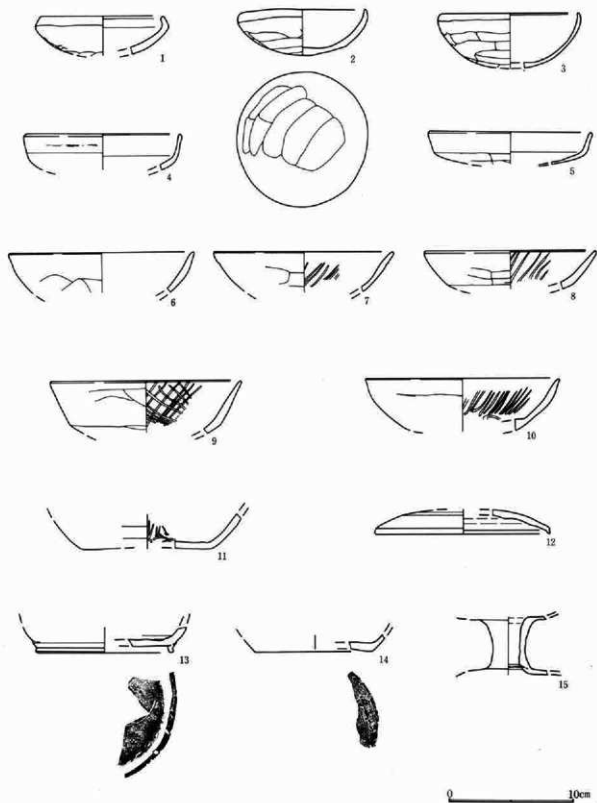


第275図 54号住居

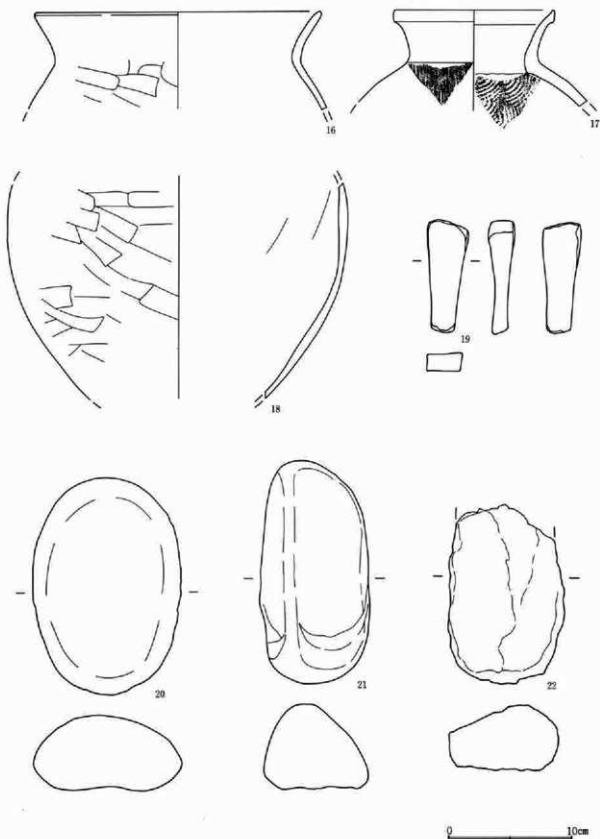


第276図 54号住居掘り方及び電





第277图 54号住居出土遺物(1)



第278図 54号住居出土遺物(2)

## 54号住居

**位置** FG-58・59、FH-57・58・59、FI-58 **平面形状** 東辺がやや短小な隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで北部分で86~91cm、南部分で63~72.5cm、周溝底面まで77~79cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は4.20m、西辺は残存部分で1.50m、推定で4.55m、南辺は4.40m、北辺は残存部分で3.00m、推定で5.10mを測る。

**主軸方位** N-76°-E

**埋没土** 褐色系色調を呈する土壌が主体である。上位はやや色調が沈む。Hr-FPの流入は東壁から南壁にかけて認められ、東壁に著しい。

**壁の状況** 床面から、東壁は100°、南壁は115°、北壁は125°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は115°、南壁は140°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められない。北壁と東壁の一部において Hr-FA 層上面が平坦あるいは斜面を有している。特に東壁においては局部的に平坦面があり、外形ラインも平坦面部分で張り出している。

**床面** 面積は13.023m<sup>2</sup>を測る。床面を形成しているのは Hr-FA 主体層及び Hr-FA をブロック状に含む明褐色土である。床面にはいくつかの大きな掘り込みがみられる。

**周溝** 南西コーナーから南辺を経て南東コーナーにかけてみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

**掘り方** 住居中央を1段低く掘り込み、外縁は高く掘り残している。その掘削は中央部は Hr-FA 下黒色土まで、外縁部は Hr-FA 層中まで達している。

**電位置** 西辺中央やや南寄り

**電方位** N-90°-W

**電規模** 全長は、推定0.60mを測る。

**電形状その他** 左側では粘性を帯びた土が袖状に伸び、小ぶりの河原石がみられる。右側でも調査区壁際に河原石が認められた。焼土も僅かに分布している。全体としてやや内側すぎる感があり、竈本体は調査区外の可能性も考えられる。

**遺物** 床面近くでは2の土師器杯がみられる。口縁部は横ナデで無調整帯がある。底部は不定方向のヘラ削りである。また隣接して18の土師器甕胴部が認められた。20と21、22が床面から出土した使用痕跡のある石である。南西コーナーでは Hr-FP 主体層とともに複数の河原石が流入していた。土器では埋没土中からの出土として土師器杯、甕、須恵器蓋、杯、碗、甕、長頸壺があり、石製品では砥石がみられた。杯では口縁部が短く内傾するものや内面に放射状、斜格子及び螺旋状の暗文を施すもの、襖椀の系統をひくものがある。

**所見** 出土した土器の様相から、本住居は7世紀中葉~後半には構築されていたと考えられる。

## 55号住居

**位置** FJ-57・58、FK-56・57・58 **平面形状** 南辺が短小な隅丸方形

**残存深度** 壁の高さは床面まで北東~南西部分で61.5~76cm、その他の部分で87~106.5cm、周溝底面まで北

### 第3章 検出された遺構と遺物

東～南東部分で63.5～80.5cm、その他の部分で98～114.5cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。

**規模** 東辺は5.20m、西辺は5.40m、南辺は4.70m、北辺は5.40mを測る。

**主軸方位** N-101°-E

**埋没土** 土質は褐色系色調を呈する土壌と同様であるが色調が沈む。南壁では Hr-FP 層の流入があるが北壁から西壁にかけてはやや色調が沈む暗褐色土がみられる。

**壁の状況** 床面から、東壁～南壁は106～107°、西壁は113°、北壁は110°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は158°、西壁から北壁は128～129°、南壁は144°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床面** 面積は18.531㎡を測る。Hr-FA 主体層や焼土を多量に含む明赤褐色土層によって床面が形成されている。

**周溝** 竈部分と南西コーナーを除く各辺でみられる。北辺では中央部分がやや浅くなっている。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 床面では確認されなかった。掘り方において複数のピットが検出され、そのうち中央の土坑状の落ち込みの端にかかっていたと思われる1基を含めて各々対になる4基が認められた。東西間隔は1.7m、南北間隔は、東が3.6m、西が3.15mを測る。深さは、掘り方より1号ピットが17cm、2、4号ピットが48～54cm、3号ピットが66cm、床面からは推定復元で1号ピットが25cm、2、3号ピットが68～70cm、4号ピットが62cmを測る。

**掘り方** Hr-FA 層下位まで掘り込んでおり、北西コーナー付近のピット集中箇所では黒色土が露出している。中央に2.20×1.80m、深さ32～47cmほどの大きな掘り込みがあり、その一部は電方向に伸びている。この大きな掘り込みは Hr-FP と少量の焼土を含んだ明褐色土によって埋められている。

**電位置** 東辺中央

**電方位** N-104°-E

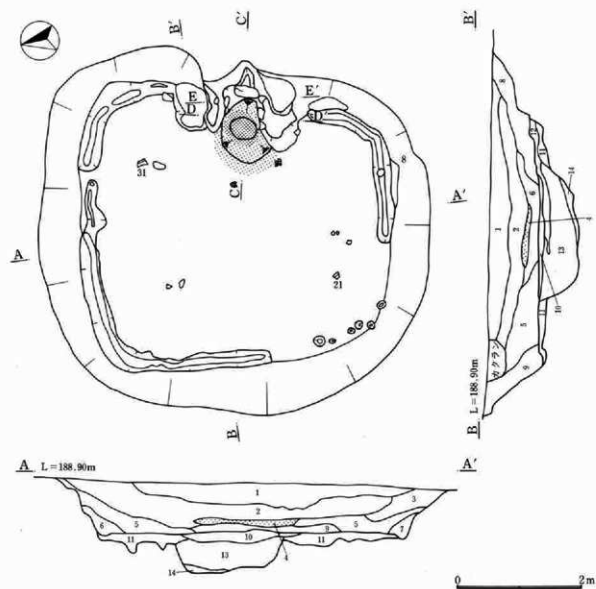
**電規模** 全長は、1.50m（屋外長0.50m、屋内長1.00m）、袖部幅推定1.00m、燃焼部幅推定0.50mを測る。

**電形状その他** 煙道が住居外へほとんど伸びない形状である。掘り方においても煙道は住居外へ伸びていない。右壁では3石の河原石を立位に据え、左側では1石認められた。外端部には斜位に石を据えていた。

**遺物** 竈からは土師器壺小破片が出土している。床面や床面から間隔において土師器壺や須恵器壺の小破片が出土しているが接合、実測には至らなかった。21の須恵器杯は床から5cmの間隔において出土をみたもので、底部は回転ヘラ削りである。口縁部下位も1段ヘラ削りしている。土師器杯は口縁部に上位までヘラ削りが及ばずに無調整帯が認められるものがみられ、内面に放射状及び斜格子、螺旋状暗文を有するものがある。12には底部外面に焼成後と思われる「×」の刻書があり、一方の線は引き直しをしていると思われる。須恵器杯の底部は回転ヘラ削りや回転糸切り後ヘラ削りを施す例が認められる。土師器壺は口縁部が「く」字状を呈している。他に須恵器椀、甕、短頸壺(?)、鉢も埋没土から出土している。石製品では紡錘車がみられる。鉄製品では釘類や不明品があり、49が鍔の頸部～茎と思われる。強く屈曲した状態で出土している。竈からは複数の焼骨片の出土をみた。2の土師器杯、13の須恵器蓋、39の土師器壺、40の須恵器壺、27の須恵器椀は掘り方からの出土である。18の須恵器杯は3号ピットからの出土である。掘り方で、中央の土坑状落ち込みからは鉄滓が1個体出土した。

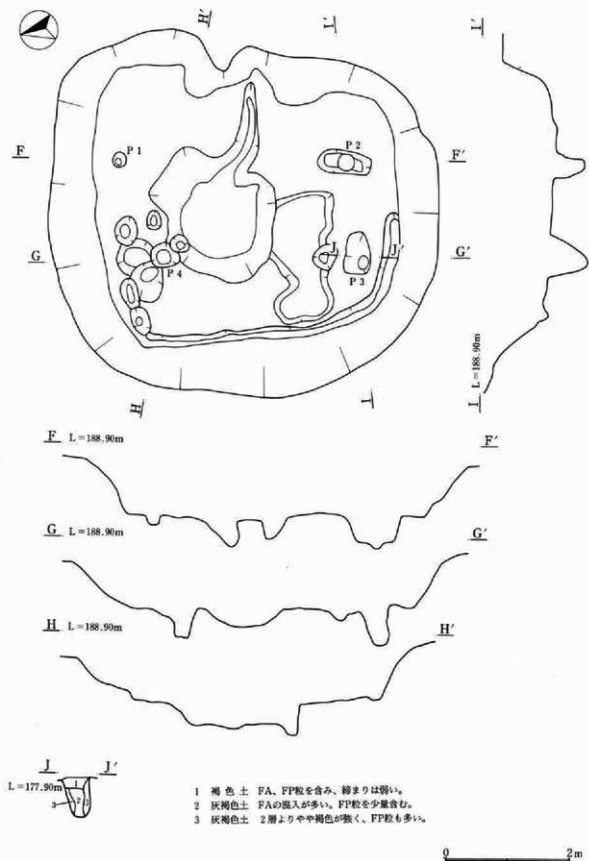
**所見** 本住居は出土した土器の特徴から、8世紀後半には構築されていたと考えられる。

## 55号住居

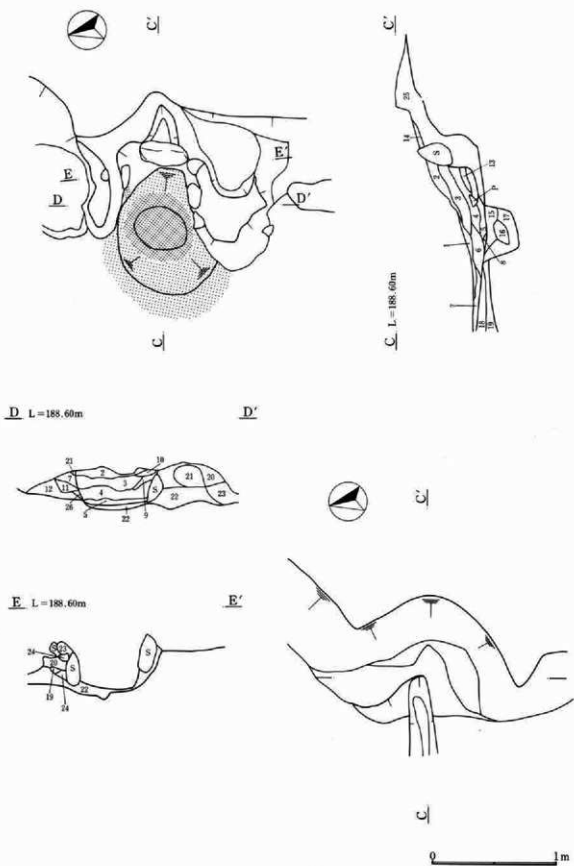


- 1 黒褐色土 全体的に土質は粗く、FP粒を多量に含む。小石を少量含む。
- 2 暗褐色土 全体的に2~5mm次のFP粒を多量に含む。もろく崩れやすい。炭化物が散見される。
- 3 暗褐色土 2層に類似するがFPの粒子がさらに細かい。
- 4 灰黒色土 炭化物を多量に含む。やや粘性を持つ。
- 5 暗褐色土 5mm次のFP粒を多量に含む。もろく崩れやすい。
- 6 暗褐色土 5層に類似するが色調がより暗い。
- 7 黄褐色土 FP粒主体。
- 8 褐色土 やや粘質を有し、焼土、炭化物を含む。FP粒を含むが、さほど多くない。
- 9 暗褐色土 FP粒を多量に含む。やや粒が大きい(1~3mm)。炭化物を含むためやや黒色味が強い。
- 10 明赤褐色土 焼土を多量に含む。FAやFP粒を含む。硬くよく締まる。
- 11 淡褐色土 FA主体。FP粒との混土。やや砂質を呈する。
- 12 褐色土 10層に類似するが暗褐色土との混入をみる。締まりはよい。
- 13 暗褐色土 FP粒を主体とし、暗褐色土との混土。締まりは弱く、崩れやすい。
- 14 黒褐色土 FA下黒色土主体でFAを少量含む。

第279図 55号住居



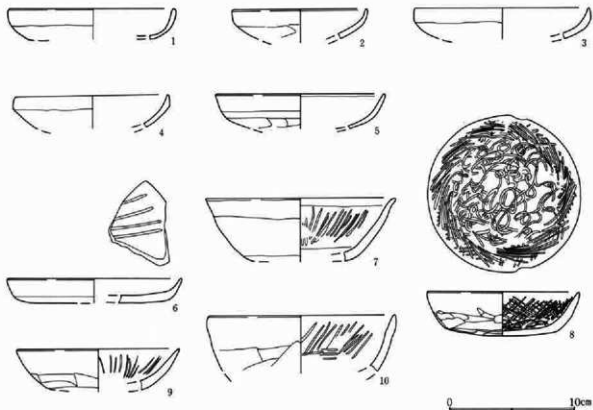
第280図 55号住居掘り方



第281图 55号住居電

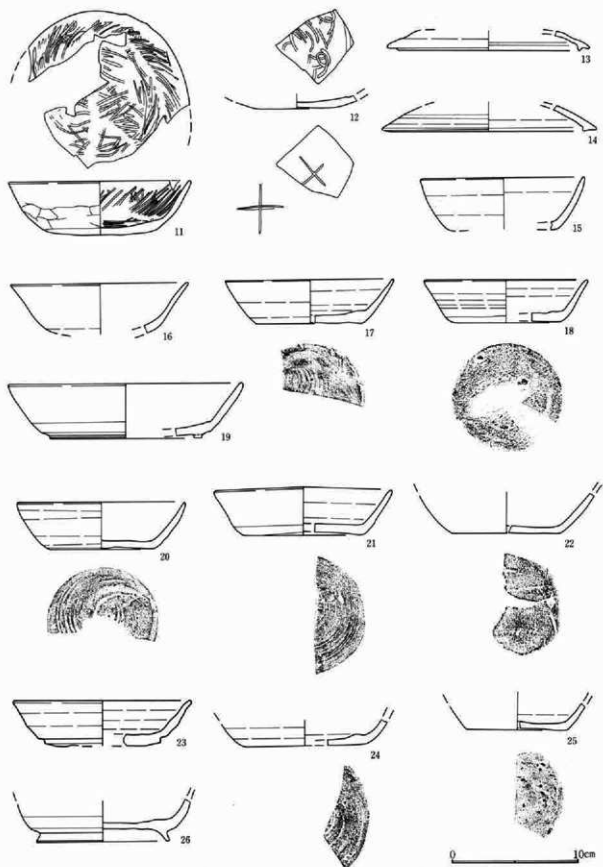
電

- 1 黄褐色土 FA主体で焼土を含む。FP粒はほとんど含まない。土質は細かい。
- 2 黄褐色土 1層に類似するが焼土を含まない。やや明褐色土が混入する。
- 3 黄褐色土 1層に類似するが焼土を含まない。1層より焼土が少ない。
- 4 明赤褐色土 焼土を多量に含む。粘性が強い。褐色土を主体とする。炭化物を少量含む。
- 5 灰白色土 粘性が強く、FP粒を含まない。明褐色土(粘性が強い)が少量混入する。
- 6 明褐色土 粘性を帯び締まりがよい。焼土を含む。
- 7 明褐色土 6層に類似するが焼土を含まない。
- 8 暗赤褐色土 炭化物を含む。粘性を帯びる。
- 9 暗黄褐色土 3層土に4層土が混入する。焼土を少量含む。
- 10 暗褐色土  $\phi$ 5mmほどのFP粒を含む。質のさほど細かい土に2層土が少量混入する。
- 11 灰黄褐色土 12層土と3層土の混合層。 $\phi$ 2mmほどのFP粒、焼土を少量含む。
- 12 灰黄褐色土 土質は細かい。 $\phi$ 2~3mmのFP粒を含む。焼土を少量粒状に含む。
- 13 明褐色土 土質は細かい。 $\phi$ 5mmまでのFP粒を含む。焼土粒をごく少量含む。
- 14 暗赤褐色土 褐色土を主体に焼土を含む。 $\phi$ 2~10mmのFP粒を含む。
- 15 赤褐色土 多量の焼土、灰を含む。
- 16 淡褐色土 やや粘性を有し、焼土を含む。
- 17 褐色土 焼土ブロック、FP粒を少量含む。
- 18 褐色土 焼土、炭化物を含む。硬く踏み固められている。
- 19 暗褐色土 FP粒を含む。よく締まる。
- 20 淡褐色土 FAを多量に含む。FP粒は僅かに含む。締まりはよい。
- 21 黄褐色軽石 FP粒純層。
- 22 褐色土 FP粒、FAをブロック状に含む。
- 23 暗褐色土 FP粒を含む。
- 24 褐灰色土 FAブロック、焼土を含む。
- 25 褐色土 FAと暗褐色土の混土。よく締まる。
- 26 褐色土 粘性を帯び焼土を少量含む。FP粒を含まない。

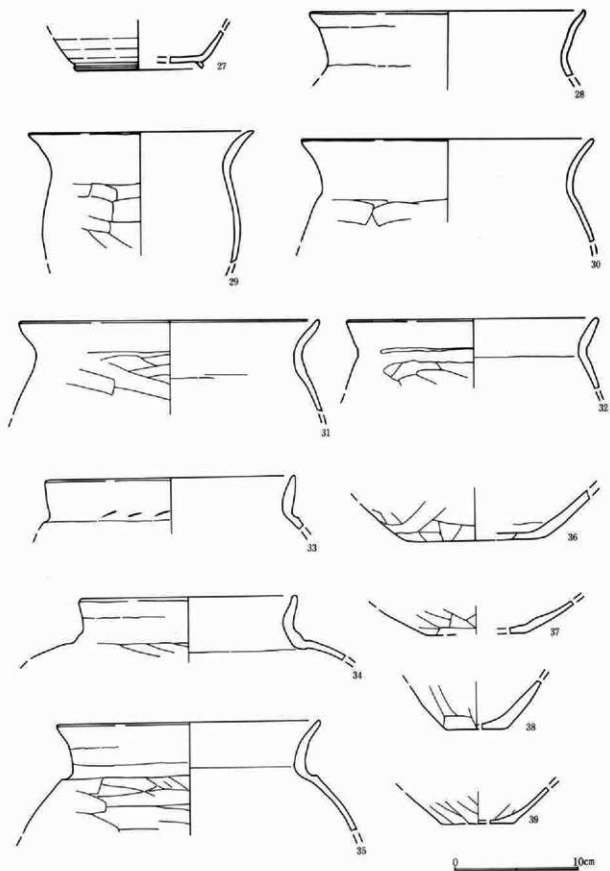


第282図 55号住居出土遺物(1)

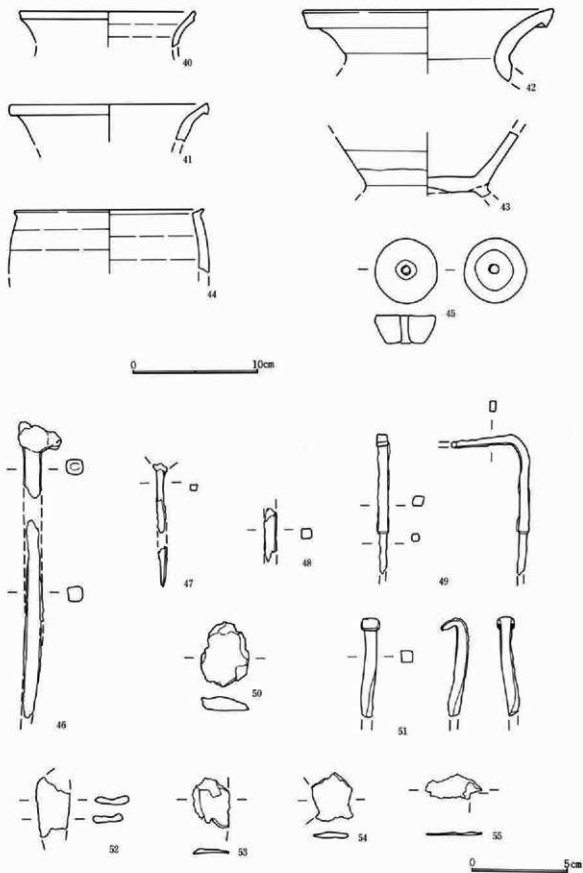




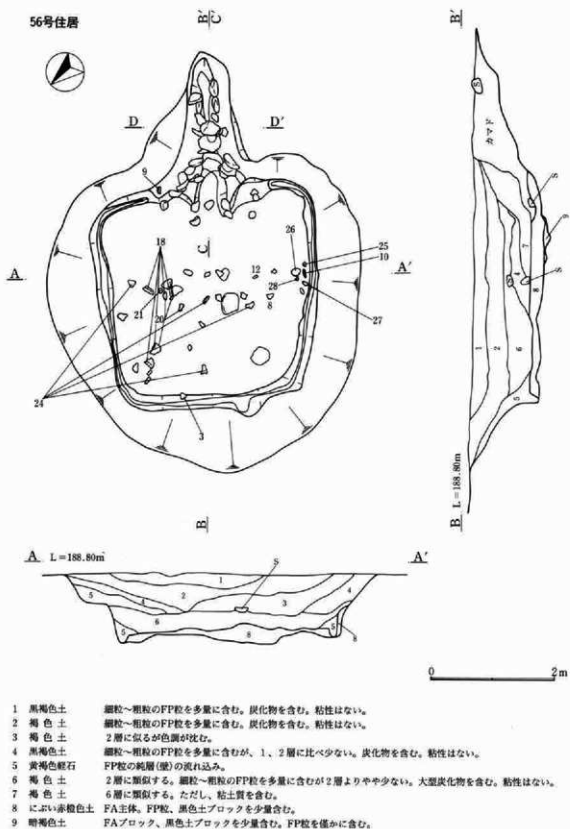
第283図 55号住居出土遺物(2)



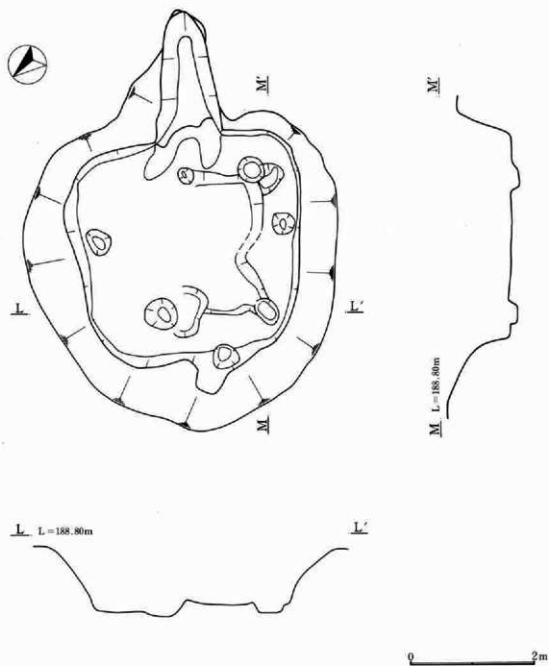
第284図 55号住居出土遺物(3)



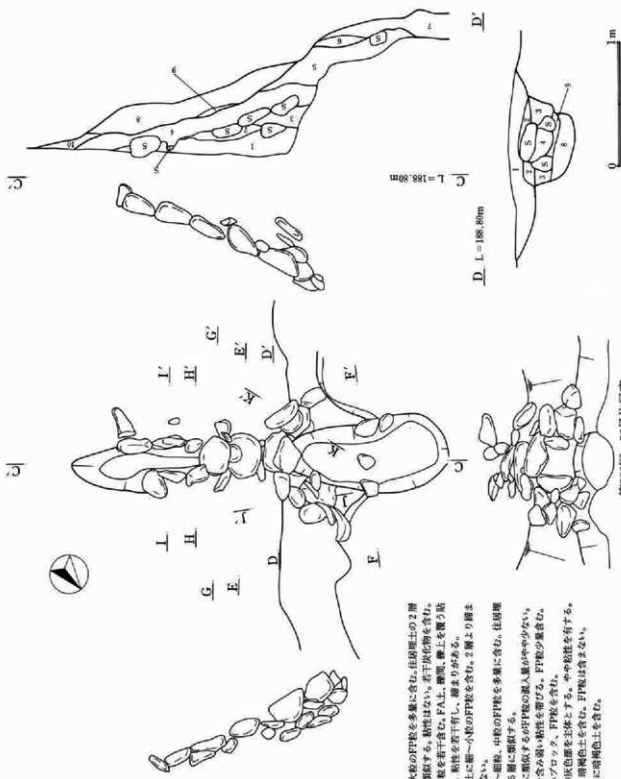
第285图 55号住居出土遺物(4)



第286図 56号住居



第287図 56号住居掘り方



第288図 56号住居遺

- 1 暗褐色土 細～大粒のFP粒を多量に含む。住居層土の2層上に第5層。粘性はない。若干炭化物を含む。
- 2 明褐色土 FP粒数を若干含む。FA上。礫層、礫土を覆う粘り土。粘性を若干有し。層まわりがある。
- 3 褐色土 2層土に細～小粒のFP粒を含む。2層より層まわりがない。
- 4 褐色土 礫層～礫粒。中粒のFP粒を多量に含む。住居層土の5層に第6層する。
- 5 褐色土 4層に第6層するがFP粒の混入量がやや少ない。FAを含み弱い粘性を帯びる。FP粒少量含む。
- 6 暗褐色土 FAを含み強い粘性を帯びる。FP粒少量含む。
- 7 灰褐色土 FA小ブロック。FP粒を含む。
- 8 褐色土 FAの灰色層を主体とする。やや粘性を有する。
- 9 暗褐色土 FA。暗褐色土を含む。FP粒は含まない。
- 10 暗褐色土 FP粒に暗褐色土を含む。

E L=188.80m

E'



K L=188.40m K'



F L=188.30m

F'



- 1 灰褐色土 FAの粘土質。よく締まる。
- 2 灰褐色土 1層に類似するが粘性が少なくやや砂質を呈する。
- 3 淡褐色土 粘性を有し、FP細粒、炭化物を含む。
- 4 明灰黄色土 FA主体。粘質を呈する。
- 5 暗褐色土 FP細粒を僅かに含む。
- 6 灰褐色土 FA主体。やや砂質。

G L=188.80m

G'



H L=188.80m

H'



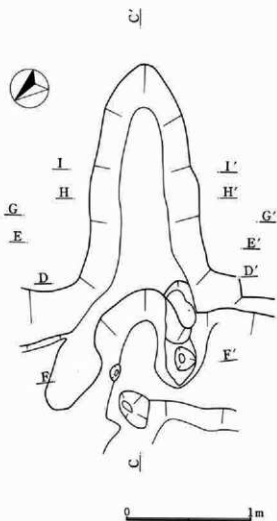
I L=188.80m

I'

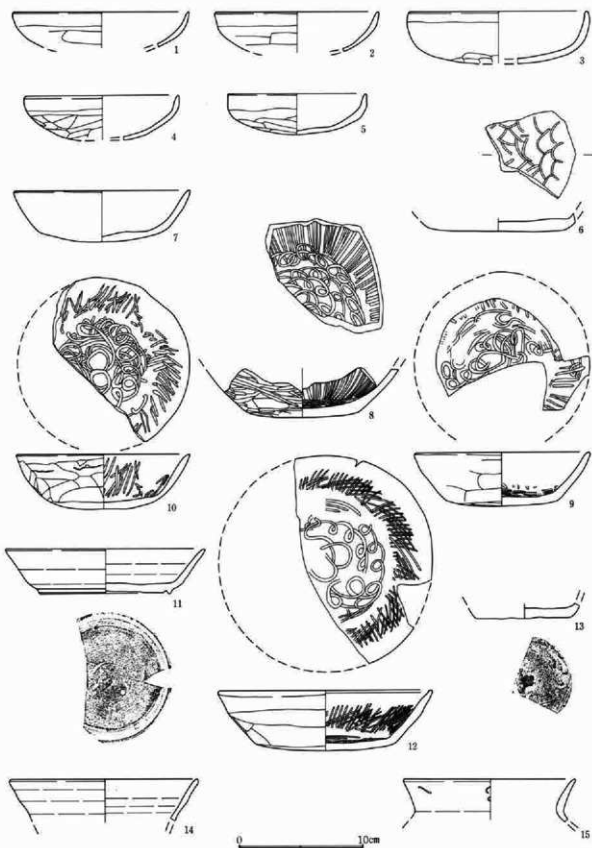


J L=188.40m

J'

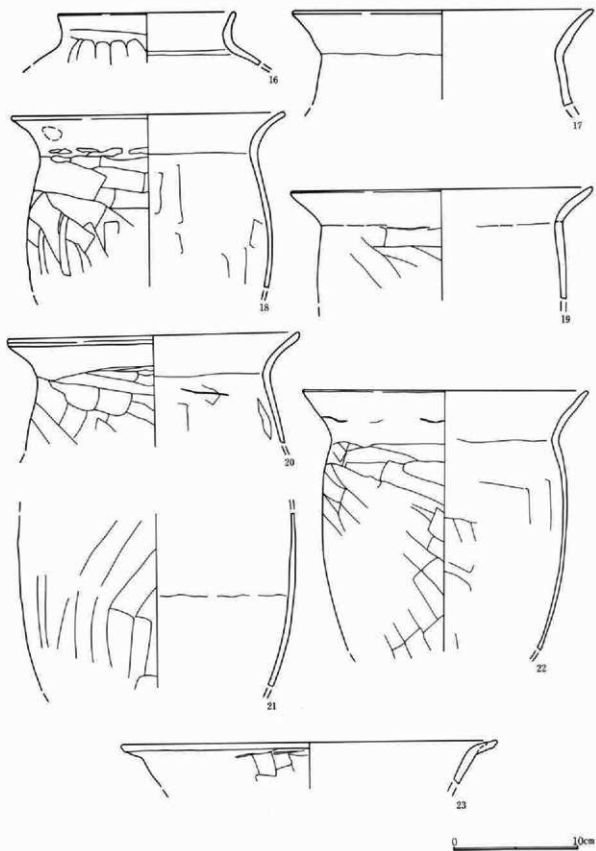


第289図 56号住居竈掘り方

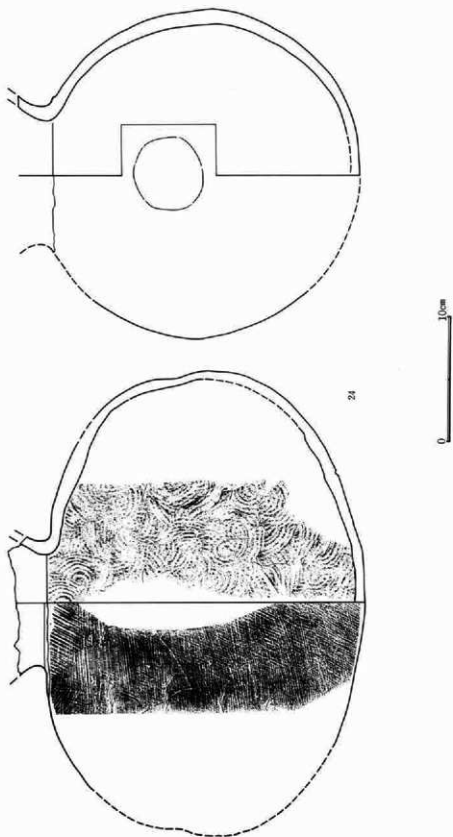


第290図 56号住居出土遺物(1)

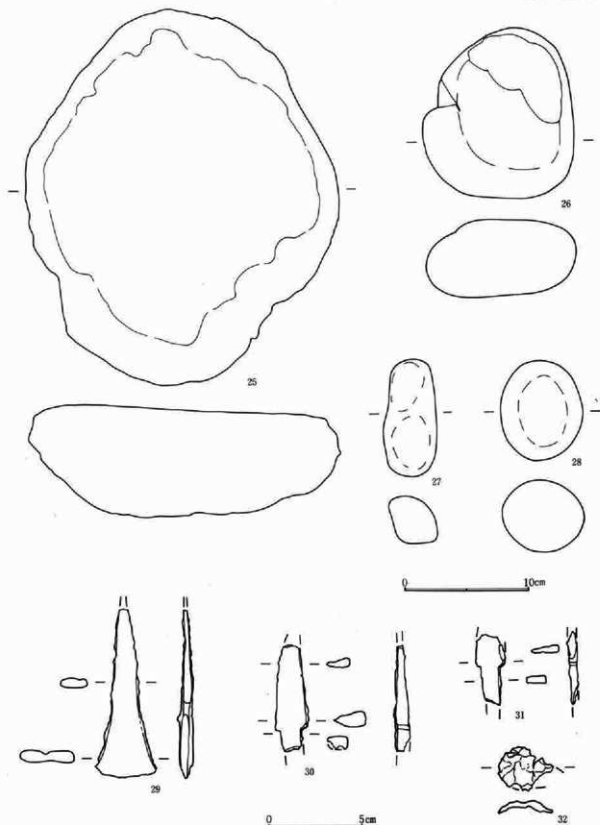




第291图 56号住居出土遺物(2)



第292図 56号住居出土遺物（3）



第293图 56号住居出土遺物(4)

### 56号住居

位置 FJ-55-56、FK-55-56

平面形状 上場では北辺と南辺がやや膨らんだ隅丸方形。下場では東辺がやや短い。

残存深度 壁の高さは床面まで85～92cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は4.30m、西辺は4.50m、南辺は4.70m、北辺は4.35mを測る。

主軸方位 N-129°-E

埋没土 褐色系色調を呈する土壌が主体である。上位は色調がやや沈む。壁際ではHr-FP二次堆積層がみられる。

壁の状況 床面から、東壁、西壁、北壁は90°、南壁は135°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は127°、西壁は125°、南壁は140°、北壁は148°を測る。西壁にビット状の抉り込みがみられる。

床面 面積は10.524㎡を測る。Hr-FAを主体とする層によって床面が形成されている。

周溝 竈を除いた全体にみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 床面では確認できなかった。

掘り方 柱穴が検出された。東辺から南辺、西辺中位にかけての床面外縁はHr-FA層中まで掘削している。住居中央から北辺にかけてはさらに深くHr-FA下黒色土まで掘り込んでいる。

竈位置 東辺中央やや南寄り

竈方位 N-135°-E

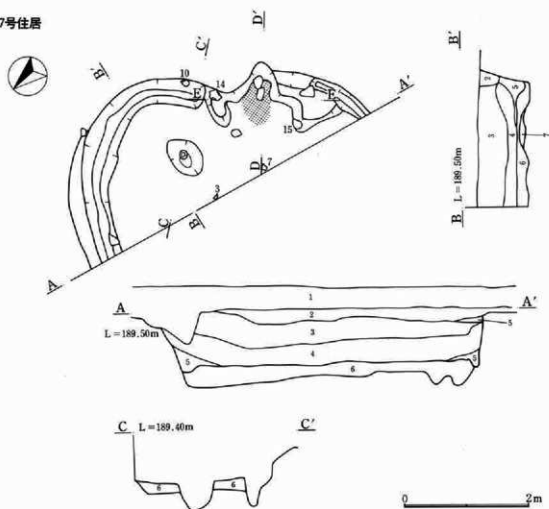
竈規模 全長は、3.00m（屋外長1.60m、屋内長1.40m）、袖部幅0.95mを測る。

竈形状その他 左右袖に河原石を立位に据えている。燃焼部中央に棒状の石を立位に据えて支脚としている。煙道の両壁にも石を用いている。住居の壁にあたる部分では壁石と掘り方との間に左右とも石を3～5段に平積みしていることが分かる。壁石は扁平な石を平の面を竈内側に向けて据えている。左右壁石はやや内傾するように設置されていた。検出時には壁石は外端部まで及んでいなかった。この壁石の上に棒状の石を小口積みにし、天井石を乗せている。さらに小ぶりの石で隙間詰めをし、粘性土で被覆している。天井石は3石残存しており、そのうち住居寄りの2石は粘性土に被覆されたままの状態で検出されている。掘り方では袖部分を掘り残す形が見受けられた。

遺物 10と12の土師器杯が床面から出土している。口縁部外面に横方向のヘラ削りを有し内面には螺旋状及び放射状、斜格子状暗文が施されている。18、20、21の土師器壺は床面近くからの破片が接合している。口縁部は「く」字状に屈曲がみられ胴部に膨らみを有している。24の須恵器横瓶は床面から若干の間隔をおいて出土する破片もみられた。埋没土からは土師器杯、須恵器杯、鉄器、使用痕跡のある石が出土している。土師器杯は口縁部に無調整帯が残る。須恵器碗の底部は回転ヘラ削りで削り出し高台がみられる。図化できなかったが須恵器蓋の小破片もみられた。鉄器は刀子及び工具の可能性のある刃器などが認められる。25の石は表に平坦面があり、研磨された痕跡が認められる。また、甕焚き口付近からトリの小骨片が出土している。

所見 出土した土器の様相から、本住居には8世紀前半の年代が与えられる。杯に暗文を多用していることが窺える。

## 57号住居



- 1 耕作土
- 2 黒色土 細かい軽石及びFP粗粒を多量に含む。土質は粗い。
- 3 褐色土 FP粒(3~6mm大)を主に多量に含む。締まりは比較的よい。
- 4 褐色土 3層に比べFP粒の粒が大きくなる。
- 5 黄褐色土 FP粒主体。
- 6 暗褐色土 FP粒(2~5mm大)が全体的に散見しFAが含まれる。層上面には焼土、炭化物等がみられる。
- 7 暗褐色土 FAが小アブロック化し、FP粗粒と混合する。よく締まる。

第294図 57号住居

## 57号住居

位置 FM-57、FN-57 平面形状 丸みの強い隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで北部分は61~80cm、東部分は51~54cmを測る。深さは一定ではない。周溝底面まで北部分は80~91cm、東部分は67~71cmを測る。

重複住居 単独で検出された。

規模 東辺は残存部分で4.50m、南辺は残存部分で1.15m、北辺は2.00mを測る。

主軸方位 N-130°-E

埋没土 土質は褐色系の色調を呈す土壤に類似するが色調がやや沈む。壁際ではHr-FP二次堆積層が認め

### 第3章 検出された遺構と遺物

られ、周溝の埋没土となっている。

**壁の状況** 床面から、東壁は90°、南壁は100°、北壁は109°の角度で立ち上がる。変換点からは東壁は105°、北壁は162°を測る。壁体を構築する材及びその痕跡は認められなかった。

**床 面** 面積は6.540㎡を測る。Hr-FAを含む暗褐色土によって床面が形成されている。床面には焼土や炭化物がみられる。

**周 溝** 甕を除く検出部分で全体にみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱 穴** 柱穴と推定されるピットは1基のみ検出された。深さは、床面からは44cm、掘り方より32cmを測る。

**掘り方** 住居南側はHr-FA層中で掘削が留まるが、北側ではHr-FA層を掘り抜いて黒色土まで達している。東壁近くにピット状の落ち込みがみられる。

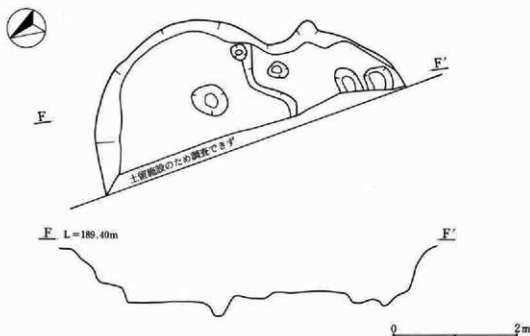
**竈位置** 東辺中央やや南寄り **竈方位** N-133°-E

**竈規模** 全長は、1.15m（屋外長0.60m、屋内長0.55m）、袖部幅1.30m、燃烧部幅0.40mを測る。

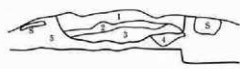
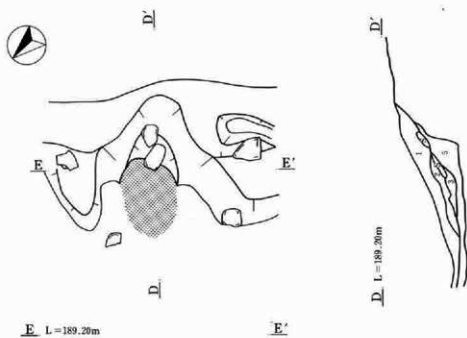
**竈形状その他** 住居外側に煙道があまり伸びていない。左右の袖が低く僅かに残存する。左袖部には石の使用は認められない。右袖に石が散見するが本来的なものとは断定しがたい。煙道外端部には斜位に2個体の石を据えていた。

**遺 物** 床面から僅かな間隔をおいて10の須恵器杯が出土した。底部は回転糸切りである。13が掘り方出土で11は掘り方と竈埋没土出土の接合関係である。埋没土からの出土では土師器杯、甕、須恵器蓋、杯等の出土があった。土師器杯内面には放射状及び螺旋状暗文が認められるものが多い。14は竈袖にあたる位置で上位から出土している。口縁部は「く」字状を呈し胴部に膨らみがある。1は住居構築以前の土器が流入している可能性がある。

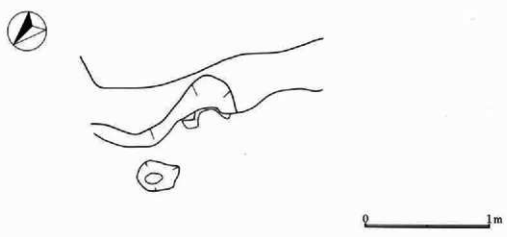
**所 見** 出土した土器の様相から、本住居は9世紀前半には構築されていたと考えられる。



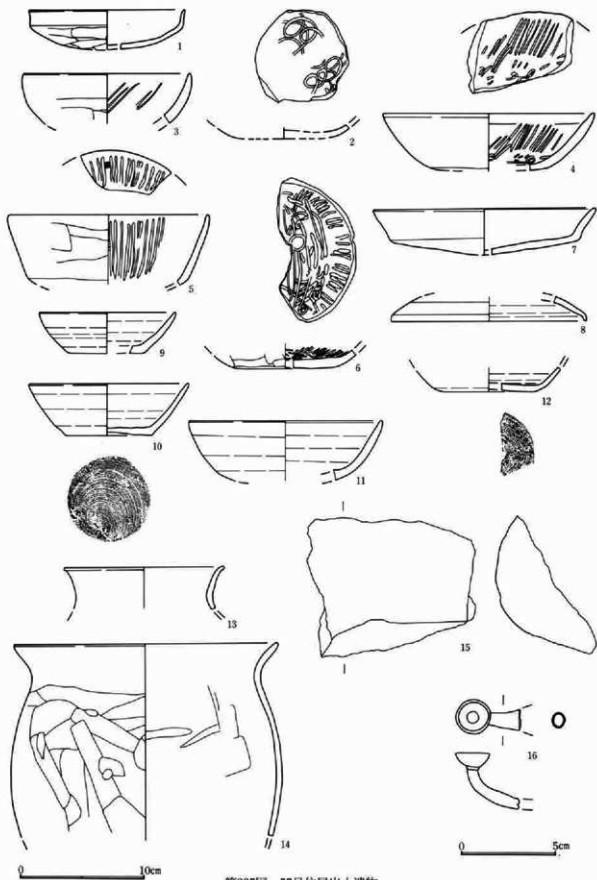
第295図 57号住居掘り方



- 1 暗褐色土 FP粒を少量含む。
- 2 暗褐色土 灰、黄褐色土粒を少量含む。
- 3 赤褐色土 焼土を多量に含む。カーボン少量含む。
- 4 暗褐色土 FP粒を多量に含む。
- 5 暗褐色土 FP粒を少量含む。



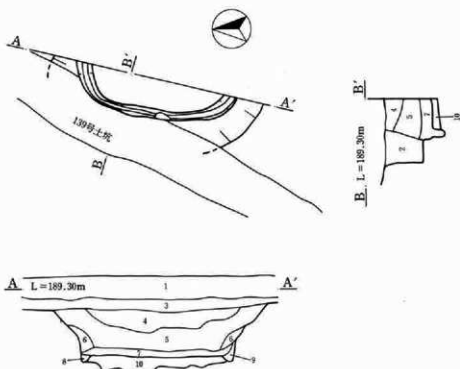
第296図 57号住居壑及び掘り方



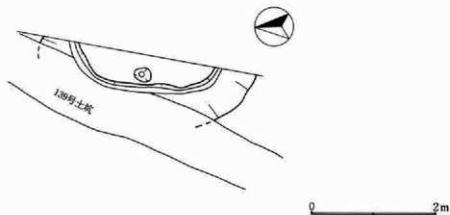
第297図 57号住居出土遺物



## 58号住居



- 1 暗灰褐色土 表土、耕作土。
- 2 暗黄褐色土 土坑埋土。FP粒を多量に含む。(攪拌したように均等に含まれる)
- 3 黒褐色土 FP粒を多量に含むが、4層より少ない。(II層)
- 4 暗黄褐色土 FP粒をほぼ主体的に、多量に含む。
- 5 暗褐色土 FP粒を多量に含む。(3、4層よりは少ない)
- 6 黄褐色土 FP粒主体。壁の崩れ。
- 7 暗褐色土 土質は細かくFAを含む。硬く締まっている。
- 8 黄褐色土 6層に類似するが暗褐色土を少量含む。
- 9 黄褐色土 8層に類似するが暗褐色土をより多く含む。
- 10 淡褐色土 FA(S-1)主体で黒色土を含む。



第298図 58号住居



第299図 58号住居出土遺物

### 58号住居

**位置** FC-52、FD-52

**平面形状** 隅丸方形と推定される。

**残存深度** 壁の高さは床面まで89cmで、周溝底面まで92cmを測る。

**重複住居** 単独で検出された。ただし、南東コーナーから東壁にかけて139号土坑に掘り込まれている。

**規模** 東辺は3.30m、南辺は残存部分で1.00m、北辺は残存部分で0.90mを測る。

**主軸方位** N-101°-E

**埋没土** 褐色系の色調を呈す土壌と同様の土質が主体だが色調が沈む。周溝の埋没土は Hr-FP 粒主体層であり、その上に床面を被う土層である締まりのある暗褐色土が位置する。その後壁際では Hr-FP の二次堆積層が認められる。

**壁の状況** 床面から、東壁、南壁、北壁は90°の角度で立ち上がる。変換点からは南壁、北壁は135°を測る。

壁体を構築する材及びその痕跡は検出されなかった。

**床面** 面積は1.164㎡を測る。Hr-FA 下黒色土を含有する Hr-FA 主体層によって床面が形成される。

**周溝** 検出部分の全体にみられる。

**貯蔵穴** 検出されなかった。

**柱穴** 検出されなかった。

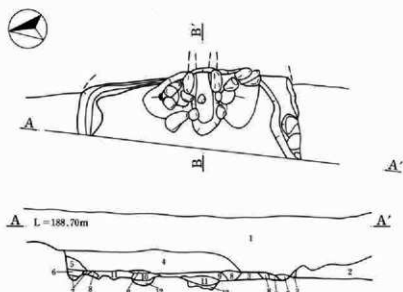
**掘り方** Hr-FA 下黒色土を掘り抜いて淡色黒ボク土まで達している。南部分に細かな凹凸が多く認められる。

**竈位置** 検出されなかった。

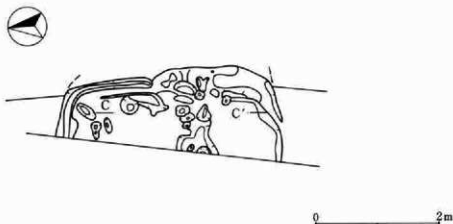
**遺物** 床面からの出土遺物はみられない。埋没土中からは削り出しの稜を持つ模倣杯の系統をひく土師器杯が出土している。他に釘かと思われる曲線をなす棒状の鉄製品がみられる。

**所見** 出土した土器の特徴から、本住居は7世紀後半代には構築されていたと考えられる。

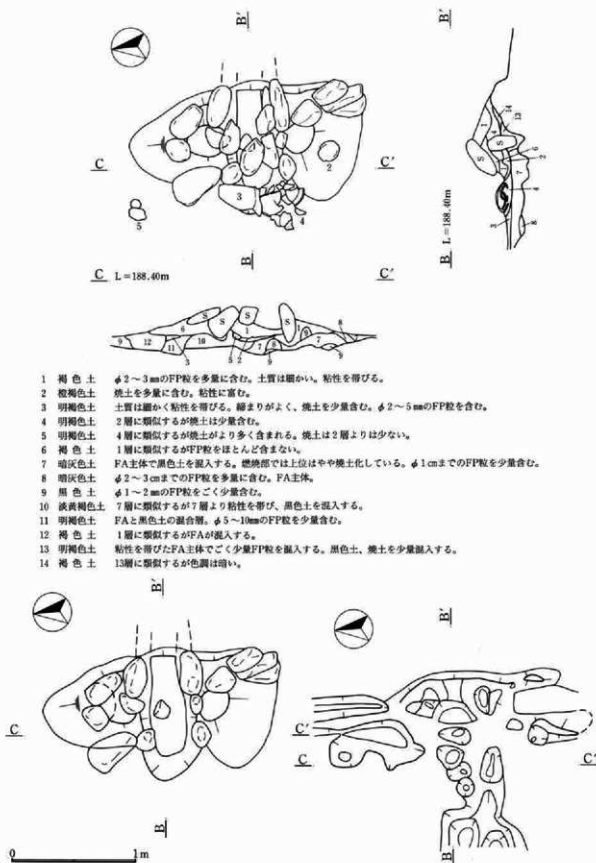
## 59号住居



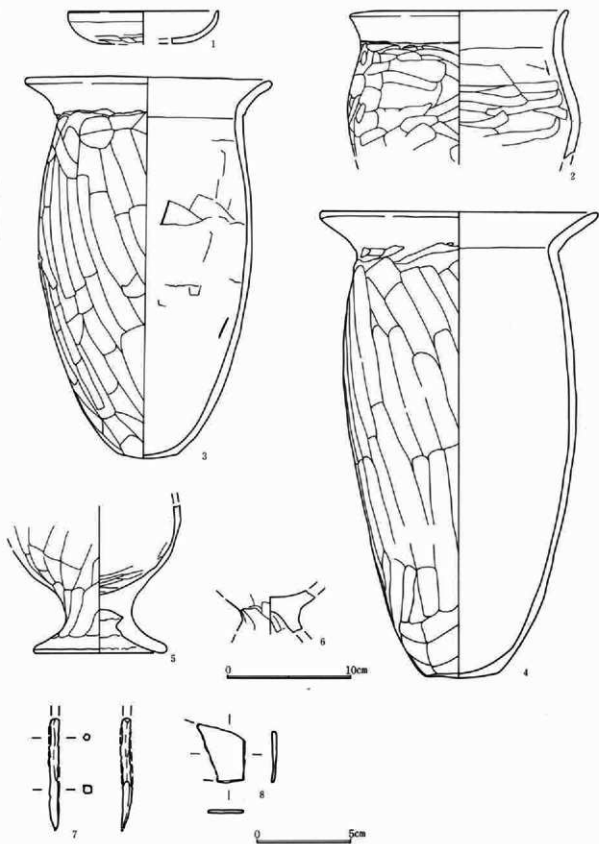
- |           |  |
|-----------|--|
| 1 黒褐色土    | 上位は硬く締まっている。FP粒を含む。特に下位にFP粒が多い。          |
| 2 褐色土     | 4層と1層が混じり合う。                             |
| 3 黒色土     | FA下黒色土。                                  |
| 4 明褐色土    | やや質の粗い土にFAが混入する。φ2~10mm次を中心としたFP粒を多量に含む。 |
| 5 暗黄褐色土   | FP粒がぎっしり詰まる。黒色土で汚れている。                   |
| 6 暗褐色土    | FA下黒色土にφ5mm前後のFP粒を多量に含む。                 |
| 7 白黄土     | φ2~3mmのFP粒がぎっしり詰まる。黒色土でやや汚れている。          |
| 8 暗灰色土    | FA(砂質)主体でφ2~5mmほどのFP粒を含む。                |
| 9 におい赤褐色土 | FA(S-1・2)主体で黒色土とφ2~3mmのFP粒を含む。           |
| 10 暗褐色土   | 8層に類似するがFP粒を多量に含む。                       |
| 11 暗灰色土   | FA各ユニットが混合する。黒色土を含む。                     |
| 12 黒色土    | 黒色土にFAが少量混入する。                           |



第300図 59号住居



第301図 59号住居竪



第302图 59号住居出土遺物

59号住居

位置 DS-61-62、DT-61-62 平面形状 隅丸方形と推定される。

残存深度 壁の高さは床面まで38~41.1cmで、周溝底面まで北部分で53.1cm、東部分で7.8cmを測る。

重積住居 単独で検出された。ただし、南壁は攪乱されて残存状況は良くなかった。また、Hr-FA下黒色土の調査時に断面を確認したために竈外端部と東壁の多くを掘削してしまっている。

規模 東辺は3.40m、南辺は残存部分で1.30m、北辺は残存部分で0.85mを測る。

主軸方位 N-90°-E

埋没土 褐色系の色調を呈す土壌が主体である。北辺の周溝では黒色土で汚れた Hr-FP 粒層が下位に位置し黒色土主体で Hr-FP 粒を多量に含む土層が上位に認められる。さらにその上位にやはり黒色土で汚れた Hr-FP 粒層の流入がみられる。南辺周溝は Hr-FP 粒含有の黒色土が埋没土である。

壁の状況 北壁は床面から98°の角度で立ち上がり、変換点からは151°を測る。壁体を構築する材及び痕跡は検出されなかった。

床面 面積は3.843㎡を測る。Hr-FA下黒色土や Hr-FP 粒を含有する Hr-FA 主体層及び Hr-FA を含む黒色土主体層によって床面が形成されている。

周溝 検出部分で竈を除く全体にみられる。

貯蔵穴 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

掘り方 Hr-FA下黒色土上面まで掘削が及んでいる。周溝の痕跡が良く残る。竈前から北側にかけて細かな凹凸がみられる。

竈位置 東辺中央

竈方位 N-99°-E

竈規模 全長は、残存1.10m、燃焼部幅0.30mを測る。

竈形状その他 竈周辺や燃焼部に落ち込んだ扁平な河原石が検出されている。竈前の土師器臺の出土状態から、焚き口に2個体を用いて横架していたと思われる。燃焼部には棒状の石による支脚が見える。左右の壁には扁平な河原石を立位に据えており、右に3石、左に2石残存している。竈平面図左側で3石見えるうちの中央の石は本来同箇所に用いていた可能性も考えられるが、検出時には据えた状態ではなかった。右袖南側では口縁部から胴部まで半載された土師器臺が正位に据えられ、粘性土に埋没しかかっていた。竈右側では住居東壁にかかるとと思われる部分に河原石を3段に平積みしている状態が認められた。

遺物 前述のように竈前面では横架していたと思われる土師器臺が3に4の底部を差し込んだ状態で出土した。口縁部は南を向いていた。右袖南側に土師器臺の口縁部~胴部が正位に据えられている。この臺は内面黒色処理されている。これらの臺は胴部中に僅かに膨らみを持っている。5の土師器台付臺は床面から横倒しになった状態で出土している。内面が黒色処理されている。埋没土中からは土師器杯、台付臺、鉄製品が出土している。杯は口縁部下半に無調整帯を有している。鉄製品は釘の可能性もある棒状品と板状の不用品である。

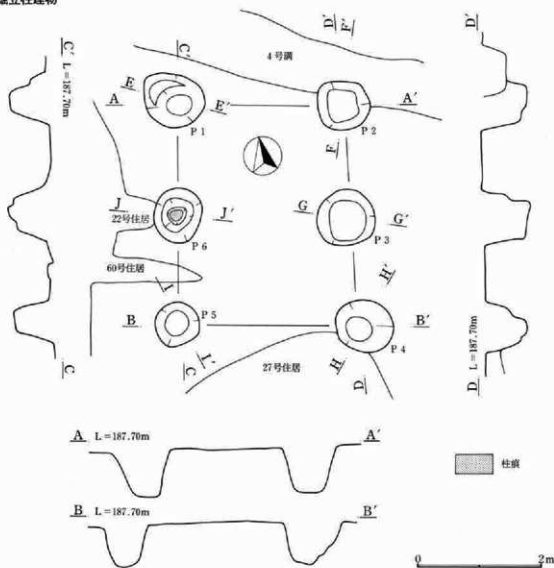
所見 出土した土器の様相から、本住居は7世紀後半に比定される。竈は両壁に石を用いており、煙道外端部まで本来は据えられていた可能性が考えられる。また、前述のように南壁部分は攪乱を受けている。周溝状の溝を検出して壁としたが、住居の南限は不確定要素を残している。

## 第2節 掘立柱建物

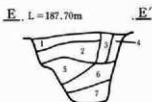
掘立柱建物は13棟検出されている。そのうち1～3号掘立柱建物については調査時点で認識し得た遺構であるが、4～13号掘立柱建物については整理作業の過程で抽出したものである。抽出にあたっては土坑・ピットとして記録されている遺構の埋没土の様相に重点をおいた。埋没土は住居における埋没土を基準にし、類似する遺構の位置関係を整理して掘立柱建物を抽出した。

分布は1区に1～8号掘立柱建物、2区に9～13号掘立柱建物が位置し、住居と同じく3～5区には認められない。その規模は最小例は1×1間で最大例は3×5間を数える。重複関係については4号掘立と5号掘立、2号掘立と3号掘立が掘立柱建物相互で重複が認められる。住居との関係では、1号掘立と22号住居、27号住居、2号掘立と28号住居、13号掘立柱建物と46、47号住居が重複する。遺構の時期については掘立柱建物の各ピットから出土した土器の時期を示したが一括性が認められるもの以外については流入の可能性も否定しきれない。出土土器の時期は9世紀代が多くなっている。

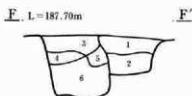
## 1号掘立柱建物



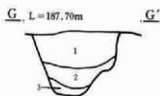
第303図 1号掘立柱建物



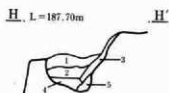
- 1号ピット
- 褐色土 FP粒を多量に含む。
  - 褐色土 FP粒、FAを多量に含む。
  - 褐色土 1層に似るが黄色味を帯びる。
  - 暗褐色土 黒褐色土にFP粒を含む。
  - 暗褐色土 2層に4層土を少量含む。
  - 暗褐色土 4層土にFAを含む。
  - 暗褐色土 6層土にFP粒を多量に含む。



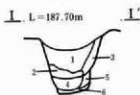
- 2号ピット
- 黒色土 FP粒を含む。土質から、新しいものである。
  - 暗褐色土 FP粒が一部球状に流れ込む。締まりは弱く、もろい。
  - 褐色土 FP細粒が主体。
  - 褐色土 FP粒が3層に比べ、量的に多い。
  - 褐色土 FP粒の混入は少ない。
  - 褐色土 FP粒は大きく、2cm大で、FAブロックが混入する。



- 3号ピット
- 褐色土 FP細粒(5mm大)が多量に含まれる。もろく崩れ易い。
  - 褐色土 FAが混入するため1層に類するがやや灰色味を持つ。
  - 褐灰色土 FA+FP粒。サラサラとする土質でもよい。



- 4号ピット
- 褐色土 φ1cm大前後、φ5mm大前後のFP粒を含む。粘性は強くなく、ポロポロと締まりがない。
  - 褐色土 φ1cm大前後のFP粒を多く含む。
  - 褐色土 φ5mm大までのFP粒を多く含む。土質はやや粗くサラサラする。
  - 褐色土 φ1cm大及び5cm大のFP粒を少量含む。土質はやや粗くサラサラする。
  - 灰黄褐色土 FAにφ5mm大ほどのFP粒が混入する。

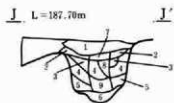


- 5号ピット
- 褐色土 土質は細かく、φ5mm大以下のFP粒を多く含む。
  - 褐色土 1層に類似するが2~3mm大のFP粒を多く含む。
  - 褐色土 1層土にφ5mm大ほどのFP粒を多く含む。
  - 明黄褐色土 φ5mm大ほどのFP粒、5mm大以下のFP粒がざっさり詰まる。1層土の混入が少なく3層より色調が明るい。
  - 明黄褐色土 φ5mm大ほどのFP粒、5mm大以下のFP粒がざっさり詰まる。4層土より色調が明るい。
  - 褐色土 土質は細かく、粘性を帯びる。FP粒はほとんど含まない。



第304図 1号掘立柱建物





## 6号ピット

- 1 褐色土 FAユニットを上位に含む。焼土粒を僅かに含む。粘性を帯びた灰白色FAユニットを含む。φ5～10mmほどのFP粒を含む。
- 2 橙色土 φ5mmほどのFP粒を含む。粘性を帯びる。
- 3 灰白色土 黄褐色ブロック、FAシルトブロックを含む。褐色味を帯び、締まりあり。
- 4 灰白色土 3層土より褐色土の混入が多い。
- 5 灰白色土 4層土に2～3cm大のFP粒を含む。
- 6 暗黄褐色土 φ1cm大前後、φ5mm大前後のFP粒がざっしり詰まる。3層土を僅かに含む。
- 7 暗褐色土 φ2～3mm大のFP粒を少量含む。FAシルト、黄褐色ブロックを少量含む。
- 8 暗褐色土 φ5mm大までのFP粒を含む。FAシルト、黄褐色ブロックを含まない。
- 9 暗灰褐色土 φ1cm大前後、5mm大前後のFP粒を含む。FAシルト、黄褐色ブロックと褐色土が混合する。



第305図 1号掘立柱建物

## 1号掘立柱建物

位置 EH-62・63、EI-62・63

重複関係 22号住居の竪外端部埋没土を6号ピットが掘り込んでいる。27号住居北東コーナーと4号ピットが重複するがどちらが掘り込まれているか不明である。さらに62号住居の竪が遺構範囲内に伸びているが土器の示す時期からは62号住居の方が新しいといえる。4号溝に2号ピットの一部が破壊されている。

規模 桁行2間(東辺3.5m、西辺3.6m)、梁行1間(北辺2.7m、南辺2.9m)を測る。

主軸方位 N-8°-E

床面積 面積は7.887㎡を測る。

柱穴間隔 桁行西辺では1～6号、5～6号ピット間が6尺(1.8m)を測るのに対し、東辺では2～3号ピット間が6尺(1.8m)、3～4号ピット間が5尺7寸弱(1.7m)とやや狭い。梁行北辺では1～2号ピット間は9尺(2.7m)であるが、南辺では4～5号ピット間がやや開いて9尺7寸弱(2.9m)を測る。

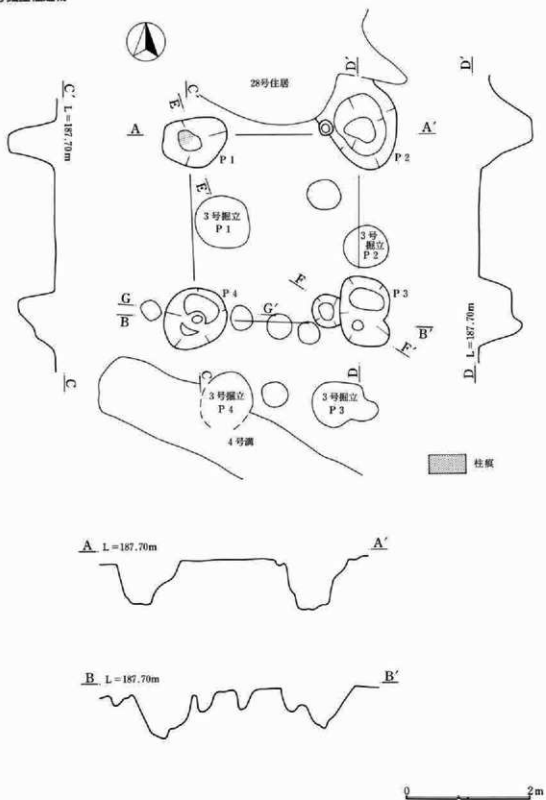
柱穴形態・深度 1号ピットは102×84cm、深さ74cm、2号ピットは84×78cm、深さ70cm、3号ピットは94×90cm、深さ66cm、4号ピットは90×82cm、深さ66cm、5号ピットは70×66cm、深さ68cm、6号ピットは88×78cm、深さ70cmを測る。円形あるいは楕円形を呈する。2号ピットのみ隅丸方形をなしている。

柱の太さ 確認面である軽石層上での平面の痕跡から、1号ピットの柱の太さは12cmを測り、また土層断面からみた6号ピットの柱の太さは24cmを測る。

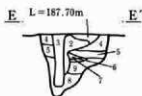
遺物 1号ピットから土師器甕4片、須恵器杯2片、甕1片、2号ピットから土師器杯10片、甕49片、須恵器杯1片、甕6片、5号ピットから土師器杯2片、甕6片、須恵器甕1片、6号ピットから土師器甕5片が出土している。いずれも小破片で図化できなかったが、2号ピットの土師器杯は3片のみ模倣杯の系統を残す例がみられる他は、削りが口縁部に及ばずに無調整帯を残す資料である。須恵器杯の底部はヘラ削りと思われる。土師器甕の頸部は横削りである。5号ピットの土師器杯も無調整帯を残す資料である。

所見 出土した土器片の特徴は、7世紀後半～8世紀前半代の時期を示している。

2号掘立柱建物

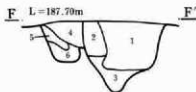


第306図 2号掘立柱建物



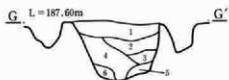
## 1号ピット

- 1 褐色土 FA+暗褐色土+FP微粒。
- 2 褐色土 FA小ブロックの混入が多い。FP粒はやや大きめのものが下部部に入る。
- 3 黒褐色土 FP粗粒を多く含む。やや砂質である。
- 4 暗褐色土 ごく少量FA粒を含む。
- 5 暗褐色土 FAのブロックとFP粒の混入。
- 6 明黄褐色土 FP粒主体。
- 7 褐色土 FAがブロック状を呈する。
- 8 暗褐色土 FP粒主体。
- 9 明黄褐色土 FP粒主体。



## 3号ピット

- 1 暗褐色土 FP粗粒を主体に多量に含む。締まりはなく、もろく崩れ易い。
- 2 褐色土 FAを主体に、FP粗粒を含む。
- 3 暗褐色土 1層に類するが、FP粒の混入が少ない。
- 4 暗褐色土 1層に準ずる。
- 5 暗褐色土 FP粒の混入が多い。
- 6 暗褐色土 3層に準ずる。



## 4号ピット

- 1 暗褐色土  $\phi$  5mm大ほどのFP粒を中心に含む。
- 2 褐色土  $\phi$  5mm大ほどのFP粒を多量に含む。1層土が多く入る。
- 3 明黄褐色土  $\phi$  5mm大ほどとそれ以下のFP粒がぎっしり詰まる。
- 4 灰褐色土 灰褐色のFAと $\phi$  5mm大ほどのFP粒が交互に層状をなしている。FAが厚い2層、小さく薄い2層で、FP粒層が4層ある。
- 5 灰褐色土 FA層、 $\phi$  2~3mm大のFP粒を多量に含む。
- 6 褐色土 土質は細かく、2mm大ほどのFP粒を少量含む。



第307図 2号掘立柱建物及び出土遺物

### 2号掘立柱建物

位置 EJ-62・63、EK-62・63

重複関係 3号掘立柱建物、28号住居と重複関係にある。土器の年代観から、2号ピットは28号住居に掘り込まれているとすることができる。

規模 桁行1間(東辺2.8m、西辺2.9m)、梁行1間(北辺2.8m、南辺2.7m)を測る。

主軸方位 N-176°E

床面積 面積は6.543㎡を測る。

柱穴間隔 桁行東辺2～3号ピット間は9尺3寸強(2.8m)、西辺4～1号ピット間は9尺7寸弱(2.9m)、梁行北辺1～2号ピット間は9尺3寸強(2.8m)、梁行南辺3～4号ピット間は9尺(2.7m)を測る。

柱穴形態・深度 いずれも楕円形を呈している。3号ピットは埋没後掘り込まれて東側に突出する部分が見られる。1号ピットは108×80cm、深さ62cm、2号ピットは98×78cm、深さ80cm、3号ピットは108×80cm、深さ68cm、4号ピットは106×96cm、深さ58cmを測る。

柱の太さ 1号ピットの柱の太さは、確認面である軽石層上での平面の痕跡から14cmを測り、土層断面からみた柱の太さは10cmを測る。

遺物 各ピット埋没土中から土器小片が認められた。1号ピットからは土器器杯4片、須恵器壺1片、2号ピットからは土器器壺3片、杯4片、須恵器杯1片、3号ピットからは図示した土器器杯と杯別個体片、壺の小破片、4号ピットからは土器器杯1片、壺2片、須恵器壺1片、棒状鉄製品が出土している。3号ピット出土の図示した杯は微弱な稜線を持ち、内面に放射状暗文が施されている。1号ピット出土の杯は稜を有する模倣杯の系統のもので、2号ピット出土の杯は、稜を持つ模倣杯の系統の資料と稜を持たないが削りが口縁部まで及んでいて無調整帯がない資料が見られる。

所見 各ピット出土の土器からつかめる特徴は、7世紀後半～8世紀前半代の時期を示している。

### 3号掘立柱建物

位置 EI-62・63、EJ-62・63

重複関係 2号掘立柱建物、4号溝と重複関係にあり、4号溝に掘り込まれている。2号掘立柱建物との新旧は明らかではない。

規模 桁行1間(東辺2.4m、西辺2.9m)、梁行1間(北辺2.1m、南辺2.0m)を測る。

主軸方位 N-175°E

床面積 面積は5.184㎡を測る。

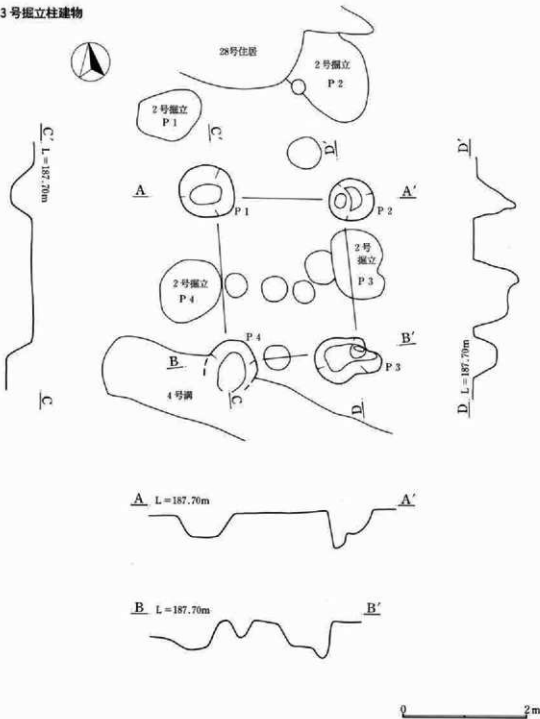
柱穴間隔 桁行東辺2～3号ピット間は8尺(2.4m)、西辺4～1号ピット間は9尺7寸弱(2.9m)、梁行北辺1～2号ピット間は7尺(2.1m)、南辺3～4号ピット間は6尺7寸弱(2.0m)を測る。梁行は西辺の方が若干長い。

柱穴形態・深度 3号ピットは東辺が突出した隅丸長方形を呈しているが、他は円形及び楕円形をなす。1号ピットは88×82cm、深さ34cm、2号ピットは72×68cm、深さ57cm、3号ピットは106×73cm、深さ60cm、4号ピットは推定106×82cm、深さ68cmを測る。

遺物 3号ピットからは小片であるがかわらけ片、須恵器片(?)、16世紀代と思われる陶器片が混入している。

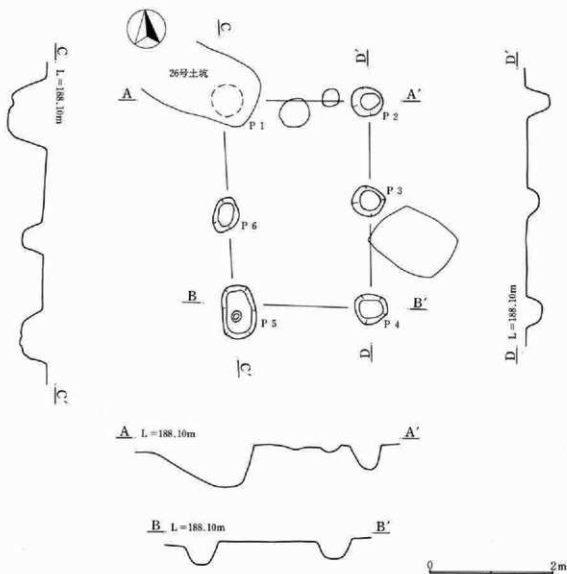
所見 本掘立柱建物の具体的な時期は明らかにできない。

## 3号掘立柱建物



第308図 3号掘立柱建物

4号掘立柱建物



第309図 4号掘立柱建物

4号掘立柱建物

位置 DY-64・65、EA-64・65

重複関係 26号土坑と重複し、26号土坑に1号ピットが掘り壊されている。また、5号掘立柱建物とも重複しているが新旧関係は不明である。

規模 桁行2間(東辺3.32m、西辺推定3.25m)、梁行1間(北辺推定2.34m、南辺2.20m)を測る。

主軸方位 N-177°-E

床面積 面積は7.407m<sup>2</sup>を測る。

柱穴間隔 桁行東辺11尺強で西辺では11尺弱を測る。2～3号ピット間が5尺4寸(1.62m)、3～4号ピット間が5尺7寸弱(1.70m)、5～6号ピット間が4尺8寸強(1.45m)、6～1号ピット間が推定6尺(1.80m)である。梁行北辺1～2号ピット間は推定7尺8寸(2.34m)、4～5号ピット間は7尺3寸強(2.20m)を測

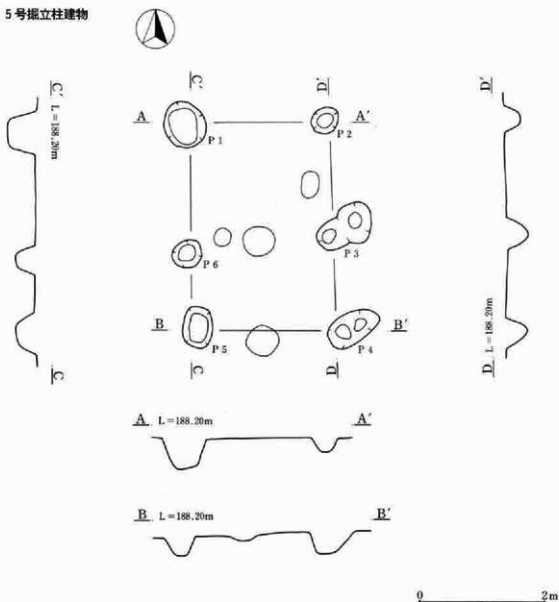
る。

**柱穴形態・深度** 2、3号ビットが円形、4号ビットが隅丸方形、5号ビットが隅丸長方形、6号ビットが楕円形を呈する。2号ビットは径50cm、深さ41cm、3号ビットは径54cm、深さ20cm、4号ビットは54×50cm、深さ25cm、5号ビットは84×56cm、深さ44cm、6号ビットは56×40cm、深さ32cmを測る。

**遺物** 5号ビット埋没土からは土師器甕2片、須恵器蓋1片が認められ、6号ビット埋没土からは土師器杯1片、甕2片、須恵器片1片、蓋1片の出土があった。いずれも小破片で図化には及ばなかったが、5、6号ビット出土の蓋はカエリが消失しており、6号ビットの須恵器杯は底部周辺回転ヘラ削りで体部下位にナデを施している。同じく6号ビットの土師器杯は底部から短く口縁部が立ち上がり削りによる明確な稜を有するものである。

**所見** 出土した土器からつかめる特徴は、9世紀代の時期を示している。

### 5号掘立柱建物



第310図 5号掘立柱建物

### 5号掘立柱建物

位置 DX-64・65、DY-64・65

重複関係 4号掘立柱建物と重複しているが新旧関係は不明である。

規模 桁行2間(東辺3.31m、西辺3.30m)、梁行1間(北辺2.22m、南辺2.30m)を測る。

主軸方位 N-178°E

床面積 面積は8.748㎡を測る。

柱穴間隔 桁行東辺、西辺で11尺、梁行北辺で7尺4寸、南辺で7尺7寸弱を測る。桁行では2～3号ビット間が5尺9寸(1.77m)、3～4号ビット間が5尺1寸強(1.54m)、5～6号ビット間が4尺1寸強(1.24m)、6～1号ビット間が6尺9寸弱(2.06m)を測る。

柱穴形態・深度 形態は円形を基調とし、4号ビットは2ヶ所の下場を有して楕円形を呈し、5号ビットは隅丸長方形をなす。1号ビットは72×70cm、深さ47cm、2号ビットは径44cm、深さ26cm、3号ビットは推定60×44cm、深さ41cm、4号ビットは88×50cm、深さ34cm、5号ビットは64×48cm、深さ34cm、6号ビットは50×46cm、深さ35cmを測る。

遺物 1号ビットからは土師器杯2片、甕3片、4号ビットからは土師器甕3片、6号ビットからは土師器杯1片、甕1片が出土した。いずれも小破片で図化し得なかったが、1号ビット出土の杯あるいは碗は器肉が厚く内面黒色処理されへら研磨が施されている。

所見 出土した土器片には時期を決定し得る特徴的な部位は認められないが、内面黒色処理の土器の存在から、9世紀代と考えられる。

### 6号掘立柱建物

位置 EE-62・63、EF-62・63

重複関係 23号住居と重複し、土器の示す時期からみると、本遺構の方が新しい。

規模 桁行3間(北辺6.20m、南辺推定5.76m)、梁行2間(東辺推定4.40m、西辺4.06m)を測る。

主軸方位 N-96°E

床面積 面積は22.175㎡を測る。

柱穴間隔 桁行北辺では20尺7寸強で、南辺では推定19尺2寸で北辺よりやや短い。梁行では西辺13尺5寸強、東辺推定14尺7寸弱である。桁行北辺の1～2号ビット間が8尺(2.40m)、2～3号ビット間が6尺2寸(1.86m)、3～4号ビット間が6尺5寸弱(1.94m)、南辺の6～7号ビット間が推定6尺3寸強(1.90m)、7～8号ビット間が6尺5寸弱(1.94m)、8～9号ビット間が6尺4寸(1.92m)を測る。梁行東辺の4～5号ビット間が7尺7寸弱(2.30m)、5～6号ビット間が推定7尺(2.10m)、西辺の9～10号ビット間が8尺2寸(2.46m)、10～1号ビット間が5尺3寸強(1.60m)を測る。

柱穴形態・深度 形態は、多くが円形、楕円形を呈し、4号ビットや9号ビット下場は直線的な辺がみられる。1号ビットは推定45×40cm、深さ43cm、2号ビットは47×46cm、深さ46cm、3号ビットは径42cm、深さ46cm、4号ビットは53×45cm、深さ37cm、5号ビットは56×42cm、深さ43cm、7号ビットは40×43cm、深さ45cm、8号ビットは47×45cm、深さ42cm、9号ビットは径40cm、深さ37cm、10号ビットは推定45×42cm、深さ54cmを測る。

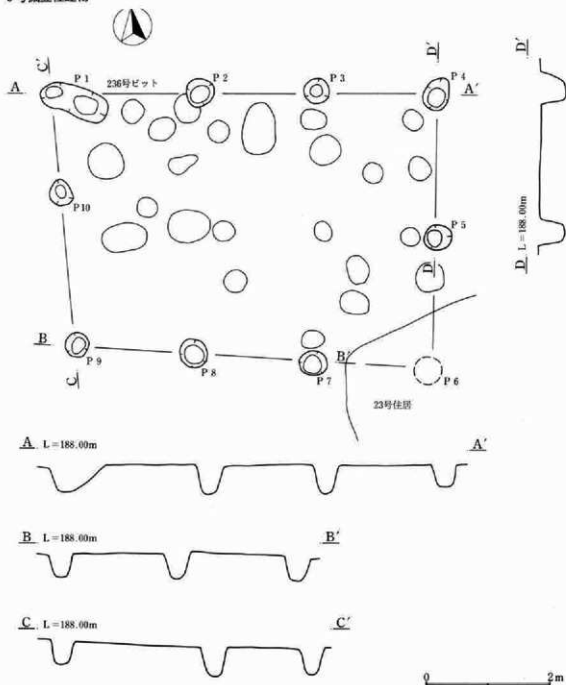
遺物 2、7号ビットからは土師器甕が各々2～3片出土し、4号ビットからは土師器杯1片と甕3片が、



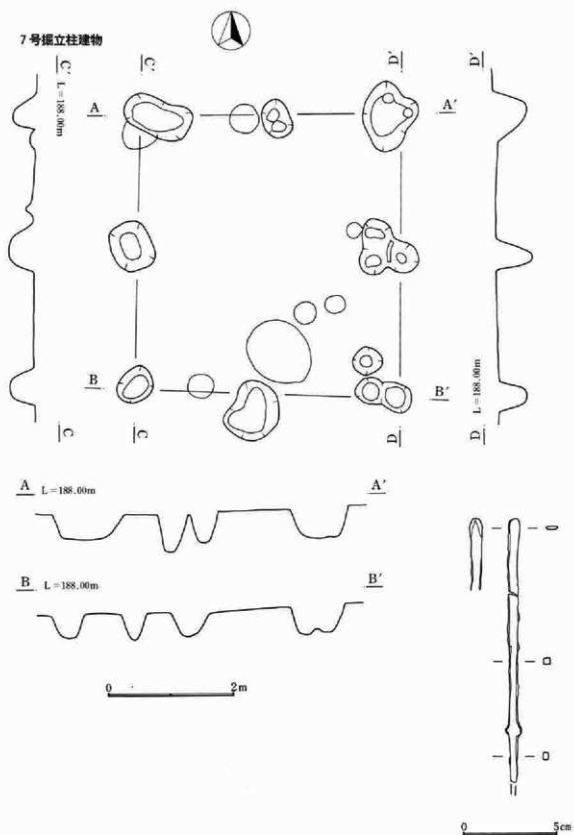
8号ピットからは土師器甕2片、杯1片が認められた。いずれも小破片で図化できなかった。1号ピットに接する236号ピットからは土師器杯1片、甕7片、須恵器甕類2片が出土している。

所見 各ピット出土の土器片の中でつかめる特徴は9世紀代の時期を示している。なお、梁行2～8号、3～7号ピットの間には各々ピットが位置するが梁行西辺と結べないため採用しなかった。

## 6号掘立柱建物



第311図 6号掘立柱建物



第312図 7号掘立柱建物及び出土遺物

## 7号掘立柱建物

位置 EI-61、EJ-60・61、EK-60・61

重複関係 単独で検出された。

規模 桁行2間(東辺4.54m、西辺4.36m)、梁行2間(北辺4.17m、南辺4.24m)を測る。

主軸方位 N-3°-E

床面積 面積は16.483㎡を測る。

柱穴間隔 桁行東辺15尺1寸強、西辺14尺5寸強、梁行北辺13尺9寸、南辺14尺1寸強である。桁行東辺では3～4号ピット間が7尺7寸弱(2.30m)、4～5号ピット間が7尺5寸強(2.24m)、西辺では、8～1号ピット間が6尺9寸強(2.09m)、7～8号ピット間が7尺6寸弱(2.27m)を測る。梁行では北辺の1～2号ピット間が7尺2寸弱(2.15m)、2～3号ピット間が6尺7寸弱(2.02m)、南辺の5～6号ピット間が7尺7寸弱(2.30m)、6～7号ピット間が6尺5寸弱(1.94m)を測る。

柱穴形態・深度 2、4、5、7号ピットのように円形を基調とするものがあり、3号や6号ピットのように不定形を呈するもの、1、8号ピットのように隅丸長方形を呈するものがある。1号ピットは108×60cm、深さ40cm、2号ピットは62×44cm、深さ45cm、3号ピットは102×91cm、深さ45cm、4号ピットは径50cm、深さ40cm、5号ピットは58×44cm、深さ40cm、6号ピットは97×88cm、深さ39cm、7号ピットは60×57cm、深さ39cm、8号ピットは76×66cm、深さ39cmを測る。

遺物 いずれも小破片で図化し得なかったが、4、6号ピットからは土師器壺片が、3号ピットからは土師器壺2片、須恵器壺1片、5号ピットからは土師器杯1片、壺4片、須恵器杯2片、壺1片が、7号ピットからは土師器2片が出土した。4号ピットからは鉄鏝が認められた。5号ピット出土の須恵器杯の底部は回転ヘラ削りで削り出し高台を有している。7号ピットの土師器杯は底部から曲線をもって立ち上がり、底部のヘラ削りが口縁部まで及ばずに無調整帯が認められるものである。3号ピットの土師器壺は小型で口縁部がやや外反するものである。

所見 各ピット出土の土器は7、8、9世紀代の特徴を示している。なお、桁行東辺や梁行北辺のピットが複数重複していたり規模が他より大きい傾向がみえるのは建て替えによる可能性も考えられる。

## 8号掘立柱建物

位置 EL-62・63、EM-62・63

重複関係 単独で検出された。

規模 桁行2間(北辺3.08m、南辺3.04m)、梁行1間(東辺2.00m、西辺1.91m)を測る。

主軸方位 N-107°-E

床面積 面積は6.035㎡を測る。

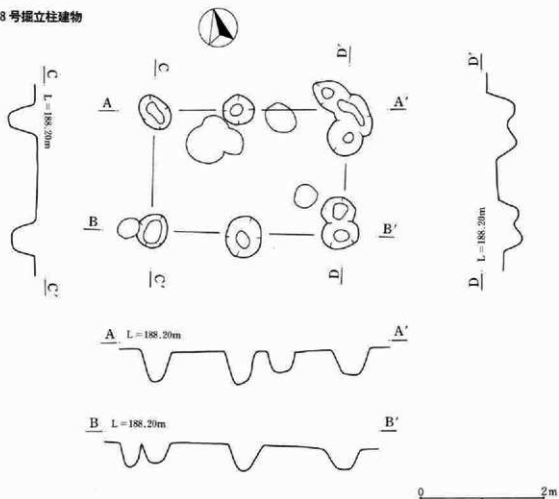
柱穴間隔 桁行北辺は10尺3寸弱、南辺は10尺1寸弱で、梁行東辺は6尺7寸弱、西辺は6尺4寸弱を測る。桁行北辺の1～2号ピット間が4尺5寸(1.35m)、2～3号ピット間が5尺8寸弱(1.73m)、南辺では4～5号ピット間が5尺3寸弱(1.58m)、5～6号ピット間が4尺9寸弱(1.46m)である。

柱穴形態・深度 形態は円形及び楕円形を呈する。1号ピットは58×42cm、深さ46cm、2号ピットは径56cm、深さ50cm、3号ピットは推定80×52cm、深さ42cm、4号ピットは推定21×30cm、深さ33cm、5号ピットは66×56cm、深さ42cm、6号ピットは28×27cm、深さ38cmを測る。

**遺物** 1号ピットから土師器杯3片、碗1片、甕10片、4号ピットから土師器甕8片、6号ピットから土師器甕2片が出土している。小破片のために図化し得なかったが1号ピットの土師器杯は底部からのヘラ削りが口縁部にまで及んでいる例と無調整帯を持つものがある。碗片は内面黒色処理しヘラ研磨が施されている。4、6号ピット出土の土師器甕片は口縁部の屈曲が弱く外面に縦位のヘラ削りを有するものである。

**所見** 各ピットから出土した土器の特徴は、7世紀後半を示している。黒色処理の土器の存在は、この時期に包括される例と9世紀代の例があり、可能性として9世紀の土器も含まれるとしておきたい。

8号掘立柱建物



第313図 8号掘立柱建物

9号掘立柱建物

**位置** EU-57・58、EV-57・58

**重複関係** 単独で検出された。

**規模** 桁行1間(東辺3.76m、西辺3.72m)、梁行2間(北辺3.76m、南辺4.00m)を測る。

**主軸方位** N-4°-E

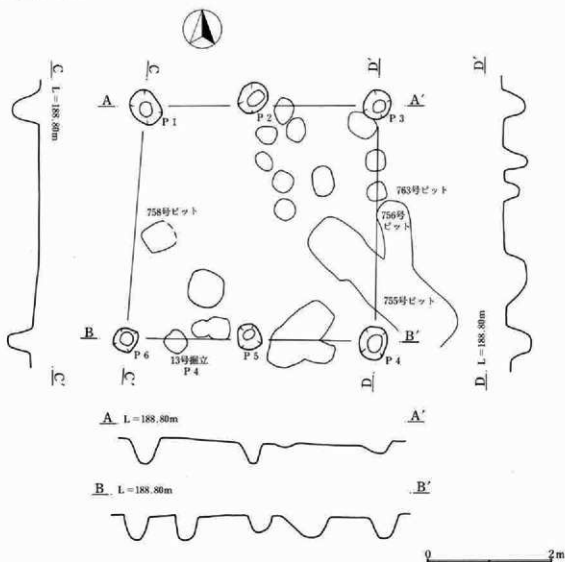
**床面積** 面積は9.301㎡を測る。

**柱穴間隔** 桁行東辺12尺5寸強、西辺12尺4寸を測り、梁行北辺は12尺5寸強、南辺は13尺3寸強である。梁行北辺では1～2号ビット間が5尺7寸強(1.72m)、2～3号ビット間が6尺8寸(2.04m)、南辺では4～5号ビット間が6尺7寸強(2.02m)、5～6号ビット間が6尺6寸(1.98m)を測る。

**柱穴形態・深度** いずれも丸みを帯びた形状である。3号ビットが円形を呈する他は直線的な辺が認められ、隅丸方形とされよう。1号ビットは55×41cm、深さ45cm、2号ビットは52×46cm、深さ36cm、3号ビットは径46cm、深さ36cm、4号ビットは54×44cm、深さ39cm、5号ビットは40×35cm、深さ29cm、6号ビットは38×36cm、深さ36cmを測る。

**遺物** いずれも小破片で図化できなかつたが、各ビット埋没土から次のような土器が出土している。1号ビットから須恵器杯2片、甕(?)1片、3号ビットから土師器杯1片、甕4片、4号ビットから土師器甕11片、須恵器椀1片、5号ビットからは土師器杯1片、甕3片が認められた。4号ビットの甕片の中には「コ」字状口縁部の甕底部片が含まれている。5号ビット出土の杯片は明確な稜を持たず無調整帯を有している。

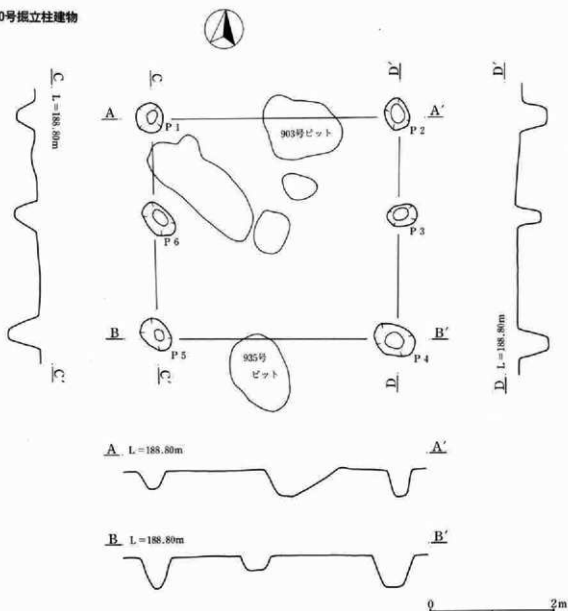
## 9号掘立柱建物



第314図 9号掘立柱建物

所見 出土した土器片のうち時期的な特徴が読み取れるものはごく少ないが、およそ9世紀代に比定できよう。また、桁行については西辺で中間付近に758号ピットが位置し、東辺でも755、756、763号ピットなどが中間に位置するが、桁行のラインに合わなかったり柱穴間隔に片寄りがみえる等の理由で採用していない。

10号掘立柱建物



第315図 10号掘立柱建物

10号掘立柱建物

位置 EY-56・57、FA-56・57

重複関係 単独で検出された。

規模 桁行1間(北辺3.94m、南辺3.84m)、梁行2間(東辺3.54m、西辺3.50m)である。

主軸方位 N-86°-E

**床面積** 面積は13.212㎡を測る。

**柱穴間隔** 桁行北辺は13尺1寸強、南辺は12尺8寸、梁行東辺11尺8寸、西辺11尺7寸強である。梁行では東辺の2～3号ビット間が5尺2寸(1.56m)、3～4号ビット間が6尺6寸(1.98m)、西辺の1～6号ビット間が5尺3寸強(1.60m)、5～6号ビット間が6尺3寸強(1.90m)を測る。

**柱穴形態・深度** いずれも円形及び楕円形を呈する。2、3号ビットは上場において直線的な辺のみみられるが楕円形としておきたい。1号ビットは48×42cm、深さ31cm、2号ビットは52×40cm、深さ41cm、3号ビットは48×34cm、深さ41cm、4号ビットは66×50cm、深さ51cm、5号ビットは56×40cm、深さ50cm、6号ビットは60×38cm、深さ39cmを測る。

**遺物** 3号ビットからは土師器甕(?)1片、4号ビットからは土師器杯1片、羽釜(?)1片、6号ビットからは土師器杯1片が出土している。6号ビットの杯は明確な稜を持たずヘラ削りが口縁部にまで及ばない無調整帯が認められる。4号ビットから出土の羽釜胴部と思われる破片は縦位のヘラ削りが施されている。

**所見** 出土した土器片が示す特徴は8～10世紀代の時期が考えられる。桁行1間としたが、その中間に北辺では903号ビット、南辺では935号ビットが位置している。位置的には903号ビットの西側が北辺を2等分する箇所にあたり、935号ビットは北側のごく一部が南辺ラインにかかるのみである。かつ他のビットと大きさ、形状の異なりが著しく、柱穴としなかった。

#### 11号掘立柱建物

**位置** FK-53-54、FL-53-54

**重複関係** 単独で検出された。

**規模** 桁行2間(北辺2.88m、南辺2.96m)、梁行2間(東辺2.66m、西辺2.80m)である。

**主軸方位** N-40°-E

**床面積** 面積は7.108㎡を測る。

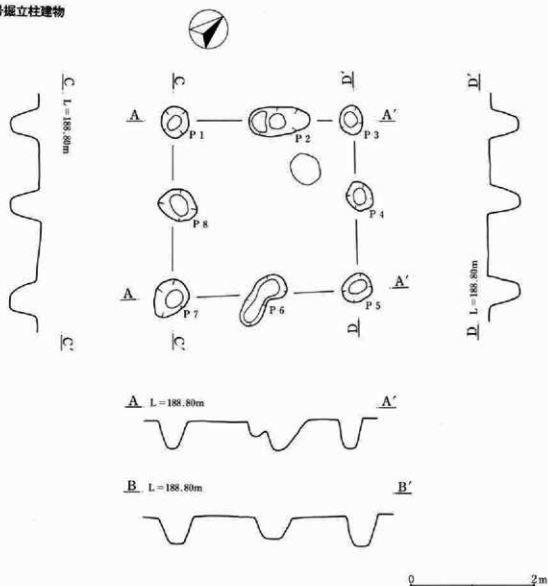
**柱穴間隔** 桁行北辺9尺6寸、南辺9尺9寸弱、梁行東辺8尺9寸弱、西辺9尺3寸強を測る。桁行北辺では、1～2号ビット間が5尺6寸(1.68m)、2～3号ビット間が4尺(1.20m)、南辺で5～6号ビット間が4尺8寸(1.44m)、6～7号ビット間が5尺1寸弱(1.52m)を測る。梁行東辺は3～4号ビット間が3尺9寸強(1.18m)、4～5号ビット間が4尺9寸強(1.48m)、西辺で7～8号ビット間が4尺9寸強(1.48m)、8～1号ビット間が4尺4寸(1.32m)を測る。

**柱穴形態・深度** 円形あるいは楕円形を基調としている。6号ビットは不整形をなすが、2基のビットが連なっている可能性もある。1号ビットは径52cm、深さ45cm、2号ビットは98×46cm、深さ45cm、3号ビットは50×36cm、深さ49cm、4号ビットは46×40cm、深さ50cm、5号ビットは48×40cm、深さ51cm、6号ビットは96×46cm、深さ35cm、7号ビットは66×52cm、深さ43cm、8号ビットは62×50cm、深さ56cmを測る。

**遺物** 2号ビットからは土師器杯1片、甕1片、鉄滓1個、3号ビットからは土師器甕4片、5号ビットからは土師器甕1片、鉄滓1個、6号ビットからは土師器杯1片、甕6片が出土した。小破片のため図化に至らなかったが、2、6号ビットの杯はともに口縁部片で外面には横方向のヘラ削りがある。内面には、2号ビット例は斜格子状の、6号ビット例は放射状の暗文を施している。両者とも平底で外反する口縁部を持つ形態と思われる。

**所見** 各ビットから出土した土器の特徴は9世紀前半代が考えられる。

11号掘立柱建物



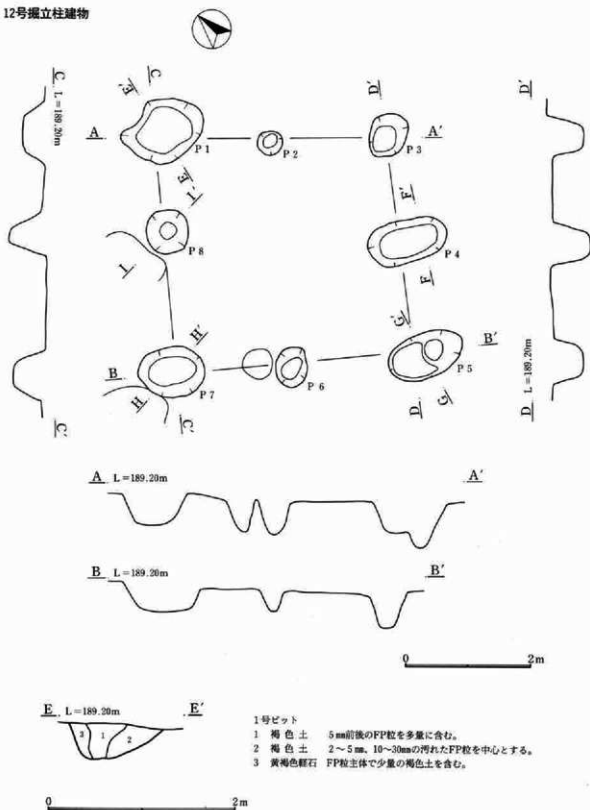
第316図 11号掘立柱建物

12号掘立柱建物

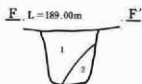
位置 FM-54・55、FN-54・55、FO-54 重複関係 単独で検出された。規模 桁行2間3尺(北辺3.70m、南辺3.84m)、梁行2間(東辺3.43m、西辺3.78m)を測る。主軸方位 N-43°-E  
 床面積 面積は5.598m<sup>2</sup>を測る。柱穴間隔 桁行北辺12尺3寸強、南辺12尺8寸で、梁行東辺11尺4寸強、西辺12尺6寸となる。桁行北辺1~2号ピット間が6尺1寸強(1.84m)、2~3号ピット間が6尺2寸(1.86m)、南辺5~6号ピット間が6尺7寸弱(2.00m)、6~7号ピット間が6尺1寸強(1.84m)を測る。梁行東辺3~4号ピット間が5尺7寸弱(1.70m)、4~5号ピット間が5尺8寸弱(1.73m)、西辺では7~8号ピット間が7尺6寸(2.28m)、8~1号ピット間が5尺(1.50m)を測る。柱穴形態・深度 2、8号ピットが円形、4、5、6、7号ピットが楕円形、1、3号ピットが崩れた隅丸方形を呈する。1号ピット



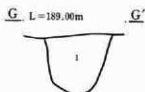
12号掘立柱建物



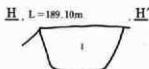
第317図 12号掘立柱建物



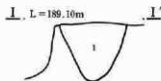
- 4号ピット  
 1 暗褐色土 2～5mm、10～20mmのFP粒が  
 ぎっしり詰まる。  
 2 暗褐色土 1層に似るが10～20mmの  
 FP粒を多量に含む。



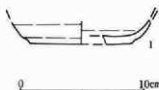
- 5号ピット  
 1 黒褐色土 2～10mmのFP粒を含む。



- 7号ピット  
 1 褐色土 5mmのFP粒の中に10～30mmの  
 FP粒を少量含む。



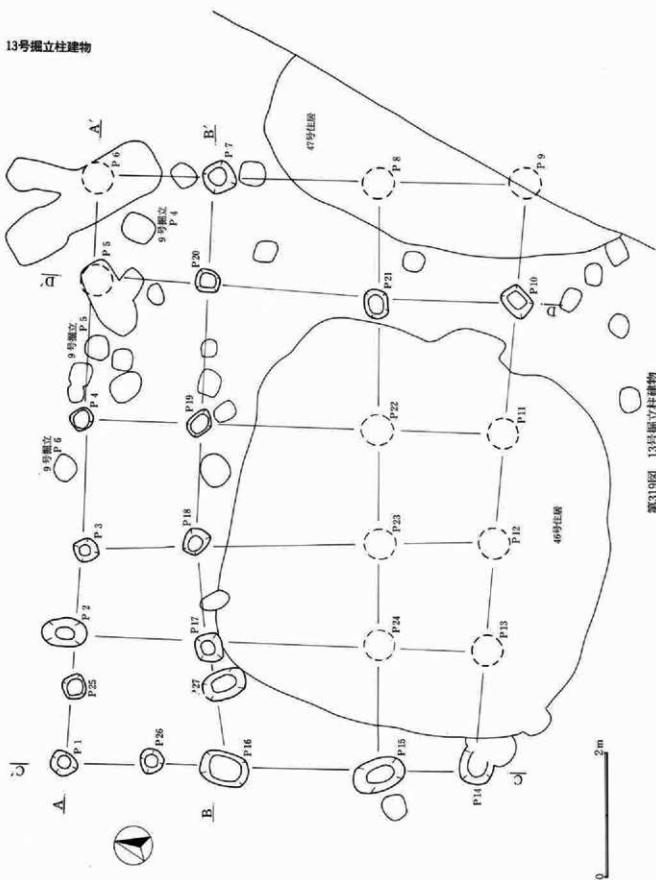
- 8号ピット  
 1 暗褐色土 2～5mm、10～20mmのFP粒  
 を含む粗い。



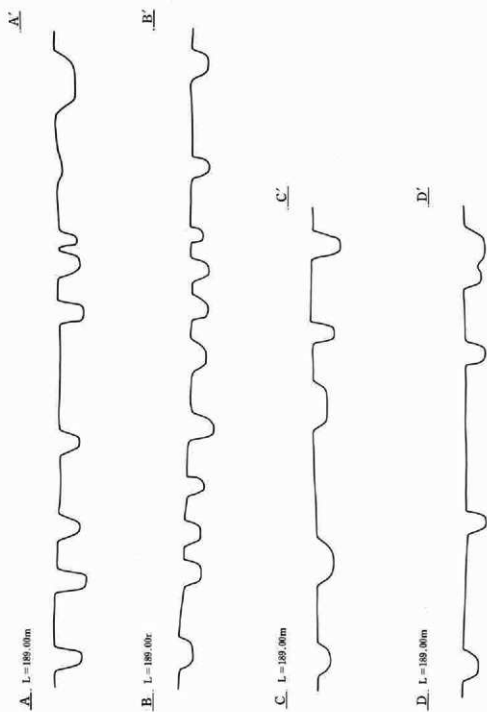
第318図 12号掘立柱建物及び出土遺物

トは136×106cm、深さ36cm、2号ピットは42×38cm、深さ38cm、3号ピットは66×60cm、深さ59cm、4号ピットは128×64cm、深さ58cm、5号ピットは124×72cm、深さ60cm、6号ピットは64×52cm、深さ51cm、7号ピットは90×86cm、深さ52cm、8号ピットは径74cm、深さ54cmを測る。桁行南北辺の中間ピットがともに小型となっている。1号ピットでは、平面では明確でなかったが土層断面において柱穴状の土層が確認でき、その太さは14～22cmである。 **遺物** 1号ピットからは土師器甕2片、須恵器杯1片、蓋1片、5号ピットからは土師器甕1片、須恵器杯1片、蓋1片、鉄滓1個、7号ピットからは土師器杯4片、甕29片、8号ピットからは土師器甕底部1片、胴部1片が出土している。いずれも小破片であるが5号ピット出土の杯が図化し得た。底部はヘラ削りかと思われる。7号ピットの杯は、丸みを残す底部から曲線で口縁部に至り底部にのみヘラ削りを残す資料、平底の底部から稜をなして口縁部へ立ち上がり内面に粗く放射状暗文を施す資料が見られる。1号ピットの蓋片はカエリを残す資料である。 **所見** 出土した土器片は7世紀と8世紀代の特徴を示す資料である。

13号獨立柱建物



第319図 13号獨立柱建物



第320図 13号孤立柱建物

## 13号掘立柱建物

位置 ET-57・58・59、EU-57・58・59、EV-57・58

重複関係 46、47号住居、9号掘立柱建物と重複している。土層からの新旧は不明だが、土器の年代観からは47号住居が他遺構より新しいといえる。

規模 桁行5間(北辺9.9m、南辺9.8m)、梁行3間(東辺推定7.0m、西辺6.7m)を測る。北辺と東辺に扉を持つ2×4間の建物の可能性も考えられるが、大部分を46号住居と重複しているため、明らかにできない。ここでは3×5間の遺構として扱っておく。

主軸方位 N-83°-E

床面積 面積は66.21m<sup>2</sup>を測る。

柱穴間隔 桁行北辺33尺、南辺32尺7寸弱で、梁行東辺推定23尺3寸強、西辺22尺3寸強となる。1～2号ピット間、1～16号ピット間に各々間隔を狭くとる25、26号ピットが位置する。桁行北辺では1～2号ピット間が6尺9寸(2.07m)、2～3号ピット間が4尺5寸(1.35m)、3～4号ピット間が6尺9寸強(2.08m)、4～5号ピット間が推定7尺5寸強(2.26m)を測る。南辺では9～10号ピット間が推定6尺3寸強(1.90m)、10～11号ピット間が推定7尺1寸弱(2.12m)、13～14号ピット間が推定6尺2寸強(1.86m)を測る。梁行東辺では6～7号ピット間が6尺5寸弱(1.94m)、7～8号ピット間が8尺5寸弱(2.54m)を測る。梁行西辺では14～15号ピット間が5尺3寸強(1.58m)、15～16号ピット間が8尺3寸弱(2.50m)、16～1号ピット間が8尺5寸(2.55m)、1～26号ピット間が4尺6寸(1.38m)、26～16号ピット間が3尺9寸弱(1.16m)を測る。さらに、2～17号ピット間が7尺8寸強(2.30m)、17～24号ピット間が9尺1寸(2.73m)を測る。3～18号ピット間が5尺8寸(1.74m)、18～23号ピット間が9尺8寸強(2.95m)を測る。4～19号ピット間が6尺3寸強(1.88m)、19～22号ピット間が9尺6寸(2.88m)を測る。5～20号ピット間が6尺1寸強(1.84m)、20～21号ピット間が9尺1寸弱(2.72m)、21～10号ピット間が7尺4寸(2.22m)を測る。25～27号ピット間は7尺9寸強(2.38m)を測る。

柱穴形態・深度 2、15号ピットが楕円形、16、27号ピットが顕著な隅丸長方形を呈する他は隅丸方形、台形等をなしている。1号ピットは42×38cm、深さ46cm、2号ピットは72×36cm、深さ36cm、3号ピットは36×36cm、深さ32cm、4号ピットは36×32cm、深さ42cm、7号ピットは50×48cm、深さ28cm、10号ピットは50×38cm、深さ26cm、14号ピットは推定62×55cm、深さ20cm、15号ピットは84×50cm、深さ26cm、16号ピットは78×52cm、深さ22cm、17号ピットは44×42cm、深さ28cm、18号ピットは43×36cm、深さ30cm、19号ピットは44×32cm、深さ27cm、20号ピットは38×38cm、深さ34cm、21号ピットは48×40cm、深さ34cm、25号ピットは38×38cm、深さ50cm、26号ピットは40×36cm、深さ36cm、27号ピットは70×45cm、深さ30cmを測る。

遺物 17号ピットから土師器杯4片、甕4片の小破片が出土している。杯片は丸底で口縁部がやや外反するものがあり、底部のヘラ削りは口縁部に及んでいない。甕は小型で台付甕になる可能性がある。4号ピットからは小破片で土師器杯2片、甕3片の出土をみた。杯片は平底の可能性はあるか定かではない。

所見 4号ピット出土土器は時期を確定する積極的な特徴はみられない。17号ピット出土の土器片から捉えられる様相は8世紀代であり、その中でも後半になると思われる。なお、本遺構を46号住居に付属する施設の一部との見方もできよう。しかし、主軸が各々ずれていることや、10、14、15、21号ピットが46号住居に近づきすぎており、本来存在したと考えられる周堤帯と位置的に重複してしまうこと、ピットの状態から垂木を受けるものではないことなどから、別遺構とした。

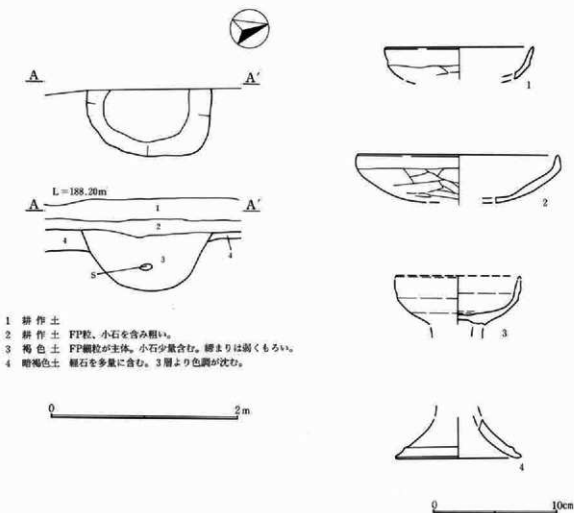
### 第3節 土坑

白井南中道遺跡における土坑は中世～近世・近代も含めると約400基近い数が検出されている。その中で奈良・平安時代の土坑として15基を抽出した。抽出にあたっては大部分の住居の埋没土である褐色系色調を呈する土壌及び類似する土層を手掛かりとしている。奈良・平安時代の土器は破片として量の多少の差はあるが、近代、現代と思われる土坑からも出土するので、遺物の有無は判断材料としていない。

1区には23、24号土坑がEA-65、EB-65グリッドに隣接して位置し、他は全て2区である。68号土坑がEU-56.57、EV-56.57に位置し、76、143号土坑がFE-55～57、FF-55～57にかけて近接して位置し、120号土坑がFL-57、FM-57グリッドに入り、他は全てFMラインより北に位置している。

遺物は23、24号土坑において一括性の強い土器が出土しており、76号土坑からは「J」字状の鉄製品が認められた。

#### 23号土坑



第321図 23号土坑及び出土遺物

位置 EA-65、EB-65

重複関係 単独で検出された。

規模 1.30×残存長0.70mを測る。

形態 不整形形を呈すと推定される。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、46cmを測る。Hr-F A層上面まで掘り込まれている。

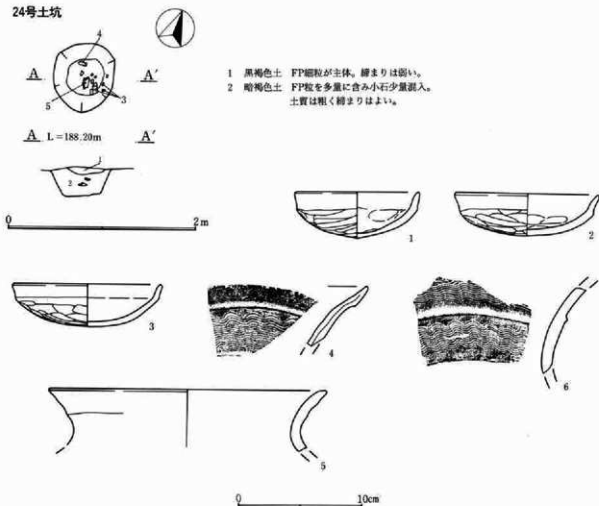
主軸方位 N-16°-E (推定)

埋没土 住居と同様の褐色系色調を呈す土壌である。

遺物 土師器杯2個体、須恵器高杯の杯部及び脚部が図化し得た。杯は模倣杯系統のものが含まれる。2の杯は平底気味の底部から緩やかに弯曲して口縁部に至る形で、口縁部にまで削りが及んでいる。他に小片で杯2片があり、そのうちのひとつは模倣杯で内面を研磨している。3は須恵器高杯の杯部で口唇部をやや欠損し、脚部との接合面には円形に沈線を入れて密着を図っている。他に別個体の高杯片(?)がある。4の高杯脚部は3の杯部と色調が似通う資料である。他に須恵器1片、頸部を含む土師器壺6片が見られる。

所見 出土した土器の様相は7世紀後半の時期を示すものである。

#### 24号土坑



第322図 24号土坑及び出土遺物

位置 EB-65

重複関係 単独で検出された。

規模 0.75×0.70mを測る。

形態 ほぼ円形を呈する。

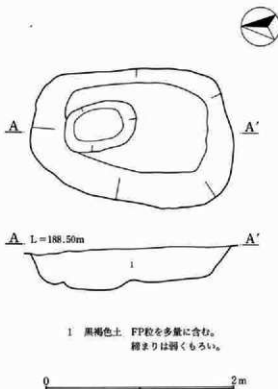
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、30cmを測る。掘り込みはHr-FP層中で留まっている。

埋没土 住居と同様の褐色系色調を呈している。

遺物 土師器杯3個体、甕1個体、須恵器甕1個体が図化し得た。出土状態は、4の須恵器甕が土坑底面から約3.5cm高い位置で出土し、3の杯と5の甕が14~24.5cm底面から離れてまとまって認められた。杯はいずれも模倣杯の系統で明確な稜を有する。1のみ口径が9.8cmと小ぶりである。他に図化できなかった杯小片が11片見られるがいずれも模倣杯の特徴を示す資料である。土師器甕については5の他には底部~胴部小片が50片出土している。5の同一個体と思われる頸部の器肉は厚手となるものである。4、6の須恵器甕口縁部は同一個体と認められる資料で、他に1片同一個体と思われる小破片がある。

所見 出土した土器の様相は7世紀後半の特徴を示している。図化できなかった小破片類も看取できる特徴は同時期のものである。

### 68号土坑



1 黒褐色土。FP粒を多量に含む。  
締まりは弱くもろい。

位置 EU-56・57、EV-56・57

重複関係 単独で検出された。

規模 2.2×1.4mを測る。

形態 隅丸で不整長方形を呈している。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、46cmを測る。Hr-F A層上位まで掘り込んでいる。

主軸方位 N-8°-E

埋没土 住居埋没土に似たHr-FP粒を含む土壌であるが、やや黒味を帯びている。

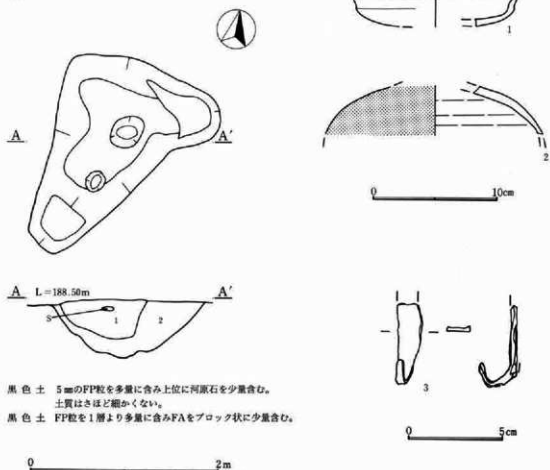
遺物 小破片で図化できなかったが、土師器杯8片、甕30片、須恵器杯1片、椀4片、甕5片、羽釜1片の出土があった。土師器杯は緩やかに弯曲して口縁部に至る資料と、平底の底部からやや膨らみをもって口縁部に至り底部にのみ削りを有する資料が見られる。須恵器椀の底部は回転糸切りで、丸みをもつ口縁部片が見られる。羽釜は罎下まで縦方向の削りが及んでいる資料である。

所見 出土した土器は7、9、10世紀代の特徴を示している。

第323図 68号土坑



## 76号土坑



- 1 黒色土 5mmのFP粒を多量に含み上位に河原石を少量含む。  
土質はさほど細かくない。
- 2 黒色土 FP粒を1層より多量に含みFAをブロック状に少量含む。

第324図 76号土坑及び出土遺物

位置 FE-56・57、FF-56・57

重複関係 単独で検出された。

規模 2.4×1.7mを測る。

形態 不整形である。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、60cmを測る。掘り込みはH r-F A層上位まで及んでいる。

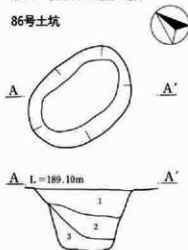
主軸方位 N-33°-E

埋没土 H r-F P粒の含有が他例より少なく、色調も黒味を帯びている。

遺物 土師器杯および灰釉陶器長頸壺を図化できた。杯は模倣杯の系統であり、別個体の模倣杯小破片が2片見られる。他に図化できなかった小破片は土師器杯5片、壺14片、須恵器杯1片、椀3片、甕1片が出土している。土師器杯の底部片は丸底と平底気味の例がある。鉄製品は端部が曲折して「J」字状を呈している。片側面が棟ともみられ、刀子の可能性も考えられる。

所見 1は7世紀後半代、2は10世紀前半代の資料であろう。小破片から看取できる特徴は他に8世紀代と9世紀代の時期を示している。

86号土坑



- 1 黒褐色土 FP粒(φ5mm前後)を多く含む。2層より土が多い。  
 2 暗褐色土 φ2~3mm、5mm、1~2cmの大きさを中心にFP粒が  
 ぎっしり詰まる。土質の粗めの暗褐色土で汚れている。  
 3 淡黄褐色土 FP粒(φ5~10mmほど)がぎっしり詰まる。暗褐色土が  
 FP粒の中に横線状に薄く3層をなしている。

0 2m  
 第325図 86号土坑

位置 FN-54

重複関係 単独で検出された。

規模 1.20×0.86mを測る。形態 楕円形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、46cmを測る。Hr-FP下黒色土上面まで掘り込んでいる。

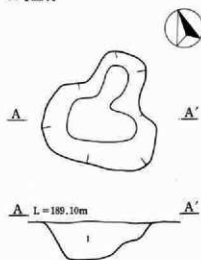
主軸方位 N-93°-E

埋没土 Hr-FP主体層および住居埋没土より黒味を帯びた土層である。

遺物 土師器甕4片が出土している。いずれも胴部と頸部の小破片である。胴部破片は非常に器肉が薄いものであり、口縁部が「コ」字状の甕と思われる。

所見 出土した土器は9世紀代のものと考えられる。

90号土坑



- 1 暗褐色土 やや茶色味を帯びた暗褐色土を主体にφ1~10mmほどの大きさを中心にFP粒を多量に含み、φ2~3cmのFP粒も少量含む。

0 2m

第326図 90号土坑

位置 FM-55・56、FN-55・56

重複関係 単独で検出された。

規模 1.24×推定0.78m(突出部1.24×0.54m)を測る。

形態 不定形あるいは隅丸長方形の1辺が突出した形か。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、42cmを測る。Hr-FP層中で掘り込みは留まっている。

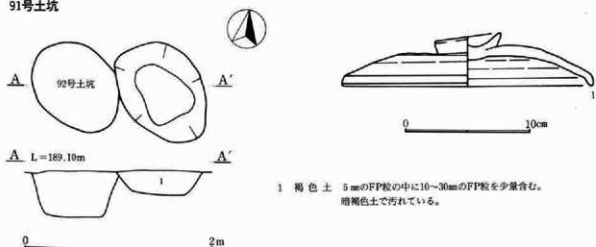
主軸方位 N-140°-E(突出部N-38°-E)

埋没土 住居埋没土と同様の褐色系色調を呈するもので、やや色調が沈む。

遺物 出土をみなかった。

所見 時期は不明である。

## 91号土坑



- 1 褐色土 5mmのFP粒の中に10~30mmのFP粒を少量含む。  
暗褐色土で汚れている。

第327図 91号土坑及び出土遺物

## 位置 FN-55

**重複関係** 92号土坑と重複関係にあり、92号土坑を掘り壊している。

**規模** 1.2×0.9mを測る。 **形態** 楕円形

**深度** 確認面である軽石層上面からの深さは、48cmを測る。掘り込みはHr-FP層中で留まっている。

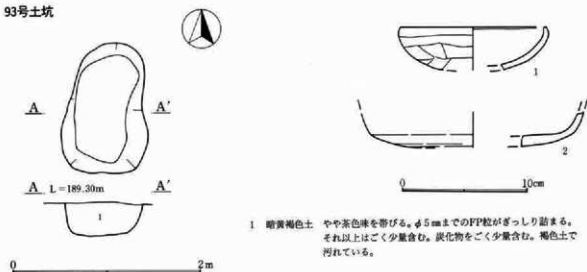
**主軸方位** N-137°-E

**埋没土** 住居埋没土に類似した土壌であるが色調がやや沈む。

**遺物** 1の須恵器蓋と小破片で土師器杯1片、甕25片、須恵器1片が出土した。1はカエリが消失しており、天井部中位まで回転ヘラ削りが施されている。土師器杯は丸みを帯びて、緩く外反する口縁部に至る形と思われる。面の状態は悪いが、削りは口縁部まで及んでいないとみられる。甕は割破破片がほとんどで器肉は薄いものがある。

**所見** 出土した須恵器蓋は8世紀前半代と判断され、小破片の土師器杯は8世紀代、土師器甕は9世紀代の特徴を有している。

## 93号土坑



- 1 暗黄褐色土 やや茶色味を帯びる。φ5mmまでのFP粒がざっしり詰まる。それ以上はごく少量含む。炭化物をごく少量含む。褐色土で汚れている。

第328図 93号土坑及び出土遺物

93号土坑

位置 FO-55

重複関係 単独で検出された。

規模 1.4×0.9mを測る。

形態 崩れた隅丸長方形。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、36cmを測る。掘り込みは土坑底面の一部がHr-FP下黒色土に達しているが、大部分はHr-FP層中に留まっている。

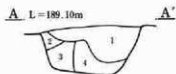
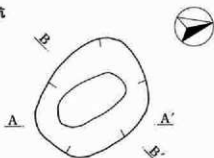
主軸方位 N-11°-E

埋没土 住居埋没土と同様の褐色系色調を呈する土壌である。

遺物 1の土師器杯と2の須恵器盤が出土している。杯は底部から丸みを帯びて口縁部に至る形でヘラ削りと口縁部横ナブの間に無調整帯が認められる。盤は底部に回転ヘラ削りがみられるものである。なお、磁器1片も出土している。

所見 出土した土器の特徴は8世紀初頭頃の時期のものである。

98号土坑



- 1 暗褐色土 焼土を主に上位に含む。FP粒を含む。
- 2 暗褐色土 1層に似るが焼土を含まない。
- 3 暗褐色土 FP粒主体で、暗褐色土を少量含む。
- 4 淡黄色軽石 FP粒主体で、少量の褐色土で汚れる。



第329図 98号土坑

位置 FN-54・55

重複関係 12号掘立柱建物の域内に位置する。各々時期幅が大きく重複する時期もあるので新旧の関係は決しがたいが総体的には本土坑のほうが新しい。

規模 1.3×1.0mを測る。

形態 楕円形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、58cmを測る。

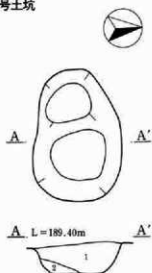
主軸方位 N-145°-E

埋没土 住居埋没土と同様の褐色系色調を呈す土層と下位に位置する Hr-FP 主体層である。上位には焼土層が位置している。

遺物 土師器壺小片が26片出土している。その中には器内の厚い胴の張る形と思われるものと器内が非常に薄いもの、小型壺で「コ」字状口縁を呈すものがある。

所見 出土した土器の特徴は8世紀代と9世紀代の時期を示している。

## 108号土坑



- 1 黒褐色土  $\phi$  2~5mm,  $\phi$  1cmほどの大きさのFP粒がざっさり詰まる。土質の粗い黒褐色土で得られている。
- 2 暗灰褐色土 土質の細かい(FA?)土を主体とし、 $\phi$  2~3mmのFP粒を含む。



第330図 108号土坑

位置 FN-57

重複関係 単独で検出された。

規模 1.40×0.96mを測る。

形態 楕円形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、26cmを測る。

Hr-FA層上位まで掘り込んでいる。

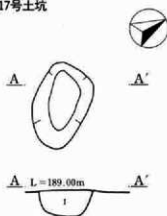
主軸方位 N-97°-E

埋没土 住居埋没土に類似するが色調がやや沈む。

遺物 土師器甕2片、須恵器杯1片が出土している。いずれも小片である。

所見 出土した土器からは時期を示す特徴は捉えられない。

## 117号土坑



- 1 暗褐色土 土質は細かい、 $\phi$  5mmほどのFP粒を少量を含む。



第331図 117号土坑

位置 FM-56

重複関係 単独で検出された。

規模 0.88×0.54mを測る。

形態 楕円形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、38cmを測る。

Hr-F層中で掘り込みは留まっている。

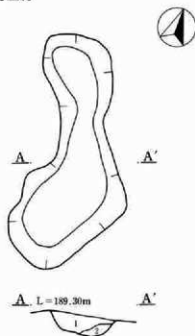
主軸方位 N-142°-E

埋没土 住居埋没土に類似する褐色系土壌である。

遺物 出土をみなかった。

所見 遺物の出土がなく、時期を特定できない。

119号土坑



- 1 暗褐色土 土質は粗い。φ1~2cmほどのFP粒を多量に含む。
- 2 暗褐色土 φ5mmまでのFP粒を多量に含む。1層土で汚れている。

0 2m

第332図 119号土坑

位置 FN-56・57

重複関係 単独で検出された。

規模 2.50×1.26mを測る。

形態 不定形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、22cmを測る。掘り込みはH r-F P層中で留まっている。

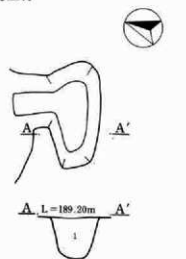
主軸方位 N-5°-E

埋没土 住居埋没土に類似するが色調がやや沈む。

遺物 土師器杯2片、甕18片、須恵器蓋2片が出土した。土師器杯では模倣杯の口縁部小片が見られる。甕胴部は器肉が薄いものである。須恵器蓋は天井部に回転ヘラ削りが認められる。蓋の他の1片は端部片でカエリは消失している。

所見 1片のみ模倣杯小片が認められるが、他の土器の様相は9世紀代と考えられる。

120号土坑



- 1 黒褐色土 φ2~5mmのFP粒を多量に含む。  
φ1~2cmのFP粒を少量含む。

0 2m

第333図 120号土坑

位置 FL-57、FM-57

重複関係 57号住居と重複しているが、新旧関係は不明である。

規模 1.22×(推定)0.54mを測る。

形態 楕円形と推定される。

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、43cmを測る。掘り込みはH r-F P層中で留まっている。

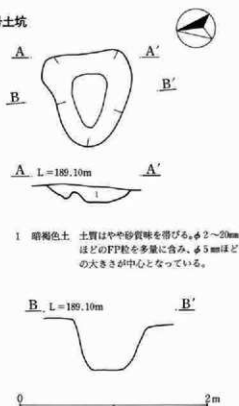
主軸方位 N-78°-E

埋没土 住居埋没土に似るが黒味を帯びている。

遺物 出土をみなかった。

所見 遺物からは時期の確定はできない。土層断面では確認し得なかったが、57号住居に伸びて重複する部分は120号土坑と重複する別土坑の可能性も考えられる。

## 123号土坑



第334図 123号土坑

位置 FN-54

重複関係 12号掘立柱建物の範囲内に位置しているが、新旧の関係は不明である。

規模 1.01×0.96mを測る。

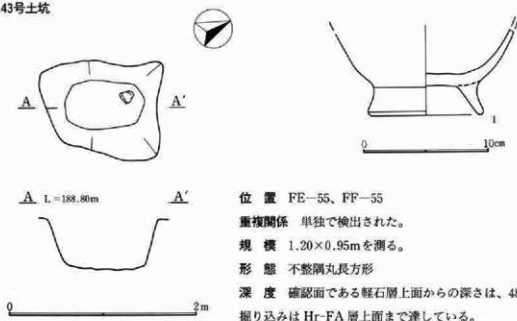
形態 不定形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは45cmを測る。Hr-FP層中で掘り込みは留まっている。

主軸方位 N-93°-E

遺物 土師器杯1片が出土している。外面が荒れて不明確であるが、模倣杯の系統の資料と思われる。内面には放射状暗文が施されている。所見 出土した土器の特徴は7世紀代を示すと考えられる。

## 143号土坑



第335図 143号土坑及び出土遺物

位置 FE-55、FF-55

重複関係 単独で検出された。

規模 1.20×0.95mを測る。

形態 不整隅丸長方形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、48cmを測る。

掘り込みはHr-FA層上面まで達している。

主軸方位 N-26°-E

埋没土 住居埋没土に類似する。

遺物 須恵器碗と小破片の土師器杯底部1片、甕9片が出土している。1の須恵器碗は酸化焙で、発達した高台を有している。口唇部は若干欠損している。甕片は2次焼成を受けたものが2片含まれる。

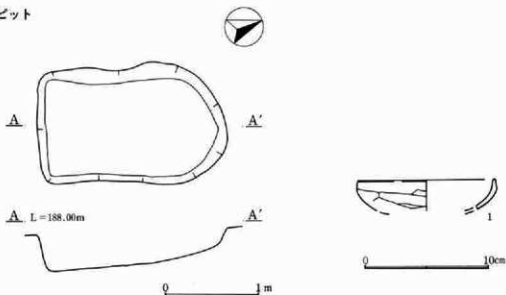
所見 碗は10世紀後半代の時期と考えられる。小破片類からは时期的な特徴は捉えられない。

## 第4節 ピット

ピットは1～5区で検出されている。しかし3～5区においては検出数が極端に減少し、調査の結果木の根等の攪乱であることが判明している。1～2区においては掘立柱建物柱穴となったピットを除き1147基を検出し、遺物の出土をみたピットは239基を数えた。なおかつ近代、現代の掘り込みとも埋没土が異なっていた。木の根等の攪乱を若干含むとしても多くが奈良・平安時代及び中世、近世までの時期である。その中で住居埋没土と同様の褐色系色調を呈する埋没土とそれに類似する埋没土によって496基を抽出した。本節では図化できる遺物を出土したピットを優先して19基を呈示するが、他のピットについては表及び付図を参照されたい。

ピットの集中部分は19号住居から21号住居にかけて、23号住居から27号住居にかけて、そして22号住居から42号住居までの間で見られる。2区では全体的に認められるが、46号住居から48号住居にかけて、48号住居から54号住居にかけて、さらに56号住居から最北部にわたって集中的に認められる。

110号ピット



第336図 110号ピット及び出土遺物

位置 DW-65

重複関係 単独で検出された。

規模 2.0×1.3mを測る。

形態 北辺が丸みを帯びた長方形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、18～38cmを測る。

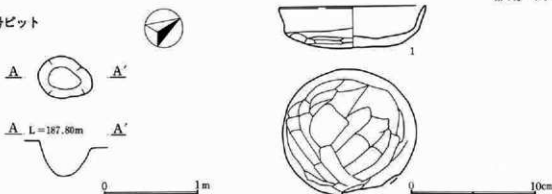
主軸方位 N-19°-E

遺物 土師器杯1個体が図化し得た。底部から丸みを帯びて口縁部に至り、削りが口縁部に達して縁を作っている。他に土師器杯2片と甕2片があり、杯はいずれも模倣杯の系統のものである。

所見 出土した土器の様相は7世紀後半の特徴を示している。



## 245号ビット



第337図 245号ビット及び出土遺物

位置 EF-63

重複関係 単独で検出された。

規模 0.55×0.45mを測る。

形態 楕円形

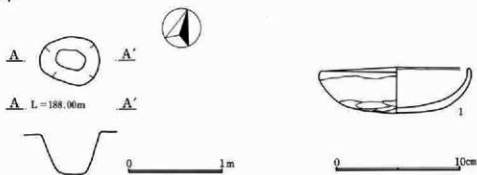
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、36cmを測る。

主軸方位 N-37-E

遺物 口縁部の一部を欠損したのみの土師器杯が出土している。模倣杯で径10.6cm、口径11.6cmを図る。底部は不定方向のヘラ削りで、稜下は横ナデをしている。色調は灰白色で還元焙焼成であるが、前述のように技法は土師器のものである。

所見 出土した土師器杯は7世紀後半の時期と考えられる。

## 256号ビット



第338図 256号ビット及び出土遺物

位置 EG-61

重複関係 単独で検出された。

規模 0.6×0.5mを測る。

形態 楕円形

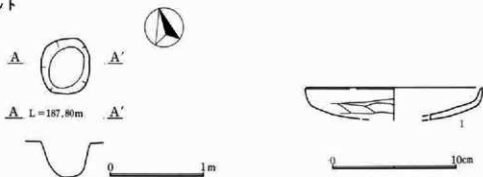
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、45cmを測る。

主軸方位 N-76-E

遺物 1/3ほど欠損している土師器杯が出土している。底部は不定方向のヘラ削りで口縁部まで削りは及んでいない。

所見 出土した土器の様相は7世紀後半の時期と考えられる。

313号ピット



第339図 313号ピット及び出土遺物

位置 EI-60・61

重複関係 314号ピットと隣接している。

規模 0.60×0.50mを測る。

形態 楕円形

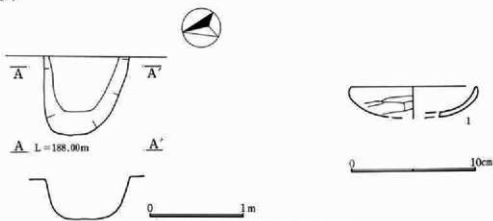
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、36cmを測る。

主軸方位 N-10°-E

遺物 土師器杯が3片出土し、そのうち1個体分を図化し得た。底部は不定方向のヘラ削りで口縁部まで達している。

所見 出土した土器の特徴は7世紀後半～8世紀初頭頃の時期を示している。

329号ピット



第340図 329号ピット及び出土遺物

位置 EH-60、EI-60 重複関係 単独で検出された。

規模 残存長0.90×0.80mを測る。

形態 楕円形と推定される。

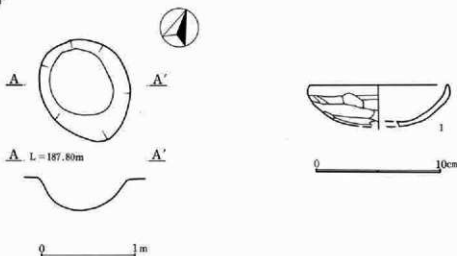
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、46cmを測る。

主軸方位 N-110°-E

遺物 1の土師器杯が図化できた。ヘラ削りが底部～口縁部に施され、削り出した稜線が弱いものである。他に小破片として土師器杯8片、甕16片、細片15片が出土している。杯の様相は1と同様のものとヘラ削りが口縁部に及んでいない例とがみられる。甕の口縁部片は少なくとも「コ」字状にはなっていない。

所見 1の杯は7世紀末～8世紀前半の時期と考えられ、小破片の杯も8世紀前半代のものである。

## 406号ビット



第341図 406号ビット及び出土遺物

## 位置 EJ-60

**重複関係** 7号掘立柱建物の範囲内に位置するが、土層からは新旧は不明である。出土土器の時期を参考にすれば、本遺構の方が時期的に古い可能性がある。

**規模** 1.10×0.90mを測る。

**形態** 楕円形

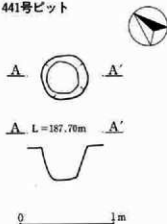
**深度** 確認面である軽石層上面からの深さは、35cmを測る。

**主軸方位** N-135°-E

**遺物** 土師器杯6片、甕1片、須恵器甕2片が出土している。このうち土師器杯1個体を図化し得た。ヘラ削りが底部～口縁部まで施され、口縁部には削りによる稜線が作り出されている。他の小破片の杯は横紋杯の口縁部片と1と同様の様相を有する杯であることが看取される。甕の口縁部片は「く」字状を呈している。甕胴部については胴の張る形の破片がみられる。

**所見** 1の杯は7世紀末～8世紀前半の特徴を持ち、他の杯破片は7世紀後半の様相と考えられる。胴部の張りを持つ土師器甕も7世紀後半代と思われるが、他の甕破片の様相は9世紀以降とされよう。

## 441号ビット



第342図 441号ビット

## 位置 EJ-63

**重複関係** 単独で検出された。

**規模** 0.50×0.50mを測る。

**形態** ほゞ円形

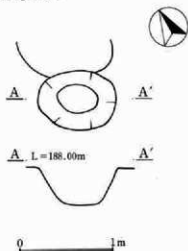
**深度** 確認面である軽石層上面からの深さは、35cmを測る。

**主軸方位** N-119°-E

**遺物** いずれも小破片で図化できなかったが、土師器杯2片、甕7片、須恵器甕2片の出土をみた。土師器杯は口縁部小片で、底部から丸みを帯びて口縁部に至る器形でヘラ削りが口縁部にまで及んでいる。大型で深手になると思われる。

**所見** 小破片から捉えられる土器の特徴は7世紀代が考えられる。

470号ピット



第343図 470号ピット

位置 EL-60

重複関係 469号ピットと重複している。

規模 0.80×0.60mを測る。

形態 楕円形

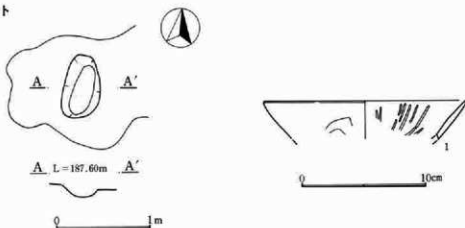
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、40cmを測る。

主軸方位 N-116°-E

遺物 土師器杯10片、甕12片、須恵器杯1片が出土している。土師器杯は丸みを帯びた底部から浅く外反気味に立ち上がる資料が複数認められる。ヘラ削りは底部のみに施される。また、ごく短く内傾する全体に浅い例もある。

所見 出土した小破片から捉えられる特徴は8世紀でも古い特徴と新しい特徴があり、時期は8世紀代としておきたい。

478号ピット



第344図 478号ピット及び出土遺物

位置 EL-60

重複関係 477号ピットと重複し、477号ピットに掘り込まれている。

規模 0.65×0.40mを測る。

形態 楕円形

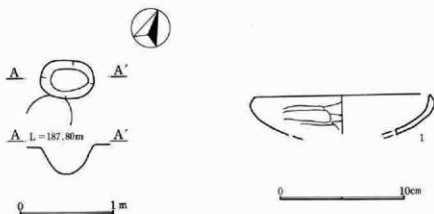
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、19cmを測る。

主軸方位 N-6°-E

遺物 土師器杯は可能性のあるものを含めて21片、甕26片、須恵器杯1片の出土があった。いずれも小破片であったが、1の土師器杯を図化できた。口縁部下半にもヘラ削りが入り、内面は放射状暗文が施されている。他の杯破片から捉えられる特徴は模倣杯6片、丸みを帯びて口縁部に至る器形で口縁部までヘラ削りが及んで稜を削り出しているもの3片、内面黒色処理で研磨されているもの1片が見られる。須恵器杯は底部片で回転糸切りである。

所見 1の杯は8世紀中頃と考えられるが、他の杯小破片から捉えられる様相は7世紀後半を示している。須恵器杯は9世紀代のものである。

## 482号ビット



第345図 482号ビット及び出土遺物

位置 EK-61、EL-61

重複関係 483号ビットに隣接している。

規模 0.55×0.45mを測る。

形態 楕円形

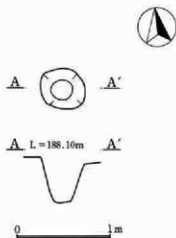
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、31cmを測る。

主軸方位 N-69°-E

遺物 土師器杯2片、甕1片の出土があった。いずれも小破片であるが、杯1片を図化し得た。丸底の底部から丸みを帯びてやや内傾する口縁部に至る器形でヘラ削りが口縁部まで及ぶことによって稜線を削り出している。他の杯片は大型で深い丸底になると思われ、口縁部が直立気味になるものでヘラ削りが口縁部に及んでいるものである。甕は口縁部小破片である。

所見 出土した杯片の特徴は7世紀後半と考えることができる。

## 509号ビット



第346図 509号ビット

位置 EM-61

重複関係 単独で検出された。

規模 0.50×0.44mを測る。

形態 楕円形

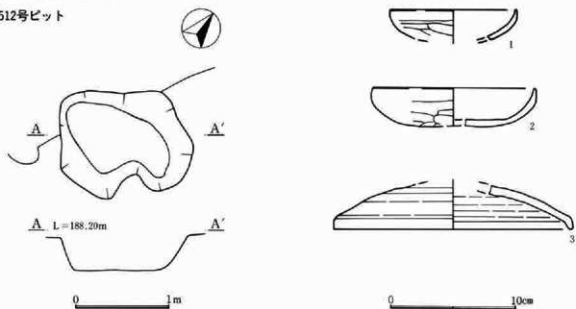
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、57cmを測る。

主軸方位 N-136°-E

遺物 土師器杯6片、甕15片の出土をみている。いずれも小破片で図化には至っていない。杯破片は丸底でやや外反気味の口縁部をもちヘラ削りは口縁部には及ばない資料と、平底気味の底部で短く外反する口縁部を有すると思われる資料である。甕はごく薄い胴部破片と器肉の厚いものがある。薄い胴部片は「コ」字状口縁になると思われる。

所見 出土した土器破片から捉えられる特徴は杯、甕が8世紀代であり、「コ」字状口縁を有する甕の存在から9世紀代の土器も存在すると考えられる。

512号ピット



第347図 512号ピット及び出土遺物

位置 EL-61

重複関係 溝状の掘り込みと重複している。

規模 1.40×0.86mを測る。

形態 不定形

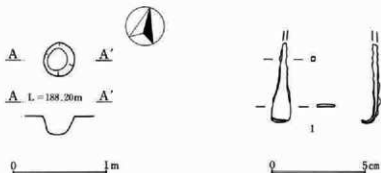
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、37cmを測る。

主軸方位 N-53°-E

遺物 図化し得た遺物は土師器杯2個体、須恵器蓋1個体である。1、2は底部のヘラ削りが僅かに口縁部に及んでいない資料である。3はカエリが消失しており、天井部に回転ヘラ削りがある。他には土師器杯16片、甕29片、須恵器碗3片、瓶頸3片の出土をみたがいずれも小破片で図化できなかった。土師器杯は模倣杯が1片あり、他は丸みをおびてやや内傾する口縁部に至りヘラ削りによる削り出しの稜を有する小破片や、丸みを帯びてやや外反する口縁部でヘラ削りが口縁部に及ぶもの、ヘラ削りが口縁部に至らないものがある。甕破片は口縁部が「く」字状を呈すものと、胴が張り出す形と思われる破片がある。

所見 図化できた資料は8世紀前半～後半の資料であり、小破片の中には7世紀後半の杯や10世紀前半頃の須恵器碗が含まれている。

543号ピット



第348図 543号ピット及び出土遺物

位置 EM-63

重複関係 単独で検出された。

規模 0.35×0.30mを測る。

形態 楕円形

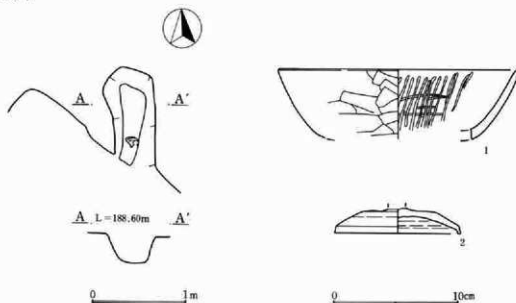
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、21cmを測る。

主軸方位 N-167-E

遺物 「J」字状を呈する鉄製品が出土している。上端は欠損しており、下端は厚みを減じ幅広になる。鉋の可能性も考えられるが下端が曲折しすぎており、断定できない。土器の出土は認められなかった。

所見 遺物は鉄器のみであり、本遺構の時期は不明である。

756号ビット



第349図 756号ビット及び出土遺物

位置 EV-57

重複関係 755号ビットと重複し、755号ビットに掘り壊されている。また9号掘立柱建物に隣接している。

規模 残存長1.00×0.50mを測る。

形態 北西部分がやや膨らんだ長方形と推定される。

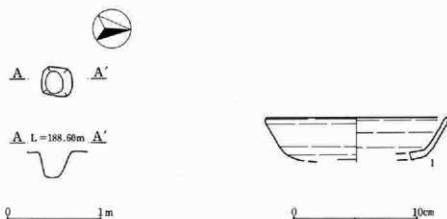
柱穴の深さ 確認面である軽石層上面からの深さは、32cmを測る。

主軸方位 N-178-E

遺物 1の土師器杯が図化できた。杯は口縁部にヘラ削りを有し内面には放射状暗文がみられる。蓋は底面から9.7cm高い位置で出土している。小型で柄は突起状になると思われる。他に小破片で土師器杯21片、甕60片、須恵器杯1片が出土している。土師器杯片は丸く弯曲して口縁部に至り削り出しの稜を持たないものや、深く大型のもので削り出しの稜をもたないもの、平底で外反する口縁部を持つものがみられる。須恵器杯の底部は回転糸切りの痕跡がみられる。甕破片は器肉の薄いものである。

所見 1、2の土器は8世紀前半代と考えられ、他の杯小破片は8世紀代、甕は「コ」字状口縁の甕と想定でき9世紀代とされる。須恵器杯も9世紀代と考えられよう。

764号ピット



第350図 764号ピット及び出土遺物

位置 EV-57

重複関係 9号掘立柱建物の範囲内に位置する。土層での新旧は不明だが出土する土器からみれば本遺構の方が早く掘削されているといえよう。

規模 0.35×0.30mを測る。

形態 隅丸方形

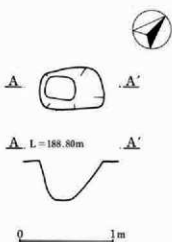
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、39cmを測る。

主軸方位 N-28°-E

遺物 須恵器杯が図化し得た。僅かに残る底部からは回転ヘラ削りが施されていることが看取される。他に土師器杯1片、甕4片の小破片が出土している。

所見 出土した土器から捉えられる特徴は8世紀前半～中頃と思われる。

808号ピット



第351図 808号ピット

位置 EX-58

重複関係 単独で検出された。

規模 0.70×0.40mを測る。

形態 隅丸長方形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、42cmを測る。

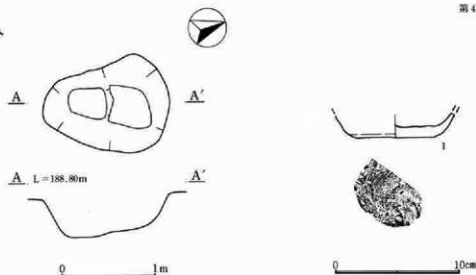
主軸方位 N-42°-E

遺物 小破片で図化できる資料はなかったが、土師器杯2片、甕2片の出土があった。杯は丸底と思われ外反する口縁部になると推定される。甕片は頸部の屈曲が弱い、薄手となってきている。

所見 出土した土器片から捉えられる特徴から、およそ8世紀代の時期と考えられる。



## 832号ビット



第352図 832号ビット及び出土遺物

位置 EW-53

重複関係 単独で検出された。

規模 1.30×1.00mを測る。

形態 不定形

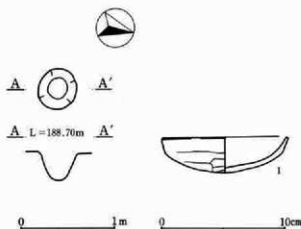
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、42cmを測る。

主軸方位 N-20'-E

遺物 須恵器杯が図化できた。底部は回転糸切りで体部外面最端部にナデが入る。他に小破片で土師器杯3片、甕17片、須恵器甕1片の出土があった。土師器杯には平底から外反する口縁部に至る器形が想定できる資料がある。

所見 須恵器杯は9世紀前半代の時期が考えられる。他の小破片から捉えられる特徴は少ないが、大きな断片はないと思われる。

## 847号ビット



第353図 847号ビット及び出土遺物

位置 EY-58

重複関係 単独で検出された。

規模 0.40×0.40mを測る。

形態 円形

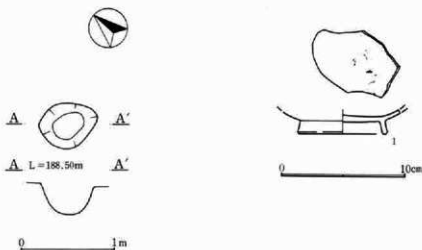
深度 確認面である軽石層上面からの深さは、31cmを測る。

主軸方位 N-114'-E

遺物 1の土師器杯が出土している。丸みを帯びた底部からやや外反する口縁部に至り、ヘラ削りは底部のみである。

所見 出土した杯の特徴は8世紀前半の時期を示すと考えられる。

923号ピット



第354図 923号ピット及び出土遺物

位置 FD-58・59、FE-58・59

重複関係 単独で検出された。

規模 0.50×0.60mを測る。

形態 楕円形

深度 確認面である軽石層上面からの深さは、35cmを測る。

主軸方位 N-113°-E

遺物 灰釉陶器碗の底部を中心とした破片が出土している。虎渓山1号窯式期と思われる。なお、この碗は内面の平坦面を硯として転用しており、平坦面を擦り面とし黒痕がかすかに付着している。

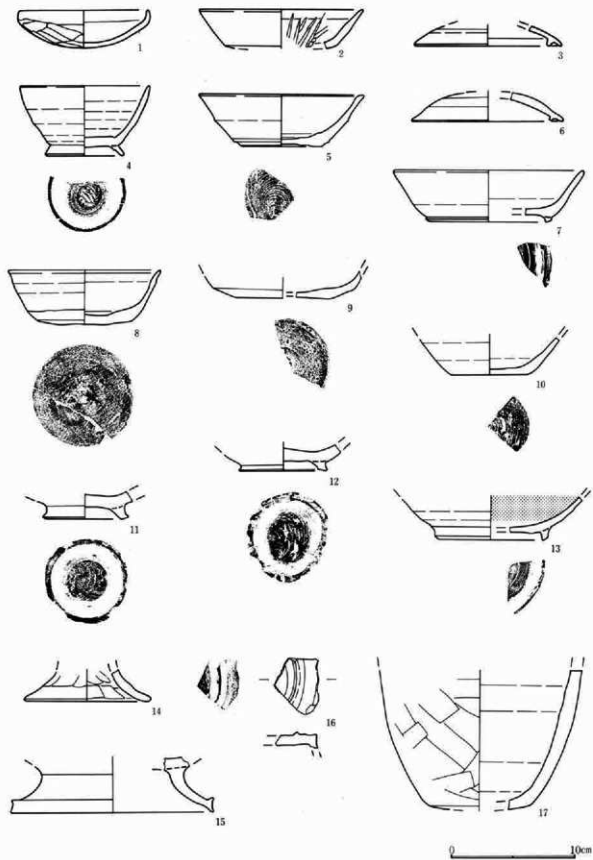
所見 出土した碗の時期は10世紀後半の年代が考えられる。

## 第5節 遺構外出土遺物

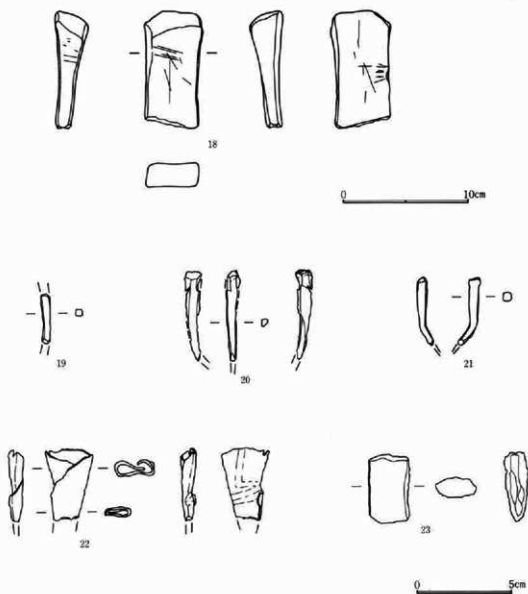
遺構外の出土遺物は土器、石製品、鉄製品がある。その出土量は1区でパンケース1箱、2区でパンケース1.5箱、3～5区でパンケース1/3箱であり、3～5区で量が格段に減少する傾向が窺え、破片もより小さいものとなる。さらに土師器、須恵器が少なくなる分、陶磁器類の比率が多くなっている。これは奈良・平安時代を中心とする住居などの遺構分布が認められないことと比例している。

土器では小破片ではあるが、第355図16の円面硯が目玉される。周辺部に1条の突帯が巡り、擦り面は僅かしか残っていない。他に土師器杯、甕、須恵器杯、碗、甕、長頸壺、羽釜、灰釉陶器碗がある。灰釉陶器碗のうち、第358図18の碗は虎渓山1号窯式期のものである。

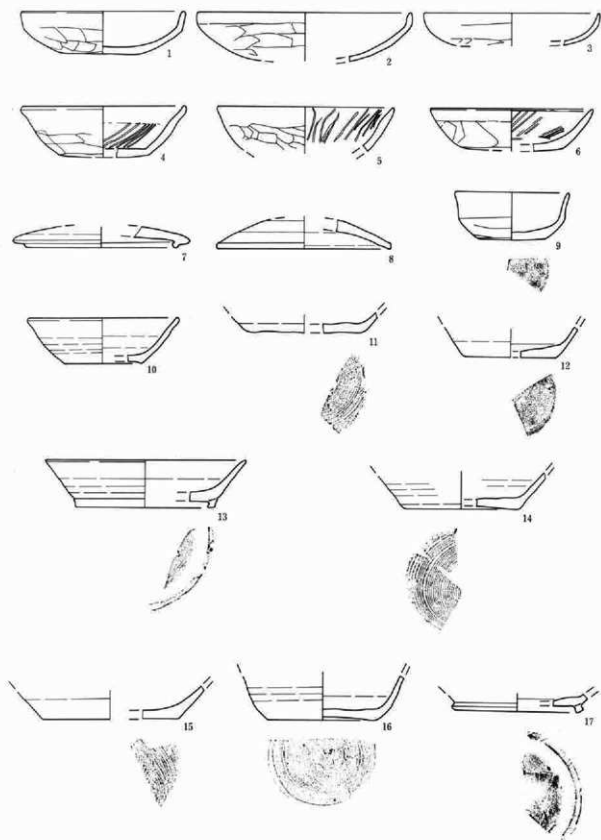
鉄製品では残存状態の良い刀子と鎌が出土している。第360図2の刀子は全体的にやや反りを持ち、棟関、刃関は緩いカーブを持って作られている。同図3の鎌も先端が若干欠損するのみでカエリも良い状態である。第356図23は小型ながら重量があり、形状から鋳の可能性が考えられる。3区からは角釘などが出土している。第359図6は近似する形状から当初「鎌」と認識していたが、化学分析の結果鉄鉄であることが分かり、「板状鉄」としたものである（第4章第5節参照）。石製品では1区から砥石が出土している。小口を除く四面を研ぎ面とし、刃物による条線が認められる。



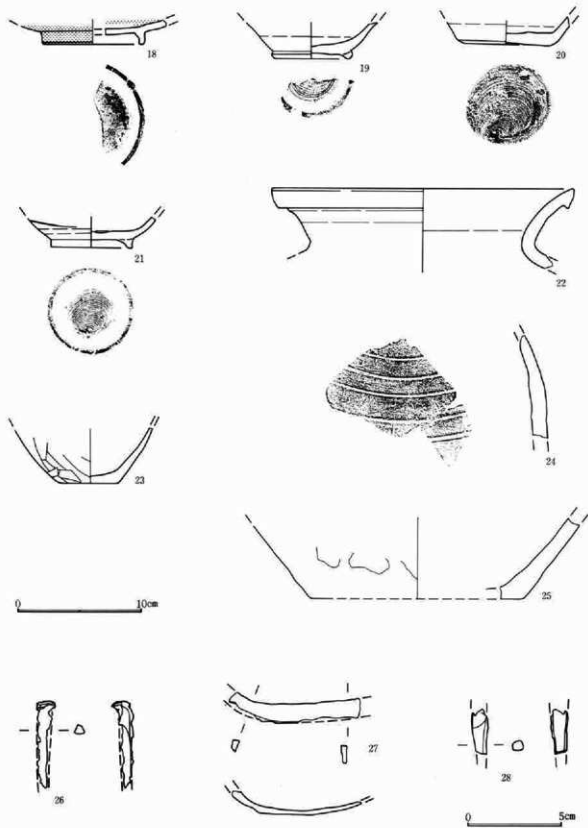
第355图 1区遺構外出土遺物(1)



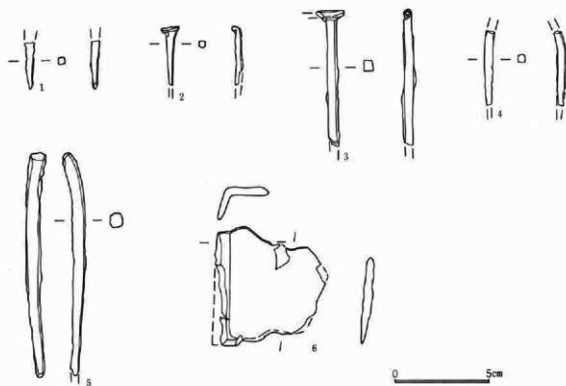
第356図 1区遺構外出土遺物（2）



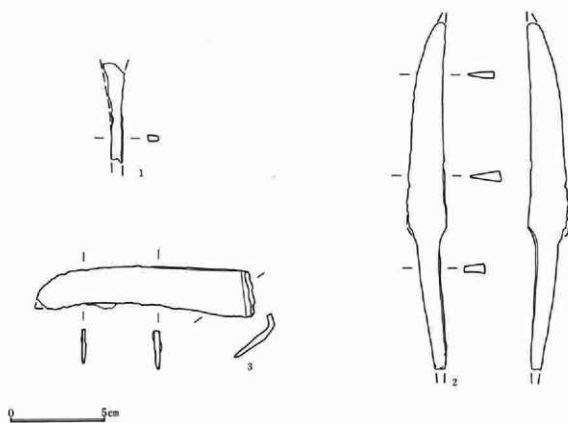
第357图 2区遺構外出土遺物(1)



第358图 2区遺構外出土遺物(2)



第359図 3区遺構外出土遺物



第360図 南中道遺跡遺構外出土遺物

## 遺物出土ピット一覧表(既出報告分は除く)

ス: 顕志館 H: 土師館

ピット	位置	規模(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	遺物	備考
108	DV-65	0.50×0.40	20~22	N-0°-E	隅丸長方形	ハ壺1片	
121	DX-65	0.60×0.63	88~90	N-45°-E	円形	石	
147	EA-65	0.38×0.35	22~23	N-155°-E	円形	ハ壺1片、内黒杯1片(暗文)	
148	EA-65	0.40×0.37	35~38	N-133°-E	円形	ハ杯1片	
149	EA-64	0.54×0.56	34~35	N-28°-E	円形	ハ杯2片・壺2片	
150	EA-65	0.44×0.40	37~39	N-20°-E	隅丸長方形	ハ壺5片	
161	EB-65	0.56×0.51	16~31	N-35°-E	隅丸長方形	ハ壺5片	
174	ED-65	0.38×0.37	19~23	N-8°-E	円形	ハ杯5片(暗文1)、ハ壺2片	
183	EE-63	0.45×0.43	40~43	N-155°-E	楕円形	ハ杯2片、ス1片	
198	EE-62	0.45×0.37	32~33	N-163°-E	楕円形	ハ杯3片、ハ壺2片	
199	EE-62	0.39×0.49	24~25	N-116°-E	楕円形	ハ壺2片	
203	EE-62	0.33×0.33	27~29	N-133°-E	円形	ハ壺小片3片	
204	EE-63	0.34×0.32	37~44	N-46°-E	円形	ハ杯2片(暗文1)、ハ壺1片	
205	EE-63	0.51×0.68	50~52	N-85°-E	楕円形	ハ杯2片・壺2片	
219	EF-62	0.46×0.44	34	N-99°-E	円形	ハ壺2片、ハ壺1片	
238	EF-63	0.53×0.89	46~48	N-95°-E	楕円形	ハ壺3片	
244	EF-63	0.57×0.44	29~39	N-15°-E	楕円形	ハ杯1片	
286	EH-61	0.40×0.46	28~31	N-61°-E	楕円形	ハ壺2片	
289	EH-62	0.31×0.33	26~29	N-32°-E	円形	ハ杯1片	
304	EG-63	0.42×0.44	51~52	N-147°-E	円形	ハ杯1片	
309	EI-60	(0.57)×0.52	32	N-162°-E	楕円形	ハ杯1片・壺3片	P310と重複
311	EI-60	0.45×0.45	26	N-15°-E	円形	ス榎1片	
312	EI-61	(0.52)×0.71	55	N-9°-E	隅丸長方形(推定)	ハ壺1片	
316	EI・EJ-61	0.78×0.93	39	N-69°-E	楕円形	ハ壺2片	
320	EI-61	0.55×0.55	42~46	N-128°-E	円形	ハ壺9片	
323	EI-61	0.36×0.38	35	N-140°-E	円形	ハ壺1片	
325	EI-63	0.41×0.41	28~31	N-40°-E	円形	ハ杯2片	
328	EI-63	0.71×0.44	22	N-94°-E	隅丸長方形	ハ杯1片(暗文)・壺4片 ス杯1片	
330	EI-60	0.44×0.55	39~44	N-125°-E	楕円形	ハ杯1片・壺4片	
331	EI-60	0.59×0.96	46~50	N-13°-E	隅丸長方形	ハ杯2片・壺3片	P332と重複
349	EE-64	0.51×0.75	28~41	N-129°-E	楕円形	ハ杯3片・壺9片	
354	EF-64	0.59×0.67	48~58	N-76°-E	ほぼ円形	ハ杯7片・壺1片、ス壺1片	
367	EG-64	0.44×0.64	44~48	N-85°-E	隅丸長方形	ハ壺8片	
392	EK-59-60	(約)0.29×0.47	28	N-128°-E	隅丸長方形	ハ壺2片	P391と重複
396	EK・EL-60	0.62×0.61	52	N-130°-E	円形	ハ杯5片・壺3片、ス杯1片・壺2片	
400	EL-60	0.42×0.42	44~50	N-30°-E	ほぼ円形	ハ壺1片	
405	EL・EM-60	(0.52)×0.68	38~41	N-105°-E	高辺突出の隅丸長方形(推定)	ハ壺1片	
411	EJ-61	0.71×0.74	41	N-117°-E	円形	ハ杯4片・壺3片	
426	EJ-61	0.44×0.49	39~40	N-61°-E	ほぼ円形	ハ杯6片、ス壺1片	
434	EJ-61	0.54×0.54	38~40	N-121°-E	ほぼ円形	ハ杯4片・壺2片	
449	EK-60	0.54×0.52	35~39	N-65°-E	円形	ハ壺3片	P448、450と隣接
450	EK-60	0.52×0.38	34~40	N-152°-E	円形	ハ壺4片	P449と隣接
459	EK-60	0.48×0.49	22	N-40°-E	円形	ハ杯1片	P460と隣接
460	EK-60	0.43×0.42	23	N-35°-E	円形	ハ杯1片・壺1片、ス壺2片	P459と隣接
462	EK-61	0.39×0.39	47~51	N-36°-E	円形	ハ杯3片・壺1片、ス壺1片	
463	EK-61	0.37×0.50	28	N-69°-E	隅丸長方形	ハ杯1片	
465	EK・EL-60	0.72×0.52	42~48	N-170°-E	楕円形	ハ杯6片・壺8片、ス壺1片	
468	EL-60	0.89×0.68	19~41	N-167°-E	隅丸長方形	ハ杯2片・壺3片、ス壺2片、榎1片・蓋1片	
473	EL-61	0.26×0.49	43~47	N-120°-E	楕円形	ハ杯4片・壺6片、ス榎・壺各1片	
474	EK・EL-61	0.52×0.45	18	N-15°-E	ほぼ円形	ハ杯1片	P475と重複
491	EL-62	0.55×0.51	34~60	N-19°-E	ほぼ円形	ハ杯3片・壺1片	P492と重複
496	EL-62	0.19×0.15	32~33	N-18°-E	楕円形	ハ壺1片	
501	EL-62	0.32×0.25	40	N-15°-E	楕円形	ハ壺1片	
506	EL-63	0.29×0.26	22~42	N-48°-E	ほぼ楕円形	ハ杯1片	
507	EL-60・61	1.00×(1.10)	32	N-107°-E	隅丸長方形	ハ壺3片	溝状遺構に壊れている



ピット	位置	規模(m)	深さ(m)	主軸方位	形態	遺物	備考
507	EL-60・61 EM-60	1.38×0.60	31	N-35°E	陶丸長方形	ハ壺3片	溝状遺構に横さ れている
510	EL-EM-61	0.22×0.20	36~37	N-17°E	円形	ハ壺1片	
511	EL-61	0.47×0.27	33	N-160°E	楕円形	ハ杯1片・壺8片・ス壺1片	P471と重複
530	EM-62	0.27×0.21	38~41	N-151°E	楕円形	ハ杯1片・壺2片	
552	EL-EM-64	0.45×(約)0.27	39	N-56°E	楕円形(推定)	ハ壺1片	P561と重複
556	EJ-62				円形(推定)	ハ杯2片	
611	EO-64	0.42×0.35	26~31	N-108°E	楕円形	ハ壺1片	
612	EP-64	0.36×0.37	23~28	N-122°E	ほぼ円形	ハ壺3片	
613	EP-64	0.48×0.40	20~29	N-159°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
616	EP-64	0.49×0.38	13~16	N-46°E	ほぼ円形	ス壺1片	
618	EP-64	0.35×0.40	14~16	N-115°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
622	EO-63	0.50×0.50	40~41	N-30°E	ほぼ円形	ハ壺2片・ス1片	
629	EP-63	0.34×0.39	33~36	N-114°E	ほぼ円形	ハ壺2片	
645	EQ-61	0.38×0.38	30~33	N-140°E	ほぼ円形	ハ壺2片	
662	ES-61	0.32×0.36	30~34	N-98°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
668	ES-61	0.56×0.44	31	N-58°E	陶丸長方形	ハ壺2片	P667と重複
671	EN-EO-59	0.72×0.48	37~38	N-174°E	陶丸長方形	ハ壺5片	
672	EO-59	0.49×0.42	44~45	N-90°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
676	EO-59	0.45×0.34	39~41	N-140°E	陶丸長方形	ハ杯1片	
691	ES-57・58	0.52×0.50	37~47	N-90°E	ほぼ円形	ハ壺5片・ス壺1片	
693	ES-57	0.37×0.35	21	N-139°E	ほぼ円形	ハ壺1片	P692と重複
697	ET-61	0.40×0.24	23~28	N-35°E	楕円形	ハ1片	
726	EU-58	0.35×0.27	21	N-137°E	陶丸長方形	ハ壺1片	
744	EU-58	0.33×0.33	33	N-40°E	陶丸方形	ハ壺2片	
746	EV-58	0.55×0.36	57	N-132°E	陶丸方形	ハ壺3片	
750	EU-57	0.36×0.26	16~19	N-45°E	ほぼ円形	ハ壺10片	
761	EV-57	0.34×0.34	34~37	N-171°E	円形	ハ杯1片・壺5片	
766	EV-57・58	0.30×0.32	28~30	N-100°E	ほぼ円形	ハ壺3片・ス壺1片	
770	EV-57	0.35×0.44	27~32	N-157°E	陶丸長方形	ハ杯1片・壺2片	P771と重複
785	EV-58	0.43×0.42	40~44	N-135°E	ほぼ円形	ハ壺4片	
790	EW-57	0.28×0.21	24~26	N-168°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
796	EW-57	0.40×0.50	22~25	N-68°E	ほぼ円形	ハ壺1片	
800	EW-EX-57	0.61×0.72	43~49	N-145°E	陶丸長方形	ハ杯1片・ス壺1片	
802	EX-57	0.38×0.32	18~19	N-33°E	ほぼ円形	ハ杯2片・壺小片2片	
819	EX-56	0.32×0.34	25~27	N-41°E	円形	ハ壺2片	
825	EX-56	0.42×0.50	30~32	N-52°E	陶丸方形	ハ杯1片・ス壺1片	
826	EX-EY-56	0.22×0.88	13~48	N-143°E	楕円形	ハ壺3片	
827	EY-56	0.51×(0.34)	45	N-161°E	陶丸長方形(推定)	ハ壺2片	
829	EY-56	0.50×0.52	44~45	N-52°E	陶丸方形	ハ壺3片	
842	EY-59・60	0.20×0.61	37~55	N-134°E	陶丸長方形	ハ壺4片・ス杯2片・壺4片	
844	EX-EY-59	0.32×0.38	30	N-110°E	ほぼ円形	ハ壺2片	
852	EY-57	0.83×0.70	30~31	N-47°E	楕円形	ハ壺2片	
871	FA-59	0.35×0.36	12~19	N-132°E	ほぼ円形	ハ杯1片・壺2片・ス杯1片	
873	FA-59	0.55×0.38	28~32	N-169°E	ほぼ円形	ハ壺小片4片	
881	FA-58	0.48×0.36	29~31	N-14°E	ほぼ円形	ハ杯1片・ス壺小片1片	
886	EY-57・58	0.58×0.95	44~49	N-90°E	楕円形	ハ壺1片・ス壺3片	
900	EY-56	0.64×0.56	43~45	N-17°E	楕円形	ハ小片3片・ス小片3片	

## 第4章 調査のまとめと理科学分析

## 第1節 白井南中道遺跡出土炭化材の樹種同定

藤根 久(パレオ・ラボ)

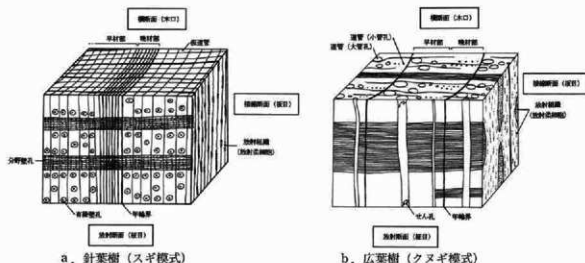
## 1. はじめに

白井南中道遺跡は、北群馬郡子持村大字白井南中道に所在する旧石器時代以降中世にかけての複合遺跡である。遺跡のある場所は、利根川と吾妻川が合流する段丘上にあり、標高200m前後の比較的平坦な地形を呈している。検出された遺構のうち7世紀末から8世紀にかけての20軒の住居跡からは、建築材の一部と思われる炭化材が出土している。また、この住居の3ヶ所の柱穴内からは柱材と思われる炭化材が検出されている。

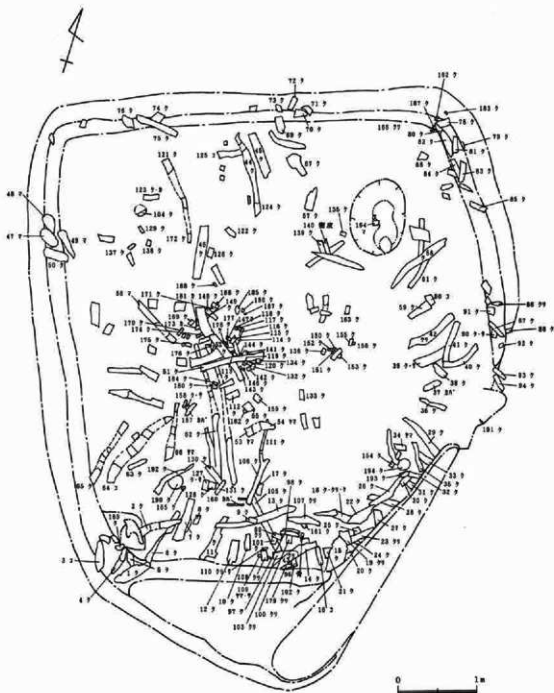
ここでは、これら住居跡から出土した炭化材を中心にその樹種の同定を行い、建築材などの樹種利用等について若干検討する。

## 2. 方法と記載および結果

現地において取り上げられた炭化材について、実体顕微鏡下で横断面について観察し、同定できる試料と同定できない試料とに分類する。これら同定できない試料と同定される典型試料は、片刃カミソリなどを用いて試料の横断面(木口と同義)、接線断面(板目と同義)、放射断面(柁目と同義)の3断面について作り、直径1cmの真鍮製試料台に固定、金蒸着を施した後、走査電子顕微鏡(日本電子製 JSM T-100型)で観察する。表1～6にその結果を示す。樹種の同定は、現生標本との比較により行う。以下に、標本の記載と同定の根拠を示す。



第361図 材組織とその名称



第362図 23号住居跡出土炭化材とその樹種

ク:タヌギ脚, クリ:クリ, コ:コナラ節, カ:カツラ, ケ:ケヤキ  
 マ:マツ属, ヤマ:ヤマザクラ, カバ:カバノキ属, サ:ササ類

表1. 出土炭化材の樹種 (不等号は量を表す)

No.	遺構名	時代	層位及び取上No.	樹種	備考
1	4号住居	奈良・平安	埋土	モモ	モモ核破片(1)
2	#	#	#	—	オニグルミ核破片(1)
3	11号住居	#	#	ササ類	
4	11・31号住居	#	#	—	
5	19号住居	#	#	散孔材A	
6	20号住居	#	#	—	モモ核破片(5)
7	21号住居	#	#	クスギ節	
8	#	#	床下土坑	ウコギ属	
9	23号住居	#	T-1	クスギ節	
10	#	#	T-2	#	
11	#	#	T-3	コナラ節	
12	#	#	T-4	クスギ節	
13	#	#	T-5	#	
14	#	#	T-6	#	
15	#	#	T-7	#	
16	#	#	T-8	#	
17	#	#	T-9	#	
18	#	#	T-10	#	
19	#	#	T-11	#	
20	#	#	T-12	#	
21	#	#	T-13	#	
22	#	#	T-14	#	
23	#	#	T-15	#	
24	#	#	T-16	コナラ節	
25	#	#	T-17	クスギ節	
26	#	#	T-18	クリ>クスギ節>ケヤキ	
27	#	#	T-19	クリ	
28	#	#	T-20	クスギ節	
29	#	#	T-21	#	
30	#	#	T-22	#	
31	#	#	T-23	クリ	
32	#	#	T-24	クスギ節	
33	#	#	T-25	#	
34	#	#	T-26	#	
35	#	#	T-27	#	
36	#	#	T-28	#	
37	#	#	T-29	#	
38	#	#	T-30	#	
39	#	#	T-31	#	
40	#	#	T-32	#	φ10mm、枝
41	#	#	T-33	#	
42	#	#	T-34	ヤマザクラ	
43	#	#	T-35	クスギ節	
44	#	#	T-36	#	
45	#	#	T-37	カバノキ属	
46	#	#	T-38	クスギ節	保存不良
47	#	#	T-39	クスギ節、ササ類	
48	#	#	T-40	クスギ節	
49	#	#	T-41	#	
50	#	#	T-42	クリ	
51	#	#	T-43	#	
52	#	#	T-44	クスギ節	
53	#	#	T-45	#	
54	#	#	T-46	#	
55	#	#	T-47	マツ属	
56	#	#	T-48	#	
57	#	#	T-49	#	
58	#	#	T-50	クスギ節	
59	#	#	T-51	#	

表2. 出土炭化材の樹種 (不等号は量を表す)

No	遺構名	時代	層位及び取上No	樹種	備考
60	23号住居	奈良・平安	T-52	クスギ節	
61	#	#	T-53	ヤマザクラ	
62	#	#	T-54	#	
63	#	#	T-55	クスギ節	
64	#	#	T-56	マツ属	
65	#	#	T-57	クスギ節	
66	#	#	T-58	#	
67	#	#	T-59	#	
68	#	#	T-60	コナラ節	
69	#	#	T-61	クスギ節	
70	#	#	T-62	#	
71	#	#	T-63	#	
72	#	#	T-64	コナラ節	
73	#	#	T-65	クスギ節	
74	#	#	T-66	ヤマザクラ	
75	#	#	T-67	クスギ節	
76	#	#	T-68	#	
77	#	#	T-69	#	
78	#	#	T-70	#	
79	#	#	T-71	#	
80	#	#	T-72	#	
81	#	#	T-73	#	
82	#	#	T-74	#	
83	#	#	T-75	#	
84	#	#	T-76	#	
85	#	#	T-77	#	
86	#	#	T-78	#	
87	#	#	T-79	#	
88	#	#	T-80	#	
89	#	#	T-81	#	
90	#	#	T-82	#	
91	#	#	T-83	#	
92	#	#	T-84	#	
93	#	#	T-85	#	
94	#	#	T-86	ク リ	
95	#	#	T-87	クスギ節	
96	#	#	T-88	#	
97	#	#	T-90	クスギ節、ササ類	ササ類 φ 7mm
98	#	#	T-91	クスギ節	
99	#	#	T-92	#	
100	#	#	T-93	#	
101	#	#	T-94	#	
102	#	#	T-96	—	骨
103	#	#	T-97	クスギ節	
104	#	#	T-98	#	
105	#	#	T-99	ク リ	
106	#	#	T-100	#	
107	#	#	T-101	クスギ節	φ40mm
108	#	#	T-102	#	
109	#	#	T-103	ク リ	
110	#	#	T-104	クスギ節	4号柱
111	#	#	T-105	#	
112	#	#	T-106	#	
113	#	#	T-107	ク リ	
114	#	#	T-108	#	
115	#	#	T-109	ヤマザクラ、ササ類	
116	#	#	T-110	ササ類>ク リ	
117	#	#	T-111	クスギ節	
118	#	#	T-112	#	

表3. 出土炭化材の樹種 (不等号は量を表す)

No.	遺 蹟 名	時 代	層位及び取上No.	樹 種	備 考
119	23号住居	奈良・平安	T-113	クスギ節	
120	〃	〃	T-114	〃	
121	〃	〃	T-115	〃	
122	〃	〃	T-116	〃	
123	〃	〃	T-117	〃	
124	〃	〃	T-118	〃	
125	〃	〃	T-119	〃	
126	〃	〃	T-120	〃	
127	〃	〃	T-121	〃	
128	〃	〃	T-122	〃	
129	〃	〃	T-123	クスギ節、カツラ	
130	〃	〃	T-124	〃	
131	〃	〃	T-125	コナラ節	
132	〃	〃	T-126	クスギ節	
133	〃	〃	T-127	クスギ節>ササ類	
134	〃	〃	T-128	クスギ節	
135	〃	〃	T-129	〃	
136	〃	〃	T-130	〃	
137	〃	〃	T-131	〃	
138	〃	〃	T-132	〃	
139	〃	〃	T-133	〃	
140	〃	〃	T-134	〃	
141	〃	〃	T-135	〃	
142	〃	〃	T-136	〃	
143	〃	〃	T-137	〃	
144	〃	〃	T-138	〃	
145	〃	〃	T-139	〃	
146	〃	〃	T-140	樹 皮	
147	〃	〃	T-141	クスギ節	
148	〃	〃	T-142	〃	
149	〃	〃	T-143	〃	
150	〃	〃	T-144	〃	
151	〃	〃	T-145	〃	
152	〃	〃	T-146	〃	
153	〃	〃	T-147	〃	
154	〃	〃	T-148	〃	
155	〃	〃	T-149	〃	
156	〃	〃	T-150	〃	
157	〃	〃	T-151	〃	
158	〃	〃	T-152	〃	
159	〃	〃	T-153	〃	
160	〃	〃	T-154	〃	
161	〃	〃	T-155	〃	
162	〃	〃	T-156	〃	
163	〃	〃	T-157	カバノキ属	
164	〃	〃	T-158	ササ類>クスギ節	
165	〃	〃	T-159	クスギ節	
166	〃	〃	T-160	カバノキ属	
167	〃	〃	T-161	クスギ節	
168	〃	〃	T-162	〃	
169	〃	〃	T-163	〃	
170	〃	〃	T-164	マツ属	
171	〃	〃	T-165	クスギ節	
172	〃	〃	T-166	ク リ	
173	〃	〃	T-167	クスギ節	
174	〃	〃	T-168	〃	
175	〃	〃	T-169	〃	
176	〃	〃	T-170	〃	
177	〃	〃	T-171	〃	

表4. 出土炭化材の樹種 (不等号は量を表す)

No	遺構名	時代	層位及び取上No	樹種	備考
178	23号住居	奈良・平安	T-172	クスギ節	
179	〃	〃	T-173	カツラ	
180	〃	〃	T-174	クスギ節	
181	〃	〃	T-175	〃	
182	〃	〃	T-176	〃	
183	〃	〃	T-177	〃	
184	〃	〃	T-178	〃	
185	〃	〃	T-179	ク リ	
186	〃	〃	T-180	クスギ節	
187	〃	〃	T-181	カツラ	
188	〃	〃	T-182	クスギ節	
189	〃	〃	T-183	〃	
190	〃	〃	T-184	〃	
191	〃	〃	T-185	〃	
192	〃	〃	T-186	〃	
193	〃	〃	T-187	〃	
194	〃	〃	T-188	〃	
195	〃	〃	T-189	〃	
196	〃	〃	T-190	〃	3号柱
197	〃	〃	T-191	〃	
198	〃	〃	T-192	〃	
199	〃	〃	T-193	〃	
200	〃	〃	T-194	〃	2号柱
201	〃	〃	土層根	—	草本類
202	〃	〃	埋 土	クスギ節	
203	〃	〃	〃	〃	
204	〃	〃	T-89	〃	
205	〃	〃	T-95	—	枝φ5mm
206	〃	〃	1号ピット	クスギ節	
207	〃	〃	〃	〃	
208	〃	〃	土層No27	ササ類・クスギ節	タケ面材φ6mm
209	〃	〃	堀方T-1	カツラ	
210	〃	〃	堀方T-2	クスギ節	
211	28号住居	〃	埋 土	〃	
212	34号住居	〃	〃	ク リ	
213	〃	〃	C-2	オニグルミ?	
214	〃	〃	C-4	ク リ	
215	〃	〃	1	—	
216	〃	〃	堀方170	ク リ	粘土層
217	〃	〃	埋 土	〃	
218	〃	〃	1号研	〃	
219	〃	〃	〃	〃	
220	〃	〃	2号研	オニグルミ	
221	〃	〃	2号研堀方埋土	ク リ?	
222	〃	〃	3号研	〃	
223	〃	〃	C-3	クスギ節	
224	〃	〃	一 括	ク リ・ヤナギ属	
225	36号住居	〃	埋 土	クスギ節	φ13mm
226	37号住居	〃	〃	〃	
227	38号住居	〃	〃	草本類	φ4mm
228	40号住居	〃	BH-81	コナラ節・エノキ属	
229	41号住居	〃	堀方埋土	コナラ節	
230	43号住居	〃	埋 土	イヌシダ節	
231	34号住居	〃	3号研	ク リ	カマド?
232	46号住居	〃	No 1	クスギ節	
233	〃	〃	No 2	〃	
234	〃	〃	No 3	〃	
235	〃	〃	No 5	〃	
236	〃	〃	No 6	〃	

表5. 出土炭化材の樹種 (不等号は量を表す)

No	遺構名	時代	層位及び取上No	樹種	備考
237	46号住居	奈良・平安	№8	クスギ節	
238	※	※	№9	※	
239	※	※	№10		
240	※	※	№13	散孔材B	
241	※	※	№14	コナラ節?	
242	※	※	№16	クスギ節	
243	※	※	№17	※	
244	※	※	№18	※	
245	※	※	№19	※	
246	※	※	№20	※	
247	47号住居	※	埋土	エゴノキ属	
248	48号住居	※	№8	ササ類	φ 5mm
249	50号住居	※		サクラ属	
250	51号住居	※	埋土	コナラ節	
251	※	※	カマド内	※	
252	※	※	埋土	クスギ節	
253	※	※	カマド埋土		
254	56号住居	※	床面	※	南面コーナー
255	※	※		クリ	カマドたき口
256	※	※		コナラ節	北壁
257	※	※		クリ	
258	※	※	2層	—	樹皮?
259	※	※	5層	—	※
260	※	※	埋土	クスギ節・クリ?	
261	2区8号トレンチ	縄文?	№2	クスギ節	
262	4区	?		漬	ケヤキ
263	231号土坑	中世以降	埋土	マツ属複雑管束亜属	
264	※	※	※	※	
265	2区8号トレンチ	縄文?	※	エノキ属	
266	※	※	№1	コナラ節?	
267	15トレンチ			コナラ節	

マツ属複雑管束亜属 *Pinus* subgen. *Diploxylon* マツ科 図版1a~1c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹材で、早材部から晩材部への移行は急である(横断面)。放射組織のうち、柔細胞の分野壁孔は窓状であり、放射仮道管の内壁は内側に向かってやや鋸歯状に突出している(放射断面)。放射組織は、エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~10細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、マツ科マツ属のマツ属複雑管束亜属の材と同定される。マツ属複雑管束亜属には、アカマツ(*P. densiflora*)とクロマツ(*P. thunbergii*)があり、放射仮道管により識別されるが、標本は明瞭でなく区別できない。いずれも暖帯および温帯下部に分布する樹高30~35m、幹径60~80cmに達する常緑針葉樹である。

マツ属 *Pinus* マツ科 図版2 a~2 c.

放射仮道管、垂直および水平樹脂道、これを取り囲むエビセリウム細胞からなる針葉樹で、早材部から晩材部への移行はゆるやかである(横断面)。分野壁孔は窓状である(放射断面)。エビセリウム細胞以外は、放射仮道管も含め単列で2~12細胞高である(接線断面)。



以上の形質から、マツ科マツ属の材と同定される。マツ属は、二葉松類と五葉松類に区別することができるが、本標本は特定できない。マツ属の樹木には、暖帯の沿岸沿いに見られるクロマツ(*P. thunbergii*)、本州の暖帯から温帯にかけて見られるアカマツ(*P. densiflora*)あるいは北海道から九州にかけて広く見られる五葉松のヒメコマツ(*P. parviflora*)などがある。

#### ヤナギ属 *Salix* ヤナギ科

中型の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在する散孔材である。道管のせん孔は単一である。道管と放射組織との壁孔は、蜂巣状を呈している。放射組織は異性単列、3~30細胞高である。また、末端細胞は長く伸び平伏細胞からなる。

以上の形質から、ヤナギ科のヤナギ属の材と同定される。ヤナギ属の樹木には、日本において約40種程度あり、高木から低木までその大きさはさまざまである。ヤナギ属の樹木は、陽光の水湿地に生育する落葉広葉樹である。

#### オニグルミ *Juglans ailanthifolia* Carr. クルミ科 図版3 a~3 c.

大型の管孔がやや径を減じながら単独または放射方向に2~3個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、異性に近い同性で、1~4細胞幅、3~31細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、クルミ科クルミ属のオニグルミの材と同定される。オニグルミは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高25m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

#### イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 図版4 a~4 c.

やや小型の丸の管孔が単独あるいは放射方向に2~3個複合して散在し、その径は年輪に向かってやや減ずる散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、内壁にはわずかにせん肥厚が認められる(放射断面)。放射組織は、異性で1~3細胞幅、3~26細胞高であり、両端細胞はやや大きい(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科クマシデ属のイヌシデ節の材と同定される。イヌシデ節には、イヌシデ(*C. tschonoskii*)及びアシデ(*C. laxiflora*)があり、暖帯から温帯にかけて分布する樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

#### カバノキ属 *Betula* カバノキ科 図版5 a~5 c.

やや丸い中型の道管が単独あるいは2~3個放射方向に複合してほぼ均一に散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は7~9本の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は同性で1~3細胞幅、2~21細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カバノキ科のカバノキ属の材と同定される。カバノキ属の樹木には、樹高25m、幹径1mに達するウダイカンバ(*B. maximowicziana*)や亜高山帯上部に広く分布するグケカンバ(*B. ermanii*)、山地帯の二次林に多いシラカンバ(*B. platyphylla* var. *japonica*)など10種類ほどある。

#### クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科 図版6 a~6 c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこからやや急に径を減じたやや厚壁の丸い小管孔が放射方

向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性的ものと集合放射組織のものがある(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属クヌギ節の材と同定される。クヌギ節の樹木には関東地方に普通に見られるクヌギ(*Q. acutissima*)と、東海・北陸以西に主として分布するアベマキ(*Q. variabilis*)がある。いずれの樹木も樹高15m、幹径60cmに達する落葉広葉樹である。

コナラ節 *Quercus sect. Prinus* ブナ科 図版7 a~7 c.

年輪のはじめに大型の管孔が1列に並び、そこから径を減じた小管孔がやや火炎状に配列する環孔材である(横断面)。大管孔の内腔には、チロースがあり著しい。また、木部柔組織は短接線状に配列する。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性的なもの集合放射組織からなる(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のコナラ属コナラ節の材と同定される。コナラ節の樹木にはコナラ(*Q. serrata*)やミズナラ(*Q. mongolica* var. *grosserrata*)、カシワ(*Q. dentata*)、ナラガシワ(*Q. aliena*)などがある。いずれの樹木も温帯から暖帯にかけて広く分布する樹高20m、幹径1mを超える落葉広葉樹である。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版8 a~8 c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~3列並び、そこから徐々に径を減じた小管孔が火炎状に配列する環孔材である。大管孔の内腔にチロースの見られるものもある。また、軸柔組織は短接線状に配列する(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、単列同性であり、時に2細胞幅で、2~15細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ブナ科のクリ属クリの材と同定される。クリは全国の暖帯から温帯にかけて分布する樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 図版9 a~9 c.

年輪のはじめに大型の管孔が単独ないし2列に並び、晩材部では小管孔が2~8程度集合して接線方向ないしはやや斜めに配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が明瞭に認められる(放射断面)。放射組織は、異性1~7細胞幅、2~20細胞高から構成され、大型の結晶細胞が見られる(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のケヤキと同定される。ケヤキは暖帯から温帯にかけて分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

エノキ属 *Celtis* ニレ科 図版10a~10c.

年輪のはじめに大型の管孔が1~2列並び、そこから径を減じた小管孔が早材部では多数集合して斜め方向に配列する環孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、小管孔の内壁にはらせん肥厚が見られる(放射断面)。放射組織は、異性1~8細胞幅、3~60細胞高で、大型の鞘細胞をもつ(接線断面)。

以上の形質から、ニレ科のエノキ属の材と同定される。エノキ属の樹木には、本州以南の暖帯から亜熱帯に分布するエノキ(*C. sinensis*)や、温帯に分布するエゾエノキ(*C. jessoensis*)などがある。エノキは樹高20m、幹径1mに達する落葉広葉樹である。

カツラ *Cercidiphyllum japonicum* Sieb. et Zucc. カツラ科 図版11a~11c.

薄壁で角張った中型の管孔が単独ないしは2個放射および接線方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は、48本程度の横棒からなる階段状せん孔である(放射断面)。放射組織は、異性1~2細胞幅、4~14細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、カツラ科のカツラ属カツラの材と同定される。カツラは全国の温帯に分布する樹高35m、幹径2mに達する落葉広葉樹である。

ヤマザクラ *Prunus jamasakura* Sieb. ex Koidz. バラ科 図版12a~12c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で1~5細胞幅、2~37細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のヤマザクラの材と同定される。ヤマザクラは、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達する落葉広葉樹である。

モモ *Prunus persica* Batsch バラ科 図版13a~13c.

年輪のはじめにやや大型の管孔が1~4列ほど並び、そこから径を減じた小管孔が2~4個放射方向あるいはやや斜めに複合して散在する環孔性散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁には明瞭ならせん肥厚が認められる(接線・放射断面)。放射組織は異性で、1~4細胞幅、4~60細胞高前後である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科サクラ属のモモの材と同定される。モモは中国北部原産であるが、日本には有史以前に渡来し、鑑賞用あるいは果樹として栽培され、一部野生状態で生えている。本種が日本に自生するという考えもある。

サクラ属 *Prunus* バラ科 図版14a~14c.

年輪のはじめにやや小型の管孔が並び、数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管は外側に向かって減少する傾向がみられる(横断面)。道管のせん孔は単一で、その内壁にはらせん肥厚がある(放射断面)。放射組織は、同性に近い異性で、1~5細胞幅、2~37細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、バラ科のサクラ属の材と同定される。サクラ属の樹木には、暖帯から亜熱帯にかけて分布する樹高25mに達するヤマザクラ(*P. jamasakura*)など数種類ある。

ウコギ属 *Acanthopanax* ウコギ科 図版15a~15c.

小型の管孔が接線方向から斜め接線方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は異性で、2~6細胞幅、4~60細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、ウコギ科のウコギ属の材と同定される。ウコギ属の樹木には、落葉高木のロシアブラ(*A. sciadophylloides*)を除く、樹高2~5mの落葉低木のヤマウコギ(*A. spinosus*)や樹高1mの落葉低木のオカウコギ(*A. nipponicus*)などがある。

エゴノキ属 *Styrax* エゴノキ科 図版16a~16c.

小型の管孔が放射方向に2~5個複合し、早材部ではやや径を減じて放射方向に2~5個複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は18本程度の太い横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、2~24細胞高である(接線断面)。

以上の形質から、エゴノキ科のエゴノキ属の材と同定される。エゴノキ属の樹木は、本州以南の温帯から暖帯に分布するエゴノキ(*S. japonica*)や全国の温帯に分布するハクウンボク(*S. obassia*)あるいは関東以西の温帯に分布するコハクウンボク(*S. shirasawana*)などがある。

タケ亜科(ササ類) subfam. Bambusoideae イネ科 図版17a~17c.

左右の後生木部、外側の後生木部・原生節部および内側の原生木部の周囲を維管束鞘が取り巻く維管束が、多数散在する(横断面)。

以上の形質から、イネ科のタケ亜科の稈と同定される。タケ亜科には、タケ類とササ類があるが組織的には識別できない。試料は、いずれも稈の厚みが7mm前後で、その直径も比較的小さいことからササ類と思われる。

散孔材A 図版18a~18c.

中型の丸い管孔が単独あるいは2~3個放射方向または塊状に複合して散在する散孔材で(横断面)、道管のせん孔は単一である(放射断面)。放射組織は、同性1~2細胞幅、5~12細胞高である(接線断面)。

散孔材B 図版19a~19c.

年輪は明瞭ではないが、小型の管孔が単独あるいは2~4個放射方向に複合して散在する散孔材である(横断面)。道管のせん孔は6本程度の横棒からなる階段状である(放射断面)。放射組織は、異性1~3細胞幅、3~30細胞高である(接線断面)。

### 3. 考察

住居跡から出土する炭化材は、不明種を含め20分類群である。

このうち炭化材が最も多く出土する23号住居跡では、コナラ属クヌギ節がもっとも多く164点、次いでクリ14点、ササ類が7点、マツ属やコナラ属コナラ節およびヤマザクラが各5点、カバノキ属が3点、カツラが5点、ケヤキが1点である。このうち3ヶ所の柱穴内から出土した炭化材はいずれもクヌギ節である。出土分布図を見ると、中央やや左寄りに炭化材の大型のものから小型のものまで密になっている(以後密集部と呼ぶ)。この密集部を中心にその周辺に比較的大型の炭化材が放射方向に分布する傾向が見られる。こうした分布において、クヌギ節からなる炭化材は住居全体を覆い、大型のものから小型のものまで検出されている。クヌギ節以外ではマツ属が左上から密集部に向かって連続的に分布し、またコナラ節が左下から密集部に向かって連続的に分布している。なお、ヤマザクラもコナラ節に近い分布を示すように見える。一方、クリは分布図下側に集まる傾向を示し、また右側に比較的大型の材として放射方向に分布している。このように炭化材の分布や形状から、クヌギ節やコナラ節やクリやヤマザクラあるいはマツ属からなる炭化材は、この住居の建築材の一部と考えられる。これまで県下の遺跡から出土する住居建築材(炭化材)の樹種はクヌギ節の樹木が圧倒的であるが、これは周辺にクヌギ節の樹木が多く、これを積極的に利用したことを反映している。

23号住居跡からは、このクスギ節以外にクリやマツ属やヤマザクラあるいはマツ属が建築材として検出されていることは興味深い。当時の遺跡周辺の樹木植生は、隣接する遺跡発掘での自然木の樹種組成や水成堆積中の花粉組成などによって推定する必要があるが、ここで検出される主要な樹木は周辺域に多く生えていることが予想される。

一方、他住居跡では、全体的にコナラ属クスギ節が最も多く、クリあるいはコナラ属コナラ節も高率で検出されている。46号住居ではやはりクスギ節から集中し、これら炭化材が住居建築材の一部であることが推定されている。クリは覆土あるいは炉跡などから検出されたものが多く、燃料材の性格が強いと推定される。この他の樹木では、ヤナギ属1点、オニグルミ2点、ササ類2点、エノキ属2点、モモ1点、クマシダ属イヌシダ節1点、サクラ属1点、エゴノキ属1点、ウコギ属1点などである。

なお、その他36号住居埋土および2区2号トレンチNo.8からそれぞれクスギ節、48号住居No.8からタク亜科(ササ類)、4区溝からケヤキが検出されている。

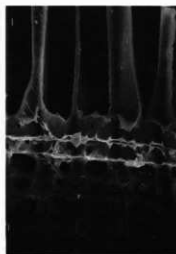
図版1. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



1a. マツ属埋蔵管末葉属 (横断面) bar: 0.5mm  
No263 + 264



1b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



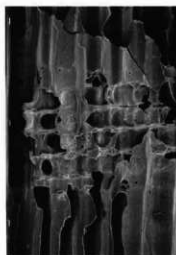
1c. 同 (放射断面) bar: 0.05mm



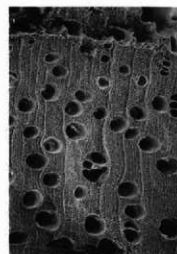
2a. マツ属 (横断面) No57 bar: 0.5mm



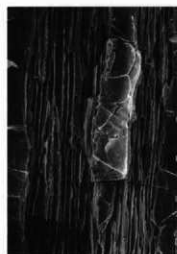
2b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



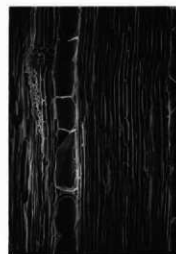
2c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



3a. オニグルミ (横断面) bar: 0.5mm  
No220

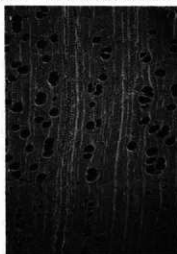


3b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



3c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

図版2. 白井南中道遺跡出土炭化材の電子顕微鏡写真



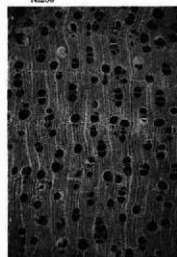
4a. イスシズ節 (横断面) No.230 bar: 0.5mm



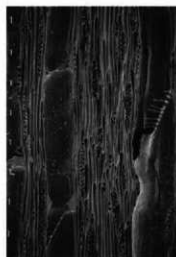
4b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



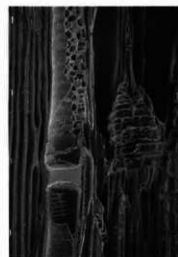
4c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



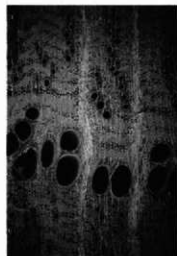
5a. カバノキ真 (横断面) No.163 bar: 1mm



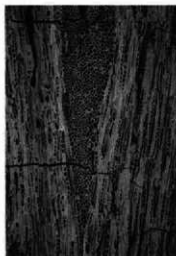
5b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



5c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



6a. クスギリ節 (横断面) No.84 bar: 1mm



6b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm

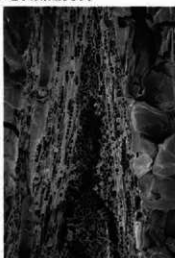


6c. 同 (放射断面) bar: 0.5mm

図版3. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



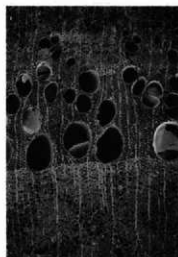
7a. コナタケ (横断面) No72 bar: 1mm



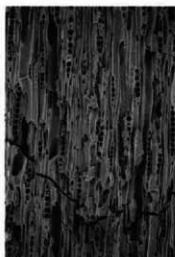
7b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



7c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



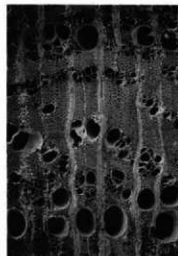
8a. タリ (横断面) No109 bar: 1mm



8b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



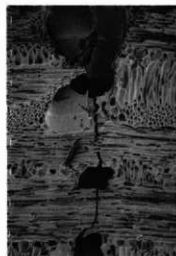
8c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



9a. ケヤキ (横断面) 4区 隅 bar: 1mm  
No262



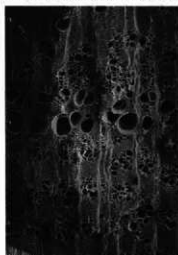
9b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



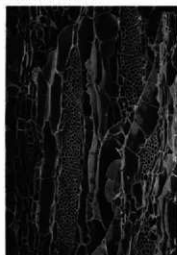
9c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



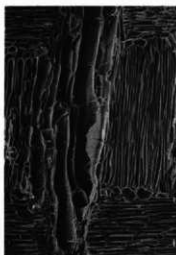
図版4. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



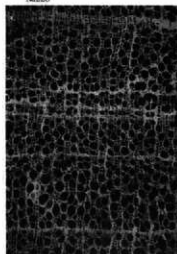
10a. エノキ属 (横断面) bar: 1mm  
No228



10b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



10c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



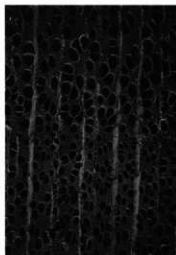
11a. カツラ (横断面) No179 bar: 0.5mm



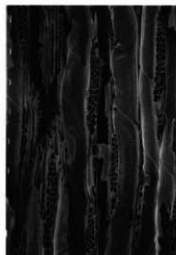
11b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



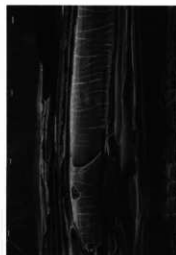
11c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



12a. ヤマザクラ (横断面) No62 bar: 0.5mm

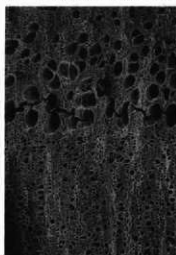


12b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



12c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

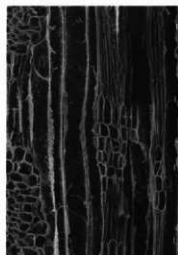
図版5. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



13a. モモ (横断面) bar : 0.5mm  
No 1



13b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



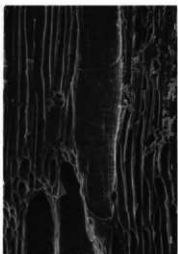
13c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



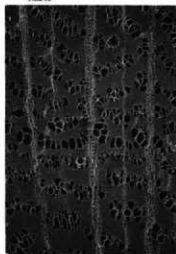
14a. ナカゴミ属 (横断面) bar : 0.5mm  
No249



14b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



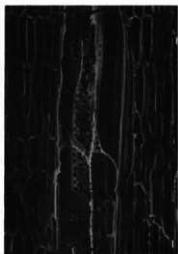
14c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm



15a. ココギ属 (横断面) bar : 0.5mm  
No 8

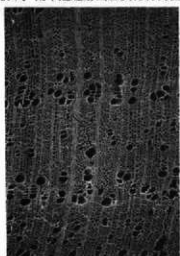


15b. 同 (接線断面) bar : 0.1mm



15c. 同 (放射断面) bar : 0.1mm

図版6. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



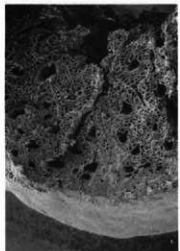
16a. エゴノキ属 (横断面) bar: 0.5mm  
No247



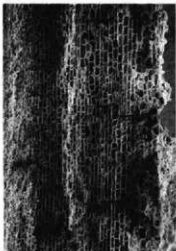
16b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



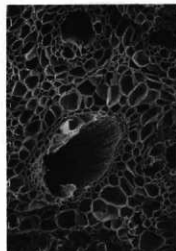
16c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm



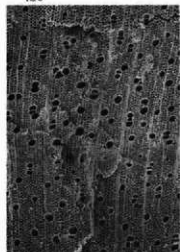
17a. タケノ科 (横断面) bar: 1mm  
No 3



17b. 同 (接線断面) bar: 0.5mm



17c. 同 (横断面) bar: 0.1mm



18a. 散孔材A (横断面) bar: 0.5mm  
No 5

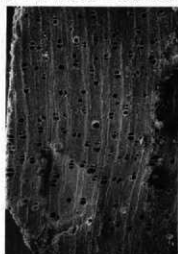


18b. 同 (接線断面) bar: 0.1mm



18c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

図版7. 南中道遺跡出土炭化材樹種の電子顕微鏡写真



19a. 放孔材目 (横断面) bar: 1 mm  
№240



19b. (接線断面) bar: 0.1mm



19c. 同 (放射断面) bar: 0.1mm

## 第2節 白井南中道遺跡の獣骨

宮崎重雄

## I、はじめに

白井南中道遺跡は群馬県北群馬郡子持村大字白井にあり、平成2年4月から平成5年3月まで3次に渡って発掘調査され、獣骨類を多数出土した。ここに報告するのは、その内の7世紀後半から9世紀後半に営まれた16軒の住居址内より出土した獣骨類である。

すでに報告されている白井二位屋遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団、1994)は、この南に隣接した一連の遺跡であるが、出土獣骨類の内容に違いが見られる。

## II、本文

## A. 11号住居址 時代：7世紀前半

## 1. 電白灰中から

a. キジ(*Phasianus sp.*)の焼けて灰白色になった右脛骨近位端部である。亀裂が目立つ。近位端最大前後径は17.2mm、同左右径は15.2mmである。これは現生の雄キジ(*P. colchicus*)のそれが17.7mm、15.3mmであるのと比べると、いくぶん小振りである。骨端は癒合しており、成鳥である。

b. 鳥類の大腿骨骨頭で、焼けて灰白色になっている。骨頭の最大前後径は7.0mmであり、現生雄キジのその5.9mmに比べて大きく、キジとは異なる種の可能性もあるが、同定は困難である。

c. 中型鳥類の上腕骨遠位端などである。キジとは形態が違うが、種の同定は困難である。

2. その他住居址床面の11.5cm下から生焼けの歯片と思われるものや、埋没土などから焼骨の細骨片多数が出土している。

## B. 14号住居址 時代：8世紀前半

## 1. 2号電から

シカ(*Cervus nippon*)の角片と思われる破片で、焼けている。他にも焼けた肢骨片が出土している。

## C. 15号住居址 時代：8世紀前半

## 1. 埋没土から

住居址床面10.0cmから種不明の歯と思われる生焼けの数10片の破片が出土している。

## D. 22号住居址 時代：7世紀末

## 1. 電から

小型鳥類の種子骨である。この他鳥類を含む小型動物の肋骨片などが出土している。

## E. 23号住居址 時代：7世紀後半

## 1. 電から

小型鳥類の爪の骨(末節骨)など、鳥類を主とする小型動物の焼骨片が出土している。

## F. 33号住居址 時代：8世紀後半

## 1. 埋没土から

住居址床面上31cmの所と埋没土から焼かれた鹿角の細骨片多数が出土している。また、床面上14cmでは生焼けの中型または大型動物の出土をみる。

G. 34号住居址 時代：9世紀後半

1. 竈西そばの床面上：ウマ(*Equus caballus*)の下顎臼歯片など4片が出土している。
2. 竈掘り方：生焼けの鹿角片が多数出土している。
3. その他、竈内、掘り方埋没土の中から焼骨の微細骨片が出土している。

H. 38号住居址 時代：7世紀後半中葉

1. 埋没土：住居址床面より6cmから鹿角の第一分岐部の破片が出土している。
2. 床面下-26cm：半焼けの鹿角片多数が出土している。
3. 竈：シカカイノシシ(*Sus scrofa*)の肋骨片を含む肢骨などの焼骨片からなる。
4. 竈埋没土：小-中型動物の焼けた大腿骨遠位部片が存在する。
5. その他、シカの焼けた中節骨近位端が出土している。近位関節面付近は青色化している。大きさは現生足尾産の雄シカに相当するが、やや小さい。

I. 41号住居址 時代：7世紀後半

1. 竈

- a. シカの骨が多数出土している。現生足尾産雄シカとほぼ同じか、やや大きめの前肢末節骨遠位半片、同シカより大きい種子骨、同シカより小さく雌の可能性のある中節骨近位端、同シカより小さく雌か亜成獣のものと思われる基節骨遠位端、同シカより大きく雄の可能性のある基節骨遠位端、脛骨(?)片などである。
- b. イノシシの骨は、現生岐阜県産雄イノシシを少し上回る大きさの左上腕骨大結節片が出土している。
- c. 中型鳥類の中手骨の近位端片、中節骨、小型・中型動物の肋骨片・肢骨片・歯片・頭蓋(?)などの焼骨片が出土している。
- d. ノウサギ(*Lepus sp.*)の右距骨が出土している。最大長は12.2mm、滑車幅は7.2mmあり、関東地方産ノウサギ(*Lepus brachyurus*)のそれが、それぞれ13.5mm、6.4mmあり、アマミノクロウサギ(*Pentalagus furnessi*)のそれが13.7mm、7.4mmあり、両者に比べて、本資料はずんぐりしている。骨表面には無数の微細な亀裂が観察される。

2. 2号竈

シカの近位骨端の離脱した中節骨片が出土している。成獣に至っていない個体である。それでも、現生シカと同じか、やや大きめである。

3. その他

床面に密着して鹿角の細片が分布していた。また、床面より13.5cm上から亀裂の顕著なイノシシの左尺骨の半月切痕付近が発見されている。大きさは現生岐阜県産の雄に匹敵する。

J. 42号住居址 時代：7世紀後半

焼けた肢骨片が2片出土している。

H. 44号住居址 時代：7-8世紀

1. 竈

シカの右下顎第1後臼歯片、同第2後臼歯片、完存する同第3後臼歯と焼けた肢骨片3片が出土している。第3後臼歯は歯冠長が26.1mm、歯冠幅が12.1mmあり、現生足尾産雄シカのそれが、23.0mm、11.0mmであるのと比べると、だいぶ大きく大型のシカである。遺跡出土のシカの年齢は、大森司(1980)の摩滅による齢査定法に従えば、第3後臼歯の摩滅指数が6-7程度にあたり、2.5-3歳の若い個体であることが判る。

## 2. 床面上22.5cm

シカの左下顎第2後臼歯片と共存する同第3後臼歯片が出土している。歯の大きさ、形態、咬耗度は竈出土の歯と酷似していて、同一個体と思われる。出土地点のレベルの差はどうして生じたのかは不明である。

M. 46号住居址 時代：8世紀後半

床面上28.5cmの所からウマ又はウシのものと思われる半生か生の腕骨近位端(?)片と焼けた細骨片10数片が出土している。小動物の焼骨片2片も検出された。

N. 49号住居址 時代：7世紀後半

1. 竈： 小型鳥類のものと思われる焼けた細骨片が1片出土している。

O. 55号住居址 時代：8世紀後半

1. 竈： 小型鳥類を中心とする焼けた細骨片が出土している。

P. 56号住居址 時代：8世紀前半

竈口付近から焼けた微細骨片が出土している。

Q. 60号住居址 時代：8世紀初頭

1号竈： 焼けた小動物の肋骨片が出土している。

## III. 比較考察

南中道遺跡と二位屋遺跡(群馬県埋蔵文化財調査事業団、1994)は、南北に接する一連の遺跡で、地籍によって便宜的に区分されたものであるが、両遺跡間には出土獣骨類の数量や性格に違いが認められるので、ここで若干の比較、考察を試みる。

獣骨類の総体的数量は、南中道の方がはるかに少なく、とりわけ、ウマ、シカ、イノシシでは違いが大きい。

南中道の獣骨は、16軒の住居址から出土しており、そのうちのほとんどが焼骨である。一方、二位屋では19軒の住居址のうち焼骨は6軒からしか出土してなく、極端に少ない。ただし、二位屋の出土獣骨類は数量が多く、肉眼的に焼骨として認められなくても、1000年前後もの長い間、開地遺跡で、風化・腐食作用に耐えてこられたのは、多少とも火を受けているからではないだろうか。

南中道の獣骨は、上記のように焼骨であり、細片化していて、最大片でも62.08mm止まりであるが、二位屋の方はこれより大きいものだけに限っても、30片もあり、保存状況も良好である。

加工痕・解体痕のある骨片は、南中道には1点も確認されていないが、二位屋には多く、加工痕のあるものが6軒の住居から12片、解体痕のあるものが3軒の住居址から4片検出されている。

出土獣骨類を種類ごとに見てみると、ウマは、南中道では1点の出土を見るだけであるが、二位屋では10軒の住居址から少なくとも13片の骨片又は歯片が、7世紀後半から10世紀後半の時期にほぼ連続的に出土している。

シカは、南中道では7軒の住居址から10片余の出土があり、二位屋では10軒の住居址から少なくとも35片の出土がある。両遺跡とも7世紀後半から8世紀のものが圧倒的に多い。例外として南中道では9世紀後半の、二位屋では10世紀後半の遺骸がそれぞれ1点ずつ存在する。

イノシシは、南中道では7世紀後半のものが1点知られているだけであるが、二位屋では4軒の住居址から7世紀後半から8世紀代のもの(1点のみ10世紀後半のもの)が、少なくとも12片ほどみつまっている。

南中道では出土していて、二位屋にはないものは、鳥類(キジ1点と小鳥類)およびウサギで、主として7世紀の6軒の住居址の竈およびその周辺の灰層中から検出されている。ただし、この両遺跡による鳥類など

の小動物の出土数量の違いは、調査の精度にもよるようで、南中道では採集した灰層を室内に持ち込み、双眼実体顕微鏡で調査した結果が反映しているものと思われる。二位屋でも同様な方法が取られたならば、小動物の発見もあったように思われる。いずれにしても、この時代は、小鳥などの小動物類を竈で焼いて食べる習慣は少なからずあったようである。南中道に近く、二位屋だけで発見されているものは、イヌ(*Canis familiaris*)とサル(*Macaca fasciata*)である。両者ともそれぞれ一点づつのみの出土であり、イヌは時代不明で、遺跡の性格の違いの論ずるまでの資料とは言いがたい。

本遺跡は利根川の河畔にあり、川を遡上するサケ・マスなどの漁労活動も行われていたと思われるが、肉眼観察した限りでは1片の魚骨も検出されていない。埼玉県深谷市の城北遺跡では、古墳時代後期の2基の竈跡から、それぞれ焼けたタイ型魚類の骨片が出土している(宮崎,1995)。この遺跡も、魚骨とはいえ出土しているのは海棲の魚であり、利根川に遠くない位置にありながら、川の魚の骨を欠いている点で共通している。

しかし、当時川の魚を意図的に獲らなかったとは考えにくく、おそらく、川魚の骨の保存度に問題があり、焼いている時点か、土中に埋存中に崩壊・腐食してしまったと考えるのが今のところ最も妥当であろう。

#### 引用文献

大森司紀之(1980)「遺跡出土ニホンジカの顎骨による性別・年齢・死亡季節査定法」『考古学と自然科学』第13号 51~73p

群馬県埋蔵文化財調査事業団(1994)『白井遺跡群-集落編 I-(白井二位屋遺跡)』298 P

宮崎重雄(1995)「城北遺跡の獣骨類」『城北遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 766~776 P



11号住 \*は多数骨片のうち最大片の計測値である。

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(11025)	竈	トリ?			焼骨。微細骨片10数片。
(11026)	竈白灰中	キジ	右脛骨近位端		焼骨。
(11027)	竈白灰中	キジ?	大腿骨骨頭		焼骨。
(11028)	竈白灰中	トリ・種不明	上腕骨遠位端など	・29.7×4.1	焼骨。
(11029)	埋没土				微細骨片。同定不能。
(11030)	-11.5cm		歯片?		半生。微細片多数。

14号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(14025)	2号竈	シカ?	角片?	・19.7×1.4	焼骨。細骨片2片。崩壊した同一骨片多数。

15号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(15025)	10.0cm		歯片?	・20.6×5.9	半生。細片多数。

22号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(22066)	竈	小動物	肢骨片		焼骨。骨片3片。 分析No.5
(22067)	竈	トリ	種子骨		焼骨。 分析No.14
(22068)	竈	小動物	肋骨片など		焼骨。骨片多数。 分析No.9
(22069)	竈	小動物	肋骨片など		焼骨。骨片数片。 分析No.8

60号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(60017)	竈	小動物	肋骨物		焼骨。 分析No.16

23号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(23047)	竈				焼骨。歯骨片数10片。
(23048)	竈				焼骨。微細骨片数10片。
(23049)	竈	小動物	寛骨片など		焼骨。骨片数片。 分析No.19
(23050)	竈	トリ	未肋骨など		焼骨。骨片6片。 分析No.20

33号住

図版番号	出土位置	動物名	部 位	長さ×幅(厚)mm	特 徴
(33046)	埋没土	シカ	角片	・26.6×15.0	焼骨。同一の角が崩壊したもの。
(33047)	14.0cm	ウマホウシ?	肢骨付	・52.0×31.0	半生?骨片多数。後世のもの可能性あり。
(33048)	31.0cm	シカ	角片	・28.6×24.0	焼骨。角片多数。

## 34号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(34215)	電掘り方	ウマ	角片	• 21.0×10.6	平生。同一の角が崩壊したもの。 4片。 焼骨。微細骨片1片。 焼骨。微細骨片5片。
(34216)	床上層西そば		下顎臼歯	• 31.0×10.4	
(34217)	電				
(34218)	掘り方埋没土			• 8.9×7.4	

## 38号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(38046)	-10.5cm	シカ	角中第一枝分枝部	62.0×42.0	焼骨。超微細骨片10数片。 (38047)
PL141 40	6.0cm				
(38048)	電				
(38049)	電				
(38050)	-23.0cm	シカ	肢骨片	11.2×8.3	焼骨。微細骨片多数。 微細骨片多数。 微細骨片多数。 微細骨片多数。
(38051)	-10.5cm				
(38052)	電				
(38053)	埋没土				
PL141 41		シカ	中肋骨近位骨端など	15.4	焼骨。 (38054)
(38055)	電	シカかイノシシ	肋骨など	• 18.7×12.2	焼骨。骨片3片。
(38056)	電埋没土	小へ中動物	大腸骨遠位部片		焼骨。骨片2片。 分析№31
(38057)	-26.0cm	シカ	角片	• 19.6×18.2	細骨片多数。
(38058)	-26.0cm				細骨片多数。

## 41号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
PL128 33	電	シカ	前腕末節骨遠位半片	23.2×15.1	焼骨。(41035)
PL128 34	電	シカ	種子骨	16.2×7.1	焼骨。(41036)
PL128 35	電	シカ	中肋骨近位端	15.4+	焼骨。(41037)
PL128 36	電	シカ	基節骨遠位端		焼骨。(41038)
PL128 37	電	シカ	基節骨遠位端	21.1×8.8	焼骨。(41039)
PL128 38	電	ノウサギ	距骨	12.2	焼骨。(41040)
(41041)	床面密着	ウマカウシ	骨片	23.9×19.9	焼骨? 細骨片。
(41042)	電	シカ		25.5×9.3	焼骨片。
PL128 39	2号電	シカ	中肋骨近位骨端	33.5×19.0	焼骨。骨端離脱。(41043)
PL128 40	電	イノシシ	左上腕骨大結節片	35.0×27.0	焼骨。(41044)
(41045)	電	シカ	距骨? 片など	• 25.0×13.2	焼骨。細骨片16片。
PL128 41	13.5cm	イノシシ	左尺骨半月切痕付近	51.1×13.7	焼骨。(41046)
(41047)	電	トリ	指骨?		焼骨。骨片2片。保存良好。 分析№21
(41048)	電				焼骨。骨片3片。 分析№21
(41049)	電	中型鳥類	中肋骨		焼骨。 分析№21
(41050)	電	トリなど	中肋骨近位端など		焼骨。細骨片10数片。 分析№21
(41051)	電	中動物	肢骨片など		焼骨。骨片3片。 分析№22

## 42号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(42032)		?	肢骨片	• 10.2×7.6	焼骨。細骨片2片。

## 44号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
PL144 15 (44023)	竈	シカ	右下顎第1後臼歯、第2後臼歯、第3後臼歯		総数18片、 (44022)
PL144 16	22.5cm	シカ	四肢 左下顎第2後臼歯片、第3後臼歯	• 23.7×10.6 • 25.8×11.8	焼骨3片、 (44024)

## 46号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(46077) (46078) (46079) (46080)	28.5cm	ウシカウマ 小動物 小動物	肋骨近位端片?		生。 焼骨。微細骨片10数片。 焼骨。骨片1片。 分析№23 焼骨。骨片1片。 分析№24

## 49号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(49014)	竈	トリ?		9.4×4.9	焼骨。細骨片。

## 55号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(55054)	竈				焼骨。微細骨片数片。
(55055)	竈				焼骨。超微細骨片数片。
(55058)	竈	小動物	肋骨片など		焼骨。骨片数片。 分析№27
(55059)	竈	小動物	肋骨片		焼骨。他に骨片2片。 分析№28
(55060)	竈	トリなど	肋骨片、肢骨片		焼骨。骨片5片。 分析№29

## 56号住

図版番号	出土位置	動物名	部位	長さ×幅(厚)mm	特徴
(56033)	竈焚き口付近			9.4×4.6	焼骨。微細骨片。

### 第3節 白井南中道遺跡から検出された炭化植物種子

吉崎昌一

#### (1) 資料の性格と年代

群馬県北群馬郡持村白井南中道遺跡の23号住居の土壌から検出された炭化植物種子を報告する。分析対象となった土壌は、調査者によって23号住居床面から採取されたものである。この23号住居は、カマドをもつ竪穴住居である。焼失した痕跡があり、床面及び床面付近から多量の炭化材が検出されている。出土した土器の様相から見て西暦7世紀後半と考えられている。

資料土壌は、建築用材と思われる炭化材を取り上げたのち、床面の炭化物が多く分布していると思われた5箇所について30×30cmの区画を設定し採集している。その位置は住居全体では中央から東側であり、資料No.1は住居南東部、資料No.2は竈左脇、資料No.3は北東柱穴付近、資料No.4は竈斜め前方、資料No.5は中央やや南寄りの部分である。そのうち資料No.4とされている土壌からは、他に比べて浮遊物量が多く抽出されている(第363図)。

#### (2) 分析の方法

採取された土壌は約20リットル、肉眼で見ても焼土と炭化物質の混入が顕著であった。それで炭化種子を採集するためにラボ内で5日間の自然乾燥を行い、その後フローテーション作業を実施、総量が160.5グラムの浮遊物を得ることができた。この資料を低倍率の光学顕微鏡下で植物種子とその他の炭化物に選別した。以上の情報は付表に示しておいた。

#### (3) 同定結果

抽出された浮遊物の中から得られた炭化植物種子は、玄米状のイネ *oryza sativa* だけであった。粒形から見てヤボニカ種であろう。資料No.2 からだけ5粒検出されている。他の資料中からは検出されていない。

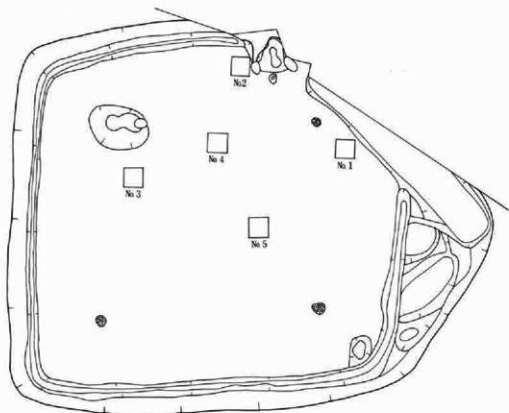
#### (4) 若干の問題点

この遺跡は筆者も実見しているが、遺構の保存状態も良く、竪穴住居内の堆積物にはかなりの微細な炭化物の混入が認められていた。それで多種類の植物種子が抽出されると期待していた。しかし分析の結果は、前述した通りで、奇妙なことに玄米状のイネしか検出されなかった。群馬県下では、これまでオオムギの検出例<sup>(1)</sup>があり、ほかにアワやヒエの出土の予想される地域である。筆者らの調査した青森県内の遺跡では、イネしか出土しない例はむしろ稀である。そうした現象は栽培植物の種類<sup>(2)</sup>の比率こそ違え、この地方でも認められる可能性がある。おそらく、分析対象として採取した土壌が、通常、竪穴住居の床面として認識される層に限定されていたことが、今回の結果を生んだのではないかと推察できなくもない。

筆者らの経験では、竪穴住居内の実際の生活面は、これまで言われている床面よりむしろ数cm~10cm上位に存在するのが普通であった。今後、竪穴住居内堆積土の採取に関しては、視点を変えたサンプリングも試みる必要があるのかもしれない。

#### ■註

(1) 群馬県教育委員会、群馬県埋蔵文化財調査事業団「日高遺跡」 P.332 群馬1982



第363図 23号住居分析資料採取地点

付 表

資料 No	サンプル 採取区	遺構名	サンプル量 (ℓ)	浮遊物総 重量(g)	イネ 粒	不明 粒
1	1区	23号住居	5.0	1.7		
2	〃	〃	3.0	5.0	5	
3	〃	〃	2.0	16.0		
4	〃	〃	5.0	109.8		
5	〃	〃	5.0	28.0		
合計			20.0	160.5	5	

## 第4節 胎土分析

小沢 達樹 (群馬県工業試験場)・南雲 芳昭

### 1、はじめに

群馬県内では20年ほど前から群馬県埋蔵文化財調査事業団と各市町村の調査資料を含めてはじめられた胎土分析試料は1000点を越えるまでになった。これまでの分析の結果、県内10箇所ほどで認められる窯跡群のうち吉井、栗附(観音山)、秋間、中之条、月夜野、笠懸の各窯跡群についてはその領域と傾向を知ることができている。

今回は北群馬郡子持村に所在する白井遺跡群の奈良・平安時代の須恵器の胎土傾向を知るために分析・検討した。本稿の化学的な所見については小沢が担当し、考古学的な所見を南雲が担当した。

### 2、分析目的と資料の選択

白井遺跡群の所在する子持村は群馬県中央部よりやや北方に位置し、平野部から山間部にさしかかる箇所にあたっている。こうした位置における遺跡の資料から、平野部の土器の供給と月夜野や中之条のような山間部に所在する生産地からの供給との関わりを探ることが今回の分析の目的である。

試料は白井二屋遺跡の集落出土の土器を対象とした。白井二屋遺跡の集落は7世紀後半から10世紀後半に営まれている。白井南中道遺跡の南に位置し、遺構の分布状況から両遺跡は一連の集落とみることができると考えられる。

分析試料は20点を抽出した。その内訳は目的に従って19点を須恵器からとし、1点のみ黒色土器を含んでいる。資料No.999~1001、Na1009、Na1012、Na1013、Na1015、Na1017などは胎土や調整などから、秋間窯跡群からの供給品と想定した。また、Na1002の羽釜はNa1003と異なり胴部縦方向のヘラ削りが鐙にまで至るいわゆる月夜野型である。よってNa1002は山間部の生産地を想定し、鐙付近にヘラ削りが認められないNa1003との比較を行いたい。Na1016の黒色土器は他の須恵器との差が出るか、あるいは他資料との近似がみられるのかを試みたい。

### 3、分析方法及び測定条件

#### 蛍光X線分析

**試料** 供試料を振動ミル粉砕機により10 $\mu$  m以下に粉砕し、5~10 gを油圧プレス機を用いて径4 cmの円板状に成型して使用した。

**分析装置** 理学電機㈱ KG-4型

**測定条件** 分光結晶: Fe, Sr, Rbには LiF(2d=4.028Å)

Ca, K, Ti, Si, Alには EDDT(2d=8.808Å)

Mgには ADP(2d=10.648Å)

検出器: LiFを使用したとき S.C

EDDT, ADPを使用したとき P.C

時定数: 1

計数法: Fe, Ca, K, Ti, Sr, Rbはチャートによる。

Si, Al, Mgは定時計数法による。

分析試料（白井二位部遺跡）観察表

試料No.	出土遺構 推定年代	種別	調整及び胎土の観察	備考
998	4号住居 9C後半	須恵器 杯	底部のみの資料。ロクロ整形と思われる。底部回転糸切り。右回転。胎土は白色微細粒、石英含む。還元焙焼成。色調灰黄色。	
999	4号住居 9C後半	須恵器 短頸甕？	ロクロ整形、右回転。底部手持ちへう削り後、高台位置に沈焼。胎土は黒色粒、白色微細粒含む。還元焙焼成。色調灰色。	
1000	4号住居 9C後半	須恵器 蓋	ロクロ整形、回転方向不明。胎土は白色微細粒含む、黒色粒少量含む。還元焙焼成。色調灰色。	
1001	4号住居 9C後半	須恵器 壺の把手	体部に貼り付けられた把手(耳?)。体部ロクロ整形。胎土は白色軽石粒、白色微細粒、黒色粒含む。還元焙焼成。色調灰色。	
1002	29号住居 10C後半	須恵器 羽釜	ロクロ整形、回転方向不明。露貼付。体部露付方向に削り。露に削りがあっている。胎土は白色軽石粒、石英含む、黒色粒少量含む。還元焙焼成。色調灰白色。	
1003	29号住居 10C後半	須恵器 羽釜	ロクロ整形、回転方向不明。残存部分には削りが入らない。胎土は白色微細粒、黒色鉱物粒含む、赤色土粒少量含む。還元焙焼成。色調灰黄褐色。	
1004	29号住居 10C後半	須恵器 杯	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。胎土は石英含む、黒色鉱物粒、白色微細粒少量含む。緻密な胎土。還元焙焼成。色調灰白色。	
1005	29号住居 10C後半	須恵器 杯	ロクロ整形、右回転。底部回転糸切り。胎土は白色微細粒多く含む、石英少量含む。緻密な胎土。還元焙焼成。色調灰白色。	
1006	29号住居 10C後半	須恵器 杯	ロクロ整形、回転方向不明。胎土は白色軽石粒、白色微細粒含む、粗砂粒目立つ。器内は内外面灰白色で中央は黒色を呈すサンドイッチ状。還元焙焼成。色調灰白色。	
1007	29号住居 10C後半	須恵器 杯	ロクロ整形、回転方向不明。胎土は細砂粒含む、白色微細粒少量含む。還元焙焼成。色調灰白色。	
1008	39号住居 10C後半	須恵器 壺	ロクロ整形、回転方向不明。体部内部にあて具痕。胎土は白色軽石粒、白色微細粒含む、断面サンドイッチ状。還元焙焼成。色調灰色。	
1009	39号住居 10C後半	須恵器 長頸甕	ロクロ整形、回転方向不明。外面に自然物。胎土は黒色粒多く含む、白色微細粒含む。還元焙焼成。色調灰白色。	
1010	39号住居 10C後半	須恵器 杯	ロクロ整形、回転方向不明。胎土は白色微細粒を含み、赤色土粒少量含む。緻密な胎土。還元焙焼成。焼している。色調にぶい褐色。	
1011	39号住居 10C後半	須恵器 椀	ロクロ整形、回転方向不明。胎土は石英を多く含む、白色軽石粒、白色微細粒、灰黒色鉱物粒含む。還元焙焼成。色調にぶい褐色。	
1012	51号住居 7C後半	須恵器 壺	ロクロ整形、回転方向不明。外面4目。頸部横方向ナゲ?白色微細粒、細砂粒含む。還元焙焼成。色調灰白色。	
1013	51号住居 7C後半	須恵器 壺	外面平行タケキ、内面同心円文のあて具痕。胎土は赤色土粒多く含む、白色微細粒含む、白色軽石粒少量含む。乳白色粘土を塊や層状に含む。断面サンドイッチ状。還元焙焼成。色調灰色。	
1014	51号住居 7C後半	須恵器 蓋	ロクロ整形、回転方向不明。一部歪みあり。胎土は白色微細粒含む。還元焙焼成。色調灰色。	
1015	61号住居 9米~10米	須恵器 椀	ロクロ整形、底部回転へう切り。高台は貼付。胎土は黒色細粒、白色微砂粒含む。還元焙焼成(良好)。色調灰色。	
1016	61号住居 9C末 ~10C初	黒色土類 椀	ロクロ整形、回転方向不明。内面黒色で横方向のミダキ全部に入る。胎土は白色軽石粒、白色微細粒、黒色鉱物粒含む。石英を少量、赤色土粒ごく少量含む。焼成良好。色調灰黄褐色。白井二位部遺跡(集落編1)61号住居第128回1と同一個体。	集落編1第128回1を参照
1017	72号住居 7C後半	須恵器 高杯	ロクロ整形、回転方向不明。脚部接合部に5重に沈焼を巡らし脚接合。底部外面は手持ちへう削り(?)。胎土は白色微細粒、細砂粒、黒色粒含む、赤色土粒少量含む。還元焙焼成(良好)。色調灰白色。	

チャートの速さは4"/minとした。

波高分析器：積分方式

測定線：Fek $\beta$ , Cak $\alpha$ , Kk $\alpha$ , Tik $\alpha$ , Alk $\alpha$ , Mgek $\alpha$ ,

Srk $\alpha$ , Rbk $\alpha$ の各一次線を使用した。

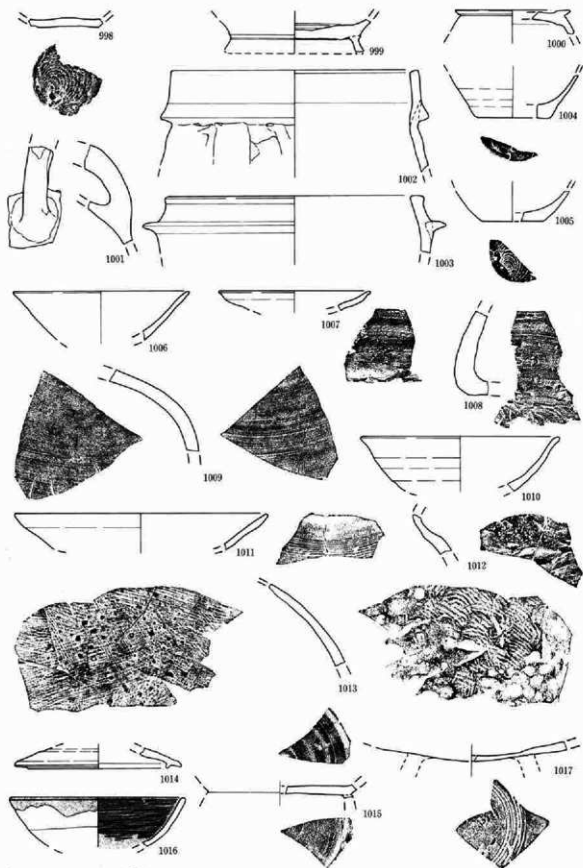
X線照射面積：20mm $\phi$

測定方法

検量線法：6点

標準試料：群馬県埋蔵文化財調査事業団から依頼を受けた土器(295, 310, 336, 345, 360,

380)を湿式化学分析して、標準試料とした。



第364図 胎土分析試料実測図



胎土分析値一覧表

試料	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	MgO	Fe <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	TiO <sub>2</sub>	K <sub>2</sub> O	CaO	Sr/Rb	Ca/K
	%	%	%	%	%	%	%		
998	57.72	28.22	0.84	4.46	1.13	0.63	1.30	4.57	2.07
999	73.54	12.21	0.61	2.44	0.85	0.97	0.39	0.80	0.40
1000	70.63	15.61	0.95	4.95	0.80	1.59	0.60	0.67	0.38
1001	64.04	15.65	3.35	7.26	0.99	1.72	1.25	2.20	0.73
1002	70.66	18.25	1.64	3.45	0.63	2.69	0.69	0.89	0.26
1003	66.58	17.08	2.09	4.32	0.81	2.03	1.79	2.92	0.88
1004	60.60	26.62	1.77	5.68	0.83	1.19	0.94	2.12	0.79
1005	59.38	28.98	2.14	5.23	0.89	1.36	0.66	1.44	0.49
1006	69.88	21.43	1.56	2.65	0.67	2.36	1.11	1.58	0.47
1007	74.04	18.42	0.89	2.02	0.81	1.98	0.38	0.77	0.19
1008	73.19	15.19	1.13	4.67	0.73	2.08	0.46	0.64	0.22
1009	73.34	15.26	1.04	5.09	0.72	1.82	0.56	0.67	0.31
1010	69.48	14.74	1.08	5.86	0.74	2.09	0.69	1.15	0.33
1011	69.21	22.13	0.77	3.55	0.93	1.90	0.49	2.77	0.26
1012	70.00	20.15	2.17	3.34	0.76	2.49	0.46	0.63	0.19
1013	64.22	18.95	1.06	6.10	0.90	1.93	0.42	0.33	0.22
1014	79.32	11.03	0.85	2.91	0.80	1.57	0.52	0.71	0.33
1015	70.56	16.29	1.03	4.95	0.84	1.39	0.44	0.80	0.31
1016	58.99	26.24	0.78	3.69	1.01	0.94	1.45	5.25	1.55
1017	71.81	19.06	1.14	3.66	0.80	1.50	0.44	0.50	0.29

## 4. 分析結果

分析数値は表の通りである。表中の Sr/Rb 値と Ca/K 値をもとにしたグラフを作成し、対比のために県内のおもな窯跡群の同様のグラフも掲載した。

① Sr/Rb 値によれば、№998、№1016は各窯跡群の領域を越えていることが分かる。さらに№1016は SiO<sub>2</sub>の値が58.99と低く、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>が多いことが特色である。

② №999、№1000、№1002、№1007、№1008、№1009、№1012、№1013、№1014、№1015、№1017は Sr/Rb 値が1対1の範囲の中に取まっている。この一群が群馬県下で Sr/Rb 値がもっとも低い領域をなす秋間窯跡群および月夜野窯跡群の一部、観音山窯跡群の一部の領域に相当する。№999、№1000、№1009、№1012、№1013、№1015、№1017は秋間窯跡群からの供給品という想定と合致した。№1002は月夜野窯跡群からの供給であり、№1014は観音山窯跡群の可能性が高い。

③ №1005、№1006、№1010、は Sr/Rb の値が高く、月夜野窯跡群の一部、中之条窯跡群の一部の領域に取まり、さらに地理的に遠い太田金山窯跡群の領域にも一部が重なる。

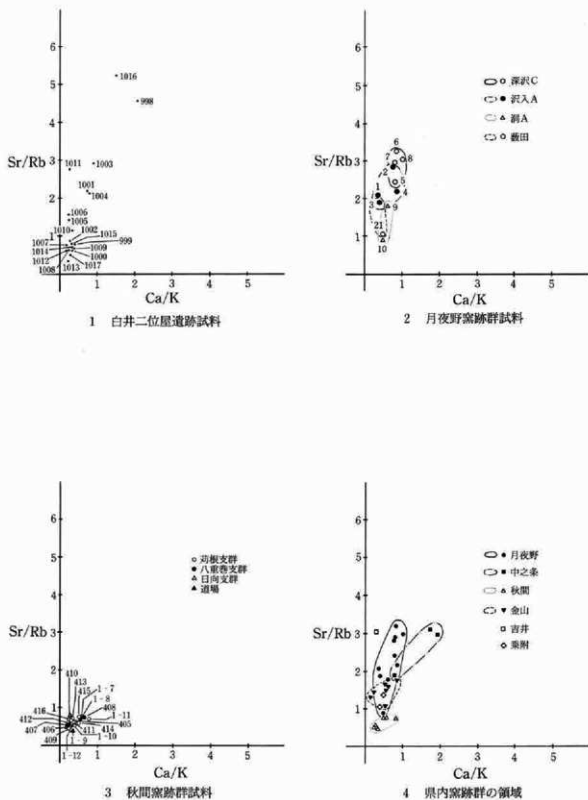
④ №1001、№1004は Sr/Rb 値が2以上であり、吉井窯跡群の値にも近く、月夜野窯跡群、中之条窯跡群の領域に入る。

⑤ №1003は吉井窯跡群の値に近接し、月夜野窯跡群の領域にも入る。

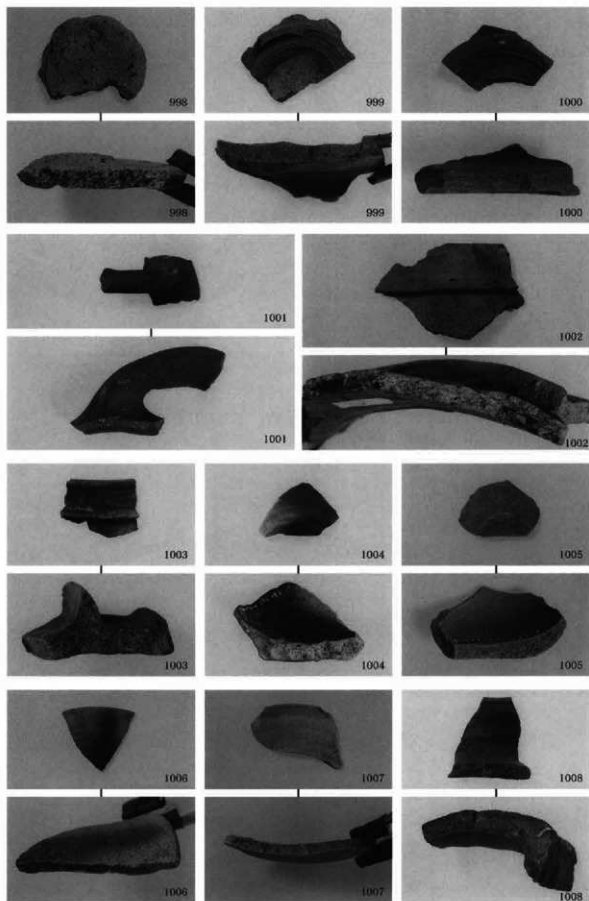
⑥ №1011は吉井窯跡群の値に近接している。

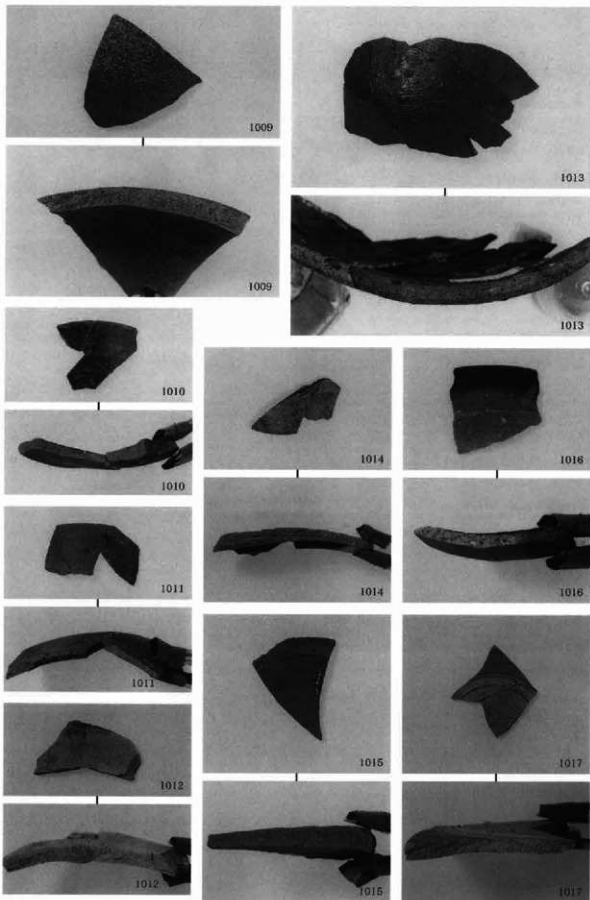
## 引用・参考文献

- 第365図2・4 「Ⅷ 化学分析 新田東遺跡出土土器の胎土分析」『新田東遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982  
 第365図3 「第6章 部・鎌倉・後田遺跡出土土器の胎土分析」『前遺跡・鎌倉遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1989  
 中沢 哲 「(3) 月夜野羽黒の標相と月夜野古窯址群」『大原日遺跡 村主遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986



第365図 Sr/Rb・Ca/K 相関図





## 第5節 遺物の自然科学的調査結果からみた白井南中道遺跡における鉄器の製作と流通

岩手県立博物館 赤沼英男

### 1 はじめに

一般国道17号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査によって、群馬県北群馬郡子持村白井南中道遺跡は古墳時代から平安時代にわたる複合遺跡であることが明らかとなった。発掘された住居跡からは、鉄鍬や刀子をはじめとする武具、農具が見いだされ、鉄塊、鉄滓、あるいは鉄滓が付着したふいご羽口を出土する住居跡も検出された。また、9世紀後半から末葉に比定される住居跡では、焼土遺構までもが確認されたため、当該時期に遺跡内で鉄に関する生産活動が展開されていたことが確実となったが、発掘調査結果で生産の具体的内容について言及することは困難とされた<sup>1)</sup>。

白井南中道遺跡と同時に発掘調査が行われた白井二位屋遺跡においても、7世紀後半に比定される住居跡が廃棄された後に造成された窪地から、相当量の鉄塊ならびに鉄滓が出土した。そして、それらの自然科学的調査結果によって、遺跡内では製錬炉で生産された粗鉄を素材とする鋼の製造と鋼製鉄器の製作がなされていたこと、ならびに粗鉄の原料鉱石は砂鉄であり、その生産場所は遺跡周辺であった可能性が高いとする報告がなされている<sup>2)</sup>。すなわち、遺跡内およびその周辺において、原料から最終製品にいたるまでの一貫生産が行われていたという見方が示されたわけである。

白井南中道遺跡でも上述の白井二位屋遺跡と同形態の生産活動がなされていたかどうかを検討するため、財団法人群馬県埋蔵文化財事業団の依頼に基づき遺物の自然科学的調査を行った。なお、調査の実施にあたっては、前述の白井二位屋遺跡から出土した鉄塊の一部についても再分析をすることとし、2遺跡における生産活動内容を比較することとした。

調査の結果、白井南中道遺跡では7世紀末にはあらかじめ準備された鉄鉄を脱炭し鋼を製造するという、“精錬”によって造り出された鋼を素材としているとみなすことのできる鋼製鉄器が認められ、そのような鉄器の使用が9世紀後半まで続くこと、そして、8世紀後半から9世紀末には遺跡内で精錬が実施されており、白井二位屋遺跡においても同様の生産形態がとられていた可能性が高いことがわかった。さらに、鋼製鉄器ならびに鉄塊の一部についてはそれらの組成から、供給起源を東北アジアの範囲の中で検討する必要があることが指摘された。静岡県浜松市に立地する天王中野遺跡、青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡についても同様の状況にあったとする見解が提出されている<sup>3,4)</sup>。律令時代の鉄器の製作が広域的な原料鉄(鉄鉄もしくは鋼)の流通に依拠していた可能性の高いことを示すものであり、既に報告されている白井二位屋遺跡出土物の解析結果<sup>5)</sup>とは異なる見解が導きだされたわけである。以下では自然科学的調査によって得られた知見について述べる。

### 2 分析資料

分析を行った資料は住居跡内より出土した15点の鉄器、1点の鉄塊、13点の鉄滓、ならびに4点の遺跡周辺から採取された砂鉄である。資料の名称と検出遺構および推定年代を表1 a・bに、鉄器の実測図を図1に、鉄塊・鉄滓の外観を図10に示す。後述するとおり、No.33号住居跡から出土した資料についてはNo.33号住居跡廃棄後に造られたNo.34号住居跡に伴う可能性があるという<sup>1)</sup>。そこで以下ではNo.33号住居跡出土資料を8世紀後半～9世紀末葉として扱うこととする。

## 3 分析用試料の調整

鉄器からの分析用試料の抽出は、資料全体の形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って慎重に行った。抽出した試料片を2分し大きい方を組織観察に、小さい方を化学成分分析に供した。試料片抽出部位はエポキシ樹脂で補修し、原形に復した。なお、№2刀子については残存状態が悪く、組織観察用試料片を準備することができなかった。

鉄滓についてはまず中心に沿って切斷し、切斷面を注意深く観察して錆層に鉄滓が付着している領域がないかどうかを調べた。該当する領域が認められた場合にはその部分とそれに対応するもう一方の切斷面から、認められない場合にはそれぞれの切斷面の中心部分から試料片を切り取った。

鉄器からの分析用試料片の抽出位置を図1に、鉄塊、鉄滓の切斷位置を図10に示す。なお、資料№13については発掘調査責任者によって鎌の可能性があることが指摘されているが、後述のとおり分析によって板状の鉄鉄であることが判明したため、ここでは板状鉄とした。

## 4 分析方法

鉄器ならびに鉄滓から抽出した試料片のうち大きい方をエポキシ樹脂で固定し、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを使って研磨した後、金属顕微鏡によりその組織を観察した。また、地金の製造方法を推定するうえで重要と判断された鉄器に残存する非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）、および鉄滓中の鉱物については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を決定した。

抽出したもう一方の試料片については、表面に付着する錆や土砂を除去した後、エチルアルコール、アセトンで洗浄し十分に乾燥した。次に鉄器からの試料片については直接に、鉄滓からのものについては粉砕のうえテフロン分解容器に秤量し、酸を使って溶解した。このようにして調整した溶液中の、T.Fe、Cu、Mn、P、Ni、Co、Ti、Si、Ca、Al、Mg、Vの12成分を誘導結合プラズマ発光分光分析法（ICP-AES法）により定量した。鉄滓中のT.Fe、M.Fe、FeOはクロム酸カリウム測定容量法、SiO<sub>2</sub>は重量法によった。

## 5 分析結果

## 5-1 鉄器の化学組成

鉄器から抽出した試料片の化学組成を表2に示す。№12鎌、№14刀子、№15鎌のT.Feはいずれも92%を越えている。№5鎌は88.27%である。これら4点の鉄器についてはほぼメタル、もしくはメタルと鋼からなる試料が分析されている。他の11点についてはいずれも72%未満で、錆化が相当に進んだ試料が分析されたとみなければならない。

№1鎌、№2刀子、№9鎌、№13板状鉄、№15鎌にはそれぞれ0.111%、0.110%、0.422%、0.321%、0.347%のCuが含有されている。さらに、№1鎌、№3鎌、№8鎌、№10刀子、および№13板状鉄からは0.1%を上回るPが検出されている。また、№1～№15全てに0.01%を上回るCoが、№2刀子、№3鎌、№6鎌、№9鎌、№10刀子、№11刀子および№15鎌には0.01%を上回るNiが含まれていた。

分析を行った鉄器には鉄以外の金属の付着は認められないという<sup>1)</sup>。0.1%を超えるCu、0.01%以上のCoおよびNiが埋蔵環境下から富化される可能性がきわめて低いことを考慮すると、№1鎌を始めとする5点の鉄器から検出された0.1%を超えるCu、№1～№15に含有されるCo、および№2刀子をはじめとする7点の鉄器から検出されたNiのほとんどは、それぞれの鉄器の製作に使用された地金に含まれていたと判断さ

れる。

Pについては埋蔵環境からの富化の可能性を考慮する必要がある<sup>47)</sup>。このような場合、ほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできる鉄器の化学組成を比較することによって、埋蔵環境からの富化の可能性の有無をある程度見極めることができる。表1のうちNa8鎌とNa9鎌については検出遺構が同じであり、錆化もほぼ同程度にあるとみることができる。Na8鎌にはNa9鎌の3倍強のPが検出されていることを考慮すると、Na8鎌から検出されたPの相当量は製作に使用された地金に含有されていたものとして扱うことができる。なお、Na1鎌、Na3鎌、Na10刀子、およびNa13板状鉄については、錆化前の地金に相当量のPが含有されていた可能性があることを指摘するにとどめておく。

### 5-2 鉄器から抽出した試料片のマクロおよびミクロ組織

Na5鎌から抽出した試料片はメタルと錆層によって構成されている(図2a)。メタル部分に近接する黒錆層(図2aの枠で囲んだ部分)には、金属光沢を呈する微細な線状の結晶Cm、あるいはその欠落孔によって構成される島状の組織が観察される(図2b)。EPMAによる組成像(COMP)によると、島状組織内の結晶Cmは1~2 $\mu$ mの間隔でほぼ規則正しく層状に並んでいる(図2c)。これまでに行われた錆層の組織解析結果に従う<sup>7)</sup>、結晶Cmはセメントタイト(Fe<sub>3</sub>C)と判定される。この結晶によって構成される島状組織を錆化前の地金におけるパーライト〔フェライト( $\alpha$ Fe)とセメントタイトの共析組織〕とし、錆化による結晶の膨張を無視すると、図2dに示す結晶Cmの分布状況から、錆化前の地金は炭素量が0.2~0.3%の鋼とみることができる。図3d・g・h・iから明らかなように、同様の組織はNa6鎌、Na11刀子、Na12鎌、Na15鎌にも認められ、Na15鎌には炭素量が0.5%を超える鋼、Na6鎌には0.4~0.5% Cの鋼、Na11刀子、Na12鎌には0.2~0.3% Cの鋼が配されていたものと推定された。

Na1鎌から抽出した試料片には微細な黒点群からなる島状の組織が認められる(図3a)。この組織は上述のセメントタイトの欠落によって形成されたものとみなすことができ、その分布状況から製作に使用された地金は0.1~0.2% Cの鋼と判定できる。Na3鎌、Na4・Na8・Na9鎌にも同様の組織がみられ、4点ともNa1鎌と同様、炭素含有量0.1~0.2%の鋼と評価された(図3b・c・e・f)。Na13板状鉄から抽出した試料片のメタルには、ところどころに空隙が残存する(図4a)。メタルの領域A部はレーズブライト組織( $\alpha$ FeとFe<sub>3</sub>Cの共晶組織)によって構成されており(図4b)、領域B部には片状黒鉛(G)とFe-Cu-S系のやや灰色を呈する領域が観察される(図4c)。この組織観察に基づけば、Na13板状鉄は純鉄で、化学成分分析において検出された0.321%のCuのほとんどはその灰色領域に起因するとみることができる。

Na5鎌、Na12鎌、Na14刀子、およびNa15鎌から抽出した試料片にはメタルが残存していたので、酸で腐食することにより炭素濃度分布および熱処理の有無等を確認できるが、腐食による錆化の進行と非金属介在物の喪失を考慮し今回は見合わせた。なお、Na7鎌とNa10刀子については錆化の進行が著しく、錆化前の地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった(図5)。上述の組織観察結果は表2の右欄にまとめられる。

### 5-3 鉄器に見いだされた非金属介在物の組成

Na12鎌には薄層状の非金属介在物(鋼の製造過程で除去することができずに残った異物)が観察され、その多くは灰色の結晶XToと黒色領域Sによって構成されていた。代表的な非金属介在物をEPMAにより分析した結果が図6である。結晶XToはTiを主成分とし、他にMg、Al、Si分が含有されている。また、微

量ではあるがFeも含まれている。この結晶は主として酸化チタンからなり、その回りは、黒色のFeO-CaO-K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O-MgO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>-TiO<sub>2</sub>系のガラス質けい酸塩(S)によって取り囲まれていることが判明した。図7のEPMAによる分析結果が示すように、Na3鏝、Na4鏝、Na5鏝、Na7鏝、Na11刀子に残存する非金属介在物にも主として酸化鉄と酸化チタンから成る化合物(以下では鉄チタン化合物という)が見いだされた。

Na15鏝には灰色の粒状結晶Wと暗灰色の結晶O、そして黒色のガラス質けい酸塩(S)からなる非金属介在物が認められた。図8のEPMAによる分析結果に基づけば、結晶Wはウスタイト(化学理論組成FeO)、結晶OはFeO-CaO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物と判定され、ガラス質けい酸塩はFeO-CaO-K<sub>2</sub>O-Na<sub>2</sub>O-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO-SiO<sub>2</sub>-P<sub>2</sub>O<sub>5</sub>系であることがわかった。また、図9に示すように、Na8鏝とNa10刀子の非金属介在物はウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系の化合物(F)またはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物(O)、FeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系化合物(H)、Na9鏝についてはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系の化合物(F)とガラス質けい酸塩(S)、Na14刀子についてはガラス質けい酸塩(S)によって構成されていることがEPMAによる分析によって確かめられた。

なお、Na1・Na6鏝については錆化が著しく、非金属介在物を見いだすことができなかった。上述の分析結果は、表2右欄にまとめられる。

#### 5-4 鉄塊、鉄滓の化学組成

鉄塊、鉄滓の化学組成を表3、表4に示す。なお、表3には白井南中道遺跡に隣接する白井二位屋遺跡の、7世紀後半と推定される40住号住居跡が廃絶された後に造られた窠みの中に廃棄されたと推定される4点の鉄塊の化学成分分析結果<sup>9)</sup>も掲載した。白井南中道Na2 A鉄塊はT.Feが92.60%、白井二位屋遺跡出土の4点のT.Feも86%以上にあり、ほぼメタルもしくはメタルに錆が混在した試料が分析に供されている。Na2 A鉄塊と白井二位屋Na9鉄塊のPはそれぞれ0.093%、0.270%、Na2 A鉄塊、白井二位屋Na7・Na8・Na10鉄塊のCoはいずれも0.05%以上にある。Na2 A鉄塊には0.062%のNiも含まれている。表4の下段に示す白井南中道遺跡周辺から採取された砂鉄中のNi、Coはそれぞれ0.007%以下、0.02~0.022%であり、これらの分析結果は白井南中道Na2 A鉄塊、白井二位屋Na7・Na8・Na10鉄塊中のNiやCoが遺跡周辺から採取された砂鉄に比べ高レベルにあることを示している。

分析を行った13点の鉄滓のT.Feは26~67%、FeOは24~67%にあり、相当量の錆が混在していたか、または相当量の鉄かんらん石やウスタイトが残存していたものと推測される。一方、Na8鉄滓からは6.92%、Na6・Na9・Na13鉄滓からはそれぞれ4.51%、4.78%、4.47%のTiが検出されている。分析した鉄滓に相当量の鉄チタン化合物が残存していたものと判断される。

#### 5-5 鉄塊のマクロおよびマイクロエッチング組織

図11にNa2 A鉄塊、ならびに白井二位屋遺跡から出土したNa9・Na10鉄塊の組織観察結果を示す。

Na2 A鉄塊のナイタルによるマクロエッチング組織は黒色に腐食された領域(A<sub>1</sub>部)と金属光沢を呈する領域(A<sub>2</sub>部)からなり(図11 a<sub>1</sub>)、前者はそのほとんどがパーライトによって構成される共析鋼(炭素含有量約0.8%の鋼)に近い組成の鋼、後者はフェライト(αFe)によって構成される0.1~0.2% Cの鋼である(図11 a<sub>2</sub>・a<sub>3</sub>)。白井二位屋Na10鉄塊の領域C<sub>2</sub>部もパーライト組織からなり(図11 c<sub>3</sub>)、C<sub>2</sub>部には初析セメントタイト(PCm)が観察される。この組織によってNa10鉄塊は過共析鋼(炭素含有量が約0.8%を上回る鋼)であることが明らかとなった。白井二位屋Na9鉄塊は試料全域がレーデライト組織によって構成されてい



る(図11 b<sub>1</sub>~b<sub>3</sub>)。なお、白井二位屋No.7鉄塊はNo.2 A鉄塊領域A<sub>1</sub>同様共析鋼に近い組成の鋼、白井二位屋No.8鉄塊は亜共析鋼(炭素含有量が約0.8%未満の鋼)であることが確認されており、No.10鉄塊には77.9%ものTiO<sub>2</sub>を含有する化合物とガラス質けい酸塩からなる非金属介在物が、一方、No.7・No.8鉄塊には鉄チタン化合物が残存する非金属介在物が見いだされている<sup>9)</sup>。上述の分析結果は表3の右欄にまとめられる。

#### 5-6 鉄滓のマクロおよびマイクロ組織

No.1鉄滓から抽出した試料片は、鉄滓(図12マクロ組織A部)に粘土もしくは岩石が部分溶融したと思われる物質(図12マクロ組織B部)が付着したものである。マクロ組織の種内部を高倍で観察したものがマクロ組織右のマイクロ組織で、内部に灰色の結晶XTがみられる。EPMAによる分析によって結晶XTはMg、Vを固溶したチタン化合物であることがわかった。また、その回りはCaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>-Na<sub>2</sub>O系のガラス質けい酸塩(S)によって取り囲まれており、ところどころにFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系の化合物(F)[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: 2(Fe,Mg)O・SiO<sub>2</sub>と推定される]も観察された。

No.2 B鉄滓から抽出した試料片は暗灰色の鉄滓と筋が複雑に入り組んだ組織をとる(図13マクロ組織)。マクロ組織の領域A部にはいたるところに灰色の結晶Peが残存しており、EPMAによってCaO-TiO<sub>2</sub>系化合物(ペロプスカイト: CaO・TiO<sub>2</sub>と推定される)と判定された。また、結晶Peとともに主としてCaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>からなる化合物(XC<sub>1</sub>)もみられ、それらのまわりはFeをほとんど含まない微細な結晶を内包するガラス質けい酸塩(M)によって埋められていた。一方、マクロ組織の領域B部はチタン化合物(XT)と、主として酸化鉄、CaO、Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>、SiO<sub>2</sub>からなる化合物(XC<sub>2</sub>)、およびマトリックス(M)によって構成されていた。

No.13鉄滓から抽出した試料片も灰色の角状化合物が残存した領域A部と微細な結晶が析出した領域B部からなる(図14)。マクロ組織の下には領域A部、右には領域B部のEPMAによる分析結果を示した。前者には大きさ100~200μmの粒子が残存している。その内部はFeとOからなる灰色の領域とFe、Ti、Al、V、Oを含む暗灰色の領域によって構成されている。粒子の周縁部には多数の暗灰色をしたチタン化合物が残存しており、それらの回りはFeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-MgO-SiO<sub>2</sub>系のガラス質けい酸塩(S<sub>1</sub>)で埋められ、さらにCaO-SiO<sub>2</sub>-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系のガラス質けい酸塩(S<sub>2</sub>)が取り囲んでいる。一方、領域BにはNo.2 B鉄滓同様、チタン化合物(XT)とウスタイト(W)、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物(F)、および微細な結晶が混在するマトリックス(M)が観察され、化合物Fの周縁部にはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物(O)も認められた。

図15にはNo.3鉄滓をはじめとする10点の鉄滓の組織観察結果を示した。No.10鉄滓はそのほとんどがウスタイト(W)、チタン化合物(XT)、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物(F)、マトリックス(M)からなり、No.4・No.6・No.7・No.9・No.11・No.12鉄滓もほぼ同様の組織をとる。No.5およびNo.8の2点はチタン化合物(XT)、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物(F)、およびガラス質けい酸塩(S)もしくはマトリックス(M)によって構成されている。なお、No.10、No.11鉄滓にはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物(O)が析出しており、No.8とNo.10鉄滓には鉄粒が観察された。鉄滓の鉱物組成は表4右欄にまとめられる。

## 7 鉄器地金の組成

### 7-1 鉄器の分類

鉄器は鋼を素材とする鋼製鉄器と鉄鉄を素材とする鋳造鉄器の2つに分類される。分析を行った鉄器の中でNo.2刀子とNo.13板状鉄を除く13点については、セメントタイトまたはその欠落孔からなる組織、もしくは非

金属介在物が見いだされており、鋼製鉄器である。Na13板状鉄はレーデプライト組織と片状黒鉛がみられたため、鉄を素材としている。Na2刀子については、鋼製鉄器か鑄造鉄器かを判定するための自然科学的根拠を得ることができなかったが、器種を考慮すると鋼製鉄器の可能性が高いと判断される。

### 7-2 原料鉱石からみた地金の分類

地金の製造に使用される原料鉱石としては砂鉄<sup>10)</sup>と鉄鉱石の2つを挙げることができる。鋼の製造に際して砂鉄が用いられた場合、砂鉄の還元により生成するチタン化合物〔ウルボスピネル ( $2\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、イルメナイト ( $\text{FeO} \cdot \text{TiO}_2$ )、主として酸化チタンからなる化合物、およびそれらのいずれにも同定されない主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物の総称〕が鋼に残存する非金属介在物の中に見いだされることになる。表2の中で非金属介在物中にチタン化合物が見いだされたNa3・5鏝、Na4・7・12鏝、Na11刀子の製作に使用された鋼はチタン化合物を含むスラグと鉄との接触を経て、一方、非金属介在物中にチタン化合物が見いだされなかったNa8・9鏝、Na10・Na14刀子、Na15鏝については、それらの製作の素材となった鋼の製造過程において上述と同様の状態が存在したことを指摘することはできない。なお、Na1・6鏝、Na2刀子のように非金属介在物を見いだすことができなかったもの、または組織観察を行うことができなかったものについては、地金の製造過程で上述の状態が存在したかどうかを言及することはできない。このように鋼製鉄器は非金属介在物組成に基づき、(イ)鋼の製造過程でチタン化合物を含むスラグと鉄との接触があったことを指摘できないもの、(ロ)チタン化合物を含むスラグと鉄との接触を経て製造された鋼を素材とするもの、(ハ)チタン化合物を含むスラグと鉄との接触が不明なものの3つに分類できる。以下では(イ)に分類されたものをIOグループ、(ロ)をSグループ、(ハ)をUグループと呼ぶことにする。

IOグループに分類されたものの化学組成に着目すると、Na9鏝とNa15鏝には0.1%を超えるCuが含有されている。鋼の製造には脈石中にCu鉱物を随伴する鉄鉱石が使用された可能性が高い。これに対し、Na14刀子については化学組成上の特徴がみられないため原料鉱石の組成について言及することは難しい。Na10刀子には0.058%のCoと0.100%のPが含まれている。しかし、既述のとおりNa10刀子と同じ埋蔵環境下にあったとみなすことができる鉄器が存在しないため、検出されたPをただちに鑄化前の鋼に含有されていたものとして扱うことは危険である。そこでNa10刀子については、鉄器の製作に使用された鋼の原料鉱石中にP鉱物が随伴されていた可能性のあることを指摘するととめておく。Na8鏝に含有されるPについてはほぼ同じ埋蔵環境下にあったとみなすことのできるNa9鏝との対比によって、製作に使用された地金に含まれているとみることができた。Sグループに分類された鋼製鉄器の中で、Na12鏝、Na3鏝、Na5鏝からはそれぞれ0.088%、0.05%近くのCoが検出されている。5-1で述べたように、これら3点の鋼製鉄器から検出されたCoについては鑄化前の地金に含有されていたとみなすことができる。なお、Na3鏝には0.1%を超えるPも検出されているが、前述と同様の理由でP鉱物を随伴する鉄鉱石が使用された可能性のあることを述べるにとどめた。

Uグループに分類された鋼製鉄器の中にもCu、Pの含有量の高いものが認められる。中でも0.1%を超えるCuを含むNa2刀子については脈石中に銅鉱物を随伴する原料鉱石が使用された可能性がある。

## 8 古代ならびに中世における鋼の製造

遺物の形状とその組成を基に白井南中道遺跡での生産活動について検討する前に、現在提案されている古代末ならびに中世における鋼製造法について検討したい。古代・中世においても原料鉱石(砂鉄もしくは鉄

鉱石)を製錬し鉄が生産されたことはまちがいない。製錬における主生成物が何か、この点についての見解の相違によって、複数の鋼製法が提案されている。

製錬産物である鉄は炭素含有量に応じ、鋼と鉄鉄の2つに分類される。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を抽出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そして、その鋼を使って製品鉄器が製作されたという見方がある<sup>13)</sup>。製錬炉で直接に鋼が造り出されるという意味で、この方法は直接製鋼法に位置づけることができる。そして、この方法によって得られた鉄(炭素量が不均一で相当量の鉄滓が混在した鉄、主に鋼からなるが鉄鉄も混在すると考えられている)を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は、精錬鍛冶<sup>13)</sup>とされている。

ところで、製錬では鉄鉄も生産される。鉄鉄は再び溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、鉄鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭することによって鋼も製造できる。その方法の一つとして、鉄鉄浴を造り後述する近世たたら吹き製鉄における大鍛冶と同じ原理によって少量の鉄酸化物を含む物質を用いて造られたスラグと接触させながら、その脱炭を計るという精錬が実施されていた可能性が高いとする見解が、遺物の自然科学的解析結果に基づき示されている<sup>13)(14)</sup>。この方法は、鉄鉄を経由して鋼を製造するという意味で間接製鋼法に位置づけることができる。いうまでもなくわが国の古代・中世における精錬については、生産設備も含めその詳細が未解明にある。しかし、続く近世のたたら吹き製鉄では、大鍛冶が知られている。

近世たたら吹き製鉄には銃押法と鉤押法の2つの方法があるが、前者による鋼(厳密には包丁鉄、現代製鋼でいえば $\alpha$ Feに近い組成の鋼と推定される)の製法については、中沢源人氏が山田賢一氏の論文を基に詳しく説明されている<sup>15)</sup>。それによると、製錬炉でまず鉄鉄が生産される。生産の主目的物はあくまで炉外に排出される鉄鉄であるが、副生成物として炉内に鉤鉄もできる。これは操業の妨げになるので、鉄棒をたえず炉内に入れ炉外に取り出すよう努める。このようにして生産された鉄鉄を鍛冶場に運ぶ。

そこではまず火床炉の炉底に木炭を積み、その上に鉄鉄を羽口前にアーチ形に積み重ね、さらに小炭を覆い、底部に点火する。積み重ねられた鉄鉄は内部にあるものから溶融し、滴下する。この時、羽口先付近の酸化性火焰によれ、酸化されて鋼(左下鉄)となる。ここまでの操作を「左下」という。左下鉄は製錬時の副生成物である鉤ととともに再度同じ火床炉にアーチ状に積まれ、上述と同様にしてさらに脱炭が計られる。脱炭が十分に進んだところで金敷の上ののせ、加熱・鍛打によって鉄滓の除去と整形がなされる。後者は「本場」と呼ばれる。このように「左下」と「本場」、2つの操作を経て包丁鉄を造る方法は「大鍛冶」といわれている。古代・中世においても、遺構と遺物の形状およびその組成から判断して、基本的にこの方法がとられたと判断できる場合には、特に大鍛冶といい区別することとしたい。この大鍛冶における「本場」は、先に述べた精錬鍛冶と出発物質こそ異なるものの、操作内容は基本的に同じとみなすことができる。直接製鋼法を前提とした精錬、あるいは間接製鋼法を前提とする精錬、それらのうちのいずれかの方法によって製造された鋼は、小鍛冶操作によって鋼製鉄器へと加工される。その操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄(スケール)が剝離(これは鍛造剥片と呼ばれる)する。一方、加熱のときは酸化鉄が軟化し、加熱炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応し鉄分に富む鉄滓、もしくは鉄滓状物質が生成され固化する。このようにして生成した物質が、鉄関連遺構の発掘調査では小鍛冶滓(もしくは鍛錬鍛冶滓)として扱われる。そして、その操作に基づけば、小鍛冶滓は金属鉄、鋼、ウスタイトを主成分とし、他にスケールが炉材と反応した際に生成するFeO-SiO<sub>2</sub>系化合物が混在した組成をとるものと推測される。

上述から明らかなように、鋼の製造方法としては、直接製鋼法、間接製鋼法による精錬(大鍛冶をも含む)という基本的に2つの異なる方法があり、さらに、後者の場合、融鉄を造るという点で大鍛冶とは異なる脱炭方法が提案されていることがわかる。それらは図16に整理される。

精錬鍛冶を実施するにあたっては出発物質となる、炭素量が不均一で鉄滓の混在した鉄の入手方法が課題となる。すなわち、当時そのような鉄が流通しており、その供給を受けて精錬鍛冶が行われていたか、あるいはそのような鉄の流通がなかったとすれば、精錬鍛冶が実施されていたと考えられる遺跡の近傍では、そのような組成の鉄を造り出すための製錬がなされていたとみなければならないことになる。このように、精錬鍛冶を想定した場合には出発物質の入手方法に関する検討も必要となる。一方、鉄浴を造る精錬の場合にはどうであろうか。この操作では、精錬反応を維持するための設備あるいは操作方法の確立が前提となる。以下ではこの点をも考慮に入れて、白井南中道遺跡の平安期における鉄生産活動について検討したい。

#### 9 鉄関連遺物の組成からみた白井南中道遺跡における生産活動

発掘調査によって、No.33およびNo.34号住居跡からは相当量の鉄滓が検出されている。ただし、既述のようにNo.33号住居跡についてはその埋没土中から見いだされており、No.33号住居跡の床面に伴うものであるかどうかは断定できないとのことである<sup>1)</sup>。厳密には、ア) No.33号住居で鉄関連の生産活動が行われた際の廃棄物、イ) No.33号住居廃棄後に築造されたNo.34号住居跡での作業に伴う廃棄物、ウ) No.33号住居廃棄後に近接する鉄関連作業場から持ち込まれた廃棄物、のいずれかが想定されている<sup>1)</sup>。従って、以下ではNo.33号住居跡の埋没土中から出土したNo.1鉄滓、No.2 A鉄塊、No.2 B鉄滓の3点については、8世紀後半から9世紀末葉に位置づけて考察することとする。

砂鉄を始発原料とする製錬を行う場合、イ) 始発原料となる砂鉄が採取できること、ロ) 木炭の入手が可能であること、という2つが満たされ、さらに、炉跡に伴って検出される鉄塊、鉄滓、砂鉄の組成が矛盾なく説明できなければならない。白井南中道遺跡を発掘調査された南雲芳昭氏によれば、砂鉄や木炭については、権名山周辺一帯で得ることができるといえる。従って、始発原料である砂鉄や木炭についての入手は可能といえる。それでは検出された遺物の組成はどうであろうか。

No.33号住居跡からは0.062%のNi、0.190%のCo、そして0.093%のPを含有する共析鋼に近い組成の鋼塊(No.2 A鉄塊)が見いだされ、CaO-TiO<sub>2</sub>系化合物が残存し、その回りを酸化鉄をほとんど含まないガラス質けい酸塩が取り囲んだ組織をもつ鉄滓(No.2 B鉄滓)が検出されている。また、No.34号住居跡からも鉄チタン化合物、FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、ウスタイト、およびガラス質けい酸塩、またはマトリックスによって構成された鉄滓が出土している。これらの鉄滓はいずれも塊状もしくは板状を呈している。一度溶融もしくは部分溶融した後固化した資料であり、その組成を考慮すれば、8で述べた小鍛冶において生成した鉄滓とみることはできない。チタン化合物が残存していることをふまえれば、砂鉄を始発原料とする製錬、もしくは砂鉄を始発原料とする製錬によって得られた主として鋼からなる組成の不均一な鉄を素材とする精錬鍛冶、あるいは鉄鉄を脱炭し鋼を製造するという精錬のいずれかの操作の過程で生成し、廃棄されたものということになる。

表4の下段には遺跡周辺から採取される砂鉄の化学組成を示している。これらのうちのいずれかを使って製錬がなされていたとすれば、砂鉄中の酸化鉄は還元され固体鉄としてスラグから分離されるが、その際砂鉄中のNi、Co、P分もそのほとんどが鉄中に移行することになる。遺跡周辺から採取された砂鉄と鉄塊中のCu、Ni、およびCoの含有量比には差異がみられ、No.2 A鉄塊からは遺跡周辺において採取された砂鉄のほ

は10倍、もしくはそれを上まわる Ni や Co が検出されている。遺跡周辺から採取された砂鉄で、No.2 A 鋼塊が製造されたと解釈することは難しく、あらかじめ準備された鉄素材を用いて目的とする鋼の製造がなされていた可能性が高い。

8に従えば、鉄鉄や鋼が混在し相当量の鉄滓を噛み込んだ炭素量の不均一な鉄塊を出発物質とする精錬鍛冶か、少量の鉄酸化物（この遺跡の場合には砂鉄）を用いて鉄鉄を脱炭するという精錬のいずれかが考えられる。鉄滓中にナタン化合物が見いだされているため、精錬鍛冶を想定した場合には、砂鉄を始発原料とする製錬によって得られた主として鋼からなる鉄塊、厳密には製錬の際に分離・除去できずに残った鉄滓が混在する炭素量の不均一な鉄塊を用いて目的とする鋼が製造されることになる。既述のとおり遺跡周辺で採取された砂鉄によりNo.2 A 鋼塊が生産されたと判定することは難しい。精錬鍛冶の立場に立てば、相当量の Ti、Ni、Co 鉱物を随伴する特殊な鉱石を始発原料として生産された炭素量の不均一な鉄塊が他地域から白井南中道遺跡に供給され、それを使って操作がなされていたと推定される。加えて、当時鋼を溶融できるまでに炉内温度が達していたとは考えにくいので、目的とする鋼を得るためには加熱・鍛造が不可欠であったと判断される。この操作の段階で、相当量の破砕された鉄滓が排出されることになるが、後述するとおり、No.33号住居跡が廃棄された後に造られたNo.34号住居跡からは、薄い板状の鉄滓がわずかに見いだされているものの<sup>1)</sup>、No.33号住居跡はもとよりNo.34号住居跡の主たる検出資料は塊状や塊状をした鉄滓である。炭素量が不均一で鉄滓を噛み込んだ主として鋼からなる鉄塊の流通を前提とする精錬鍛冶の実施については、遺物の出土状況の点からも吟味すべき課題が生じている。

それでは鉄鉄を脱炭する精錬を考えた場合には、考古学による発掘調査結果と遺物の自然科学的調査結果を矛盾なく説明できるのであろうか。精錬の実施には鉄鉄が不可欠であるが、白井南中道遺跡の住居跡において鉄鉄は確認されていない。しかし、白井南中道遺跡に隣接する白井二位屋遺跡では、レーデライト組織からなる鉄鉄がNo.40号住居跡廃絶後の窪みから見いだされている。その化学組成は表3に示すとおりで、遺跡周辺から採取される砂鉄に比べ Ni は高レベルにある。筆者による白井二位屋遺跡出土鉄塊の再分析によって、鉄鉄塊とともに遺跡周辺から採取される砂鉄に比べはるかに高いレベルの Ni または Co を含有する共析鋼に近い組成の鋼、亜共析鋼も確認された。このような一連の鉄鉄や鋼塊の組成に基づけば、他地域から鉄鉄がもたらされたと解釈することによって分析結果の説明が可能となる。

白井南中道遺跡No.33住居跡ではNo.2 A 鉄塊とともに、CaO-TiO<sub>2</sub>系化合物が残存し、その回りを酸化鉄をほとんど含まないマトリックスが取り囲んだ組織をもつNo.2 B 鉄滓が検出されている。これは砂鉄の使用によって生成したスラグと相当量の炭素を含む鉄、もしくは炭材との接触によって生成した鉄滓と判断され、溶融鉄鉄とスラグとの反応があったことを支持している。鉄塊は未確認であるが、No.34号住居跡およびNo.9号住居跡からも、No.33号住居跡出土のNo.1 鉄滓と形状や組成がほぼ同じものが相当数発見されている。これらについてもやはり精錬の過程で生成した鉄滓とみることができる。

ところで、No.34号住居跡では3基の炉跡がみいだされている。炉跡はいずれも30~50cmほどの深さで円形に掘りくぼめられたものであるが、炉壁を伴っていたかどうかは不明とされている<sup>2)</sup>。そのような炉跡や前述の塊状もしくは塊状鉄滓とともに、鍛造薄片も確認されている<sup>3)</sup>。固体鉄を加熱して鍛造する操作がなされていたことは確実であり、精錬によって製造された鋼の表面に付着する鉄滓を除去し、一定の形状に整形した後、目的とする鋼製鉄器の製作がなされていた可能性がある。検出された3基の炉跡がすべて精錬のために用いられたものか、あるいは製造された鋼を鍛打するための加熱炉と精錬炉とが共存していたかが問題となるが、この点については遺構の残存状況と遺物の検出状況を吟味のうえ、検討する必要がある。なお、精錬の実施

にあたっては、精錬反応を維持するための設備や操作方法の確立が前提となることは既述のとおりである。鉄関連遺構の場合、生産設備や道具はほとんど失われ、わずかに生産遺構の下部構造と最終目的物を製造する過程で生成した、もしくは最終目的物が回収された後の廃棄物や生産設備、道具の一部が残されるにすぎない。従って、この点について現段階で明確にすることは困難である。

ただし、資料No1をはじめとし、調査した鉄滓の中には塊状を呈し、凸部外表面に灰褐色の部分溶融した粘土状物質がところどころに付着したものがみられた。円形に掘りかめられた遺構の中、もしくはその上部に熱源と反応サイトを隔離する何らかの設備があったことを示すものといえる。これらの事実を上記考察の結果を加味すると、白井南中道遺跡では8世紀後半から9世紀末に溶銑を準備し鉄銑を脱炭して鋼を製造するという、精錬が行われていた可能性が高い。出土遺物の見直しと新たに検出される鉄関連遺構を考古学と自然科学それぞれの分野に属する研究者が共同で調査することにより、脱炭反応進行に必要な熱源を確保するための具体的設備とその操作方法の解明に迫れると筆者は考える。なお、鉄滓と共析鋼の化学組成に基づけば、供給された鉄銑には相当量のPが含まれ、さらに、遺跡周辺から採取される砂銑に比べ高レベルのNiまたはCoが含有されていたものと推定される。白井南中道遺跡に隣接する白井二位屋遺跡において検出されたNo9鉄銑の組成は、上述を指示するものといえる。ただし、検出された鉄銑や鋼に化学組成上のばらつきがみられるという事実は、時代経過とともに鉄銑の供給地が変わった、あるいは同時代に複数の地域からもたらされた可能性があることを示している。この点についても、鋼精錬の具体的設備や方法とともに検討すべき課題である。なお、白井南中道遺跡では3区から0.1%を超えるCuとPを含有する板状鉄銑が見いだされている。後述するように、非金属介在物中にチタン化合物がみられ、相当量のCuを含む鋼製鉄器は、8世紀後半から9世紀末の遺構において未検出である。従って、この遺物についてはそれを鉄素材（原料鉄銑）とみるならば、8世紀後半以前、もしくは9世紀末以降の遺物として扱う必要がある。

#### 10 遺跡内における生産活動からみた鉄器製作とその流通

白井南中道遺跡では少量の鉄チタン酸化物（たとえば砂銑）を用いあらかじめ準備された鉄銑を脱炭するという精錬が実施されていた可能性が高いと考えることができたが、以下ではその点を念頭におき、鋼製鉄器の素材と流通について検討したい。

7-2のSグループに分類された鉄器の中で、No3・No5鏝、No12鏝の3点については、脈石中にP鉱物、あるいはCo鉱物を随伴する原料鉱石を用いて生産された鉄銑を脱炭し、製造された鋼を素材としていたとみることができる。

精錬が実施されていたとするとSに分類される鉄器についてもただちに砂銑を始発原料とするものとして扱うことはできない。鋼の製造を直接製鋼法のみに限定すればそれは可能であるが、化学組成上の特徴のない鉄鉱石を始発原料として生産された鉄銑を脱炭して製造された鋼、もしくはP鉱物やCu鉱物を随伴する鉄鉱石が使用されたにもかかわらず精錬の過程で相当量の不純物が除去された可能性が考えられるからである。これまで非金属介在物中にチタン化合物が見いだされ化学組成上の特徴が認められない場合、その始発原料は砂銑と判定されてきたが、精錬という見方に加えることによって非金属、介在物組成と化学組成からただちに始発原料を特定することは難しいことがわかる。

9で述べた遺跡内における鉄の生産活動に関する検討結果を考慮すれば、非金属介在物中に鉄チタン化合物が見いだされ、7世紀末～9世紀代に比定されるNo3・No5鏝、No4・No7・No12鏝、およびNo11刀子については遺跡内部での生産を考える必要がある。これに対し、IOグループに分類されるNo8・9鏝、No10刀

子の3点については製品として供給されたとみなければならない。なお、7世紀後半と推定されたNo.1鎌、No.2刀子、時代特定が困難なNo.15鎌については、Cu、P含有量レベルの高いNo.13鉄鉄（板状鉄）の存在をも考慮に入れ、出土遺構の状況と対比しながらその供給形態について検討する必要がある。

精錬の立場に立った場合問題となるのは鉄鉄の供給地である。考古学の発掘調査に基づき、6世紀後半には列島内でも製錬が始まったことが指摘されている<sup>16)</sup>。そこで、まず、列島内での供給を考える必要がある。そのためには製錬炉跡が存在する遺跡においてどのような組成の鉄が生産されたのかを解明することが不可欠である。その上で上述の鋼製鉄器や鉄鉄、あるいは鋼塊との組成上の比較を行い、供給地域を絞り込む作業が必要である。しかし、遺物の自然科学的調査によって鉄鉄や鋼はもちろん、砂鉄に比べ高レベルのCu、Co、およびNiを含む鋼製鉄器が確認されている。列島内において銅含有量の高い鉄鉱石を産出する鉄鉱山としては岩手県釜石市に立地する釜石鉱山、新潟県新発田市の赤谷鉱山を挙げることができるが、大陸の山東半島から揚子江下流域にかけても分布する(図17)。7世紀後半～9世紀末という時代を考慮すれば大陸からの供給を無視することはできないと筆者は考える。今後、考古学をはじめとする人文社会科学系研究者と自然科学系研究者が、列島内のみならず東北アジアの範囲の中で、鉄鉄や製品鉄器の生産や流通問題について検討することによって、わが国における古代の鉄・鉄器生産の変遷がみえてくるにちがいない。

## 11 まとめ

群馬県北群馬郡子持村に立地する白井南中道遺跡の8世紀後半から9世紀末の鉄生産関連遺構に伴って出土した鉄塊、鉄滓の自然科学的調査によって、外部から供給された鉄鉄を脱炭して鋼を製造するという鋼精錬とそうにして製造された鋼を素材とする鋼製鉄器の製作が行われていたとする見方をとることができた。検出された鋼塊や鉄滓、ならびに隣接する白井二位屋遺跡出土鉄鉄塊と鋼塊の組成に基づけば、この時期に供給された鉄鉄塊には0.1%を超えるPや白井南中道遺跡周辺から採取される砂鉄に比べ高レベルのNiまたはCoが含まれていた可能性が高い。また、時代は不明であるもののCu、P含有量の高い板状鉄鉄も検出され、そのような組成の鉄鉄の供給もあったことが確実となった。

なお、遺跡周辺から採取される砂鉄に比べ高レベルのNiまたはCoを含む非金属系在物中にチタン化合物の残存する鉄器が7世紀末の遺構から見いだされたことによって、上述の鋼精錬の実施が7世紀代までさかのぼる可能性も生じている。

一方、砂鉄の使用が認められず、相当量のCuやCoを含有する鋼製鉄器が、9世紀後半から末葉に比定される住居跡から発見されたことにより、鉄鉄と併行して製品鉄器の供給もあり、そのルートも複数にわたっていた可能性があることがわかった。そして、それらの供給地域については、列島内に加え大陸をも含めた東北アジアの範囲中で検討する必要があることが指摘された。

## 注

- 1) 白井南中道遺跡を発掘調査された財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 南宮芳昭氏からの私信による。
- 2) 大澤正巳「白井二位屋遺跡とその周辺遺跡出土の製鉄関連遺物の金属学的調査」『白井遺跡群—集落編—(白井二位屋遺跡)』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1994年、p. 253-287。
- 3) 佐々木勉「新松市天王中野遺跡出土の鉄塊と奈良時代の鋼精錬法」『浜松市博物館報』、V、III、浜松市立博物館、1995年、pp. 5-18。
- 4) 青森県百石町に立地する根岸(2)遺跡では、奈良時代末から平安時代初頭に比定可能な火産炉が検出された。出土した鉄塊を分析したところ、鉄塊はそのほとんどがレーダブライツ組織からなる鉄鉄で、鉄鉄に付着する鉄滓の境界にはT(Fe,N)が一様に析出した組織が見いだされた。この組織の発見と共存する鉄滓の組成、ならびに遺物の出土状況、検出遺構の状況を総合的に検討することによって、鉄鉄を脱炭する鋼精錬が火産炉において行われていた可能性の高いことが指摘された<sup>17)</sup>。
- 5) 赤沼英男「根岸(2)遺跡出土小孔および鉄滓の金属学的解析」『根岸(2)遺跡発掘調査報告書』青森県百石町教育委員会、1995年、pp. 104-112。

#### 第4章 調査のまとめと理科学分析

- 6) 佐々木穂、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄斧・鉄鋸ならびに鋸先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1987年、pp.66-80。
- 7) 佐々木穂、村田朋美「古墳出土鉄器の材質と製法」季刊考古学、8、1984年、P.27-33。
- 8) 2に同じ。
- 9) 2に同じ。
- 10) 各種の岩石、とりわけ火成岩中の主として磁鉄鉱と含ナタン磁鉄鉱を構成鉱物とする粒子が、岩石の風化に伴って分離し、現地残留や風および水などの陶冶集積作用などで濃縮したものを砂鉄鉱床という<sup>11)</sup>。従って砂鉄を構成する主要鉱物は磁鉄鉱であり、鉄鉱石と区別して使用するには岩石鉱物学上誤解を招く恐れがあるが、ここでは上述によって生成した鉱床から採取された、磁鉄鉱および含ナタン磁鉄鉱を主成分とする粒子を砂鉄、他の成因によって生成した鉄鉱床から採掘されたものを鉄鉱石と呼ぶことにする。
- 11) 『鉄鋼便覧』日本鉄鋼協会編、丸善。
- 12) 大澤正巳「古墳共敵鉄斧から見た製鉄の開始」季刊考古学、8、1984年、P.36-46。
- 13) 佐々木穂「ふたたび古代の砂鋸法について」たたら研究、27、1985年、P.40-50。
- 14) 赤沼英男「いわゆる平地式型型<sup>12)</sup>の性格の再検討—志沢・北沢両遺跡出土遺物の金属学的解析結果から—」たたら研究、35、1995年、P.11-28。
- 15) 村上英之助「中沢・村上の往復書簡」たたら研究、36・37、1996年、p.78-88。
- 16) 藤見浩「鉄・鉄器の生産」『岩波講座日本考古学』3、岩波書店、1986、P.237-262。



表1 a 分析を行った鉄器

No	資料名	出土遺構	推定年代
1	鎌	13住	7世紀後半
2	刀子	7住	7世紀後半
3	鎌	7住	7世紀末
4	鎌	22住	7世紀末～9世紀末
5	鎌	45住	8世紀後半
6	鎌	55住	8世紀後半
7	鎌	26住	9世紀後半
8	鎌	34住	9世紀後半～末
9	鎌	34住	9世紀後半～末
10	刀子	35住	9世紀後半
11	刀子	50住	9世紀後半
12	鎌	7掘立	7～9世紀代
13	板状鉄	3区一括	不明
14	刀子	遺跡一括	不明
15	鎌	遺跡一括	不明

注) 資料名、出土遺構、推定年代は財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 南雲芳昭氏による。

表1 b 分析を行った鉄滓ならびに鉄塊

No	資料名	出土遺構	推定年代	
1	鉄滓	2区33号住	埋土	8世紀後半～9世紀末葉
2 A	鉄塊	2区33号住	埋土	8世紀後半～9世紀末葉
2 B	鉄滓	2区33号住	埋土	8世紀後半～9世紀末葉
3	鉄滓	2区34号住3号炉跡内	埋土	9世紀後半～末葉
4	鉄滓	2区34号住	埋土	9世紀後半～末葉
5	鉄滓	2区34号住	埋土	9世紀後半～末葉
6	鉄滓	34住	埋土	9世紀後半～末葉
7	鉄滓	34住	埋土	9世紀後半～末葉
8	鉄滓	34住	埋土	9世紀後半～末葉
9	鉄滓	34住	埋土	9世紀後半～末葉
10	鉄滓	34住	埋土	9世紀後半～末葉
11	鉄滓	41住	埋土	9世紀後半～末葉
12	鉄滓	9号住	カマド	9世紀末
13	鉄滓	9号住	小鍛冶	9世紀末
14	砂鉄	黒色火山灰土	FA下(Ys層準)	—
15	砂鉄	上部ローム	Ad-YP上	—
16	砂鉄	Hr-FP	二次堆積物(水成)	—
17	砂鉄	Hr-FP	棒名二ツ街 伊香保	—

注) 資料名、出土遺構、推定年代は財団法人群馬県埋蔵文化財事業団 南雲芳昭氏による。

表2 鉄源の分析結果

No	試料名	化 学 成 分 (%)											ミクロ組織	n.m.i	地金の分類	
		T,Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg				V
1	鋼	63.75	0.111	0.002	0.146	0.004	0.015	0.007	1.27	0.103	0.262	0.035	0.001	Cm(0.1~0.2)	no	U
2	刀子	64.08	0.110	0.002	0.039	0.026	0.040	0.006	0.448	0.046	-	-	-	-	-	U
3	鋼	63.87	0.018	0.002	0.108	0.014	0.043	0.026	1.41	0.029	0.107	0.057	0.005	Cm(0.1~0.2)	XT,M	S
4	鋼	65.89	0.020	0.002	0.066	0.009	0.034	0.025	0.442	0.115	0.025	0.013	0.006	Cm(0.1~0.2)	XT	S
5	鋼	88.27	0.016	<0.001	0.037	0.008	0.046	0.009	0.603	0.011	0.012	0.003	0.002	Cm(0.2~0.3)	XT,F,S	S
6	鋼	68.87	0.008	0.003	0.055	0.038	0.035	0.042	0.773	0.038	0.097	0.018	0.009	Cm(0.4~0.5)	no	U
7	鋼	66.01	0.022	0.001	0.066	0.006	0.033	0.018	0.742	0.040	0.087	0.013	0.002	no	XT	S
8	鋼	63.48	0.014	0.002	0.112	0.003	0.030	0.009	1.40	0.052	0.143	0.029	0.001	Cm(0.1~0.2)	W,H,F	IO
9	鋼	67.16	0.422	0.008	0.037	0.016	0.032	0.005	0.544	0.010	0.039	0.030	tr	Cm(0.1~0.2)	F,S	IO
10	刀子	61.96	0.030	0.003	0.100	0.037	0.058	0.028	0.579	0.032	0.069	0.020	0.005	no	W,H,O	IO
11	刀子	68.92	0.033	0.004	0.081	0.019	0.037	0.136	0.768	0.017	0.063	0.017	0.005	Cm(0.2~0.3)	XT	S
12	鋼	94.71	0.046	0.003	0.031	0.006	0.088	0.053	0.263	0.024	0.022	0.015	0.002	Cm(0.2~0.3)	XTo,S	S
13	板状鉄	71.20	0.321	0.003	0.182	0.007	0.014	0.001	0.112	0.014	0.005	0.052	0.003	レーアフライト、片状組織	-	鋼鉄
14	刀子	96.81	0.020	0.001	0.065	0.001	0.041	0.001	0.203	0.009	0.011	0.002	tr	-	S	IO
15	鋼	92.22	0.347	0.001	0.022	0.029	0.038	<0.001	0.539	0.018	0.011	0.003	<0.001	Cm(0.5<)	W,O,S	IO

注1) trは痕跡、-は分析せず、noは見いだされず。

注2) Cmはセメンタイトもしくはその欠落孔、かつこ内の数字はミクロ組織から推定される炭素含有量。

注3) n.m.iは非金属介在物組成、XTは主として酸化チタンからなる化合物、XTは主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物(鉄チタン化合物)、Wはウスタイト(化学組成FeO)、OはFeO-CaO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、HはFeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系化合物、Sはガラス質の酸化チタン化合物、Mはマトリックス。

注4) IOは残存する非金属介在物中にチタン化合物が見出されなかったもの、Sは非金属介在物中にチタン化合物が見出されたもの、Uは非金属介在物が見いだされなかったものを示す。

表3 鉄塊の分析結果 (%)

試料名	化 学 成 分 (%)													ミクロ組織	n.m.I
	T,Fe	Si	Al	Ca	Mg	Ti	Cu	Mn	P	Ni	Co	V	V		
No.2 A鉄塊	92.50	0.195	0.020	0.030	0.028	0.051	0.024	0.015	0.053	0.062	0.190	0.025	0.025	共折鋼に近い鋼と重共折鋼が混在	XT,S
No.7鉄塊	88.80	0.024	0.012	0.010	0.004	0.006	0.020	<0.001	<0.001	0.021	0.050	<0.001	<0.001	共折鋼に近い鋼	W,X,T,F
No.8鉄塊	86.70	<0.001	0.004	<0.001	<0.001	0.006	0.021	<0.001	0.024	0.034	0.100	<0.001	<0.001	重共折鋼	XT,S
No.9鉄塊	86.30	<0.001	0.003	0.004	<0.001	0.006	0.011	0.029	0.270	0.021	0.029	0.112	0.112	レーザブライト	-
No.10鉄塊	90.10	0.096	0.030	0.031	0.008	0.009	0.024	<0.001	0.009	0.029	0.054	<0.001	<0.001	過共折鋼	XT,S

注1) No.2 Aは白井南中道33号住、No.7～No.10は白井二位園出土。

注2) ミクロ組織はナイターによるエッチングに基づく観察結果、No.7・No.8は大澤正巳氏による。

Wはウスタイト、XTは鉄チタン化合物、FはFeO-SiO<sub>2</sub>系化合物、Sはガラス質けい酸塩。

表4 鉄滓の分析結果

No	試料名	化 学 成 分 (%)												鉱物組成	
		T.Fe	M.Fe	FeO	SiO <sub>2</sub>	Al <sub>2</sub> O <sub>3</sub>	CaO	MgO	Ti	Cu	Mn	P	Ni		Co
1	鉄滓	26.04	0.73	32.55	30.92	20.75	4.97	5.03	3.87	0.003	0.420	0.260	—	—	XT, F, S
2 B	鉄滓	50.87	0.78	24.05	8.24	8.28	3.07	1.66	3.02	0.009	0.220	0.230	—	—	(Pe, XC, M)(XT, XC, M)
3	鉄滓	59.02	1.00	56.57	7.43	6.31	2.25	1.69	2.72	0.004	0.18	0.170	—	—	W, XT, F, M
4	鉄滓	49.37	0.56	43.57	16.39	9.90	1.83	2.16	2.38	0.004	0.210	0.130	—	—	W, XT, F, S
5	鉄滓	50.40	0.71	32.73	14.54	12.31	1.83	1.88	3.65	0.005	0.260	0.170	—	—	XT, F, S
6	鉄滓	50.72	0.28	31.97	5.69	7.33	7.42	2.52	4.51	0.003	0.280	0.230	—	—	W, XT, S
7	鉄滓	58.59	1.00	62.63	8.24	5.90	3.42	2.72	2.48	0.011	0.260	0.120	—	—	W, XT, S
8	鉄滓	41.82	4.80	31.52	13.72	13.61	4.61	4.08	6.92	0.005	0.46	0.310	—	—	XT, F, M
9	鉄滓	56.27	0.78	37.18	3.38	4.88	0.73	2.59	4.78	0.004	0.39	0.180	—	—	W, XT, M
10	鉄滓	50.09	0.67	52.58	12.99	9.64	4.27	2.59	3.39	0.005	0.28	0.190	—	—	W, XT, F, O, M
11	鉄滓	61.46	1.62	47.38	7.23	4.46	1.19	0.81	0.37	0.021	0.053	0.110	—	—	W, XT, F, O, M
12	鉄滓	66.34	0.50	67.00	5.31	2.68	0.43	1.31	0.76	0.002	0.066	0.065	—	—	W, F, XT, S
13	鉄滓	46.11	0.73	44.67	14.72	12.81	2.65	2.74	4.47	0.004	0.390	0.260	—	—	(XT, S, S <sub>2</sub> )(XT, W, F, O, M)
14	砂鉄	56.20	—	—	7.04	2.30	0.81	2.44	3.62	0.004	0.371	0.211	0.006	0.020	—
15	砂鉄	60.70	—	—	2.66	2.16	0.48	1.41	3.99	0.003	0.345	0.130	0.005	0.020	—
16	砂鉄	37.40	—	—	17.55	0.74	0.49	3.48	4.65	0.003	0.378	0.045	0.002	0.020	—
17	砂鉄	50.70	—	—	10.00	2.23	0.68	3.35	5.07	0.003	0.402	0.013	0.007	0.022	—

注1) — は分析せず。

注2) XT はナタン化合物, Wはウスタイト, FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物, OはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物, FeはCaO-TiO<sub>2</sub>系化合物,XC, は主としてCaO, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, SiO<sub>2</sub>からなる化合物, XC, は主として酸化鉄, CaO, Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>, SiO<sub>2</sub>からなる化合物, Sはガラス質の酸化鉄, Mはマ  
トリックス。

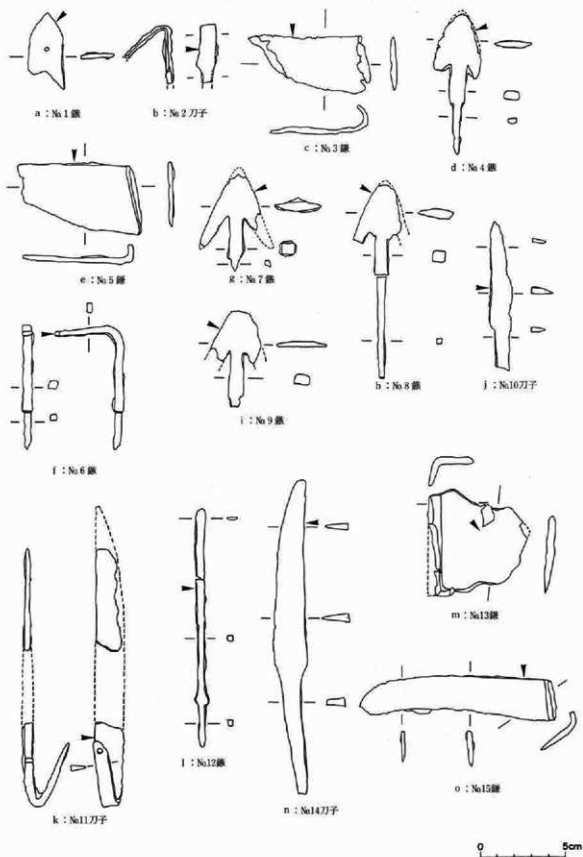


図1 分析を行った鉄器の実測図 矢印は試料抽出位置

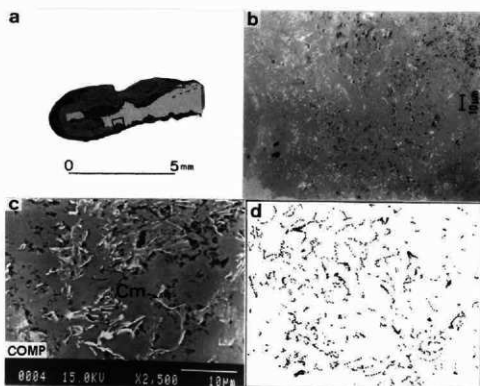


図2 No 5 鏝から抽出した試料片の組織観察結果

a : マクロ組織 b : ミクロ組織 c : 結晶 Cm の EPMA 組成像 (COMP)  
d : 結晶 Cm とその大落孔の分布

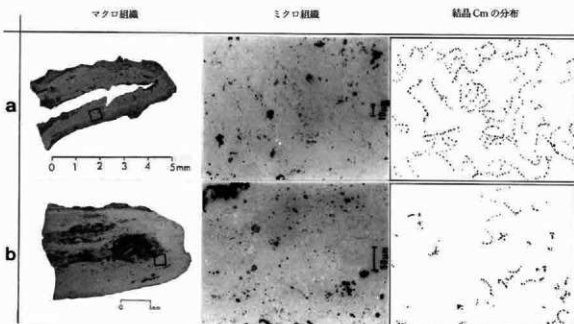


図3 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果 (その1)

マクロ組織の中で囲んだ領域内をミクロ組織観察に供した

a : No 1 鏝 b : No 3 鏝

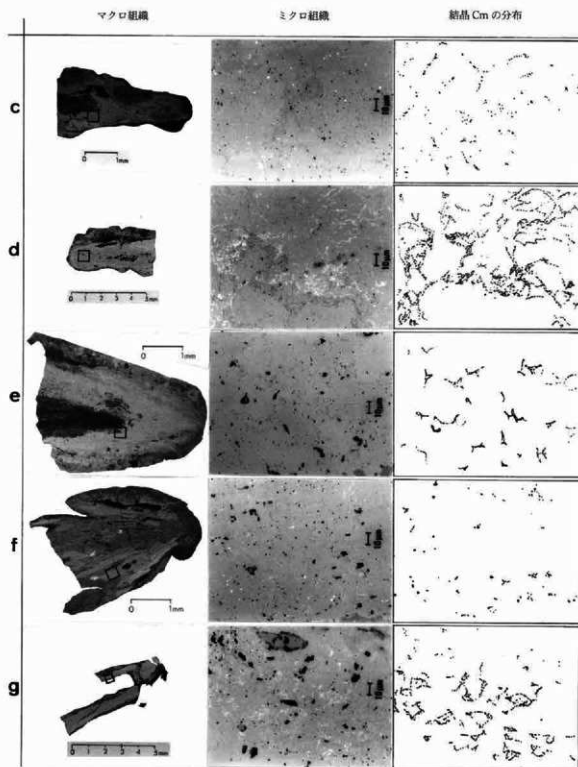


図3 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果（その2）

マクロ組織の中で囲んだ領域内をミクロ組織観察に供した

c : No.4 鉄 d : No.6 鉄 e : No.8 鉄 f : No.9 鉄 g : No.11 刀子

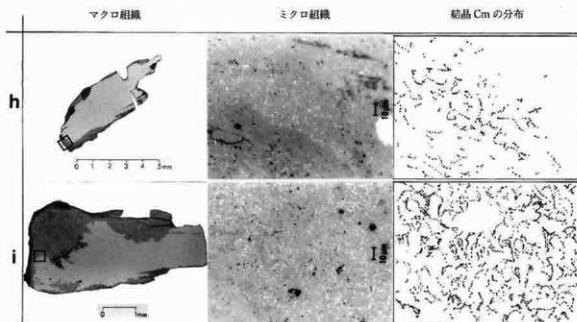


図3 鉄器から抽出した試料片の組織観察結果（その3）

マクロ組織の枠で囲んだ領域内をミクロ組織観察に供した

h : No.12鏡 i : No.15鏡

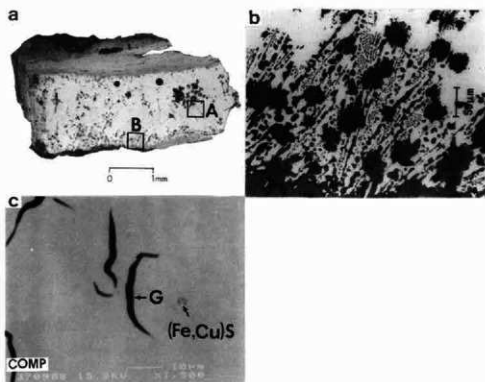


図4 Na13板状鉄から抽出した試料片の組織観察結果

a : マクロ組織 b : aの領域A部のミクロ組織

c : aの領域B部のEPMAによる分析結果

COMP : 組成像 G : 片状黒鉛。



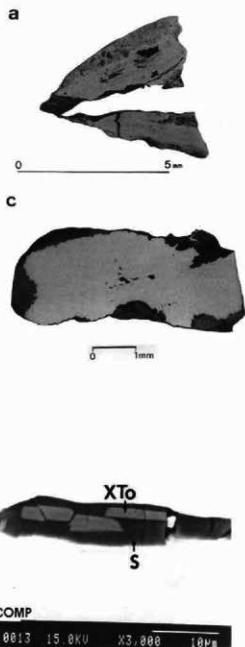


図6 No12鉄から抽出した試料片に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

COMP: 組成像

XTo: 主として酸化チタンからなる化合物

S: ガラス質けい酸塩

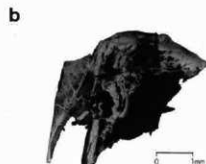
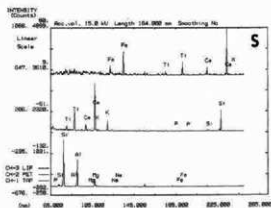
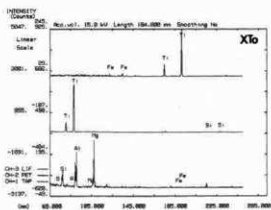


図5 鉄器から抽出した試料片のマクロ組織

a: No7鉄 b: No10刀子 c: No14刀子



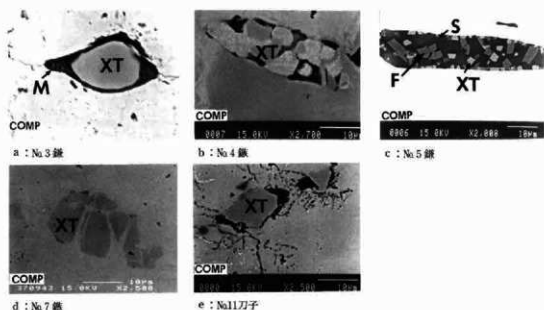


図7 Na3・5鎌、Na4・7鎌、Na11刀子に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

COMP: 組成像

XT: 主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物(チタン化合物)

F: FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物

S: ガラス質けい酸塩

M: マトリックス

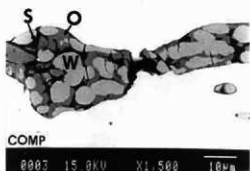


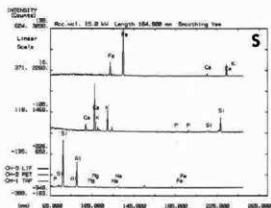
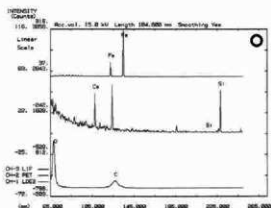
図8 Na15鎌から抽出した試料片に見いだされた非金属介在物の

EPMAによる分析結果  
COMP: 組成像

W: ウスタイト(化学理論組成: FeO)

O: FeO-CaO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物

S: ガラス質けい酸塩



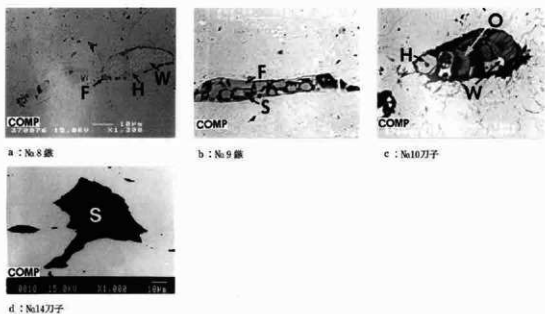


図9 Na 8・9 鉄、Na 10・14 刀子に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

COMP:組成像 W:ウスタイト F:FeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物

H:FeO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>系化合物 S:ガラス質けい酸塩

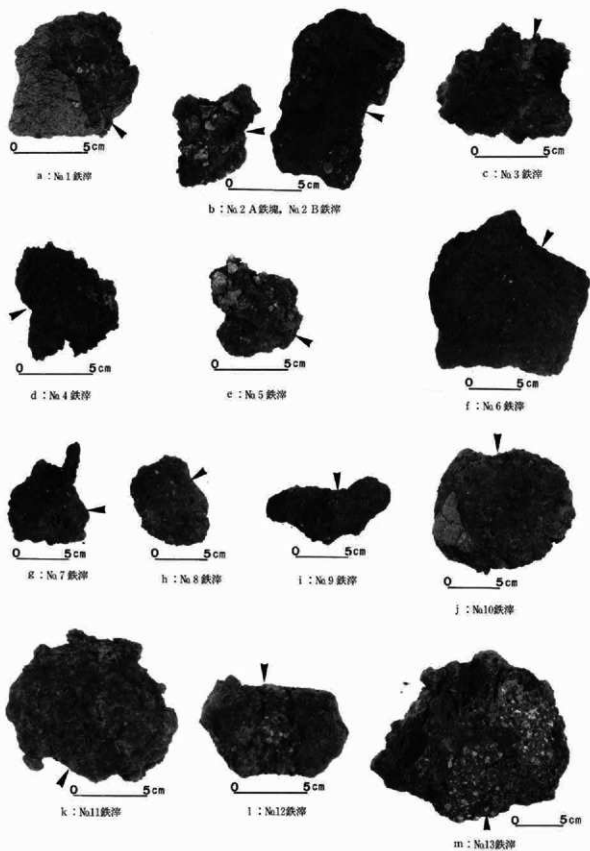


図10 分析を行った鉄塊と鉄滓の外観  
矢印は試料切断位置

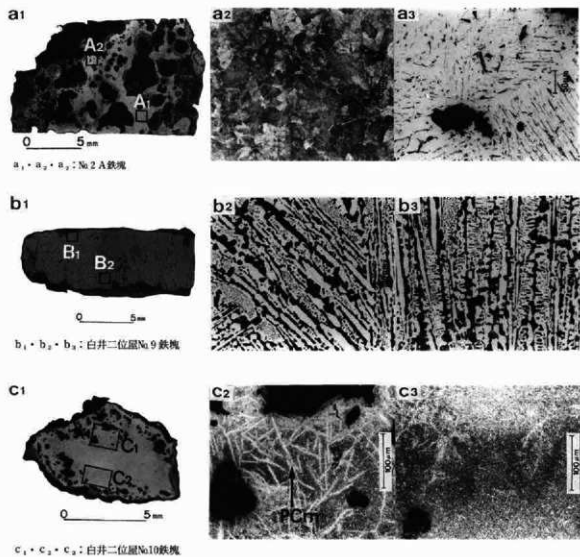


図11 鉄塊のマクロおよびマイクロエッチング組織

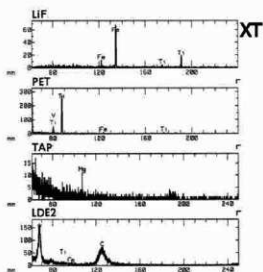
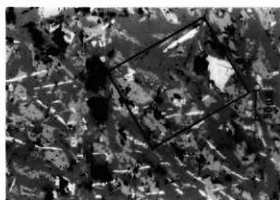
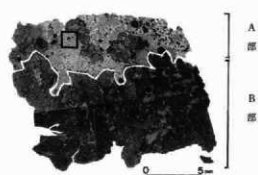
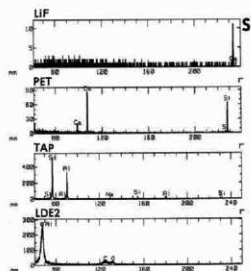


図12 Na1 鉄滓の組織観察結果

マクロ組織右は枠で囲んだ部分のミクロ組織。マクロ組織下はミクロ組織の枠で囲んだ部分のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果。

XT: 主として酸化鉄と酸化チタンからなる化合物 (チタン化合物)  
S: ガラス質けい酸塩



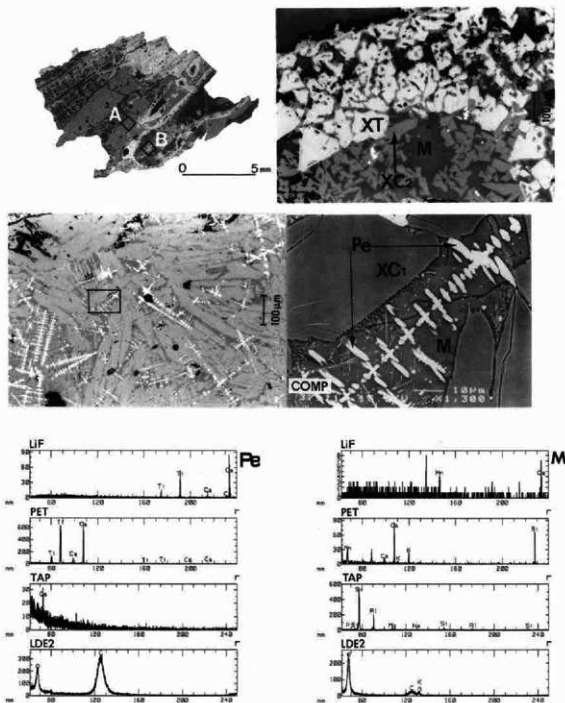


図13 Na<sub>2</sub>B鉄滓の組織観察結果

マクロ組織下は領域A部のマイクロ組織とEPMAによる分析結果。マクロ組織右は領域B部のマイクロ組織。

PeはCaO-TiO<sub>2</sub>系化合物、XTはチタン化合物

CX<sub>1</sub>はTiO<sub>2</sub>-CaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系化合物、CX<sub>2</sub>はFeO-TiO<sub>2</sub>-CaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系化合物、

Mはマトリックス。

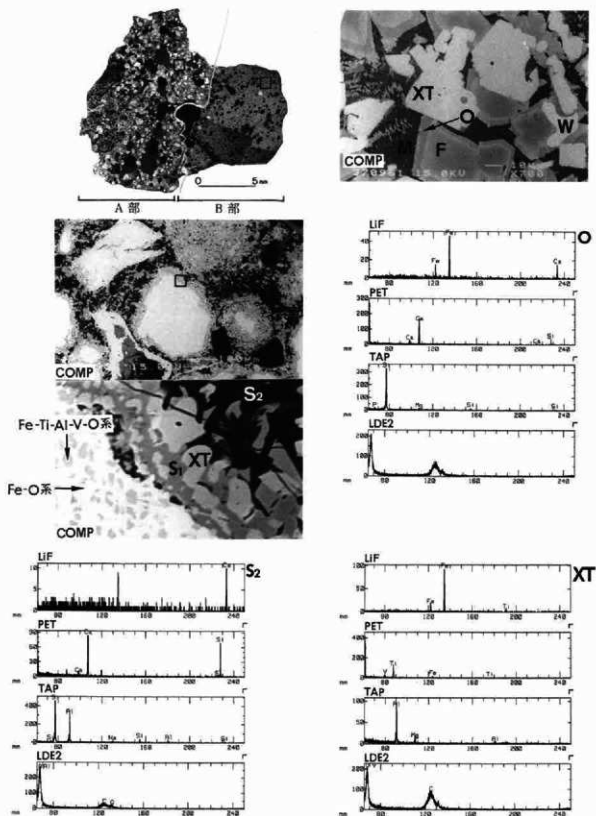


図14 №13鉄滓から抽出した試料片の組織観察結果

マクロ組織下は領域A部の枠内部、右は領域B部の枠内部のEPMAによる分析結果。

Wはウスタイト(化学理論組成FeO)、XTはチタン化合物、FはFeO-MgO-SiO<sub>2</sub>系化合物、OはFeO-CaO-SiO<sub>2</sub>系化合物、S<sub>1</sub>・S<sub>2</sub>はガラス質けい酸塩(S<sub>1</sub>はCaO-Al<sub>2</sub>O<sub>3</sub>-SiO<sub>2</sub>系)、Mはマトリックス。



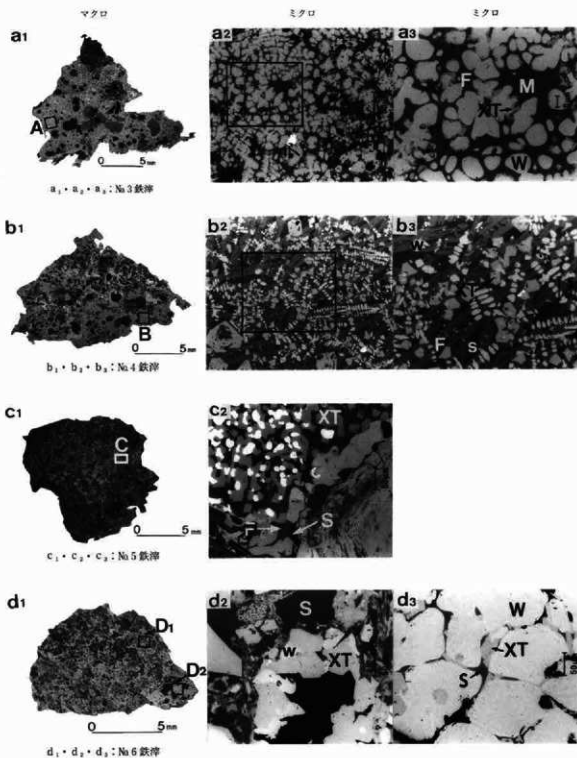


図15 鉄滓から抽出した試料片のマクロおよびミクロ組織（その1）

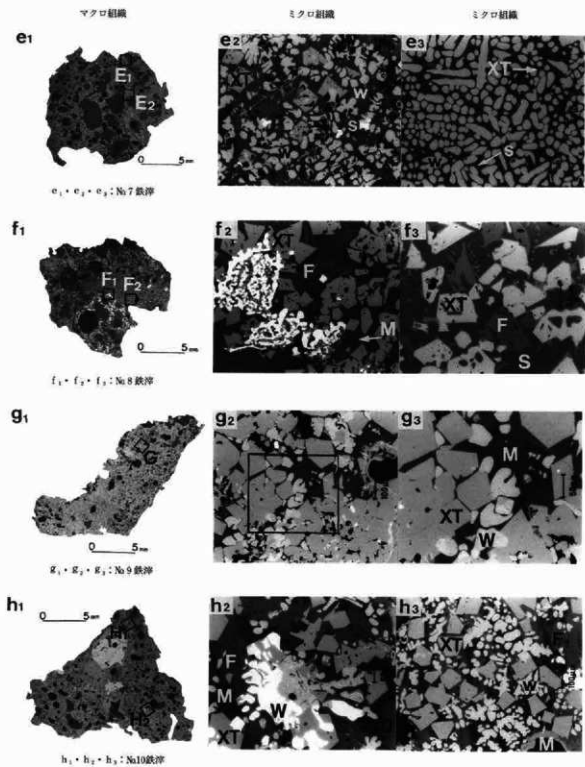


図15 鉄滓から抽出した試料片のマクロおよびミクロ組織 (その2)

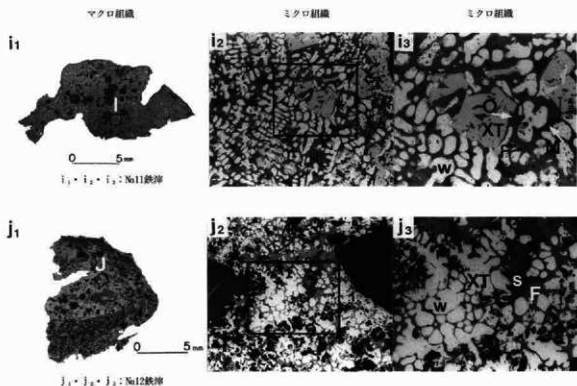


図15 鉄滓から抽出した試料片のマクロおよびミクロ組織 (その3)

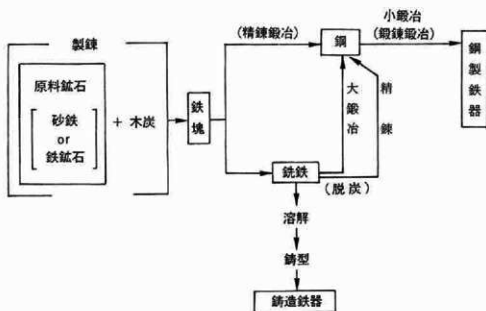


図16 推定される鋼の製造法



図17 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する主な鉄鉱山

## 第6節 住居電跡から検出される灰質の成分分析

藤根 久 (パレオ・ラボ)・小沢 達 樹 (群馬県工業試験所)

## 1. はじめに

白井南中道遺跡では、複数の住居電跡から動物の焼骨片が検出されている。これらの焼骨片は、同定できるものは、シカやイノシシあるいはノウサギや鳥など大型から小型の動物遺体におよぶ。一方、こうした同定される骨片は検出されないものの、小骨片を含む灰質や骨質起源を思わせるような灰質を伴う電も少なくない。

ここでは、住居電跡から検出される灰質が、骨成分を含むかどうかを調べるために、基礎的な検討という意味も含め、機器を用いた成分分析を行った。なお、分析は小沢が、文章は藤根がそれぞれ担当した。

## 2. 試料と方法

成分分析を行った灰質試料は、住居電跡から採取した灰質試料31点である。また、骨質の成分を明らかにするために、41号住居跡電から出土した骨片(焼骨)2点を分析した。さらに、比較参考試料として52号住居の埋土および55号住居出土須恵器杯胎土も同時に分析した。なお、ここで検討した灰質の産状等の詳細に

表1. 骨片・灰質・埋土などのICAP分析結果とX線回折パターン  
(凡例、◎：一致、○：似る、△：やや似る、×：一致しない)

試料No.	CaO(%)	K <sub>2</sub> O(%)	P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> (%)	Ca(%)	P(%)	P/Ca	X線回折パターン	備考
1 (22号住)	6.3	1.7	1.8	4.5	0.8	0.18	△	
2 (22号住)	6.5	1.7	1.9	4.6	0.8	0.17	△	
3 (22号住)	6.8	1.9	2.3	4.9	0.9	0.20	△	
4 (22号住)	6.5	1.8	1.8	4.9	0.8	0.16	○	
5 (22号住)	6.5	2.1	2.0	4.6	0.9	0.19	○	骨片伴う
6 (22号住)	6.8	1.8	2.1	4.9	0.9	0.18	○	
7 (22号住)	6.1	1.6	1.8	4.3	0.8	0.19	○	
8 (22号住)	5.9	1.6	1.5	4.2	0.7	0.17	△	骨片伴う
9 (22号住)	6.2	1.5	1.8	4.4	0.8	0.18	△	骨片伴う
10 (22号住)	5.5	1.6	1.4	3.9	0.6	0.15	△	
11 (22号住)	5.7	1.7	1.3	4.1	0.5	0.12	○	
12 (22号住)	6.1	1.5	1.9	4.4	0.8	0.18	○	
13 (22号住)	6.1	2.3	0.4	4.4	0.2	0.05	×	
14 (22号住)	7.6	4.0	2.1	5.5	0.9	0.16	○	骨片伴う
15 (60号住)	9.5	5.3	5.1	6.8*	2.2*	0.32*	◎	
16 (60号住)	9.6	5.1	5.6	6.9*	2.4*	0.35*	◎	骨片伴う
17 (60号住)	9.3	5.0	5.2	6.6*	2.3*	0.35*	◎	
18 (23号住)	5.7	6.1	0.1	4.1	0.1	0.01	×	
19 (23号住)	7.1	1.6	1.9	5.1	0.8	0.16	△	骨片伴う
20 (23号住)	6.7	1.7	2.0	4.8	0.9	0.19	○	骨片伴う
21 (41号住)	7.5	1.0	2.3	5.4	1.0	0.18	△	骨片伴う
22 (41号住)	6.9	1.2	1.9	4.9	0.8	0.16	△	骨片伴う
23 (46号住)	6.9	1.3	1.6	4.9	0.7	0.14	△	骨片伴う
24 (46号住)	6.9	1.3	1.4	4.9	0.6	0.12	△	骨片伴う
25 (52号住)	6.0	0.7	0.2	4.3	0.1	0.02	×	
26 (55号住)	4.6	1.0	0.6	3.3	0.2	0.06	×	
27 (55号住)	9.7	1.1	4.0	7.0*	1.7*	0.24*	○	骨片伴う
28 (55号住)	10.8	1.2	4.6	7.7*	2.0*	0.26*	○	骨片伴う
29 (55号住)	6.1	0.6	0.3	4.4*	0.1	0.02	○	骨片伴う
30 (59号住)	8.2	1.1	3.5	5.8	1.5*	0.26*	×	
31 (38号住)	5.9	2.3	0.2	4.2	0.1	0.02	△	骨片伴う
32 (52号住)	7.3	1.1	3.3	5.2	1.4*	0.27*	×	埋土
33 (55号住)	1.6	1.3	0.3	1.2	0.1	0.08	×	須恵器杯胎土
34 (41号住)	48.8	-	38.1	38.1	34.9	0.48	-	骨片(焼骨)
35 (41号住)	52.2	-	39.3	37.1	37.7	0.46	-	骨片(焼骨)

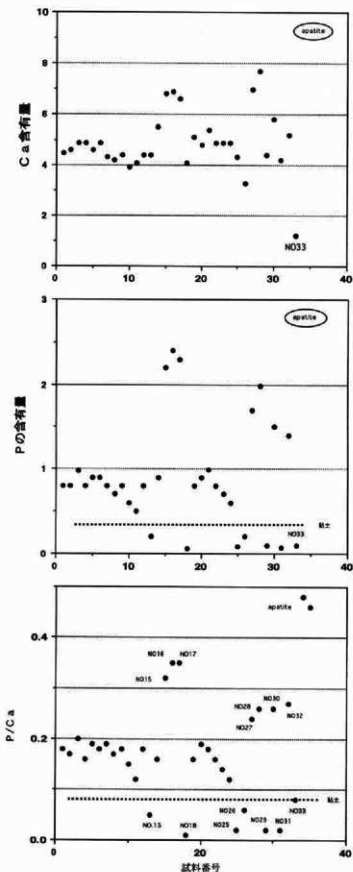


図1. 各試料のICAP分析によるP (リン)・Ca (カルシウム)・P/Ca比

については、本文を参照されたい。灰質の成分分析は、化学組成と鉱物組成についてである。

化学組成の検討は、高周波プラズマ発光分光分析装置（日本ジャーレルアッシュ社製、ICAP-575）を用いてリン（元素記号：P）、カリウム（元素記号：K）、カルシウム（元素記号：Ca）を定量した。試料調整は、メノウ乳鉢で粉砕した後、テフロン容器に0.1g計り取り、砂皿上で硝酸（ $\text{HNO}_3$ ）およびフッ化水素酸（HF）で蒸発乾燥させる。その後、塩酸（HCl）にて溶解後100ml定容とする。なお、定量分析は、原子吸光用標準溶液を使用した。

鉱物組成の検討は、X線回折装置（株式会社、RINT2000）を用いてX線回折分析を行った。測定条件は、ターゲット：Cr、電圧：40kV、電流：40mA、走査速度：4°/min、発散スリット：1°、分散スリット：1°、受

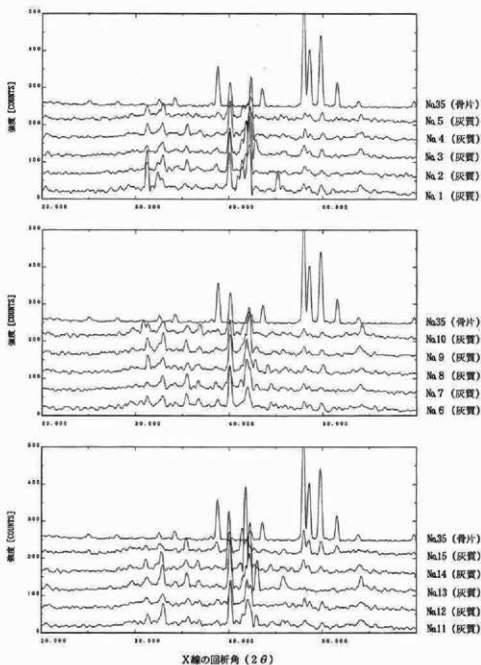


図2. 骨片・灰質試料のX線回折スペクル（多重記録：No.1～No.20およびNo.35）

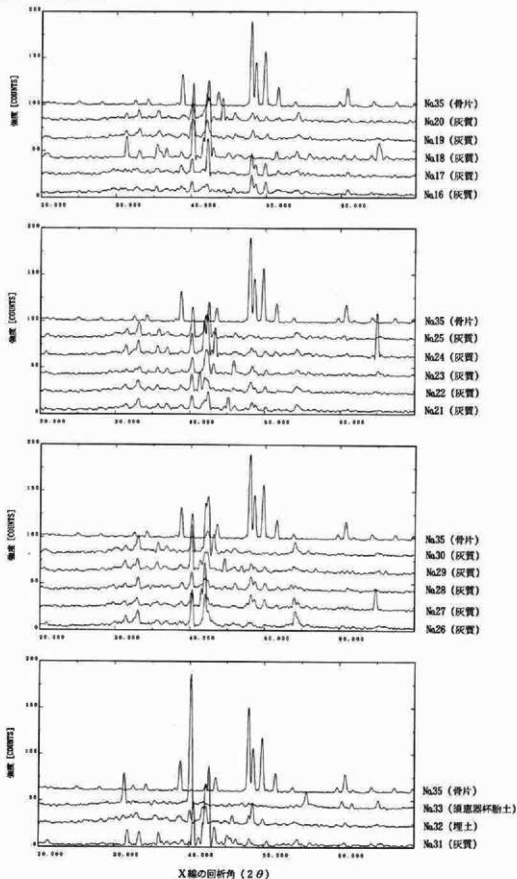


図3. 骨片・灰質・埋土・須恵器胎土試料のX線回折スペクトル (多重記録: No.21~No.34およびNo.35)



光スリット：0.3mmである。

### 3. 測定結果

a. 高周波プラズマ発光分析各住居遺跡から検出された灰質や骨片、比較参考試料とした埋土および須恵器杯胎土の各分析値は表1に示す。分析値は、P、K、Caの3元素について、酸化物あるいは元素の形で示し、P/Ca比も示す。

この結果を見ると、骨片No34およびNo35は、P ( $P_2O_5$ ) およびCa (CaO) に関していずれも高い数値を示す。また、P/Ca比も高い数値である(図1)。これら骨片は、X線回折分析により、煨灰石(アパタイト、apatite: 樹脂状へガラス光沢をもつ白色や灰色などを呈する六方晶系の鉱物)であることが分かっている。灰質試料では、No15、No16、No17、No27、No28において比較的高い数値を示している。また、No29はCa (CaO) において、またNo30やNo32はP ( $P_2O_5$ ) において、それぞれ比較的高い数値を示している。

### b. X線回折

各住居遺跡から検出された灰質や骨片、比較参考の埋土および須恵器杯胎土を対象に、回折角 ( $2\theta$ )  $20^\circ \sim 70^\circ$  あるいは  $20^\circ \sim 80^\circ$  の範囲で走査した。記録チャートは、No35の骨片試料とともに多重記録チャートとして作成した(図2および図3)。

測定の結果、骨片No35において煨灰石を示す複数ピークが明瞭に検出された。灰質試料では、このNo35に示される煨灰石の複数ピークが明瞭に検出される試料(◎)、類似するピークが複数検出される試料(○)、煨灰石の主要なピークが認められる試料(△)、煨灰石のピークがほとんど検出されない試料(×)が確認された(表1)。なお、No33の須恵器杯胎土の分析結果では、石英の複数ピークが検出されている。これは、須恵器が高温焼成されているため、長石類や雲母類などの多くの鉱物が溶融し、融点の高い石英のみが残っているためである。こうした石英の複数ピークは、灰質試料においても明瞭に検出されることから、灰質試料中に少なくとも土壌起源の石英が含まれていることが分かる。

### 4. 考察

骨片のX線回折分析では、煨灰石の複数ピークが明瞭に検出されている。この煨灰石は、骨片の主要な構成鉱物であることから、この骨片のX線回折パターンと一致する試料(◎)は、ほぼ骨片起源の灰質を含んでいると判断される。このことから、No15やNo16あるいはNo17では、この条件を満たしている。また、これらの試料は、Ca (CaO) やP ( $P_2O_5$ ) においても高い数値を示している。

さらに、状況的に煨灰石の複数ピークが検出され、類似するパターンを示す試料(○や△)は、骨片起源の灰質を含んでいる可能性が高い。このうち、No27やNo28では、Ca (CaO) やP ( $P_2O_5$ ) において比較的高い数値を示していることから、その可能性はより高いと言える。

ただし、煨灰石の複数ピークが検出されない試料(×)については、受熱による灰化により煨灰石が破壊されている可能性もあるため、骨片起源の灰質が含まれないとは断言できない。また、灰自体は、燃料材として植物起源の成分を多く含んでおり、PやCaあるいはKの元素も多いことから、これら元素を相対的に多く含む試料が骨質起源であると直ちには判断されない。骨質起源の灰質の認定は、少なくとも煨灰石が検出されることが必要条件と考える。

## 第7節 成果と課題

本節では白井南中道遺跡の発掘調査から整理作業時にかけて調査担当者が抱いていた疑問や課題を指摘しておきたい。いずれも課題解決に至らない状態であるが、北毛地域の古代をさらに明確化する一助になれば幸いである。以下、遺物と遺構に分けて記述する。

### 1 遺物

#### (1) 畿内産土師器

23号住居の埋没土中から、畿内産土師器<sup>(1)</sup>の杯が出土している。土器は1/4ほどの残存状況であるが、緻密な胎土で内面に斜放射状の暗文が上下二段に認められ、その中間に螺旋状暗文が施されている。底部の形状は欠損して不明だが、全体に小型になると思われる。これは藤原宮SD1901A出土の土師器杯<sup>(2)</sup>に類例が認められ、土師器杯Aに該当する<sup>(3)</sup>。藤原宮SD1901A出土の杯Aは飛鳥IV型式にあたり、7世紀後半のなかでも後出する時期である<sup>(4)</sup>。畿内産土師器は上野地域では下東西遺跡<sup>(5)</sup>や上野国分僧寺・尼寺中間地域遺跡<sup>(6)</sup>（以下国分寺中間地域遺跡と略称）、国分境遺跡<sup>(7)</sup>などで出土しており、その中で土師器杯Aの系統は荒砥天の宮遺跡<sup>(8)</sup>で平城I型式の杯A-1が、国分寺中間地域遺跡で平城II型式の杯A-1がみられる。上野地域でも飛鳥IV型式の畿内産土師器は古い例であり、杯Aとしても同様に古い例といえる。また、この土師器杯Aを出土した23号住居は、土師器甕や坏の様相から7世紀後半のなかでも第4四半期ほどの時期と考えられ、在地土器の年代観と畿内産土師器の年代観の一致が指摘できる。

なお、畿内産土師器を模倣したとされる暗文土師器<sup>(9)</sup>については、白井遺跡群周辺では渋川市西浦遺跡、北橋村分郷八崎遺跡などで出土があり、本遺跡群より北方では月夜野町後田遺跡などで確認されている。南中道遺跡においても暗文土師器の出土が認められ、小片に至るまで図化に努めて掲載した。埋没土中出土も含めて未掲載片は数片のみであり、未掲載による出土住居数の変動はない。本遺跡における62軒中暗文土師器出土軒数は19軒で、他に畿内産土師器の模倣品とすることを保留した資料に29号住居、38号住居資料がある。7世紀前半の3軒中1軒、7世紀後半の17軒中6軒、8世紀前半の10軒中5軒、8世紀後半の4軒中3軒、9世紀前半の2軒中1軒、9世紀後半の12軒中3軒となる。ただし、さきの29・38号住居は7世紀後半に属し、9世紀後半の住居のうち2軒は住居構築以前の8世紀代の暗文土師器が認められている。この結果、7世紀後半～8世紀代にピークがあり、単純比率では8世紀代に暗文土師器を出土する住居の割合が多いといえよう。1遺構における器種構成は坏が多くほとんどが畿内産土師器杯Aに対応するものである。46、55号住居では坏の他に皿が出土している。出土破片数は5片以上が9軒、10片以上では2軒となる。実際に床面から検出されているものでは、8世紀後半の46号住居、8世紀前半の56号住居があげられ、7号、36号住居では床面近くから出土している。畿内産土師器を出土した23号住居からは暗文土師器は出土していない。

#### (2) 竈構築材

複数の住居から安山岩質未固結凝灰岩の塊や土塊が出土している。床面や埋没土中からの出土も認められるが、34号住居では竈たき口あるいは煙道の天井部に構築する例と竈壁面の構築材に使う例とが認められる。5号住居や21号住居などは竈近くの出土例であり、類似した使用法が推定できる。4号住居などの床面や床面近くの出土状態も、竈破壊による姿の可能性もある。また、34号住居では、P2のなかに柱受けの礎石とみられる平端な河原石の周囲を取りまく石列のなかに未固結凝灰岩の小塊が認められ、床面の石列の中

にも存在する。これらの例は、竈に主に使用される他の副次的な使用例として考えられる。

これらの塊はノミヤカリガンナ状の工具でのケズリ痕などが認められる。熱によって赤く変色したり煤が付着したりしているが、当初は褐色系の色調と思われる。34号住居155の例では、長さ約84cm、最大幅22cmほどに切り出し、それを2分割して一方を竈天井部に用い、残りをさらに2等分して竈壁の構築材としている。おそらく他の例もある一定の大きさで選ばれ、住居構築時に使用箇所に応じた大きさに分割され、使用されたものと思われる。使用中の破損及び廃棄時以後の崩壊による可能性もあるが、4号住居40や5号住居20、21号住居38、34号住居152などの40cm以上の長さをもつ資料でも、当初からの面取りされた小口が残るのは片面のみしか認められないことから類推される。

これらの石塊を出土するのはいずれも9世紀後半以降であり、南中道遺跡のもっとも新しい住居の時期である10世紀後半まで使用が認められる。

電構築材の切り出し地として鳥羽遺跡<sup>(13)</sup>が知られるが、鳥羽遺跡例とは異なる材質のようである<sup>(14)</sup>。切り出し地として遺跡近くの吾妻川、利根川の崖の露頭に本資料と類似した地層があるという指摘もある<sup>(15)</sup>。電構築材が製品として流通していたかどうか、検討が必要であろう。

### (3) 獣骨類

住居の竈内、床面及び掘り方、埋没土出土のものがあり、竈内出土例はまとめて後述する。ここでは、竈以外の出土例を見たい。シカ、ウマ、ウシあるいはウマ、イノシシなどが出土している。とくに、34号住居出土のカマド西側床面出土のウマの下顎臼歯と、41号住居床面出土のウマカウシの細骨片が目される。ウシやウマは飼育されていた可能性が高いと考えられるからである<sup>(16)</sup>。また、出土骨片の多くが焼骨であるのは後述する竈内出土骨片と関係があらう。また、二位屋遺跡でもシカの角が出土しているが、骨製の紡錘車の未製品ではないかという見方もあることをつけ加えたい<sup>(17)</sup>。

また、埋没土内出土の獣骨の一部は、埋没過程の住居の窪みを利用した埋葬あるいは投棄の場合があらう。

竈出土獣骨類はトリ、キジ、シカ、ノウサギ、イノシシ、中型鳥類、小動物、中動物の焼骨が認められる。これらの一部は発掘調査現場においてすでに検出されていたもので、白色粘性土から多く認められていた。そこで、調査時に竈内の骨片を含む土壌及び含むと推定される土壌を採取し、整理作業時に検出に努めた結果、上記の骨片を認めたものである。採取された土壌の多くが整理作業時にはすでに粉末状になっていたため、フローテーションではなく土壌から直接拾い出す方法をとった。土壌は保存用として一部を保管している。さらに、採取した土壌を化学分析(本章第6節参照)してみると、60号住居の分析No15~17、55号住居の分析No27、28で骨起源の灰質が含まれる可能性がより高いとされた。いずれも実際に焼骨片が検出されている例ではあるが、今後の類似例の基礎データにならう。

実際に検出できた骨片は前述の通りであるが、魚類の骨片が認められなかった。遺跡の立地からみても利根川での漁労はもっとも容易であったらうと思われる。本章第2節では埋没中に崩壊・腐食した可能性が指摘されている。発掘調査の成果では、茨城県武田遺跡群で1軒の住居跡の竈からは魚介類の動物遺存体が複数検出されている。魚類ではニシン科、マイワシ、タイ科が確認され、竈の儀礼的行為のひとつと判断している。相模湾に程近い神奈川県小田原市三ツ俣遺跡<sup>(18)</sup>では、古墳時代前期~平安時代の1軒の竈と11軒の竈から植物遺存体、マイワシやニシン科などの魚類や哺乳類の骨片が検出されている。海水魚と淡水魚の違いはあるが、南中道遺跡では複数の住居からこうした魚介類が欠落した状態で骨片が確認されているのである。竈から骨片が検出された住居は7世紀~9世紀の時期の住居であるが、7世紀代の住居の数が多し。確認され

た種類がすべて遺跡周囲の自然環境と食生活を反映しており、残滓を虎棄した姿なのか、単に調理法などの違いを表しているのか、選択性が働いているとしても禁忌を含む儀礼的行為なのか、解決すべき課題は多く残されている。

#### (4) 金属製品

**青銅製鈴** 青銅製鈴が8世紀後半の33号住居から出土している。紐と一体造りで八稜を有し、胴部に2条の隆起帯がある。鑿口は輪郭を縁取るように肥厚している。鈴子は内面に付着して明らかなではない。こうした八稜を有する青銅製の鈴は古墳時代から認められ、静岡県賤機山古墳<sup>(20)</sup>、三重県白古山古墳<sup>(21)</sup>、埼玉県見目1号墳<sup>(22)</sup>、栃木県宮下古墳<sup>(23)</sup>・益子天王塚古墳<sup>(24)</sup>、県内では富岡市上田篠1号墳<sup>(25)</sup>などが管見に触れる。形態的には賤機山古墳や見目1号墳、益子天王塚古墳の資料が本資料と極似している。上田篠1号墳例は紐が別造りのようであるが、形態は類似する。本資料は蠟型鑄造であるが、8世紀まで同様の形態が続くことになる。住居跡からの出土例は吉岡町大久保A遺跡Ⅱ区128号住居跡からの出土<sup>(26)</sup>が管見に触れる。銅製の六稜を有する例である。8稜の鈴が古墳の副葬品として認められることは、本遺跡例が古墳の副葬品と同じ用途であった可能性が考えられる。本来は前出の古墳出土例において細かく副葬品の組合せを検討しなければならないが、馬具類が可能性として挙げられよう。

**刀子** 本遺跡からは刀子が数多く出土しているが、その中では強く屈曲した状態で出土する例が認められる。19号住居出土例が刃部、50号住居出土例が基部で曲げられており、53号住居が刃部と基部で曲げられている例がある。その他で同様の可能性が考えられる例を含めれば、15号住居例が刃部で、76号土坑例が基部で屈曲している。これらはいずれも埋没土中からの出土である。出土した形態が使用形態である可能性と、切る、削るなどの本来の機能を不可能にさせた状態で投棄するという儀礼的な可能性が考えられるが、本遺跡で曲げられていない例も認められ、どちらも判断しがたい。

**その他** 住居からの出土例が少ないと思われる遺物としては刀装具、鉈尾、飾金具類が認められた。刀装具は単脚足金物が9世紀末の51号住居埋没土中から、鞘尻金具が8世紀前半の14号住居埋没土中から出土している。鞘尻金具は鉄製、足金物は銅製である。飾金具は34号住居からその可能性のある資料が、15号住居から鉈尾が出土している。鉄鉈は可能性のある例も含めて9軒の住居と掘立柱建物と認定したビット1基から出土している。これらは埋没土中からの出土が多く、住居間で接合した例も1例認められる。住居出土の鉄鉈<sup>(27)</sup>については屋根に射込まれたり、柱穴に埋納されるという建築儀礼であるという見解が提示されている。

## 2 住居構造

Hr-FPが1m以上も堆積する子持村では、堅穴住居構築の際に不安定で崩れやすい軽石層を掘り込むことになり、住居で生活していく上で軽石層への対処を行ったことは容易に想像できる。ここでは調査時点での住居構造に関する所見を列挙したい。

**掘り方、床面** 調査区の場合によっては軽石層の上面が削平されて厚さを減じているところも見受けられたが、いずれの住居も軽石層を掘り抜き、Hr-FAやその下層の黒色土まで達している住居が多い。数は少ないが淡色黒ボク土やロームにまで掘り込んでいる住居も認められる。ほとんどがHr-FAを主体とした土によって貼り床をしている。23号住居では床に細かい平行圧痕が認められ、よしず状の敷物の存在が推定される。

**壁及び周溝** 壁面を構成する施設が存在したと思われるが、その方策を実際に検出できたのは19号住居の石

積みを行った1例のみである。周溝を埋めている土はHr-FAに汚れた軽石の場合と、きれいな軽石が詰まって上面を貼り床と同じようなHr-FAあるいはそれを主体とした土が覆っている状況の2者が多かった。このことは周溝に軽石を詰めて貼り床をしたのか、軽石を押さえるために塗布していたHr-FAが崩落した可能性を考えた。23号住居の一部ではビュアな軽石層のなかにL字型の炭化した植物が認められたが、壁構造の一端を示すものであろうか。また、中段テラスを有する住居は7世紀代に中心を持つ限定された時期的な様相である。

なお、壁際を石列が囲繞する例が34号住居、35号住居に認められる。この石列は正確には壁から少し離れて巡っており、34号住居では一部で2列になっている部分も看取できたが、3号炉との関係で改築している可能性がある。石列の上に角材を置き、その上に柱や壁の舞木を立ててほぞなどで組んで壁体を構築していたと推定されている<sup>(28)</sup>。この壁体と掘り方の壁の間は埋め戻されていたとも推測されているが、本遺跡の例ではその確認はつかめていない。この石列のある住居については朝鮮半島系の文化の影響を濃厚に受け、鉄生産に関わった住居であるとされ、寺社や民家の建築に携わった工人達と深い関わりのある集落の可能性や、渡来系氏族との関係、氏族と牧などの関係が指摘されている<sup>(29)</sup>。34号住居はまさに鉄生産関連の遺構であり、その点で先の論拠のひとつに加えられる。渡来系氏族の問題や牧の問題もこれからの課題であろう。

**入口施設** 入口施設については、壁と平行し対になるピットなどは検出できなかったが、入口施設に関連すると考えられる形状がいくつか認められる。ひとつは14号住居東壁にみられる弱い張り出しである。階段のように壁に一段平坦面があり、同じ位置の床面も周囲より高くなっている。この階段状の形状そのものが入口施設ではなく、この形状が東側から雨水等が流入した結果とも考えられるが、入口の存在のひとつの証にある可能性がある。同様の例は15号住居南側、41号住居南壁に類似した形状が認められる。ただし41号住居例は中段平坦面の壁が抉られて土層が折れるように落ち込んだ状態を示している。これも雨水等の流入の結果と思われ、入口の存在の傍証となる可能性がある。41号住居と同様の例は35号住居西壁にもみられ、壁が抉られた状態を呈している。

**竈** 石組み竈が複数認められた。いずれも円礫と前述の構築材を用いている。円礫の平坦面を内面に向けて煙道壁を構築し、壁石の上に小礫や円礫を平積みして高さを調節し、天井石を乗せたのち小礫や粘土で隙間詰めしている。燃焼部は袖石のみ残る。石組み竈は北毛に多く認められるが、熱効率などの関係であろうか。

**柱、屋根** 焼失住居の23号住居からは草本類が鑑定の結果確認されており、屋根を構築する一部と思われる。また、住居調査中に埋設土中にHr-FA主体層が面的に広がることを度々経験した。これらから屋根にHr-FAを乗せた土屋根の可能性を感じたが、他の住居構築の際に掘削したHr-FAの投棄との区別がつかいがかった。13号住居では住居側に傾斜する緩い傾斜が認められ、斜面に住居を囲うようにピットが認められている。この斜面は角度の緩さから軽石層が崩落したとは考えられず、当初からのものと思われ、周堤状の可能性が考えられる。ピットは壁外柱穴の可能性が考えられる。

### 3 住居の時期と分布

南中遺跡で検出された住居は7世紀前半に構築されはじめる。1区～2区の南側に8、11、43号住居が作られる。Hr-FPの降下から100年近くの時間を経て、居住域になったといえよう。7世紀後半には住居軒数が増大し、17軒を数える。1、2区全体に分布していく。8世紀前半には住居は10軒ほどになり、1区に集中する傾向がある。8世紀後半には4軒で、2区に3軒存在する。9世紀前半には2軒の住居があり、1区と2区に1軒ずつとなる。9世紀後半には12軒の構築が見られ、1～2区に分布する。10世紀前半には5軒

となり、1区に集中する。10世紀後半には3軒の住居が作られ、やはり遺跡の南側に集中している。このように南中道遺跡では7世紀前半にはじまった集落が7世紀後半にピークを迎え、8世紀前半に継続し、8世紀後半から9世紀前半に大幅に減少するが9世紀後半に再び増加し、10世紀には半減していくことが看取される。この傾向は暗文土師器を出土する住居軒数の増減とはほぼ一致している。さらに本遺跡の南に位置し、一連の集落である白井二位屋遺跡の住居分布とも類似した傾向にある。二位屋遺跡では7世紀後半に住居が出現し、7世紀後半から8世紀前半にかけてピークを持ちその後は減少するが10世紀後半に6軒が作られてやや増加する傾向がある。2遺跡を通してみると、7世紀前半に北側の南中道遺跡分に住居が構築されはじめ、7世紀後半には一気に増大し、8世紀前半までやや減少しつつもピークを持つ。8世紀後半～9世紀前半になると急激に住居軒数が減少するが、9世紀後半では集落北側の南中道遺跡分でもやや住居軒数が増えている。10世紀代では5～10軒程度となっている。集落は南中道遺跡2区が北限になることが判明しているが、白井城南郭遺跡<sup>(30)</sup>では7世紀末と10世紀後半の住居跡が検出されており、集落が段丘を越えて東西に広がりをみせることは確実である。

#### 4 小結

本遺跡の住居構築時期は村内で現在判明している軽石上に構築された住居跡でも最古級に属すであろう。西組遺跡ではHr-FPに埋没したのち、再び居住の痕跡が確認されるのは10世紀後半である<sup>(31)</sup>。本遺跡では古墳時代の放牧地がHr-FPによって埋没したあと、100年ほどたって居住域となっている。実際にこの地には白井古墳群が造営されており、現在痕跡をとどめているのは数基にしかすぎないが「上毛古墳跡」<sup>(32)</sup>には白井地区に23基もの古墳が記録されている。白井古墳群からは埴輪の表採はできておらず、7世紀代を中心とした古墳群と考えられる。集落が開始された7世紀代においては白井面の利根川寄りが墓域であり、西側から長坂面にかけて居住域が広がると想定される。ここで問題となるのは生活を営みはじめた人々はなにを生産基盤としていたのかであろう。100年の間に耕作が可能な厚さの耕地が育成されたのであろうか。

また、白井二位屋遺跡も含めて、鉄生産関連の遺構が複数検出されている。本章第5節の化学分析の結果からは34号住居で生産された鉄製品がこのムラの中に流通していることが判明したが、他地域から流通してきた鉄製品も存在するという。現在確認できる生業はこの鉄生産関連のみであるが、ムラ自体が鉄生産関連を生業として成り立っていたとも思われず、先の石列を有する住居での指摘も考慮する必要がある。

本遺跡23号住居からは上野地域全体でも数少ない畿内産土師器の出土をみたことは特筆されよう。畿内産土師器そのものが古代律令国家の地域支配の進展にもなって東日本にもたらされた土器であり、上野地域においても官衙と推定される遺跡やその周辺遺跡に集中している。本遺跡では掘立建物跡は検出されたものの具体的に遺跡の性格を推定できる遺構は検出できていず、周辺に郡衙や寺院などが検出された例も管見に触れない。わずかに本遺跡を含む子持村南部が「延喜式」の上野国の御牧「利刈の牧」の推定地のひとつにあげられているのみである。確かに住居からはウマの歯が出土し、馬具の可能性もある青銅製鈴も認められている。金属製品として、靱尻金具や足金物、鉈尾、未報告ではあるが二位屋遺跡の8世紀代の53・54号住居から出土した鉄製焼印<sup>(33)</sup>（両住居の重複部分出土。欠損により印字不明。54号住居では和同開珎出土。）などの出土例が少ない遺物も見受けられるが、まだ保留しておきたい。ただ、集落が展開していくピークの時期に畿内産土師器を持つ住居が位置することは非常に示唆的である。子持村周辺がHr-FPに厚く埋没してしまったのち、吹屋や白井での古墳の造営や集落の展開という先人たちの活動を通して、この地が律令体制に組み込まれていったことは確かであろう。

## 註

- (1) A, 林部均「東日本出土の飛鳥・奈良時代の織内産土師器」『考古学雑誌』第72巻第1号 1986  
 B, 西弘海「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』1982
- (2) 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」8 1978
- (3) A, 奈良国立文化財研究所「平城宮発掘調査報告」Ⅷ 1976  
 B, 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査概報」6 1976
- (4) A, 奈良国立文化財研究所「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ 1977  
 B, 註(1)B
- (5) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「下東西遺跡」1987
- (6) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域」3 1988  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域」4 1990  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団「上野国分僧寺・尼寺中間地域」7 1992
- (7) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「国分壇遺跡」1990
- (8) 群馬県埋蔵文化財調査事業団「荒砥天ノ宮遺跡」1987
- (9) 上野地域を対象とした論考は以下のものがある。  
 板岡正信「群馬県内出土の織文土師器について-在地産を中心として-」『群馬県史研究』第30号 平成1
- 08 茨川市教育委員会「西浦遺跡」1986
- 09 北橋村教育委員会「分郷八崎遺跡」1986
- 10 群馬県埋蔵文化財調査事業団「後田遺跡」Ⅱ 1988
- 11 群馬県埋蔵文化財調査事業団「鳥羽遺跡」G・H・I区 1986  
 H 1号孤立柱建物跡の12号跡において電機部材の切り出し痕が検出されている。
- 12 鳥羽遺跡の調査担当者綿貫邦男氏からご教示をいただきました。ご教示を得た。
- 13 石材鑑定をしていただいた飯島静男氏からご教示を得た。
- 14 すでに古墳時代において、白井遺跡群では馬の放牧地として土地利用がなされている。牛についても子持村教育委員会によって調査されたHr-FPに埋没した遺構が牛の可能性のある大型哺乳動物の飼育施設という見解が提示されている。この見解については子持村教育委員会石井克己氏からご教示を得た。
- 15 群馬県埋蔵文化財調査事業団中沢哲氏からご教示を得た。
- 16 群馬県文化・スポーツ振興公社「武田V-1991年度武田遺跡群発掘調査の成果」1992
- 17 小林公治・吉川純子・種泉岳二「三ツ保遺跡出土の動物遺存体とその考古学的コンテクスト」『神奈川考古』第27号 1991
- 18 静岡県教育委員会「静岡戦国山古墳」1953
- 19 三重県教育委員会「井田川茶臼山古墳」1988
- 20 塩野郷「見目古墳群とその出土遺物」『埼玉考古』19号 1981
- 21 高橋謙吉「下野国河内郡豊郷村宮下古墳」『東京人類学雑誌』158 1999
- 22 滝口宏「天王塚古墳」『栃木県史』考古1 1976
- 23 富岡市教育委員会「上田塚古墳群・原田塚古墳群」1984
- 24 古岡村教育委員会「大久保A遺跡・七日市遺跡・滝沢古墳・女塚遺跡」1986
- 25 松村恵司「古代のムラを語る」『古代を発掘する』1992 六興出版
- 26 森和敏「柱の礎石のある掘穴住居跡」『研究紀要』9 1993 山梨県考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 27 註28に同じ
- 28 子持村誌編さん委員会「子持村誌」上巻 1987
- 29 註30に同じ
- 30 群馬県「上毛古墳群」群馬県史跡名勝天然記念物調査報告第5編 1938
- 31 ただし注意しなければならないのは、北毛、少なくとも子持村においては中ノ塚古墳などのように6世紀代の古墳においても埴輪の受容が見られない場合があることである。その点で発掘調査例に乏しい白井古墳群の年代観は多少の不確定要素を残している。
- 子持村教育委員会「中ノ塚古墳発掘調査報告書」1980  
 白井古墳群の復元については以下を参照されたい。  
 群馬県埋蔵文化財調査事業団「白井大宮遺跡」1993
- 32 群馬県埋蔵文化財調査事業団「白井遺跡群-集落編I-白井二位屋遺跡」1994
- 33 上野地域の脚牧については次の文献にまとめられている。  
 群馬県史編さん委員会「群馬県史」通史編2 1991
- 34 埴田の概要は発行が予定されている「白井遺跡群-中世・近世編-白井丸岩遺跡・白井北中道遺跡」に補遺として掲載予定である。

本文・挿図・表・観察表・写真図版対照表

名 称	区	本		文		表	観察表	頁	写真 遺構(PL)	写真 図版(PL)
		総合頁(頁)	遺構挿図(番号)	遺物挿図(番号)						
調査に至る経緯		1		1						
調査の経過		2~4								
調査の方法		3		2						
調査区の設定		5~6		3						
基本層序		7~8		4						
遺跡周辺の地形		9~11		5~6						
周辺遺跡		12~17		7		1				
白井南中道遺跡概要		18~19		8~9						
1号住居	1	20~22		10~11		10	1	4		90
2号住居	1	22~24, 26		12~13		13	1	5~6		90
3号住居	1	28~29		17		18	3	6~7		90~91
4号住居	1	30~38		19~22		22~27	2~4	7~9		91~92
5号住居	1	30~31, 40~45		19~20, 29~30		30~33	4~5	9~10		93~94
6号住居	1	45~48		34~35		36	5~6	10~11		94
7号住居	1	49~55		37~38		39~43	6~8	11~12		94~96
8号住居	1	56~59, 76		44~45, 64		45	8~9	13~14		97
9号住居	1	56~57, 59~64, 76		44~45, 47, 50, 64		47~49, 51~53	9~10	13~14		97~98
10号住居	1	56, 65~67, 76		44, 54, 64		55	11	14~16		99
11号住居	1	56, 67~72, 76		44, 56~57, 64		58~60	11~12	15~16		99~100
11・31号住居	1	75		65~66		66	12			101
12号住居	1	77~78		65~66		66	13	17		101
13号住居	1	79~84		67~70		70~71	14~15	18~19		101~103
14号住居	1	85~91		72~75		76~77	15~17	19~20		103~104
15号住居	1	92~95		78~79		79~80	17~18	20~21		104~105
16号住居	1	96~97		81		82	18	22		105
17号住居	1	96~97		81				22		
18号住居	1	98~100		83~84		84	19	22~23		106
19号住居	1	103~107		88~89, 91		89~90	20~21	24~25		106~107
20号住居	1	107~111		92~94		94~95	21~22	25~26		107~108
21号住居	1	112~119		96~97		98~103	22~24	27~28		108~110
22号住居	1	120~128, 133		104~107, 116		108~111	24~26	28~31		110~112
22・60号住居	1	120, 133		104, 116		116	27			113~115
23号住居	1	134~144		117~121		122~125	27~29	32~37		113
24号住居	1	144~146		126		127	30	38		115
25号住居	1	146~151		128~130		129~132	30~31	39		115~116
26号住居	1	151~153		133~134		134	31	40		116
27号住居	1	153~157		135~137		138	31~32	41~42		116~117
28号住居	1	158~162		139~140		141~142	33	42~43		117~118
29号住居	1	162~169		143~145		145~149	33~36	43~44		118~120
30号住居	1	170~177		150~153		153~156	37~39	44~45		121~123
31号住居	1	56, 73~78		44, 61, 64		62~63	12~13	16~17		100~101
32号住居	1	96, 100~102		83, 85~86		87	19~20	22~23		106
33号住居	2	177~182		157, 163~164		158~161	39~42	46~47		123~126
34号住居	2	191~215		169~175		176~191	44~53	48~51		128~136
35号住居	2	216~220		182~194		195	53	51~53		136
36号住居	2	223~228		198~200		201~203	54~55	53~54		137~138
37号住居	2	228~232		204~205		205~207	55~57	54~55		138~139
38号住居	2	232~240		208~211		212~215	57~59	55~57		139~141
39号住居	2	241~242		216		216	59	57		142
40号住居	1	30~31, 39		19~20, 28		28	5	9		93
41号住居	2	183~190		162~166		167~168	42~44	46~48		126~128
42号住居	2	243~249		217~221		221~222	59~61	58~59		142~143
43号住居	2	250~252		223		224	61~62	59~60		143~144
44号住居	2	253~256, 260		225~228, 232		228	62~63	60~61		144
45号住居	2	257~261		225, 229, 232		230~231	63~64	62		145
46号住居	2	262~270		233~235		236~240	64~68	62~64		146~149
47号住居	2	271~272		241		242	68	64~65		149
48号住居	2	273~275		243~244		244	69	65~66		149



名 称	区	本		文		観察表	写 真 図 版	
		総合頁(頁)	遺構挿図(番号)	遺物挿図(番号)	表	頁	遺構(PL)	遺物(PL)
49号住居	2	275~279	245~248		248	69~70	66~67	150
50号住居	2	280~290	249~252		253~258	70~73	67~69	150~153
51号住居	2	291~294	249~250、259~260		261	73	69~71	153
52号住居	2	294~301	262~266		266~268	73~74	71~73	153~154
53号住居	2	302~308	269~272		273~274	74~75	73~74	155
54号住居	2	309~313	275~276		277~278	75~76	75	156
55号住居	2	313~321	279~281		282~285	77~79	76~77	157~159
56号住居	2	322~330	286~289		290~293	79~81	77~78	159~161
57号住居	2	331~334	294~296		297	81~82	79	161~162
58号住居	2	335~336	298		299	82	80	162
59号住居	1	337~340	300~301		302	82~83	80~81	162
60号住居	1	120、128~133	104、112~114、116		115~116	26~27	28~29、31	112~113
61号住居	1	24~28	14~15		16	1~2	5~6	90
62号住居	2	221~222	196		197	53~54	51~53	136
1号掘立柱建物	1	343~345	303~305				82~83	
2号掘立柱建物	1	346~348	306~307		307	83	83~84	163
3号掘立柱建物	1	348~349	308				84	
4号掘立柱建物	1	350~351	309					
5号掘立柱建物	1	351~352	310					
6号掘立柱建物	1	352~353	311					
7号掘立柱建物	1	354~355	312		312	83		163
8号掘立柱建物	1	355~356	313					
9号掘立柱建物	2	356~358	314					
10号掘立柱建物	2	358~359	315					
11号掘立柱建物	2	359~360	316					
12号掘立柱建物	2	361~362	317~318		318	83	85~86	163
13号掘立柱建物	2	363~365	319~320				86~89	163
土坑		366~375	320~335			83~87		164
ピット		376~386	336~354			2		164
遺構外		386~391	355~360		355~360	87~89		165~167
炭化材樹種同定		392~410	361~382					
軟骨鑑定		411~417	383					
炭化植物種子		418~419	384~385					
胎土分析		420~426						
鉄器・鉄滓分析		427~458						
竈灰分析		459~463						
成束と課題		464~469						





(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団報告書第202集

白井遺跡群 一集落編Ⅱ一 一般国道17号(棚沢バイパス)改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集  
(白井南中道遺跡)〈本文編〉

平成8年3月20日 印刷

平成8年3月25日 発行

発行／編集 財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

群馬県勢多郡北橋村大字下畑田784番地の2

電話 (0279) 62-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社